

PERSONA4 【鏡合わせの世界】

OKAMEPON

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2011年4月――

稲羽の街へとやって来たのは、一人の少女だった。

まだ何も知らない彼女は、【真実】を探す旅路を歩み始める。

これは、貴方が知る物語と僅かながらもズレた、“IF”の物語。

※

『主人公が女だったら?』と言うIFものです。

原作沿いの上でコミュをガッツリ書く方向性の話なので、原作からの変化に乏しい部分が多々あるかと思えます。

【死神】・【節制】・【悪魔】・【月】のコミュにつきましては、コミュ相手がオリキャラに差し替わっております。

女番長のイメージは大体こんな感じですよ

(「にこつと!おんなのこメーカー(<https://picrew.me/image-maker/207297>)」さんにて作成しました)

目次

『未知への誘い』

【2011/04/11】2011/04/12

【2011/04/12】

【2011/04/12】2011/04/13

【2011/04/14】

【2011/04/14】

【2011/04/14】

『自称特別捜査隊』

【2011/04/15】

【2011/04/15】

【2011/04/15】

【2011/04/16】2011/04/17

【2011/04/17】

【2011/04/17】

【2011/04/17】

【2011/04/17】

『流れ行く日々』

【2011/04/18】2011/04/20

【2011/04/21】2011/04/25

【2011/04/26】2011/05/13

『漢の世界』

【2011/05/13】2011/05/17

【2011/05/18】

【2011/05/19】

313 293 272

213 187 174

169 144 138 125 110 101 95 69

66 61 41 31 19 1

826	2011 / 07 / 10	—
789	2011 / 07 / 05	2011 / 07 / 09
764	2011 / 06 / 30	2011 / 07 / 04
735	2011 / 06 / 26	2011 / 06 / 29

『彼岸と此岸の境界線』

715	2011 / 06 / 25	—
694	2011 / 06 / 25	—
662	2011 / 06 / 25	—
649	2011 / 06 / 24	—
609	2011 / 06 / 19	2011 / 06 / 23

『Found Me』

582	2011 / 06 / 17	2011 / 06 / 19
555	2011 / 06 / 13	2011 / 06 / 16
527	2011 / 06 / 10	2011 / 06 / 12
483	2011 / 06 / 05	2011 / 06 / 09
475	2011 / 06 / 04	—
455	2011 / 06 / 01	2011 / 06 / 03
436	2011 / 05 / 30	2011 / 05 / 31
423	2011 / 05 / 27	2011 / 05 / 29
402	2011 / 05 / 24	2011 / 05 / 26
384	2011 / 05 / 23	—
363	2011 / 05 / 20	2011 / 05 / 22

『本当の“家族”』

352	2011 / 05 / 19	—
342	2011 / 05 / 19	—

2011/07/28	1034
2011/07/28	1020
— / — / —	980
2011/07/28	949
2011/07/26 — 2011/07/27	927
『虚構の勇者』	
2011/07/12 — 2011/07/25	884
2011/07/11	865

『未知への誘い』

【2011/04/11 | 2011/04/12】



.....

.....

.....

.....

目を開けると、何故か全く見た覚えの無い場所に居た。

はて……ここは何処だろう。

視界に映る全てが蒼い。

何と言うのか……高級車の車内の様な空間だ。

サイドにはバーの様な備えまでもが付いている。

フィクションの中でしかお目にかかる事が無さそうな……少なくとも

とも実生活に於いて関わり合いになる事など無いだろう車だ。

床が微かに振動している。

……移動しているのだろうか。

……何処へ向かっているのだろうか？

ぼんやりとそう考えていると、ふと向かいに誰かが座っている事に

気が付いた。

鼻が妙に高いご老人と、思わず意識が引き込まれてしまいそうな

……この蒼い空間に溶け込みそうな群青色の服を着た金髪の女性の

二人だ。

どちらも初対面だ。

こんな特徴的な人達に会った事が有ったら、忘れるなんて有り得な

いだろうから、間違いない。

……彼らは誰なんだろう。

どうしてここに居るのだろう。

と言うか、……何故自分はここに居るのだろうか？

そう考えていると、唐突に老人が目を開けた。

「ようこそ、ベルベツトルームへ」

《ベルベツトルーム》？

それがこの場所の名前なのか？

『ようこそ』と言うからには、この老人はここの主なのだろうか？

と言うか、『ようこそ』も何も、自分にはここに來た覚えが全く無いのだが……。

「ほう……これはまた、変わった定めをお持ちの方がいらした様だ……」

『定め』……？

あまり普段の会話では使わない様なその言葉に、微かに首を傾げる。

ふむ……スピリチュアルな方面の方なのだろうか、このご老人は。

……正直、そういった方面の事はあまり信じてはいないので、何かし方の勧誘とかだったら全力でお断りしたいのだが。

「貴女のお名前をお伺いしてもよろしいですか？」

そんな事を考えていると、ご老人は柔らかな物腰でこちらに名前を尋ねてきた。

まあ名前だけなら良いか、と思い、普通に名乗る。

名前を答えたからか、満足そうに微笑んだご老人は《イゴール》と名乗った。

そして、この《ベルベツトルーム》とやらが、夢と現実、精神と物質の狭間にあるのだと述べる。

それが抽象的な意味なのか、文字通りの意味なのかは分からないが……。

……電波ゆんゆんなのはちよつと困るな。

「本来は何らかの形で、契約」を果たされた方のみが訪れる部屋

……。

貴女には、近くそうした未来が待ち受けているのやもしれませんな」

そう言っつてイゴールさんは微笑みながら、「さて、占いは信用されま
すかな？」と訊ねてきた。

占い……といっても、自分が精々目にした事があるのはテレビ番組
の1コーナーでやってる星座占い程度だし、そもそも全く本気にして
いない。

自分の星座の順位が良かったら一寸嬉しい様な気がする程度だ。

占いとは、自分の実生活に全く、これっぽっちも、関与していない
ものである。

ただし、それはあくまでも極めて広範囲かつ不特定多数に向けられ
た内容など、気にした所でしようがないからなので、もし本格的に誰
かが態々占ってくれるのなら、多少は神妙にその結果を聴くだろう。
だからと言っつてそれを鵜呑みにするなど有り得ないが。

まあ結論的に、多少は意識の隅にでも留めるかもしれない、と言っ
たところか……。

小さく頷くと、イゴールさんはフツツと微笑む。

「では、貴女の未来について、少し覗いてみると致しましょう」

そう言っつてイゴールさんが取り出したのはカード……所謂タロッ
トカードと呼ばれるものだ。

実際に使っつたりした事は無いものだが、まあ創作物とかの題材にも
よく使われてるし、アバウトになら知っつている。

馴れた手付きでカードを操っつたイゴールさんが一番最初に捲っつた
のは、雷に撃たれ崩壊する塔が描かれた《塔》のカードだった。

タロットにはあまり詳しくはないのだが、確か《塔》はどう転んで
も良い意味は無かつた筈だ。

というか、絵柄からしてロクな内容じゃないだろう。

「ほう……近い未来を示すのは『塔』の正位置。

どうやら大きな災難を被られる様だ」

そして次に示されたのは《月》のカードだ。

「『迷い』そして『謎』を示すカード……。

……実に興味深い。

貴女はこれから向かう地にて災いを被り、大きな『謎』を解く事を課せられる様だ」

そしてイゴールさんは告げる。

もしその『謎』が解けなくては、未来は閉ざされるかもしれない、と。

そしてその『謎』を解くための手助けをするのが、イゴールさん達の役目なのだ。

金髪の女性が自らを《マーガレット》と名乗った後、急に視界が滲み意識は急に薄れていった。

……

……

……

……

▲▼▲▼▲▼

【2011/04/11】

電車に揺られ揺られて辿り着いたのは、実にのんびりとした田舎町だった。

駅前だと言うのに、周辺の建造物がほぼ何もない上に他に人影がない。

ゴミゴミした街からやって来た身としては、ちょっと新鮮だ。

通り雨でも降ったのか、路面が僅かに濡れて所々に小さな水溜まりを作っているし、陽光降り注ぐこの季節にしてはやや冷たい空気になっている。

背を伸ばす序に息を吸い込むと、排気ガスの匂いが殆ど無い、如何

にもな田舎の空気が肺を充たす。

今日から約一年の間、この町で暮らしていく。

全くの新天地。

何があるのか、誰と出会えるのか。

まだ見ぬ何かに胸を高鳴らせる。

たった一年……されども一年。

それを良いものに出来るかは自分次第だ。

ならば、全身全霊で日々を楽しむまで！

昂ったテンションのままに思わずグツと拳を握ると、その拍子にうっかりとメモ用紙を握り潰してしまった。

いけないいけない。

これには、これから居候させて貰う叔父さん家の住所とか連絡先とかもしつかりと書かれてあるのだ。

個人情報載ってるモノを粗末に扱うとはなんたる事か。

皺だらけのメモ用紙を伸ばし、折り畳んでから胸ポケットに仕舞おうとした時。

不意に強い風が吹いてメモ用紙を浚っていった。

「あっ！」

慌てて追い掛けて手を伸ばすが、残念ながら届かない。

メモ用紙は水溜まりの横ギリギリの場所に落ちる。

地面に落ちたメモ用紙を拾おうと屈むと、誰かの手が先にそれを拾い上げた。

「これ、君の？」

そう言っつてメモ用紙を差し出してくれているその人は、……何とも不思議な女性だった。

さっきまで駅前にはこんな女性は居なかったと思うのだけれど。

一体何時やって来たのだろうか？

年齢……はよくは分からない。

いや、女性の年齢を探るのは失礼だからだとかそんなのじゃなく

て。
中学生位にも見えるし、同じ年位にも見えるし、もつと歳上にも見える。

何と言うのか……印象が定まらない感じの人だ。

別に目を離している訳でも無いのに、一瞬で印象がボヤけてしまう。

まあでも、こうやって態々小さなメモ用紙を拾ってくれたのだから、きつと悪い人ではない。

警戒する事無く、差し出されていたメモ用紙を受け取る。

女性に礼を言おうとしたその時、車のエンジンの音が聞こえ、それに気を取られて音が近付いてくる方向に一瞬顔を向け、再び女性に向き直ると。

何故かつい一瞬前まで目の前にいた筈の女性が無処にも見当たらなかった。

……彼女は無処へ行つたのだろうか？

「おーい、こつちだ！」

不思議な女性の事に気を取られていると、背後から声を掛けられた。

さつき駅前に来た白いバンの横で中年男性がこちらに手を振っている。

迎えに来てくれた叔父さんだ。

母さんから以前見せて貰った写真よりは、少しばかり老けているが間違いない。

荷物を持って、そちらへと向かう。

「前に会った時よりもずっと大きくなったな。

ようこそ、稲羽市へ。

お前を預かる事になってる、堂島遼太郎だ」

「鳴上悠希です。

これから一年間お世話になります」

どちらからという訳でもなく、お互いに手を差し出して握手を交し

た。

「お久し振り、になるんですよね？」

「最後に会ったのはお前がまだ幼稚園に入る前位だからなあ。

覚えてないのも無理はない」

ああそれと、と叔父さんは自分の背後を振り返った。

そこには叔父さんの影に隠れる様に、叔父さんのズボンを掴んでいる小学校低学年位の女の子が居た。

「娘の菜々子だ。

ほら、挨拶しろ」

そう叔父さんに促されたものの、菜々子ちゃんは口籠る様に挨拶した後、再び叔父さんの影に隠れてしまった。

菜々子ちゃんから見たら、自分は随分と背が高い。

もしかしなくても、恐がらせてしまったのだろうか。

そつと地面に膝をついて目線を出来るだけ菜々子ちゃんに合わせる。

「私は菜々子ちゃんのお父さんのお姉さんの子供で……菜々子ちゃんの従姉妹だよ。

これからよろしくね、菜々子ちゃん」

そつと手を差し出すと、菜々子ちゃんはおずおずとだがちゃんと握り返してくれた。

「さて、立ち話もなんだしな。

そろそろ行こうか」

叔父さんに声を掛けられ、車に乗り込む。

菜々子ちゃんは助手席を譲ろうとしてくれたが、お父さんの横を奪うのは良くないのでそれは丁重に辞退した。



夕飯の買い出しの前に、ガソリンスタンドで給油する事になった。

驚いた事に、八十稲羽と呼ばれるこの辺り一帯にはこの『MODEL 石油』しかガソリンスタンドが無いのだそうだ。

こういう所からも、稲羽って田舎なんだなと感じる。

別に、悪い事では無いが。

車がガソリンスタンドに入るのと入れ違いに、一台のトラックが出ていった。

すれ違い様に目に映ったその車体の横には、『いなば急便』の文字と、白い兎のマークが入っている。

恐らくはこの辺りのローカルな宅配業者だろう。

『いなば』と白い兎……因幡の素兎をモチーフにしているのだろうか。

叔父さんは一服すると言って喫煙所へ行き、菜々子ちゃんはお手洗いへと行き、この場には自分と給油作業中のアルバイトであろう店員だけが残っている。

「キミ、都会から来たんだってね？」

都会から来ると、驚いたでしょ？

何にも無いってね」

一通りの作業を終えた店員が、何故か唐突に話し掛けてきた。

稲羽の外から来た人、が珍しいのだろうか。

「確かに、都会と比べれば無いモノは沢山あるんでしょうけど。

自然とかならあるんじゃないですか？」

「ま、確かに自然はあるよ。

でも、すぐ退屈するかもね。

高校の頃なんて、友達の所に行くか、バイトするか位しか無いし」
店員はにこやかに話しているのだが、その様子に何故か奇妙な違和感を覚える。

まるで、何か噛み合っていない様な、何かがズレているかの様な、不確かな何かを見ているかの様な……。

言葉にし辛い違和感を呑み込み、逆に店員に訊ね返した。

「……バイトの勧誘ですか？」

「あつ、鋭いね、キミ。」

バイト募集中なんだ。是非考えといてよ」

店員が差し出した手に釣られて、手を差し出して握手を交わす。

……妙に冷たい手だ。

まるで……。

しかしその思考は店員が手を離れた事により中断された。

「おっと、仕事しなきゃね」

そう言つて店員が去つていった瞬間。

耳鳴りの様な何かを感じ、思わず顔を顰める。

それはほんの一瞬で終わったが、お手洗いから帰つてきていた菜々子ちゃんは心配そうに見上げてきた。

「だいじょうぶ？ 車よい？」

ぐあい、わるいの？」

「大丈夫だよ。平気平気」

実際、奇妙な感覚は既に綺麗サツパリ消え去っていた。

何だったのかは分からないが……。

……気の所為、かもしれぬ。

それでも尚心配そうに見上げてくる菜々子ちゃんの頭を、安心して貰える様にそつと優しく撫でる。

それでやつと安心してくれたのか、菜々子ちゃんは笑顔になつてくれた。

叔父さんが喫煙所から帰つてくる頃には給油も終わり、あの奇妙な店員に見送られながらガソリンスタンドを後にした。



次に向かったのはスーパー……と言うかジュネスだ。

大型ショッピングモールのジュネスがこんな所まで進出しているとは驚きだ。

いや、よく考えてみれば、ジュネスは郊外にある事の方が多いので

そう不思議な事では無いのかもしれない。

稲羽は電車などの公共機関での出入りこそ不便だが、隣接する沖奈市はそれなりの規模の地方都市だし、自家用車とかそういう交通手段さえあれば、目を瞑れない程のド田舎という訳でもないのだ。

ちよつと遠方からでも十分に足を運べる。

まあ、どうであるにせよ買い物には便利な場所である。

ネット通販が当たり前になっている今時でも、こういう店舗が比較的近隣にあるのは有り難い事だ。

菜々子ちゃんはワクワクした様子で店内を眺めている。

「楽しい?」

そう訊ねると、菜々子ちゃんは大輪の笑顔を咲かせ、コクツと頷いた。

「うん! 菜々子、ジュネス大好き!」

そう言えば自分も菜々子ちゃんの歳位の時は、スーパーの売り物を眺めているだけでも楽しかった覚えがある。

店内をウロウロ動き回り過ぎて迷子になりかけたのも、今となっては良い思い出だ。

そんな風に昔を懐かしんでいると……。

菜々子ちゃんと叔父さんは迷わず惣菜コーナーに行き、山積みになつた出来合い弁当を手取る。

……料理はしないのだろうか。

気になつたので叔父さんに訊ねてみると、どうやら叔母さんが不慮の事故で亡くなつた後は、堂島家の家事の一切を菜々子ちゃんが担っているのだそうだ。

まだ小学校に入学したばかりの菜々子ちゃんの歳を考えると、十分どころか歳不相応な位に家事をこなしてくれているみたいだが、流石に包丁や火を扱わせるのは……という事で、料理は全くと言って良い程やっていないらしい。

叔父さんと言うと、不器用なのか何なのかは知らないが、「料理は出来ない」との事だ。

そんな訳で、堂島家の食卓には出来合いの惣菜ばかりが並ぶのだと

言う。

……これは由々しき事態だ。

個人的なポリシーやその他諸々の面から見ても、看過されてはならない事柄である。

出来合いの惣菜を否定はしないが、毎度それでは堪ったものではない。

不味いメシの次位に個人的に許せないのが、滅茶苦茶な食生活である。

栄養学的観点からも、惣菜漬け生活は喜ばしいモノでは無い。

況してや、育ち盛りの菜々子ちゃんが居るのである。

差し出がましい事かもしれないけども、ここはやるしかない。

「叔父さん。良ければ私が食事を作ります」

今日久方振りに顔を合わせた姪に急にそんな事を言われて叔父さんは戸惑った様だが、畳み掛ける様に説き伏せて、堂島家の台所に立つ権利を獲得した。

出来合いの惣菜や弁当よりは健康的な食事になるし、菜々子ちゃんや叔父さんにとっても悪くはない話だろう。

買い物籠に入れられていた惣菜を商品棚に戻し、食材を適当に買い込んで、その日の買い出しは終了した。



実家を出てから数時間かけてやっと辿り着いた堂島家は、建ってからそれなりの年月が経ってそうな一軒家だった。

通して貰った自室に荷物を置いてから、早速堂島家の台所をチェックする。

冷蔵庫の中には見事な程に食材らしい食材は入ってなかったが、亡くなった叔母さんは料理を嗜む人だったのだろう、調理器具は結構良い物が揃っていた。

これ位揃っているなら、かなり特殊な調理を求める料理でなければ大抵のものは作れるだろう。

塩と砂糖などの調味料も、そろそろ買い足す必要がありそうではあるが、今日明日使う位なら問題は無さそうな量である。

何を作っても構わないのではあるが、まだ菜々子ちゃんと叔父さんの味の好み分からないので、比較的嫌いな人は少ない鮭をメインにする事にした。

少々手間は掛かるがポワレ風に焼き上げた鮭は、匂いだけでもお腹が減ってきそうな良い香りをしている。

そのままでも美味しいが、折角なので醤油をベースにしたソースを作っておく。

味噌汁はアゴ出汁・昆布出汁に鰹出汁を合わせたものに白味噌を溶いて、具はシンプルに大根とワカメに。

それにサラダを付けて、完成だ。

無難なメニューで揃えてみた夕食は、思っていたよりも好評で、叔父さんも菜々子ちゃんも喜んで食べてくれている。

二人の口に合った様で何よりだ。

今度からはもう少し凝った料理にしても良いだろう。

食べ終わる頃合いに、叔父さんの携帯が鳴った。

それに苦い表情を浮かべた叔父さんがその電話に出ると、途端に顔付きが陰しくなる。

何か込み入った内容なのか、叔父さんは席を立って電話での会話が聞こえない位置に移動した。

雰囲気は妙に物々しい。

「酒飲まなくてアタリかよ……」

電話を切った叔父さんはそう溢し、壁に掛けてた上着を羽織った。

「仕事でちよつと出てくる。」

帰りは……ちよつと分かん。

菜々子、後は頼むぞ」

「うん……」

そう言い残して叔父さんは家を出ていく。

外は雨が降り始め、その雨脚は次第に激しさを増していつていた。
……恐らくは一晩中降り続くのであろう。

叔父さんの車のエンジン音が遠ざかってから、気落ちした様に座り直してテレビを見ている菜々子ちゃんに声を掛ける。

「叔父さんの仕事って確か……刑事、だっけ？」

「うん……ジケンのソウサとか……」

いつも、こうだよ」

……あの叔父さんの様子から察するに、あまり良くない事件が起きたのだろうか？

それにしてもこんな夜分から仕事とは、刑事というのも大変である。

食器を片付けながら流れてくるニュースに耳を傾けていると、誰かの不倫騒動が取り沙汰されていた。

正直、こういうワイドショー的なネタにはトンと興味が湧かない。

菜々子ちゃんも詰まらないと思ったのか、直ぐにチャンネルを変えてしまった。

変えた先では妙に耳に馴染むジュネスのCMが流れている。

サビの部分でCMに合わせて菜々子ちゃんが口ずさむのが可愛らしい。

余程、ジュネスが好きなのだろう。

片付けを終わってお風呂が沸くまでの間、のんびりと菜々子ちゃんと話をする。

話をするとと言っても、菜々子ちゃんの語る内容に相槌を打ったり時折質問したりするだけの聞き役に徹していたが。

お風呂が沸く頃には、菜々子ちゃんとの距離は大分縮まった。

まあ元々、会ったばかりの親戚に戸惑っていただけで、別に嫌われたり怖がられたりしていたのではなかったみたいだけど。

お風呂から上がってからも、菜々子ちゃんとは沢山話をした。

叔母さんが亡くなってからというもの、叔父さんは仕事で忙しいので、家で誰かと沢山話するというのは久々だったのだろう。

話たい事が後から後から沸いてきている菜々子ちゃんの話、微笑

ましく思いながら聞き続けた。

その内に話し疲れてきたのか、菜々子ちゃんはウトウトと船を漕ぎ始める。

夢現状態の菜々子ちゃんを、菜々子ちゃんの部屋まで連れていき布団に寝かせると、あつという間に安らかな寝息が聞こえてきた。

「…………お母…………さ…………ん…………」

寝言なのだろうけれど、そう呟いた菜々子ちゃんの頬には涙の雫が光っている。

それを手で優しく拭ってから、安心させる様にそつと菜々子ちゃん
の頭を撫でた。

「お休み、菜々子ちゃん。…………良い夢を」



……………
……………
……………
……………
……………

気が付けばいつの間にか、自分の身体すら見失ってしまいそうな、
何処までも深い霧の中に居た。

白く深い霧の中は、まるで眩しい光の中にでもいるかの様にも思えてくる。

そんな白の世界に、たった一人きりだ。

多分、夢だろう。

しかし、何故こんな霧の夢を見ているのかはよく分からない。
どうせ見るなら満漢全席を堪能する夢とかの方が良いのに。

ふと見下ろした足元は、レンガの様なタイルの様な…………不思議な赤い素材で出来ていた。

赤い道は何処かに続いている様だけれど、あまりにも深い霧の中、

その道の先は何も見えない。

この赤い道は水の上に浮かんでいるのだろうか。

道の外には水しかない。

水深は少なくとも腕の長さよりはあるみたいだ。

川……にしては水の流れを感じないので、湖や沼なのだろうか。

奇妙な場所だし、言葉にし難い違和感を感じるが、それでも不思議とあまり恐いとは思わなかった。

尤も、長居するのはご免被りたいが。

足元に注意を向けながら赤い道を辿って行くと、不意に深い霧の向こうに気配を感じた。

『【真実】が知りたいって……?』

何者かの声が、霧の向こうから響く様に聴こえてくる。

男のものなのか、或いは女のもののかは分からない。

子供特有の甲高さは無いから、ある程度は歳を取った人のもものなだろうけれど。

『それなら……捕まえてごらんよ……』

何故だか良く分からないが、この声の主を捕まえなくてはならないという思いに駆られた。

追う必要性も理由も、声が言っている【真実】とやらも……それに全く心当たり等は無いのだが……。

それでも、この声の主は逃してはならない。

胸の内で“何か”がそう急かしていた。

相変わらず霧の先は何も見えないが、胸に巢食う衝動のままに、声が聴こえた方向を見失わない内に駆け出す。

暫く走っていると、壁に行き当たった。

壁の向こうに何者かの気配を感じる。

恐らくは声の主だ、と己の直感がそう囁いた。

迂回路は見当たらない。

ならばいつそ体当たりで、と壁に手をつけると、不意にその壁はそ

もそも存在して居なかつたかの如く消え失せる。

消え去つた壁の向こうは、また一段と深い霧に覆われていた。

その中に躊躇わずに踏み込んでいく。

『追いかけてくるのは……君か……』

ふふふ……やつてごらんよ……』

深い霧の中に誰かの人影は見えるが、何故かその位置はボヤけてい
る。

それでも伸ばした左手の指先に何かが掠めた。

『へえ……この霧の中なのに多少は見える様だね……』

成る程……確かに……興味深い素養だ……』

でも……簡単には捕まえられないよ……』

求めているものが【真実】なら、尚更ね……』

更に踏み込んで人影に右手を伸ばす。

しかし確かに人影を捉えた筈なのに、そこには何も無く、指先はた
だ霧を掴んだだけだ。

いつの間にか有り得ない程深くなつた霧が全てを覆い隠していく。

もう、人影はおろか自分の位置ですら捉えきれない。

そんな中、声だけが霧の中に響いている。

『誰だつて、見たいものだけを、見たい様に見る……』

そして霧は何処までも深くなる……』

いつか……また会えるのかな……』

こことは……別の場所で……』

フフ、君に会えるその時を、楽しみに待つてるよ……』

全方位から響いてくる様な声を最後に、視界も意識も真白に塗り潰
された。

……
……
……
……



【2011／04／12】

目を開けると霧など何処にも無く、見慣れない天井が映った。見慣れてはいないが知らない場所では無い。

今居るのは、昨日から自分に宛がわれた堂島家の一室である。

かつては物置として使っていたと見られる部屋は、ちゃんと掃除が行き届いていて、ソファや学習机、それと作業机等の家具が既に用意されていた。

敷き布団を片付けながら欠伸を噛み殺す。

……昨晩見た夢は、実に変な夢だった。

別に悪夢と言う訳でもなかったから魘されてはいなかっただろうけど。

まあ、気持ちの良い目覚めと言うにはちよつと違うだろう。

それでも窓を開けて早朝の空気を吸い込むと、気持ちいい位に目が覚めた。

あまり音を立てない様に階下に降りると、早朝だからかまだ菜々子ちゃんは起きてない様だ。

玄関に叔父さんの靴は無かったので、どうやら昨晩は結局帰ってこなかったらしい。

洗面所で顔を洗い、寝起きだった頭をスッキリとさせた。

何時もの様に、癖毛気味の髪質の為に若干寝癖のついた髪にブラシをかけ、後ろで一つにくくる。

さて簡単な身支度もすませたところで、朝御飯を作るとしよう。

和食の朝ごはんにしようかとも思ったが、どうやら堂島家の朝ごはんはトーストラしいので、いきなり了承もなく変えるのは流石に憚られる。

今朝は取り敢えずはパン食にしよう。

一斤5枚切りの市販の食パンには丹念にバターを塗り、しっかりと

焼き目がつくまでこんがりと焼き上げた。

それだけでは寂しいので、冷蔵庫の隅に転がっていた市販のスパゲッティ用のミートソースでオムレツも作る。

美味しそうな匂いが漂ってきた辺りで菜々子ちゃんが起きてきた。

簡素な品ながらも、朝食に対する菜々子ちゃんの感想は上々だ。

美味しそうに食べてくれる事が、作った者としては一番嬉しい事である。

二人で朝ごはんをしっかりと食べてから、学校へと出掛けた。





八十神高校2年2組の教室は騒めきで賑わっていた。

生徒達の話題は専らこのクラスの担任となった諸岡教師に対する不満や愚痴であったが、ふとした拍子に新たな転校生についての話題に移る。

この八十稲羽では、新たに人がやって来るといふのはそこそこ珍しい。

地元を離れていく人は増加傾向にあるが、反対にやって来る人といふのは殆どいないからだ。

特にこれといった産業もなく観光に適した場所も殆どない八十稲羽に、外から態々やって来る人はかなり稀である。

八十神高校の生徒達は、ほぼ全員が小学校中学校からの顔馴染みであり、基本的にその顔触れが変化する事は無い。

そんな中での転校生だ。

話題にならない訳が無かった。

田舎特有の情報網で、新たな転校生が来る事は既に学年どころか、町中にまで出回っている。

しかし転校生が来る事は分かっているとしても、それが男なのか或いは女なのかを知っている人はこの教室内には居なかったのだった。



チャイムが鳴ると同時に、騒めく教室の扉が不意に開け放たれ、特徴的な容貌の中年男性が入ってきた。

このクラスの担任である諸岡だ。

この八十神高校ではそこそこの古株となる教師である。

担当科目は倫理学。

この学校の教師陣の中では規則規律に煩い教師で、異性交友にはかなり厳しい。

生徒達からは『モロキン』という愛称で呼ばれている。

尤も、生徒達からの評判はかなり悪いものであるが。

諸岡は何時もの如く始めた説教を終えると、「転校生を紹介する」と教室の外で待機させていたらしい生徒に声を掛けた。

一拍程の間を空けてから教室内に入ってきたのは、そんじよそこらの男子よりも背が高い女子生徒だった。

身長は目測で約180センチと言った所か。

凜とした姿勢で、転校生であるらしい女子生徒は諸岡の横に佇んだ。

「爛れた都会から、辺鄙な田舎町に飛ばされてきた哀れな奴だ。

いわば落ち武者だ、分かるな？」

転校生に対していきなり毒を吐く諸岡を、(またか……)と生徒達は白い目で見ると。

この諸岡という教師が、こういった物言いをするのはこの学校の生徒にとつては既に日常茶飯事であるが、慣れていない転校生は面食らっているだろうと、とんだ災難に遭つてる転校生に同情的な視線が集まった。

だが渦中にある筈の転校生は、心底どうでも良いとばかりに窓の外に目をやっている。

この様子だと、諸岡の嫌味は毛程も彼女には届かなかつたらしい。

「おい貴様！ 何処を見ている!!」

「窓の外を見ているだけですが、何か？」

自分の嫌味を聞き流していたとしか見えない態度に怒鳴り声を上げた諸岡に、そう答えて転校生は彼を見下ろした。

別に意図するものがあるでもなく、ただ単に彼女の方が教壇に立つ諸岡よりも背が高いので、自然とそうなるのだ。

別に怒つたりしている訳では無さそうな、フラットな声音だったが、不思議と威圧する様な迫力を醸し出していた。

「むっ……。まあいい。」

自己紹介をしなさい」

転校生の雰囲気気圧されたのか、諸岡は威勢を殺がれた様に口籠る。

それを大して気にした風も無く、転校生は黒板に己の名前を書き、その口を開いた。

「鳴上悠希です。」

これから一年間よろしくお願いします」

「あー……。それで、鳴上の席だが……。」

……。あそこが空いているな。

よし、お前の席はあそこだ」

悠希は諸岡に指定された席に座り、カバンから教科書類と筆記具を取り出す。

その時、横の席の女子生徒が悠希に小声で話しかけてきた。

「キミ、スゴいね！」

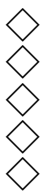
モロキンが気圧されちゃうなんてさ、ビックリしたよ！

大変だろうけど、これから一年間よろしくね」

「こちらこそ、よろしく」

悠希は女子生徒に軽く頭を下げてそう挨拶する。

そして再び騒めき始めた教室内を諸岡が一喝し、新学期最初の授業が始まった。



学期始めという事で、今日の授業は午前で終わる。

いつの間にか昨晩から降り続いていた外の雨は止んでいて、代わりに深い霧が町を覆っていた。

近頃ここ八十稲羽では雨が降り続くと、それが止んだ後に決まって霧が出る様になった。

近頃はと言っても、それが何時具体的にそうなったのかは地元の人々にも分からない。

気が付いたらいつの間にか、だったのだから。

ただ、漠然と昔はそうではなかったという認識だけはある。

昔はどうであれ、既にこの霧に慣れた生徒達はまたかとばかりに外を見やるだけだ。

生徒達が帰り支度を始めている最中、唐突に校内放送が流れ、教師達が呼び集められる。

「何か」が起きたのだろうか？

滅多に起きない事態に、生徒達はそう色めきたった。

それに拍車を掛ける様に、霧の向こうでパトカーか何かのサイレンまで聴こえる。

何が起きているのか、と窓の外を覗く男子生徒達の顔には『好奇心』がありありと浮かんでいた。

話題や娯楽に事欠く田舎だ。

生徒たちの態度は決して褒められる様なものではないのは確かであるが、それも無理もない事なのかもしれない。

皆が基本的に、「変化」に飢えているのである。

例えその「変化」が何かしらの事件であったとしても、己に直接の関わりが無い内は、単なるショーと大差は無いと感じているのだろう。

しかし深い霧で何も見えない為、次第に生徒達はサイレンへの興味を失って、話題は別の何かへと移っていった。

今の話題の中心は、最近ニュースで不倫騒動を報道されていた女子アナウンサーについてだ。

そんな中、悠希は我関せずとばかりに肃々と帰り支度を済ませていた。

少ししてから校内放送が再び流れ、学区内で事件が起きたので速やかに帰宅する様に、と指示される。

事件と聞いて途端に生徒達は再び色めき立ち、教室内の話題が今度は事件一色になった。

八十稲羽では事件らしい事件は滅多に起きないので、好奇心からか一種のお祭り騒ぎになっている。

まだ何かしらの事件が起きたとしか知らされておらず、その詳細を何も知らぬと言うのにも関わらず、野次馬根性の様な好奇心から、己の想像だけを基盤とした憶測が教室内を飛び交った。

そんな軽い喧騒の中、悠希はどうでも良いとばかりに席を立つ。

「あれ、鳴上さん帰り一人？」

よかつたら、一緒に帰らない？」

その直後、朝のホームルームの時に悠希に話し掛けてきた隣の席の女子生徒に再び声を掛けられた。

呼び止められた悠希は、女子生徒へと振り返る。

「そう言えば、まだ自己紹介してなかったね。」

あたし、里中千枝。

で、こっちは天城雪子ね」

そう言つて千枝は自分と、その横に立っていた赤いカーディガンを羽織った女子生徒を紹介した。

「あ、初めまして……なんか、急でごめんね」

「えー、謝らないですよ。」

あたし失礼な人みたいじゃない。

ちよつと鳴上さんの話を聞きたいなーって、それだけだつてば」

二人のやり取りには気心知れたものを感じる。

相当に仲が良いのだろう。

「私の話を？ 別に構わないけど」

そう悠希が返した時、一人の男子生徒が千枝に近付いて来た。

男子生徒は何処と無く落ち着きが無く、目が明らかに泳いでいる。

「あ……えーつと、里中……さん」

「何よ花村。」

何で今更〴〵さん〴〵付けなのよ」

千枝がジト目で挙動不審の男子生徒を見ると、男子生徒は明らかに狼狽した。

「この前借りたDVD、スゲー面白かったです。」

技の繰り出しが流石の本場っつーか……。

申し訳ない！ 事故なんだ！

バイト代入るまで待つて！ じゃっ!!」

そう言つてその男子生徒はカバンからDVDケースを取り出して、押し付ける様に千枝に渡し、その場を一目散に逃げ出そうとする。

「あつ、待てコラ！ 貸したDVDに何した!!」

咄嗟に追い掛けた千枝の蹴りが背中にクリーンヒットして、男子生徒は周囲の机や椅子を巻き込んで倒れこんだ。

その際に左脛を思いつきりぶつけたらしく、そこを抱えて男子生徒は悶絶する。

「どわっ！ 信じらんないヒビ入つてんじゃん！

あたしの『成龍伝説』があああ!!」

千枝がケースを開けて中身を確認すると、DVDには大きなヒビが幾つも走っていた。

割れてないのが最早奇跡的に思える程である。

これでは二度と再生する事は叶わないだろう。

新品のBlue-rayで買い換える事とお詫びとしてステーキを2枚奢る事で手打ちとしてその場は収まった。

正確には未だ痛みに悶絶する男子生徒に、千枝が一方的に要求を突き付けただけなのだ。

まあ本当に大切にしていたDVDだった様なので、偶発的な事故であつたとして差し引いても、比較的温情ある措置であると言えるのかも知れない……。



千枝と雪子及び悠希は帰りを共にする事になり、三人揃つて校門を出る。

すると校門の陰から目の前に突然誰かが飛び出して来た。

「稲羽周辺にある他校の制服を着た男子生徒だ。あまり学業的な意味合いでの噂は芳しく無い学校の生徒であるらしい。」

彼は自分は名乗る事もせず、突然名指しで雪子を遊びに誘った。しかし誘われた当の雪子はと言うと、そもそもこの男子生徒と全く面識が無かったらしく、見知らぬ人物からの突然の申し出に驚き戸惑っている。

突然目の前で繰り広げられる見世物染みたやりとり、周囲の生徒達の耳目が集まり野次馬根性剥き出しの無責任な発言が飛び交った。

どうやら野次馬達の言によると、この男子生徒は大分前から校門横に待機していたらしい。

馴れ馴れしい男子生徒はまだ数分も経っていないと言うのにも関わらず痺れを切らしてきたのか、徐々に元々荒かった語気が更に荒くなる。

精神的に何かしらの問題を抱えていそうなその男子生徒の様子を、雪子は薄気味悪そうに見ていた。

煮え切らない雪子の態度（男子生徒から見ての話だ）と周囲の冷やかしの視線に耐えられなくなったのか、終に男子生徒は雪子に詰め寄ろうとする。

その途端。

事の成り行きを雪子の真横で静観していた悠希はそれを手で制し、冷ややかな視線を男子生徒に向けた。

「どういう事情と要望があるのかは知らないが、嫌がついている相手にも無理に押し通さねばならない程のモノだろうか？」

「うるさいー。」

お前は関係無いクセに口出ししてくるな!!」

顔を真っ赤にしてそう喚き散らす男子生徒に対し、悠希の視線は益々冷えきってゆく。

そして感情の色が無い淡々とした声音で、男子生徒に問うた。

「確かに、そちらの事情には私は関与していない。」

しかし逆に尋ねるが、そちらこそ天城さんと何の関係が？

現状そちらの行動は、第三者から見ると、不審者以外の何者でもないけど？

どんな事情があるにせよ、他人に要求するモノがあるのなら、自分が何処の誰で何の用があるのか位は明確に相手に述べておく必要があるのでは？」

悠希は冷ややかにそう述べて男子生徒を見下ろした。

男子生徒は、上から降り注ぐ悠希の冷淡な視線に耐えられなくなった様に視線を彷徨わせ、終には何事かを口籠りながらその場を立ち去る。

結局、その男子生徒が名乗る事は無かった。

周囲が騒がしくなったので、そのまま三人は校門から足早に立ち去る。

歩きながら雪子はふと溢した。

「あの人……何の用だったのかな……」

「うくん……デートの誘い、じゃないかな、多分」

千枝は苦笑いしながら雪子に答える。

「そうなのかな……」

今一つ実感が湧かなかつたらしく、雪子は首を捻った。

それに千枝は益々苦笑いを浮かべる。

「にしても脈絡無き過ぎだし、いきなり『雪子』って呼び捨てにするとか恐過ぎだし、あれは無いなー」

「あれは無いというのには全面的に同意する。

傍目からでも凄く気色悪く鬱陶しかった」

悠希も千枝に同意して頷いた。

そして気味の悪い男子生徒の事など記憶から抹消するかの如く、別の話題へと三人の話のネタは移っていく。

悠希は千枝に請われるままにその質問に答え、時折雪子からも質問が飛んだりもした。

「そっかー、親の仕事の都合なんだ」

一通り悠希に質問をした千枝が、何処か安心した様にそう言う。

それに悠希は頷いた。

「結構急に決まった話で、私としては別に付いて行っても良かったんだが、あつちの学校の手続きは間に合いそうになかったし……無理に付いて行くには治安が良い訳じゃない場所だから、日本に残った方が良いつて事になってね。」

本当にギリギリだったから大変だったなあ……。

特に制服が」

スイツと制服のスカーフを摘まみながら悠希は溜め息を吐く。

「制服？」

首を傾げた雪子に、悠希は頷いて僅かに苦笑いを浮かべた。

「ほら、私って自分で言うのもなんだけど、背が高いから……。」

……既製品の女子制服にはまず間違いないサイズが無い訳で、一々採寸して作って貰わないと駄目だね。

あとちよつとでも話が決まるのが遅かったら、男子制服で学校に来る事になったんじゃないだろうか」

まあ、それならそれで別に良かったけど。

そう言いながら悠希は笑った。

「背が高いってのも大変だねー」

千枝も決して背が低い訳ではないのだが、悠希との差は大きい。

視線を合わせようとすると、自然と上を見上げなくてはならない。

悠希は「もう慣れたから」と苦笑した。

「……、ほんつと、なーんも無いでしょ？」

そこが良いトコでもあるんだけど、余所のヒトに言える様なモノは全然なくってね……」

千枝はそう言いながら、手を広げて辺りを示す。

千枝が言う様に、周りには田畑やポツポツと点在する家屋位しかない。

八十稲羽一帯が大体そんな感じである。

かつての稲羽は炭鉱の町として栄えたが、石炭から石油へとエネルギー資源が移って久しく、既に炭鉱も閉鎖された稲羽には収入源となるモノが乏しい。

比較的良質な雪質を持つスキー場はあるが、あまり大規模なモノではなく、地域活性化に繋がる様な観光資源とはならない。

山裾に広がる温泉街や山から採れる染料を用いた染め物に少々特徴のある土で焼いた陶磁器などはあるので皆無とまではいかないが、求心性に乏しいのは疑い様の無い事実である。

少なくとも新たに若い労働力が流入してくる様な環境ではない。

これで交通の便が良ければベッドタウンとしてやっていく道もあっただろうが、周囲を山々に囲まれた谷間という地形の為、交通の便はかなり悪い。

特に公共交通機関の不便さが目立つ。

更に地域一帯で高齢者の割合が高く、年齢層別の人口比率をグラフにすると見事な逆三角を描く。

若者の少ない地域に若者を対象とした商業施設を展開する意義は少ない為、そういった施設は八十稲羽にはほぼ皆無である。

そういった環境である為に若者の人口流出に歯止めが掛からず、それが更に地域から活力を奪い過疎化が進むという悪循環に陥っているのだった。

典型的な程の、炭鉱町の衰退の姿を辿っているのである。

「あ、でも、雪子さん家の『天城屋旅館』は普通に自慢の名所！」

「『隠れ家温泉』とか言つてよく雑誌にも取り上げられてるし！」

「そうなんだ。温泉か……」

千枝の言葉に、悠希は何かを思いを馳せるかの様に目を細める。

その様子に、雪子は首を僅かに傾げながら訊ねた。

「鳴上さん、温泉好きなの？」

「大浴場とか、露天風呂とか、想像するだけで心踊る位には」

「それなら是非とも行ってみなよ！」

ホンっとオススメだからさ！」

千枝の言葉に悠希が頷く。

その後も三人で雑談しながら歩いていると、前方に人だかりが出来ているのを発見した。

一見ただの住宅路でしかないのだが……。

「……ここら辺って、何かあるのか？」

それか、今日は何かのお祭りをやってる日とか？」

「ううん、フツターの住宅地だよ。」

別に今日は何かの催しモノは無かった筈だしな」

「だよね、どうしたんだろ？」

三人は揃って首を傾げた。

どうせ進行方向なのだから、そのまま人混みへと近付く。

人集りの向こうにはパトカーが数台停まっっていて、その先の道は黄色いテープで封鎖され、その前には警官が数人立っっていて野次馬達が侵入しないように見張っていた。

「これって、校内放送で言ってた事件……？」

「……多分、そうだろう。」

事件って言っても町に露出狂が出た位かと思ってたんだけど、この感じだとそんなモノでもないんだらうな……。

あ、あれって……」

「おい、そこで何をしている」

悠希が警官達の中に自身の叔父が居るのを発見した直後、その叔父から声を掛けられた。

「ただの通りすぎりです。」

「……、通学路の途中なので」

「ああ、まあ……そうだろうけどな。」

「……、あの校長……人の話聞いて無かったのか……？」

悠希の説明にチツと堂島は舌打ちをした。

うっかりかどうかは知らないが、八十神高校の校長先生は生徒に事件現場付近に立ち寄せないように通学路を変更させるのを忘れていたらしい。

「……鳴上さんの知り合い？」

堂島と悠希を交互に見て、雪子は少し驚いた様に訊ねた。

「悠希の叔父の堂島だ。」

まあ何だ……悠希と仲良くしてやってくれ。

「じゃあ三人とも、ウロウロせずに早く帰れよ」

堂島の言葉に三人は素直に頷くが、悠希はふと何かを思い出した様に顔を上げる。

「あつ……叔父さん、菜々子ちゃんは大丈夫ですか？」

「集団下校でもう家に帰ったってさっき連絡があった。」

出来れば気に掛けてやっつといてくれ」

その時、堂島の横を背広姿の若い男性が駆け抜け、そして道端で堪えきれなくなったかの様に蹲り、嘔吐した。

「足立！ お前はいつまで新米気分だ！

今すぐ本庁帰るか？ ああ!？」

堂島に怒鳴られた足立と呼ばれた刑事は、何とか返事をしようとしていたが、どうにも具合が悪いらしくその声は弱々しい。

その様子を見ていた悠希は突如ゴソゴソと通学鞆を漁り、中からお茶のペットボトルを取り出す。

そして未開封だったそれを開けてから、未だ蹲る足立に差し出した。

「これ、良かったらどうぞ。」

多少はマシになると思いますよ」

「えっ？ ……あ、ああ……有り難うね……」

足立は一瞬驚いた様に悠希を見上げ、そして差し出されたペットボトルを素直に受け取る。

「すまん、悠希。手を煩わせた。」

おい足立。それ飲んだら直ぐに地取りに行くからな！」

そう言っ仕事に戻る堂島の後を追う様に、足立は慌ただしく立ち上がり、悠希に手短に礼を言っしてからその場を後にした。





転校早々に嫌な事件が起きたものだ。

点けっぱなしになったテレビでは、今日の日中に有った事件が早速取り上げられていた。

どうやら遺体が民家のアンテナの上に吊り上げられていたらしい。何の意図があったのかは知らないが、残酷な事をする人がいたものだ。

被害者は最近誰かとの不倫騒動でメディアを賑わせていたアナウンサーらしい。

そう言えば、八十神高校のクラスメイト達の中にはこのアナウンサーについて何か噂している人がいたな……と思い出すが、直ぐにどうでも良い事かと思考を切り換えた。

被害者の人は気の毒だとは思うし、犯人は一刻も早く法の裁きを受けべきだとは思う。

しかし犯人を捕まえるのは警察や司法関係者の仕事だし、死んだ人を心から悼む事が出来る程自分はその人の人となりを知っている訳でもない。

ワイドショーで脚色されて取り上げられた情報だけを元に、知ったか振ってああだこうだと囁くのはその人への侮辱にも等しい行為にも思っている。

精々、被害者のアナウンサーへ黙祷を捧げる位が関の山だ。

しかしこの様子だと、叔父さんの帰宅は相当遅くなりそうだ。

もしかしたら今日は署の方に泊まり込みになるのかもしれない。

それ故にか、夕飯を食べる菜々子ちゃんの顔色は浮かない。

恐らくは叔父さんが心配なのだろう。

しかしそう訊ねてみても、刑事だから仕方ないのだと菜々子ちゃん

は言う。

確かに刑事を仕事としている以上仕方の無い話ではあるが、だからと言って心配してはいけない訳でも無く、寂しい思いを無理に抑圧する必要も無い。

が、しかし。

それは、まだ出会って2日の従姉妹が不用意に触れても良いモノでもない。

もう少しお互いに歩み寄ってからだって、そういった事を話し合うのに遅過ぎるといふ事も無いのではないだろうか。

それはそうと、明日の朝ごはんについてのリクエストを菜々子ちゃんに訊ねた。

まだ完全に菜々子ちゃんの好みの味を掴んだとは言い切れないが、それでも何と無くの好き嫌いは見えてくる。

より精進を重ねていけば、完全に好みに合致する料理に出来る日もそう遠くはないだろう。



【2011/04/13】

疎らに道を行く八十神高生に混じって歩いていると、前方に奇妙な物体を発見した。

道に投げ出されたかのように横倒しになった自転車の横で、何故かゴミ箱から八十神高校の男子制服を着た下半身が生えている。

オブジェなのだと思えば非常に前衛的なセンスだと言えるが、どうやらそうではないらしい。

抜け出そうとしてゴロゴロと転がって躓いている様だが、残念な事に自力脱出は困難な様だ。

放っておくと、間違いなくこの名も知らぬ彼は遅刻してしまうだろう

う。

それではあんまりにも散々な話だし、何より目の前にいる彼をスルーして登校するというのはどうにも寝覚めが悪くなる。

と、言うか……何故道行く他の生徒達は彼を無視しているのだろう。

無遠慮にジロジロと見てから素通りして行くなんて、傍目からでも腹立たしくなる光景だ。

この彼が何者かは知らないが、この扱いは如何なものだろうか。そんな事を思いながらヒョイツとゴミ箱を取り除くと、中からは人の好きそうな顔が現れた。

その明るい髪色と首に掛けた鮮やかなオレンジのヘッドフォンに見覚えがあるな……と思っていると、ああそう言えば……と思い出す。

「あ……昨日里中さんのDVD割った人だ」

思わずそう口に出すと、目の前の彼は勢い良く反論してきた。

「あれは事故だっつーの!!」

あー……えーつと、転校生の鳴上……だっけか？」

そうだ、と頷く。

「助けてくれてありがとな。」

俺は花村陽介。席は鳴上の後ろ」

それは知らなかった。と言うか気が付いてなかった。

幸いにもゴミ箱の中は空であった為、花村は膝部分等に付いた砂埃を軽く払うだけで、綺麗な見た目に戻る。

花村はゴミ箱の傍らに横倒しになっていた自転車を立たせ直し、それに跨がった。

オレンジ基調のそこそこ値が張りそうな自転車だ。

だが……。

「それ、乗るの止めたらどうだ？」

チェーンが大分痛んでるし、フレームもちよつと曲がってるみたいだから……最悪、学校に着く前に壊れる。

今なら自転車漕がなくても十分間に合う時間なんだから、押して行

くのをオススメするけど」

一応、そう忠告をする。

流石に気付いていたのに黙っていて、自転車の故障が原因で花村が怪我をしたりするのは寝覚めが悪くなるからだ。

「えっ、マジ？」

「マジ。修理推奨のレベル」

若干疑わし気にこちらを見てきた花村に、ハッキリとそう頷くと。

じゃあ仕方ないなあ……と花村は溜め息を吐いて、自転車を押し始めた。

歩いている間、お互いに一寸した世間話をする。

どうやら花村も半年程前に都会から八十稲羽に引越してきたのだそうだ。

最初は剩りにも何も無い八十稲羽に呆然としたのだという。確かに。

八十稲羽の絶妙に微妙な田舎具合は、万人が『田舎』と聞いて思い浮かべるものに限り無く近い。

良くも悪くも人やモノが溢れかえっている都会と比べれば、何も無い様に見えてくるのは仕方無い話だ。

まあ世の中には数世帯分の家々しかない『限界集落』等といった超弩級の田舎も存在するので、そういった場所からすれば八十稲羽だつてまだ都会的なのかもしれないけれど。

でもまあ……。

田舎だろうとどうだろうと、探せばそれなりにやれる事はあるし、そんなに落ち込んだり悩んだりする必要は自分はあまり感じない。要は気の持ちようなのである。



放課後、朝に助けしてくれたお礼に、と花村に寄り道に誘われた。

どうやら何かを奢ってくれる心積もりらしい。

花村に連れられてやって来たのはジュネスだった。

個人的には奢ってくれるなら何だって良いとは思うが、途中から参加してきた里中さんはステーキではないのは少々不満らしい。

里中さんは「まず肉ありき」という感じなんだそう。

まあ確かに、肉は美味しいけど。

そんな事を思いつつ、花村が買ってくれたフードコートのとこ焼きをモソモソ食べながら、二人の話に耳を傾ける。

商店街という言葉が里中さんの口から出てきた時、僅かながら花村の笑顔が翳った。

子細は分からないが、どうやら花村と商店街とやらの間には何かしらの確執がある様だ。

しかも花村の反応を見る限り、花村にとっては一方的なものが。

場の空気が重くなったのは一瞬で、直ぐ様花村は何かを見付けて席を立つ。

その行き先に視線を向けると、アルバイトのエプロンを身に着けた女性が休憩している所だった。

女性の歳は見た所、同じ位か+2位までだろう。

溜め息を吐くその横顔には疲労が色濃く浮かんでいる。

知り合いなのか、花村はにこやかに女性に話し掛けていた。

二人を見ていたから気を利かせてくれたのか、里中さんが女性について軽く説明してくれる。

彼女は小西早紀、現在八十神高校三年生の先輩。

商店街にある酒屋の長女なのだそう。

花村との間には同じ高校のアルバイト仲間という事位しか共通項が無さそうだが、歳が近い事もあってか花村はかなり親しく接している様だ。

心なしかその表情は弾んでいる様にも見える。

里中さんは二人が恋愛関係にあるんじゃないかと推測している様だが、小西先輩の反応を見るに、少なくとも両思いではあるまい。

花村は傍目からでも分かり易い好意を抱いている様だが……。

小西先輩は休憩時間が終わったのか席を立ったが、何故かこちらにやって来た。

値踏みしている訳では無いが、興味深そうな目でこちらを暫し眺めた後、小西先輩はまるで悪戯っ子の様な愛嬌のある笑みを浮かべる。

「君が噂の転校生ちゃん？」

噂になっているのかは知らないが、八十神高校のこの春からの転校生は自分一人だけらしいので多分間違いは無い。

はて、一体何か用件でもあるのだろうか。

「花ちゃんがここに友達連れてくるのって珍しいね。」

こいつ、友達少ないからさ。仲良くしてやってね。

お節介だけど、イヤツだからさ」

小西先輩は優しい気な眼差しで花村を見やった後に、「ちよつとウザイかもしれないけど」と付け足した。

……どうやら、花村もそれなりに小西先輩から気を配って貰っている様だ。

花村の完全なる一方通行では無かった事は喜ばしい事である。

小西先輩が去った後、花村を見てニヤニヤと里中さんは笑った。

「ほほう……青春ですなあ」

「はあっ!？」

いや、その、先輩とはそんなじゃないし!!」

花村の分かり易すぎる反論に、里中さんのニヤニヤ笑いは止まらな

い。
恋バナとして格好のネタなのだ。

見逃す筈は無いのであろう。

「ふふーんー」

恋に悩める青少年花村君にイイコトを教えてしんぜよう!」

そしてニヤツと笑った後に里中さんは態とらしく声を落とす。

「《マヨナカテレビ》って、知ってる?」

聞き慣れないその言葉に花村と揃って首を傾げた。
はて、一体何だろうか。

深夜に放送されているチョツとあれなテレビ番組の総称なのだろうか？

「は？ 何だそれ？」

花村の言葉に、里中さんは何故か得意気な顔で答える。

「雨が降ってる真夜中の深夜零時に電源を切ったテレビにさ、映るんだって」

「……映るって何が？」

そう訊ねた花村にニヤリと笑みを浮かべ、潜めた声で里中さんは答えた。

「運命の相手が、だってさ」

……これはまた胡散臭い都市伝説にありがちな話だ。

最近はこの作り話が流行っているのだろうか……。

《マヨナカテレビ》は他では聞いた事が無かったので、この地域限定のとてもローカルな都市伝説なのだろう。

「……アホらし。」

それどー考えても眉唾物の与太話じゃん」

ハッ、と馬鹿にした様な花村の発言に、里中さんは反論する。

「いやいや、実際に見たって言う人いるみたいだよ？」

しかも一人二人どころじゃないらしいし」

「それ、ただの錯覚じゃね？」

大体誰かが映ったところで、それが運命の相手かどーかなんてどうやって確かめるっつーんだよ」

極めて正論である意見を吐く花村に、里中さんはまあね、と肩を竦めた。

「まー……よくある都市伝説みたいなもんだらうけど。」

良いじゃん、夢があつてさ。

別に誰かに害があるようなもんじゃないんだし。

確か今晚から降るって言ったし、丁度良いから今晚試してみようよ。

映っても映らなくても話のネタ位にはなるだろうしね」

「鳴上さんもどう？」と話を振られ、少し考える。

まあ試す事自体には別に問題ないだろうけれど、ただ……。

「その時間帯は何時も寝てるから。」

……起きれなくて見れないかもしれない」

就寝時間が夜中の12時を越えた事は、記憶にある限りでは無かった筈だ。

寝付きの良さはのび太君クラスだと自負している。

「でも、もし起きていたら試してはみるよ」

起きていれば、の話にはなるが……。



夕飯の支度をしている最中に叔父さんは帰って来た。

しかし疲労が溜まっているのか、早速ソファに座り込んだ叔父さんは、今にも眠ってしまいそうな顔でテレビを眺めている。

何か食べてきた様には見えないが……一旦眠ってからでないと、食べ物が見え通らないのではないだろうか。

テレビでは先日の殺人事件の第一発見者へのインタビューが流れている。

それを半ば聞き流しながら叔父さんの分の布団を敷いてから居間に戻ると、叔父さんは既に夢の世界へと旅立ってしまった。

丁度インタビューも地元商店街の客足を心配するコメントで締め括って終わった所だ。

心配する位なら、こんな番組で一々取り上げなければ済む話だろう、と心の中でツツコミを入れながら一瞬だけ見えた第一発見者の姿に首を傾げる。

はて、あの背格好……何処かで見た様な……。
だが直ぐに、どうでも良い事か、と思考を切り換える。
今は叔父さんを何とかする方が先だ。

こんな所で寝ていては、曆の上では春とは言えまだ夜は冷えるから
風邪を引くだろう。

軽く揺すったり、肩を叩いたり、名前を耳元で呼んでも、微かに反
応は示すものの目覚める気配は一向に無い。
相当深く眠っているらしい。

それだけ疲れているという事か。
仕方無い……。

ヨイシヨツと叔父さんを抱き上げて寝室まで運ぶ。

体格の良い叔父さんは結構重いが、運ぶのに問題は無い。

ネクタイだけ回収して、掛け布団を掛けてからその場を撤収した。



菜々子ちゃんとの夕食は今日も恙無く終わった。

今日のメニューは野菜たっぷりのチキンカレーだ。

堂島家がビーフ派かポーク派か、将又シーフード派かは分からな
かったので取り敢えずあまり外す事はないだろうチキンである。

市販のカレールーをベースに、定番の日本式カレーの枠を守って
作ったので、まあ余程の事が無い限りは食べられないという事はある
まい。

そんな思惑で作ったカレーは菜々子ちゃんには大変好評であった。

一応甘過ぎない程度に甘口に作ってはみたが、もう少し辛口寄りでも
大丈夫そうである。

今度作る機会があればそうしてみよう。

風呂に入って、菜々子ちゃんを寝かせて、叔父さんが途中で起きた
時用にカレーが鍋に残っている旨を書いたメモを居間の座卓の目立

つ位置に置いて、部屋に戻って布団の用意をする頃には10時近くになっていた。

ああそう言えば……《マヨナカテレビ》とやらを見る約束をしてたっけか、と半ばウトウトし始めた頭の片隅で思う。

しかし、それまで本を読んで時間を潰そうにも、手持ちの本は教科書位だし……。

宿題は……予習を含めてやってあるし……。

パソコン、は……まあいいや……。

ああ……ダメだ……眠……い……。





『我は……、汝は……。……。』『……』『……』を開く者よ』

不意に誰かに呼ばれた様な気がして、緩やかに意識が浮上する。

……どうやら電気を点けたまま眠ってしまったらしい。

まだボンヤリとした頭で時間を確認する。

零時より少し前……。

起きるにはまだまだ早過ぎる時間だ。

取り敢えず点けっぱなしにしてしまっていた灯りを消して、閉め忘れていたカーテンを閉める。

ガラス窓には雨垂れが絶えず滴り落ちていた。

どうやら外では雨が降っているらしい。

……雨……？

何か忘れている様な気はするけれど……。

しかしほぼ眠っているのと変わらない頭は、全くと言って良い程働かない。

ボヤツと暗い部屋を見回していると、唐突に部屋に光源が現れた。

光源と言うには些か頼りないそれは、部屋に置かれていた小型のテレビからのモノだ。

酷い雑音と砂嵐の様な画面が数秒続いた後、唐突に画面が切り替わる。

不鮮明……ではないのだが、鮮明にも程遠い、一昔前位の画質のそれには、『誰か』が映っていた。

顔付近の画像は特に荒くてよくは分からないが、その肩よりも長いフワツとした髪には何処かで見た覚えがある。

誰……だろう。

考えても、眠た過ぎて思考が端からボヤけてしまう。と言うよりも、何でテレビが点いているんだろうか。電源を入れた覚えはないのだけれども。

もしかして故障だろうか。

困ったな、まだ一回も使ってなかったのに……。

一分か其処らで謎の映像は途切れ、再びテレビは沈黙した。

一体何だったんだろう……。

そう思いながらも、トロトロと襲ってくる眠気に包まれる様に、再び眠りの淵へと沈んでいった。



【2011/04/14】

今日は何やら学校が騒がしい。

はて……何かあったのだろうか。

考えてみても、それに思い当たる節は無い。

騒めきに耳を傾けてみると、どうやら誰も彼もがいつそ狂氣的な程に同じ話題について話している事に気が付いた。

どうやら先日稲羽で起きたあの殺人事件の第一発見者が、昨日少しだけ話した小西先輩だと噂になっている様である。

昨晚のニュースで流れていた映像は、声等に加工は施されていたものの、見る人が見れば小西先輩だと直ぐに分かるモノであったのだそうだ。

騒ぎになってるのが原因なのかは知らないが、小西先輩は今日は休んでいるらしい。

近隣で起こった殺人事件に対して関心が全く無いのかと問われ

ば、別にそういう訳でも無いのだが、叔父さんが実際に捜査に関わっている身としては、無責任な憶測を垂れ流すのを善しとする訳にはいかない。

事件の早期解決を願うばかりだ。

だから、小西先輩が第一発見者なのだと言われた所で、大して思う事はないのだ。

小西先輩を質問攻めにした所で、そんな事は警察がとづくにやっっているだろうし、それによって新事実が判明するなんてそんな御都合主義的な事はあるまい。

無責任な野次馬根性で、根掘り葉掘り聞き出したって全く無意味な事である。

無駄に相手を辟易させてしまうのが関の山だ。

騒ぎ立てられ注目されるのを好む人なら兎も角、極一般的な感性を持つ人ならば、こうも無責任に騒がれるのは好まないだろう。

小西先輩は実に運が悪いとしか言いようがない。

まあでも……何か他に話題が生まれれば、この騒ぎも直ぐに鎮静化するのではないだろうか。

人の噂は七十五日とは言うが、実際の世の中はもつと移り気である。

犯人が早く捕まればいいのだけれど……。

授業が始まる少し前に花村が教室に入ってきた。

何やら妙にソワソワしている。

「そーいえばさ、……昨日の話なんだけど……」

「昨日の話……?」

言い淀む様な花村の言葉に鸚鵡返しに訊ね返した。

はて、一体何の話だ?

「なんつーか、その……鳴上はさ、見た?」

「……目的語を省かれると意味が分かんないんだけど」

そう首を傾げると、花村にオイオイと言いたげな顔をされる。

「《マヨナカテレビ》だよ、《マヨナカテレビ》!」

昨日試してみよーぜって話になったじゃんかよ!」

あー……そう言えばそんな話もあったか……。

「悪いけど、昨日はグッスリ寝てたし……見てない。」

それに、何か……部屋のテレビが故障(?)してるみたいだし……起きてたとしても見れたかは分からなかった」

「故障?…修理に出せば?」

横で聞いていた里中さんも口を挟む。

「結構古めの型だし、あと一寸でアナログ放送も終了するから。」

どうせなら修理に出すよりも新しいのに買い換えるかも」

「あーそれならあたしも一緒にテレビ見に行っても良い?」

ウチもそろそろ買い換えかなって話になってんだよねー」

「良いよ。じゃあ帰りにジュネスに寄ってみようか」

里中さんは傍にいた天城さんにも声を掛けるが、どうやら今は忙しい時期らしく、放課後は直帰しなくてはならないらしい。

家業の手伝いというものも大変である。

そんなこんなで授業が始まり、誰の頭からも《マヨナカテレビ》の事は抜け落ちてしまった。



放課後、里中さんと花村と共にジュネスの家電コーナーを訪れていた。

基本的に繁盛しているジュネスにしては珍しく、家電売り場に客の姿は疎らだ。

まあ、新生活への切り換えの時期からは少し外れているし、そもそも家電は日常的に買い換えるものでもない。

これが人の流入の激しい都会なら兎も角、新たに引越したりしてくる人は稀なこの稲羽では、引越し関連での家電の買い入れも少ないだろう。

それでもやっつけていけるのだろうか。

壁一面に並べられた様々なメーカーの薄型液晶テレビは大きさもマチマチだ。

部屋に置くのに丁度良いサイズかつ値段の手頃な小型のテレビから、どう考えても一般的な家庭では置き場に困る様なテレビまで選り取りみどりである。

最終的に購入するとしても小型のものになるだろうが、特大サイズのモノにはロマンがあつてそれはそれで良い。

これで映画を見たりゲームをやったら凄い迫力になる事だろう。

「そーいやさ、結局《マヨナカテレビ》は見れた？」

「うーん……一応？」

特大テレビをしげしげと見ていると、背後で里中さんと花村がそんな話をしていた。

「あたしは……何か人影っぽいのは見たんだけど……誰なのか分かんなかったし……」

それに多分だけど、あの人影……女の人っぽかったんだよねー……」

なーんか、どつかで見た事ある様な人だった気はするんだけど」

「お前もか、里中。」

俺も一応……映ってはいたんだが……画像が粗過ぎて誰なのかは分からなかった。

でも確かに……何かこう……見覚えがある人だったんだよな。

フワツとした、肩位の長さの髪で……あとウチの制服も着てて……」

あー……喉元位まで出かかっている気がすんのに……」

「その人、もしかしてあたしが見た人と同じかも……」

えっ……？

花村とあたしの《運命の人》が同じ人って事？」

「知んねーよ。」

でも、マジであれ何だったんだろうな」

ふと、二人の話題に上っている人物を自分も見た覚えがあつた事に気が付く。

「私も……もしかしたら、見た、のかもしれない……その人影を。てつきりテレビの故障かと思ってたけど……」

「あれ？ 鳴上は昨晚は寝てたんじゃねーの？」

「一度だけ途中で起きたから……」

すぐにまた寝たんだけど、寝る前にほんの少しの間だけテレビが勝手に点いて……花村達が言う人影らしきものが映ってた」

本当に極僅かな時間だったし、テレビの故障だと思っていた。

それに大体、一度眠ってしまったら途中で目が覚めた事など殆ど無いものだから、もしかしたら夢の中の出来事だったのかなと位にしか考えてなかったのである。

「んー鳴上さんが見たその人影が《マヨナカテレビ》のものだったとして、三人の《運命の人》が同じって事になるのかなあ……」

てか、あたしも鳴上さんも、女なんだけど」

そもそも《運命の人》も何も……誰が映ったのかで分らないのだ。

何処かで見た事があるその容姿が多少は気に掛かるものの……だからと言って、積極的にその人物を探したいのかと問われればそれは否と答えるしかない。

眉唾物だと思っていた都市伝説が、実はそうではなかったという点に關しては興味も沸くが……。

……しかしどういった仕組みであの映像は映ったのだろう。

花村と里中さんも見た以上は、あのテレビの画面にだけに何か問題がある訳ではないだろうし……。

そう思いながら目の前の巨大な画面に手を伸ばす。だがしかし。

確かに画面に微かに触れた筈の指先には、ある筈の硬い感触が返ってこない。

それどころか、微かな波紋を描いて指先はある筈の画面を通り抜けていく。

「っ!？」

一瞬、壊してしまったのかと思い、慌てて指を引き抜いた。

だが、指先が離れた後の画面には穴なんて空いてないし、何の問題もなくバラエティー番組が映っている。

「なら、目の錯覚か……?」

そう思い、目を軽く擦った後に、今度は右の掌を画面に触れさせる。やはり、ある筈の画面の感触がない。

そして、右手は画面に呑み込まれていた。

手首近くまでは沈み込んでしまうのを確認した後、手を引き抜く。早鐘を打つ鼓動を抑えようと、ゆっくりと大きく息をした。

「ん? どーかしたのか、鳴上?」

様子がおかしく見えたのだろうか、花村が気遣わし気にそう声を掛けてきた。

その声に花村の方を振り返る。

「……花村。」

私は……白昼夢を見ているのだろうか……」

客観的にどう見えているのか気になったから、花村が見ている目の前で再び手を画面に伸ばした。

「っ!? お、おいっ!?」

どーなってるんだ、それ?!」

花村は混乱した様に、画面に沈み込んでいる右手とこちらとを見比べてきている。

「えっえっ?! な、何それ?!」

最近のテレビの新機能?!」

里中さんも茫然と見比べていた。

混乱し過ぎていて、脳が正常に情報を処理出来ていなさそうな感じである。

「んな訳あるか!!」

えっ、マジで?! どーなってるの?!」

新手のイリュージョンっ?!」

タネは?! 仕掛けはっ?!」

慌てた様に二人がこちらに駆け寄ってきた。

右手の先には何の感触も返ってこない。

背後でドサドサツと二回何か落下してきた音がした。

あの状況から推察するに、恐らくは里中さんと花村だろう。

振り返って近寄ると、花村は少し着地に失敗したらしく、涙目になっていた。

二人に特には怪我らしい怪我は無さそうである事を確認してから周りを見渡す。

一面の霧で殆ど何も見えないが……。

「ここは……」

何処、なのだろう。

少なくとも、ジュネスの店の中では無い。

直前に見ていた光景から地続きの場所であるとするならば、ここはテレビの中、という事になるのだが……。

……。

……………。

……いや、そもそも話からして突拍子も無い事ではあるが、ここはそうとでも考えなくては話が進まない。

まずは脱出する為の方法を探さなくてはならないが……。

辺りが濃い霧に覆われているとはいえ、出口も入り口も……それらしき物が見当たらない。

落下したと言う事は、入り口は上方にある筈なのだが見上げてみても特にはそれらしきモノは見当たらなかった。

霧で見えないだけと言う可能性も有ろうが、落下した時間から逆算すればその高さは1.5メートルも無いだろう。

今居るのは、まるでテレビスタジオの様な場所だけれども、撮影する為の機材などは何処にも見当たらず、ただただ剥き出しの鉄骨に取り付けられたライトが静かに霧を照らしている。

一体この場所が何を目的として存在しているのか皆目見当も付かないが……。

里中さんと花村は異常事態に動揺して平静を失っている。

気持ちは分かるが、しかし、焦ろうが怒鳴ろうがそれで元の場所に戻れるという訳でも無い。

そんな事は体力の無駄遣いでしかないだろう。

別に、今日の前に命の危険が差し迫っているという訳でもないのだから、無闇に焦る必要性はない。

「……出口を探さないと……」

「探すつて、どうやってだよ?!」

「この辺りを歩き回るしかない」

地図とかそんな物は無い。

スマホはネットに繋がらないし、そもそも圏外だ。

電波の通りが悪いのか、将又近隣に基地局が無いからなのかは分からないが……。

何の手掛かりも無いが、とにかくやってみるしかない。

この場に止まってきた所で、第三者から救助される可能性は、限り無く零に近いのだから。

取り敢えずは行ける所までは行ってみようという事になり、スタジオらしき場所を後にした。



またスタジオに戻れる様に、所々にサインペンで印を残しながら進んで行くと、マンションの様な建物に辿り着いた。

霧の中から突然現れたかの様に佇むそれは、生活音が無く、人の住んでいる気配が全く無い上に、所々ハッキリとは言葉にし難い違和感を感じるが……。

まあそれでも周囲にそれ以外に目ぼしいものはないのだ。

明らかに怪しいのだが、半ば仕方無しに足を踏み入れた。

……?

……一瞬霧の向こうで騒めきの様な微かな音が聴こえた気がする。

花村と里中さんには何も聴こえなかった様なので、気の所為なのかもしれないが……。

最大限警戒しつつマンションの中を進んでいくと、小部屋に行き当たった。

所々にあつた扉には、何も書かれていない表札や滅茶苦茶で何の法則性も見出せない部屋番号らしきものが添えられていたが、それらの扉が開く事はなく、鍵穴自体が存在していなかったのも、そもそも扉としての用途を成しているのかさえ疑問に思わざるを得なかった。

そんな中、まるで招き入れ様としているかの様に、行き当たりの部屋の扉は開け放たれていた。

中に何かがいる気配は無い。

万が一住人がいるのなら不法侵入になるな、と思いはするものの、まあ人が住んでいる生活臭が全く無いので、その点は多分大丈夫だろう。

部屋の中は心なしか大分霧が晴れている様に思える。

尤も……それによりハッキリと見えている室内の様子は、『異様』と表現するに相応しい有り様だったが。

壁一面に誰なのかは分からないが同一人物のポスターらしきものが貼られ、そのポスターはどれも特に顔の辺りを重点的かつ執拗に切り裂かれていて、更には止めと言わんばかりに様々な色彩の塗料を撒き散らされていた。

相当の怨みつらみが無くしては、ここまででは出来ないだろう。

ポスター以外の部屋の内装自体は、殺風景にすら感じる程のものだから余計にそのポスターの異様さが目立つ。

塗料を被っていない僅かながらも読み取れた部分には『演歌道』や『みすず』という文字が書かれていた。

そしてポスター以外にこの部屋の異様さを一層際立たせているものは、天井から垂れ下がった荒縄とその先に括り付けられた輪っか状にされた朱を基調としたスカーフ、そしてその真下の椅子。

それはまるで首吊りをする為のもの様の……しかし実際に首を吊った形跡は無いので未遂に終わったのかもしれないだけだ。

花村も里中さんも、この部屋の異様な光景に竦んだ様に立っている。

表現し辛い異質さに呑まれた様に茫然としている二人を尻目に、部屋を一通り搜索した。

正直見ていると気分が良くなる様なモノでも無いが、しかしこの部屋にはそれ以外は何も無さそうだ。

如何にも訳あり感が漂っているのに、残念な事である。

長居しても仕方ないので、来た道を引き返そうとしたその時。

霧の向こうから『何か』がやって来る音がした。

逃げようにも、部屋の出入り口は一つしかない。

完全に袋小路だ。

咄嗟に花村と共に里中さんを背後に庇い、『何か』の出方を探る。

そして、霧の向こうから現れたのは……。

……何と表現するべきなのだろうか？

熊を思いつきり可愛らしくデフォルメしたかの様な着ぐるみ、なのだろうか？

首と胴が分離出来るタイプの様で、首もとの大きなジツパーがやけに目立つ。

いやしかし。

その耳はピコピコと動いているし、一昔前の少女漫画かと言いたくなる程のクリクリとした大きな目はパチパチと瞬きを繰り返している。

これがただの着ぐるみだとは到底思えない。

人間、かどうかすら分からない。

「えつと……どちら様？」

取り敢えず、こちらに敵意を持つ存在かどうか位は確認しなくてはならない。

混乱しつつもそう思い、目の前の不思議な存在に問い掛けてみる。

「キミたちこそ誰クマ！」

クマはクマクマ！

ずつとここに住んでいるクマ！

そんな事よりも、キミたち早くあつちの世界に帰るクマ―！」

『クマ』と名乗った着ぐるみに、そう捲し立てられた。

少なくとも言語的コミュニケーションが可能な相手ではある様だ。

「帰れと言われても……」

そもそも、その為の出口を探しているんだが……。

いや、待て。

この奇妙な着ぐるみ、『ずっとここに住んでいる』と言わなかったか

？

もしかして、出口か何かを知っているんじゃないや……。

そう思い、着ぐるみを問い詰め様とした時。

周囲の空気がガラリと変わったのを肌で感じた。

「あわわわわっ!!」

キミたち、早くここから逃げるクマよー!

まだ霧は晴れない筈なのにやたらとシャドウが殺気立っているク

マ!

このままじゃキミたちシャドウに襲われちゃうクマよ!

ほら! これをキミにあげるから、早くここから逃げるクマ!!」

「《シャドウ》?」

そう早口で捲し立てられ、よく分からない内に着ぐるみから何かを

押し付けられた。

押し付けられたその何かは、一見するとただの眼鏡にしか見えな

い。

だが、よく調べてみようかとレンズを覗くと。

「霧が……見えなくなった……?」

いや、正確にはまだ微かに残ってはいるのだが、あれ程視界を塞い

でいた霧は気にもならない程の薄さになっていた。

しかしレンズから目を外すと、やはり霧は重苦しくそこに存在して

いる。

……このレンズを越しならば、視界を確保出来る、という事か。

罨の可能性は十分に有り得たが、今は視界を確保出来る方が良い。

迷わず渡されたその眼鏡を掛けた。

霧があるのと無いのでは見えてくる物が大違いだ。

さて、先程から騒いでいる《シャドウ》とは一体何なのだろう？

それを着ぐるみに訊ね様とした時だった。

まるで背筋に限界まで冷却された水をぶっかけられたかの様な悪寒が走る。

「ギャーツ！ 来るクマよ！」

そう叫んでクマは何処かへと走り去ってしまった。

その逃げ足の速さはあつという間に視界から消えてしまう程のものである。

「えっ、あつ、ちよっ……待ちなさいよ！」

里中さんがそう叫ぶが、今はそれどころではない。

「二人とも、一刻も早くここを離れよう」

そう言つてまだ事態を把握出来ていない二人の腕を掴んで来た道を引き返す。

勿論全速力だ。

「ちよっ、待てよ鳴上！」

「今は説明する手間も惜しい！」

一先ずあのスタジオの様な場所に!!」

戸惑う花村に懇切丁寧に説明している暇は無い。

霧が掛かつていない視界には、今の状況が嫌になる位にハッキリと映ってしまったているのだから。

まるで床から染み出てくる様に黒い “何か” が何処からともなく現れた。

まるでゲルの様なやや不定形なそれには、異様に目立つ仮面が引っ付いている。

そしてその仮面を中心として体が持ち上がり、見る見る内にその形状を変えていった。

変態後のそれは例えるならマリオシリーズのパクションフラワーの花の部分だけが中空に浮かんでいる感じだ。

もしくは懐かしのレトロゲー、パクションか。

どういった原理で浮いているのかは甚だ疑問ではあるが、今はそれ

どころではない。

パックマン（仮）はどう見たって友好的な存在には見えない。

見た目で物事を測るのは良くないのだが、見た目云々の前に殺気だっているのだから仕方無い。

パックマン（仮）の姿は、この霧の中でも二人にも僅かながらも見えている様だ。

「な、何だよコイツ！」

「わわ、分かんないけど、とにかく逃げなきゃ!!」



しかしパックマン（仮）の数はどんどん増えてきて、建物を出た辺りで四方を囲まれてしまった。

逃げる途中で拾った錆びた鉄パイプで応戦するが、鉄パイプは呆気なく折れ曲がったというのにパックマン（仮）は全く堪えた様子がない。

「つつ!!」

「里中!」「里中さん!!」

その時、パックマン（仮）が不意を突いて里中さんの背後に回り込んだ。

パックマン（仮）の、気味が悪い程巨大な舌に顔面を舐められた里中さんは恐怖が限界に達したのか、気を失って力無くその場に倒れる。

「くそっ!!」

花村が慌てて里中さんを抱き抱えるが、里中さんが目を醒ます気配は全く無い。

パックマンは容赦なく、そんな動けない二人に襲い掛かろうとする。

「畜生っ! 何で、こんな所でつつ!!」

「っ！ 諦めるなっ!!」

目を閉じて襲い掛かるであろう痛みを備えようとした花村に檄を飛ばしながら、襲い掛かるパックマン（仮）に全力で体当たりをして押し飛ばした。

ダメージにはなっていないだろうが、それでも一応押しやりして動かす事は出来るのだ。

諦めてたまるか。

こんな所で死にたくない。

家では菜々子ちゃんやんが待ってるし、叔父さんだって、待ってる。

今は遠く海の向こうに居るが、父さんや母さんだって、次の春には帰ってくる。

彼らを思うと、こんな所で死ねない。

彼らを思うのなら、こんな所で死にたくなんてない。

諦めてたまるか。

諦める事なんて、出来る訳ない。

どんな事があっても、生きる事を諦めてたまるか。

だから、死なせない。

花村も、里中さんも。

死なせない。死なせてたまるか。

「花村っ！ 里中さん抱えて走れっ!!!」

「鳴上っ!!」

道を塞いでいたパックマン（仮）に体当たりをして退かせながら、花村に叫んだ。

「良いから、さっさと!!」

再度飛び掛かってきたパックマン（仮）の突進を身を屈めて回避してから、更にもう一度体当たりをする。

戸惑いながらも花村は頷き、里中さんを引き摺る様にその場から逃げた。

その背後を襲おうとするパックマン（仮）に、手近な所にいたパックマン（仮）の舌を掴んで、ハンマー投げの要領でブチ当てる。

掴んだ際の舌のヌルリとした感触に内心悲鳴を上げたが、目論見通りに花村の背後に迫っていたパックマン（仮）は弾き飛ばされた。

しかし、実際に感触はあるのに、何のダメージにもならないのは不可解な話である。

いや、今はそんな事よりも。

そう思い直して、花村達の後を追う。

「クツッ、アイツら何処まで追ってくる気なんだ！」

「分からないけど、とにかくくっ、走るしかないっ!!」

逃げなきや死ぬのだろう、とは誰に説明されるでもなく最早本能的な部分で理解していた。

あのパックマン（仮）どもがお化けとか幽霊だとか怪物だとか、一体何なのかは分からないが、一つ言える事があるとすれば、あれは普通の人が、何の武器や対抗手段も持たずに太刀打ち出来る様な存在ではない。

あの着ぐるみを捕まえれば、何か対抗手段が見付かるかもしれないが、今はあれを探している暇など無い。

「チッ！ あんな見た目のクセに移動が速過ぎんだろ!!」

花村は後ろをチラリと振り返って舌打ちをしつつ叫んだ。

空中を滑る様に追ってくるパックマン（仮）どもの移動速度は速い。

こつちだつて別に鈍足ではないし、ある種火事場の何とやらの速さで全力疾走しているのに、グングンと距離を詰めてくる。

しかしパックマン（仮）達は小回りは利き辛い様で、曲がり角に行き当たる度に距離を離す事が出来る。

だが……。

「あっ！」

死角から飛び掛かってきたパックマン（仮）に驚き、それを避けたは良いが、花村が足を纏れさせて転んでしまった。

助け起こそうと駆け寄ると、その隙にまたパックマン（仮）に周囲

を囲まれる。

どうにか抜け出そうにも、警戒されているのか今度は中々体当たりを出来そうな隙がない。

これは……万事休す、かもしれない。

倒れた花村達を背後にして、この怪物どもの群れに相對する。

大きく口を空けて襲い掛かろうとしてくるパックマン(仮)達を、せめてもの意地と矜持で、死の恐怖に震えそうになる体を押さえ付け、絶対に目を反らしてやるものかと睨み付けた。

その時。

——己は汝……汝は我……

……声が。

何時か何処かで聴いた事がある声が、聴こえた様な気がした。

そして同時に。

頭痛にも似た微かな目眩がする。

そして、その目眩を感じたのとほぼ同時に。

今にも襲い掛かろうとしていた怪物達は、まるで何かに怯える様に震えながら静止した。

——汝、扉を開くものよ……

額を押さえようとした手には、いつの間にか、見た事も無いカードが一枚、握られている。

ひっくり返して見ても、そのカードには何の絵柄も無い。

“今は、まだ”。

——己が双眸を見開きて……

手の内のカードは、自己の存在を主張する様に、青い光を放っている様に見えた。

それに呼応する様に、自らの内から沸き出る、力強く荒々しい何かを感じる。

自然と口元に笑みが浮かぶ。

自らを鼓舞し相手を威嚇する様な笑みに、怪物達が動揺しているのを感じた。

——汝、今こそ発せよ……!!

どうすれば良いのかは、分かった。

そう、扉を開けるだけだ。

その先にあるものは、ずっと昔から己と共にあり、紛れもなく「己であるものなのだから。」

恐れる必要は無い。

躊躇う必要も、無い。

だから——

「…へ」

光が一際強くなる。

「ル…」

ビリビリと震え上がる心を律しながら、それでもより強く震える様に。

「…ソ…」

手を一度大きく広げる。

そう、掴み取る為に。

「ナ……ッ!!」

猛々しい光を放つカードを握って砕くと同時に、それは雄々しく吼える様に現れた。





突然目の前に現れた巨大な異形に、俺は目を奪われた。

鈍く銀に光る仮面の奥から覗く黄金の瞳は猛々しく、まるで応援団とかの団長が着込みそうな黒色の外套、手には刃の部分よりも持ち手の方が長い風変わりな剣。

見上げる程に巨大なその異形は、出現するなり襲い掛かろうとしていた化け物達を纏めて薙ぎ払った。

「これ……は……」

一体、何だ？

問い掛けようにも、鳴上は俺に背を向けたままだ。

その表情は分からない。

「イザナギツ!!」

吼える様な鳴上の声に反応したのか、異形は先の一撃で倒し損ねた化け物を斬り捨て、或いは蹴り飛ばし、瞬く間に殲滅してしまった。

最後の一体を斬り刻むや否や異形は姿を消し、後にはあまりの出来事に茫然とする俺と、相変わらず表情が分からない鳴上が残される。

「鳴上……」

そう声を掛けると、ふうと微かに溜め息を吐いてから鳴上は振り返った。

振り返ったそこにあったのは、ここ二・三日で見慣れてきた、あまり感情を映さない何時もの鳴上の顔で。

先程まで化け物達と対峙していたとは到底思えない程、静かに俺を見詰め返している。

「……アイツらは今のところまた出てくる気配は無いし、取り敢えずは安全になったと思う。」

また何時襲われるかは分からないけれど、一旦は最初に居たスタジ

才みたいな場所に戻った方が良い。

里中さんをこのままにはしておけないから」

訊きたい事はそれではないが、鳴上の言う事はご尤もな意見だ。

反論する必要も無いので、俺は鳴上と並んで歩き始めた。

「なあ、さっきのあれって……」

「……説明は出来ない」

歩きながら尋ねると、鳴上は首を横に振って答える。

「お前……『ペルソナ』って言ってたじゃん？」

それって、あれの事？」

「……多分、そう。」

さっき出てきたのは、『イザナギ』」

「何をどうやった訳？」

てかあれって、俺にも出来たりする？」

俺の言葉に鳴上は考えこむ様に少し押し黙った後、「分からない」と首を横に振りながら答えた。

「自分でも、何故出来たのかとか分からないから、何とも言えない。

ただ、……あの時はそうするべきだって……、頭で考えてたんじやなくって……。」

上手く説明出来ないけど、身体が自然と動いたと言うか、半分無意識でやっていた様なものだったし……」

それ以上は語らず、鳴上は口を閉ざした。

そのままこれと言った会話もなくスタジオまで辿り着き、気絶したままだった里中の肩を揺する。

名前を呼びながら何度か揺すっていると、微かな呻き声を上げて里中は薄目を開けた。

「うっ………んは……。」

最初の場所……？」

……あれ……さっきの化け物は？」

「鳴上が、倒してくれたんだ」

そう返してやると、里中は驚いた様に目を開ける。

「鳴上さんが？」

「まあ、そんな所。」

気分はどう？ 怪我は無い？」

鳴上が頷き、そして里中に具合を訊ねる。

「なんかシンドイけど……怪我とかは無いよ」

本調子ではなさそうな里中に、鳴上と二人で何があつたのかを説明していると、突然霧の向こうから気の抜ける声が響いた。

「おおよ、キミ達無事だったクマか？」

シャドウ達はどうしたクマ？」

やって来たのは、あのヘンテコな……クマだか何だかと名乗つていた着ぐるみだ。

「《シャドウ》……あの、変な化け物達の事？」

「そうクマ！ 君たちよく無事だったクマねー！」

「まさかとは思うが、お前があの化け物達をけしかけたんじやねーだろうな？」

あまりにも軽い調子で言ってきたやがるし、それにこいつが逃げ出してからあの化け物達が襲ってきたのだ。

この着ぐるみはそんな悪辣な事をしそうには見えないが、あの化け物達に襲われて危うく死にかけてた身としては信用ならない。

「キーツ、バカな事言わないで欲しいクマー!!」

最近こつちに人が放り込まれてるからシャドウが暴れる様になつてこつちも迷惑してるクマー!!」

そう叫んでクマがその場で足踏みをするなり、その場に積み重なつたテレビが三台何処からともなく出現した。

戦後間もない頃を題材にしたドラマ位でしかお目にかかれそうにもない、レトロ感溢れるテレビだ。

「さー行つて行つてー！」

クマは忙しいクマだクマー!!」

有無を言わさずにクマに押され、俺達は再びテレビの中へと押し込まれた。

……

……

……

……



何かを潜り抜けるかの様な妙な感覚の後、視界が一気に明るくなつた。

そして耳に届いたのは、聞き馴染んだジュネスのテーマ曲。

「ここは……戻ってきた？」

鳴上はキョロキョロと辺りを見回している。

「私達、帰ってこれた？」

「生きてて良かったー!!」

どう見てもジュネスの家電売り場だ。

良かった、帰ってこれた!!

喜ぶ俺と里中とは対称的に、鳴上は何かを考え込む様に黙りこんでいる。

「おい、どーしたよ鳴上」

「あ、いや……」

……花村、このポスター。

これ……あの世界の変な部屋にあった物と同じに見えないか……?」

そう言つて鳴上は壁に貼られていたポスターを指した。

最近大ブレイクしている演歌歌手、柊みすずのポスターだ。

「言われてみりやそうかも……」

「あそこにあつたポスターは、顔の所がズタズタに斬られてたけど……」

でも、多分これと同じものだったと思う」

「柊みすず……確か死んだ山野アナの不倫相手の奥さんだった人なんじゃ……」

鳴上の言葉に、意外とゴシップにも詳しい里中が反応した。

「あの着ぐるみは……」人が放り込まれて”と。そう言っていた。
……まさかあの部屋は……被害者の人と何か関係が？」

そう一人言の様に呟いて鳴上は黙る。

「ちよ、止めよーぜ。」

そういうのメンタル的に俺には無理！」

「うっ……てか何か体がダルいし……。」

今日はもう帰ろ？」

里中はブルツと体を震わせた。

「そう言われれば……俺も何か妙に疲れが……。」

そうだな、今日はこれで解散にしよーぜ」

あの化け物どもから全力で逃げていた所為か、妙に身体がダルい。
ベッドに倒れれば、そのまま直ぐに爆睡してしまっそうである。

「あんな場所であんな目に遭ったんだし、疲れてるのは当然だと思う。
私は買い物してから帰るけど、花村も里中さんも、早目に帰って
ちやんとご飯食べて、ゆっくり寝た方が良い」

鳴上も頷いたので、二人とはその場で別れて、直ぐ様帰宅した。



まあ、あんな事件があつたばつかで、署の方でもピリピリしてんだ。
……何事も無きや良いんだけどな……」

最後の方はボソツと呟く様な声だった。

後々になって思い返してみれば、叔父さんは既にこの時点で何か嫌な予感……刑事のカンとでも言うべき何かを感じていたのだろう。

この時に、叔父さんからもっと詳しく話を聞いていれば……何かは変わったのだろうか……。

だがこの段階で、小西先輩の失踪と、今日迷いこんだばかりのテレビの向こうの世界とを結び付ける事は、自分には終ぞ出来なかつたのだった。



今日起きた、実体験なのに全くもって信じられない出来事は、忘れるようにとした所で忘れられるモノでもない。

まず、テレビに入り込んだ、という段階からして、生まれてこのかた十数年で培ってきた常識とか或いは知識にある物理法則だかを完全に無視している。

しかも、その中には変な場所があつて、変な着ぐるみもいて、更には《シャドウ》だか何だかは知らないが化け物まで住んでいるという始末だ。

まあ、あんな化け物が現れたという話はトンと聞いた覚えは無いから、《シャドウ》とやらはこちら側には居ないのだろうけど。

どうであれ、そんなものはゲームとか小説とかアニメとか、創作の中の世界だけで十分である。

そりゃあ、憧れというかそういう空想をした事が全く無いとまでは言わない。

そういうのに興味があるからこそ、ゲームとか小説とかが大好きなのだから。

だがそれはあくまでも創作物の中に留まっているからこそ楽しいものなのである。

それが実際の生活に関わってくるとなると、完全にノーサンキュー、だ。

命懸けの戦いなんて、好奇心だけでやらかす様なものでも無い。

まあ、もうテレビに入り込まなければ、あの着ぐるみにしろ化け物達にしろ、これ以上関わる事は無いのだろうけれど。

この時はそう自分を納得させ、早目に寝る事にした。

しかし、この時には既に。

これから一年、仲間達と共にその【真実】を追い求める事になる、幾重にも霧と謎に包まれた事件は。

多くの人がそうとは気付かないままに、その大きな渦の中に全てを引きずり込んでいた。

——そう、これは……——

——かけがえのない仲間達との——

——【真実】を追い求めた、たった一年間の——

——絶対に忘れられない思い出の物語だ——



『自称特別捜査隊』

【2011／04／15】



【2011／04／15】

朝から嫌な予感はしていたのだ。

早朝から慌ただしく出掛けて行った叔父さんや。

朝から住宅地に鳴り響く、パトカーのサイレン。

連絡が取れなくなったと言う、行方不明になった小西先輩の事。

それらの予感は、朝の緊急朝礼で現実となってやってきた。

……小西先輩は、先日の山野アナと同じ様な状況で遺体として、今朝発見された、らしい。

誰が、とか。

何で、とか。

思わない訳では無いけれど。

それ以上に胸を占めていたのは。

……見知った人物が急に居なくなってしまうのだという、……もう二度と会えないのだという、哀しみに似た感情だった。

小西先輩とは、本当にたった一度しか会った事がないし、それにその時もほんの少しだけ話しただけ。

それでも、顔を知っている人が……突然に居なくなるというのは、苦しくなるものがある。

ふと前を向くと、黙って俯いたまま歩いている花村の後ろ姿が目に入った。

体育館を出てから、花村は一言も喋らない。

ずっと俯いているから、どんな顔をしているのかも、自分には分からない。

少なくともショックを受けているのは、確かだろう。

だが、その胸中にあるのが、犯人への怒りなのか、想い慕っていた人を喪った事への哀しみなのか、将又何も考えられずに茫然としているのか、……或いはその全てであるのか。

……それは花村では無いが故に、自分には分かり様の無い事だ。

ツーカーで気持ちを汲み取れる程、花村との付き合いがある訳では無いのだから。

……でも多分。

涙を溢している訳じゃないのだろうとは、分かった。

「なあ、お前ら……昨日の《マヨナカテレビ》は見たか……？」

急に顔を上げたかと思うと、花村は唐突にそう尋ねてくる。

人が一人……しかもそれなり以上に親しい相手が殺されたというのに、出てくる話題が《マヨナカテレビ》だなんて、そうあまり褒められた態度ではない。

聞く人が聞けば、露骨に眉を顰めるかもしれない。

現に、横に居た里中さんは咎める様に花村を見ている。

でも。花村のその表情は、本当に真剣なモノだった。

だからきつと。

その《マヨナカテレビ》の話は、花村にとってとても大切なものである事は確かなのだろう。

だから、その発言を注意するでもなく、見ていないのだと素直に事実を答えた。

すると、花村は「そうか……」と呟いた後、ポツポツと……感情をどうにか抑えている様な声音で続ける。

「昨日さ、何か気になって、見たんだ……《マヨナカテレビ》。

映っていたのは……間違いない、小西先輩だった。

先輩……何か凄く苦しそうに跪いてて……それで画面から消えち

まった」

辛そうに花村は目を瞑った。

そして、一気に吐き出す様子を話す。

「……覚えてるか？」

山野アナが遺体で見付かった日、《マヨナカテレビ》に山野アナが映ってたって言ってた奴いたよな」

そうだったのだろうか？

自分は聞いた覚えは無かったが、どうやら里中さんには心当たりがあつたらしい。

「そう言えば……、そんな事言ってたヤツいたかも」

「先輩……山野アナと似たような状態で発見されたって。

なあ、これって偶然に思えるか？」

既に花村の中では、ある「答え」が出ていたのだろう。

それでも、その「答え」への同意を求めて、こちらにそう問い掛けている。

「……花村は、『マヨナカテレビ』と二人の死に何らかの関係がある』と、そう言いたいのか？」

原因も理由も分からないまま親しい人を喪つたのだ。

何でもいいから、その理由を、その原因を、知りたいと思うのは当然と言えば当然の事ではある。

そして今。

花村の目の前には《マヨナカテレビ》という不可解な現象があり、そこには被害者の二人が映っていたという。

……ならばそこに何らかの関連性を見出だしたくなる気持ちは、理解出来なくはない。

だがしかし。

それは些か性急な考えなのではないだろうか。

《マヨナカテレビ》と二人の死に関連性がないと言い切れないが、逆に言うとその関連性を正しく証明する事は現状ではこの場の誰にも出来ないのだ。

現時点で判明している事は、二人の遺体の発見状況に類似性が見ら

れる事、そして二人は《マヨナカテレビ》に映った事があるという事
だけだ（しかもあくまでも伝聞情報で）。

それだけでは、そこに何らかの因果関係があると証明する事は出来
ない。

「分かんねーけど、……でも。」

クマの奴、『人があの世界に放り込まれて』って言ってたよな。

俺にはそれが……無関係には思えねえ！

小西先輩や山野アナは、誰かに無理矢理に……あの世界に連れてい
かれたんじゃないのか？」

「……花村、何が言いたい？」

薄々花村の要求を察しながらも、敢えてそう訊ねた。

そして、花村は勢い良く頭を下げてこちらに頼み込んでくる。

「頼む、鳴上!!」

俺を、あの世界に連れていってくれ!

どうしても確かめたいんだ!

昨日お前と別れてから、実はもう一度テレビに入れるか試してみた
んだけど、俺じゃ無理だった。

お前とじゃなきや、あそこに行けない!」

テレビの世界。

それもまた、花村の前に存在する不可解な現象そのものだ。

未知であるが故に、そこにはあらゆる可能性を見出させる。

……見出せてしまう。

だが、しかし。

そもその話、あの世界と、花村が主張する《マヨナカテレビ》と
の関連性が全く不明だ。

《マヨナカテレビ》|| テレビの世界、だなんてそんな法則は今の所成
立してない。

そんなに《マヨナカテレビ》の事が気になるなら、噂の出所を探る
なり、どれだけの人が見てるのか調べたり、幾らでもあの世界に行か
ずともやれる事はある。

それに……。

「……行って、どうする？」

あそこは危険だって、花村も分かってるだろう？

昨日は運良く帰ってこれたけど、今日行って無事に済む保証は、無い。
い。

向こうに行った処で、小西先輩が生き返ったりする訳じゃない。

……それに、花村が求めている《理由》がそこにあるとは限らない」
果たして花村が求めている《理由》とは、命を賭けてまで探す必要はあるのだろうか。

こればかりは花村当人の心の問題であり、他人が口を挟む余地は無いのだろうけれど。

「分かってる。……分かってる、けど。」

……全部俺の勘違いで、テレビの世界とか《マヨナカテレビ》とかは無関係だってなら、それでもいいんだ。

ただ、……先輩が何で死ななきゃなんなかったか、知りたいんだ。

気の所為かもしれないけど、可能性が僅かにでもそこにあるなら、気付かなかったフリは出来ねえ。

頼む。お願いだ、鳴上」

花村は再度頭を下げて頼み込んでくる。

……花村に付き合っ、あちらの世界に行く様な義理は無い。

個人的には、もうあれに関わるのは遠慮したい。

危ないと分かかって明確な理由が特には無いのにそれでも行くのは、勇気でも何でもなく、ただの無謀なだけの考え無しだ。

だが……。

ここで自分が首を横に振ったところで、花村は形振り構わずあの世界に行こうとするのだろう。

そう確信させてしまう位には、花村は真剣だった。

それである世界に行けるのかは分からないが。

万が一行けたとしても《シャドウ》に殺されたりするかもしれないし、或いは犯人の目に留まって殺されてもしたら、それこそ目も当てられない。

そうなるとは決まってるないが、その可能性はある。

……顔も名前も知っている人間が、もしかしたら防げていたかもしれない事で死ぬのは、絶対に嫌だ。

自分の所為じゃないとしても、そんなの寝覚めが悪くなるし、ご飯が不味くなる。

だから。

「帰ってこれる保証は、無い。」

あの《シャドウ》という化け物達もきつと大量にいる。命を賭ける必要があるかもしれない。

……花村に、その覚悟はあるのか？

それでも、行きたいと、知りたいと望んでいるのか？」

花村は、しっかりと頷いた。

……本当の所は、花村に命を賭ける覚悟が出来てるだなんて、思っ
てはいないが。

それでも尋ねたのは、一応の意志確認に過ぎない。

「……分かった。」

じゃあ、今日の放課後、ジュネスの家電売り場に来て」

同じ所から入れば、あの着ぐるみに会える確率は僅かにでも上がる
だろう。

本当は、ジュネスだなんて誰が見てるのかも分からない場所からは
行きたくは無いが……。

少しでも帰還の可能性を上げる為の策だ。

それこそ形振り構ってはいられない。

一緒に向こうに行けば、少なくとも花村が《シャドウ》に惨殺され
る、という可能性は幾分か減る。

まあそれも『イザナギ』の力が及ぶ範囲であれば、の話にはなるが
……。



放課後、バカを放って置けないとついて来た里中さんと共に直ぐ様
ジュネスに直行すると、家電売り場には既に花村が待機していた。
手には……武器のつもりなのだろうゴルフクラブが握られている。
というか、そのゴルフクラブ……花村のお父さんの物だとすれば、
壊した時の弁償が怖いので置いていって欲しいのだが……。

「里中！ お前も来たのか!!」

「何言ってるの！ バカを止めに来ただけ!!」

昨日あんな目に遭って、それでも行くって、本っつ当にバカ!!
死んだらどうすんの!!」

里中さんは花村を思って必死に止めるが、花村はそれには首を横に
振った。

「……分かってる。

でも、このまま放っておくなんて、出来ないんだよ。

それに……何の考えも無い訳じゃねーよ。

またあのクマ野郎に会えたら、出口を出してもらえろ」

そう言っただけで花村はゴルフクラブをこちらに渡そうとしてきたので、
それを丁重に断って、取敢えずその場にいた里中さんに渡す。

「怪しいヤツに見えるかもしれないけど、留守番頼む」

……花村は里中さんは連れて行くつもりは無い様だ。

まあ当然だ。

ここで里中さんも連れて行くなんて宣ったら、全力で張っ倒してい
た所である。

「……じゃあ、行こうか」

花村へと手を差し出して、今度は自分の意思でテレビの中へと足を
踏み出した。



.....

.....
.....
.....

思った通り、あのテレビは昨日と同じスタジオに繋がっていた様だ。

しかし、昨日出口となったテレビは何処かに片付けられてしまった様で、影も形も見当たらない。

「ちよつ、キミたち何でまた来たクマか!？」

スタジオに立っていたあの着ぐるみが、こちらを見て驚いた様に目を瞬かせた。

そして、何かを思い付いたかの様に、唐突に声を張り上げる。

「わーかったつ！ 犯人はキミたちクマね!!」

「は？ 今、何つった？ 俺達が犯人？」

突然過ぎる言葉に、花村と二人で目を瞬かせた。

着ぐるみはこちらの様子には頓着せずに、益々ヒートアップしながら捲し立てる。

「最近誰かがここに人を放り込んだクマ。

そのせいでこつちがどんどんおかしくなってきたクマ！

キミたちは誰かに無理矢理放り込まれたんじゃないやなくて、キミたちの意思でここに来たクマね？

キミたちにはここに来る力がある。

よつてキミたちが一番怪しいクマ！

キミたちこそ人を放り込んでる犯人に違いないクマアツ!!」

無茶苦茶なこじつけだが、着ぐるみは怒った様にこちらを見ていた。

その誤解を解こうにも……こちらが犯人ではないという確たる証拠は提示出来そうには無い。困ったな……。

この着ぐるみ……（えつと、クマだっただろうか）は、出口となるテレビを出せるのだ。

友好的な関係を築いておかないと、非常に不味い事になる。

「んな訳ねーだろっ!!」

俺は真実を確かめに来たんだよ!

んじやなきやこんな危ねー場所にわざわざ来るかよ!!」

「誰かが人を放り込んでいる、というのは本当?」

もしそうならその話、詳しく聞かせて貰えないか?」

こちらの返しに、クマは困った様に視線を泳がせながら叫んだ。

「だーかーらー! キミたちが犯人なんでしようがっ!」

正直に白状するクマよ!」

「なんだとっ!」

テメーこそ、先輩達を無理矢理こっちに引き摺り込んでたんじやねえのか?

怪しい着ぐるみ着込んでんじやねえっ!

とつとと正体見せやがれっ!」

いい加減クマのこちらの言い分を聞こうともしない態度に腹が立ったのか、花村は抵抗するクマを押さえ込み、中身を拝んでやろうと、その首元のチャックを無理矢理開けて頭を取り外す。

しかしそこにある筈の中身はなく、ただがらんだような着ぐるみの胴体部分がワタワタと暴れているという、ホラー映画のワンシーンの様な光景が広がっていた。

「中身が……無い……?」

花村が衝撃のあまり取り落とししたクマの頭を静かに拾い上げ、しげしげとそれを観察する。

特にこれといった仕掛けとかは見当たらない。

本当にただの着ぐるみの頭部に見えた。

更にはワタワタと狼狽えているクマの胴体部分も観察する。

やはりこちらにも仕掛けなどに相当する様な機構は見当たらない。

完全に中身はがらんだ。うだ。

「何かの仕掛けはなさそうだし、本当に空っぽなんだな……」。

アルフォンスの親戚の様なものか……」

個人的なバイブル『鋼の錬金術師』の主人公の弟を思い出しながら、

クマに頭を返してやる。

あのマンガで、アルフォンスの中身を見た人達もこんな気持ちになっただろうか……。

花村はその言葉に首を傾げた。

「は？ アルフォンス？ 何じゃそら？」

「えっ、『鋼の錬金術師』ってマンガのキャラクター。」

ちよつと前に大流行してたと思うんだが……。」

連載中に、二作分もアニメ化を果たされた超大作だ。

昨年、見事に完結し、社会現象にこそはならなかったものの、そこそこ以上には話題となっていた漫画である。

花村は知らなかったのだろうか？

まあ今の本題はそこではないのだけれど。

「うう……ありがとうクマ。」

……あのね、キミの事、犯人じゃないって信じてても良いクマよ。

でもその代わり、本物の犯人を捕まえて、こんな事止めさせて欲しいクマ」

「本物の、犯人……」

いきなり無茶な要求だ。

まず捕まえるも何も、警察でもないのだから犯人を見付けた所でそれを逮捕する権限は自分たちには無い。

運良く人をテレビに放り込んだ犯人に行き着いたとして、ではその先は？

警察に通報するしか無いが、そこでどう説明しろと？

『人をテレビに放り込んで』？

……そんな事言ったら、正気を疑われるのがオチだ。

精神科に紹介状を書かれるのが関の山である。

「そうクマ。」

クマは……クマはただここで静かに暮らしたいだけなんだクマ。

……約束してくれないなら」

「くれないなら？」

クマに言葉の続きを促す。

すると、クマはトンでも無い事を宣った。

「ここから出してあげないクマ」

……! どう考えても、クマの発言は脅迫だ。

昨日はすんなりと帰してくれたから、油断していた。

完全に、こちらの判断ミスだ。

「はあっ?」

てめえ、それじゃあ選択の余地がねえじゃねーか!

「……分かった、協力する」

花村が噛み付く様にクマに返したその直後。

クマの出した条件にはつきりと領いた。

出口を取引の材料に持ち掛けられたら、切れる交渉カードが殆ど存在しないこちらとしては領くしかない。

ここでヘタにクマの機嫌を損ねて、『ずっと出してあげない』なんて事にでもなったら、それこそ大惨事である。

「本当かクマ?」

「約束する。だけど……私だけで、犯人を追う。

それでも、良いか?」

そう訊ねると、クマは気にした風も無く領いた。

「別にクマは良いクマよ。

ここが平和になったらそれで良いクマ。

追う人が一人だろうと二人だろうと、ちゃんと犯人さえ捕まえてくれさえすれば問題ないクマ」

「そうか、分かった」

ここに来る事になった原因や過程はどうであれ、最終的にここに来る事を決めたのは自分だし、花村を連れて来たのも自分だ。

その判断の過ちの責任は、自分で負わなくてはならないだろう。

ここで花村の責任にするのは筋違いだ。

「ちよっ、鳴上! 何勝手に約束してんだ!?

っーか一人でって、無茶にも程があんだろ!」

「……危険を冒すのは、私だけで良い。

……花村を、巻き込む訳にはいかない」

この世界を調査するにしても、《シャドウ》達に対抗する手段が無い花村よりも、『ペルソナ』の力を使える自分の方がまだ安全だ。

花村まで、むぎむぎと危険に曝す訳にはいかないのである。

それは人間として、最低限負うべき責任だ。

「お前なあっ！」

そう言われて『はい、そうですか』なんて言える訳ねーだろ!?

大体こっちに連れてこさせたのは俺だよ。

いいか、クマ!

俺も犯人探し手伝ってやる! 分かったかつ!」

しかし花村はこちらの選択には納得いかなかった様で、そうクマに宣言した。

「花村……」

「協力してやつからにはお前の方も力を貸せよな、クマ吉」

「分かったクマ。恩に着るクマよ」

クマは喜びを全身で表現するかの様に頷いた。

クマからすれば、やはり人手は多い方が嬉しいのだろう。

クマは早速花村にも霧を見通せるあの眼鏡を渡した。

花村は、劇的 *before・after* な視界に驚きを隠せない様子だ。

「人が放り込まれているときつき言っていたけど、放り込まれたその人達はどうなったのか分かる?」

「うーん、霧が晴れたら気配が消えちゃったクマ。」

多分シャドウに襲われたクマね」

気配が消えちゃった。……それは死んだって事なんじゃないだろうか。

……《シャドウ》、か。

あんなのに襲われたら、普通はひとたまりも無いだろう。

「《シャドウ》……あの化け物達か。」

クマ、君は放り込まれた人を出してあげようとは思わなかったのか?」

「近寄ったら化け物だって怯えられて逃げられたクマ。」

それに、あの人達が放り込まれてすぐに霧が晴れたから助けに行く暇なんか無かったクマよ」

ふと、やたらクマが『霧』を気にしている事に気が付いた。花村もそれに気が付いたらしく、クマに訊ねる。

「さつきも『霧』とか言ってたけど、なんか関係あんのか？」

「この霧は時々晴れるクマ。」

霧が晴れたらシャドウが酷く暴れるクマよ。

クマ、霧が晴れてる間はシャドウに襲われない様に隠れているクマ」

『霧』。……そう言えば、最初の被害者の時も先輩の時も、遺体が発見される前は霧が出ていたな」

自分たちの世界の霧と、こちらの世界の霧。

ただの偶然の一致かもしれないけれど、妙に気にかかった。

それに……、こちらに放り込まれて《シャドウ》に殺された人達の遺体はどうなったのだろうか？

まだこちらに残されているのなら、……出来れば連れて帰ってあげたい。

ご家族の人にとっても、何も帰ってこないよりは、例え遺体であったとしても帰ってくる方が、まだ救いがあるだろう。

まあ、遺体の損壊状況によつては、そんな甘つちよろいこと言つてる余裕なんて無くなってしまふかもしれないが……。

「そつちで霧が出ている時は、こつちの霧が晴れた時クマね」

クマにそう説明され、思わず首を傾げた。

何でそういつた関係が生まれているのだろうか？

この世界と向こうで、何かしらの関連がある、という事なのだろうか？

こつちで『霧』が晴ればあちらに霧がかかる。

あつちに霧が出ていない時は、こちらに『霧』がかかっている。

あちらで霧が出るのなんて、長い間降り続いた雨が止んだ時位なのだから、そう滅多にある事ではない。

そしてそのタイミングでこちらの『霧』が晴れて、シャドウ達が暴

れだす……。

……これではまるで、こちらの『霧』が一瞬あつちの世界に流れ出ているかの様ではないか。

「そういうクマ吉は放り込まれた人達の顔見たんだよな。

もしかしてその人達の中にこの人が居なかつたか？」

花村は携帯のアルバムから、バイト仲間と撮ったと思わしき写真をクマに見せ、小西先輩を指差す。

途端にクマは声を上げた。

「この子居たクマ！」

「マジか……やっぱり先輩はこの世界に……。そんであの化け物達に殺されて……。」

チクシヨウ！ 誰がそんな事を……！」

……？

クマの言葉が正しければ、小西先輩はこちらで《シャドウ》に襲われてお亡くなりになったのでは？

それで、何でまたあつちの世界で……アンテナに吊るされたなんて状況で遺体が見付かるのだろう。

……どうであるにせよ、一度小西先輩が居た場所を見てみるしかないだろう。

「クマ、出来れば小西先輩を見掛けた場所まで私達を連れていってくれないか？」

何か手掛かりがあるかもしれない」

「分かつたクマ！」

クマに先導され、小西先輩が居た場所へと向かつた。



《シャドウ》、『霧』……そして『ペルソナ』。

何がなんだか分からない世界だが、はつきりと分かつた事がある。

小西先輩と……恐らくは最初の被害者である山野アナも含めた二人が命を落とした原因はこの世界にあるのだと。

この世界と自分達の世界は繋がっている。

テレビ画面を介する以外にも、恐らくは『霧』を通して。

まだ仮説の段階に過ぎないが、『霧』は本来この世界に存在するもので、時折何かの弾みに自分達の世界に漏れ出て来るのではないだろうか。

そしてその時に彼方と此方は繋がる。

そうとでも考えないと、この世界で霧が晴れた時に凶暴化した《シャドウ》に襲われて亡くなったと思われる二人の遺体が自分達の世界で見付かる訳がないのだ。

あつちの世界で霧が出ている時間自体はそれ程長くはない。

その僅かな間に態々この世界に入り込んで遺体を持ち出し電柱やらアンテナに引っ掛けたとは考え難い。

つまりは、二人の遺体があのような状態で発見された事自体は偶然の産物だったのではないだろうか。

偶々彼方と繋がった際に、遺体が出てきた場所がそこだったというだけで。

その場合二人をテレビに放り込んだ〔犯人〕に関して考えるべきは、アンテナや電柱に被害者の遺体を吊るす動機や方法等ではなく、そもそも何故『テレビ』の中に放り込んだのかである。

クマに道案内されながら、様々な事を訊ねた。

元々この世界の住人であっただけあって、クマはこちらよりは此方の事に詳しいが、そのじつ曖昧な認識である事もかなり多い。

まあ、そこに関しては仕方ない事だ。

こつちだって自分達の世界の全てを知っている訳ではないのだから。

『それはそうなのだから』としか説明出来ない物事の方が多いのはお互い様である。

クマは昔から此方に住んでいたらしい。

まあ、それがどれ程昔からなのかは分からないが。

人が此方に入ってきたのは実に最近の事らしく、昨日の件を除けば此方にやって来たのは小西先輩とあと一人（恐らくは山野アナ）だけらしい。

人が入り込むと此方はクマ曰く、「おかしくなる」のだそうだ。

具体的には、変な場所（昨日訪れたあの部屋の事だろう）が増えたり、《シャドウ》が騒がしくなるらしい。

それ故、誰かが来てしまったなら絶対に分かる、との事だ。

【犯人】は、テレビに入り込む力を持ち、山野アナ・小西先輩の両名と接触する機会があつた者……。

……ダメだ、これでは全く絞り込める気がしない。

一先ず【犯人】の事は置いておいて、調査に専念するしかあるまい。

……小西先輩と山野アナの命を奪つたと思われる《シャドウ》とは、結局の所何なのだろう。

《シャドウ》と言うからには何かの影なのだろうか？

そして『ペルソナ』という力とはどんな関係があるのだろうか？

どちらもユング心理学の用語ではあるけれど……。

考え込む内に、辺りの景色が明らかに変わってきた。

舗装された道でもなく然りとて地面でもなかった道が、アスファルトに舗装された道に変わり、建造物が建ち並んでいる。

稲羽中央通り商店街に似ているのは恐らくは気の所為ではない。

確か、小西先輩の実家はこの商店街の酒屋だった筈。

それを踏まえると、ここが先輩と何らかの関係がある場所である可能性は高い。

クマ曰く、ここは先輩が入り込んでから現れた場所らしいので間違いはないだろう。

しかし、新しくこの世界に現れる「場所」とは一体どういう事なのか。

単純に考えれば、この世界に入り込んだ人に反応して出来ているのだろうけれど、一概にそうとは言えないだろう。

その理論でいくならば昨日自分達がここに迷い込んでしまった時にもそういつた場所ができている筈なのだが、クマに確認を取った所

その様な変化はクマが把握している限りでは無かった様だ。

正直その気は無かったとはいえ、やってしまった事だけを客観的に評価すれば、自分が花村と里中さんにやった事は「犯人」が仕出かした事とそう変わらない。

ならば入れられたからどうこうという訳ではないのでは無いだろうか……。

そういつた場所を生み出すのには、何かしらの法則や条件があるのかも知れない。

まあ、考えた所で不確定な部分が多過ぎて、まだ何とも言えないのだけれども。

小西先輩が死んだと思われる場所。

それは、小西先輩の実家である小西酒店であった。

知らない店だが、花村がそう言うので間違いはないだろう。

店に近付くと耳障りな話し声が聴こえてきた。

どれもこれも不愉快な内容だ。

無責任に、身勝手な好奇心のままに、人の陰に隠れてこそこそ噂しているかの様な、そんな内容。

関係無い第三者の自分ですら、ただ聴いているだけで不快になるのだ。

それらの矛先であったと思わしき小西先輩には耐え難いものだっただろう。

近くに人影や音響装置などはないのに、声はまるで耳元で話されているかの様に聴こえてくる。

例えるなら、声だけが何時までもそこに残留しているかの様だ。

花村は唇を噛み締めてそれらの声を聴いていた。

声の暴言の中には、ジュネスに関係する事も多く含まれている。

ただでさえ親しい……親しかった人への暴言なのに、それ以上にジュネスの事まで持ち出されては、花村の心中は如何ばかりか……。

花村はギュツと拳を握り締めた。

あんな力で握り締めたら、間違いなく爪が皮膚に食い込んでいる。
……不味い、な。

大分頭に血がのぼっている様だ。

先輩の死を知ってからここに来る迄も花村は相当に冷静な判断力を失った状態だったが、それよりも尚悪い。

慕っていた相手が誹謗中傷されているのだ。

憤るのもそう無理はないのだけど、冷静さを欠くのは不味いだらう。

このままだと後先考えずに店内に特攻を仕掛けそうだ。

この辺りで花村だけでも元の世界へと帰しておいた方が良くないだろうか。

しかし止めるよりも先に花村は店内に行ってしまう。

花村を一人にする訳にもいかず、クマと共に直ぐ様後を追った。

店内は見た感じで酒屋だとは分かるのだが、どうにも現実的には有り得ない装飾などが目につく。

店内には先輩の父親と思わしき男性の、先輩への罵声と怒声が響き渡っていた。

内容から察するに、ジュネスが進出してきた煽りを受けて店の経営状況はかなり思わしくはなかった様だ。

それもあつて、ジュネスでバイトしていた先輩に対しては中々に複雑な感情を抱いていたのだろう。

「な、さっきから何なんだよ！

何で先輩の親父さんの声が聴えるんだよ!?!」

花村が耐えきれないとばかりに叫んだ。

流石にこんな事態の連続に、憤りが鎮まる以前に、心が負荷に耐えきれなくなってきたのだろう。

そんな花村にクマは、何の感慨も無く唯々事実を答えるかの様に言った。

「ここに居る人にとってはここは現実クマ。

きつとその子の心に押し込められてたモノがまだ残っていたクマね」

「こんなのが先輩の『現実』だったってのか!?

そんな、そんなのって……」

俯いて唇をきつく噛んで身を震わせる花村にかける言葉が見付からず、取り敢えず状況を整理する。

この声や恐らくはさつきの声も、実際に先輩が日常的に言われてきた言葉だったのだろう。

そして、先輩はそれらの言葉を己の心に押し込めていた、のかもしれない。

そして押し込められていた心が反映されている、という事なのだろうか。

……つまり、ここでは人の心が反映されている？

実に荒唐無稽な考えだが、この世界自体が既に『有り得ない』の連続だ。

「有り得ないなんて事は、有り得ない」

と、あるマンガのセリフが浮かんでくる。

まあ、どうであるにせよ考慮しておくに越した事はない可能性だ。

先輩の父親の罵声が消えて程なくして、今度は先輩の声が聴こえてきた。

さつきのクマの言葉を借りるなら、これもまた先輩が心に押し込めていたモノの残骸なのだろうか。

先輩の声は、花村や……自分の実家そして己を取り巻いていた全てに対し『ウザい』と断じていた。

花村とどういった関係を築いていたのかはよく分からないから何とも言えないのだけれども、まあ周囲の環境に関して言えば、日常的に謂われもない中傷を受けていたのなら、それらを嫌に感じてしまうのも分からなくも無い。

大体、人の気持ちなんて、1か0で表せる様なモノでもないのだ。

「好き」と「嫌い」は両立出来る様に、ウザいと思っけていてもそれだけが全てなのかと問われると、少なくとも先日の花村への小西先輩の態度を見る限りでは、そういう訳ではなかった様に思われる。

心に押し込められてきたもの、という事はただ単純に表には出して

こなかったもの、という意味合いしか無いのだから。

「違っ……先輩はっ、そんな人じゃないだろう！」

しかしそれはあくまでも大した接点の無い他人からの意見であつて、親しかった花村としては自分を見失つてしまう程にショックなモノだった様だ。

……まあ、それも当然か。

慕つてる相手には、自分の事を好いていて欲しいと思うのは、当たり前と言われれば当たり前前の心理である。

だが……。

花村が先輩の声を否定したその直後、確かに場の空気が変わったのを肌で感じた。

何が起きようとしているのかは分からないけれど、危険が迫って来ている様な感じがする。

ここは一先ず撤収した方が良い。

花村が取り乱している中でまた昨日の様に《シャドウ》に襲われるのは堪ったもんじやないからだ。

「花村、しっかり立って。」

何か様子がおかしい。一旦退こう」

そう声を掛けた時、店の暗がりから微かにノイズがかかった嘲笑う声が聴こえてきた。

しかし、この声は……。

『哀しいなあ……可哀想だよなあ……』

でも、気付いてんだろ？

何もかもウザイって思ってたんのは、自分の方だって。

……なあ？ 俺』

暗がりから現れたのは、花村と瓜二つの人物だった。

まるで鏡に映し出されているかの様に、一卵性双生児以上に二人は

似通っている。

ただ一つ、爛々とキラつく金色の瞳を除いて、だが。

「…………お前は…………誰だ？」

『俺か？俺はお前だ』

呆然と己を見詰める花村の問いかけに、『花村』は嘲笑いながら答える。

「えっ…………俺…………？」

花村の眩きは無視して『花村』は朗々と語りだした。

『俺には全部お見通しさあ。』

小西先輩の為にここまで来た…………？

…………カツコ付けやがって。

お前は単にこの場所にワクワクして来たんだ。

ド田舎暮らしにはウンザリしてるもんなあ？』

「ち、違っ…………俺は…………そんな…………」

「違う」と力なく呟く花村に追い討ちをかける様に、何処か嗜虐的な感情をその瞳に滲ませながら『花村』は続ける。

『あわよくばヒーローになれるって思ったんだよなあ？』

大好きな先輩が死んだっていう、『らしい』口実もあるしなあ？』

「お前、何言って…………！」

…………花村の様子から察するに『花村』が指摘した事は大方凶星だったのだろう。

まあ、花村がこの世界に非日常への期待にも似たものを抱いているのは何となく分かっていたし、『花村』の指摘を聞いた所で自分はどうとも思わないのではあるけれども。

昨日《シャドウ》に襲われてなかったら、多分自分だってこの世界に純粹な好奇心と興味を懐いて…………今日辺りにでも探検しに来ていた可能性はある。

まあ…………昨日一緒に絶体絶命の危機を経験したというのに、そういう気持ちを抱けた花村は凶太いとは思ったが。

『我は影、真なる我。俺はお前の影だ』

「影………………………………」 《シャドウ》？」

この世界で『影』と聞いて直ぐ様連想したのは『シャドウ』の事だ。
『花村』は『シャドウ』の同類なのだろうか。

……昨日襲ってきた奇々怪々な外見のモノとは異なる存在な気がするのだが……。

「ふざけんな！ お前なんか知らないっ！」

お前なんか、俺じゃないっ！！」

目の前の『花村』を拒絶する様に否定した瞬間、まるで体から力が抜け立っていられなくなったかの様に、花村は冷たい床に倒れた。

咄嗟に花村の身体を支え起こす。

そうこうしている間に、『花村』の姿が歪み、奇つ怪な怪物の姿へと変貌していった。

巨大な化け蛙のような身体の背中に当たる部分から、人の上半身の様な形をしたモノが生えている。

紛れもなく、怪物としか表現しようが無い。

何が起きたのかは正確には把握出来ないが、この状況は考えるまでも無く危険だ。

「花村！ しつかりするんだ！！」

一先ず逃げよう！！」

意識はある様だがぐったりとした花村は、力なく「違う、違う」と呟き続けていた。

心無しか花村がそう呟く度に怪物の殺意が高まっている気がする。

『ああ、そうさ。俺は俺だ。』

もうお前なんかじゃないっ！！

退屈なモンは全部ぶっ壊す！！

先ずはお前からだあああっ！！』

そう吼えて、怪物はその巨大な拳をこちらに繰り出してきた。

「イザナギっ！」

咄嗟にイザナギを呼び出すと、昨日と同じ様にイザナギは出現し、手にしていた刀の腹の部分で怪物の一撃を受け止める。

そのまま力比べになるのだが、安定性の面でイザナギは、四つ足である怪物よりも分が悪い。

ジリジリと押し負け、終にはイザナギは店の壁に叩き付けられてしまった。

イザナギが壁に叩き付けられた瞬間、こちらの体に衝撃が走る。成る程。

イザナギのダメージはこちらにもある程度はフィードバックされるらしい。

『我は汝、汝は我』だからか。

さて、どうしよう。

『花村』は昨日のバックマン(仮)の様にすんなりとは倒せない位には強い。

こつちには動けない花村と、……戦闘要員には見えないクマがいる。

そこを突かれたら、終わりだ。

それに……。

『花村』は花村の影だと言っていた。

『花村』を攻撃したら……花村にどんな影響があるのか分からない。

その為どうにも攻めあぐねる。

「あいつは一体……」

「あれは元々ヨースケの中にいたクマよ。

ヨースケが抑圧してきた、ヨースケの『シャドウ』クマ。

ヨースケに否定されたから暴走しているクマ……」

成る程、あの怪物もまた花村である、という事なのだろう。

なら、ますます攻撃してはいけないうんじやないだろうか。

否定されたから暴走しているのだとすれば、花村が『花村』を肯定すればこの場は収まるのか……？

いや、そんな単純な話では無いだろうし、それに第一、今の『花村』にこちらの言葉が届く様には思えない。

「クマ、私はどうすれば良い？」

「とにかく先ずは暴走を止めるしかないクマ」

「あれを攻撃しても、花村は大丈夫？」

「今のシャドウはヨースケから切り離されている状態クマ。」

「だから、ダメージがヨースケに返ってくる事も無いクマ」

「……実力行使するしかない、か。」

上等だ。シンプルでいつその事分かりやすい。

しかし……戦えない二人を逃がそうにも、そんな隙はありそうにない。

『花村』の狙いは花村だ。

今も尚花村を責め立てる様に言葉を連ねてゆき、花村が力なくそれらを否定する度に怪物はその力を増していつている。

……ただ、花村を責め立てる『花村』のその言葉は、何処か泣いている様にも聞こえてしまう。花村に否定される度に、『花村』のその声の裏にある苦しみは増している様であった。

……あの怪物もまた花村であると言うのであれば、あの怪物の言葉はそのまま怪物自身の心も切り裂いているものであるのだろう。

……だからこそ、否定され行き場の無くなった怒りや苦しみや破壊衝動は、その矛先を己を否定する己自身に向けている……と言った所だろうか……。

何にせよ、もうあの怪物となった『花村』は、本当に己自身を殺してしまうまで止まりそうにも無い。

その殺意を示す様に何度となく執拗に花村を狙ってくるので、その度にイザナギにガードさせたりして攻撃を防いでいる状況だ。

「センセイはどうするクマ？」

「取敢えず、ぶっ飛ばして大人しくさせる。」

それからじゃないと、話も出来そうにないし」

いつの間にかクマが『センセイ』と呼んできているのは少し気にかかったが、今はそれどころじゃない。

『花村』が景気良く破壊したショーケースから転がってきた酒瓶を手にとった。

『花村』が手当たり次第壊して回っているので、店内には既に壊された酒瓶から漏れだしたアルコールの匂いが充満している。

弱い人ならこれだけで酔っぱらってしまうだろう。

そして手にしていた酒瓶を、思いつきり振りかぶってから『花村』へと叩き付けた。

瓶の中の酒が『花村』の体を濡らす。

間髪入れずに他にも転がっていた瓶を次々と叩き付け、『花村』のほぼ全身に満遍なくアルコールがかかっているのを確認してから、イザナギに命じた。

「やれ！ イザナギツ!!」

耳が痛くなる程の大音量の雷鳴とほぼ同時に閃光が走り、『花村』へと直撃した。

目論見通りに、アルコールまみれの『花村』の全身に電撃が走ったらしく、『花村』は悲鳴を上げる。

更に散った火花から引火したのか、アルコールが勢い良く燃え上がり、『花村』は火だるまになった。

しかしそれでもまだ『花村』は衰えを見せない。

怪物と化したその体で咆哮を上げ、此方へと襲いかかってくる。

それをイザナギの斬撃が迎え撃ち、再び纏れ合いになった。

しかし一瞬生じた不意を突かれ、『花村』の攻撃が花村へと向かう。

咄嗟の判断だった。

考えるよりも先に身体が動いてしまっていた。

次の瞬間に感じたのは、背中を何処かに叩き付けられた衝撃で。

痛みに霞みかけた視界の中では、イザナギの姿が一瞬ブレて見え
た。

痛いのは、嫌いだ。

でも、今ここで負ける訳にはいかない。

自分が負けてしまえば、自分は疎か花村までもが殺されてしまう。
痛みを堪えて大きく息を吸った。

そして、一瞬ふらつきそうになった身体に喝を入れ、立ち上がる。
そしてギリギリと身体中を苛む痛みを押しさえ付ける様に、『花村』を
睨み付けた。





『商店街もジュネスも、全部ウゼーんだろ!』

『お前は孤立するのが恐くて上っ面を取り繕ってヘラヘラしてんだ。

独りぼっちは寂しいもんなあ!』

『俺は全部知ってるぜ?』

お前が如何に情けない奴かってなあ!』

『ウザがられてんのは分かってたクセに、良い人ぶって自己満足して
たんだよなあ?』

お前はああつ!』

『詰まんねえ田舎暮らしに刺激が欲しかっただけなんだろ!』

怪物の言葉に心を抉られる。

クマは、あいつは“俺”なんだと。

俺の中にいた“自分”なんだと、そう言った。

違う、違う、違う!!!

俺は、……俺はそんなんじゃないっつ!!

そんな事、思ったりなんかしない、してない。

……している訳がない。

否定して否定して、……否定、しなきゃ。

………こんなのが俺の筈がない。

あんなの、俺じゃ、無い。

周りを疎ましく思っつて、全部無くなつてしまえば良いのと思つて、退屈な日常に刺激を求めて、独りは嫌だから上っ面だけは『良い人』を演じて……。

………そんなの、俺の、筈が、ない。

俺は、そんな奴じゃない。

胸の中をぐちゃぐちゃにかき混ぜられた様な嫌悪感と、吐き気すら感じる。

怪物の言葉に、否を突き付けてやりたくても、まるで声の出し方を忘れてしまったかの様に、口から出るのは言葉にも満たない掠れた息でしかなかった。

鳴上は怪物の言葉を聞いても、特には何の反応もしていない。

無表情のまま、唯々怪物に立ち向かっていく。

火だるまになった名残で、所々から煙を上げる怪物に『イザナギ』と共にサシで渡り合っていて。

怪物の攻撃の余波を受けてボロボロになっていっても、逃げようとする素振り等は欠片も見せずに、ただ只管に俺を背に庇いながら怪物と戦っていた。

何度目かの罅迫り合いの後、『イザナギ』の体勢が大きく崩される。

そしてその次の瞬間。

怪物は俺に向けてその巨大な拳を振り下ろしてきた。

逃げる事も、目を閉ざす事も出来ないまま叩き潰されるのを唯待つしか無かった俺の目の前に、何かが飛び込んでくる。

「あッ……」

そしてそのまま。

怪物の攻撃から俺を庇った鳴上は、壁に叩き付けられた。

小さく苦痛の声を上げて床にずり落ちた鳴上は、微かに痛みに呻きながらもそれでも再び立ち上がり、そして、しっかりとその顔を上げて『イザナギ』を再び怪物と切り結ばせる。

「鳴上……」

……馬鹿みたいじゃないか。

……逃げれば、良いのに。

あの怪物の狙いは俺なんだから。

あの怪物相手に戦う力はあるのかもしれないけど、でも、それは「戦わなきゃいけない理由」なんかじゃない。

それなのに、足手纏いの俺を庇ってボロボロになって。

死ぬかもしれないのに、殺されるかもしれないのに。

それでも、鳴上は怪物から逃げ出したりはしない。
そんなの……。

『こいつに守る価値なんか無いだろう？』

お前も分かっているんだろ？

俺が言ったのはこいつの本音なんだって。

それでもまだやるってのか？

自分の命を張ってまで？』

怪物の指摘に、鳴上は僅かに動きを止めて俺に振り返る。

何処までも真っ直ぐに俺を見詰めてくるその目を直視出来ず、俺は
思わず目を逸らした。

あの怪物の言葉を聞くのは苦痛だ。

俺は、あんな事を思ったりはしない。

だけれどもそれ以上に。

それを鳴上に聞かれているのが嫌で仕方無い。

だって、そうだろ？

誰だってあんな事を思っている奴なんて嫌だ。

嫌に、決まっている。

ここで鳴上に見捨てられたら俺は独りだ。

だから、だから、……だけど……。

「……だから、何だ？」

だが。俺の想像の中の反応を裏切るかのように。

怪物の言葉に、鳴上は寧ろ心底不思議そうに首を傾げた。

それは怪物にとっても意外だった様で、怪物は驚いた様に動きを止
める。

「お前が言った事が、花村の本音の一つなのだととしても。

それだけが、花村の全てじゃない」

何の事も無い様に、淡々と鳴上は語る。

「お前の言った事だけが花村の全てだと言うなら、先輩が亡くなった

時にあんなに哀しんだりはしない。

先輩の死を悼む気持ちに嘘偽りは無かった……無い筈」

そして鳴上は俺に振り返った。

その目は唯々真つ直ぐに俺を見詰めている。

「好き、だったんだらう？ 先輩の事が」

好き。

そう、……そうだ。

俺は、俺は……先輩の事が好きだった。

いや今でも、好きだ。

「なら、それ以上に理由なんているのか？」

「鳴上……俺は……」

「これ以上グダグダといじけているのなら、ぶっ飛ばすから」

そう言つて鳴上はへたりこんでいた俺に手を差し出してくる。

「ほら、立って。」

私の手で良いなら幾らでも貸すから、その足で立って、あいつに立ち向かつて。

あいつはきつと、花村自身が決着を着けなきゃいけない事だから」

俺は鳴上の手を掴んで立ち上がった。

身体はまだふらつくけど、それでも、自分の足で立っていられる。

そしてその直後にイザナギの雷撃に止めを刺され、怪物は溶ける様にその姿を消し、後に残ったのはもう1人の俺だけだった。

『……………』

静かに佇む「俺」に、先程迄の様な狂気の色は無い。

「あれはヨースケの中にいた、ヨースケが抑圧してきたものクマ……」

ヨースケが認めないと、さつきみたいに「暴走」するしかないクマよ……」

俺が抑圧してきた、自分。

認めなくちやいけないのは、分かっている。

けど……だけど……。

「花村」

迷っている俺の気持ちを理解したのか、鳴上は静かな声で俺を呼んだ。

「そいつもまた花村の一部なんだろう？」

勇気を出して。

そいつが花村の全てではないけれど……そういう一面もあつてこそ、『花村陽介』という人間なんだから」

そして、それにと鳴上は続ける。

「自分で自分自身を拒絶するなんて、結局辛くなるだけだと思う。

どうせなら、胸を張って『これも自分なんだ』って思える様になつた方が、きつと楽しいんじゃないか？」

……あんなどうしようもない俺もまた俺なのだ、鳴上は否定する事も厭う素振りも見せずにそう言い切つた。

そこに何の虚飾もなく、それが鳴上の本音なのだどうしようもなく理解してしまう。

……本当は、分かっていたんだ。

自分がそういう事も思う奴なんだつてのは。

でも、認めたく無かつた。

こんな、……こんなどうしようもない「俺」は、認めたく無かつた。それでも。

どんなに情けなくつて、どんなに嫌でも認めたく無くても。

……俺である事には変わらない。
だから……。

「お前は俺で……俺はお前か。

全部引つ括めて俺だつて事だな」

自分の心に向き合つてそう認めた時、「俺」は頷いて……そして

『ペルソナ』へと変わっていった。

『ジライヤ』。これが、俺のペルソナ……。

フワリと『ジライヤ』の姿は一枚のカードに変わり、そしてそれは溶ける様に消えた。

でも、確かに胸の内に居るのだという感覚は残っている。

『ジライヤ』が消えるなり、疲れがドツと押し寄せて身体がふらついて倒れそうになった。

それをすかさず支えてくれた鳴上に礼を言う。

「はは……みつともねー所を見せちまったし、迷惑かけちまったな」

そう自嘲気味に言うのと、鳴上は再び心底不思議そうに首を傾げた。

「何もみつともなくなんて無かったけど？」

迷惑って、私が何時言っただ？」

鳴上は恐らく本気でそう思っているのだろう。

ああ、……こいつマジで格好いいわ。

「一緒にいてくれたのがお前で良かったよ。

ありがとな、……鳴上」





《シャドウ》とは、人に抑圧されそして否定された、その本体から切り離された心の集合体。

この世界では《シャドウ》は実体を伴って存在している。

そして、普段は霧に覆われた世界に隠れているが、時折霧が晴れた時には酷く暴れだす……。

普通《シャドウ》に“個”というものはなく、その元となった人とは関わりを持たない。

しかし、この世界に生身の人間が入り込むと、その人間が抑圧していた……だがまだ心から切り離されてはいない部分が『シャドウ』となつて具現化する。

本体に否定された『シャドウ』は周囲に存在する個としては弱い《シャドウ》達を取り込んで暴走する。

本体が己と向き合い、『シャドウ』を認めなくては暴走は止まらない。

そして、受け入れた『シャドウ』は『ペルソナ』へと変わる……？
クマから聞いた事、そして目の前で起きた事。

それらを整理して推測すると、その結論へと至った。

『花村』は花村の『ペルソナ』となった。

つまりは、『ペルソナ』と『シャドウ』。

この二つは非常に関連深い事象だという事になるのだろうか。

受け入れられていない自己が『シャドウ』、向き合い受け入れた『シャドウ』は『ペルソナ』になる……？

結論付けるにはまだ早計であるが、その可能性は考慮するに値する。

状況証拠でしかなく確認しようにも本人は既にはいないが、恐らくは

ここに残されていた小西先輩の声は、小西先輩本人のモノではなくその『シャドウ』のものだったのだろう。

彼女も『シャドウ』を否定して、そして殺されてしまったのだろうか……。

さつき花村が『花村』に殺されかけた様に。

本来《シャドウ》に通常の物理的な攻撃は通用しない、らしい。

思えば、昨日鉄パイプで全力で殴ってもビクともしなかったのは、それ故だったのだろう。

実体を伴っているとは言え、相手は物質的な存在ではなく精神的な存在なのだから然もありなん、である。

《シャドウ》達を倒せるのは同じ精神的な存在、つまりは『ペルソナ』を扱える者。

だからかは知らないが、さつきの戦いで叩き付けた酒瓶は昨日の鉄パイプに比べれば多少のダメージにはなっていた。

『ペルソナ』を使える様になったからこそ、こちらの物理的攻撃手段も通用する様になったのだろうか……？

だがしかし、そもそも何故霧が晴れていない状況だったのに、昨日にしる今日にしる《シャドウ》が襲ってきたのだろうか？

先輩達は霧が晴れたタイミングで《シャドウ》に襲われて殺されたというのに、何故？

先輩と山野アナの時と、昨日や今さつきの花村の時とは何かが違うのか？

パツと思いつくのは、クマがくれたこの世界の霧を見通す為のメガネの有無だが、恐らくは差違はそれだけではない。

昨日はクマがシャドウ達に襲われるより先に助けに来てメガネをくれたとは言え、あのままではメガネの有無関係無しに襲われていただろう。

クマは探索しているから警戒されたのだろうと言っていたが……。

果たしてそうなのだろうか……？

……分からない。

この件は一先ず保留するしかないだろう。



『花村』が消え、激しい戦闘の痕があちらこちらに残るぐちゃぐちゃになった店内で、花村は俯いてたままその身体を震わせる。

「先輩達は……たった一人でこんな場所に……」

なのに、誰も……先輩達の事を……」

助けに行かなかった。

助けられなかった。

花村が呑み込んだ言葉はどちらだったのだろう。

……どちらでも、同じ、か。

無論、山野アナがここに放り込まれた段階では、まさかこの世界に閉じ込められているだなんて露とも思っていなかったし、山野アナをここに放り込んだ犯人以外はそもそもこの世界の事自体知らなかっただろう。

だけでも。

恐らく小西先輩は、昨日自分達がこの世界を脱出したすぐ後にこの世界に放り込まれたのだ。

もう少しでもタイミングがズレていれば……助けられていた可能性はゼロではなかった。

いや、そうでなくても。

叔父さんから先輩が行方不明だと聞いた時にもっと何か出来たんじゃないだろうか。

……所詮はIFの話でしかないけれども。

【犯人】の狙いは一体何だ？

動機は、目的は、先輩達を狙った理由は？

……考えても、何も答えは出ない。

現段階では情報が少な過ぎるのだ。

花村の消耗が激しいので今日の調査はこの辺りで切り上げる事に

した。

クマ曰く、同じ場所から入らないと違う出口に出てしまうらしい。

この場合の「場所」とは同一のテレビでという事なのだろうか。

それとも、あちらの世界での座標的な意味での「場所」なのだろうか。

……あのテレビから出入りしてくれ、というのは間違いないだろうが。

……困ったな。

家電売場なんて、普通に人目に付きかねない場所だ……。

取り敢えず、花村に無理を言ってしまうが、監視カメラにあのテレビ周辺の画像が映らない様にして貰い、更には昨日と今日の分の映像を、決定的瞬間が映っていた場合には削除して貰うしかあるまい。

……

……

……

……

▲▼▲▼▲▼

あちらから戻ってくると、里中さんが泣きじやくっていた。

随分と心配を掛けてしまったらしい。

自分達が彼方に行ってから既に数時間経っていた。

その間、ここでずっと待っていてくれていたのかと思うと、とても申し訳なく感じる。

こちらが謝ろうと口を開こうとすると、「馬鹿！」と叫んで里中さんは走り去ってしまった。

……明日、ちゃんと謝らなくては。



疲れているが心なしかスッキリとした顔の花村と別れ、家へと帰る。

帰路の途中にある河川敷の休憩所で、雨宿りしている天城さんに出会った。

「鮮やかな桜色の着物がよく似合っている。

しかし、何故そんな格好で出歩いているのだろう。

「あ……この格好？」

家のお使いだったから……。

えっと……この町とか、学校には、もう慣れた？」

どうやら天城さんは、お家の旅館の用事だった様である。

その帰りの途中で雨に遭ったのだろう。

「まあ、まだ数日しか経ってないけど、大体は」

少なくとも学校の中や近所では迷子にはならない。

既に大体の教室とかの配置は理解している。

「知らない場所に転校してくるって、大変？」

私は、この町から出た事無いから、転校ってどんなものか、あんまり分からなくて。

あ、えっと……私、いつも帰り早いし……あんまり鳴上さんと話せてないんだけど……」

「家の旅館手伝ってるんだっけ？」

「あ、うん。そうなの。」

ウチの旅館、私がいないと全然ダメで……。

今日もこれから帰ったら板長と明日の打ち合わせしなきゃならないし。

そうだ……千枝とかとは、どう？」

板長との打ち合わせ……。

まだ学生なのに大変だ。

旅館の内情に詳しい訳じゃないから、天城さんの所が特別大変なの

かどうかは分からないけれど。

どんな物事であれ、頑張っている人には自然と頭が下がる思いである。

それに、里中さん、か。

……今日は酷く心配させてしまった。

昨日だってあれだけ怖い目に遭わせてしまったのだし、本当に里中さんには悪い事をしてしまっている。

でも、ああやって心配してくれているという事は、こちらの事を『どうでもいい存在』だとは思っていないという事で……。

それはとても嬉しい事であると同時に、とても有り難い事だ。

「千枝ってね、すごく頼りになるの。」

私、いつも引つ張つてもらつてる。

去年も同じクラスでね、一緒にサボって遊んだりしたな……」

そう里中さんの事を語る天城さんは、優しい顔をしていた。

本当に里中さんの事を大切に思っているのだろう。

天城さんの語る話に時折相槌を打ちながら、それに耳を傾ける。

「あ、そろそろ帰らなきゃ……。」

じゃあね、鳴上さん。また明日」

雨足が少し弱くなってきた頃合いを見計らって、天城さんとはその場で別れた。



家に帰ると菜々子ちゃんは既に帰宅していた。

夕飯の支度をしながら付けっぱなしにされていたテレビから流れてくるニュースに耳を傾ける。

どうやら小西先輩の事件についての報道がなされている様だ。

山野アナの事件から間を置かずに行われた猟奇殺人。

メディアの注目を集めるには十分だろう。

喩え、その事件の実態が果たして猟奇殺人と評するに相応しいかは別にして。

山野アナの事件の第一発見者があんな事になったからか、小西先輩の件の第一発見者のインタビューは無いみたいだ。

まあ、警察が睨みを効かせたのだろう。

当然の対応、ではある。

こんな事件が起きたのだ。

今日は……叔父さんは帰ってこれないのかもしれない。

叔父さんが心配なのか、夕食に箸をつける菜々子ちゃんの表情は暗い。

何とか気を紛らわせてあげたくて、ふと提案してみた。

「……菜々子ちゃん、今日は一緒にお風呂入る？」

「……うん！」

あのね、菜々子ね、せなかながしっこしたい。

あとね、あとね！ アヒルさん、うかべようよ!!」

勿論良いよ、と笑って頷くと、菜々子ちゃんの表情はパアツと明るくなる。

叔母さんが亡くなってからというもの、叔父さんがあの調子で忙しかつたのだとすれば、誰かと一緒にお風呂に入る機会など殆ど無かつただろう。

それ故にか……何時もの何処か遠慮した様な感じでなく、歳相応に喜ぶ菜々子ちゃんの表情はとても眩しかった。

食器を片付けていると、ふと見知った顔がテレビに映っている事に気が付いた。

映っているのは天城さんだ。

今日の帰り際に見掛けた時の服装でテレビに映っている。

どうやら天城屋が番組に取り上げられている様だ。

……お家の用事とは、これの事だったのだろうか？

テレビに取り上げられる事自体は、別に完全に悪い事ではないだろうが……。

しかしどうにもレポーターの発言が気に触る。

死んだ山野アナが宿泊していただの、女将が倒れただの、一々取り上げる必要は無いだらう。

段々セクハラ紛いの発言を繰り返すレポーターに嫌気がさして、チャンネルを変える。

変えた先では丁度天気予報のタイミングだった。

どうやら明日の早朝は霧が出るらしい。

今夜も《マヨナカテレビ》が映る条件が整っている。

起きていられるか一抹の不安はあるが、寝ない様に暇潰しの為の本も既に用意してある。

《マヨナカテレビ》の時間までならギリギリ持つだらう。



眠気で頭がボヤつとしてきてはいるが、何とかギリギリ持つている。

……しかし、《マヨナカテレビ》に誰かが映ったとして、それからどうしようか。

《マヨナカテレビ》映ったからといって、それで彼方の世界に放り込まれるとまだ決まった訳じゃない。

そもそも、《マヨナカテレビ》自体が一体何なのか全く分からないのだ。

何時から存在する現象なのかも、そして一体どういう原理のものなのかも。

取り敢えず【犯人】への手掛かりになるかもしれないものが《マヨナカテレビ》しかないだけで。

だが、《マヨナカテレビ》に映ってしまった人が狙われないとも限らない。

……映つても映らなくても、微妙な気持ちにはなるだらう。

二人をあの世界に放り込んだ【犯人】を捕まえると約束した以上、そ

れを違えるつもりも諦めるつもりもない。

だが……こちらは調査のプロではない。

情報だって、そんなに集まるものでもない。

実際問題、不足ばかりである。

【犯人】が捕まっていない以上再犯する可能性はあるし、あの世界に誰かが放り込まれた際は可能な限りは救出する。

被害者が居ると分かっているながら無視を決め込むのは、自分の流儀に反するからだ。

そればかりは絶対に嫌だ。

それにしても……。

人の心が反映されている、だなんて、あの世界はまるでゲームの『サイレントヒル』みたいだ。

深い霧といい、怪物といい、何となく似ている。

作品によっては若干設定が違うものの、『サイレントヒル』の世界でも、人は己と向き合う必要性があるんだったか……。

そんな益体も無い事を考えていると、丁度零時になる。

前と同じ様に砂嵐が走った後に、「何か」が映った。

……人、というのは分かる。

髪(?)が長い様なので、女性だろうか。

だがしかし、先日の小西先輩の時の比ではない程画像が荒くて殆ど情報が読み取れない。

これでは映っているのが誰なのかは、到底判別出来ないだろう。

マヨナカテレビは一分少々映った後、始まった時と同様に唐突に消えた。

それと同時に、抗い難い程強くなった睡魔に身を委ね、眠りの淵へと落ちていったのだった。





.....
.....
.....
.....

「ようこそ、ベルベットルームへ」

耳に届いた厳かな声に目を開けると、蒼い世界が目飛び込んできた。

ここは……確かベルベットルーム、だったか？
はて、何時の間ここに来たのだろうか。

確か自分の部屋で寝ていた筈なのだが。

「ご心配めさるな。

現実の貴女は眠りに就いていらっしやる……。

私が夢の中にて、お呼び立てしたのでございます」

凄いなイゴールさん。

そんな事も出来るのか。

しかし気が付けばいきなり行った覚えのない場所に居るのは面食らうので、事前に何かしら連絡があれば良かったのに……。

それにしても、この蒼さはとても好みだ。

見ていてとても心が落ち着く……。

色彩心理学的には、青には心を落ち着かせる効果があるんだっか……。

「さて、再びお目にかかりましたな。

ここは、何らかの形で『契約』を果たされた方のみが訪れる部屋……。

貴女は日常の中で無意識に目覚めを促され、内なる声の導く定めを

選び取った……」

「そして見事……その“力”を覚醒されたのです」

イゴールさんの言葉の後をマーガレットさんが続ける。

イゴールさんやマーガレットさんの言う“力”……。

……恐らくは、『ペルソナ』の事だ。

ここに再び招かれたという事は、自分が何かしらの“契約”を交わしたという事になるのだろうか。

思い当たるとすれば、クマとした『犯人を捕まえる』という約束だが、その事だろうか。

「これをお持ちなさい」

そう言っつてイゴールが渡してきたのは、“鍵”だ。

何処の鍵だろう。

話の流れから察するに、このベルベットルームへの鍵なんだろうけれども。

枕元に敷いて寝れば夢の中でここに来れる様になるとか？

「今宵から貴女は、この“ベルベットルーム”のお客人だ。

貴女は“力”を磨くべき運命にあり、必ずや、私共の手助けが必要となるでしょう。

貴女が支払うべき代価は一つ……“契約”に従い、ご自身の選択に相応の責任を持つて頂く事です」

選択に責任を持つ、当たり前だが難しい事でもある。

でも元々、自分の行為に無責任に生きる、というのにはどうにも我慢がならない性分ではあるので、そこまで重く苦しく考える必要もそうあるまい。

「結構」

こちらが頷いて“鍵”を受け取ると、そう言っつてイゴールさんは満足気に笑う。

「貴女が手に入れられた“ペルソナ”……。

それは、貴女が貴女の外側の事物と向き合った時、表に現れ出る“人格”。

様々な困難と相対するため自らを鎧う、“覚悟の仮面”……とでも

申しませうか。

しかも、貴女のペルソナ能力は「ワイルド」……他者とは異なる特別なものだ。

空っぽに過ぎないが、無限の可能性も宿る。

そう……言わば、数字のゼロの様なもの」

《ワイルド》？ 《空っぽ》……？

《無限の可能性》……？

何やら気になる単語がポンポン出てきたのだが。

この場合の《ワイルド》とは、UNOとかの「ワイルドカード」、みたいな意味合いだろうか。

「ペルソナ能力は「心」を御する力……」

「心」とは、「絆」によって満ちるもの」

……そこについては分かる気がする。

他人と全く関わりない生き方なんて、想像するだけで寂しくて貧しい生き方だ。

そんなの人格が捻れ曲がるだけだろう。

他人との関わりは、その深さや広さとかに色々差はあれど、どれも大なり小なり自分自身に影響を与えていく。

他人が自分を変化させていく要因になっているのは疑いようがない。

自分1人の内だけで完結出来る様なものなんてほぼ無いし、そんな事しようとしたって歪みが出てくるだけだ。

イゴールさんが言いたいのはそう言う事か？

しかし、今の話の流れでは「心」が現状「空っぽ」であるという事になるのではないだろうか……？

「他者と関わり、絆を育み、貴女だけの「コミュニティ」を築かれるが宜しい。

「コミュニティ」の力こそが、「ペルソナ能力」を伸ばしていくのです」

「心」を育む……か。

まあ確かに。

自分の見識はまだまだ狭いし、あの世界の事や『ペルソナ』の事に知らない事なんてそれこそ山の様にある。

やれる限りの事はやってみたい。

「コミュニケーションは単にペルソナを強くする為だけの物ではありませんん。

ひいてはそれは、お客様を真実の光で照らす輝かしい道標ともなつてゆくのでしょうか。

貴女に覚醒した『ワイルド』の力は何処へ向かう事になるのか……。

「一緒に、旅をして参りましょう」

そう言つてイゴールさんは笑う。

急速に視界がブラックアウトしていく。

「では、再び見えます時まで……ごきげんよう」

そこで意識は途切れた。

……

……

……

……

▽▲▽▲▽▲

【2011／04／16】

学校に向かつていく途中、花村に呼び止められた。

話題は昨夜の『マヨナカテレビ』の件について、だ。

花村が見たそれも、殆どよく分からない映像だったらしく、映されていた人物の目星は付かなかったらしい。

「やっぱあれって事件と関係あるのかな」

そこに関してはまだ何とも言えない。だが。

「まだ分からないけど、注意するべきだとは思う。」

万が一あの世界に誰かが放り込まれても、すぐに動ける様にした方が良い」

花村は「だな」と頷いた。

「警察は犯人捕まえられると思うか？」

……それはかなり難しいだろう。

警察が無能だという訳なのではなく、今回の件に関しては非科学的かつ半ばオカルト染みたものが深く関わっているのだ。

普通に捜査しているだけではまず【犯人】を見付けられない。

万が一【犯人】の目星が付いたとしても、立件はほぼ不可能だろう。

それを見越してあの世界を凶器として用いているのなら、これ以上の被害が出る前に何としても【犯人】を止めなくてはならない。

そう伝えると、花村は同意する様に何度も深く頷いた。

「だよな。」

今ん所、【犯人】を捕まえられんのも、被害者を助けられんのも、俺達しかいないもんな。

だからさ……絶対、俺達で犯人見つけよーぜ！」

「勿論。クマとも約束したからな」

そう頷くと、花村は嬉しそうに笑った。

「お前となら、犯人見付けて、この事件を解決出来そうな気がすんだ。」

……ま、宜しく頼むぜ！」

最後の方は少し照れながらも花村は手を差し出してくる。

その手をしっかりと握り返し、その後は色々と雑談しながら学校へと向かった。



教室で花村と話し合っていると、里中さんが血相を変えて飛び込ん

できた。

息を切らせた里中さんは、直ぐ様天城さんの席を確認し、一瞬で血の気が引いた様な顔をする。

……尋常な様子ではない。

一体何があったのだろうか。

狼狽える里中さんに少し落ち着いて貰ってから事情を訊ねると、どうやら昨晩から天城さんと連絡が付かないのだそう。

そして更に里中さんは、昨夜の《マヨナカテレビ》に映ったのは天城さんと言った。

よく気付けたものだと思っていれば、昨日見た《マヨナカテレビ》は、里中さんには画像が鮮明に見えていた様だ。

友情パワー、というやつだろうか。

それはさておき、連絡が付かないというのはかなり不穏な気配を感じる。

《マヨナカテレビ》に映り、連絡が付かない……。

先の被害者二人と共通する事柄であるだけに、あの世界に天城さんが放り込まれた可能性を否定し切れないだろう。

ともかく今はもう一度天城さんに電話をするなりして、無事かどうかを確認するべきだ。

個人のケータイに掛けて、それで連絡がつかないのなら家の方の電話に掛け、最悪授業を抜け出して旅館の方に直接確認しに行けばいい。

それで尚も見付からないのならあの世界に探しに行く、というのがベストだろう。

幸いにも、天城さんは実家の手伝いで多忙を極めていて電話に出られなかっただけだったらしい。

掛け直した電話に天城さんが出た瞬間、緊張の糸が切れたかの様に里中さんはへたりこみ、そして涙ぐむ。

何はともあれ、天城さんが無事で何よりだ。

殆ど半泣きになっていた里中さんは、安堵の為か目を潤ませている。

良かったね、と声をかけると、里中さんは何度も勢い良く首を縦に振った。

しかし、あの映像の人物が天城さんでは無かった可能性もあるにはあるので、放課後は念の為クマに確認を取りに、花村と共に今日もジュネスへと向かう。

人目に付かない様にこっそりとテレビに手を突っ込んで手招きしてクマに呼び掛けると。

……テレビに突っ込んでいた手を何故か噛まれた。

どうやら新手の遊びか何かかと思つた様だ。

気を取り直してクマに確認した所、昨日自分達がこちらに帰ってからはまだ誰も向こうには行つてないらしい。

一先ずは安心、か？

いやでも、この先どうなるかまでは分からないので、気は抜けないが。

そしてクマは一人で寂しいのだと訴えてきた。

寂しいも何も、元よりクマはあちらの世界で一人で過ごしていたんじゃないのかと言いたくはなるが、寂しい寂しいと駄々を捏ねるクマをこのまま放置し続けるのも何だか可哀想である。

菜々子ちゃんよりも小さな弟に接している気分だ。

今度何か暇潰しにでもなりそうな物を与えてみるか……。

今夜も雨は降り続くらしい。

今日の《マヨナカテレビ》もちゃんと確認しなくてはならないだろう。

いざという時の為に、花村とアドレスを交換してその場は解散となった。



しとしとと雨が降り続く午前零時。

1日と1日の狭間に差し掛かった瞬間、昨日と同じ様に映像が流れ始める。

しかし、昨日とは随分と異なり画面が非常に鮮明だ。

それに……。

画面に現れたのは……。

自分の目が腐り落ちて幻覚を見ているのでなければ、……天城さん、なのであろう。

しかし、一体何があったのかは知らないが、豪華なドレスを身に纏い、そして何故か営業スマイルを浮かべている。

何事か、と思わず目を丸くして凝視した。

『こんばんはー。』

えーっと、今日は私天城雪子がなんと、『

ここで妙にどアップが入る。

『逆ナン』に挑戦したいと思います！

題してっ！』

天城さん(?)がそう言うなり、デデデンツ、という効果音と共にテロップが表示された。

『【やらせナシ！ 雪子姫、白馬の王子様探し！】』

雪子姫……。

成る程。ピンクを基調としたドレスは確かに「姫」と表現するに相応しい。

背後の建造物も、ややメルヘンな雰囲気醸し出す西洋式の城に見える。

言うなれば、シンデレラとかの童話等に出てくる『お姫様』を連想させる様式だ。

テロップ的には下らないバラエティー臭がプンプンするのではあるが、背後の城はセット等ではないだろう。

そして、あまり画面に映らない様にはされているが、時折映る画面

内の『空』の色合いが彼方の世界のものである。

それらを踏まえると、この映像は彼方の世界での物なのだろうか。

『もお超本気イ！』

見えないトコまで勝負仕様……は・あ・と、みたいなね！』

は・あ・と、と言われても反応に困る。

超困る、みたいな……。

『もお私用のホストクラブをブツ建てる位の意気込みで。

じゃあ行つてきまゝす!!』

そう言つてドレス姿の天城さん(?)は城の中へと消えて行き、そこでマヨナカテレビは終わった。

……。

……いや本当に、反応に困るな。

色々と衝撃的過ぎて、驚きのあまりいつの間にか取り落としてしまっていた本を拾い、困惑から溜め息を吐く。

さてどうしようかと思っていると、タイミングよく電話が掛かってきた。

相手は花村の様だ。

ほぼ確実に先程の《マヨナカテレビ》の件についてだろう。

『ちよつ、お前、見たかさっきの!』

「見た」

『あああれ、あれつて、天城だよな?』

「聞き間違いじゃなきゃ、そう名乗っていたな」

『ちよつ、どうなつてんの? 今の何なんだよ!』

「花村、一先ず落ち着け」

混乱している花村を落ち着かせ、先程の映像についての確認を取る。

今回はほぼ間違いなく同じ映像を見ていた様だ。

前回までの映像とは明らかに違う感じではあるが、その差が何から来ているのかは分からない。

まだ花村以外の他の人に確認は取っていないが、今回の《マヨナカテレビ》は誰の目にもクツキリと映つたんじゃないだろうか。

だがそうとなると、少し……いや大分困った事になってしまう。
マヨナカテレビを見ている人はそれなりに居る様だ。

つまりはそれなりな人数があつた。『雪子姫』を見てしまったという
訳で……。

……強く生きるんだ、天城さん。

そう心の中で合掌した。

『にしても、一体何がどうなつてんだ？』

あの天城が逆ナンとか、有り得ねーだろ』

『確かに……天城さんはそういう事は言わなそうだけど……。

まあ、あれが天城さん本人であるとは限らないし。

多分だけど、天城さんは既にあちらの世界に放り込まれてしまつた
んじゃないか？』

本人の様でいて、本人とは違う言動をするその存在を、自分達は既
に知っている。

『……！』

あつちの世界つて事は、もしかしてさっきの天城は……』

『天城さんの『シャドウ』である可能性がある、という事。

確証はないけど』

明日クマに確認すれば、分かるのかも知れないが……。

何はともあれ、天城さんに何らかの異変が起きているのはほぼ確実
であろう。

『天城本人よりは説得力があるよ……。

ん？ でも、シャドウつて確か人が抑圧している部分なんじゃない
かつたっけか？』

つて事は、天城の本音としては逆ナンしたって訳か？』

その疑問はご尤もだ。

シャドウの言つてる事はその人の全てではないが、紛れもなくその
人の本音の一部ではある。

あの『雪子姫』の発言を額面通りに受け取ると、天城さんは逆ナン
したがっている、という事になってしまうのだが……。

『さあ。そこに関しては私には分からない。』

何か別の事を抑圧していて、それを表現するために偶々“逆ナン”発言したのかもしれないし、本気で逆ナンしたがっているのかもしれない。

どちらにせよ、天城さんが彼方にいるならば私達が成すべきは天城さんの救出という事になる」

天城さんの真意が何処にあるにせよ、もしあの世界に放り込まれてしまっているのなら、助けなくてはならないのである。

『だな。』

明日は丁度日曜だし、じゃあフードコートに集合な!』

また明日、と電話は切れた。



〔2011/04/17〕

昨日までの雨が嘘であったかの様に空は何処までも晴れ渡っている。

…こんな状況でもなければ、菜々子ちゃんを連れて近場にも遊びに行きたかったのだけれど……。

相変わらず朝早くから仕事に出掛けてしまった叔父さんの事を思い出しながら、思わず溜め息を吐いた。

念の為に訊ねてみたが、菜々子ちゃんは今日は友達と遊ぶ様な予定は無いらしい。

幾らしっかり者とは言っても、この年頃の子を一人で遊びに行かせるなんて出来ないし……。

……非常に心苦しいが、留守番してもらうしかない。

留守番に慣れているから良いよ、だなんて何だか切なくなってくる事を言われ、後ろ髪を引かれる思いで家を出た。

絶対に、帰りに何か喜んでくれそうな物を買って帰ろうと心に誓っ

て。



連続殺人事件が起きたからか、警官があちらこちらに立っていた。フードコートにも制服姿の警官が巡回している。

少し待っていると花村がやって来た。

？ 手に何か持っている様だが……。

「おう、待たせたか？」

バックヤードで探し物してたらちよつと遅くなっちゃまってな」

そう言つて花村はジャジャーッと言いながら手にしていた物を掲げた。

模造刀と模造品の小刀だ。

……オイ花村。ちよつと待て。

「どーよこれ！ 良さげじゃね？」

そう言つて手にしたそれを軽く振り回そうとするのを全力で止める。

良くない。全く以て良くない……！

何でそれをここで振り回すんだ……！

「あ、ああ。

これで演劇の小道具係に小言を言われずに済むよ！

ホントにありがとう!!」

完全に口から出任せだ。

少々態とらしさは隠せないが、慌てて花村に……と言うか不審者を見る目付きで無線機を手にしている警官に聞かせる様に声を上げる。

「まあ取り敢えずそれはしまつておこうか。

流石に剥き出しのままじゃ邪魔になるしなー」

邪魔どころか大問題になりかねない。

今から人目に付きたくない事をするのに、目立ちまくつてどうしよ

うと言うのだ。

【犯人】を追うつもりで警察に目を付けられるなんて、笑い話でも笑えない。

そそつと花村に模造刀を下ろさせ、その場を退散しようとしたが。

「君達、一体何をしているんだ？」

険しい顔をした警官に呼び止められた。

しかしそれは想定の内だ。

善良な一市民としての顔を装い、警官に説明する。

「えつと、演劇に使う小道具を貸して貰うところだったんです」

「小道具？ ……念のため確認させて貰おうか」

警官に言われ、素直に模造刀を差し出した。

まあどう調べようともただの模造刀なので、警官はこちらの言い分を信じた様だ。

「まあ、ただの模造刀みたいだな。

だが、小道具だろうとこういつた場所でこんなものを振り回すなんて、一体何を考えているんだ！」

警官から一頻り説教を受けてから解放された。

一応模造刀は返してもらえたが……。

それ以上に何かを盛大に削られた気がする。

「……すまん、鳴上」

「これからは周りをよく見てから行動しような、花村……」



クマに確認を取った所、既に誰かが放り込まれているらしい。

恐らくは天城さんだろう。

昨日確認しに訪れた後に放り込まれてしまったのだろうか……。

本当に、尽く対応が後手に回ってしまっている。

由々しき事態だ。

霧が出る迄にはまだ暫く時間があると天気予報では言われている

が、予報はあくまでも予報。
何時外れるとも分らない。

救出を急ぐに越した事はないだろう。

花村から模造刀の方を受け取り、花村には短刀の方を持って貰う。

取り敢えず、武器になるものならある。

いざ行こうとしたその時。

背後から勢いよく待ったが掛かった。

誰か……など考えるまでもない。

里中さんだ。

やはり昨晩から天城さんは行方不明になっているらしい。

今朝方、天城さんの家から里中さんに連絡が行って判明した事だが。

里中さんは、即座に昨晩の《マヨナカテレビ》と天城さんの失踪とを結び付け、直ぐ様ここに向かったらしい。

案の定、里中さんは自分も連れていく様にと主張し始めた。

正直な所、里中さんを連れていくべきではない。

第一に里中さん自身が危険な目に合うだろうし、第二に里中さんの『シャドウ』が出現する可能性がある。

そうなれば二重遭難しかねない。

里中さんを連れていけば、天城さんの救出に支障を来す恐れがあるのだ。

だがしかし。

あの世界は人の心が反映される世界だ。

『シャドウ』にしろ、昨夜のテレビに映っていた城にしろ。

あれらが天城さんの心から作られたのだというのなら。

天城さんを助け出すには天城さんの心を理解する必要があるんじゃないだろうか。

もしそうならば。

今この場にいる者の中で、天城さんと最も親しく……そして最もその心を理解出来る可能性があるのは里中さんだ。

危険かもしれないが、連れていくに足る理由は無くはない。

更には、例え置いていこうとした所で里中さんは無理矢理にでも一緒に行くこうとするに違いない。

事実、何度意思を確認しても、『連れて行け』と言って里中さんは譲らなかつた。

最初にあちらに迷いこんだ時に共に《シャドウ》に襲われている身なのだから、完全に考えなしの行動……という訳ではないだろう。

そう信じたい。

花村と話し合った結果、里中さんも連れていく事にした。

ただし、あくまでも一人では絶対に行動しない事、勝手に突っ走っていかない事、戦闘には参加せず万が一戦闘になったらクマと共に安全な場所まで退避する事。

そして、行った先で何を見たり聞いたりしても取り乱さずに、冷静に周りの言葉に耳を傾けて対応する事、を里中さんに約束してもらった。

これは里中さんの身の安全を図るだけでなく、こちらの安全を確保する為の約束である。

……どうか無事に天城さんの所まで辿り着ければ良いのだけれど。





.....
.....
.....
.....

「お待ちしております」

「……？ テレビを潜った筈なのに、何故かベルベットルームにやって来ていた。」

「ご心配召されるな。」

意識と意識の僅かな狭間の時間にお呼び立てしただけでございませぬ」

首を傾げていると、イゴールさんはそう説明してくれる。

「……よく分からないが、恐らくは大丈夫なのだろう。」

「……？ あれ……？」

イゴールさんとマーガレットさん以外にもう一人、ベルベットルームに誰かがいる。

「……このベルベットルームの、別の客人、なのだろうか？」

「貴女に訪れる災難……それは既に、人の命をも奪い取りながら迫りつつある……。」

ですが、恐れる事はございません。

貴女は既に、抗う為の『力』をお持ちだ。

「いよいよ、その『ペルソナ』の力……使いこなす時が訪れたようですな……。」

貴女のペルソナ能力は《ワイルド》……。

それは、正しく心を育めば、どんな試練とも戦い得る『切り札』となる力……。」

私共も、その為のお力添えをして参ります」

『ペルソナ』、《ワイルド》、『切り札』……か。

まあ、ワイルドカードは確かに切り札だけけれど。

「私の役割……それは、《新たなペルソナ》を生み出す事。

貴女の『ペルソナ』を掛け合わせ、一つの新たな姿へと転生させる……。」

言わば《ペルソナの合体》でございます。

貴女は一人で複数の『ペルソナ』を持ち、それらを使い分ける事が出来るのです。

貴女は時に紡いだ絆の中にご自身の《新たな可能性》を見出すでしょう。

時にそれらは、酷く捉え辛い事もある……しかし、恐れず掴み取るのです。

さすれば、それは貴女の新たなる力となる事でしよう」

《ワイルド》とは『ペルソナ』を複数使い分ける力……という理解で合っているのだろうか？

「お客様が生み出した『ペルソナ』……お客様の持つ《可能性》は私が記録してまいります。

お客様が一度手にした『ペルソナ』は何度でも記録から引き出す事が出来ますので、お気軽にお申し付け下さい」

そう言つてマーガレットさんは一礼した。

記録とか《可能性》とか言われても正直まだ何の実感もわかないし理解し難いが、恐らく今はそれらについて詳しく訊ねる時ではないのだろう。

「それと、もう一つ……今宵は、貴女の旅をお手伝いさせて頂く、新しい住人をご紹介致します。

マリー？」

そう言つてマーガレットさんはテーブルを挟んだ向かいに座つていた少女に声を掛けた。

「分かつてる。聞こえてる。よろしく」

ムスツとした声で答える彼女は、どうやらここの住人の方だったらしい。

……あれ？

……この子、前に何処かで……ベルベットルーム以外の場所で会った気がするのだが。

「君は……どうしてこの部屋に？」

「……知らない。どうでもいいよ、そんなの」

訊ねてみてもそう素っ気なく返す少女に、マーガレットさんが溜め息を吐いた。

「失礼致しました。

こちらは、マリーでございます。

彼女の魂は未だ幼く——」

「うるさい！ 余計な事言わないでよ」

マーガレットさんの言葉を遮ったマリーの態度に、マーガレットさんは深く溜め息を溢す。

「……ご覧の通りでございます。

ご無礼があるかも知れませんが、見習いのご理解頂いて、どうかお許し下さい」

別に……無礼も何も、他人からされる分に関しては元々あまり気にしていない。

正直、どうでも良い。

「フフ……覚えておいでですか？

以前私は申しました。

『貴女の運命は節目にあり、謎が解かれねば未来は閉ざされるやも知れない』……とね」

イゴールさんはそう言ってこちらを見やった。

……確か一番初めに出会った時、占ってくれたイゴールさんがそんな事を言っていた気がする。

「言葉の通りでございます。

戦いに敗れる以外にも、終わりは有り得る。

努々、お忘れになりませぬよう」

『謎が解かれねば』……か。

未来が閉ざされる……つまりは死ぬという事なのだろうか？

まあどうであるにせよ、この先に待ち受けているという『謎』とやらは一筋縄ではいかない様だ。

「次にお目にかかります時は、貴女は自らここを訪れる事になるでしょう。」

フフ……楽しみでございますな。

……では、その時までごきげんよう」

イゴールさんの言葉を最後に、視界は暗転した。

……

……

……

……

▲▼▲▼▲▼

……

……

……

……

気が付くとそこは、テレビの向こうの世界のスタジオだった。

ベルベットルームにいた時間自体は体感時間にして数分程だったのだが、実際に流れていた時間は極めて僅かな時間だった様だ。

クマは……何故か床をゴロゴロと転がっている。

人が来た事には気が付いている様だが、何をしているのだろう。

「見て分かんクマ？」

色々、考え事してるクマ。

クマの事とか、この世界の事とか、ハンニンの事とか。

それでクマはこんなにクマってるのに……。

あ、ダジャレ言っちゃった。うぷぷ」

寒いダジャレは置いといて、どうやらクマは自分について悩んでいる様だ。

深刻そうには見えないが、クマが悩み続けるようならば一度相談にのってあげるべきなのかもしれない。

「くっだらな事言ってる場合!?!」

こつちに雪子が居るんでしょ!?

今すぐ案内して!!」

天城さんの危機に気が立っている里中さんは、気が気ではない様子だ。

足をダンツと踏み鳴らし、クマを威嚇する。

里中さんの剣幕に気圧されたのか、怯えた様にクマはいそいそと案内し始めた。

◇◇◇◇◇

クマに案内されて辿り着いたのは、昨夜映っていたお城だった。

やはり天城さんはこの中にいるのだろう。

「あの真夜中の番組……ホントに誰かが撮っているんじゃないんだな?」

「バングミ……? 知らないクマ。

何らかの原因で、この世界の中が見えちやつてるのかも知れないクマ。

それに、前にも言ったでしょーが!

ココはクマとシャドウしか居ないんだってば!

誰かがトツてるとか、そんなの無いし、初めっからココはそういう世界クマ」

花村に訊ねられても、クマはそもそも『番組』というモノ自体が分かかっていない様子であった。

しかしキツパリと、誰かが撮影してるという訳では無く、ここがそういう世界だと言い切る。

……この世界にあるこの城が《マヨナカテレビ》には映っていた。

ならばこの世界と《マヨナカテレビ》には何らかの関係があるのは間違いないと思う。

しかし、その2つを繋ぐのは何なのだろう。

クマの言う事が正しいのならば、『マヨナカテレビ』とはこの世界の一部が何らかの要因により映ってしまっているものだという事になるが……。

では、何故一昨日の晩に、この世界には居なかった天城さんが映ったんだ……？

訪れた人の『心』が反映されるのならば、この世界の謎を……ひいては『マヨナカテレビ』の謎を解く鍵は『心』にあるのではないだろうか。

だがまあ、今はその事を深く考えている暇は無い。

天城さんの救出を最優先にしなくては。

だがしかし。

あれだけこちらにくる前に念押ししたというのに、天城さんを探しに里中さんは一人で飛び出してしまった。

韋駄天の如く駆け出す里中さんは、呼び止めてもそのスピードを落とそうとすらもしない。

その後を追う為に、こちらも城の中へと足を踏み入れたのだった。



城の中は妙に広い上に廊下がグネグネと曲がりくねっていて、現在地が掴み辛い。

しかもあちらこちらから『シャドウ』が襲い掛かって来るので気が抜けない。

それにしても里中さんは何処へ行ってしまったんだろう。

悲鳴とかは聞こえてこないし、今の所は恐らくは襲われてはいないのだろうけれど。

里中さんには《シャドウ》から身を守る術が無いのだから早い所合流しないといけないのに……。

もう何体目かも分からない《シャドウ》を斬り倒した時、不意に何処からか声が聞こえてきた気がして顔を上げた。

「……これは、天城さんの声？」

「へっ？ 天城の声？」

——……赤が似合うねって……

耳を澄ませば、天城さんの声だと判別出来る。

「こっちからだ。急ごう。」

……里中さんも恐らくそこに居る」

花村と頷きあつて、声がする方向へと走り出した。

◇◇◇◇◇

私、雪子って名前が嫌いだった……。

雪なんて冷たくてすぐ溶けちゃう。

儂くて意味の無いもの。

でも、私にはピッタリよね。

旅館の跡継ぎって以外価値のない私には……。

……だけど、千枝だけが言ってくれた。

『雪子には赤が似合うね』って。

千枝だけが……私に意味をくれた……。

千枝は明るくて強くて何でも出来て……。

私に無いものを全部持っている……。

私なんて……千枝に比べたら……。

千枝は……私を守ってくれる。

……何の価値も無い私を……。

私、そんな資格なんて無いのに……。

——優しい千枝……。

……………声はそこで止んだ。

◇◇◇◇◇

漸く広間の様な場所で茫然と立ち竦む里中さんを見付けたが、追いつくのが遅かったのか……。

里中さんは既に自分の『シャドウ』と対峙している所だった。

『優しい千枝……だってさ!』

歪んだ笑みをその顔に張り付けて、『シャドウ』は爛々と輝く瞳で里中さんを見据えている。

「だ、誰……………!?!」

戸惑った様に訊ねる里中さんの声を嘲笑うかの様に『シャドウ』は言葉を連ねた。

『あたしはアンタよ。アンタはあたし。』

笑えるねえ？

雪子が……あの雪子が？

あたしに守られてるって!?

自分には何の価値もないってさ!!』

里中さんの『シャドウ』が吐き出すのは、天城さんに対する歪んだ優越感と……そしてそれと背中合わせに存在する劣等感だった。

男子からの好意を寄せられるのは、天城さん。

勉強も出来る、家業の手伝いも立派に出来る……何でも出来る様に、里中さんには天城さんがそう見えていた。

そんな天城さんに《頼られている》……。

そこに、里中さんは優越感と自らのアイデンティティを感じてしまった。

しかし、そんな歪な状態が負荷にならない筈は無い。

それらは強い嫉妬となって『シャドウ』の形を取って今現れている。相反する様なそれを、悪意を滲ませた過激な言葉で言い募っていく『シャドウ』に、加速度的に里中さんは平静を失っていつている様だ。そして、ぶつけられた言葉を「嫌だ、違う」と里中さんは否定し、「見ないで、聞かないで」とこちらに懇願するのだった。

嫉妬。

そんなものは多かれ少なかれ誰だって持つてるし、自分に無い何かがある人を羨む事自体は、別にそう悪い事ではないと思っっている。嫉妬から他人を傷付けるのは、勿論良くない事ではあるけれど。誰かを羨む気持ちは、自分をより高めていこうと努力する為の原動力になる事だってある。

そして、他人に頼って貰えるというのは、自己の承認欲求を満たせるモノでもあるから、それを欲する気持ちも分かる。

だから、里中さんが抱いていたその気持ちを、悪いモノであるとは自分には思えなかった。

ましてや、それで失望するなんて有り得ない。

何故ならば、例えばそれが《頼って貰える》からだと思っっているのだとしても。どんなに嫉妬していても。

それでも、里中さんは決して天城さんを傷付けたりはしていないし、そして。

……『シャドウ』も決して、天城さんの事を『嫌い』だと、『友達ではない』のだとは、言ってないからだ。

……ああ、だけれども。これは、辛いだろう。

これが里中さんの『シャドウ』……認められずに抑圧された里中さんの一面だとするならば、他者がこの場に存在する今のこの状況は里中さんにとって何よりも辛いのかも知れない。

……暴走させずに受け入れるのが一番ではあるけれど、聴衆がいる上に天城さんの事で切羽詰まっている今の里中さんの状況では、どう止めようが無理であろう。

仕方無い……。

「花村……、戦う準備は出来てるか？」

花村が確かに頷くのを確認し、手の中にイザナギのカードを具現化させる。

そして遂に里中さんは、禁断の言葉を口にした。

「アンタなんか……アンタなんかっ、あたしじゃないっ!!」

そう言い放った直後に脱力した様に倒れる里中さんを、床に倒れる寸前に抱き止める。

高笑いをあげる『シャドウ』の姿は、轟々と吹き荒れる黒い風に隠れて、良くは見えない。

『そうよっ！ 我は影、真なる我！』

そうよ……そうよ、雪子なんてあたしがいなきや何にも出来ない……。

あたしの方が……あたしの方が、あたしの方がっ！

あたしの方がずっとずっとずっと上じゃないっ!!』

里中さんの『シャドウ』はそう叫びながらその姿を変えた。

全体的に黄色いボンテージ衣装を身に纏い、KKKの様な三角に尖った覆面で顔を隠し、八十神高校の女子制服を纏ったマネキンの様なもの数体を踏み台にしてその上に座っているその姿は、手にしている鎖と長い鞭なども相俟ってSMの女王にも見える。

長過ぎて床にまで散らばってしまっている黒く艶やかな髪は、何処か天城さんを連想させるものだ。

……『シャドウ』が抑圧していた心の表れだというのなら、里中さんの『シャドウ』がこの様な姿を取った事にもきつと意味が有るのだろうか。

力なく座り込んだ里中さんをクマに託して安全な場所まで退避させた。

今は兎に角『シャドウ』の暴走を止めなくてはならない。

直ぐ様イザナギとジライヤを呼び出して里中さんの『シャドウ』と対峙した。

『なにアンタら……ホンモノさんなんか庇っちゃって……。』

あたしの方がっ!! ずつと素直で正直なのに!!

そんな薄汚いサイテー女っつ!!

何の価値も無いのにつ!!!

こちらが里中さんを庇うのが気に障ったのか、『シャドウ』は苛ついた様に鞭を振り回す。

周囲の床に敷き詰められた豪華なカーペットを切り裂きながら、鋭い鞭の一撃がジライヤを狙うが、ジライヤはスルリとそれを避けた。

「いけっ! ジライヤっ!!」

花村の指示が飛び、ジライヤが旋風を『シャドウ』に叩き付ける。

弱点だったのか『シャドウ』は大きく体勢を崩した。

そこに畳み掛ける様にイザナギを突っ込ませて斬撃を浴びせかける。

……しかし、効いていない訳ではない様だが、あまり効果がない。

どうやら里中さんのシャドウは物理攻撃には強いらしい。

続け様に放った雷撃はちゃんとダメージになった様だ。

「花村、シャドウの弱点は風だ!」

そのまま風で攻撃して!!」

指示を飛ばすと花村はおうと頷き、再度旋風が巻き起こった。

それに体勢を崩された『シャドウ』の眼光が、不穏な光を帯びる。

『ごんのつ、ウジ虫がああっ!!』

ギラギラと蔑む様な眼光が花村を射抜き、『シャドウ』は鞭を持つ手を大きく振り上げた。

ビリビリと背筋に嫌な予感を感じる。

「花村! 一旦ジライヤ下げて!!」

何か仕掛けてくる!!」

花村に指示を飛ばすと同時に、イザナギを花村の側まで走らせ、そのコートの中に花村を匿わせた。

そして、全力で『シャドウ』から距離を取る。

その次の瞬間、周囲が白く染まった様に感じ、それと同時に鈍く痺れる様な感覚が身体中を駆け巡った。

電撃を喰らったのだ。

どうやら里中さんの『シャドウ』は電撃も扱えるらしい。

イザナギはある程度なら電撃のダメージを軽減出来るので、咄嗟の行動とは言え花村を庇ったのは悪くはない判断だった。

「あつつぶねええっ！ 鳴上、サンキューな!!」

指示を飛ばした瞬間に、反射的にジライヤを消していた花村が、危うく電撃を喰らいかけていた事に戦いた。

「電撃は私がかすめるから、花村は気にせず風で『シャドウ』に畳み掛けて！」

ここで一気に攻める！」

イザナギの力でジライヤの攻撃力を底上げしてから、イザナギを『シャドウ』に突っ込ませる。

風を切つて唸る鞭を手にした剣で捌きながらイザナギは『シャドウ』に肉薄した。

袈裟斬りにしようとイザナギが振りかぶったその剣を、『シャドウ』は鞭を絡める事で阻止する。

だが、そうやって止められる事は想定済みだ。

イザナギの動きを止めようとして生まれたその隙を付いて、こちらが完全にノーマークになっていた所を、『シャドウ』の土台となっているマネキンのバランスを崩す様にそのマネキン達の足を模造刀で薙ぎ払った。

元々マネキンのバランスは安定してはいなかったため、『シャドウ』は大きく体勢を崩し、床に尻餅をつく形で落下。

そこを強襲する形で強化された旋風が『シャドウ』を切り刻み、『シャドウ』は呻き声を上げた。

『舐めてんじやないわよ！ ウジ虫の分際でっつ!!』

ジライヤを電撃で迎え撃とうと鞭を振りかざした『シャドウ』の手に、模造刀を投げ付ける事でそれを阻止する。

更にダメ押し気味にイザナギの力で『シャドウ』の耐久力を下げた。

そこに花村が飛び込む。

「これで、止めだっつ!!」

ジライヤが放った風に吹き散らされたかの様に、『シャドウ』は元の
里中さんの姿に戻った。





あたしにとって雪子は何よりも大切な親友だ。

大切な雪子……。

あたしが守ってあげなきゃいけないんだ。

ずっとずっと雪子の傍に居た。

ずっとずっと雪子を守ってきた。

大人しい雪子が、嫌な事を押し付けられそうになっている時も。

男の子達にモテる雪子が、言い寄られて困ってる時も。

ずっとずっと……、あたしが、雪子の事を守ってきたんだ。

そんな雪子が、何者かに拐われて危険な世界に閉じ込められている。

このままだと、雪子が死んでしまうかも知れない。

そう考えた時、居ても立っても居られなかった。

雪子を助けるのは、他でもない、あたしの役割だ。

これだけは、絶対に、絶対に……譲れない。

そう、今こそ雪子を助ける時なのだ。

だから、雪子を助けに行こうとしていた鳴上さんと花村に付いて行って、二度と行きたくないと思っていたあの奇妙な空間に足を踏み入れた。

雪子がこの中に居るんだと思うと、悠長な事をしていられなかった。

だから、引き留める鳴上さんや花村を置いて、雪子を探す為に霧の中を只管駆け回った。

そう、全ては雪子を助ける為。

そう、その筈なのに……。

あたしにそっくりな『何か』に指摘された事を、何故か完全には否

定出来なかった。

けれどもそれを決して認める事は出来なかったから、……あたしはそれを否定した。



現れた怪物は鳴上さんと花村によつて倒され、後に残ったのは私に似た『何か』だった。

二人と奇妙な着ぐるみは、それを『シャドウ』と呼んだ。

さつきまでは口煩く感じる程まくし立てていたというのに『シャドウ』は急に押し黙り、何かを求める様な目であたしを見詰めてくる。

「何よ……急に黙っちゃって……」

勝手な事ばかり……」

「よせ、里中」

花村に制止され、思わず言葉に詰まる。

「だ、だって……」

あんなの、認める訳にはいかない。

だって、だって……雪子は、本当に大切な親友なのに。

なのに、そんな雪子にそんな事を思っているだなんて。

そんなの……、そんなのは……。

その時だった。

「別に、良いんじゃないか？

寧ろそんなに自分を責める位、思っではいけない事なのか？ それ

れって」

「えっ……っ？」

鳴上さんの静かな声が、嫌悪に陥りかけたあたしを引き戻した。

鳴上さんは一度黙ったまま佇む『シャドウ』に目をやってから、あたしを静かな目で見詰める。

「大切な友達でも、長く付き合っていれば色々思う所が出てきたって可笑しくはないし、別に駄目って訳でもないと思うけど。」

大切であるからこそ、親しい存在だからこそ、思ってしまう事ってあると思うし。

……それに、大好きな人に頼られたら嬉しくなるのって、ある意味当然じゃないのか？

それでももっと頼って欲しいって、そう思うのは里中さんにとって許せない事なのか？」

そう首を傾げて訊ねてくる鳴上さんには、嫌悪の色も何も見当たらない。

本当に他意なくそう思っているのだ。

「……色々なぐちゃぐちゃとした気持ちを取っ払って。」

それでもそこに相手を大切に思う気持ちが確かにあるのなら、きつとそれで良いんだと私は思う」

淡々と、だけど確かな思いやりを以て、鳴上さんはあたしに言葉を紡ぐ。

『シャドウ』は里中さんの全てではないけど、それでも里中さんの一面であるのは確かだ。

それを拒絶するのは……きつと里中さん自身にとっても、辛い事なんじゃないか？」

「そうだぜ里中。」

自分で自分を否定しちまうなんて、辛いだけだ。

嫌でもさ、向き合ってやろうぜ。

俺にもあつたからさ、同じような事。

だからさ……分かるよ」

鳴上さんどころか、花村にまでそうやって諭されてしまった。

………。……雪子は大切な友達だ。

これは間違いなく、本当。

それだけは、絶対だ。

………だけだ。

周りの人が雪子の容姿とか……あたしが持っていないものを褒め

る時、胸の何処かで疼く何かはずつとあった。

周りの男の子を惹き付けるモノを沢山持つてる雪子が……羨ましかった。

あたしの周りの男の子達が雪子しか見ていない事に気が付いた時は……悲しかった。

……自分には、何も無い様に思えた。

……そして……だからこそ。

……何でも持つてる様に見えた雪子に頼って貰える事が……堪らなく嬉しかった。

『友達』だから、大切な筈なのに。

『頼って貰える』から、大切になってきて……。

そして……。

………本当は、あたしにも分かっていた。

あれは……『シャドウ』は、あたしなんだって。

でも、認めたくなくて否定して……。

………だけど、何時までも目を反らし続けてはられない。

覚悟を決めて、あたしは『シャドウ』と向き合った。

「アンタは……あたしの中にいたもう一人のあたし……って事ね……。

ずっと見ない振りしてきた、どーしようもない、あたし……」

本当に………どうのしようもない。

大切な親友なのに、卑屈になって、でも見下してもいて。

ごちゃごちゃでぐちゃぐちゃの、醜い感情ばかり。

そんな、どーしようもない一面だけだ。

「でも、あたしはアンタで、アンタはあたし、なんだよね……」

そう。そんなどーしようもないのも、『あたし』なのだ。

………そう、今なら認める事が出来る。

シャドウは微かに頷いて、光に溶けていく。
そこに残ったのは、一枚のカードだった。

「これは……」

『ペルソナ』

里中さんを守るもう一人の自分……ってところかな
鳴上さんがそう説明してくれる。

『ペルソナ』——トモエ。

もう一人の、あたし……。

「あ、あのさ……あ……あたし。その、あんなだけど……。

でも、雪子の事、好きなのは嘘じゃないから……」

それだけは、どうしても分かっていて欲しかった。

そこだけは、絶対に譲れない一番大切な事だから。

「バーカ。そんなの、分かってるっつ」

あたしの言葉に花村は苦笑し、鳴上さんも「分かっているよ」と言
いた気に頷いた。

二人の反応に安堵して……気が抜けた瞬間、膝から力が抜けて座り
込んでしまう。

「お、おい、里中……」

「へーキ……ちよつと、疲れただけ……」

立ち上がろうとした所を鳴上さんに押し留められた。

「無茶は駄目だ。」

ちよつとどころの疲労じゃないよね？

花村、今日は一旦引き上げよう。

幸い雨が降る迄には多少の余裕がある。

今日明日を休息に費やす位なら問題はない筈」

鳴上さんがそう花村に言うのと、花村も同意する様に頷く。

「……だな。このまま無理すんのはヤバいだろうしな」

このまま帰ろうという方向で話が進んでいる事に、焦って声を上げ
た。

「か、勝手に決めないでよ！

あたし、まだ……行けるんだから……」

「無理しちゃイヤクマ！」

しかし今度は着ぐるみ……いや、クマがそれを止める。

そしてクマは雪子はこちらの霧が晴れるまで——向こうで霧が出るまでは安全なのだ。あたしを諭してきた。

でも……だからと言って……ここで帰る訳にはいかない。

……雪子は今も一人で……怖い思いしてるのに……。

だからこそ、行かなくてはならないのに……。

「でも雪子はまだ、この中にいるんでしょ？」

あ、あたし……さっきのが雪子の本心なら、あたし……伝えなきゃいけない事がある。

あたし、雪子が思ってるほど強くない！

雪子が居てくれたから……二人一緒だったから大丈夫だっただけで、ホントは……」

焦燥感からそう溢すと、鳴上さんは「駄目だ」とキツパリ首を横に振った。

「それなら、尚更このまま行かせる訳にはいかない。

このまま無理して里中さんが倒れたら、誰がそれを伝えるんだ？」

「そーだぜ里中。」

今天城を助け出す事が出来るのは、この世界を知っていて……ここに来る事が出来る俺達しかいないんだ。

俺達は天城を助け出す為にも失敗は出来ない。

ここで無理を通せば結果的に天城の身を危険に晒す事にも繋がるんだ」

結局は、鳴上さんと花村の説得を受け、今日だけは引き返す事を受け入れた。





あれから、里中さんは約束を破って単独行動を取り、更には『シャドウ』を暴走させてしまった事を深く反省した。

今回は運が良かっただけで、一歩間違えれば里中さんもこちらも死んでいただろうから、再発だけは何としてでも防がねばならない。

まあ結果だけを語るなら、里中さんの『シャドウ』が現れる、というアクシデントは起こったものの最悪の事態までには至らず、本来の目的であった天城さんの救出こそは果たせなかったが、寧ろ戦力が増えたと言う面で見れば、決してマイナスではないのだが……。

その後三人で話し合って、彼方の世界では決して一人では行動しない事を取り決めた。

ついでに自分が暫定的にリーダー、と言う事にもなったが、そこに關しては花村が特にそう推すのだし里中さんも推すので民主主義的多数決の正義によって拒否するものもどうだと言う話になる。

それにしてもリーダーか……。何とも責任重大だ。

まあ、普段通りに行動しても大丈夫だろう、多分……。

……あの城の中で聞いてしまった、天城さんの『心』の声。

そこに偽りは無いと考えると、天城さんの心の決して少なくはない部分を里中さんが占めているのは間違いないだろう。

……天城さんが、その心の奥に何を隠していたのか。

あの『シャドウ』と思わしき天城さんは、一体どんな思いが形を成したもののなのか。

それは、今の段階では分かり様もない。

特に自分は天城さんと出会ってから日がまだ浅いのだ、そもその情報量が絶対的に少ない。

だが、その心を解く鍵は、里中さんにあるのではないだろうか。

そんな事を考えながら料理をテーブルに並べていると、丁度叔父さんが帰って来た。

「……なあ、悠希。」

確かお前のクラスに、天城雪子って生徒がいたよな？

前に一緒に帰ってただろ？」

食卓についた叔父さんは、食べ始める前に一度こちらを見やってから、そう尋ねてきた。

しかし一体、何故突然に……？

「天城さん？ ……彼女がどうかしたんですか？」

行方不明……という事になってはいるのだろう。

実際は彼方の世界に囚われているのだが。

しかしそれを警察は知る由も無い。

現時点では、文字通りに自分達しかあの世界の事を知らないのだ。

……尤も、天城さんをあの世界に放り出した【犯人】もまた恐らくはこの街の何処かで見ているのだろうが。

「あー……彼女から何か聞いたりしてないか？」

どうにも足取りが掴めなくなってるらしくてな。

……居場所に何か心当たりとかはないか？」

心当たりと言うか、何処に居るのかは知ってはいるが、それを言う訳にはいかないし、そもそも信じては貰えないであろう。

叔父さんは現実主義者だ。実際にそれを目の前で見せれば信じてはくれるだろうが、確たる証拠も示さずにそれを主張した所で高校生が若気の至りで変な妄想をしているだけとしか捉えてはくれないだろう。そして一度そう言った「認識」をされてしまうとそれを正す事は難しい。

……今日の前でテレビに手を突っ込んで彼方の世界の事を示そうにも、そうなれば確実に叔父さんは彼方の世界に連れて行けと言うだろうし、更に言う自分たちの様な高校生が命の危険もある様な事に関わっている事に絶対に難色を示す。

叔父さんが「良き大人」であるからこそ、その事について話辛い部分がある。

少なくとも今、天城さんの救出の為に実際に動けるのは自分たちしか居ないのだ。そこで無駄に行動を制限される訳にはいかない。

何時か叔父さんに事情を話さねばならぬ時が来るのだとしても、それは今では無いと思うのだ。

その為、少し心苦しくはあるが叔父さんの問いにはぐらかす様に返す。

「……何か、とは？」

「……すみませんが、天城さんは私がこつちに引越して直ぐにご実家の手伝いで忙しかったみたいなので、あまり話したりする機会はありませんでしたし、天城さんの行先に心当たりは無いですね」

そう答えると、叔父さんは頭を掻きながら僅かに溜め息を吐いた。

「……そうか。」

「……変な事尋ねちまったな。すまん」

「……どうにも違和感を感じる質問だ。」

失踪した人を案じるというよりも、まるで……。

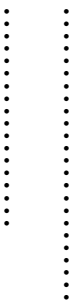
「……今の天城さんの状況は、被害者達の遺体が発見される前の状況と酷似している。」

叔父さんの事だからそれを心配しているんじゃないのかと思ったのだが、……どうにも怪しい。

だが、どうしてそう感じたのかの説明は付かず、モヤモヤした気持ちでその日はさっさと眠りに就いた。



【2011／04／18】



……
……

天城さんが失踪してから三日目。

里中さんが『シャドウ』を受け入れたその翌日、里中さんを含めた三人で再びテレビの向こうへと訪れた。

万が一を考えてもう一日は里中さんの休養にあてたかったのが本音ではあるものの、『もう回復したしじつとしていると逆に気が滅入ってしまう』という里中さんの意見を無視する訳にもいかず、実際体調面に問題はなさそうであったので、昨日の今日ではあるが早速天城さんの救助に向かう事になった。

里中さんの『ペルソナ』——トモエは物理攻撃を得意とする生粋のアタッカーの様だ。

トモエ……恐らくは木曾義仲と共に戦ったかの有名な巴御前が元となつているのだろう。

それを言うのならば花村のジライヤも、江戸時代の創作話に出てくる義賊児雷也が元なのだろうけれど。

しかし、何故『ペルソナ』が歴史上の有名人や神話や創作話の中の登場人物を模しているのだろう。

……まあ、考えた所で早々に答えが出る様な物ではないのだろうけれども。

城の中の構造は昨日訪れた時とはやや異なる様だ。

昨日はあつた筈の通路や部屋がなく、代わりに新たな部屋や通路になつている。

クマ曰く、『心』とは常に同じに定まっている物ではない為、変化してしまうのは仕方無い事なのだそうだ。

……つまりは、入る度に地形が変わる『不思議なダンジョン』と同じ、という事なのだろう。

ならば通路等の構造を把握してもあまり意味はない。

マップニングしようと持参した紙とペンの出番は無さそうだ。

特にこれといった問題はなく次々とフロアを踏破していく。

天城さんがいるのはクマの見立てでは最上階らしい。後どれ程登らなくてはならないのかは分からないが、中々良いペースだと思われる。

城の中を徘徊する様々な姿の《シャドウ》は、花村の『シャドウ』や里中さんの『シャドウ』と比べれば然程強くない。

『ペルソナ』に頼らずとも、武器による攻撃でも凌げる程だ。

『ペルソナ』を使うとどうしても疲労が溜まってしまふ為、有り難い事ではある。

勿論、だからと言って油断出来る訳でもないのだけれども。

現在の武器は模造刀に模造短刀、それに普通の革靴。

武器としては些か頼りない。

今度何か調達しといた方が良さだろう。

……まず調達先から探さなくてはならないだろうが。

◆◆◆◆◆

——『もうすぐ王子様が私を迎えに来てくれます』

——『ふふ……私は何時までもお待ちしています……何時までも、何時までも……』

——いらつしやいませ。

——本日は天城屋旅館にお越し頂き、誠にありがとうございます。

——こちらがお部屋でございます。

——何か御用がございましたら、何時でもお申し付け下さい

——『王子様、早く私を連れ去って！』

——『何処か……私の事なんか誰も知らない世界に……』

時折姿は見えないが、天城さんの声が響いてくる。

これは……あの商店街で聞こえてきた小西先輩達の声と同じく、『シャドウ』の……天城さんの心に押し込まれていた声なのだろうか。

「王子様」を待ち望む声、旅館の手伝い中らしき天城さんの声、昨日聞

いた、里中さんへの思い、

……そして、『シャドウ』が言っていた《王子様探し》。

……これは俗に言う所の、『シンデレラ・コンプレックス』——《依存型逃避願望》、というやつだろうか。

勿論決めつけるのは早計だし、人の心理なんて簡単に何かに当て嵌める事が出来る程単純な物ではないのだからそれだけではないだろうけれども。

とは言え、考えておく事が無意味である訳でも無い。

天城さんが『シンデレラ・コンプレックス』を抱いているという前提で考えて。

「王子様」に望むのは、『自分の事を知らない場所へ連れ去って貰う事』……つまりは『現状』からの逃避という事だろうか。

天城さんが逃避したい「現状」というのは……推測するに、実家の旅館の事なのだろうか？

昨日の声から察するに、天城さんが里中さんへかなり心を寄せているのは明白な事実である。

ならば、依存している相手である里中さんが天城さんにとっての「王子様」に当たる筈ではあるのだが、そうではない様だ。

天城さんが求める「王子様」が里中さんだとするのなら、態々《王子様探し》などする必要はないのだから。

尤も、「王子様」とやりに求めるものが、現状からの解放であるのなら、里中さんには限りなく不可能に近い話であるだろうから仕方がないだろうけれど。

……いや、結論を急ぎすぎている、か。

幸い思索に費やす時間の猶予はあるのだから。

今は……天城さんの下へ辿り着く事を最優先に考えよう。



「この扉の向こうに誰か居るクマ！」

大きな扉の前に辿り着いた時、クマがそう警告してきた。

誰か。天城さんか……その『シャドウ』だろうか。

どちらにせよ、この先に進むしかない。

扉を開け放った先で待っていたのは、マヨナカテレビに映っていた

天城さん……の『シャドウ』だ。

『うんふふ……ふふ、あははははは！』

ああ、サプライズゲスト？

どんな風に絡んでくれるの？

それとも、もしかして王子様？

なら、どうか私を助けてください！

私は囚われの身なんです！』

豪華なドレスに身を纏い胸の前で祈る様に手を組む『シャドウ』は、

それだけを見ればまるで夢見る乙女の様ではあるが、ニヤニヤと浮か

べた笑みがそれを台無しにする。

何か仕掛けてくるかも気なのかもしれない……。

今にも飛び出しそうな里中さんを手で制し、『シャドウ』の出方を窺

う。

『んふふつ、王子様ならきつと……きつと、どんな困難な道のりも乗り

越え私を解き放つてくれる筈……。

勿論、こんな衛兵に負ける筈なんてありませんよね？』

『シャドウ』が手を挙げると、濁った闇の塊の様な何かが現れ、それは

騎士の様な異形の姿を取って目の前に立ちはだかった。

足が無く宙に浮いた馬の様なものに跨がり、黒い甲冑を身に付けて

巨大な騎乗槍を携えたその《シャドウ》は、天城さんの『シャドウ』を

守る様にランスを構える。

……姫を守るナイト、のつもりか。

『んふふ、盛り上がって参りましたっ！』

さてさて、私は引き続き王子様探し！

一体何処に居るのでしょうか！

こう広いと、期待も高まる反面、中々見付かりませんね〜！

あ、それとも、この霧で隠れんぼ？
よし、捕まえちやうぞ！

それじゃ、再突撃、行つてきます！

うふ、王子様、首を洗つて待つてろヨ！』

そう言つて天城さんの『シャドウ』は奥の階へと去つていった。

追い掛けようにも騎士の《シャドウ》がそれを阻む。

……こいつを倒すしかない様だ。

騎士の《シャドウ》は……見るからに固そうだ。

物理攻撃に耐性があるのかは分からないが、どのみち一寸やそつと
じゃ倒せる相手ではないだろう。

花村や里中さんの『シャドウ』達とは比べるべくもないが、ここに
来るまでに戦つてきた《シャドウ》達とは一線を画する威圧感を放つ
ている。

世に言う「中ボス」的な存在なのだろう。

……正面きつて戦うのは、ランスのリーチやその刺突力を考えれば
得策ではない。

距離をとつて『ペルソナ』の魔法攻撃で攻めるのが無難な戦い方だ
ろうか。

「花村、風の魔法をメインに使つて。

くれぐれも正面には回らないで。

串刺しにされるから」

「こちらの指示に花村は頷く。

「了解！ しつかしゴツツイやつだなあ」

「恐らくはパワータイプだと思う。」

「ヤツの攻撃範囲には十分注意して」

「花村と里中さんは、了解とばかりに頷いた。

「鳴上さん、私はどうすれば良い？」

「里中さんは……確か、氷の魔法も使えたよね？」

「なら、それをメインに立ち回つて」

「う、あんまり魔法攻撃は得意じゃないんだけどな……」

「こちらの指示に若干苦い顔をする里中さんに、重ねて説明する。」

「確かに、里中さんが最もその実力を発揮出来るのは接近戦。

だけど、あの《シャドウ》はさつきまで戦ってきた奴等とは違う。相手の手札も分からない内から闇雲に接近戦を仕掛けるのは危険。遠距離から攻めて、相手の出方を窺ってから仕掛けていこう」

「そだね。うん、分かった。」

鳴上さんの判断を信じるよ」

やはり騎士の《シャドウ》は見た目通りのパワータイプだった。

物理、雷、風、氷のどれもが弱点ではなかった様だが然りとて耐性があった訳でもなかったらしく、《シャドウ》の体力はジリジリと削れていっている。

自身の攻撃力を上げる技を使ったりして強化された一撃を繰り出しても来たが、『ペルソナ』による防御で凌いだり、事前に動きを予測して回避したりする事が出来る程度には対処可能な動きだった。

少々時間は掛かったものの、特にこれといった大きな負傷もなく騎士の《シャドウ》を倒す事が出来た。

魔法攻撃も使った為多少の疲労はあるが、それも問題はない範囲に収まっている。

二人に確認をとった所、二人ともこのまま天城さんの搜索を続ける事に合意したので、僅かながら休息を挟んでから再び搜索を再開する事となった。



天城さんの『シャドウ』を見掛けた階から更に何階か踏破して、やつとの事で最上階と思われるフロアへと辿り着いた。

「間違いないクマ。この先にいるクマよ。」

あと、あの子の『シャドウ』も一緒にいるクマ」

クマはそう確信を込めた目で頷いた。

「この先に雪子が……」

探し続けた天城さんがこの先に居ると知り、焦る気持ちもある反面、里中さんはほんの少しだけだが迷っていた。

この先には、天城さんだけではなく、天城さんの『シャドウ』も居る。

天城さんが抑圧してきたもの。

それを直視するのだ。

如何に確固とした思いがあれど、他者の心の内を覗くにも等しい行為に迷いが生まれるのは、致し方無い事ではあろう。

『シャドウ』が何を仕掛けて来るかは分からない。

……注意していこう」

それでも、この先に行かない事には何も成す事は出来ない。

そう決意して、大扉に手をかける。

「ああー！」

「……うん。絶対、雪子を助けよう!!」

迷いを振り払った目で、里中さんは確りと頷いた。



「雪子ー！」

扉を開け放ち広間へと乗り込んで目にしたのは、天城さんとその『シャドウ』が向かい合っている光景だった。

まさか、既に……!?

とは思ったものの、不穏な気配は漂わせつつもまだ「暴走」しているという風には見えない。

間一髪、なのだろうか。

『あらららららあ？ やっだもう！』

王子様が、三人も！

もしかしてえ、サプライズゲストの方達？

いや〜ん王子様だったなんて！
ちやんと見とけば良かったあ！』

広間の中でも数段高い場所にある玉座からこちらを見下ろしながら、天城さんの『シャドウ』は媚びる様な声音と視線でこちらに訴えかけてきた。

『っーかあ……雪子ねえ、どっか行っちゃいたいんだあ。

どっか、誰も知らない遠くう。

王子様なら、連れてつてくれるでしょお？

ねえ、早くう』

「むっほ？　これが噂の『逆ナン』クマ?!」

クマは何かを勘違いしている気がするのだが、今はそれを訂正してあげている余裕は無い。

「三人の王子様って……男は花村しかないけど……？」

まさかあたしと鳴上さんも入ってるワケ……？」

「クマもオトコでしょーが！」

「でも『王子様』は無いな……」

「間違いなく里中さんと私と花村、だろうな」

クマはそもそも頭数に入っているかすら怪しいだろう。

それに……多分『シャドウ』の言う「王子様」に、性別は関係ない。

『千枝……ふふ、そうよ。

アタシの王子様……いつだってアタシをリードしてくれる……。

千枝は強い、私だけの王子様……』

陶醉する様に、夢見勝ちな少女の様な表情で、『シャドウ』は里中さんの事を語る。

……だが。

微かに落胆を混ぜた瞳で、『シャドウ』は里中さんを見た。

『……王子様「だった」』

「だった……？」

「……」

「だった」……か。

やはり、天城さんにとつての「王子様」……要は依存する相手は、里中さんであったのは間違いない様だ。

ただし、「だった」という過去形が示す様に、今現在はそうではない。何故なら、……里中さんでは「王子様」に求めているものは満たせないから。

『結局、千枝じゃダメなのよ！』

千枝じゃアタシを、ここから連れ出せない！

千枝じゃアタシを救ってくれない!!』

「雪子……」

「や、やめて……」

微かに哀しみを含んだ里中さんの視線から目を逸らしながら、天城さんは『シャドウ』の言葉を制止しようとする。

『シャドウ』の言葉を聞くのが耐えられないのか、それとも……それを里中さんに聞かれているのが辛いのか……。

どちらなのだろう……。

……いや、どちらにせよ、天城さんが『シャドウ』を受け入れられていないのには変わらない、か。

『老舗旅館？ 女将修行!』

そんなウザい束縛……まっぴらなのよ！

たまたまここに生まれただけ！

なのに生き方……死ぬまで全部決められてる！

あーやだ、イヤだ、嫌あーっ!!』

「そんな、事は……」

甲高い声で抑圧していた感情を暴露していく『シャドウ』に、天城さんは弱々しく首を横に振って否定の意を示す。

『どっか、遠くへ行きたいの……』

ここじゃない、どこかへ……。

誰かに、連れ出して欲しいの……。

一人じゃ、出て行けない……。

一人じゃ、アタシには何も無いから……』

「そんなこと、ない……」。

やめて……もう、やめて……」

『希望もない、出てく勇氣もない……』

うふふ……だからアタシ、待ってるの！

ただじーつと、いつか王子様がアタシに気付いてくれるのを待ってるの！

どこでもいい！ どこでもいいの！

ここじゃないなら、どこでも！

老舗の伝統？ 町の誇り？

んなもん、クソ食らえだわッ！』

「……」

現状を嫌だ、と思っても、自分からは動こうとはしない。

……立ち向かう事も……逃げ出す事すら、自分自身ではやろうとはしない。

ただ、「誰か」が現状を変えてくれるのを待っているだけ。

その「誰か」を探す努力をする訳でもなく。

……それは、《自分には何もない》という思いからなのだろうか。

何故、そう思ってしまうのだろう……。

《何もない》、なんて事はきつとそれこそ有り得ないのに。

勿論、傍目から見るとの評価と自身での評価が喰い違っているのなんておかしくも何ともないのだけれど。

……そこに、天城さんの悩みの根本がある気がする。

「そんな……」

『それがホンネ。

そうよね……？ もう一人の「アタシ」！』

「ち、ちが……」

「よせ、言うなッ！」

花村が天城さんを止めようと声を上げるが、間に合わない……。

「違っ！」

あなたなんか……私じゃない！」

天城さんは、「禁句」を口にする。

そして天城さんが『シャドウ』を否定した途端、濁った影の奔流が天城さんのシャドウを包み込んだ。

虚脱した様に力なく座り込む天城さんの身体を受け止めて、クマに託して安全な場所まで退避してもらおう。

『うふふふふふふ！』

いいわあ、力がみなぎってくるう！

そんなにしたら、アタシ……。

うふ……あはは、あははははは!!』

『シャドウ』の狂った様な笑い声が響き渡る。

『我は影……真なる我……』

さあ王子様、楽しくダンスを踊りましょう？

ンフフフフ……』

影の奔流が治まったその場所に居たのは。

豪華なシャンデリアと一体化した鳥籠の中から身を乗り出す、深紅に染まった翼を持つ巨大な人面鳥だった。

天城さんの姿だった時の名残であろう長い黒髪を靡かせながら、シャドウはこちらを睥睨する。

『シャドウ』は飛び立とうとするかの様に幾度も羽ばたくが、それでも鳥籠からは飛び立たない。

……籠の扉は最初から開いているというのに。

それは……。

「……花村、鳴上さん。

……きつとあの『シャドウ』を雪子に生み出させてしまったのはあたしだと思う。

その責任は、あたしが果たすよ。

けど、……雪子を助ける為には、悔しいけどあたしの力だけじゃ足りない。

だからお願い、あたしに力を貸して!!」

翼をためかせる『シャドウ』を見詰めながら、里中さんはそう頼んできた。

……そんな事は、頼まれるでもない話だ。

その為に、自分たちは今ここに居るのだから。

「そんなの、里中に頼まれるまでもねーよー!」

「花村の言う通り。」

……それに、きつと里中さんだけのせいじゃない。

天城さんの周りにいた人全員が、きつと同罪。

……だから私も、その『責任』の一端を果たすよ」

「うん、……ありがとう、二人とも。」

待ってて雪子。……あたしが全部受け止めてあげる!」

親友の心の闇を受け止める覚悟をした里中さんは、己の『ペルソナ』を呼び出して異形の『シャドウ』と対峙する。

『あらホントお……?』

じゃあ私も、ガッツリ本気でぶつかってあげる!!

「偽物」の王子様なんて、もういらぬ!……!」

いらつしやい……アタシの王子様!!」

そう『シャドウ』が呼び掛けると、騎士の《シャドウ》を呼び出した時の様に濁った闇の塊が現れ、それは小柄な人形を成した。

二頭身のずんぐりとした体に、ぱつっんとした金髪。

小さな金の冠を被り、深紅のマントを羽織って、レイピアの様な細身の剣を手に行っている。

童話の挿し絵に出てきそうな、デフォルメされたキャラクター染みた『王子様』だ。

『王子様』は手にしたレイピアをしならせながらこちらに肉薄してきたが、寸での所でイザナギと鏝迫り合いになり、膂力の違いからか耐えきれずに吹き飛ばされて床を転がる。

だが直ぐ様体勢を立て直し、『王子様』はもう一度レイピアを軽く振るうと、先程の衝突で僅かながらも『王子様』の負ったダメージはほぼ回復してしまった様だ。

どうやら回復の術も持ち合わせているらしい。

厄介な事だ。

『王子様』は天城さんの『シャドウ』を守るかの様に鳥籠を背にして立ちほだかった。

……だがその姿は、天城さんの『シャドウ』を鳥籠から出さない様にしている風にも見えてしまう。

……「これ」が天城さんの理想とする『王子様』、なのだろうか。

天城さんの《理想》の『王子様』……。

回復役から倒す、というのはゲームに置いては定石中の定石だけだども。

でも、それ以上にこの『王子様』は排除しなくてはならないだろうと思うのだ。

……きつと、天城さんが『シャドウ』と向き合う為には『王子様』なんて、必要ないだろうから。

「……取り敢えず『王子様』のシャドウを先に倒そう」

「うん。……あんなの、『王子様』なんかじゃない」

ジライヤの疾風が、トモエの鋭い一撃が、イザナギの雷撃が『王子様』を穿つ。

回復する力があっても、それを使う暇がないのならあっても無いのと同然だ。

存外耐久性はあった様で、まだ余力はある様だがどうやら電撃が弱点だったらしく、痺れているのか『王子様』は動かない。

『王子様っ!!』

アンタら……アタシの王子様になんて事を!!』

『シャドウ』が怒り狂って鳥籠ごと体当たりしてきたのを、イザナギとジライヤが受け止めた。

更に、イザナギの身体を踏み台にして駆け登り、『シャドウ』の翼の付け根を狙って模造刀を叩き付ける。

その痛みに『シャドウ』は悲鳴を上げて鳥籠の扉を固く閉ざした。

「っ、違うっ!!」

こんな奴、雪子の『王子様』でも、何でもない!!」

『シャドウ』の動きが抑えられたその隙に、里中さんはそう叫ぶ様に声を上げながら動かない『王子様』に向かって駆け出す。

「アンタなんかがいるからっ！」

雪子は何処にも行けないんだーっ!!」

きつと、その言葉には様々な思いが込められていた。

里中さんの渾身の蹴りが『王子様』に突き刺さり、大きく跳ね上げさせる。

そして間髪入れずに、『王子様』の身体をトモエの薙刀が切り裂いた。

その一撃に耐えきれなかったのか、『王子様』は霧散し跡形もなくなる。

『そんなっ！ 王子様！ 王子様……っ!!』

『シャドウ』は再度『王子様』を呼ぶが、闇が再び現れる事はなかった。

『お願い、王子様……っ！』

……何で、何で誰も来てくれないの……？

王子様はっ、……王子様はアタシを守ってくれる筈なのにっ……!!』

「違っっ！ 守ってないっ!!」

アイツは、雪子を守ってなんていないっ!!

守るフリをして……、雪子をそこに閉じ込めているだけっ！

……自分の為だけにっ!!」

焦った様に王子様を何度も呼ぼうとする『シャドウ』に、里中さんは痛みを噛み締める様に言葉を掛ける。

『違っ！ そんな事は……っ!!』

「天城さんの《鳥籠》の戸は開いている。

本当は何処にだっつて飛んでいける。

天城さんがそう望むのなら……『王子様』なんて居なくなっつて、例え一人でも、そこから飛び立てる筈だ」

……勇気が無い、希望が無い……。

他でもない……そう思う……思い込んでいる天城さんの心が、天城

さん自身を《鳥籠》に縛り付けてしまっているのだ。

『アタシは……、アタシは……!!』

「あたしが……アイツみたいに雪子を閉じ込めてしまっていたから……、あなたが飛び立てなくなってしまったっ!!」

『嘘っ、嘘よオオっ!!』

「っ！ 里中さんっ!!」

里中さんの言葉に動揺したのか、『シャドウ』は大きく幾度も羽ばたいた。

ブワツつと舞い上がった『シャドウ』の羽根が辺りを埋めつくした次の瞬間、業火となって辺りを埋め尽くす。

炎の効果範囲にいたとはいえ、咄嗟の判断でイザナギのコートの中に匿った里中さんは何とか無事である。

それと引き換えに、焼け付く様な痛みが全身を襲った。

……イザナギには火炎に対する耐性は無い。

つまり、ダメージは軽減されずにそのままイザナギに伝わる。

フィードバックで返ってくるダメージも、以前電撃を受けた時の比では無い。

「っ、イザナギっ!!」

イザナギに里中さんを抱えさせて一旦『シャドウ』とは距離を取る。

「里中っ、鳴上っ!! 大丈夫かっ!」

攻撃を予測して、何とか効果範囲から離脱出来ていた花村が慌てた様に駆け寄ってきた。

「うん、あたしは何とか……。」

イザナギが、鳴上さんが守ってくれたから……」

「私は……。私は、大丈夫だ。」

……問題無い、戦える」

「っ、鳴上……! 何が『問題無い』、だ!

この手……火傷しているじゃないかっ!」

確かに花村の指摘通り、『ペルソナ』へのダメージのフィードバックにより手には軽い火傷の痕がある。

痛む範囲から恐らくは手や腕だけでなく服で隠れている部分にも

結構な広範囲に痕が出ているだろう。

これは……菜々子ちゃんに見られたら言い訳に困るだろうな。

暫くは一緒にお風呂に入ってやれそうにない。

そんな事をぼんやりと思う。だが、それだけだ。

「それでも、戦うのには問題無い。

戦えるなら、大丈夫。

今は、『シャドウ』を止めないと。

このままだと、焼け死んでしまうかも、しれない」

炭化してる様なレベルの火傷だと大問題だが、別にそうではない。

今は天城さんの『シャドウ』を制圧する方が大切だ。

天城さんが向き合って受け入れるかどうかは別にして、『シャドウ』

の暴走を鎮めない事には仕方がない。

このまま景気良く業火を巻き起こさせていると、そう遠くない内に

部屋中が炎に埋め尽くされる。

いや、そうなる前に一酸化炭素中毒とか酸欠で死ぬかもしれない

が。

「ジライヤっ！」

問題無い、と言ったというのに花村はジライヤに回復の術を使わせ

る。

元々大した負傷ではなかったからか、火傷は跡形もなく消え失せ

た。

「……ありがとう」

「……次からは怪我したらちゃんと見えよ」

何処か呆れた様に花村は言う。

別に、そんなに無理しているつもりはない。

痛いのは嫌だし、そんな事で嘘や誤魔化しを入れる必要もない。

ただ単純に物事の優先順位という物を考えただけだ。

この程度の火傷の痕など放置したところで、悪化しようはないのだ

から。

治療なら後からでも間に合う。

それより今は『シャドウ』をどうにかしなくてはならないのだ。

とは言え、花村のその気遣いは純粹に嬉しかった。

里中さんに『王子様』を否定されて動揺しているのか、先程から『シャドウ』は闇雲に焰を振り撒いている。

こちらを狙っているものではない為効果範囲外にいれば全く問題はないのだが、これではこちらも手の出しようがない。

『ペルソナ』には炎に対する耐性があるものはいないし、それに居たとしても完全に無効化する位の耐性でないと、この火の海の中に飛び込ませる事は出来ない。

更に、『ペルソナ』には、天城さんの『シャドウ』の攻撃範囲外から攻撃して『シャドウ』にダメージを負わせられる程の射程と威力のある攻撃手段は現状ない。

……困ったな。

いつそかなりのダメージを覚悟して、イザナギで特攻を掛けるべきなのだろうか。

一直線に突っ切れば、……まあ大火傷程度で済むだろうし。

「……」

痛みを覚悟してイザナギを炎の海に特攻させようとしたその時だった。

——……貴女のペルソナ能力は《ワイルド》……。

——それは正しく心を育めば、どんな試練とも戦いうる《切り札》となる力……。

——貴女はお一人で複数の《ペルソナ》を持ち、それらを使い分ける事が出来るのです。

——時に貴女は紡いだ絆の中に《新たな可能性》を見出すでしょう。

——ペルソナとは貴女の《可能性》……。

——貴女は既に絆を築き、そこに可能性を見出だしていらっしやる……。

——さあ、今こそ……それを掴み取るのです。

……何故かイゴールさんの声が聞こえた気がした。

「……」

……イゴールさんの言った事が確かなら、自分には『イザナギ』以外にもペルソナが居るといふ事になる。

そして、既にある《絆》の中に、それらを見出す事が出来る、と。

……居る、のか？ 自分の中に……？

己の心に問い掛けると、イザナギの他に確かに『何か』の反応があった。

それを掴み取ろうと集中する。

すると。……何故か心に浮かんできたのは。

『お前となら、犯人見付けて、この事件を解決出来そうな気がすんだ』

そう言つて手を差し出してくる花村の顔だった。

……唐突に理解した。

恐らく今掴み取ろうとしている『ペルソナ』は、花村との絆がくれた、《可能性》の形なのだと。

……そうか、これが……。

「……………」『シャドウ』にダメージを与えられなくても構わないから、彼処まで風を届かせる事は出来るか？」

「やってやれない事はねえとは思いますが……。

でも、そよ風位にしかならないんじゃないかねえかな」

「それで十分。」

合図をするから、タイミングを合わせて風を起こして「分かった」

何故と理由を訊ねる事もなく、花村は頷き返してくれた。

……それが花村が示してくれている《信頼》というものなのだろうと思うと、胸が少し熱くなる。

「里中さん。」

私が何とかして炎を消すから、そのタイミングで駆け抜けて。そして、天城さんの『シャドウ』に伝えてあげて。

里中さんの想いを」

天城さんに……天城さんの『シャドウ』に、想いを届けるのは、今この場に於いて里中さん以上の適任者は居ない。

天城さんの親友で。

大切にする余りに何時しか歪んだ気持ちすら抱えてしまう様になつてしまつていた。

他でもない里中さんにしか、恐らくは出来ない事だ。

届けなくてはならない。

天城さんの為に……そして里中さん自身の為にも。

全力で意識を集中させる。

己の持てる全てで、今出来る最高の一撃を繰り出す為に。

この焰の海を征し、あの『シャドウ』までの道を作り出す為に。

失敗は出来ない。

恐らくは、チャンスは一度切りだ。

だけれども、……何故か理屈では説明がつかないのに確信にも似た思いで、失敗など起こり得ない、と感じていた。

(……チェンジ)

己の内にあるもう一つの『ペルソナ』を表層に引き摺り出す。

(さあ、行くこうか)

「来い！ 『ジャックフロスト』っ!!」

新たなカードを握り潰して現れたのは、ヨーロッパに伝わる霜の精霊を模した雪だるまの様な『ペルソナ』。

【魔術師】のアルカナに属する、新たなる可能性の形。

何が出来るのか、何が得意で苦手なのか、全てが誰に説明されるでもなく頭に浮かぶ。

「花村!!」

「おうっ! 任せとけ!!」

行くぜ、ジライヤツツ!!」

ジライヤが巻き起こす風に合わせて、『ジャックフロスト』にその力を発現させた。

無数の氷塊を巻き込み吹き荒れる風が、焔を呑み込みそれを打ち消していく。

風に乗って舞い踊る氷塊は、『シャドウ』の翼を凍てつかせた。そして、荒れ狂う風が収まった後には。

——道が、出来た。

「今だ、里中さんっつ!!」

「うんっ!」

ダツと駆け出した里中さんを狙って『シャドウ』は焔を浴びせようとするが、それに『ジャック・フロスト』の氷をぶつける事で相殺していく。

ガリガリと蓄積していく精神的な疲労に、目の前がふらつきそうになるが、それは意地で耐える。

里中さんが身体を張ってるのに、それから目を離すなんて言語道断だ。

『アンタなんか!』

王子様でもないアンタなんかっ!

要らないっ! もう、要らないイイツっ!!』

そう里中さんに叫ぶ『シャドウ』に、疲労に蝕まれつつあるのも忘れて思わず言い返した。

「里中さんは『王子様じゃない。』

でも、だから何だ!

『王子様』かどうかなんて、何の関係もない!

里中さんは天城さんを助けたいから、危険を承知でここまで来た！
それは、天城さんが《旅館の跡継ぎ》だからじゃないっ！

里中さんにとって、天城さんが何よりも大切な『友だち』だから!!
天城さん自身を、こんなにも本気で思ってくれている人がいるじゃないか!!

それは、何処の誰かも分からない『王子様』なんかよりも、ずっと
ずっと大切な人だろう!!

そんな相手をつ、《要らない》だなんて言うなっ!!」

『うるさいっ！』

うるさいウルサイウルサイウルサイウルサイっ!!』

そう言う『シャドウ』は狂った様にそれを否定する。

それを遮ったのは、里中さんの声だった。

「雪子に、『王子様』なんか必要ない！」

雪子は、一人じゃ何も出来ないお姫様なんかじゃない！

雪子は、本当はあたしなんかよりもずっと強いっ！」

氷塊と焔の衝突により生まれた蒸気を吹き飛ばすかの様に、里中さんは叫ぶ。

「雪子が居ないと何も出来ないのは、あたしの方!!」

そう言いながらも里中さんは足を止めない。

ただひたすらに、天城さんの事を想って言葉を紡ぐ。

そして、想いを届ける為に駆けていく。

「あたしは雪子みたいに美人じゃないし、勉強も出来ないし、家の手伝
いしてる訳でも、何か誇れるものがあるでもない……。」

……だから、……だからこそっ！

……何でも持っている様に見える雪子に頼ってもらいたかった！

だからあたし、自分でも気付かない内に、守るふりして雪子の事を
ずっと閉じ込めてきた!!」

里中さんの気迫に圧されたかの様に『シャドウ』は僅かながらも後
退った。

「でもそんなの、間違ってた。

そんな風にしてたから、雪子に辛い思いをさせてしまった……！

あたし、バカだから……こんな事になるまで、雪子の思い、全然分かってあげられてなかった……！

ごめん、ごめんね、雪子……！」

ポロポロと涙を溢しながら里中さんは『ペルソナ』を呼び出した。

「もう間違えたりなんかしない……！

ずっと傍にいて欲しいからって雪子を閉じ込めたりなんか、もう絶対にしない……！

だからね、雪子。

何処に行ったらって良い……！

あたしを置いてどんなに遠くに離れてしまったって良い……！

何処へ行っても、どんなに離れても！

雪子が、笑顔で居てくれるなら……！！

たったそれだけで、良い！」

グイツと涙を袖で拭って、万感の想いを込めて里中さんは叫ぶ。

「だって、雪子が大切だから。

……あたしは——雪子の、友だちだからっ！！」

里中さんとトモエの渾身の蹴りは、『シャドウ』の身体を見事に捉え突き刺さる。

その一撃により『シャドウ』は壁に叩き付けられ、影が霧散するか様に散っていった後に残ったのは、元々の天城さんの姿をした『シャドウ』だった。





小さい頃は、旅館の手伝いをする事に疑問を抱かなかった。

手伝いをすれば、忙しい親と一緒にいられる時間は増えるし、周りの大人達から褒めて貰える。

「良い子」でいられる。

楽では決してなかったが、それでも「嫌」だとは思わなかった。

しかし、歳を重ね……見える世界が広がった時。

自分自身と比較しうる同年代の知り合いが増えた時。

……他人から『評価』を受ける機会が増えた時。

疑問を差し挟む余裕がないかの様に、当然の事として受け入れてきた自身を取り巻く多くの物事が、「当然」ではなかったと理解した。

「普通」なら、家業の手伝いに忙殺されて自分自身の自由な時間が殆ど無いなんて事はない。

「普通」なら、何処へ行くにも何をするにも《次期女将》だの《旅館の跡継ぎ》だのというレッテルがついて回ったりもしない。

……何時しか、それらを煩わしく思う自分がいた。

……だけれども、旅館の手伝いを止めるとかいった選択肢は、私には無かった。

私からそれらを取り除けば、一体何が残るといえるのか。

……《旅館の跡継ぎ》だという価値しか、自分には無いと思っていた。

……旅館に自分を縛られるのは嫌だった。

だけれども、それらを放棄した自分は誰からも必要とされないのではないかと思うと……、捨て去る勇氣すら私には持てなかった。

《旅館の跡継ぎ》、は嫌なのに。そこにしか価値を見つけれない自分がいた。

……でも、千枝は違う、そうじゃない。

《旅館の跡継ぎ》だとか関係ない……他の誰でもない『私』を見てくれていた。

何時だって……私が困っている時は助けに来てくれた。

そして『私』に、《旅館の跡継ぎ》以外の《意味》をくれた……。

千枝は……何時だって『私』の味方、だった。

……そう、思っていたのに。

『旅館の跡取りだし、しようがないのかも知れないけど……無理しちゃ駄目だよ』

「しようがない」と、《旅館の跡継ぎ》である事は「しようがない」のだと、千枝は言った。

……結局は、千枝にとっても『私』は《旅館の跡継ぎ》、だったのだ。何処へ行っても、誰からの目にも、《旅館の跡継ぎ》というレッテルが私に付いて回る。

それはまるで、私自身にはそこ以外に評価する場所が無い、と言われていたかの様で……。それが窮屈で仕方無い。

私がそれを自ら選んできた訳ではないのに、そこばかりを評価されるのが、苦痛でしようがない。

ただそこにあっただけの、選択肢ですらない選択肢。

偶々そこに生まれたただけなのに、全て決められてしまっているかのような生き方。

……まるで、窮屈な鳥籠の様だ。

だけれども、そこを飛び出していく勇氣すら私には無い。

窮屈であっても、それを捨て去って無価値になるのは……嫌だった。

《旅館の跡継ぎ》ではない自分を、『要らない』と言われるのが、恐かった。

逃げたい。だけど、逃げられない。

逃げる勇氣が……自ら《価値》を捨て去る勇氣が、私にはない。

だから、《誰か》に連れ出して欲しかった。誰かに守って欲しかった。

ここではない所へ、《旅館の跡継ぎ》という価値を私に求めない場所へ。

……私に別の価値をくれる場所へ。

私に価値をくれる《誰か》……そう、私の王子様に。

だけれども、千枝は……他でもない千枝が、そんなものは必要ないのだと主張する。

私は本当は強いのだと、本当は何処にだって行けるのだと。

◇◇◇◇◇

怪物の姿をしていた『私』は、千枝達によつて倒され、後に残ったのは元々の私によく似た姿の『私』だった。

もう何かを喋る力すら尽きたのか、あれだけ捲し立ててきた『私』は何も言わない。

唯々何かを求める様に私を見ている。

どうするべきだろう、と戸惑っていると、駆け寄ってきた千枝にギユウツと抱き締められた。

「雪子……ごめんね。」

あたし……自分の事ばっかで……雪子の悩み、全然分かってなかったね……。

あたし、友達なのに……ごめんね……」

ごめん、と繰り返し涙を溢す千枝に私は戸惑う。

千枝が謝る様な事ではないのに……。

「千枝……」

「あたし、ずっと、雪子が羨ましかった……。

雪子は何でも持っていて……あたしは何にも無い……。

そう思って、ずっと不安で……心細くて……！

だから雪子に、頼られていたかったの……。

ホントは、あたしの方が雪子に頼ってたのに。

あたし、一人じゃ全然ダメ……。

花村たちにも、いっぱい迷惑かけちゃったし……。

雪子居ないと……あたし、全然分かんないよ……。」

そう涙と共に想いを溢す千枝を、私は抱き締め返した。

「私も、千枝の事、見えてなかった……。」

自分が逃げる事ばかりで……。」

……だから、間違えてしまったのだろう、お互いに。

相手の事を大切にしている筈なのに、その実自分の事ばかり見ていては、相手の事をちゃんと分かかってあげる事なんて出来ないのだ。

そう、……そう気が付けたからこそ、今なら自分自身とも向き合える。

だから、私は静かに佇んでいた『私』に向き直った。

「逃げたい……誰かに救って欲しい……。」

そうね……確かに、私の気持ち。

……ごめんね、今まで……苦しかったよね……。

あなたは、私だね……。」

その言葉に『私』は救われた様に微笑んで頷き、光となって消えてゆく。

その瞬間、急激な疲労が襲い掛かってきて、私は立ち眩んだ。

「雪子……」

すかさず私の身体を支えてくれた千枝に、私は微笑む。

「大丈夫……少し、疲れただけだから……。」

しかし私の言葉に、横に居た鳴上さんは静かに首を横に振った。

「無理はしない方が良い。」

向こうの時間にして凡そ三日は此処に居たから……。

天城さんが思っている以上に身体に負担が掛かっている可能性はある」

千枝と花村くんもそれに頷く。

「だな。今はともかくさっさと帰ろうぜ。」

天城を休ませてやんねーとな」
そして、私たちはその場を後にした。



『流れ行く日々』

【2011/04/18—2011/04/20】



彼方の世界から帰って直ぐに、天城さんの実家と警察に連絡を入れてから、天城さんを病院まで連れていった。

思っていたよりも天城さんには疲労が溜まっていた様で、彼方の世界から帰還するなり、安堵からかは知らないが一気に体力が尽きてしまったのだ。

それに若干ながらも衰弱もしていたから致し方ない。

因みに、『天城さんがいなくなって心配していた里中さんが、運良く河原の近くで天城さんが倒れているのを発見した』という事になっている。

態々「河原」としたのは、ジュネス近辺で見付かった事にすると後々面倒だったからだ。

要らぬ火種や誤解は撒く前に消しておくべきである。

病院に連れていく前に一応確認をした所、天城さんは誰かに呼ばれた様な気がするもの……『誰』にテレビの中に放り込まれたのかまでは覚えていないようだ。

突然の異常事態に混乱していた、というのもあるだろうし、ハッキリと顔を見る前に気を失わせられたのかもしれない。

ただ、天城さんを放り込んだ『誰か』がいる、という事はハッキリと分かった。

この『誰か』が、山野アナや小西先輩もテレビに放り込んだ【犯人】なのかはまだ確証は得られていないが、その可能性は大いに有り得る。

しかし、その『誰か』は何を目的として天城さんを彼方の世界に放

り込んだのだろう。

山野アナ達を放り込んだ【犯人】と、天城さんを放り込んだ『誰か』が同一人物なのだとすれば、テレビに人を放り込んだら（その詳しい仕組みは分かっているのではないのだとしても）少なくとも死ぬ可能性がある事は分かっている筈だ。

ならば、「殺す」事を目的として天城さんを放り込んだのだろうか？それを目的としていたとしても、何故？

分かりやすい理由としては、『怨恨』だろうけれども。

だが、天城さんに対してそこまでの『怨恨』を持つ人が果たしているのだろうか。

勿論、人は誰しも意図しない内に誰かを傷付けているモノであり、本人は知らぬ内に誰かから怨みを買う事など特には珍しくは無いのだろう。

天城さんだって、本人にその気が無くても他人を傷付けた事など幾らでもあるだろうし。

その内の一つが、天城さんに殺意を抱く程のものになっている可能性だって無くはない。

どうにも天城さんは異性の目を惹き易いので、そういった点でも比較的恨みは買いやすいかもしれない。

大抵そんなものは逆怨みだし怨まれている本人からしたら理不尽なものではあるのだけど、怨むのなんて理屈がある訳では無い。

だがしかし、天城さんを怨恨からテレビに放り込んだとして、その『誰か』が小西先輩や山野アナを襲った理由は何だろう。

まさか、三人ともに恨みがあったのだろうか？それは少し考え難い。

そもそもの話、三人全員に一定以上の接点がありそうな人などそうは居ないだろう。

小西先輩と天城さんなら、同じ高校に通ってるのだし、歳は一つしか変わらないし、同じ地域に住んでいるのだから二人共に接点がある人はかなり居るだろう。

だが、最初の被害者である山野アナはまず年齢がかなり違う。

この段階で他二人とはかなり関係性が薄れる。
そんな中で、三人共に深い怨恨を抱く様な人物など果たして存在するのだろうか……？

いやまあ、世の中には『誰でも良かった』的な通り魔な人も居るので、偶々目についただけという可能性だって無きにしもあらずではあるが。

……現段階では『誰か』の意図は掴めない。

もう少し、考える材料を集めなくては。

この狭いコミュニティの中で起きた事だ、恐らくそう遠くはない内に天城さんをあの世界に放り込んだ『誰か』の耳にも、天城さんが無事である事は届いてしまうだろう。

取り敢えず、天城さんの命を狙った犯行であつた可能性を考慮して、『誰か』が再び天城さんを狙う可能性もあるので、不審な人物が天城さんに接触しない様に警戒を怠る訳にはいかないだろう。



夕飯の支度をしていると、叔父さんからメールが届いた。
どうやら今夜は早く帰って来れるらしい。

それと、部下の刑事を一人連れてくる様だ。

ならば今夜は少し多目に作っておこう。

叔父さんが連れてきた部下の刑事は『足立透』と言うらしい。

この春から叔父さんの部下となつていそうだ。

そう言えば、山野アナの事件の時に、叔父さんと一緒に現場に来ていた気がする。

「そう言えば、天城さん見付かって良かったね。

まあでも、まだ分からない部分が多いんだけど……」

ヘラツとした顔でそう言った足立さんに、首を傾げる。

「それは、どういう事ですか？」

「いやね、天城さん……連絡付かなくなってた間の事何も覚えてないって言うし……。」

「なーんか怪しいって言うか……裏がありそうって言うか……」
「そう足立さんが言った瞬間、叔父さんから拳骨が飛んだ。」

「馬鹿野郎。んな事言うな」

「す、すいません……」

頭を押さえる足立さんは若干涙目だ。

相当良い音がしたし、結構痛かったに違いない。

「だがまあ……守秘義務を軽々しく破ろうとしたのだから、致し方無い制裁ではあるのかもしれない。」

「あー……ま、全部こいつの勝手な想像だからな。」

「気にしなくていいぞ、悠希」

「はあ、と溜め息をついて叔父さんは夕飯を食べ始める。」

「足立さんも交えた夕飯は何時もよりも賑やかで、菜々子ちゃんも嬉しそうだっただ。」

「まあ、菜々子ちゃんの場合は『叔父さんと一緒に食事が出来る』というのが一番嬉しかったのだろうが。」

「こうして穏やかな時間を過ごしていると『日常』に戻って来た事を実感するし、同時に天城さんを無事に救出出来た事も実感する。」

「今夜は、何時も以上に良い気分です眠る事が出来るだろう。」



【2011/04/19】

天城さんを救出した翌日。

まだ天城さんは療養中らしく、その席は空席だった。

まあ、数時間探索するだけでも辛いあの世界に数日もの間居ただ。無理もない事である。

無理せずにしつかりと休養して、元気になった姿を見せて欲しいものだ。

今日の授業は、八十神高校に来てから初めての体育だ。体を動かす事は元から大好きだし、結構楽しみである。

◇◇◇◇

昼休み。突然に一条という同級生が教室に飛び込んできた。

その勢いに少し驚いていると、一条は目敏くこちらを発見し、近寄ってくる。

どうやら一条はバスケット部のキャプテンをやっているらしく、その勧誘の様だ。

勧誘されるという事自体に問題は無いのだが。

……一つ根本的に間違っているだろう箇所があるとすれば、そもそもこちらの性別が女性であるという事だろう。

世の中には女子バスケット部というものはちゃんと存在しているし、バスケットに打ち込む女性というのはマジョリティーでなくとも存在はしている。

が、しかし。

この八十神高校に女子バスケット部があるとは今の所聞いた覚えが無いし、そもそも勧誘に来ている一条は男だ。

彼の言うバスケットとは、『男子』バスケットであって、『男女混合』のバスケットでは無いだろう。

マネージャーとしての勧誘ならばまだ分かるが、一条が言ってるのは、どう聞き間違いを起こしていたのだとしても、『プレイヤー』として、だ。

どう考えても、何かを間違えているとしか思えない。

「誘ってくれるのは嬉しい。

でも、私は女子だけど？」

男子バスケット部に誘われてもどうしようもないと思うが……」

「それは分かっているんだけど。」

でも噂になってるんだって!!

スッゲー女子が居るって!!

ドリブルもシュートも、スッゲー上手いヤツが居るってさ!!」

そう興奮した様に一条は話す。

……午前の体育の授業は、男女合同でバスケットだった。

その中で、ちよつとしたミニゲームも行ったのだ。

普通に真面目に取り組んだのだけれど。

どうやらその結果、非常に面倒な事になっていた様だ……。

「いや……、でも。」

別に本格的にバスケットした事とか無いし……。

素人の見よう見真似ってヤツだったんだけど」

「寧ろ、やった事ないってのにそうだったんなら、逆にスッゴい才能だよ!!」

是非ともウチに入ってよ!!」

……こうも必死に頼まれると、何だろう……断り辛い……。

とは言え、勢いに流されて頷くのもどうだと言う話だ。

「いや、だから……。」

私は、女子だし、男子バスケット部には入れないんだけど。

公式戦とか、絶対に出られないし。

入った所で、あんまり意味は無いと思うんだけど……」

「ウチ別に『男子』とかって括り無いから!!」

もう練習の時に居てくれるだけでも良いから!!」

……何でこんなに必死なんだろう。

練習試合ならともかく、公式戦には出られないというのは、プレイヤードとして致命的な欠陥だろう。

それを態々勧誘に来てまで引き入れるメリットも必要性も、皆目見当がつかない。

「あ……と、その……。」

用事とか入ったりして、行けなくなる日とかあると思うし……」

急な事態と言うのは何時でも起こり得る事で、特に【事件】を追っている状況では、何時事態が動くか分からない。

その時に部活に参加している余裕は恐らくないだろう。

それは、スポーツ系の部活としては歓迎出来ない話ではあろうし……。

「それでもいいから！」

たまに……本当にたまにでもいいから!!

ウチの部幽霊部員が多いし勝手に抜ける奴ばっかでマトモに練習すら儘ならない事も多いし、練習試合とかもろくに出来ないんだ!!

公式戦なんて、夢のまた夢で！

経験が無くたって、鳴上みたい運動出来て、来たら真面目にやってくれそうな奴なら大歓迎だから!!

女子とか男子とか、もう関係無いから!!

マジで、マジでお願いします!!

どうやら一条も中々に大変らしい。

ここまで必死に頼み込まれて、『否』と突き返すのはかなり心苦しかった。

まあ、その……バスケット自体は別に嫌いとかそういう訳でも無いし、性別の壁さえ無ければ普通に喜んで受けていた話ではあろうから、尚更。

嫌だったりやる気が無いのなら、躊躇なく『嫌』とは言えるが……別段そう言う訳でも無い。

「ま、まあ……取り敢えずは見学からでも良いか……?」

見てから考えてみるから……」



どうやら今日が活動日だったらしく、善は急げとばかりに早速見学に、と一条に半ば拉致されて体育館にやって来た。

しかし……一条が言ってた通り、剩りにも他の部員にやる気が無さ過ぎる。

一条は一人真面目にやっているが。……これでは心労が溜まる一方だろう。

しかも、練習が終わるや否や他の部員たちは後片付けする事もなく一条以外は即座に帰ってしまった。

……もしかなくても、一条は毎回こうやって一人で後片付けまでやっているのだろうか……。

一人きりでやっているのを見かねて、一緒に後片付けを手伝いながら、一条に訊ねてみた。

「あー……うん。何時もこうなんだ……。

誘っておいてなんだけど、やる気なくした？」

「いや……、そうじゃ無いんだけど……。

……そもそも、どうして一条は私を誘ったんだ？」

帰宅部の人でも運動神経良い人なんて、私以外にも沢山居るんじゃない……？」

少なくとも、ある意味女子だろうと大して問題にはならない理由はよく分かる。

これは、試合以前に練習自体が成り立ってないも同然だ。

練習中のミニゲームすら人数的に厳しいとはどういう事だろう。

基礎練もろくにやらないなら、試合なんて言ってる状況ではない。

もう人数合わせでも何でも良いから人手が欲しいのだろう。

が、しかし。

そもそも、勧誘出来そうな帰宅部など幾らでもいるだろう。

運動神経のあるヤツを選んでいっても、それなり以上の人数が居る筈だ。

何故彼らを勧誘しなかったのだろう。

「ウチの部ってこんなんだから、試合に勝つとか以前の問題なんだよな……。

それで、フツーにある程度やれる奴は入りたがらない訳。

入った奴の大半は、ダラダラやりたいってヤツ。

でもさ、折角やっているんだからどうせなら勝ちたいじゃん？

だからさ、運動出来るらしいし見るからに真面目な鳴上が入ってくれたら皆のやる気も出てくるし、まあ練習試合位なら出られるだろうから勝率上がるかなあ……って思ってたさ」

そう訊ねてみると、一条は溜め息を吐きながらそう答えてくれた。成る程。勝つ以前のこの状態なら、誘われた所で、態々入りたいとは思えないかもしれない。

やるからには、頑張りたいし、勿論勝ちたいと感じるだろう。

だが、この手のチーム競技は一人で幾ら頑張った所で、他のメンバーにやる気が無いなら勝てるものも勝てなくなる。

それ故に、他の候補者が首を縦に振らないのだろう。

……ここまで一生懸命に勧誘してくる一条を無下には出来ないし、何とかせめて練習だけでもマトモにやりたいと言う気持ちは理解出来ない訳じゃない。

「……そっか。」

……さつきも言った様に、出れない事も結構あるだろうし、それにバスケットは素人だから活躍出来る保証は無い。

……それでも、良いか？」

「……マジで!？」

ウチは出席とかはかなり緩いし、それでも全然構わないから！

本当にありがとうな!!」

こうして半ば押し切られる様にして、バスケット部に入部する事となった。

顧問の体育教師の近藤先生は、こちらの性別などに関して特には気にする事は無かった。

………適当過ぎやしないだろうか。



今日の放課後は、花村に誘われて沖奈市まで遊びに行くにした。学校から沖奈市に行くには商店街でバスに乗るのが早い。

二人でバスを待っていると、近くに居た主婦達がこちらをチラチラ見やりながらひそひそと話していた。

が、それなりに大きな声で話しているから、隠すつもりはないのだろう。……嫌らしい事だ。

ジュネス進出の煽りを受け潰れた店が多いのは、シャツターが閉まった店舗だらけの商店街を見れば直ぐに分かる。

しかし、それと花村とに何の関係があるというのだろうか。

単純に行き場の無い憂さ晴らしの発散先として花村をスケープゴートにしてるだけの様にしか見えなかった。

花村は「有名人でゴメンな」などと言うが……。

花村に何の非もないのにそれでも責めるのは道理が通らない。

しかし、当人である花村が耐えているというのに、外野が勝手に反論して話を大きくする訳にはいかないだろう。

釈然としないものを抱えながらも、バスに乗って沖奈へと向かった。



閑散とした八十稲羽駅よりも遥かに、地方都市の中心駅である沖奈駅は開発が進んでいる。

駅に隣接する様に建てられたショッピングモールには人の波が絶えず出入りし、その反対隣にある映画館では上映中の映画のポスターがデカデカと掲げられている。

娯楽に乏しい八十稲羽とは異なり、こちらにはそれなりに娯楽施設が揃っている。

その為か、道行く人の波の中に時折八十神高校の制服や近隣の学校の制服が紛れている。

遊ぶと言つてもどう遊ぶのかはあまり考えていなかった。

が、まあ良い。

花村の様子を見てみると、商店街でバスを待っていた時よりも肩から力が抜けているみたいだ。

商店街……というよりも八十稲羽自体が、花村にとってあまり居心地の良い場所では無いのだろう。

まだ出会って一月も経っていない付き合いだ、稲羽の人々が花村に向ける感情の多くに良くないものが混じっているのは容易に察する事が出来た。

無論、全員が全員そうだという訳ではない。

里中さんや天城さん、それに一条や長瀬などは、別段花村に対して悪意を向けたりはしてないし、そもそも花村などどうでも良いという態度の人だって少なくはない。

が、商店街に関係する人々からは謂れの無い悪意を向けられている事が多い。

「ジュネスが来たから」「ジュネスのせいだ」。

そんな言葉を幾度聞いた事か。

そしてそれを聞く度に、何度反論してやりたい衝動にかられた事か。

……いや、ジュネスへ不満を持つのはこの際良いだろう。

商店街の客足がジュネスに取られているのは、紛れもない事実である。

しかし、それを花村にぶつける事は全く以て道理に反する行為だ。

しかもそれに託つけて、花村がどんな人間なのかすら知りもしないクセに一方的に花村の人格までも貶める様な発言をする事は、度し難い蛮行である。

だが、花村自身が自身を取り巻く様々なものを鑑みた上で、それを

黙して耐える事を選ぶのならば、ここで表立ってそれらを叩き潰していく訳にもいかない。

しかし耐え忍び続けてきた結果が、花村の『シャドウ』を産み出してしまったのであろう事は間違いの無い事で。

幾ら花村が『シャドウ』を受け入れた所で、その原因となつてしまつている周囲の環境に変化が無いのなら、何れまた何処かで無理が出てしまうのではないだろうか……。

何か花村にしてやれる事は無いのだろうか……と考えていると、花村が携帯の画面を見て顔を顰めていた。

どうやら、悪質な迷惑メールが届いたらしい。

何度拒否しても、ドメインを変えてしつこく送られて来るそうさ。

最早ここまで来ると、ただの悪戯などと片付けられない。

「こういうのはウンザリするけどな……」

でも、メルアド変えるのも……」

「何か問題が？」

「稲羽に引越す前から、メルアド変えてないんだ。」

一応、誰かからメールあるかも知れないし、さ。

いや、ほら……『メアド変えましたって』態々連絡すんのもウザいじゃん。

連絡する気ねーよ！って場合もあるし……」

「……」

「まー……正直、前のトコのヤツらとは何話してたんかも覚えてないし。『友だち』……つてのも多分何か違うんだらうけどな」

花村の目は何処と無く寂しそうだ。

しかし、一度俯いて再び顔を上げた時には、鬱屈した何かは花村の表情からは消え去っていた。

「ま、俺には稲羽でやるべき事があるから……」

これからも頑張ろうぜ。な、相棒！」

『相棒』……？』

あまり、というか全くと言って良い程聞き慣れない言葉に、思わず聞き返してしまう。

いや、意味は分かるのだが。

しかし何故に、「相棒」？

「おうよ！俺はお前の相棒だ。そうだろ？」

確かに、そう言われればそうなのかもしれない。

一緒に戦う仲間で、事件解決を誓った仲でもある。

共に過ごした時間も……あちらの世界の事を考えると決して長くはないが濃密なもので。

何かと花村に力になって貰ってばかりでいる気はするが、一応こちらでも花村の力になれているだろうとは思いたい。

成程確かに、『相棒』と呼ぶのに何の問題も無い関係だ。

……聞き慣れないそれは、少し擦ったくはあるが。

「ああ、こちらこそ。

よろしく、……『相棒』」

その後沖奈駅近辺で遊んでから、少し早めに稲羽へと帰った。

しかし、隣の市に行くにも一苦労するこの交通の便の悪さは如何ともし難い。

せめて何かバイクとか足になるものが、あれば良いのだろうけれど……。



【2011/04/21—2011/04/25】



【2011/04/21】

女子が入部した事で多少は戸惑っていた一条以外のバスケット部員達も、一緒に練習する内に次第にどうでもよくなってきたのか、チラチラとこちらを窺う視線は部活終了時には殆ど無くなっていた。

一条と共に練習メニューやポジションについての話をしながら後片付けをしていると、サッカー部のユニフォームを身に付けた男子が入ってくる。

……一条の親友の長瀬、だそうだ。

慢性的に（活動に参加している）部員が少ないバスケット部に、度々出没しては練習を手伝ってくれているらしい。

一条とは所謂「腐れ縁」に近い間柄らしく、二人の間にはそういった気安さがあった。

その後、二人に連れられて商店街の愛屋へと足を運んだ。

夕飯があるのであまりがつつく訳にはいかないから、二人が回鍋肉定食を頼むのを尻目に、自分は唐揚げ単品を注文する。

モギユモギユと程よい柔らかさとカラツとした衣が絶妙なバランスである唐揚げを食べながら、一条と長瀬が他愛もない様な雑談を交わしつつ時折此方に振ってくる話題に頷いたり言葉を返したりする。何とも気安い雰囲気は居心地が良い。

まだ転校して来たばかりの此方を気遣ってか、二人が話してくれるものは当たり障りの無い話を中心だ。

そんな中、話のネタはここ最近の【事件】についてに移る。

飼った猫が迷子になった位でちよつとした話題になる程の平和を絵に描いた様なこの稲羽の町では、殺人事件だなんてまさに青天の霹靂

の様な出来事なのだそうだ。

結局、小西先輩の事件以降これといった目新しい情報も無く、テレビのニュース番組でも何時までも同じ様な内容しか流さないし、そもそも話取り上げられる事自体が少なくなってきた。

その為か、今一つ実感が沸かないと長瀬は溢した。

都会から来たのなら事件の一つや二つ巻き込まれた事は有るのでとは訊ねられたが、別にそんな事は無い。

少なくとも、全国規模で報道される様な出来事には巻き込まれた事は無かった筈だ。

そう返すと、長瀬は若干残念そうに「そうか」と答える。

ご期待に沿えなかった様だが、そこはまあ仕方の無い事だ。

その後も部活の事やら学校生活の事を中心に色々話し、そうこうする内に夕食の支度を始める時間が近付いたので、愛屋の会計を終えた所でその場で解散となった。



〔2011/04/22〕

放課後、里中さんに誘われて鮫川土手までやってきた。

どうやら、里中さんは足技に磨きをかける為に修行がしたいらしい。

まあ、身体を動かす事は良い事だからそれは別に構わない。

里中さんなりに、シャドウと対峙して思う所があったのだろう。

一通り運動した後は、近くのベンチに座って二人してお喋りに興じた。

思えば、稲羽に来てからというもの事件の事ばかりで、こう言ったのんびりとした時間を里中さんと過ごすのは実は初めてな気がする。

里中さんは無類の肉好きである様で、稲羽でのオススメのスポット

は商店街の愛屋で、そしてイチオシのメニューは雨の日限定のスペシャルメニュー『スペシャル肉丼』なのだそうだ。

ただでさえ大盛りの肉丼を遥かに凌駕する（推定三倍以上）そのメニューはこれまでに様々な猛者達を沈めてきたらしく、稲羽屈指のチャレンジメニューとして不動の地位を築いているらしい。

しかし里中さんは溢れる肉への愛故か、このメニューを完食出来るのだそうだ。何それ凄い。

「鳴上さんは、何か好きな肉とかある？」

「肉限定？」

えっとうーん……割りと何でも食べられるし、あんまりそう言うのは考えた事無いかも。

あー……まあ、カレーに入れるならビーフかチキンかなって思ってるから……、牛肉か鳥肉が好き、なのかな？

いやでも……料理によって合う肉って違うしなあ。

うん、一般的な肉なら何でも好きかも」

結論的には旨かったら何でも良し、だ。

高い肉は勿論の事、安い肉だって調理を工夫すれば美味しくなる。

「あれ、もしかして鳴上さんって料理とかする感じの人？」

「まあね」

腕前の程は自分ではあまりよくは分からないが、そこそこ以上にはあるだろう。

忙しい両親に代わって見よう見真似で始めたのが最初ではあったが、直ぐ様のめり込む様に料理の腕前を上げる事に没頭した。

美味しく作れば自分も満足出来るのだし、両親が「美味しいよ」と笑ってくれるのが何よりも嬉しかったからだ。

「あたし、家ではそういうの全然やってないからさ。」

何か……料理とか出来る人って、純粹に凄いなーって思う」

そうだろうか？

その辺りの感覚はよくは分からないが……、賛辞は素直に受け取っておく事にした。



〔2011/04/23〕

今日は土曜日だから授業は午前で終わる為、バスケット部に参加しても夕方になる頃にはそれも終わる。

後片付けをして用事があるらしい一条と別れた後、偶々校舎に残っていた花村と下駄箱で出会い、そのまま何となくの流れでジュネスのフードコートへとやって来た。

ちよつとしたサイドメニュー位は食べておいた方が、部活後の空きっ腹には丁度良い。

「商店街の方が学校からは近いけど、たまには此処でつてもいいよな。」

金無くても、ここなら多少はサービスしてやれるし。

……まあその分、面倒な事も多いんだけどさ」

「面倒事？」

「あ、いたいた、花村！」

甲高く尖った声がフードコートに響いた。

そして、苛立った様な形相でこちらにやって来る女性が二人。

控え目な表現でもケバいと感じる位に派手な女性と、鋭いを通り越して目付きの悪い高圧的な女性だ。

「……こんな風にな」

はあ、と溜め息を吐いて花村は席を立った。

そして、苦々し気な顔を笑顔で誤魔化し、女性達に向き合う。

「お疲れ様です。今日はどうしたんですか、先輩」

そう花村が言うなり、待つてましたとばかりに陰を含んだキンキン声が響く。

凄く煩い。思わず僅かに顔を顰めてしまった。

「花村、あのバカチーフに何か言つてよ！」

土日出れないって言ってんのに、人足りねーから入れて煩いし、出ないとクビとか言うんだけど！」

「そういうのって、ナントカ法違反とかじゃないの!？」

女性達は捲し立てる様に花村に詰め寄っていく。

内容的に、フードコートみたいな一般客の耳目がある場所で、しかも大声で言うべき様なものでもないだろう。

あと法律について語るなら、せめてその名称位は把握しておくべきだ。

自ら馬鹿を露呈させている様な行動である。

しかも、彼女らはバイトの面接時には土日出勤を可としていたらしい。

本人たちにはただの採用される為の方便のつもりだった様だが、そんなのはそれを前提として雇った雇用側としては知ったこっちゃない話である。

……女性達の馬鹿さ加減に、聞いてるだけのこっちまで頭が痛くなつてきそうだ。

と言うか、例えばバイトだとしても対価として賃金が発生する立派な仕事である。

この女性達は「仕事」というものを舐めくさっているのだろうか？

「……分かった、分かりました。」

俺、ちよつと話してみますよ……。

けど、先輩らもクビになったら困るっすよね？

出来れば何日かは出て貰えると俺も交渉しやすいつつーか……」

花村がそう話すと、女性達は居丈高に言い捨てて去っていった。

勤務態度が目にも余る様ならば、クビにしてしまえば良いのに……とは思うが、そう簡単にはいかないのだろう。

そして、花村に持ち込まれる厄介事はそれだけでは無かった。

「あら、陽介くん。丁度良かったわー」

「あー……ども」

女性達と入れ替わる様に中年女性が花村に声を掛けてくる。

従業員の人だろうか？

「ちよつと、聞いてちようだいよ！」

「この間のクレームの件なんだけど精肉部長に……」

「あ、はいはいはい。」

その話なら、向こうで聞くんで。

すまん、鳴上、ちよつと此処で待つててくれ」

そう言つて花村は従業員の話を聞きに行つた。

勤務中での苦情を捲し立てられているらしい。

戻つて来た時には、花村の顔はすっかり疲れ果てている。

内心辟易としながらも決してそれを投げ出そうとはしない辺り、

花村は本当に真面目なのだろう。

「うあー、疲れた……。俺は苦情係かつつの……」

「何かと頑張つてるんだな。色々とお疲れ様。」

花村は、偉いよ」

「えっ!? 偉いとか、そんなんじゃねーよ。」

でも、ありがとな。

そう言つて貰えるのは、嬉しいし……」

花村は少し頬を紅く染めて、照れた様に笑つた。

そして、疲れた様に溜め息を吐いて内心を吐露する。

「つたくき……。みんな俺を店長の息子だからって便利扱いしてるだけなんだよな……。」

ヒマならまだしも、俺らにはやる事あるのに……。」

しよーじき、関わつてられないって、マジで思う。

犯人の事とか、そいつ捕まえた後の事とか……。それ考えてたら、他の事には構つてらんないっつーか……。」

やれる事があるなら、やんなきゃって……」

そう語る花村を見ると、何故か無性に不安になってくる。

「……それ自体は良い心掛けだとは思うけど、あまり根を詰め過ぎたら良くないぞ」

事件を解決する事。

それは確かにとても大切な事だ。

クマとの約束もある。

「ただ何も、自分たちは事件を解決する為だけに生きている訳ではないのだ。」

「一つの物事を見据えて追い掛ける、という事は大事な事ではあるけれども。脇目も振らずに走り続けては見落としてしまうモノだって出てくる。」

見落としてしまったモノの中に、花村にとって大切なモノが入っていないとも限らない。

結局は程度の問題なのだけれど、今の花村の様子は何と言うのか……必要な『余裕』というものが見えなかった。

だから、心配になったのだ。

「根を詰めるなって……、だって俺達が何とかしなきゃいけないんだぜ？」

寧ろ、今ここで頑張らなきゃどうするってんだ。

立ち止まってるヒマなんてねーし、ムダな事やってる場合じゃねーだろ」

『自分達が』何とかしなきゃ……、か。

……それは確かにそうなのだが……。

「……息抜きのつもりだったのに、こんなマジな話するなんて思わなかったな……。」

前は下らねー中身無い話しかなかったし……それで良いと思ってた。

こんなマジな話するのって、ホント鳴上にだけだ」

「そうなのか？」

「何でだろうな、鳴上にはウソつかなくて良いって言うか……。」

……まあ一番みつともねーとこ既に見られてるし、今更無駄に取り繕うのは、つてのもあるんだけど。

けどさ、鳴上で良かったな……って、そう思ってる。

……今更だけど、あの時俺の我儘に付き合って……一緒に来てくれてありがとな」

そう言うと、花村は照れた様に笑った。

……そう言って貰えるのは純粹に嬉しい。

確かに、最初は花村を放っておけなかったからだった。

だけど今は、【犯人】を止めたい、もう誰もあの世界のせいで死なせたくはない、と。

そう強く思っている。

「私も……あの時、花村を助ける事が出来て良かった」

そうでなくては、今ここで二人で話す事も出来なかっただろう。

ああ本当に……、心からそう思う。

あの時に共にあの世界に行ったからこそ、あの世界と【事件】とを結び付ける事が出来た。

【事件】の、《真相》の一端を知る事が出来たのだ。

知ってしまったからには、何も知らない……見なかった振りをする事は出来ない。

あの世界の危険性を理解しながらも、それでも……と、そう思ったからこそ、天城さんが被害に遭った時も迷わずに助けに行く事が出来た。

共に闘う花村や里中さんが居てくれたからこそ、天城さんを助け出す事が出来た。

だからこそ、花村には感謝しているのだ。



【2011／04／24】

日中は一条たちと沖奈市まで出掛け、帰り際に立ち寄った店でかなり良い質のウスイエンドウを見付けて思わず衝動買いしてしまった。今晚は豆ご飯にしよう。

卓袱台の所で豆を剥いていると、菜々子ちゃんが手伝った様子に見てきた。

剥きたいのかと訊ねてみると、笑顔で頷いたので1／4程の量を渡

して剥いて貰う。

単純な作業の繰り返しではあるが、菜々子ちゃんにとっては存外楽しい作業であるらしく、真剣な顔をしながらも楽しんでいる様であった。

そして、丁度豆ご飯が炊き上がった頃合いに叔父さんが帰ってきた。

三人で食卓を囲っていると、「署の連中に訊いたんだが、悠希、お前演劇部に入ってるんだってな？」と叔父さんが訊ねてくる。

一体どういう事なのだろうか。

演劇部に入った覚えなどないのだが……。

「小道具の調達をしていたらしいが、幾ら模造品とは言え、街中で刃物を出すのは感心しないな。

普段なら笑い話で済ませるだろうが、あんな事件が起こっちゃって署の奴等も気が立っているんだ。

場合によっちゃ補導しなきゃなんなくなるからな、今後は慎む様に。

分かったな？」

ああ、あの時の話か。

……模造刀を振り回したのは、正確には花村なんだが……。

まあそれを言った所で大した意味はない。

「はい、気を付けます」

そう返事をする傍らで、これは使えるんじゃないだろうかと思いつめていた。

今後彼方の世界を探索するにあたって、より良い武器が必要になるであろう事は明白だ。

が、それを調達する方法は置いておいて、それらを彼方の世界まで持ち込むのにも幾つもの壁がある。

人の目は最たる物だ。

人目に付かせない、というのが一番ではあるが、そうそう上手くいかない時だってあるだろう。

もし見咎められた時に、「演劇の小道具だ」という口実で押し切れる

かもしれないのは有難い。

演劇部に所属する、というの一つの手だ。

確か演劇部は新入部員を募集していた筈。

役者……は無理でも小道具係程度ならなんとかなるんじゃないだろうか。

「そう言えば叔父さん。」

ゴールドデンウィークはどうするんですか?」

ゴールドデンウィーク……というか、折角の長期休暇なのだ。

普段寂しい思いをさせてしまっている菜々子ちゃんへの、絶好の家
族サービスする機会でもある。

無理に、とは勿論言えないが、それでも出来るなら菜々子ちゃんとの
時間を取ってあげてほしいものだ。

「……四日と五日。」

その二日なら、休みが取れそうだ」

「ほんと!」

菜々子ちゃんは目を輝かせて立ち上がるが、不意に不安げに再度
「ほんと?」と訊ねる。

そこには幾許かの疑心が混ざっていた。

「なんだ? 疑ってるのか?」

「だって、いつもダメだから……」

それを言われた叔父さんは、痛い所を突かれたかの様に苦い顔を
した。

どうやら大いに心当たりがあるらしい。

「毎回って程でも無いだろ」

「だったら、みんなでどっか行きたい! ジュネスとか!」

普段色々和我慢してるであろう菜々子ちゃんの希望は、本当に細や
かなものだった。

「まあその、なんだ。」

折角なんだし近場のジュネスじゃなくて、どっか遠めの所に出掛け
るか?」

罪悪感の様なものが沸いたのかもしれない叔父さんがそう言う。

「ほんとう？ りよこう？」

と菜々子ちゃんは微かに期待する目で叔父さんを見詰める。
普段我が儘らしい事はほぼ言わない菜々子ちゃんの、こんな目を無下に出来る様な強者ではなかった様で。

「あー……まあ、たまには、旅行もいいかもな。」

何処もメチャクチャ混むだろうけどな……」

叔父さんが頷いてみせると、菜々子ちゃんは休みが取れると聞いた時以上に顔を輝かせた。

「やったー、りよこう！」

あまり期待してなかった反動なのか、菜々子ちゃんのテンションは右肩上がりだ。

「悠希はどうだ、予定空いてるか？」

叔父さんに問われ、菜々子ちゃんからは期待に満ちた目で見詰められる。

そもそも逆らう気など毛頭無かったので、早々に白旗を上げた。

「私は大丈夫です」

「あのね、菜々子、おべんとう持って行きたい！」

「そっか。なら、頑張って美味しいお弁当作るね」

「やったー！ おべんとう!!」

目をキラキラさせて見上げる菜々子ちゃんを、叔父さんは優しい目で見ている。

「りよこう、りよこう！ たのしみだね!!」

目を輝かせる菜々子ちゃんに、微笑んで頷き返した。



【2011／04／25】

周りの声に耳を傾けながら通学路を歩いていても、特には真新しい

話題はなく、道行く学生達の関心は専ら数日後のゴールデンウィークに關しての事だった。

確か、今日から天城さんが学校に復歸するんじゃないだろうか。そう思っていると、校門の所で声を掛けられた。

天城さんだ。

「お早う、天城さん。もう大丈夫？」

「うん、体調は週末には良くなってたから……。」

お母さんも仕事に復歸したし、仲居さんもすごく協力してくれて……前よりも上手くいつてる位。

私……自分が全部やらなきゃって気負い過ぎてたのかも。

冷静になってみれば、そんな事なかったのにね」

心労で倒れたとかいうお母さんも元気になった様で良かった。

天城さんの表情は、あの日彼方から救出した時よりも明るくなっている。良い事だ。

「そうか……それは良かった。

……休んでいる間、何か無かった？

不審な人物が彷徨っていたり、とか」

「そう言うのは全然無かったよ」

何事も無い、というのの良い事だが……。

【犯人】の狙いは一体何なのだろうか。

まあ、そう言った事も含めて話し合う必要があるだろう。

「じゃあ続きは昼休みにでもしよう。

花村や里中さんにも声を掛けておくから」



昼休みの屋上には好都合な事に人が居なかった。

花村は持参した弁当を、里中さんと天城さんは『赤いきつねと緑の

たぬき』で有名なカップ麺を広げている。

「おうこの匂い、たまらん！」

「これ、あとどん位待ち？」

「全然、まだよ」

「で、なんだっけ。」

「……あ、雪子に事情を聞くんだっただか」

カップ麺を持ちながら言った里中さんに、花村は真面目な顔で頷いた。

「なあ、天城さ、ヤな事ムリに思い出さず気は無いんだけど……改めて聞かせて欲しいんだ。」

「……拐われた時の事、やっぱ何も覚えていないのか？」

花村の問い掛けに、天城さんは少し申し訳なさそうな顔で頷く。

「うん……。」

落ち着けば何か思い出すかと思っただけど、時間が経てば経つ程、よく分からなくなってきた……。

あ、でも……玄関のチャイムが鳴って……誰かに呼ばれた様な気は、する……。

けど、その後は……気付いたらあのお城の中に……。

これだけしか覚えていなくて、ゴメンね」

元々記憶というのは結構不確実なものだから、時間が経ってしまえば思い出せる事が減ってしまうのは仕方のない事だ。

気に病まれる事でも無い。

「いや、謝る必要など無いよ。」

少なくとも、天城さんが偶発的な事故で彼方に迷い混んだんじゃ無さそうだという事が分かったんだから」

「んー、って事はその来客つてのが犯人かな？」

里中さんの言葉に、花村は僅かに首を傾げた。

「どうだろうなあ……。」

もしそうなら相当大胆な奴だな。

玄関からピンポン、なんてさ。

よっぽど捕まらない自信でもあったのかねえ」

目撃者が居れば良いのだろうがそんな話しはトンと聞かない。

母屋の方の話だろうとは言え、多少なりとも人目があった筈だ。

何処でテレビに落とされたのかは知らないが、人一人を抱えて移動するのは相当目立つのじゃないだろうか。

それでもそれらしい話が無いとなると……。

「その客人が【犯人】だったとして、そいつは車を使っている可能性が高い」

そう言うと、花村も「確かに」と頷く。

「そうじゃなきゃ、天城を運ぶのは目立つもんな」

「不審車両の目撃情報とかがあれば良いんだけど……」

そんな車両が目撃されていたら、もつと大騒ぎになっているだろう。

だが、そうでは無い以上、不審車両の目撃情報があるかは怪しい所だ。

「お前ん家の叔父さんって確か刑事さんなんじゃなかったっけ？」

何か聞いたりしてねえのか？」

花村の言葉に、首を横に振る。

「叔父さんは何か知ってても、そういう捜査情報を軽々しく洩らしたりはしないと思うよ。」

まあでも、捜査が難航しているみたいだし、あまり良い手掛かりは無いんじゃないかな」

その時。里中さんが、はあ、と溜め息を吐いた。

「……何でこんな事すんだろ……」

「それは犯人に聞いてみなきゃ分かんねーな……」。

どっちにしろ、あつちに人を放り込んでいるヤツがいるのは確かだ」

【犯人】の目的は、今の所不明である。

だけど、【犯人】……天城さんを彼方に放り込んだ人間が存在しているのだけは確かだ。

「そうだな。【犯人】の目的は不明だけど……」。

それでも、放置する訳にもいかない。

もうこれ以上、誰かがあの世界の所為で死んで欲しくはない。

それに、……『約束』もしたし」

こちらの言葉に、花村も大きく頷いた。

「だな。あつ、そうそう。」

俺と鳴上で、この事件の【犯人】探し出す事にしたから。

警察が捕まえるのはムリソーでも、俺らには【犯人】を追い掛ける事が出来る」

「司法の場に引き摺り出せるかは分からないけど……犯行を止めさせる事位なら出来る筈。」

必ず、探し出してみせる」

探し出したその後をどうするのかは、追々話し合っていけば良い。

うだうだと考え悩んで一步も進まない位ならば、今はただ手掛かりを掴む事に奔走すれば良い。

考えるのは、追い掛けながらだつて出来る筈だ。

「あたしもやるからね！」

あんな場所に人を放り込むなんてさ。

絶対ブチのめす！」

「私も……私も、やらせてー！」

どうしてこんな事が起きてるのか知りたい。

それに……もし自分が、殺したい程誰かに恨まれてるなら、知らないきやいけないと思う。

もう、自分から逃げたくない」

里中さんと、その言葉を受けて少し考える様に押し黙った天城さんはそう申し出た。

里中さんは親友を狙われたのだし、天城さんに至っては被害に遭った当事者なのだ。

運良く救出されたとは言え、自身が三人目の被害者として変わり果てた姿で発見されていた可能性もあるとすれば、【犯人】を野放しにしておく事など出来ないだろう。

……だが。

「……そうか……。」

でも、その前にどうしても確認しておかなきゃならない事がある。これから先【犯人】を追う途中で、また誰かがあの世界に放り込まれるかもしれない。

その被害者の『誰か』は、里中さんや天城さんの知っている人かもしれないし、全く知らない人かもしれない。

そうだったら私や花村は、その被害者の『誰か』を助けに行く。

それが【犯人】への手掛かりになるかもしれないしね。

……そして、その時に。

里中さんと天城さんは、どうする?」

……これはとても大切な質問だ。

『誰か』が新たに被害に遭ったとして。

里中さんには『親友を助ける』という名目はもう無い。

天城さんには、【犯人】を追う動機は在ったとしても、あの世界で戦う動機に関しては……分からない。

花村とは、既に話し合って決めている。

例えばどんな人物がその『誰か』になっただとしても、この手が及ぶ限りは助け出そう、と。

【犯人】を追う事と、『被害者』を助け出す事。

それらは決してⅡではないけれど、《もう誰もあの世界の所為では死なせない》と決めた身としては、切っても切れないものだ。

それに、現状はあの世界位しか【犯人】への手掛かりへとなりそうなものはない。

だからこそ……。

「そりゃ勿論助けに行くよ!! あつたり前じゃん!!」

「私も……助けに行くよ!!」

こう答えが返ってくるのは、予想が付いていた。

例えば見知らぬ他人であっても、誰かが死にかけているならそれを無視出来ない、というのは割りと普通の感覚だ。

だが……。

「……あつちに放り込まれた人を救出するのには、相当の危険を伴っ

ている。

……実際にシャドウと戦った里中さんなら、よく分かるだろうけど。

可能な限りリスクは排除しても、不測の事態は何時起きるとも分からない。

生死に直結する様な怪我を負う事も有り得るし、例えば顔とか腕とか……そういった日常生活に差し障りのある部位に怪我を負う事も有り得る。

一応、怪我を癒す手段はあるけど、それでも対処出来ない様な怪我を負う事だつてあるかもしれない」

だから、とそこで一端言葉を切る。

「よく、考えてから決めて欲しい。

本当に、そういつたりリスクを背負つてでも、【犯人】を……この事態の【真相】を追いかけたいのか、を」

協力してくれる、というのは本当に嬉しい。

こちらの身の安全の事を考えるなら、戦力は多いに越した事は無い。

里中さんと天城さんが加わってくれるならば、心強い事この上ないだろう。

でも、冷静に考えさせる時間を許さずに、状況に流させる様に決めさせるのは、駄目だ。

一時の感情だけで決めて動いていては、何かが起きた時にきつと後悔する。

シャドウとの戦いは、浮わついた考えと綺麗事だけで何とかなる様な甘いモノでは無いのだから。

【犯人】を追つてあの世界で戦うと言う事は、自ら危険に飛び込んで行くのと同義でもあるのだ。

だからこれは、暫定的には言えリーダーを任せられた者として、最低限しなくてはならない忠告だと自分は思っている。

一時のヒロイズムで、判断を間違える様な事だけはしてはいけない。

里中さんにも天城さんにも、その間違った判断のせいで苦しむなんて事は、させたくない。

天城さんを救出するという目的を達した里中さんにも、そして助け出された天城さんにも、「犯人」を追わなくてはならない絶対的な義務も必要性も存在しない。

だから己の身の安全を取る事は何も間違っていないし、その為にリスクから遠ざかると言うのも、それはそれで正しい選択である。

が、様々なリスクを秤にかけた上で「それでも」というのなら、その意志は尊重するべきだし、それ以上に口出しする権利は今この場に居る誰にも存在しない。

全ては、二人の意志に基づいて選択すべき事柄である。

「協力してくれるというのなら有難いと思うし、もしそうならば全力で当てにもさせてもらおう。」

もし、よく考えた上で、それでも良いと思うのなら、今日の放課後にジュネスのフードコートに来て欲しい。

無理強いはしない。

来なかったとしても、それはそれで正しい選択だろうし、私は構わない。

ただ、天城さんと里中さん自身にとって、一番後悔しないであろう選択をして欲しい」

そう言うと、場の空気が少し重くなった。

それを払拭しようとしてか、花村が明るい声を上げる。

「鳴上は考え過ぎな気もするけどな。」

ま、あんまり重く苦しく考える必要はねーよ。

万が一ってのはあるんだって事を考えといってくれただけの話なんだし。

ま、それはそうと早く飯にしよーぜ。

さつきから腹が減って死にそーだ」

話にそう促され、やっと昼御飯を食べ始める。

重苦しかった空気は食べている内に薄れてほぼ消え去り、いつの間にか賑やかに雑談が始まった。

そんなこんなで昼休みは過ぎ、放課後になった。



花村とフードコートに行き少し待っていると、里中さんも天城さんもやって来た。

「……本当に良いの？」

「うん。」

あれから、鳴上さんが言った事もう一回ちゃんと考えてみた。

……ああ言って貰えなかったら、私リスクを負うって事を深く考えないままだったと思う。

……私ね。折角助けて貰ったのに、死ぬのは嫌。

だけど、ここで【犯人】の凶行を見ない振りしてしまうと、何時か絶対に【犯人】を追いかけなかった事を後悔するんだと思う。

だから、私、やるよ」

天城さんはそう言っただけで確りと頷いた。

「あたしも……あれから考えてみた。

今回は無事だったけど、次からどうなるのかは分からないって事

……多分あんま考えてなかったかも。

雪子助けた時は兎に角『雪子が危ない、助けなきゃ』って気持ちで一杯だったから、あんまり周りが見えてなかったと思うし……。

……誰かを助けるんだって事で頭が一杯でさ、……うん……あんま上手くは言えないけど。

……でもさ。

ここで止めると、後悔するんだろうなっていうのは分かった。

……あたし頑張るから。全力で守るから。

だから、あたしも行く」

里中さんはそう言っただけでこちらを真っ直ぐに見据えた。

「そうか……。……ありがとう。」

改めてよろしく、里中さん、天城さん」

二人の意志の確認が出来たところで、クマに会うためにテレビの中へと足を踏み入れた。



……
……
……
……

テレビの向こうは相も変わらず霧に包まれていた。

来訪に気付いたクマが、足音を立ててやって来る。

「およよ、今日はいっぱい来てくれたクマねー。」

ユキちゃん元気？」

「あの時のクマさん……。夢じゃなかったんだ……。」

うん、元気になったよ」

クマが加わるとワイワイと一気に場が賑やかになる。

クマに天城さんが新たに仲間に加わる事を説明した。

ついでに天城さんの『メガネ』はあるかどうかと訊ねると、準備の

良いクマはきっちり用意していた様だ。

天城さんののは真紅のフレームで、とても良く似合ってる。

クマは、その人に合うメガネを選ぶセンスがかなり高いのだろう。

「これ、クマさんが作ったの？」

「そうクマよ！」

ほれ、この繊細な指先の成せる技クマ!!」

そう言ってクマは手をこちらに向けてワサワサと動かすが、あまりにも微細な動き過ぎてよくは分からない。

「分からんわ!!」

花村の突っ込み裏手パンチが炸裂し、体勢を崩したクマから何が落つこちた。

それを拾い上げた天城さんの目が何故か輝く。

クマ曰く『ちよつぴり失敗作』というそのメガネは、何処からどう見ても鼻眼鏡だった。

そう、パーティーグッズとして不動の地位を築いている、あのでかい鼻の付いたメガネだ。

ご丁寧に緩やかなカールを描く髭まで付いている。

牛乳瓶の底の様なレンズには渦巻き模様が入り、罷り間違つても実用に耐えうる物とは思えない。

完全なるネタアイテムだ。

何かがどう『ちよつぴり』なのか問い質したくなるレベルである。

しかしその何処が心の琴線に触れたのかはさっぱり不明だが、徐に天城さんは自らのメガネを外し、鼻眼鏡へと付け替える。

そして嬉しそうな顔で此方を見て、「どう？」と訊いてきた。

「えっ？ あー……その……」

ミスマツチにも程がある。

完全にコントだ。

天城さんはどういった感想を求めているのだろう。

こんな時にどういう顔をすれば良いのか分からない……。

……何となく、「笑えば良いと思うよ」なんて返ってきた気がした。

気に入ったのかと訊ねるクマに、鼻ガードがあるから寧ろこれが良いと天城さんは答える。

だがクマはそれにはレンズを入れていないのだと言うと、心底残念そうな声を上げて鼻眼鏡を外して元のメガネに付け替える。

……もしレンズ入りだったらそっちの鼻眼鏡にするつもりだったのだろうか……。

そして天城さんは今度は里中さんの番だ、とその鼻眼鏡を里中さんに渡す。

それを仕方ないな、と里中さんは付け替えた。

その途端、猛烈な勢いで天城さんがお腹を抱えて大爆笑を始める。

一瞬、天城さんが壊れたんじゃないかと心配になる程の笑いっぷりだ。

どうやら天城さんは笑い上戸だったようである。

普段は里中さんの前で位しか見せなかつたらしいが……これもまた天城さんと親しくなれた証拠とでも言えるのかもしれない。

◇◇◇◇◇

『《マヨナカテレビ》……？』

そう言えば前に千枝がそんな事言つてた気がするけど……」

天城さんの笑いが収まるのを待つて、もう一度情報を整理及び共有し直した。

『《マヨナカテレビ》を見た事が無い天城さんは今一つ実感が湧かない様だ。

まあ、あれは一度見てみないと分からないだろう。

『《マヨナカテレビ》がどういったものであるのか……それはまだ良くは分かつていない。

ただ、今の所、天城さん・小西先輩・山野アナの被害者三人が映つてる。

……【犯人】と何らかの繋がりがある可能性は否定し切れない」

『今んところの被害者の共通点つて言つちや、全員が女性だつて事だよな』

『まあ確かにそれはそうだけど、女性ばかり被害に遭つたのは今はまだ偶然の一致という可能性も捨てきれないと思う。

確率的には8分の1だし』

サイコロを振つて二連続で特定の目が出る事よりも確率的には高い。

『じゃあこれは？』

『二人目以降の被害者も、一人目に関係している』

天城さんの言葉に、里中さんと花村が頷いた。

「あ、そっか、雪子も小西先輩も、山野アナと接点があった……」

「口封じって可能性、だな。」

小西先輩や天城にしか分からない何かを消す為に……」

そういう接点は確かにある。

先輩は山野アナの遺体の第一発見者だし、天城さんは実家の旅館に山野アナが直前まで宿泊していたらしいし。

だけど……。

「……確かにそうだけど……。その線で行くなら、先輩の件は兎も角、天城さんが狙われたのは少し妙じゃないか？」

「妙？」

花村が首を傾げそう口にし、里中さんと天城さんも不思議そうな顔をする。

「天城屋の従業員で、天城さんよりも山野アナと接点のあった人なんてもっと大勢居た筈。」

それこそ、女将さんをやってる天城さんのお母さんとか。

その人達を差し置いて天城さんをワザワザ狙う理由なんてあるか？」

「確かに……山野アナがうちに宿泊していたのは知ってたけど、私が実際に会った事なんて殆ど無かったし……。」

確かに、変」

天城さんが同意する様に頷いた。

更に、と他にもある不自然な点を上げる。

「それに、口封じが目的なら、天城さんを救出してから今までに、天城さんの身の回りでも何も起きなかったのは不自然じゃないか？」

……尤も、これは天城さんだけが生還したから、その理由を探るために【犯人】がわざと天城さんを泳がせているだけなのかもしれないけど」

その指摘に当事者の天城さんは動揺した。

「あくまでも可能性だから、あまり気にする必要は無いと思う。」

ただ……、関係者を殺害して口封じをするってのは少し筋が通らな

「気がする」

「いやでも……、立件出来ない様にこつちの世界を凶器にしてるんならさ、天城が生還したんで、それ以上狙うのは諦めたんじゃ……」

「殺す積もりの……既に二人を同じ手口で殺した相手が、一回失敗した位でそれを諦めると思うか？」

実際に直接手に掛ける……というのは無いにしても。

今回天城さんが助かったのは何かの偶然と結論付けて、もう一度テレビに落とす可能性の方が高いと私は思うけど」

花村の言葉に反論すると、里中さんと天城さんはやや曖昧に頷く。

「あー……うん、確かに……何か変だよな」

「うーん……って事は殺害目的じゃないって事……？」

「いや、そう結論付けるのは幾ら何でも早計過ぎる。」

少なくとも、天城さんへの害意はあったと思う。

態々誘拐してまでテレビに落としているんだし。

ただ、その動機として山野アナの件に関する口封じというのは、違う可能性もあるってだけだ」

「あーっ、もう、犯人の意図がマジで分からん！」

頭がこんがらがってきたのか、里中さんが吠えた。

「結局、手掛かりらしいものって《マヨナカテレビ》位だよなあ……」

花村は溜息を吐いた。

今の所被害者の確かな共通点とは、それ位しかない。

「うーん……でも、何で被害者の人達が映るんだろ？」

しかも、その人達がテレビに落とされる前に映るんだよね？」

「なんかさー、こう……あれだよな、あれ。」

えーっと、【予告】？」

天城さんの疑問に、里中さんが首を傾げながら言う。

【予告】……。

それじゃあまるで愉快犯みたいだね」

「……それだよ、天城!!」

その里中さんの言葉に天城さんがそう答えるや否や、途端に花村が声をあげた。

突然の声に、天城さんと里中さんは驚いた様に目を瞬かせて首を傾げる。

「えっと、何が?」

「【犯人】の狙い!」

愉快犯だとするならば、天城を狙う動機があやふやなのも筋が通る!!」

「ああ、成る程。

愉快犯だとするならば、世間的に話題になりそうな人を狙って犯行に及んでいるのかも……」

花村の言葉に、成る程、と頷いた。

確かに……それなら本来なら繋がりの薄い筈の三人が被害に遭った事にも説明が付く。

不倫騒動でメディアの注目が集まっていた山野アナが被害者だったからこそ、その遺体発見時の異様さも相俟ってワイドショーなどを騒がしているのだ。

良くも悪くも、マスコミは話題性のある物を重視する。

山野アナの事件なんて、その格好のネタだ。

そして、その事件の衝撃も冷めやらぬ内に起きた第二の事件。

しかも被害者は第一の事件の第一発見者だ。

それ故世間は大いに騒いでいる。

犯人に対するよく分からない憶測が、画面の向こうを飛び交っているのはよく知っている。

もし天城さんがあのままシャドウに殺されていたら、それもまた大いに話題を呼んだ事だろう。

第一の被害者の宿泊先の若女将……しかも女子高生という付加価値まで付くのだ。

尤も、その目論見は外れた訳だが。

「何よそれっ!」

人を殺しといて、それを楽しんでるっての?!

許せないっ!!

んなふざけた奴、絶対に見つけ出して、靴跡つけちやる!!」

漸く話が飲み込めた里中さんは、途端に気炎を上げるかの如く、怒りを顕にした。

それを花村が宥める。

「里中、落ち着けよ。」

まだそうって決まった訳じゃないんだ。

……でも、もし犯人の目的がそれだとすると……」

こちらを見てくる花村の視線に、コクリと肯定の意と共に頷く。

「……犯行は終わらない、だろうな。」

世間の興味関心なんて、直ぐに移り変わっていくんだし」

……まあ、この説だって所詮は推論の域を出ない。

まだ情報が足りないのだ。

その中で答えを性急に出そうとしたって、酷いバイアスのかかった的外れなモノになりかねない。

大切な事は、視野を広く持つ事、それと考える事を諦めない事だ。

「あー、ま、兎に角《マヨナカテレビ》をまた見てみるしか無さそうだな。」

取り敢えず、《マヨナカテレビ》の映る条件が整った時は必ずこれを見る事。

これで良いよな」

花村の意見に全員賛同した所でその場は解散となった。



【2011/04/26—2011/05/13】



【2011/04/26】

一応諸岡先生に確認を取った所、バスケ部と演劇部の掛け持ちは可能だそう。

部活動の日も、被っていない日もある事は確認済みだ。

元々役者としての入部を希望してはいたので、そう熱心に活動に参加しなくともあまり目くじらを立てられはしないだろう。

そんな気持ちで叩いた演劇部の扉だが、何故か今発声練習の真っ最中だ。

窓の外は少しずつ暗くなってきた。

……困ったな。

そう思いながらも、一対一で一生懸命指導してくれている先輩部員である同級生の小沢さんには文句は言い辛い。

第一印象は、アットホームな部、だった。

活動に関して言えば、相当緩い方だろう。

小道具係りを希望すると、少し意外そうに見られてはいた。

それでも良いとなった、なった……筈だったのだけれど……。

その後、部長と副部長の二人が二人だけの世界（別名・リア充空間）へ行ってしまった為、同じ学年の小沢さんが部について説明してくれる事になった。

小沢さんはどうやら部の中でも群を抜いて演技が上手い様だ。

それは良い。

それは良いのだが、何故「小道具係りでも多少の演技力は必要」という持論を展開され、否と言う前に発声練習をやらされているのだろう……。

部長達は一瞬こちらに憐れむ様な視線を向けて先に帰ってしまった。

……見捨てられたのだろうか。

いや、そんな風に考える様なものでもない、か……。

少なくとも小沢さんは悪気は無い（寧ろ善意を込めている）のだろうし。

その後、日が暮れ始めた処で漸く小沢さんの発声練習指導から解放された……。



【2011/04/27】

買い出しに行こうかと商店街を歩いていると、誰かに呼ばれた気がして立ち止まる。

声を感じた方向に歩いていくと、目の前の壁に突然蒼い扉が現れた。

怪しさ満点だが、どうやら周囲の人はその扉に気が付いていない。

そもそも見えてもいない様だ。

その扉のドアノブにあたる部分の模様は何やら見覚えがある。

もしや、と思い、ポケットに入れているベルベツトルームの鍵を取り出し、鍵穴に差し込むと、ぴったりとはまった。

意を決して鍵を開けると、気付けばベルベツトルームの中にいた。

「ようこそ、ベルベツトルームへ……。

貴方の町とこの部屋を繋げさせて頂きました。

時間が少々予定よりも掛かった事にはお詫びを申し上げます

……」

いや、別にそれは構わないが……。

さつきまでは確かに商店街に居た筈だ。

それなのに何故ここに居るのだろう。

「ご心配召されるな。」

貴方の意識の狭間の時間にてこちらにお呼び立てしているだけの事。

ここは貴方の世界とは異なる時の流れにある空間です故、案ずる事はありません」

……ここを出ても、あつちの世界では殆ど時間経過していない、という事だろうか。

「左様でございませす」

それを聞いて少し安心した。

突然ここに体ごと来てしまつては端から見ていると神隠しになつてるし、意識だけにしても、長時間呆けた様に壁に向かって突つ立っているのも不味い。

時間にしてほんの数瞬ぼんやりしているだけならまだ何とかなる。

「貴方は己が内にある異なる可能性に目覚めた様ですな」

ジャックフロストの事だろうか。

イゴールさんはそうだ、と頷いた。

「貴方はもう既にお気づきかと思われるが、その可能性とは正しく貴方が紡いだ絆によりもたらされたもの。」

よりその絆を深めていけばいく程、新たなる可能性を掴み取る事が出来るでしょう。

それに……貴方の中にはもっと多くの可能性が眠っている」

まだ他にもペルソナがいる、という事だろう。

「貴方の旅路はまだ始まつたばかり。」

そう、急がれる事はない。

貴方の信じるままに、絆を育まれて行くと良い。

それこそが、心の器を育むのであります」

……焦るな、という事か。

その時、所在なさげにしているマリーと目があつた。

「話、終わった？」

狭いし、暗いし、鼻詰まんないし。

息詰まるよ、ここ」

「マリー、お客様の前です」

明け透けなマリーの言葉をマーガレットさんは窘めるが、マリーはそんな事は知った事かとばかりな態度を取る。

「は？ 意味わかんない。」

「ばかきらいとうへんぼく」

「フウ……大変申し訳ございません。」

手に余るじやじや馬っぷりでございます」

マリーに注意する事は諦めたのか、マーガレットさんは少し溜め息を吐きながら、こちらにそう言ってくる。

確かに……大変そうだ。

しかし良く良く考えれば、何故マリーはここに居るのだろうか。

以前尋ねた時は、マリー自身その理由が分かっていなかったみたいだったが……。

「ここはお客様の定めと不可分の部屋。」

この部屋で全く無意味な事は起こり得ません。

……貴方様は、この部屋での出会いより先に、既にマリーと出会っていらつしやったご様子」

そう言われて思い返せば、稲羽に來たその日どこかでマリーと出会っていた気がする。

……何故か記憶が非常に曖昧なのが気に掛かるのではあるが。

マリーの格好は良くも悪くも稲羽では目立つし、稲羽で出会っていたらそう簡単には忘れないだろう。

記憶力にはそれなりに自信があるし、まだ呆ける程歳を重ねた覚えはない。

それなのに何故……。

「人ならざる者と出会い触れ合う貴方様の定めが、その出会いを導いたのでしょうか」

人……ならざる者……？

つまり、マリーは《人》ではない、という事か。

いやまあ、この部屋に居る段階でマリーもただ者ではないのだろう

とは思っていたが。

「どうやらそもそも《人》ではなかった様だ。

まあ、だからどうとまでは思わないが。

「この部屋の客人たる貴方様と、宛てなく彷徨う人ならざる者との運命の交錯……。」

果たしてこの出会いが何を導くのか、失礼ながら私共もその行方には、多少の興味がございます」

「そう言つてマーガレットさんは僅かに微笑んだ。

「マリーは貴方より先にこの地に居たとは言え、貴方の暮らす世界には疎い……。」

「ですから……貴方様さえ宜しければ、どうぞ彼女をこの部屋の外へと連れ出してやつて下さい」

「マーガレットさんからそう頼まれ、マリーに向き直つて訊ねる。

「外に行きたいのか?」

「べ、別に……キョーミンなんてないけど。

「……でも、キミがどうしてもつて言うのなら、行つても良い」

「そう言つてマリーはそわそわしながらこちらを期待する様な目で見してきた。

「……恐らくこれは、「とつても行きたいです!」とでも取るべきだろう。」

「素直ではない、と言うべきか。」

「どうであるにせよ、マリーが望むのならこちらとしてもそれを叶えてあげたい。」

「折角だし、マリーともつと仲良くなりたい。」

「だから、マリーが良ければ、町に出ていこう」



ベルベットルームを出て、取り敢えず手近な所からという事で、マ

リーと一緒に商店街を歩く。

閉店した店が目立つ寂れた商店街とは言え、物珍しいのかマリーはキョロキョロと辺りを見回していた。

まるで小さな子供の様な仕草である。

「何か不思議……。」

懐かしい感じがするんだ……匂い、とか」

「懐かしい？」

「うん、そう……何となく、懐かしいの」

「マリーはあの部屋に来る前は何処に居たんだ？」

もしかしてこの辺りに住んでたりとか、似たような田舎町に住んでたりしたのかもしれない。

そう思っただけ掛けた質問の答えは、想定外の遙か斜めを行った。

「……覚えてない」

「え……？」

思わずマリーを凝視してしまう。

……マリーの表情は冗談を言っている様なものではない。

「色々、全部。……何も覚えてないの。」

気が付いたらただ歩いて……行くところなんてなくて、何と無くあの部屋に着いて……。

そしたら、まーがれつとが、『ここに居なさい』って。

マリーって名前も、あの人がくれただけ。

……名前無いんじや、不便だから」

それは……所謂記憶喪失、というやつなのではないだろうか。名前すら思い出せないなんて、相当重症だ。

「……本当に、何も思い出せないのか？」

「本当に些細な事とかでも」

「……思い出さないの。必要、ないし」

そう言いながらも、マリーの表情には切実なものを感じる。

……しかし、自分には記憶を瞬時に戻す術など無い。

どうしたものか……と思いつながら、マリーの顔を見た。

「でも……この町は懐かしい感じがするんだ」

「……他に何か無いのか？ 持ち物、とか」

「持ち物……。それなら、あるよ」

そう言ってマリーは肩に掛けた鞆から古びた竹櫛を取り出す。年季が入ってそうな雰囲気だが、汚れなどはほぼなく、そういった意味では新品に近そうな感じだ。

しかし、多分櫛なんだろうけれども、一般的に見るデザインではない。

何と言うのか……。何かの神事にでも使われてそんな祭具の様な感じである。

材料が竹という事は分かる。

……このデザイン……。

……何かの写真で見た気がする……。

縦櫛……だったか……？

しかし、一体それを何処で見たのかは思い出せない……。

「これだけは最初から持ってた。

……これは、絶対、私のもの。

でも……こんなの何の役にも立たないよ……」

その櫛を辿れば何か分かるんじゃないだろうか、とは思ったが、マリーの表情は暗く、これ以上この話題に触れて欲しく無さそうなので、それ以上は踏み込まない事にする。

何と無く重くなってしまった空気をどうしようかと頭を悩ませていると、もうその話題に興味を失ったマリーはスタスタと一軒の店に歩いて行ってしまった。

『惣菜大学』という惣菜屋だ。

揚げ物をしている良い匂いが漂っている。

ジーっと物欲しそうな目で惣菜を見ているマリーに、欲しいのかと訊ねると、勢いよく首を縦に振った。

どうやらマリーには持ち合わせが無いらしく、それどころか物を購入する時に金銭が必要という事も知らなかったらしい。

大した出費でもないし買ってあげようかと財布を取り出した時、通りの向こうから花村と里中さんがやって来た。

「あ、鳴上さん！」

「お、鳴上じゃん！」

「って……横の娘誰よ？ チョー可愛いじゃん!!」

「あー……私の友達、ってとこ」

説明に困り、別段嘘では無い言葉で誤魔化す。

花村と里中さんは、それには特に疑問を感じなかった様だ。

「この辺りの人じゃねーよな？」

鳴上の前の所の友達？

あ、俺は花村陽介！」

「本当に可愛いね。」

あ、あたし里中千枝。よろしく！

君、名前は？」

そう言つて里中さんは人好きのする笑みを浮かべた。

「えっと、マリー……、かな。よろしく……」

マリーも戸惑いながらも挨拶する。

「それで、どうしたんだ？ 二人して」

「いや、それがさ。」

ほら、前の時に俺達、里中を心配させちまっただろ？

そんな時の詫びにビフテキ串奢れって煩くてさ……。

捕まっちゃまった訳」

「ああ……成る程ね」

それは災難な事だ……。

花村のおサイフ事情は知らないが、取り敢えず手は合わせておいた。

た。

「あ、そうだ鳴上さんも奢ってよね！」

花村と鳴上さんで一本ずつ!!」

「……私も??」

いやまあ、奢る事自体は別に良いのだが……。

ビフテキ串はそれなりにボリュームがあると思うのだが、二本も要

るのか……?」

結局、マリーと里中さんにビフテキ串を奢る事になった。

店の前のテーブルに腰かけてビフテキ串に嚙り付く。

固めの肉だが、味付けは悪くはない。

少々野暮ったくはあるが。

腹を空かせた学校帰りの学生には買い食いするには丁度良いボリュームだ。

「結構クセになる味だよな。ここのビフテキ串」

「いやー、やっぱりここのビフテキ串はたまらんねー！」

マリーちゃん的にもどうよ？」

「すつごい変。硬いし噛めないし途中で冷めた。

すごく美味しかった」

思いつきり扱き下ろすな、と思っていたら思いの外マリーには好評価だったらしい。

「毎日これ食べてるんでしょ？」

良いな……ズルい」

「いや、毎日って訳じゃねーけど。

……もしかしてマリーちゃん家って買い食いとか許して貰えない感じ？」

花村の言葉に、マリーは首を傾げた。

「どうだろ……。でも、こういうの初めて」

「うわ、マジで！

でも確かにキビシイ家って、そんなんだよねー。

うう……あたしなら耐えられない。

ビフテキのない生活なんて……！」

「……肉限定？」

マリーの場合、買い食い以前の問題な気もするが……。

とりとめのない話をして、その後花村達とは別れた。



まだまだ外を探索したいらしいマリーにせがまれ、それならばと高台に足を運ぶ。

この町を一望出来る高台は、結構な絶景スポットだとは思う。

空を覆っていた厚い雲の切れ目から、沈みつつある陽光が射し込み、稲羽の町並みを照らしていた。

「緑の葉っぱ、飛んでゆく……」

お空と雲とこんにちは……

迷子の私も飛んでゆく……

夜空の月にさようなら……」

マリーがぼそぼそと呟いているのは……ポエムなのだろうか。

詩的なモノへの造詣は深く無いから何とも言えないが、自分には中々に独創的な物に聞こえる。

「ちっ、違うから！」

い、今の、ポエムとかじゃないから！

たた、偶々心に浮かんだだけ！ それだけだから!!

か、勝手に聞かないでよ！

ばかきらいさいあくさいてー！」

……心に浮かんだだけと言われても、それこそまさしくポエムというやつなのではないだろうか。

それに勝手に聞くなと言われても……真横で呟かれたら聞く気は無くとも耳に入ってきてしまうのだが。

マリーは頬を赤らめたまま、話題を変えるかの様に高台から街を見下ろす。

「……こんなに広がったんだ……」

何でだろ……やっぱ懐かしい。

いいね、こういうの」

何かを懐かしむ様に目を細めて稲羽を見下ろすマリーのその表情には、愛し子を見詰める母親のような愛情が浮かんでいた。

そしてこちらを見上げてきたマリーは、キラキラと目を好奇心の光で輝かせている。

「まだ見れるトコある？」

もっと色んなトコ知りたい。

キミといると、色んな事が気になるの。

何でかな？ ……意外と楽しいよ」
その後マリーにせがまれるまま町中を案内して、日が暮れる前にはベルベットルームにまで送り届けた。



〔2011/04/29〕

突然花村に頼み込まれ、急な話だがジュネスで品出しの手伝いをする事となった。

今はゴールデンウィークの休日初日。

絶好の書き入れ時だ。

その為、何時も繁盛しているジュネスだが、雨の日にも関わらず平時を遥かに上回るお客様で賑わっている。

次から次に飛ぶように商品が買い物籠に放り込まれ、セール品を歴戦の主婦達が争う様にして取り合っていく。

お陰でバックヤードは最早ちよとした戦場の様な有り様だった。

品出ししても品出ししても、次から次へとあれが足りないこれが足りないと言われ、只管バックヤードを走り回る羽目になった。

体力には自信があったのだが、セールの時間が終わり人の波が少し治まってきた頃には流石にくたくたになっていた。

「うええ、疲れた……。」

急に人手が足りなくなったらしくて、何でも良いから人手が欲しいって親父に頼まれてさ。

ホント、お前が居てくれて助かった！

サンキュな」

仕事を終え、雨も降り止み雲の切れ間から夕陽が覗く今は、花村と二人でフードコートで寛いでいる。

急な話で驚きこそしたが、別にこれ位ならどうと言う事も無い。

一日だけとは言えバイト代は出たし（しかも多分学生バイトの時給としては高めだったので、少し色を付けてくれたのだろう）、これで文句があるう筈は無い。

花村の力になれたのなら、それで良い。

寛ぎながら二人で話をしていると、以前花村に言い掛りを付けてきた女性たちがやって来た。

「あ、花村ー。

何なの今日、超忙しいんだけど。

来なかつたらクビってチーフがうるさいから来たけどさー。

こんなの知ってたら休んだっつもの」

そう言って女性たちは給料が安いのだと、花村に文句を付け始めた。

……そもそもゴールデンウィークなのだから、忙しいだろうと位は普通に考えて想像が付くだろうに。

やはりこの人達は馬鹿なのだろうか？

それに大体、花村がバイトの時給を決めている訳ではないのだから、そんな文句を花村に付ける事自体が間違ってる。

「少しは考えろ、煩いから黙れ」と言いたくはなったが、そこは自制して口を噤む。

そもそも言った処で理解する様な頭すら無いかもしれない。

まあ、ただ何と無く文句を付けただけで、それには花村が手頃だというだけなのかもしれないけれど。

それにしても、あまりの馬鹿さ加減に頭が痛くなってくる様な文句は止めて欲しい。

一通り言い募って満足したのか、女性たちは花村を解放し、こちらのテーブルから少し離れた所に陣取って話始めた。

しかし、その話声がやたら煩い。

どっかにスピーカーが付いているんじゃないかと疑う様な声のボリュームだ。

別に、彼女たちの卒業旅行事情など本当にどうでも良いのだけど……。

しかし、ふと彼女たちの話題が、早紀——小西先輩に移った時、花村の目に昏い陰が落ちた。

そして唇を噛み締め、微かに俯く。

「去年だっけ？ 早紀の駆け落ち」

「そうそう、帰省してきた大学生にくつついてどっかまで行ったらしいじゃん。」

けどすぐ帰って来てさ、『自分でお金貯めて出てく』って言ったって」

「えー、何それ、捨てられたって事お？」

「知らないけどお、ここでバイト始めたって事はやっぱお金貯めたかったんじゃない？」

けどさあ、うちら女子高生が本気になれば、もっと稼げるバイトあるじゃんねー」

ゲラゲラと笑うその声が煩わしい。

……花村が気掛かりで、その昏い目を見詰める。

「心配しなくても、別に……関係ねーよ。」

あの人らの、テキトーな噂だし。

別に、気にしてねーし。

……でも……あんな風に言われて、……先輩、可哀想だな……。

小西先輩の仇、取ってやれるのは俺らだけだ。

……俺らしいかないんだ。

だから……外野は気にする必要無い」

まるで自分自身にそう言い聞かせる様に言う花村に、言い返す言葉は無かった。

「……そうか。……花村は大人だな」

「ははっ……テレビン中で、ガキの俺を見ちまったからな。」

ちよつとは変わって行かねーとな……」

……確かに、我慢し耐える事は必要だ。

口を噤むべき時というのもある。

だけれど、悲しいとか、辛いとか、そう思う事、感じる事自体はどうしようもない事だろう。

心無い噂話に、心を痛める事自体は何も悪い事ではない。それが想い慕っていた故人への流言なのなら、尚更の事。花村が無理をしていそうで、それが気掛かりだ。

「あー、何か……めんどいな。」

……あ、いや、お前の事じゃなくつてさ……。

……何だろうな。

……俺にも分かんねーや……」

そう疲れた様な声で溢す花村の目は、相変わらず昏いままだった。



【2011/04/30】

天城さんを救出して以降、「犯人」にこれといった動きは無かった。懸念していた雨の日の犯行も起きる事はなく、昨夜の《マヨナカテレビ》には砂嵐しか映っていなかった。

花村達に聞いても、やはり何も見えなかったらしいから、多分新たに映された人や物はなかったのだろう。

明け方に霧が出たらしいが、新たな犠牲者が出る事は無かった様だ。

それと前後する様に道行く人の話題に天城さんの事が上る事がほぼ無くなったみたいだ。

人の噂は何とやらとはよく言うが、実際は人々の関心がそんなに長く続く方が少ない。

話題や娯楽に乏しい町だから都会よりは少々長くは続くが、謎の失踪後天城さんが比較的直ぐに戻って来た事もあってか、只の家出位にしか思われてないみたいである。

無論、無意味に騒ぎ立てられるよりはそちらの方がずっと良いのだが。

八十神高校の生徒達の専らの関心は、ゴールデンウィークとその休み明けに待ち構える中間テストである。

成績上位者を貼り出すというのは、(プライバシーの保護が叫ばれる今時でも)あまり珍しい話では無いが、八十神高校では学年全員分の順位を貼り出すらしい。

プライバシーは何処に行ったのだろう。

まあそんな訳なので、テストの出来の良し悪しというのは、生徒にとって非常に重要な物事なのである。

お小遣いアップを狙い成績上位層を狙ったりする者もいれば、またある者は家族会議回避の為に成績の向上を目指す……。

都会の進学校だろうと何処だろうと、テストが学生生活に大きく関わっているのは変わらない。

そういう訳なので、テスト前一週間は部活動は休止になる。

だから、今日がテスト前にバスケが出来る最後の日だ。

存分に部活を楽しもう。

その日はたつぷりと部活を堪能し、一条からお裾分けしてもらったクッキーに舌鼓を打ってから帰宅した。



〔2011/05/01〕

マリーに頼まれ、ジュネスまでやって来た。

電化製品に馴染みが無いからか、家電売場の品々を大層興味深そうに見ている。

中でも、特にテレビに興味を示したらしい。

ジーっとテレビを眺めるマリーに欲しいのか訊いてみたくなった時、今日は非番だったらしい花村と偶々遊びに来ていたという里中さんが声を掛けてきた。

「あつれ、鳴上とマリーちゃんじゃん。

何々、テレビでも見に来たのか？」

「まあね。マリーが見たいらしいし」

「あー、あたしも買い替えまだだから欲しいんだよねー」

ウンウンと頷く里中さんにマリーは少し頬を赤くしてそっぽを向く。

「べつ、別に欲しくないよ！

欲しくないけど……。

……『野次馬ゲノー速報』も見れるの？」

……それは要は欲しいって事なんじゃないだろうか。

と言うか、何だその番組。

「見れるとは思うけど……。

……そもそもあの部屋でテレビって使えるのか？」

そもそも、コンセントとかあるんだろうか？

ベルベツトルムとは言っているが、あそこ車の中だし。

いつそテレビを付けるよりは、番組も見れるタイプのカーナビを買った方が早いんじゃないだろうか……。

「えっ、見れないの？ 何で？」

み……見たいなんて言っていないけど！

……どうやってたら見れる？」

そもそもテレビの使い方を分かってないだろうマリーに、一から説明した。

するとそれを横で聞いていた花村と里中さんが驚いた様にマリーを見る。

「えっ、マリーちゃん家ってテレビ見ないの？」

驚いた様にそう訊ねる花村にマリーは頷く。

「見ないよ、部屋に無いもん」

「うっわ、テレビもダメだし、買い食いかもダメって、マリーちゃん家相当キビシイ感じだね……。

うう……あたしなら耐えられない。

カンフー映画の無い生活なんて……！」

カンフー映画限定なのか……。

マリーはカンフー映画とやらが何なのか分からず少し首を傾げたが、ふと気が付いた様にこちらを見る。

「あ……、でもあの部屋 “こんせん” ないなー。

鼻に言わないと、 “こんせん” 付けろって。

ヒマ過ぎだし、あの部屋……」

やはりコンセントは無いのか、あの部屋……。

いや、コンセントだけを付けても、電気が通ってないのならあまり意味は無いと思うのだけれど。

暇だ、と言うマリーの主張は分からないでも無いのだが……。



〔2011/05/02〕

叔父さんからその連絡が来たのは、もうそろそろ菜々子ちゃんを寝かし付ける様な遅い時間だった。

そんな時間になっても帰ってこない叔父さんに、その顔を曇らせていく菜々子ちゃんの為に、蜂蜜入りのホットミルクを用意していた所だ。

暗い顔をした菜々子ちゃんから受話器を受け取り、電話の向こうに居る叔父さんに声を掛けると、少しばかり堅い声が帰って来た。

『すまないが、今日は遅くなる。』

戸締まりして、先に寝ておいてくれ。

それから、4日と5日の件なんだが……。

若いのが一人、身体を壊してしまつてな。

抱えてる事件の内容から、穴を空ける訳にはいかん……。

代わりに俺が出る事になりそうだ』

「そうですね。」

それは……叔父さんの責任じゃないですよ。
事件なら、……仕方無いですし」

恐らく、今晚のテレビで報道されていた、信用金庫のATMが重機で壊されて奪われた事件で駆り出されているのだろう。

事件が起きたのは叔父さんの責任でもないし、同僚が身体を壊してしまったのにも勿論責任は無い。

ただ単に運が悪かっただけだ。

だが……連休を本当に楽しみにしていた菜々子ちゃんの気落ち具合が気にかかる。

『すまん、急な話で……』

菜々子は……どんな様子だ？

出来れば、気に掛けてやってくれ。

……じゃあな』

通話はそこで途切れた。

テレビでは天気予報がゴールデンウィーク中はずっと行楽日和の快晴である事を伝えている。

菜々子ちゃんは自分の部屋に引き上げてしまった。

受話器を元に戻し、溜め息を一つ溢す。

どうする事も出来ない話だけれど、本当に儘ならない事だ。

取り敢えず、作ったホットミルクを持って菜々子ちゃんの部屋へと向かった。



〔2011/05/03〕

朝……起きてきた菜々子ちゃんは、予想していた通り、気持ち落ち込んでいた様子だった。

……旅行を本当に楽しみにしていたのだ、無理からぬ話である。

菜々子ちゃんの歳を考えると、泣いて駄々を捏ねたって可笑しくない話だ。

そうしなかったのは、そんな事をすれば叔父さんを困らせてしまうと、菜々子ちゃんが自制しているからだろう。

一泊位なら気分転換の為に何処かに連れ出してあげたくはなるが、自分とて居候の身である為そんな勝手は通し辛いし、何より菜々子ちゃんにとっては『お父さんと一緒に過ごせない』という事が一番悲しい事態なのである。

別に叔父さんだって好き好んで本来の休暇を放棄してまで仕事している訳ではない。

唯々、『仕方の無い』出来事なのである。

まあ……だからと言って、理屈では理解出来ても、感情の面では納得は出来ない事ではあるが……。

さてどうしたものか……、と考えていると、家のチャイムが鳴った。宅配や郵便では無さそうだが……。

そう思いながら玄関に出ると、訪ねてきていたのは里中さんだった。

どうやら遊びに誘いに来てくれたらしい。

この時間帯……という事は行き先はジュネスだろうか？

菜々子ちゃんはチラチラとこちらを戸惑った様に見ている。

「おでかけするの……？」

「いいよ、……菜々子、おるすばんなれてるから……」

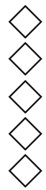
……以前は天城さんの救出の事もあって連れて出掛ける事は叶わなかったが、今回はそんな差し迫った事情も何もない気楽な集まりだ。

里中さんに確認したところ了承を得たので、振り返って、こちらをまだ伺っている菜々子ちゃんと目線を合わせる。

「良かったら、菜々子ちゃんも一緒に行こう？」

「えっ、でも……良いの……？」

勿論と頷くと、戸惑いながらも菜々子ちゃんは嬉しそうに笑った。



ジュネスのフードコートに行くと、天城さんと花村が待っていた。捜査隊メンバー全員集合である。

里中さんが先に話を通して来ていた様で、二人とも菜々子ちゃんには驚かない。

「にしても、折角のゴールデンウィークだつてのに行く先がこんな店じゃ菜々子ちゃん可哀想だろ」

菜々子ちゃんがリラックス出来る様にか、花村が軽いノリで話し出した。

「うん、こんなお店じゃ可哀想」

ザツクリと鋭い返しが天城さんから返ってきて、花村は苦笑いする。

別に、ジュネスが駄目なのでは無いのだが、『折角の』という気持ちはどうしても残ってしまう。

まあ、書入れ時だからか花村はこの連休中はずっとバイトのシフトが入っている様だし、天城さんの方もそれは同じだろう。

結局稲羽を離れて遠出する、というのも中々難しい話だ。

近場に遊び場があれば良いのだろうけれど、稲羽にはその様な施設は殆ど無い。

半ば仕方無しにジュネスに集まってしまうのである。

しかし、菜々子ちゃんは二人の言葉にフルフルと首を横に振った。「そんなことないよ。」

ジュネス、だいきき

「な、菜々子ちゃん……！」

小さな子供の飾り気の無い本音の言葉に、花村は感極まった様に目を潤ませた。

だが菜々子ちゃんは、「でもね、」と顔を少し伏せて続ける。

「ほんとうは……どこか、りょこうに行くはずだったんだ……。」

おべんとう、作って……」

「お弁当？ 菜々子ちゃんが作るの？」

天城さんの問いにフルフルと首を横に振り、菜々子ちゃんはこちらを見た。

それで察した里中さんは、ニヤニヤと笑う。

「なる程ね、家族の弁当係って訳か。

凄いいじゃん、『お姉ちゃん』」

「別に、凄いとかがじゃないけど」

からかい半分の里中さんの言葉に、そう返す。

何時もやってる事だし、今更凄いとかわれた所であり思う所は無い。

しかし、菜々子ちゃんは里中さんの言葉に思う所があったのか、何かを言いた気にチラチラとこちらを見やる。

……どうしたのだろう？

「へー、鳴上って料理とか出来んだ。

うん、まあ、手先とか器用そうな感じはあるよな。

あー、里中よりかは料理とかやってそうな感じだ」

「親が結構忙しい人達だから、手伝いの一環として始めて、まあその延長でかな。

結構楽しいよ。自分で好きな様に作れるし」

「お料理、とつても上手だよ」

菜々子ちゃんからお褒めの言葉を貰い、口の端が緩む。

「あ、あたしも何気に上手いけどね、多分。

お弁当ぐらいなら、あたしだって言ってくれば作ってあげたのに、うん」

何故か焦った様に里中さんが主張する、が、自ら「多分」と付けてしまつては信憑性は薄い。

「いやー、ムリすんなよ里中。それ、嘘だろ」

花村はパタパタと手を振った。

「なんで嘘って決め付けんの!？」

んじゃあ、勝負しようじゃん」

「ムキんなる時点で怪しいっつの……。」

てか勝負って、俺作れるなんて言ってねーよ？

あ、けど、不思議とお前には勝てそうな気がするな……。」

「あはは、それ、分かる」

「ちよ、雪子!？」

まさかの裏切りに里中さんは抗議の声を上げた。

「じゃあ、菜々子ちゃんが審査員かな。」

この人ら、菜々子ちゃんのママよりウマイの作っちゃうかもよ？」

花村の他意も悪意も無い言葉に、僅かながら身体が強張る。

そして、内心で嘆息した。

「お母さん、いないんだ。」

コウツウジコで死んだって」

菜々子ちゃんの言葉に、テーブルに沈黙が落ちる。

もう幾度も言い馴れてしまっていたのだろうか……、そう返した菜々子ちゃんの表情は、少なくとも表面上は平静を装っていた。

里中さんが無言で花村に肘鉄を入れて、不用意な発言を窘める。

それに微かに顔を歪め、慌てて花村は謝罪の言葉を口にした。

「そっか……、その……ごめんな、知らなかったからさ……。」

神妙な顔でそう謝ってくる花村に、菜々子ちゃんは「へーきだよ」と笑う。

「お母さんいなくても、菜々子には、お父さんいるし」

「それに、」と一度こちらを見やってから、微かに頬を赤く染め、少しばかり小さな声で続ける。

「……お姉ちゃんも、いるし」

……お姉ちゃん、か。

『歳上の女性』と言う意味で「お姉ちゃん」と呼ばれた事なら幾度かあるが、何せ一人っ子なものなので、あまりそう呼ばれ馴れてない。

だからか、何と無く面映ゆい気持ちになる。

「今日はジュネスに来れたし、すごいたのしいよ」

「……そ、そっか」

笑顔でそう続ける菜々子ちゃんに、ほっとした様に花村も息を吐く。

「お姉ちゃんたち、何時でも菜々子ちゃんと遊んであげるからね！」

「うん、遊ぼう」

里中さんの言葉に天城さんは頷いて同意した。

花村は勢い良く立ち上がる。

「よーし、菜々子ちゃん。」

一緒にジュース買いに行くか！」

「うん！」

花村に連れられて売店のカウンターに並んだ菜々子ちゃんが振り返って声を上げる。

「お姉ちゃん、どれがほしい？」

一緒に選ぶよ、と、菜々子ちゃんに返事をして、席を立った。



【2011／05／04】

花村に誘われて、菜々子ちゃんを連れて今日もジュネスへとやって来た。

同じく花村に誘われたらしい一条と長瀬も一緒だ。

連日のジュネスだけれど、それでも菜々子ちゃんには嬉しかった様で、目を輝かせて家電売場の商品を見ている。

喜んでくれている様を見ると、こちらもいつの間にか口の端が緩む。

その様子に、自身も幼い妹がいるのだという一条は菜々子ちゃんを可愛いと褒めた。

しかし、存外人見知りの気と、恥ずかしがり屋な一面もある菜々子ちゃんは、その誉め言葉が少し気恥ずかしかったらしく、顔を赤らめ

て一条から距離を取る様にこちらに近寄って、服の裾を軽く掴み「な、菜々子、かわいくないよ」と小声で返す。

その様子を花村や一条と共に微笑ましく見守っていると、突然長瀬がトンでもない爆弾発言をかました。

「大丈夫、可愛くないよ」

恐らくは照れた菜々子の言葉を額面通りに受け取った長瀬なりの気遣いの気持ち故の言葉だったのだろうけれど、それとこれとは話が別だ。

花村と一条に同時に総スカンを喰らい長瀬は鼻白んだ。

「バカとは何だ馬鹿とは。」

俺は馬鹿じゃないからな、断じて!」

そんな長瀬の反論に、自分も遠慮無く返す。

「どんな理由があれど、女の子に面と向かって『可愛くない』とか、男の発言としては最低の部類だからな、長瀬。」

それが分からないから、『バカ』って言われるんだろ」

長瀬への少しトゲを含ませた言葉に、オロオロと此方を伺う菜々子ちゃんはふと目を向けた大型のテレビへと強引に話題も持つていこうとした。

それに乗った一条がふと溢した『こんなに大きなテレビなら、中に入ってしまったそうだ』という言葉に、花村と二人、冷や汗を流す。

結局、テレビに関する話題はそれっきりで、その後は特にこれといった問題は無く楽しい時間を過ごした……。



【2011/05/05】

今日は菜々子ちゃんを連れて町を散策する事にした。

稲羽に来て三週間以上経った今、多少はこの町にも馴れてきたが、

それでもやはり普段あまり行かない様な場所には疎い。

その為、頭の中の地図の空白を埋める作業をする様な感じで、あまり行かない様な河原や神社の周辺を中心に散策する事にしたのだ。ちよつとしたピクニック気分である。

昼食としてサンドイッチを用意して、準備は万全だ。

町中を散策するだけなんて大して珍しくもないであろう菜々子ちゃんも、随分と乗り気である。

どうやら菜々子ちゃんは鮫川（の河原）に何やら深い思い入れがある、らしい。

それが何故なのかは分からないけれど、きつと叔母さんや叔父さんとの思い出があるのだろう。

川の側にある四阿で昼食を取った後神社へと向かった。

辰姫神社は古事記や日本書紀にもその名を記されている『豊玉毘売命』を御祭神としている。

確か、『豊玉毘売命』は海の神である『大綿津見神』の娘で、山の神の娘である『木花佐久夜毘売』の子供である『火遠理命』の妻となり子供を産むが、『出産時にその姿を見てはいけない』という約束を違えた『火遠理命』に和邇の姿となって子供を産んでいる所を見られ、海と陸の道を閉ざして海に帰ってしまった……、という話だった筈だ。

見るなど言われて余計に見たくなるその心理的な欲求は心理学的にカリギュラ効果と呼ばれる。

『何かを見てはいけない（或いはしてはいけない）』という禁忌を犯して悪い事が起きるという話は世界中の民話・神話に散見され、民話の類型としては禁室型とも言うらしい。

例えば聖書とかだったらソドムとゴモラの話で振り返ってしまつて塩の柱と化してしまつたロトの妻の話もそれに当たるし、ギリシャ神話だったらパンドラの話やオルフェウスの話やエロスとプシユケーの話、日本神話ならイザナギとイザナミの別れの話もそれに当たる。

民話レベルだとそれこそ枚挙に暇がない。

やってはいけない事を犯して、悪い事が起きる、というのは分かり

やすいモチーフなのだろう。

異類婚姻譚では非常によくあるオチであるし。

まあそれは置いて、その神話から『豊玉毘売命』は出産や水難に関する厄除けなどに御利益があるとされている。

なお、あまり関係は無いが、『豊玉毘売命』の正体でもある和邇は、因幡の素戔の伝説にも出てくる。

この和邇の正体は、「サメ(鮫)」であるという説と「ワニ(鰐)」であるという二つの説があるのだとか。

案外その伝説に準えて、この近くを流れる川の名前が『鮫川』なのかもしれない。

そういう割と由緒ある神様を祀っている神社にしては人の影は無く、その拝殿は暫く人の手が入ってなさそうな感じだ。

……？ 何故か何処からか視線を感じる。

ふと拝殿の上を見上げると、屋根の上に何かが居た。

それと目が合うや否や、トンと目の前に飛び降りてくる。

屋根から降りてきたのは、狐だった。

目付きが鋭いが、ハート柄の前掛けをかけているのが何だか可愛い。しい。

狐は何やら板きれの様な物をその口に咥えていた。

絵馬……だろうか？

狐はそのまま咥えていたその板を足元に置き、サツと姿を隠してしまった。

何と無く、足元の板きれを無視は出来ず拾い上げる。

「お姉ちゃん、それなに？」

「えっと、絵馬みたいだけど……」

絵馬の表には「おじいちゃんの足がよくなりますように」という子供が書いた感じの文字と、「けいた」という名前が添えられていた。

そして、その絵馬の裏には変わった形をした葉っぱが貼り付けられていた。

……何かのおまじないだろうか？

拾ったは良いものの、この絵馬をどうすれば良いのだろう。

絵馬を掛けてある場所に戻せば良いのだろうか？

その時、神社にご老人がやって来て、こちらを物珍しげに見てきた。どうやら、この神社に若者が来る事は相当に珍しいらしい。

夏頃には虫取に少年たちがやって来る事もあるそうだが……。

今は神主が不在となつているこの神社は、このご老人が時折手入れに来ているらしい。

しかし最近足は痛めてしまい、それも儘ならなくなっているらしい。

孫の圭太とも遊びに行けないのだ、とご老人は嘆いた。

もしかしくなくても、このご老人はこの絵馬を書いた「けいた」少年が言う「おじいちゃん」だろうか？

そんな事を思っていると、ご老人が絵馬の裏に貼り付けられていた葉っぱを目にして驚いた様な声を上げた。

何やら、この葉っぱは古くからこの辺りでは湿布としての効能が知れ渡っていたらしい。

しかし、乱獲か環境破壊が原因かは知らないがこの辺りではめつきりその姿が見られなくなっていたのだそうだ。

「た、頼む、その葉っぱを儂に譲ってくれっ!!」

やたら熱心に頼まれ、少し思案する。

譲るも何も、そもそもこの葉っぱは自分の物ではない。

拾った絵馬に偶々(?) 貼り付けられていただけに過ぎない。

強いて言えば、その絵馬を書いたと思われる「けいた」少年に所有権があるのだろうか？

しかしまあ、少年が「おじいちゃん」の為に書いた絵馬に貼り付けられていたのだから、その「おじいちゃん」に渡したって問題は無い……とは思う。

取り敢えず、頼まれるがままにその葉を絵馬から剥がしてご老人に手渡した。

ご老人がその葉を足に貼り付けるなり、少し元気が無かった背筋がピンツと伸び、まるで別人の様に元気になる。

エナジードリンク系のCMにでも出てきそうな before・af

ter 具合だ。

「こりや、巡り会わせて下さったお社様にも、たと感謝せにやいかんのー！」

そんな事を言いながらご老人は凄まじい勢いで拝殿の賽銭箱に豪快にお賽銭を入れ、そのままの勢いで神社を出ていった。

……元気になったのは良いことなのだが、逆に不安になってくるレベルだ。

湿布って、あれ程までに即効性がある代物だったのだろうか……？
もしかして、アブナイ感じの葉っぱだったのか……？

……深く考えると何だかロクな結論に至らなさそうだったので、多分プラシーボ効果的なものだったのだろう、と自分を納得させた。

「おじいさん、元気になってよかったね！」

「う、うん。そうだね、良かった良かった」

菜々子ちゃんは純粹にご老人が元気になった事を喜んでいた。

その純粹さが今はとても眩しい。

ご老人の姿が完全に見えなくなった辺りで、再びあの狐が何処からか姿を現し、賽銭箱を覗いてまるで喜んでいるかの様にそのフサフサとした尾を振っている。

そしてこちらを見て一声鳴き、パタパタと周りを走り回る。

どうやら喜んでいらしい。

生き物好きの身としては、こうやって喜びを全面に表してくれているのは、何よりも嬉しい事である。

「きつねさん、可愛いね」

そうだね、と頷き、暫くの間狐と戯れた。

……何だか、この狐と不思議な縁が生まれた様な気がする……。



『先頃、稲羽北のATMが重機で壊され持ち去られた事件で、容疑者逮捕です。』

逮捕されたのは、重機盗難を届けていた会社の元従業員プメナ・スシン容疑者、26歳です。

警察の調べによりますとスシン容疑者は……』
テレビから流れてきたニュースに、皿を並べる手を休めて顔を上げる。

確か、叔父さんが駆り出されていた事件だ。

無事に解決した様で、喜ばしい事だ。

ならば、今日は早目に帰ってこれるのだろうか。

そう思った丁度そのタイミングで、車が家の前に止まる音がして、玄関を開ける音と、ただいまと言う声が聞こえた。

「おかえりなさいー」

叔父さんの声に直ぐ様反応し、菜々子ちゃんは玄関に駆け付けて叔父さんを出迎える。

叔父さんはその頭を優しく撫でながら、靴を脱いで居間に来た。

「叔父さん、お帰りなさい」

数日の間に随分と草臥れてしまった上着を受け取り、ハンガーに掛ける。

今度クリーニングに出しにいかなくては。

いつもとは違い、叔父さんのすぐ側に菜々子ちゃんは座る。

叔父さんに甘えているのだろう、きつと。

「……つたく、病欠で何日穴空ける気だ……」

ほんつと最近の若いのは……」

……菜々子、悪かったな、また約束破っちゃまって……」

「あのね、お姉ちゃんたちがあそんでくれた」

連休前にはこちらを「お姉ちゃん」とは呼ばなかった菜々子ちゃんの微細な変化に気が付いたらしい。

叔父さんは優しい気に目を緩ませて菜々子ちゃんを見てからこちらに目をやる。

「そうか、色々世話になった様だ。

……ありがとうな」

「いえ、私も菜々子ちゃんと一緒に遊べて楽しかったです」

そうか、と笑う叔父さんの背後にジュネスの袋を見付けた菜々子ちゃんが声を上げた。

どうやら連休のお詫びと子供の日の贈り物を兼ねたプレゼントらしい。

叔父さんから受け取ったそれを、菜々子ちゃんは大きく広げる。

キャラクター物のTシャツ……なのだが、何分一番肝心なプリントされたキャラクターが物凄くビミョーな感じだ……。

恐らくは、カモノハシ……をデフォルメしたものなのだろうけれど……、目付きと言い全体的なバランスと言い、大変微妙なキャラクターだ。

不つ細工とまでは言わないが、端的に言うと、可愛くない。

同じカモノハシをモデルにしたキャラクターなら、関西圏のプリペイド式のICカード乗車券のキャラクターの方が可愛い。

何を思っ叔父さんはコレを選んだのだろう。

多分……と言うか絶対に、このキャラクターよりも遥かに可愛いキャラクターもののTシャツ位、ジュネスにだって沢山置いていただろう。

寧ろそれらの中から敢えてこれを選んでくる方が相当な手間なんじゃないだろうか……。

叔父さんの底知れぬ美的感覚に、恐ろしいモノを感じる……。

「なんか、ヘんな絵がかいてあるー」

へんなのー、あはは、やったー」

菜々子ちゃんのにも、「変なモノ」であるという認識はあるらしい。まあそれでも、お父さんからの贈り物だし嬉しいのだろうけれど。

……菜々子ちゃんが喜んでいるのだから、何も言うまい……。

更にはどうやら自分にもプレゼントはあるらしい。

子供扱い……という訳ではなく、連休中の事での詫びとして公平に、との事だ。

自分に渡された袋の中から出てきたのは……ビーチサンダルだった。

足のサイズのにも問題は無い。

が、しかし。

その色は、やたら目に痛々しいショッキングピンクやら蛍光イエローや蛍光ブルーだ。

このサンダルを商品化した人は色彩感覚が狂っていたのだろうか……？

そして、数あるビーチサンダルの内態々この色を選んで買ってきた叔父さんの色彩感覚も大丈夫なのだろうか……？

色彩の好みは兎も角、買ってきてくれたのは純粹に有り難い事だ。そこは素直にお礼を述べた。

少し遠方にはなるが海水浴が出来そうな七里海岸はあるし、近くに川だってあるのだ。

これから何かと入り用になりそうな物ではある。

ここに来る際に実家から持ち込んだ荷物は極力少なくしてきたので、水着とかそういう品々は今手元に無いのだった。

「まあ、とっとけ。

そのうち要るだろうと思ってな。

さて……じゃ、メシにするか」

そう言つて叔父さんは箸を取り、久々の三人揃つての食事を取る。

菜々子ちゃんに引つ付かれて若干食べにくそうにはしていたが、叔父さんのその顔には紛れもなく笑顔が浮かんでいた。



【2011／05／06】

連休明けの平日。

休み気分が抜けずに、ボヤーツとした表情で授業を受けるものが大半だ。

連休中は幸い天候に恵まれていたのだが、そろそろそれも崩れ始め

るだろうとの事である。

連休中にあの世界に放り込まれたらしき人の情報は今の所無い。

天城さんの件だけで「犯人」が犯行を止めているのならそれはそれで良い事だけれど、何と無く釈然とつかないモノも感じる。

結局、本当に「犯人」が諦めたのかどうかは、せめてもう一度《マヨナカテレビ》を確認してみない事には始まらない。

ここは潔く雨が降り続く夜を待とう。

それはそうと、と、話題が来週に待ち構える中間テストへと移る。

どうやら里中さんと花村は学業成績的に若干の不安要素があるらしい。

逆に天城さんは学年上位をキープしている様だ。

からかい半分で成績の事を振られた花村は、天城さんに勉強を見て貰おうかと頼もうとしたが、言い方に少々難が有り、その頬を天城さんに引っ叩かれてしまった。

かなり良い音を立てていたので、そこそこ痛かっただろう。

結局誤解は解けたが、話を始めに振った里中さんと、叩かれた部分が赤くなってしまった花村が言い合いを始めてしまう。

昼休みが終わって教師が教室内に入ってくるまで、その言い合いは続いた。



放課後、里中さんに誘われて一緒に河原にやって来た。

一通り運動をして休憩していると菜々子ちゃんがやって来た。

どうやら学校帰りに偶々通り掛かった様だ。

河原で何をしているのか気になったのだろう。

「修行」をしていたのだ、と言うと菜々子ちゃんは目を輝かせた。

どうやら「修行」という響きが、菜々子ちゃんの心を掴んだ様だ。

それを見て気を良くした里中さんが、技の型を菜々子ちゃんに実演

しようとしたその時。

草むらにいたバツタが里中さんの背中に貼り付いてしまった。途端に悲鳴を上げてパニック状態になる里中さんを宥めながらバツタを取って、それを草むらに返してやる。

バツタ（大きなシヨウリヨウバツタ）は、指から解放されるや否や瞬く間にピョンピョンと跳ねて何処かへと去っていった。

「里中さん、バツタは苦手なのか？」

「バツタって言うか、足が細くて節っぽいのは全部ダメ！」

細長くてウネウネしてるのも無理!!」

「バツタ、かわいいのに……」

どうやら虫全般が苦手な里中さんに、案外虫は平気な菜々子ちゃんが呟く。

「な、菜々子ちゃん……雪子みたいだね。」

あ、雪子もね、虫とかそういうのに強いんだ……。

アハハ、……何かあたしのキャラじゃなくて、笑っちゃうよね」

そう言つて里中さんは自虐的に力無く笑うが、それには流石に首を傾げた。

虫嫌いの人なんて、男女関係無く居るだろう。

特に、台所ゴキブリの黒い悪魔リを嫌う人間は相当に。

別に、虫嫌いを恥じる必要性は無い。

「いや、別に……。」

虫が苦手だからって、キャラじゃないなんて、そんなの思わない。

苦手なものの一つや二つ、あつたつて良いんじゃないか？

寧ろ、可愛いと思う」

「えっ、いや……そうかな……」

「クラスにも、虫がダメって子一杯いるよ。」

千枝お姉ちゃんだけじゃないから、大丈夫だよ!」

菜々子ちゃんのフォローに里中さんは苦笑いした。

小学生にフォローされ、逆に少し困ってしまった様だ。

その後、菜々子ちゃんに幾つか技の型を実演し、日が暮れる前にはそれぞれ家路についた。



今日も叔父さんは早目に帰宅してきた。

夕食の後に新聞を広げながら寛ぐ叔父さんに、ふと声を掛けられた。

「あー、悠希が来てから、ゆつくりと話した事ってなかったな」
まあ、確かにそうだ。

ここに来た日の深夜から翌日にかけて事件が起こり、それからというものの、叔父さんはそれらの対応に追われ続けたのだったし。

「……」

しかし。話を振ってきたのは叔父さんだが、どうやらあまりいい話題が見当たらないらしい。

必死な顔で何か無いか、と探している。

「あー……そういや、どうだ、学校の方は？」

そう問われ、少し考える。

人間関係で大きな問題を抱えている訳ではないし、それ以外の事で不満を抱えているという事もない。

それなり以上に親しい相手もそこそこいる。

総括すれば、程好い学校生活を送っていると述べても問題は無い筈だ。

「楽しいですよ」

それを聞くと、叔父さんはほっとした様に幾度か頷いた。

「そうか、……それは良かった。

学生時代なんてのは、気付けばあっという間に終わっちゃうもんだ。
だ。

楽しめる時に、存分に楽しんでおけよ。

……後は、そうだな……。

あー、友だちなんかは……。

……まあ、居るみたいだな、色々」と

叔父さんはそう言つて微妙に難しい顔をする。

「お前の交遊関係にあれこれと口出しするつもりは無いが……。」

一応こっちはお前を預かっている身だ。

……俺の言いたい事は分かるか？」

「言いたい事があるのなら、言葉でハッキリとお願いします。」

それに一応、無闇に馬鹿なマネはするつもり無いです」

そう返すと、叔父さんは不敵に笑った。

「はっ、……言うじゃねえか」

だがな、と叔父さんは溜め息を吐く。

「何故か、事件の陰にお前がいる……。」

考えたくはないが、……事件が始まったのも、悠希がこの町に来たのと同じタイミングだ。

小西早紀の件の時も、天城雪子の件の時も、お前は妙に関係者の周りをウロウロしてやがる。

……刑事の仕事つてのはな、まず始めに偶然って選択肢を消す事から始まる。

これ以上、お前がこっちの領分に首を突っ込んでくるつもりなら、その時は……」

その続きは、目を眠たそうに擦りながらやつて来た菜々子ちゃんの声に遮られた。

どうやら尋問口調になってしまっていた叔父さんが、まるで喧嘩している様に見えてしまったらしい。

その誤解を解いて、眠たそうな菜々子ちゃんを寝かし付けた叔父さんは深く溜め息を吐いた。

『お姉ちゃん』か。

あいつ、随分とお前が気になっているみたいだ。

……実際、悠希には感謝している。

俺と菜々子だけでは、色々とどうしても不足が出てしまっていたからな……。

食事ばかり、家事に限らず他の色んな事にも。

お前がいてくれて、助かってる。
……兎も角、危ないマネはするんじゃないぞ。
お前が無事なら、それでいい。
それ以上は望まれてもいないからな」
叔父さんは純粹に心配してくれているのだろう。
多少言葉選びが固いのは、あまりこの年代の人間と、刑事という立場以外で話す機会が無いからだろうと思われる。
取り敢えず、その気持ちは伝わってきたのだから、それは有り難く受け取っておいた。



〔2011／05／07〕

今日は朝から雨が降り続けている……。
どうやら時間帯によっては、雷が落ちるかもしれないと、朝の天気予報は言っていた。
放課後になると、雨は激しい雷雨へと変わり、窓の外が時折眩く光る。

光と音の間隔から、雷が落ちる位置はゆっくりと近付いてきている様だ。

雷鳴が轟く度に里中さんが小さく震える。

……恐いのだろうか？

それを花村にからかわれ、むきになって言い返そうとした瞬間、再び雷が結構近い場所で鳴り、途端に耳を押さえて俯く。

余程恐いのだろう。

止せば良いのに、その様を見て更に花村が揶揄し、いつそ花村に雷が落ちれば良いのに、と里中さんが言った瞬間、雷光と共に教室内の照明が落ちた。

ちよつとした停電だ。

送電施設に雷が落ちたのかもしれない。

どうやらジュネスの方でも一部に被害が出てしまったらしく、冷蔵庫が全て停まってしまったらしい。

そうバイトのチーフから連絡が来た花村は、恨めしげに里中さんを見る。

完全なる八つ当たりだ。

まあ、給料アップが見込めるかも知れないという矢先のこの出来事だ。

当分その話は見送られてしまうだろう。

何かに恨み言の一つや二つは言いたくなってしまうのも、そう無理はない話ではある。

雷と停電に怯える里中さんに、天城さんが唐突に怪談を語り始める。

どうやらこれも苦手だった様で、既に里中さんは涙目だ。

多分、天城さんは少し面白がっている様だ。

慰めるのも、敢えて天城さんの怪談話に乗って少し驚かせるのも、どちらでも良かったが……。

「私の父さんの話になるが……」

この流れに乗って、怪談その二を披露する事にした。

大して怖くない話を選んで、淡々と語る。

話が盛り上がった丁度そのタイミングで、再び雷鳴が轟き、今度はそれと同時に教室内に明かりが戻った。

安心した様な声が教室のあちらこちらから聞こえる。

クラスメイト達がちらほらと帰り始める。

今日はこの雨では体育館は外の運動部に取りられてしまうし、部活は無いだろう。

特にこれからの予定は無いが、ふと思ひ立ち、花村たちに今日の予定を訊ねる。

花村は今日はフリー、天城さんも特に用事は無し、里中さんも用事は無い。

ならば折角なので、あちらの世界に行ってみないかと提案した。
天城さんはまだペルソナで戦った事が無い。

もし【犯人】に何か動きがあった時、ペルソナの力が必要になる事はあるだろう。

その時にぶっつけ本番、というのも不味い。

なら、特に差し迫った用件が無い今の内に、肩慣らししておくのが良いだろう。

その案に全員が賛成し、各自準備を整えてからジュネスに集合する事となった。



ペルソナの調整をしようと、ベルベットルームを訪れると、マリーの姿が見当たらなかった。

どうやら、何処かにお使いに行っているらしい。

直ぐに戻ってくるらしいが……。

……？ 床に紙切れが落ちている。

……どうやら便箋の様だ。

マリーの落し物らしい。

……何が書かれているみたいだが、拾って良いものなのだろうか……。

少し躊躇ったが、文面を見なければ大丈夫だろう、と便箋を拾い上げようとしたその時。

「……わあっ！ ちよっ、ダメーっ!!」

ドタドタと凄まじい勢いで帰って来たマリーが、直ぐ様その便箋を拾い上げ、慌ただしく肩に掛けている鞆の中に仕舞った。

どうやら相当急いで帰って来たらしい。

マリーは肩で息をしていた。

「あ、危なかった……。」

てか、キミ、何してんの!?

………。……中、見た？」

否、と首を横に振ると、マリーはホツとした様に息を吐く。

どうやら余程その文面を見られたくは無かつたらしい。

大袈裟が過ぎる位のマリーの反応をマーガレットさんが興味深そうに見ていたのが少し気にかかる。

………。まあ良いか。

そう悪い事にはなるまい。

そう判断して、用件だったペルソナの調整を済ませてからベルベツトルームを後にした。



………。……
………。……
……。

ジュネスのテレビから入ると、早速クマが出迎えてくれた。

どうやら前に天城さんをここに連れてきた以降、全くこの世界を訪れなかったのが相当寂しかったらしい。

この世界で静かに暮らしたい、というのが出逢った当初のクマの願いだったが……人と触れ合う内に『寂しさ』というモノを理解してしまったのかもしれない。

この世界ではクマ以外にはシャドウ位しか見掛けたモノが居ないから、クマは本当に独りぼっちだったのだろう。

『寂しい』という感情はずっと独りでいるのなら理解する事は出来ない感情だ。

だから、クマは今迄独りで居る事に何も感じてこなかったのかも知れない。

……。全ては憶測に過ぎないが。

まあ何はともあれ探索を開始しようとした処でクマから待ったが掛かった。

どうやら、天城さんの居たあの城に何やら強力なシャドウが出現して居座っているらしい。

……あの城は天城さんの心が作り出したモノだと言う。

そんな場所にそういう強力なシャドウが居座り続けるのは、あくまでも可能性の話にはなるが天城さんに悪い影響を与えるかも知れない。

どれ位強力なシャドウなのかは今一つ分からないが、可能ならば排除しておいた方が良さだろう。

そのシャドウは城の最深部……天城さんの『シャドウ』と戦った場所に居座っている様だ。

道中のシャドウとの戦いで天城さんもペルソナの扱いに多少は慣れてきている。

これならば、油断は禁物だが様子見位の戦いなら挑んでみても大丈夫だろう。

想定よりも強そうならばさっさと撤退するだけだ。

万が一の場合にも、一瞬で戦闘領域を離脱出来るスキルを持ったペルソナも居る。

倒せそうならばそのまま倒してしまえばいい。

そう判断し、大扉を開けると、広間の中央に居たシャドウが起き上がる。

道中幾度か戦った、少し愛嬌すら感じる外見の《皇帝》アルカナの『ぼじてぶキング』に見た目だけなら似ているが、一メートル半程度のあちらに比べ、このシャドウは三メートル弱はある。

「そいつの名前は『矛盾の王』、アルカナは《皇帝》クマー！」

クマが叫ぶとほぼ同時に、シャドウが手にした杖で殴りかかってくる。

物理攻撃主体の敵か？

「アレスッ！」

【戦車】アルカナの『アレス』を召喚して、シャドウの一撃を《氷殺刃》

——凍て付く刃で斬りつけて、氷結属性のダメージも共に与えるスキルで迎撃する。

アレスの一撃は杖を弾き、その身体を凍り付かせた。

……物理攻撃への耐性と、氷結属性への耐性は無い様だ。

しかし堅い。

「花村！」

花村に指示を飛ばすと、直ぐ様烈風がシャドウを呑み込む。

……が、シャドウは何とも無い様子だ。

さつき与えたダメージが回復している様には見えないし、風が跳ね返された訳でも無い。

疾風攻撃は無効化されてしまう様だ。

「花村は物理攻撃主体で！」

里中さんは物理も魔法も通るから、適宜切り換えて!!」

アレスを一度イザナギへと切り換える。

天城さんが火炎を、イザナギが雷撃を放とうとしたそのタイミングで、シャドウが《赤の壁》——火炎攻撃への耐性を付けるスキルを使用する。

この状態で火炎攻撃を使っても効果は半減してしまうだろう。

その為、天城さんには攻撃ではなく花村と里中さんの体力の回復に努めて貰う。

イザナギの雷撃は過たずシャドウの中心を撃ち抜き、その胸の辺りに酷い焦げ跡を残す。

しかしそれでもシャドウは倒れない。

物理攻撃を繰り返すトモエとジライヤを振り払って、グウンツとシャドウが力一杯杖を振りかぶる。

その瞬間嫌な予感が身体を震わせる。

「全員シャドウから距離を取って防衛して！」

大技を繰り出す予兆を感じ、ペルソナをアレスへと切り換え、壁になれる様に数歩前へと踏み出した。

その瞬間、暴力の嵐が吹き荒れた。

アレスも習得している《暴れまくり》というスキルにも似ているが、

それとは比べ物にもならない程の高い威力だ。

複数回吹き荒れたその嵐を、アレスはキツチリ二回受けきった。

一回は防ぎ切れず皆の方へと攻撃が流れてしまったが、アレスが盾になった為被害は最小限だ。

その傷も、コノハナサクヤの《メデイア》によって、フィードバックで負った傷諸共あつと言う間に完治した。

大技を放った直後だからか、シャドウの動きが鈍い。

絶好の攻め時だ。

「よし、反撃のチャンスだ！」

里中さんは氷結魔法でシャドウを拘束、花村はそのまま物理攻撃で――

指示を飛ばしながらイザナギへと切り換え、《ラクンダ》――相手の防御力を下げるスキルによって、シャドウへのダメージの通りを良くする。

トモエがシャドウの足元を氷付けにしてシャドウの動きを封じ、それを抜け出される前にジライヤが追撃を掛けた。

その隙に再びアレスへと切り換え、《チャージ》で威力を高め、トモエからの《タルカジャ》――相手の攻撃力を上げるスキルで強化された《氷殺刃》がシャドウを頭から叩き斬る。

王冠の様に着けていた仮面が真つ二つに叩き割られ、シャドウは断末魔を上げながら黒い塵へと還っていった。

……

……

……

……

▲▼▲▼▲▼

ペルソナへの肩慣らし兼『矛盾の王』討伐を終えてあちらの世界から戻ってきた頃には、そろそろ夕飯の買い物をする様な時間になって

いた。

皆とはその場で解散し、買い物してから家に帰る。

今晚の帰りは遅くなる、と叔父さんから連絡があった。

数日振りの菜々子ちゃんと二人きりの夕飯だ。

夕食の後、菜々子ちゃんが話し掛けてきた。

「ねえ、お姉ちゃんはひとりっこ？」

「うん、そうだよ」

兄や姉が居たという話は聞かないし、この歳で今から弟や妹ができるとも思えない。

「そっかあ、菜々子とおそろいだね。」

……あのね、前にお父さんがいってたんだ。

もう、うちに家族はふえないって……。

でも、お姉ちゃんができた！」

そう言つて満面の笑みを浮かべる菜々子ちゃんに、こちらも思わず笑顔になる。

……叔父さんの言葉を思うと、少しぎこちない笑みになってはしまったが。

「……そうだね」

「ねえ、お姉ちゃんの学校のおはなしして」

その晩は、菜々子ちゃんに請われるまま学校の話をした。

菜々子ちゃんが聞いて楽しいものは分からないものが多いが、それでも話を聞く事自体が楽しかった様だ。

いや、……誰かと家で話す事自体が楽しいのか……。

また少し、菜々子ちゃんとの距離が縮まったのを感じた。



朝方から里中さんに誘われて「修行」に付き合う事にした。
一通りの型の練習を終え休憩しようとした時、見知らぬ少年がやって来る。

「見た所、同じ年位だろうか。」

八十神高校ではない、近隣の別の高校の制服を纏っている。

彼は里中さんに目を留め、声を掛けてきた。

「どうやら、里中さんの知り合いらしい。」

何をしているのか尋ねられた里中さんが、「修行」と応えると、途端に少年は馬鹿にした様な笑みを浮かべる。

ガキ大将、と里中さんを揶揄する彼に思わずムツとなってしまふ。

だから、一歩前に出て見知らぬ彼を見下ろした。

「君が馬鹿にして良い事じゃ無い」

里中さんなりに、自分が何を出来るのか考えて、その上でやっている行動がこの「修行」だ。

事情を知りもしないただの部外者が、外から勝手に馬鹿にする権利は無い。

「え、……な、鳴上さん？」

里中さんが何故か狼狽え、見知らぬ彼は途端に怯む。

「あ、えっと、その……。」

別に悪気があつたんじやなくって……。

その……オレ、河野剛史つつの。

千枝とは中学まではずっと一緒でさ。

まあ、それで……。……何かごめん……。」

河野はこちらから顔を背けて口籠り、里中さんへと向き直った。

「あー……。それよりさ、天城さんどうしてる……?」

「彼氏とか居る……?」

「……元気だし、そういうのは居ないと思う」

心なしか、里中さんは慚然と答える。

「そっかそっか。なら良かったわ。」

「やっぱり相変わらず美人だよな?」

「……オレ、もっかいアタックすっかな」

……別に、天城さんの事を話すのは構わないが、今彼の目の前に居るのは天城さんではなく、里中さんだ。

その里中さんには殆ど関心を払わずに、天城さんの事ばかり話題にするのは……。

「……」

「そんじゃな、里中。」

天城さんにヨロシク言っつといてよ」

河野はそう言い残してその場を立ち去っていった。それを見送る里中さんは、何やら寂しそうだ。

ふと、里中さんの『シャドウ』の事を思い出した。

『男の子にちやほやされるのは、雪子ばかり』。

そんな旨の事を『シャドウ』は訴えていたと思う。

……里中さんは、周りの男の子からずつとこう言う感じの扱いを受けてきたのだろうか……。

里中さんを励ましたくて、ポンと軽く頭を撫でた。

「え、な、何!？」

あはは……いきなりだし、ビックリした……」

寂し気な顔が何時もの表情に戻ったので、撫でる手を下ろす。

里中さんは困った様に頬を掻いた。

「ごめんね。アイツ、ホント失礼なヤツでさ。」

……昔っから、雪子の事ばっかなんだから……。

あ、アイツはただの昔の同級生。

……あたしは所謂男友達、みたいなの？

……よく言われるんだけどね」

そう言っつて里中さんは何処か苦い笑みを浮かべる。

よく言われる、か。……。

「もう昔の話だし、気にしないで。」

そんじゃ、帰ろつか」

里中さんにそう切り上げられ、この日は家へと帰った。



家に帰ると、菜々子ちゃんは折り紙でできた花を前にして何やら困った顔をしていた。

どうしたのか訊ねてみると、どうやら学校の授業で母の日の贈り物として作成したものらしい。

しかし、菜々子ちゃんのお母さんはもう居ない。

だから、その花をどうすればいいのか分からなくて困っていたのだそうだ。

「……じゃあ、菜々子ちゃんのお母さんに、その花を渡そうか」

何の事だか分からない、と言いたげに目を瞬かせる菜々子ちゃんに微笑んで答える。

「お仏壇。お供えしたら、きっと届くよ」

本来ならお焚き上げをする方がより良いのかも知れないけれど、まあそんな事まではしなくても良いだろう。

大切なのは菜々子ちゃんの気持ちだ。

「そっかあ！ お父さんも毎日ごはんあげてるもんね！

天国にいるお母さんにとどくんだって。

だったら、菜々子のお花もとどくよね。

あのね、先生にほめられたんだ。

上手にできてるねって。

お母さんもよろこんでくれるかな」

菜々子ちゃんが作った花は、拙いながらもとても丁寧に作られていた。

「そうだね、と頷く。

「こんなに綺麗に出来ているんだ、きっとお母さんも嬉しいよ」

きつと、不格好なものであったとしても、菜々子ちゃんの作った花なら叔母さんは喜んだらうけれど。

菜々子ちゃんは何度も嬉しそうに頷き、「あっ」と声を上げた。

「お姉ちゃんも、お花つくろ！」

そうしたら、いつしよに『ははのひ』できるよ!」

そう言つて菜々子ちゃんは折り紙を出してくる。

菜々子ちゃんと一緒に花を花束に出来る程の数を折り、それを叔母さんの仏壇に供えた。

夜も更けてきた為、菜々子ちゃんを寝かしつけて居間に戻ると、丁度叔父さんが帰つて来ていた。

叔父さんは早速仏壇に供えられた花束に気が付き、こちらに礼を言う。

どうやら、今日が《母の日》である事を花を見て思い出したらしい。

……父親にはあまり関係の無い日だから、思い至らなくても仕方が無いが。

「あー……そう言えば、最近どうなんだ？」

……どうつても何だが……。

……まだまだ若いつもりでいるんだが、流石に高校生とは……話題がな……」

叔父さんは困つた様に頭を掻いた。

何か話してみようと思つても、話題が無いのだろう。

「あー……、そう言えば、悠希は放課後に何してるんだ？」

「放課後……。」

そうですね、今は主にバスケット部の活動をしたり……部活が無い日は友達に町を案内して貰つたりしてます。

もうそろそろこの町にも慣れてきたので、バイトか何かを始めるかもしれません」

あちらの世界で使う武器の代金とか、その他諸々と、何かとお金は入り用になる。

シャドウを倒した時に、不思議な布やら金属片やらを残す事があり、それを（無害である事をクマに確認して貰つてから）商店街にある『だいだら』と言う自称アートの店（しかし見た目はどう見ても武器屋）にて買い取つて貰つたお金が、捜査隊の主な活動資金である。

しかし武器（店主はアートと言ひ張っている）はかなり値が張るモノだから、割りとカツカツになつていて、自腹で補填しなくてはなら

ない額もそこそこだ。

両親から月々の生活費は振り込まれていて、その中にそこそこのお小遣いは含まれているし、貯金してある分も結構あるが、稼いでおく分には越した事が無い。

「ほう、そうか……」

中々充実している様で何よりだ」

叔父さんは嬉しそうに頷いたが、直ぐ様参った様に頭を押さえた。

「……ってこれじゃただの事情聴取だ。」

「……つつても共通の話題なんてな……」

「……でしたら、叔父さんの話が聞きたいです」

「俺の？　また妙な事に興味を持つんだな……」

見ての通り、娘と二人暮らしの単なる田舎刑事だ。

……高校生が聞いても楽しい話なんて、何も無いぞ」

叔父さんはそう言っ肩を竦めた。

「楽しいかどうか、じゃなくて、叔父さんの事が知りたいんです」

折角、一年とは言え同じ家で同じ時間を過ごすのだ。

叔父さんがどういう人で、どんな風に考えたり感じたりするのか、

どういう経験をしてきたのか、純粹に興味がある。

「誰に似たんだか、随分と変わったヤツだな。」

……だがまあ、お前が来てくれて、正直助かっている。

菜々子がこんなにも喜ぶなんてな……」

お姉ちゃん、お姉ちゃんって、うるさい位だ。

ま、俺にとつちや悠希は、姪っ言うよりかは歳の離れた妹って感

じだな」

その言葉に少し考え込む。

歳の離れた妹、か。

なら……」

「……遼太郎兄さん？」

「ははっ、止めてくれ！」

ブルツと来たぞ、今！」

どうやらその呼び方は若干叔父さんのツボに入ったらしい。

叔父さんは実に楽しそうに笑った。

そして一頻り笑った後、少し切ない顔をする。

「……こんな風に笑ったのは、随分と久し振りの気がするな……」

遠い目をする叔父さんは、今何を想っているのだろうか……。

今は亡き叔母さんとの日々だろうか……。

「さて……、俺は少し仕事の資料を片付けにやららん。

お前も、夜更かしは程々にして早目に寝ろよ。

おやすみ」

叔父さんにポンポンと頭を優しく叩かれ、「おやすみなさい」と返してから自分の部屋に戻った。



【2011/05/09-2011/05/12】

終了の合図と共に、教室内の張り詰めていた空気が緩む。

テスト用紙が回収され、試験監督を兼ねていた教師が教室を出ていくと、途端に教室内が騒めく。

ここ四日間続いた中間テストはこれで終わりだ。

特には解けなかった問題は無かったし、このテストも然程問題は無い出来だろう。

天城さんと里中さんは早速答え合わせをしている。

が……どうやら大分誤答してしまっていたらしい事に気が付いた里中さんは、呻き声を上げて机に突っ伏した。

花村はそんな里中さんを横目に、解放感から肩を揉み解したりしている。

教室内は、友人とテストの答え合わせをする者もいれば、テストと

は何の関係もない世間話に興じる者もいて、非常に賑やかだ。

そんな折りに耳に飛び込んできた『テレビ』という単語に、咄嗟に反応してしまったのは、『マヨナカテレビ』の事があるからだろう。

あまりいい気はしないが、その会話に聞き耳を立てる。

……が、別段彼等の話題の中心は『マヨナカテレビ』ではなく、普通のテレビの話で。

それも、事件の話とは無関係であるらしい。

何でも、近隣に出没するという暴走族の取材に、テレビ局が来ていたのだそうだ。

……暴走族、か。

そんな安眠の敵の様な輩がこの近隣に居たとは気が付かなかったが、どうやら中央道路近辺の家々では結構な被害が出ているらしい。

そう里中さんと花村が溜め息混じりに説明してくれた。

どうやらこの八十神高校にもその暴走族に所属している者がいるらしい、との事だが……。

「えーっと、中学ん時に『伝説』作ったってヤツが確か一年に居るって……。」

ん？ あれ？

……そいつ、暴走族だっけな……？」

まあ仔細は分からないが、何やら凄い一年が居るといのは確かなのだろう。

しかし「伝説」か………どんなのだろう？

こう、峠か何かに挑戦でもしたのだろうか。

「伝説」について興味津々な天城さんに里中さんが苦笑いする。

……テレビ局が来た、という事は近日中にその暴走族の特集が報道されるのだろう。

どんな内容なのかは知らないが、また妙に騒がしい事にならなければ良いのだが……。



テスト明けに部活動に勤しむというのも、中々良いモノだった。テスト期間中は流石に身体を動かす機会は殆ど無かったものだから、実に久し振りに身体を思いつきり動かしている気がする。

ミニゲーム……をしようにも人数が揃わないので基礎練習ばかりになってしまっているが、それはそれで良い。

ただ……………。

「用事がある」、と言って先に帰った一条の、少し堅い顔が気にかかった。

現在実家を離れて独り暮らしをしている一条は、定期的に実家に顔を出す必要があるらしい。

一条の家はどうやら俗に言う所の『名家』らしく、家の当主である祖母は相当に厳格な方なのだそう。

そんな彼女は、一条がバスケットをする事に反対しているらしい。

理由は、「野蠻だから」、だそう。

まあ、バスケットは接触事故とかも多いから、全く理解出来ない理由でも無いけれど…………。

……一条はバスケット以外にも、家の為にずっと昔から色々諦めさせられてきたのだという。

それでも、バスケットだけは諦められない……と、祖母に逆らっても続けてきたらしい。

……そんな一条の力になってくれ、と彼の親友である長瀬から頼まれた。

力になれるのならなってやりたいのだが、しかし、一条に関して殆ど事情を知らないこの身に如何程の事がしてやれるのだろうか……。

考えても……、話を聴くとか、一緒にバスケットする、位しか思い付かない。

しかし、それで良いのだ、と長瀬は言った。

側にいる、と言う事が一番なのだ。

バスケットをやりたいがっている一条にとって、一番欲しいのは、一緒に

バスケットに打ち込んでくれる友達だから、と。

……そうだとするならば、一条の思いに応える為にも、より一層バスケットに精進していかなくてはならない。

そう気持ちを新たに、その日は長瀬と別れた。

◆◆◆◆

「そう言えばお前、ジュネスにはよく行くよな？」

夕飯の後、唐突に叔父さんに訊ねられた。

「ええ、まあ。」

この辺りだとあそこ位しか買い物する場所無いですし。

日々の食材は大体ジュネスで買ってますよ。

……それで、それがどうかしましたか？」

「あー……偶に足立の野郎が仕事中に姿を眩ませてやがってな。

大方、ジュネスとかでサボってんだと思うんだが……。

お前が行く様な時間帯にジュネスを彷徨っているんだったら、大体はサボりだ。

もし見掛けたら、ガツンと言っちゃまっていいぞ」

そう言われれば、偶に足立さんをジュネスで見掛けた事があった。

聞き取りか何かでもしていたのかと思ひ、その時はスルーしていたが、どうやらサボっていただけだった様だ。

「ああ、それと」と叔父さんの目付きが鋭くなる。

「……この前署で耳にしたんだが……、どうやら家電売り場をウロチヨロしているらしいな」

探る様な視線が突き刺さった。

……その内見咎められる可能性は考慮していたが、思ったよりも早く問い質されている。

……さてどうしたものか、と考えていると、不意に菜々子ちゃんが叔父さんと呼んだ。

「あ、いや、違うぞ。」

これは事情聴取なんかじゃなくてな……」

弁解する叔父さんに、違う、と菜々子ちゃんは頭を振る。

「お姉ちゃんとはっきり、ずるい」

「何……？」

想定すらしていなかった菜々子ちゃんの言葉に、虚を衝かれたかのように叔父さんは目を見張る。

驚く叔父さんとは反対に、菜々子ちゃんが何を言いたいのかを察し、目を伏せた。

「だって、今日はお父さん……家にいるのに……。」

お姉ちゃんとはっきりおはなししてる。

菜々子とも、もつとおはなししてよ……」

「……お前とは何時も話してるじゃないか」

そう答える叔父さんに、菜々子ちゃんは首を横に振る。

「……いつもって、いつ？」

菜々子ちゃんのその言葉に、叔父さんは衝撃を受けたかのように固まった。

何時も……。」

そう叔父さんは言うが、少なくとも一緒に暮らし始めた四月から今の所、叔父さんと菜々子ちゃんがゆっくり話し合っている姿は一度も見つた事がない。

仕事でそもそも家に帰れない日も多いが、帰って来ても相当遅い時間である事が多く、菜々子ちゃんが眠ってしまったから帰って来る事だつてある。

折角比較的早目の時間に帰って来た今日だって、菜々子ちゃんに構わずに、こちらにばかり気をかけてきている。

こんな状況で菜々子ちゃんが寂しく思ってたって、それは仕方がない話だ。

「菜々子も……、いつしよに、いるのに……」

そう言いながらも、菜々子ちゃんは眠たそうに目を擦っている。眠たいのだろう。

幾ら気持ちの上ではまだ起きていたくとも、まだ幼い身体は正直だ。

「つたく……、もう菜々子は寝る時間だろ？」

今日はもう寝なさい。

今度……遊んでやるから」

「ぜったいだよ……」

洩々と自分の部屋に戻った菜々子ちゃんを見て、叔父さんは苦し気に呟いた。

『いつもつて、いつ？』……か」

「……もしかして、菜々子ちゃんどう接して良いのか、分からないんですか？」

叔父さんの様子に、もしやと思い、問い掛けた。

……叔父さんは、子供との付き合い方自体、得意という訳では無さそうだが、だからと言って苦手という程のモノでは無いだろう。

「……ああ、……悠希は鋭いな……」

……正直な話、菜々子の事は千里……あいつの母親に任せつきりだったからな……」

その……加減がな、よく分からねえんだよ。

それに俺じゃあ、あいつの家族は務まらない……」

「……意味が分かりません。

家族は、務まるとか務まらないとかの問題では無いでしょう。

菜々子ちゃんのお父さんは、叔父さん、貴方だけです。

少なくとも、菜々子ちゃんは叔父さんの事をちゃんとお父さんだと思っている。

なのに、どうして」

別に、特別な事を求めているつもりは無い。

ただ、顔を向き合わせて、話せば良い。

接し方が分からないと言うのであれば、菜々子ちゃんと触れ合う中で、少しずつでも手探りでも良いから、それを学んでいけばいい。

それなのに何故、お互いに向き合うという一番大切な事をしないのだ。

菜々子ちゃんは、ちゃんと叔父さんを見ているのに。
叔父さんだけが、菜々子ちゃんに向き合っていない。

「……分かつてはいるんだよ。
だがな、悠希。」

「……血が繋がっていれば『家族』か？」

「……少なくとも、親が子を、子が親を、どちらか片方だけでも相手を見ようともしないのなら、それは本当に『家族』と呼べるものかは怪しい。」

「……しかし、今の問題なのはそこなのか……？」

「……そうじゃない。」

「……そうじゃ、ないんだ……」

力無く呟く言葉だけが、居間の沈黙を揺らした。



【2011／05／13】

放課後。夕飯の買い出しをしようと、ジユネスを訪れると……足立さんが入り口に佇んでいた。

「……昨晚叔父さんに言われた矢先の遭遇だ。」

足立さんも丁度こちらに気が付いたらしい。

「あれ？ あー……えっと、君は……。」

あつ、堂島さんのトコの。

どうしたの？ 僕に何か用？」

「どうも。」

いえ……何をしているのだろう、と思ひまして」

「えー、見て分かんない？」

仕事だよ仕事。」

ホラ、此処って町中から人が集まるじゃない？」

だから聞き取りとかもし易いんだよねー。

それに、夏場は冷房効いてるし、冬場は暖房効いてるしで、過ごしやすいでしょ？

僕も中々良い穴場を見付けたと思っ……、つとと。

ま、そう言う事だから！」

今思いつきり口を滑らせた様な気が……。

……まあ、良い。

サボっているのは宜しくないが、叔父さんに言われた通りにガツンと言つてもどうしようもないだろう。

……ふと、出来心で足立さんと話してみようと思つた。

別に事件について何か尋ねたい訳でも無い。

訊いた所で守秘義務があるから喋れないだろうし。

ただ単純に、『足立透』という人間の事が知りたくなつた。

叔父さんの部下で、恐らくは相方で、この春から稲羽にやって来た人。

これっぽちしか、自分はこの人について知らない。

叔父さんが仕事中どんな人と関わり合っているのか、気にはなる。

これもまた何かの縁だろう。

「そうですね。まあ、確かに。

一年を通してこの場所は居やすいでしょう。

しかし……お仕事に熱心なのは構いませんが、程々にしておかないと、叔父さんがおっかない顔をして乗り込んで来ちゃいますよ」

「あはは……胆に銘じて置くよ。

んー、てか、君は今から買い物かい？

あ、堂島さん所の食事は全部君が作ってるんだっけ？

偉いねー」

「いえ、そうでもないですよ。

料理するの、慣れれば楽しいですし」

「ホントかい？」

あー……でもまあ、こんな田舎だとやる事無いしなー。

そう言う楽しみでも無いとやってられないかも。

ホント何にも無いからねー、ここ。

やっぱ都会とは違うよねー」

どうやら足立さんは稲羽暮しには不満がある様だ。

「まあ確かに、そうですね。」

暇を潰したりとか、学生とかが遊んだりする場所とか、殆ど無いですし」

まあ、こんな高齢者ばかりの場所にそんなモノ作っても集客が見込めないからなのかもしれないけれど。

その辺り、気になる人は矢張気になってはしまうのだろう。

「あつ、分かる？ 君も都会から来たんだっけ？」

やっぱそう思うよね。

僕なんて、ここに来た時の最初の仕事、迷子の猫探しだよ。

スーツ泥だらけになったのに、クリーニング代、経費で落ちないし。

ホント散々だったなー」

もしかして、その猫探しとは、以前一条が言っていたこの辺りでニュースになっていたというヤツだろうか。

あの猫はもしかしたら警察を動員してまで搜索されたのか……。

「次は夫婦喧嘩の仲裁だったかな？」

そんなのに一々警察が出張ってなんてられないよね、ホント」

「……お疲れさまです」

猫探しも、夫婦喧嘩仲裁も流石にお気の毒だ。

やってられない、という気持ちは分からなくもない。

少なくとももう少し都会に出れば、絶対に刑事が担当する様な仕事では無いだろう。

「でも最近はその事件もあつたし、そんなノンビリとなんてしてられない位物騒になってきちゃったんだけどね。」

まだ解決出来てないし、上の方も手を拱いちゃってき、方針がコロコロ変わるもんだから現場も結構混乱してて……。

って、あつ、ごめんごめん！

不安にさせちゃったかな？

君らは安心してて大丈夫だよ、ウン。

僕ら警察が何とかしてみせるからさ」

そういう情報を軽々しく洩らすのは良くないとは思うが……。

……一応気遣ってくれているのだろうか。

「頼りにしています。」

あと、あんまり捜査上の情報は洩らさない方がいいですよ。

叔父さんからその内キツイ拳骨飛んできちやいますし」

「あははーそうだね、今度から気を付けるよ。」

さて、と……じゃあそろそろ署の方に戻らないと……。

……！」

店内の方を見た足立さんは、途端に顔色を変えて慌てた様に物陰に隠れる。

どうしたのだろうか？

足立さんが隠れるや否や、一人の老婦人がジュネス店内から出てくる。

老婦人はふと周りを見渡してから首を傾げ、そしてそのままジュネスから立ち去った。

「ふー、危ない危ない……」

どうやら足立さんはあの老婦人とは顔を合わせたくはない様だ。

どういう関係なのだろうか？

「じゃあ僕はもう行くから。」

君も気を付けて帰りなよ？

あ、そうそう。

僕が此処に居たって事、堂島にはくれぐれも内緒にね」

「……仕方がないですね。」

これからは此所でサボるのは程々にしといて下さい」

気を付けとくよ、と言い残して足立さんは去っていった。

彼が本当に仕事に戻ったのかは分からないが、まあそれは自分が関与する話でもない。

買い物をして、その日は家に帰った。



『漢の世界』

【2011／05／13―2011／05／17】



夕食の時間、偶々点けたチャンネルでは暴走族の特集が組まれていた。

どうやら、先日言っていた暴走族の取材とはコレの事だったらしい。

『静かな町を脅かす暴走行為を、誇らしげに見せつける少年達……』

そのリーダー格の少年が、突然、カメラに向かって襲い掛かった！』
『てめーら、何しに来やがった！』

見世モンじゃねーぞ、コラア!!』

隠すつもりが感じられない、やる気のないモザイクが目の辺りにだけ掛けられた、ガタイのいい八十神高校の制服を着た男が、カメラに向かって手を伸ばしていた。

因みに、声に加工が施された形跡は無い。

これでは個人情報保護にはならないだろう。

しかし、リーダー格と言われている割には、男の周りの暴走族は男から距離を取ろうとしている様な動きであるし、第一男はバイクを所持している様には見えない。

「この声……あいつ、まだやってんのか……」

男と知り合いだっただのか、叔父さんは箸を休めて溜め息を溢した。

「お父さん、しりあい？」

菜々子に訊ねられ、叔父さんは困ったような表情で説明する。

『異完二』……ケンカが得意で、たかだか中三でこの辺の暴走族をシメてた問題児だ」

……花村が言っていた、「伝説」を作ったという一年はこの男の事だろう、きつと。

叔父さん曰く、この異完二という男は、暴走族による騒音のせいだ

寝不足に陥った母親の為に、その原因の暴走族を一人で潰滅させたらしい。

……何とも……アグレッシブな親孝行である。

その際の乱闘騒ぎで警察に補導されているらしく、その時に叔父さんと顔見知りになったらしい。

恐らく、最近また活発になり始めた暴走族たちを締め上げに来たのだろう、とも叔父さんは溢す。

なお、彼の実家は商店街にある老舗の染物屋であるそうだ。

しかし……そうであるなら、異完二は暴走族の一味では無いということなのだろう。

偶々……というか運悪く、テレビ局が取材に来ていた日に、暴走族を潰しに来てしまったというだけで。

それなのに、テレビの報道でリーダー格扱いされるとは……。

異完二が暴走族かどうか、その程度の裏取り位はしてから報道するべきだろう。

番組の適当さ加減がどうにも気に食わない。

だからどうとは言わないが、何と無く引つ掛かるモノを感じながらその日は眠りに就いた。



【2011／05／14】

天気予報が的中し、今日は朝から雨が降り続けている。

恐らく、《マヨナカテレビ》が映る条件は今晩は揃うだろう。

……何も映らず、何事も起こらない、というのが一番ではあるが。もし何か映るのであれば、それが「犯人」へと繋がるものである事を祈るしかない。

そしてその晩、夜になっても降り頻る雨の中、《マヨナカテレビ》が

酷い砂嵐と共に映し出したのは……若い男のボヤけた輪郭だった。顔が判別出来ないため誰なのかは分からないが、相当に体格の良い男に見える。

……何か見覚えがある気はするけど……、考えてもこの人影に心当たりは無い。

……詳しい事は、明日皆で話し合う事にしよう。



【2011/05/15】

「えー、それでは稲羽市連続誘拐殺人事件、特別捜査会議を始めます」「ながっ！」

翌日、昨晚の《マヨナカテレビ》に映った人物について話し合う為にジュネスのフードコートに集まった。

真面目な顔で長々と宣った花村に、里中さんの突っ込みが入る。

「あ、じゃあここは、特別捜査本部？」

妙に目を輝かせて乗り気なのは天城さんだ。

『特別捜査本部』……。

何とも心惹かれる名称だ。

幼い頃に『少年探偵団』とか、そう言った響きのモノに強く憧れていた身としては何ともこそばゆい気持ちになる。

それは発言者の花村はおろか、突っ込みを入れた里中さんもうやうら満更ではない様子だ。

それはそうと、と花村が脱線しかけた話題を本題に戻す。

昨晚の《マヨナカテレビ》はこの場にいる全員が確認し、やはりそれは男性であった様だ。

更に、高校生程の年頃であろうという見解も一致した。

しかし、全員が全員、見えた映像は非常に不明瞭で、それ以上の事

は分からなかった。

前回の天城さんの時の事を考えると、昨晚の男性も、映像が不鮮明な今はまだあちらの世界に放り込まれはいい可能性が高い。

ならば、被害者を出す前に「犯人」の先回りが出るのではないだろうか？

仮説の一つであった《被害者は女性》という説は恐らくは否定された。

山野アナの関係者かどうかはまだ分からないが、そもそもその説もあまり当てにはならないものだ。

ならば……。

「やっぱ、えーっと、愉快犯ってやつなのかな、その「犯人」は」

里中さんの言葉に、曖昧に首を横に振る。

「さあ、それは分からないけれど……。

その説でいくなら、話題になりそうな人を狙ってる可能性は高い」

「問題は、それが《誰》なのかって事だな」

花村の言葉に頷いた。

「話題になりそうな人……。

誰だろ……。」

「つて言うか、昨日の人影……。

なーんか、どつかで見た覚えがあるんだよねー……。

しかも、つい最近？」

「あつ、確かに。」

私も何と無く知ってる気がする」

「あー、里中もそう思うか？」

そーなんだよなあ……、なーんかどつかで見た気がするんだけどさ。

うーん、でもあんなガタイが良い奴知り合いに居たっけ……？」

里中さんの言葉に天城さんも花村も頷く。

……確かに、何と無くあの人影の体格に見覚えがある気がするのだ。

しかし、稲羽に来てまだ少ししか経ってない自分の知り合いに、あ

の人影に該当しそうな人は居ない。

ならば何処で見覚えがあるのか……。

学校？ いや、それでもあれ位ガタイが良い奴の顔が記憶の片隅にも無いのは、何か違和感を感じる。

ならば一体何処で……。……………。

「……一昨日の特番」

「あつ、……。一昨日の暴走族の特番！」

そうだ、あの特番で報道されていた彼!!

道理で見覚えがあつたんだ!!」

そうだそうだと頷く里中さんに、残りの二人も同意する。

一応モザイクはかけられていたので、体格は何と無く覚えいても、

顔に覚えが無いのは仕方無い話だ。

映った人影と思わしき人物に目処が立ったのは良いが、明らかに一筋縄ではいかなさそうな相手に花村の表情が曇る。

「あー、でも見るからにすっげー絡みにくそうな奴だったよな」

「完二くん、小さい頃はあんな風じゃなかったんだけどな……」

「あれ、天城さん、異くと知り合い？」

どうやら旅館の売店で彼の実家の染物屋から卸された小物を取り扱っているため、昔から交流はあつたそうだ。

異くん本人と顔を合わせる機会は大分前から無くなったが、異屋の店主であるお母さんの方とは今でも交流はあるらしい。

取り敢えずその伝で一度異くんの近況を尋ねてみるのもありだろう。

「うーん、でも彼危なくない?」

まああの特番を見ただけなのならその懸念は尤もだが、叔父さんからの話を聞いた感じだと、異くん自身は特に理由無く無闇に暴れまわる様なタイプでは無いだろう。

行動は少々乱暴かもしれないが。

積極的に関わり合いになりたい人間かどうかは置いて、少なくとも話すらマトモに出来ない様な人間では無いだろう。

一応先日叔父さんから聞いた異くんの事情を話すと、花村や里中さ

んの巽くんに対する認識が改まった様だ。

「母親の安眠の為に付近の族潰すとか、なんつーか、アグレッシブ過ぎる親孝行だな」

「フツーに良い子じゃん。行動はアレだけど」

ウンウンと里中さんは頷く。

巽くんへの認識が上方修正された処で、早速だが巽屋へ向かう事になった。

巽屋は辰姫神社の側にあり、そこそこ以上に古くからここ八十稲羽で染物屋を営んでいるらしい。

近くの山々から取れる染料を用いて丁寧に染められた染物は土産物としてもかなり好評なのだとか。

数年前にご主人が急逝し、今は夫人が一人で切り盛りしているそう
だ。

店に入ると、着物を着た、30代後半から40代程の年の頃だと思われるご婦人が出迎えてくれた。

この方が巽くんの母親なのだろう。

穏やかな雰囲気の上品な方だ。

ご婦人は顔馴染みである天城さんに微笑みかける。

「あら雪ちゃん、いらっしやい。

今日はどの様なご用件かしら？

お友達とお買い物に来たの？」

「あ、えつと……」

基本的には全く接点が無さそうなのに、巽くんに会いに来ました、といきなり素直に説明するのは少し憚られる。

それを話した処で、無闇に詮索されるのがオチだ。

それか、普段の素行があまりよろしくないと思われる彼の事だ。

巽夫人に不要な心配をかけさせてしまう可能性もある。

「どうも初めまして。

天城さんのクラスメイトの、鳴上悠希と申します。

この春にこの街に越して来たばかりなもので、この辺りにはまだ少

し不慣れな為、天城さん達のご厚意で色んな所に案内して貰っている所なのです」

「あら、そうだったの。」

ふふ、ここは染物しか置いてないから、若い人にはあまり面白くはないかもしれないけれど、ゆっくりして行って頂戴ね」

「ご厚意、感謝致します。」

綺麗な染物を見ているだけでも、とても楽しいです」

事実、丁寧に仕上げられた染物は見ているだけでも溜め息が出てしまう程見事だ。

染物だけとは言うが、布地だけでなく、染物を使ったスカーフやハンカチ、その他小物なども置かれている。

そのどれもが手作りの気配を漂わせながらも、とても丁寧な作りをしていた。

……今度、浴衣とか、そう言ったモノを作るのもアリかも知れない。夏になれば、お祭りとかそう言うモノの時に入り用になるだろう。複雑なモノになると難しいが、普通の浴衣ならちゃん縫える。菜々子ちゃんの分も作るとして、今度採寸させて貰うとするか……。

そんな事を考えながら布地を見回していると、どちらかと言うと落ち着いた色合いの染物が多い中鮮やかな色をしたソレが目に残った。

紅緋色に染められ、控え目に小さな模様が入ったそのスカーフは、何故か何処かで見た事がある。

……何処で見たのだろうか？

すると、横で同じくそのスカーフに気付いた花村が、異夫人に聞こえない程度の小声で呟いた。

「あのスカーフ……テレビの中のあの部屋にあったヤツとそっくりじゃねえか？」

テレビの中のあの部屋と言われて思い出すのは、あの異様なマンション様建築の一室だ。

確かに、あの部屋の中にあった荒縄の先に括られていたスカーフ

は、丁度あれと同じ感じの色合いのモノだった。

「あの……、あのスカーフって、どうしたんですか？」

もしかして、誰かのオーダーメイド品なんじゃ……」

「あら、分かつちやっただ？」

ええ、ある人から男女ペアで頼まれた品だったのだけれど……。

その人が引き取りに来た時に、片方しか要らないと言われてしまつてね……。

困ったから、こうやって店頭に出して売っているの」

「あの……このスカーフを注文した人って、もしかして、あの山野アナですか？」

「あら？　山野さんのお知り合い？」

ええ、そうよ」

「まあ、以前偶々お見掛けした時に、このスカーフと同じ色とデザイン
のモノを身に付けていらしたので」

異夫人にそう言い訳をしつつ、ふむ……と考える。

どうやら一応この異屋も、一件目の被害者である山野アナとある程
度の関わりはあったらしい。

だが、関係性としては殆ど無いにも等しいモノだ。

そんな程度の関係性が狙われる理由になるのなら、それこそ山野ア
ナが利用した事のある飲食店やスーパーなどですら標的となつてし
まうだろう。

それに、もし山野アナとの関係性が、被害者の共通項であるのなら、
狙われるのは異くんではなく、異夫人の方だ。

だが、昨日の《マヨナカテレビ》に映った人影は、どう見間違えて
も異夫人では無い。

だからきつと、山野アナとの関係性はあまり関係は無い要素なので
はないだろうか……。

……いや、一先ず考えるのは後にしよう。

焦って答えを出さねばならぬ事でも無いのだし、そもそも今日ここ
に来たのは異くんの安否確認が目的だ。

「あの、……息子さんはご在宅でしょうか？」

「あら、完二に何かご用かしら？」

「ごめんなさいね、あの子また何処かにフラツと出掛けてしまったみたいで……。」

「……もしかして、完二が何かご迷惑を？」

「いえ、そう言う訳ではありません。」

「少し訊ねたい事があつただけです」

「そう答えると、巽夫人が少しばかり安堵した表情を見せる。」

「……以前、巽くんの素行に関する事で何かしらの問題があつた事があつたのだろう。」

「まあ、暴走族を潰すとか、そう言う事をしていれば、何かと目を付けられたりするだろうし、そういう事に関して気苦労が絶えないのかもしれない。」

「叔父さんも、そんな事を言つて溜め息を吐いていたし。」

「発端となる理由がどうであれ、暴力行為が行き過ぎると結局かえつて周りに迷惑を掛けてしまう事例だ。」

「取り敢えず今は不在の様だし、買い物をする予定も無い人間が店先に長居するのは店にも迷惑をかけてしまう。」

「今日の所は引き上げるのが吉だろう。」

「礼を言つてから店を出て、側にある神社の方へと移動した。」

「一応、山野アナとも関係はあつたけど……。」

「でも、そんなのが理由になるとは思えないし……。」

「えっと、やっぱ愉快犯つてヤツ？」

「その可能性は高まつたな。」

「怨恨つて線も、山野アナ・小西先輩・天城と来て巽完二だろ？」

「ぶっちゃけこの四人がそう言う線で繋がる事なんて有り得んのか？」

「里中さんの言葉に花村は頷き、しかし考え込む様に眉根を寄せる。」

「零とは言い切れないけど、まあ無視出来る程度の確率だと思う。」

「それより問題なのは、『犯人』が愉快犯だったとして、そのターゲットを何を基準に決めているのかって事だ。」

「流石に無差別つてのは考えにくいし」

「そうなの？」

首を傾げる天城さんに頷いた。

「もし無差別に、手当たり次第にやってるなら、被害者はもつと多いと思う。」

殺したいって強く思ってるんじゃないかって、相手が死んでも良いや、って位の軽い気持ちでやってるなら、尚更。

それに第一、適当にターゲットを選んでるだけなら、巽くんっていう選択はあまりしれないと思わないか？」

「まーな。」

見るからに拐ったりとかすんの難しそうだし。

あいつを狙う位なら他のヤツを狙うだろうな」

花村も頷き、他の二人も納得した様に頷いた。

多分、ターゲットを選ぶ基準というものはあるのだろう。

巽くんはまだ確定では無いけれど、彼を含めた四人の共通項は

……。

……………。

……………。

「……………テレビ？」

確証は無いが、ふと四人ともが《マヨナカテレビ》に映る前に、テレビの番組で映されていた事に気が付いた。

山野アナの時は詳しくは分からないがそれでも連日不倫騒動でテレビで取り沙汰されていた様だし、小西先輩の時は第一発見者のインタビューが流れた直後に《マヨナカテレビ》に映ったのだし、天城さんの時も旅館が報道されてた直後の《マヨナカテレビ》に、今回の巽くんだったあの暴走族の特番の後の《マヨナカテレビ》だ。

《マヨナカテレビ》が映る条件が整った時の直前にテレビで報道された人が、《マヨナカテレビ》に映し出されている。

……………この事は関係がある、のだろうか。

テレビ番組で映された人を、狙っている……………？

……………いや、山野アナの事件以降、今日に至るまでテレビに映された人なんて、芸能人とかも含めれば数え切れない程居る。

その中で、三人……いや四人に共通しているのは、稲羽に居る人物だと言う事だ。

何故《マヨナカテレビ》が、ターゲットと思わしき人物を映し出すのかは分からないが、ターゲットの基準は、『テレビで報道された、稲羽の人』という可能性がある。

何故そんな基準なのかは分からないが、世の中には理解出来ない様な行動基準を持つ人は確かにいる。

【犯人】もその類いの人なのかも知れない。

あくまでもまだ可能性の話ではあるけれど、この考えが当たっているのなら、一步前進出来たと言っても良いだろう。

「テレビ……う？ ……っ！」

まさか、テレビで報道されたから狙われたってのか?!

「何それ！」

テレビに映ってたなら、誰でも良いってワケ!？」

途端に顔色を変えた花村と里中さんに頷いた。

「確証は無いけれど、その可能性は零じゃない。

取り敢えず、今はどんな可能性でも潰していくしか無い。

それより、早い目に異くに接触出来れば良いんだけど……」

【犯人】の特定も重要だが、今はターゲットとなっている可能性がある異くんの身の安全の確保だ。

彼を拐うのは容易くは無いだろうが、それでも決して不可能な事でも無いし、一端あの世界に放り込んでしまえばどうと言う事も無い。

異くんが幾ら喧嘩に強かつて、シャドウ達を生身で相手をするのには無理がある。

「あつ、完二くんだ……」

その時、天城さんが階段の下を見て呟いた。

その声に釣られ、その視線の先を辿ると、ガタイのいい強面の男子生徒が道を歩いていた。

薄い色合いの髪をオールバックにして、制服の上着を袖を通さないで肩から着るバンカラスタイルで身に纏い、ピアスを耳に幾つか着けている。

成る程、彼が巽くんか。
丁度良いタイミングだ。

神社の階段を降りて、巽くんに話し掛けた。

「どうも初めまして。」

私は二年の鳴上です。

君が巽完二くん？」

「あん？」

そうだけど……、オレに何か用か？」

先ずは自己紹介をし、自分が怪しい者では無い事をアピールする。
巽くんは、一応話は聞いてくれそうだ。

「少し話したい事があってね。」

……最近、身の回りで何か起きたりしなかった？

不審な人影を見たり、とか」

そう訊ねると、微かに考える素振りを見せた後、巽くんは首を横に振った。

「いや……、特にそんな事はねーけど……。」

つか、何でそんな事をオレに聞くんだよ」

「チョッと変な話を耳にしてしまったね。」

少し、巽くんの事が気掛かりだったんだ。

今の所実害は無いみたいで安心したけど、もしかしたら今後誰かが巽くんに良からぬ事をするかもしれないし、身の回りには気を付けておいてね」

素直に全部話す訳にもいかないから、取り敢えず言葉は濁しておいた。

荒事に首を突っ込んだりもしているみたいだし、身の危険があるかもしれない、と伝えたら、その理由は彼が勝手に解釈してくれるだろう。

結果として「犯人」の思惑を潰せるのならそれに越した事はない。

「まあ、分かったケドよ。」

アンタ大概お人好しだな。

会った事もねーオレの為にワザワザ忠告しに来るなんてよ」

「巽くんにもし何かあったら、君のお母さんが悲しむし、それに私だって寝覚めが悪くなる。」

お人好しとか、そんな大層なモノじゃない。
私がやりたいからやってるだけだし。

まあ、先輩のちよつとしたお節介みたいなものだって思つてくれて良い」

そう答えると、少し驚いた様に巽くんはこちらを見てくる。

「それを伝えておきたかっただけだから。」

「ごめんね、時間を取らせてしまつて」

「あつ、いや……。」

ワザワザ来てくれてたみてーだし、それは良いんだがよ。

……まあ、ありがとな」

戸惑つた様な顔で礼を言う巽くんは、手を振つて別れを告げて花村達のもとへと戻つた。

「いきなりあいつに話し掛けるなんて、鳴上は度胸あんな……。」

「そうか？」

花村は心配しているみたいだが、巽くんは……まあ見た目は強面だけど……チンピラみたいにし構わず暴力に訴える様なヤツじゃないよ。

それにほら、本人に直接言わなきゃ、警告は意味無いし」

見た目は他人を威圧しているが、実際に話していると、言葉遣いは少々荒いが、粗野と言う程でも無いし、少なくとも話が出来ない相手ではなかった。

兎に角、今の段階で出来そうな手は打つた。

様子見は明日にして、今日の所は解散にするでしょう。



昨晚の《マヨナカテレビ》に映っていたのも、恐らくは巽くんだろう。

今の所、あちらの世界に放り込まれた人はいない。

取り敢えず、「犯人」のターゲットは巽くんであると仮定して動くしかない。

巽屋に移動すると、丁度店から誰かが出てきた。

巽屋の客だろうか？

年の頃は同じ位で、背は低め……多分里中さんよりも小さいだろう。

キャスケット帽を深く被って、あまり表情が見えない様になっているけれど、その幼さが残る中性的な顔立ちを整っている。

ネイビーのコートに身を包んだ彼(?)は、どうやら手ぶらの様で、あまり買い物をしに来た様には見えない。

この時期にこの年頃の人間が観光に来ている可能性は低めだから、顔に見覚えが無いだけで、この辺りの人なのだろうか？

彼(?)とすれ違う時に、偶々視線が噛み合い、お互い何も言わずに軽く会釈をした。

そのまま彼(?)が立ち去って行くのを見送る。

「……誰だろ？ 見た事無い人だし……」

「なんつーか、ちよつと変わった感じだよな」

どうやら地元の人間では無かったらしい。

……巽屋に何の用があったのだろうか？

……まあいい。

連日押し掛ける事になってしまい申し訳無いが、巽夫人に巽くんのことについて少し話を聞く事にした。

もしかしたら、そこから何か分かるかもしれないからだ。

だが結局分かったのは、巽くんは裁縫やそういった手先の器用さを要求する作業が得意であるという事。

今でこそ暴走族を潰したりと言った荒事をやらかしているが、昔は絵を描いたり裁縫をしたりといった、穏やかな事を好んで行っていた

という事。

それ位だった。

恨まれる可能性は零ではないけれど、それこそ潰された暴走族以外に、巽くんに直接危害を加えられた人はほぼ居ない様だし、学校等での噂は大分誇張された半ば風評被害に近いモノの様だ。

得意だと言う裁縫は今でもやっているらしく、巽くんの作品だと言う編みぐるみの作品を巽夫人に見せて貰ったが、非常に凝っている造りの完成度の高いモノだった。

これなら店に出して金を取っても、問題なく売れるだろう。

フリーのクリエイターが作った作品を扱った展覧会兼即売会は稲羽に来る前に良く見掛けたし、そういうグッズを専門にしているお店もあつた。

昨今のインターネットの発達により、ネットを介して作品を売り買ひするのが比較的手軽になっている事も手伝つてか、クリエイターとしてそこそこの利益を上げている人も多いと聞く。

巽くんの歳で、そうやって実際にお金を稼いでもいけるモノを作れる才能があるというのは、とても凄い事だ。

純粹に尊敬する。

裁縫をやる事もあるからこそ、巽くんの技術の高さがとても良く理解出来た。

……流石に手芸の腕前とかが「犯人」の目的に繋がるとは思えない。これ以上の収穫は無さそうだ、と店を出る事にした。

店から出ると、巽くんが先程すれ違った見知らぬ彼(?)と話している所に出会した。

どうやら、明日の放課後に二人で会う約束をしている様だ。

彼(?)は巽くんの知り合いなのだろうか？

彼(?)が立ち去つてからも、巽くんは何やら呟きながら突っ立っている。

……どうかしたのだろうか？

声を掛ける前に、巽くんは店の方へと戻ってしまった。

神社の境内で作戦会議を開く。

ターゲットになっているのは巽くんの方だろう、とは意見が一致したが、それでも巽夫人が狙われているという可能性とて否定は出来ない。

全く他の人である可能性とてあるが、流星にそこまでは手が回らないので、巽くんあるいは巽夫人がターゲットになっていると言う仮定で動くしかない。

兎も角、「犯人」の狙いが巽親子のどちらかであるのなら、その内に何らかの動きが見られる筈だ。

然し乍ら、連日買い物客でもないのに巽屋を訪れると言う訳にもいかない。

そう言う事なので、明日は張り込みを行う事にした。

巽くんの方は、どうやら明日は見知らぬ彼(?)と何処かへ行く様なので、そちらの方は尾行と言う事になる。

理想を言えば24時間張り込み続けるのが一番なのだろうけれど、警察でも何でも無い一般の学生には、精々放課後の数時間を張り込むのが精一杯だ。

その間に「犯人」からの動きがあれば良いのだが……。

何はともあれ、何かあった時の連絡用に、と、各々で連絡先を交換してその場は解散となった。



今日は叔父さんの誕生日だ。

だから、夕飯のメインは叔父さんの好物だと言う餃子にした。

用意した味は三種類。

餃子のタレでも、ラー油だけでも、ポン酢でも塩でもそのままでも楽しめる様にはしている。

「お父さん、おたんじょうびおめでとー！」

「叔父さん、お誕生日おめでとーございます」

そう言つて、贈り物としてネクタイピンを渡すと、思いの外喜んで貰えた。

なお、贈り物のネクタイピンは『 дайだら.』の店主さんに頼み込んで作つて貰つた特注品だ。

シャドウを倒した時に入る素材を使っている様で、燻した様な銀色の本体に“ブルークォーツ”（これもシャドウからの戦利品だ）が程好いアクセントとして嵌まっている。

叔父さん位の年代の男性が身に付けていても、問題の無いデザインにして貰つた。

「ははっ、こんな歳になつてでも、祝つて貰えれば嬉しいもんだな」
そう笑つた叔父さんと、楽しい夕食の時間を過ごした……。



【2011／05／17】

放課後。校門の所で待機していると、やたらソワソワとしている異くんが出てくるのと同じ位のタイミングで、昨日の彼(?)が校門前の坂道を登つてやって来た。

そしてそのまま二人は連れ添つて坂を下りていくのだが……。

何故か異くんが終始挙動不審だ。

言葉に詰まったり、目線を逸らしたり、はては微かに頬を赤く染めたり……。

まるで初々しいカップルが初デートに行こうとしているかの様な感じもする。

しかしそんな落ち着かない異くんとは正反対に、彼(?)の方は全くの平静であるため、何ともチグハグだ。

……何なのだろう。

花村と里中さんはそんな巽くんの様子に呆然としていたが、このままでは見失ってしまう、と巽くんを追い掛け出した。
それを見送って、天城さんと一緒に商店街へと向かった。

◆◆◆◆◆

相変わらず商店街は閑散としている。

巽屋のど真ん前で馬鹿正直に張り込みをする訳にはいかないので、神社の石段の所に陣取った。

これなら、立ち話しているだけの学生を装えるし、店に誰が訪れるのかも監視出来るだろう。

天城さんが自販機で買ってきてくれた缶ジュースを開ける。

『胡椒博士NEO』……あまり自販機では見掛けない炭酸飲料だ。

妙に湿布臭さを感じるこの炭酸飲料は、現存する最も古い炭酸飲料なのだそうだ。

アメリカではかなりメジャーであるらしいが、日本でのウケは今一つらしく、一般的なスーパ―ではあまり見掛けないし、自販機で売っているのはそこそこ以上に珍しいだろう。

かなり好み有别れる味であるので、仕方無いだろうが……。

一部では熱狂的な愛飲者も居るとは聞く一品だ。

一気に呷るには少々クセが強い。

………。

今の所、これと言って怪しい動きは見られない。

このまま何事も無い、というのが一番好ましくはあるが……。

「犯人……来るかな……」

ポツリと、天城さんは不安を溢した。

「分からない。

でも、もし来たのなら……。

私が天城さんを守るよ」

不安、だろう。

何せ、相手は既に二人の命を（直接手を下した訳では無いとは言え）

奪い、一度天城さんの命を狙っているのだ。

【犯人】がそれを諦めたのか、それすらまだ分からないし、もしターゲットから外れていてもまた再び標的にされる可能性だってある。

「もし【犯人】が来たら……天城さんは警察に知らせて。」

叔父さ……堂島さんの名前出したら、学生の通報でも無下には扱われないと思うし。

……天城さんが逃げる時間位は、稼ぐから」

相手は何れ程のモノなのかも分からないのだ、無理に捕まえようとするよりは、警察にお任せする方がより良いだろう。

尤も。

証拠を残さない為にあの世界を凶器として使っているのなら、そう簡単にこちらの世界で証拠が残る様な犯罪は早々やらかさないと
思うが……。

……それでも天城さんを狙うと言うのなら、応戦するしか無い。

その場合は意地でも、天城さんが逃げる時間位は稼いでみせよう。

「えっ……。」

えっと、ありがとう……」

少し頬を赤くした天城さんは、俯き、「頼りにしてるね」と呟いた。

「何か……不思議。」

今迄、千枝以外の子と長い時間過ごす事って、殆ど無かったし……。

うん、でも……。

……鳴上さんたちと一緒に過ごすの、凄く楽しいよ」

天城さんのそんな言葉に、ありがとう、と頷いた。

一緒に過ごす時間を『楽しい』と思って貰えるなら、それが一番だ。

「あ、そうだ……。」

千枝たちの方は上手くいってるのかな？」

どうだろう……。

正直、花村と里中さんが尾行に向いてるとは思えない。

取り敢えず、一度確認してみよう、と、ケータイを取ると、ほぼそのタイミングで電話がかかってきた。

花村からだ。

何かあったのかもしれない。

電話を取ると、焦った様な花村の声が聞こえた。

『スマン、鳴上!! 尾行失敗だ!!』

何故か電話向こうの花村は走っている様だ。

しかも恐らくは花村の後ろから、巽くんの怒鳴り声も聞こえる。

「何があった?」

『えっと、尾行に気付かれちゃって、里中が余計な事言っ——』

今度は横合いから里中さんの声が「そんな事言っないし!」と怒鳴る。

『兎に角、完二を刺激しちゃって、今追っかけられてる。

取り敢えず、撒けそうなタイミングで何とかして撒くけど、今からはそっちに行けねーと思う』

「そうか、……そろそろこっちも時間が厳しくなってきたし、今日はこれで解散にしよう。

……捕まるなよ、花村。

健闘は祈っておく」

電話はそこで切れた。

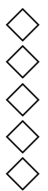
そして天城さんと二人、顔を見合わせて、嘔き出した。

花村と里中さんの心配はあまりしていない。

逃げ切れるだろうし、そもそも巽くんが二人に暴行を加えるとは思っていないからだ。

それ故、巽くんから猛ダツシユで逃げている二人を想像し、思わず笑ってしまったのである。

笑いが治まった所で、天城さんとは別れた。



天城さんからその電話がかかってきたのは、夜も更けてきた頃合いだった。

所用序でに巽屋に電話をして確認を取った所、巽くんの所在が不明なのだと言う。

巽夫人曰く何処かにフラツと出掛けてしまうのはよくある事らしいが、現在「犯人」のターゲットになっている可能性が高い事を考えたと、あまり看過出来ない状況だ。

ジュネスのテレビでクマに確認を取ろうにも……もうこの時間では閉店迄に間に合わないし、縦しんば花村に頼む等してそれをした処で、今からの時間帯に救出活動を行うのは、様々な面を考慮しても難しい。

……今晚も《マヨナカテレビ》が映る状況は整っている。

それで一先ずの巽くんの安否を確認する事にして、詳しい調査は明日行おう。





……砂嵐と共に、『マヨナカテレビ』は始まった。

先日までのものは、この砂嵐が殆ど治まらないまま映像が流れていたが、今晚のモノは直ぐ様砂嵐が晴れていく。

……天城さんの『シャドウ』が映った時と同じ状況だ。

やはり、巽くんは既に……。

が、思考は唐突に遮られる。

『皆様……こんばんは。』

”ハツテン、ボクの町!”のお時間どえす!!』

突然ドアップで登場した巽くん(の恐らくは『シャドウ』)に思わず目が丸くなった。

【女人禁制!・突☆入!?!愛の汗だく熱帯天国!】

と言うバラエティ臭の漂うテロップが画面右下に表示され、何やら怪し気な音楽も流れているのも大変気になるが。

それ以上に目が釘付けになってしまうのは、巽くん(の『シャドウ』)が、真っ白な禪一丁と言う、もの凄くギリギリな格好でいる事だ。

ユラユラと体を揺らし、前屈みで此方を覗き込んでいる。

眉は八の字に下がり、何故か頬が上気しているのか赤く染まり、更に口元を所謂アヒル口にしている。

しかも、語尾が明らかに可笑しい。

一体どうなっているんだろう。

『今日は……性別の壁を越え、崇高な愛を求める人々が集う、ある施設をご紹介します』

巽くん(の『シャドウ』)からアップが外れ、周囲の状況も見れる様になった。

……何処かの大型浴場施設の様な場所らしく、周囲に無数のロッカーが立っているのが目に映る。
白く画面が微かに曇っているのは、霧……ではなく、多分湯気によるものだろう。

施設は美しい白木造りらしく、あまり解像度の高くない画面越しでも、その美しさは伝わってきた。

『極秘潜入を行うレポーターは、このボク……異完二くんどえす!!』

再び巽くんが画面にアップで映る。

しかも、名前を言う前に音を立てて投げキッスをしてきた。

更に、名前を言いながら、右に左に腰を振って謎のポーズを行
う。

……直視し辛い……。

天城さんの時もそうだっただろうが、『マヨナカテレビ』を見ている人間はまあそこそこはいる様だ。

……彼らは『シャドウ』とか、あの世界の事情なんて知らないでこの『マヨナカテレビ』を見ているのだから……。

……止めよう。それを考えると剩りにも居た堪れなくなる……。

『ああん……熱い、熱いよ……。

こんなに熱くなっちゃったボクの身体……。

一体、ボクは……ううん、ボクの身体はどうなっちゃうんでしょう……?』

悩まし気に身体を揺らす巽くん（の『シャドウ』に、思わず、どうにかなくても困るだろう、と内心突っ込む。

大体、熱いのは今巽くん（の『シャドウ』が居る場所が暑苦しいだけだろう。

それにどうせその先に居るのは人間じゃなくてシャドウだけだ。

……この巽くん（の『シャドウ』は何を訴えたいんだろう……。
『もうこうなったら……。

もつと奥まで、突☆入、してきまあす!!』

そう言つて、体をくねらせた巽くん（の『シャドウ』は、画面に背を向けて背後の入り口へと、がに股で駆け込んで行った。

……。……。……。
今までの事を考えると、既に巽くんはあちらの世界に居るのだろうか……。

……花村は、ここ……行きたがらないだろうな……。
その気持ちが分からない訳では無い……。
そう思うと、深い溜め息が溢れた。



【2011/05/18】

昨晚の衝撃的な映像に映っていたのは間違いなく巽くん（の『シャドウ』であった。

今迄の事から、既に巽くんはあちらに放り込まれてしまっている。その見解は全員が一致した。

しかし……結局《マヨナカテレビ》とは一体何なのだろう。天城さんの疑問に、全員で考え込む。

最初に見たのは、単なるオカルトチックな都市伝説だろうと、話のネタ半分に試した時だ。

その時は小西先輩らしき人影が映った。
その後数回の《マヨナカテレビ》を見てハッキリと言える事は、あちらの世界と何かしらの関係があるという、ただそれだけだ。

そもそもその噂話の内容は『雨の夜の零時に、点いてないテレビに、運命の相手が映る』だ。

実際に映るのは、運命の相手、等ではないのだが……。
しかし、噂、になっている以上それを試した相手はいるのだろう。条件さえ合っていれば、誰にでも見る事は出来る代物の様だし、一

度火が着けば爆発的に広まってしまいかねない。

……何故、とは説明出来ないが、それは非常に不味い事態になる気がする。

「あつちの世界に関係があるのは確かなんだろうけど、あつちに誰も居ない時にも《マヨナカテレビ》に映ってはいるんだよな。

クマはあつちにいるヤツがああの映像を産み出してるつつてたが、それだと誰も居ない時に見えるモノの説明がつかねーし……。

うーん……分かんらん」

首を捻る花村の言葉に頷いて、更に自分が他にも感じた疑問点を述べる。

「……分からない事は、他にもある。

例えば、そもそも何故、『運命の相手』が映る』、なんて内容の噂になったのか、とか」

「？ それって何か変？」

噂ってそう言うものじゃない？」

里中さんが、意味が分からないとでも言いたげに首を傾げた。

確かに、『運命のく』なんて噂は古今東西腐る程ある。

《マヨナカテレビ》の噂がそうである事自体はそう不思議なモノではない。

が、しかし。

「《マヨナカテレビ》は実際に映像を映している。

だけれど、それは『運命の相手』じゃない。

例えば、里中さんは小西先輩の映像が映った時に、それが『運命の相手』だって思った？」

「えっ、うーん、流石にそうは思わなかったよ？」

だってあの影どう見ても女性だったしね。

ふつつーに考えて、女性を運命の相手とは思わないし」

「そう、映ったのが同性だったり、あるいは自分の意中の人じゃなかったり、あるいは嫌いな人だったり……。

そういう場合は、映った相手が『運命の相手』だなんて思わないんじゃないだろうか？」

それに納得したのか、花村が頷く。

「あー、確かにな。」

ん？ でも何でそれが分からない事に繋がるんだ？」

「《マヨナカテレビ》が、本当に単なる噂ならそれでもおかしくは無かった。」

でも、実際に『何か』は映る。

そして、実際に試した人もそれなりには居る。

なら、途中で『映るけどそれは運命の相手じゃない』って噂も生まれるとは思わないか？

でも、そんな噂は無い」

それに、だ。

もし《マヨナカテレビ》が「犯人」のターゲットを映すだけの代物であるとするのならば、最初の被害者が出るまでの映像は『山野アナ』だけの筈だ。

なら、噂は『山野アナが映る』となる筈だがそうではない。

「噂が生まれるからには、必ず発生源がある筈。」

噂の元が作り話の時だって、それを最初に作った人が居るのだし。

なら、一番最初に《マヨナカテレビ》を見た人が見たのは誰？

それがその人にとつての『運命の相手』、だった？」

《マヨナカテレビ》という現象は実際に存在するのだから、《マヨナカテレビ》の噂は偶々それを見た『誰か』が発端となっている筈だ。

問題は、その『誰か』が見たのは誰であったのか、という事。

もし、映っていたのが山野アナだったのなら、果たして『運命の相手が映る』だなんて噂になるのだろうか？

「もし映っていたのが山野アナだけだったのなら、『運命の相手』なんて内容になるとは思えない辛い。」

そう言えば、里中さんが《マヨナカテレビ》の噂を知ったのは何時位？」

「えーっと、……春休みの辺り、かな？」

その頃には既に結構な噂になってたよ？」

実際に試したのはあの時が初めてだったけどさ」

「その時からずっと、『犯人』のターゲットとして山野アナが映っていたのだとしたら、……『運命の相手が』っていう触れ込みは不自然だ」
《マヨナカテレビ》が映していたのは、最初の内は山野アナでは無かった、という可能性がある。

ならば、映っていたその人はどうなったのだろうか。

もし【犯人】の手に掛かっていたのなら、それはそれで事件として報道されているだろう。

なら、その時映っていた人は無事であるか、あるいは【犯人】が手を下す前に事故などで不慮の死を遂げたか……、何にせよ【犯人】のターゲットを外れた事になる。

なら、それは何故？

あるいは、当初【犯人】と《マヨナカテレビ》に関連性は無かったが、何らかの要因によって《マヨナカテレビ》が【犯人】のターゲットを映し始めた、とか？

いや、そもそもの話、《マヨナカテレビ》という現象は何時から存在する？

それは何故、何の要因があつて……？

……結局、どの疑問も『《マヨナカテレビ》とは何なのか』に帰結する。

「うーん、何か考え出したら分かんない事だらけだけどさ、今は《マヨナカテレビ》よりも完二くんを助ける事が大事じゃん」

……里中さんの言う通りだ。

《マヨナカテレビ》が何であるのか、それは時間さえあれば何時でも考える事が出来る。

今は異くんを救出する事を考えなくては。

「てか、完二って言えばさ、昨日の《マヨナカテレビ》は何だ？

いや、あれも天城ん時と同じくシャドウだったんだろーけどさ。

何つーのか、その……」

花村が言い淀んだ言葉に頷く。

「まあ、凄いインパクトではあつたな」

異くんが抑圧していたモノ、それは一体何なのだろう。

天城さんの時の様に、シャドウの主張その物が抑圧してきた一面と
IIで繋がる訳では無いだろう。……無いと信じたい。

勿論、シャドウの主張も間違いなく抑圧していた部分と根は同じだ
ろうが、それは曲解と誇大な誇張表現を伴っている。

今の状況を息苦しく思い、逃げ出したいと思っていた思いが、『王子
様を逆ナンシに行くお姫様』を産み出した様に。

「まさかとは思うけど、……完二ってアツチの気がある人？」

「そーいや昨日だって、男と出掛けるだけなのに嫌に挙動不審だった
し……」

「それは……分からない」

花村が顔を若干青くして、否定される事を期待した様な言葉に、自
分は首を横に振った。

流星に、巽くんの性的嗜好がどうなのか迄は分からない。

あんなシャドウが出て来てしまっている以上、その疑惑は膨れ上
がっていく一方だが……。

「万が一……。万が一そうなのだとしても、そうだからと言って見捨
てるなんて訳には行かない……」

「いや、そりゃそうなんだろうけどさ。」

俺は何て言うの、その、何となく身の危険ってのを感じちゃって
たり……」

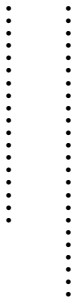
「もう、何をゴチャゴチャ言ってるの！」

「ごねて無いで助けに行かなきゃ！」

「うん、迷ってる暇、無いよ」

身の危険を感じている花村の発言は、里中さんと天城さんによつて
封殺された。

巽くん救出への意思を固めた所で、テレビの中へと移動した。



……

しかし、直ぐ様救出、とは事は運ばなかった。

どうやら、クマにも巽くんの居場所が分からないらしい。

誰かがいる、と言う事は分かるらしいが、その詳しい位置までは分からないのだそうだ。

クマが『自分とは何者か』を考え続け、それに思考を取られているからかもしれないが……。

原因は何であれ、クマの力で位置が掴めなくては救出も何もあつたモノではない。

クマの協力無くしては、この何処まで広がっているのかも分からない霧の世界を宛てなくさ迷う他無いからだ。

しかし、巽くんの『人柄』が分かる様な何かがあれば探し出せるかもしれない、とクマは言う。

それは物であつても情報であつても構わない、と。

しかし、天城さん以外は殆ど面識が無い相手だけに、『人柄』と言われても、それを示せる何かは持ち合わせていなかった。

……兎に角、巽くんを知る人から情報か何かを貰うしか無い。

一先ず手分けして情報収集にあたる事になり、一旦向こうへ帰る事となった。

……

……

……

……



情報……と言つても、商店街の人達の殆どは、昔は良い子だったのに……、とか、お母さんは良い人なのにどうして、とか。

そんな《不良》の巽くん、と言う認識が殆どだった。

この前のテレビ番組の影響も相当大きいらしい。

中には純粹に巽くんを心配してくれている人も居たが……。

どうであれ、実際の《今の》巽くんを認識している人は殆ど居ない様だ。

ここはやはりご家族に話を聞くしかないだろう……。

そんな思いで、巽屋を訪れた。

買い物をしていない迷惑な客だろうに、巽夫人は優しく出迎えてくれる、が、その顔には僅かな焦燥が浮かんでいた。

それとなく話を促すと、やはり巽くんが帰って来ていない事が、巽夫人の胸を痛ませている様だ。

色んな人から札付きの不良扱いされている巽くんだが、実際の所は口こそ悪いが相当な母親想いの男だ。

夜に出歩く事も珍しくなく、帰りが遅いのもよくある事だが、それでも一晩中帰ってこない、と言うのは未だ嘗て無い事なのだそう。

恐らく、巽夫人の目許に微かに浮かぶ隈は、巽くんの帰りを夜通し待っていた為だろう。

巽くんの身を案じ、今朝方警察に届け出を出したそう。

一刻も早く巽くんを救出しなければならぬ、と思いを改めて固めた所で、ふと昨日巽夫人に見せて貰った編みぐるみに思い至った。

不躰だし、巽くんの事で気を揉ませているのに申し訳ないと思いつながら、件の編みぐるみを貸して貰えないかと巽夫人にお願いした。

実際の用途……巽くん救出の為の手懸かりにする、とは言えないので、菜々子ちゃんに贈る編みぐるみの見本にしたい、と誤魔化して頼んでみた所、巽夫人は優しく微笑んで了承してくれた。

……本当に、優しい人だと思う。

この人をこれ以上悲しませない為にも、巽くんは必ず助け出さなくてはならない。

礼を言つて異屋を後にする頃には、そろそろ夕飯の買い出しに行かなくてはならない時間になつていた。

今からの時間に救出に向かうのは難しい。

明日の放課後、改めて向かう事を決めて三人に通達及び了承を得た後、夕飯の買い物をする。

商店街の丸久豆腐店が珍しく営業しているから、麻婆豆腐にでもしようかと豆腐をそこで購入し、残りはジュネスで買い揃える事にした。

ジュネスに入ると、其処で思わぬ人を見掛けた。

昨日、巽くんと何処かに出掛けていた見知らぬ彼（？）だ。

今日もあのネイビーのコートとキャスケット帽を身に纏っている。

……買い物をしに来たのだろうか？

どうやら向こうも此方に気が付いたらしく、軽く会釈をしてくる。

それに会釈を返しながら、そう言えばあちらの世界に放り込まれる前に巽くんと何をしていたのだろうか、と疑問に思い訊ねてみる事にした。

もしかしたら、それも巽くんの居場所を特定する手懸かりになるかもしれない。

「こうして直接話すのは初めまして。

異屋さんの所ですれ違って以来、だね。

「ここには買い物に？」

「これはどうも。

まあ、そんな所です。

「ここは町の色んな人に会えて、便利な場所ですからね」

……『色んな人に会えて』便利、か。

「どうやら地元の人では無いみたいだし、ここには純粋な買い物に来ている訳では無さそうだ。

……この町の色んな人に会う目的でここに居るのだとすると、……何かを調べているのだろうか？」

もしかして、この前異屋に来ていたのも、巽くんと話していたのも、

それが目的だったのかもしれない。

それが何か迄は流石に分からないが、恐らくこの彼(?)にも何かしがたの事情があるのだろう。

今も此方を探ろうとしている様な目で見ている。

……何か彼(?)の気にかかる様な事をしてしまったのだろうか？

「えっと、私……君が気にする様な事したかな？」

何かを調べているみたいだけど、そのの一環？」

そう訊ねると、彼(?)は少し驚いた様な顔をした。

「よく僕が調べものをしてしていると気が付きましたね」

探る様な視線を向けている事是否定するつもりは無いらしい。

「どうやら君はこの辺りの人ではないみたいだし、買い物に訪れたに
しては買い物袋とかを持っている風には見えないから、買い物をしに
来た訳では無さそうぞ。

それにさつき『町の色んな人に会えて、便利だ』って言ってたしね。

この町の色んな人に会えるから便利って、普通の買い物客は思わな
いと思うよ。

じゃあ、町の人達に会って何をしているのかって考えて……この町
について何か調べているのかなって、まあそう思っただけ。

もし君がチラシとか持つてるなら何かの勧誘とか宣伝とかかなっ
て思ったけどね」

「成る程、確かにそうですね。

中々お見事な洞察力です」

「それで、もしかして私に何か尋ねたいのかな？」

もしそうなら、一応話すつもりだけど」

ではお言葉に甘えて、と彼(?)は尋ねてきた。

「どうやらあなたは、昨日巽くんに身の回りに気を付けるよう言っ
ていた様ですが、それは何故ですか？」

「……学校で妙な噂を耳にしてね。

まあ、巽くんに不良が報復しようとしてる、みたいなヤツ。

巽くん、学校にあまり来てないらしいし、知らないだろうなって
思って、偶々会った時に忠告しただけ」

大雑把な意味で言えば、嘘は言っていない。

「何故、態々忠告を？」

失礼ながらあなたはここに来てまだ日が浅いと聞きます。

巽くんと交流があった訳では無さそうでしたが……、それでも忠告しに行く理由はあったのですか？」

「どうやら彼(?)はこちらが越してきたばかりだと言う事まで調べていたらしい。」

尤も、この狭い稲羽内のコミュニティじゃ新参者の話なんて、誰に訊いても知っている事なのかもしれないが。

「噂を知ってて無視して、それで巽くんに何かあったら寝覚めが悪くなるからね。」

それに彼、色々と誤解されてるみたいだけど、噂で聞く程悪い人じゃなかったし。

身の回りに気を付ける様に忠告する程度なら別にタダだから、かな」

「成る程。」

「一応納得しました」

あ、一応なんだ。とは感じたが何も言わなかった。

「あつ、訊かれた序でにこっちも訊いて良いかな？」

彼(?)が構いませんよ、と頷いたのを見て、巽くんの事について質問する。

「巽くんの事なんだけど、何か今家に居ないみたいで、彼のお母さんが心配しているんだよね。」

で、昨日巽くんは君と会っていたみたいだし、その時に何か彼の様子で気にかかる事とか無かった？」

「おかしなところ、とか」

「こちらの言葉に、彼(?)は少し考え込んだ。」

「気にかかる所、ですか……。」

そうですね……最近の事を聞いたら、何か様子が変でした。

だから、感じたままに伝えました。

”変な人”だね……と。

随分顔色を変えてましたよ。

こちらがビツクリする位でした」

『変な人』……?』

それが何か異くんの琴線に触れてしまったのだろうか？

「それを踏まえると、普段の振る舞いも少し不自然だったような気がしましたね。

なにかコンプレックスでも抱えてるのかも……。

確証はありませんけど」

『コンプレックス』……『変な人』……。

成程、今まで調べていても出てこなかった情報だ。

これが異くんの居場所を特定する為の手懸かりになる可能性は高い。

思わぬ出会いに助けられた感じだ。

これは厚く礼を言わねばならない。

「そっか……うん、ありがとうございます。」

色々と助かったよ、本当にありがとうね」

こういう事で礼を言われるのはあまり慣れていないのか、彼(?)は少し戸惑っている。

「いえ、お役に立てたのなら幸いです……」

「君の調べもの、上手くいくと良いね。」

色々と大変なのかもしれないけど、頑張ってる」

そう言うと、益々驚いた様に彼(?)は目を丸くした。

……そんなに変な事を言っただろうか？

何処に住んでいるのかは知らないが、この辺りに住んでいる訳では無さそうな彼(?)が調べものの為に態々連日稲羽を動き回っている時点で、既に相当な労力はかかっているだろう。

同学年か一つ二つ下あたりだろうから、学校だってあるだろうし。何を調べているのかは知らないが、ご苦労様と労う程度、別におかしな事でも無いだろう。

「あつ、その。」

ありがとうございます」

少し頬を赤くしてそう返す彼(?)を微笑ましく見ていると、まだ彼(?)の名前を訊いていない事に思い至った。

もう話す機会は無いかもかもしれないが、これも何かの縁と言うヤツだ。

名を訊く位なら良いだろう。

「そう言えば、まだ名前言ってなかったね。

もう知っているかも知れないけど、私は鳴上悠希。

君の名前は？」

「……白鐘、直斗です」

「じゃあね、白鐘くん。

今日は色々ありがとう」

もしかしたら白鐘さんなのかもしれないが、彼(?)は訂正しなかった。

男装しているだけの女性かと思っていたが、体格にあまり恵まれなかっただけの男性なのかもしれない。

それを態々訊ねてみようと思われないが。

手を振って別れ、買い物を終えて再び入り口に戻って来た時には白鐘くんの姿は見えなかった。

帰ったのだろう。

……何と無く、その内また白鐘くんと会える様な気がした。



……

……

……

ペルソナの調整を行おうと、ベルベットルームを訪れると……。

……? マリーの姿が見えない。

また何処かにおつかいに行っているのだろうか……。
……？ 床に何やら便箋が落ちている。
この前、マリーが落としていたモノと同じ柄のモノだ。
……また、落としてしまったのか。
……仕方ない。
拾い上げた時、偶然紙面に書かれた文面が目に入ってしまった
……。

『うたかた』

ねえ、聞いて

アタシの声を

叫んでいるこの声を……

アタシはここに

血を声に替えて

世界の果てで叫んでいる……

アタシは人魚姫

もう帰れない人魚姫

泡へと還る人魚姫』

リトルマーメイド

……ここ、これは……。

ポエム……、なのだろうか。

何とも独創的な……。何と言うのか……。

顔を覆ってその場から逃げ出したくなる感じのポエムだ……。

……。

「うぎやあああああつっつ!!」

何とも言えない感覚に固まっていると、マリーが奇声を発しながら
駆け込んできて、手にしていた便箋を引ったくった。

「よ、読んだっ!？」

読んだでしよっ!!

ちっ、……違うの!!

これは、その……。

そう、詩とかじゃない！

その、勝手に言葉が溢れてくるだけ……で……！！

詩って書いて『うた』とか読まないって、世界の果てで叫んでるの！

……！！

ばかきらいさいてーしんじらんないっ、勝手に読まないで！！」

顔を真っ赤にして、マリーは慌てて便箋を鞆へとしまう。

「てゆーか……何で落ちているんだろ……。

ワケ分らないよ……。」

ブツブツと言うマリーを、マーガレットさんが興味深そうに見ている……。

気を取り直して本来の目的であるペルソナの調整を行い、ベルベツトルームを後にした。

……

……

……

……

▲▼▲▼▲▼

辛味を少し抑え目に作った麻婆豆腐は、菜々子ちゃんにはとても好評だった。

叔父さんは今日も遅いらしく、まだ帰ってきていない。

……明日は巽くんの救出に向かうつもりだ。

巽くんが何を思っただの『シャドウ』と、大型浴場施設の様な場所を生み出したのかは、分からない。

お裁縫が得意、お母さん思い、……それらの要素がアレらに繋がる

様には思えない。

なら、『変な人』、『コンプレックス』……この辺りがアレの元なのだろうか。

しかし……どんなコンプレックスを抱えていればあの『シャドウ』に行き着くのだろう。

それに何故、大型浴場施設なのだ？

………考えても、少なくとも今は分からない。

今は明日の戦いに備えて準備するしかないだろう。

……見るからに暑苦しそうな場所だったので、脱水症状にも気を付けないでならない可能性が高い。

薄着で行った方が良いかもしれない。

天城さんの時は10フロア近く踏破しなければ天城さんの所まで辿り着けなかった事を考えると、今度の巽くんもそれ位かそれ以上の深部にいる可能性が高い。

それ位の階層を一度に踏破する為には綿密な準備が必要だ。

武器、も勿論必要だが、今回はそれ以外は殆ど手ぶらだった為、途中で少し喉が渴いたりもしたので、今回はその反省を活かして、ある程度の食料や飲み物を持ち込んだ方が良いかもしれない。

巽くん救出の計画を練っていると、菜々子ちゃんが何かを訊ねたそうにそわそわとこちらを見ていた。

「どうしたの？」

「うん……あのね、お姉ちゃん……」

……どうして人は、いなくなっちゃうの？」

居なくなる……か……」

交通事故で急逝したというお母さんを想ったの問い掛けなのだろうか。

……まだ幼い菜々子ちゃんには、難しい問題ではあるけれど……」

それでも、聞かれた以上は誠実に答える必要がある。

生死について理解するというのは、大切な事だから、尚更。

菜々子ちゃんの向かいに座り、その年頃の子供にも分かりやすい例え話を用いたりして、命について語った。

どうやら難しい話ではあるが理解出来た様で、疑問が解決した菜々子ちゃんは少し笑った。

他に訪ねたい事は無いのか訊いてみると、人の死後はどうなるのかと質問される。

……実際に死んだ者がどうなるのかは、まだ分からない。

宗教観によつてそれはマチマチだ。

だが、実際にお母さんを亡くしている菜々子ちゃんへの説明としては『天国』を使うのが良いだろう。

「……『天国』に行くみたいだね。」

きつと、お空の上から菜々子ちゃんを見守ってるんだよ」

「やっぱりそうなんだ。」

お母さんも『天国』にいるんだよね」

『天国』とか『極楽浄土』とやらが本当にあるのか、あるいは輪廻転生が存在するのか、それは分からない。

ただ、菜々子ちゃんのお母さんが菜々子ちゃんを愛していた証、それは菜々子ちゃんの中にある沢山のお母さんとの思い出という形で遺されていると、そう思っている。

「あのね、さつきニュースで『ゆうびんきょく』に『ごとう』って、やってた。」

ねえ、お姉ちゃん。

どうしてわるい人は、わるいことをするのか？」

「……どうしてだろうね……」

質問を変えて訊ねてきた菜々子ちゃんに、曖昧に返す。

犯罪を犯す理由は本当に様々だ。

しようもない理由で犯す人も居れば、やむにやまれず犯す人だっている。

世の中には、到底理解出来ない様な理由で行動する様な人だっている。

犯罪の理由なんて、まさに十人十色だ。

これだからこう、と明確な答えを出す事は出来ない。

「そっか……お姉ちゃんはわるい人じゃないから、分からないもんね

……。

「……でも、わるい人がいないと、お父さん、もつとはやく帰ってくるよね……。」

去年はジケンもあんまりなくって、お父さんおうちにいたよ……。ほいくえんも、むかえにきてくれたし……。」

俯いて言葉を溢す菜々子ちゃん顔には、寂しさが映っていた。

「……お父さんは、菜々子よりわるい人のほうが大事なの？」

だから、帰ってこないの……？」

泣きそうな顔で訊ねてくる菜々子ちゃんに、違うよ、と首を横に振った。

「……叔父さんはね、菜々子ちゃんの事が大切なんだよ。」

だから、そんな大切な菜々子ちゃんが、悪い人たちに酷い事をされない様に頑張っているんだ」

……叔父さんは不器用な人だから、自分がどれ位菜々子ちゃんの事を想っているのか、伝えられていない。

それは本人も自覚している様で、それでは駄目だと分かっているみたいだけれど、仕事を言い訳にしてついつい逃げている。

お互い大切に思いあっている筈なのに、叔父さんが見ている方向が違う所為で噛み合っていない。

……本当に、儘ならない話だ。

「……そうなのかな……。」

寂しそうな顔をして俯く菜々子ちゃんをそっと抱き締めた。

そして、よしよし、と優しく頭を撫でる。

菜々子ちゃんが、本当に傍に居て欲しい人は、今此処には居ない。

自分は菜々子ちゃんのお母さんではないから、これ位が精一杯だが、せめて、菜々子ちゃんが一人の寂しさに悲しまない様にはしてあげたい。

菜々子ちゃんの気持ちが持ち直す迄、ずっとそうしていた。



【2011／05／19】



【2011／05／19】

放課後、一度解散して各自準備をしてから再びジュネスへと集合する。

準備が整っている事を確認してから、あちらの世界へと飛び込んだ。



.....

.....

.....

.....

クマに巽夫人から貸して貰った編みぐるみを渡し、巽くんについて調べてきた情報を教える。

「このお人形さんを作った人で、お母さん思いで、お裁縫が得意、変な人、それにコンプレックスクマね。

.....

ムムムツ、これクマね!!

センセイ、見付けたクマよ!!」

そう言ったクマに導かれて辿り着いたのは、まるで大浴場の様な場所の入り口だった。

大きく『男子専用』と書かれた布が、入り口の横に掛けられている。

.....酷く蒸し暑い。

この暑さなら薄着で正解だ。

何時もの様な服装だと、早々にバテていただろう。

困った事にメガネが漂う湯気で曇ってしまふ。
曇り止めでも塗ってくるべきだったのかもしれない。

クマに持ってきた荷物を渡して先に進もうとしていると突然、何処からともなく怪し気な音楽が流れてきた。

——僕の可愛い仔猫ちゃん……。

その音楽に混じって、巽くんのものでは無いダンディな男の声が聞こえる。

……何故だろう、背筋がゾワツとした。

——ああ、なんて逞しい筋肉なんだ……。

先程の声とは違う、今度は少し優男風の声だ。

しかもやはり声付きで……。

これもやはり巽くんのものでは無い。

何と無くこの先の展開を予想して、思わず頬が引き攣る。

——怖がる事は無いんだよ……。

「えっ……えっ……？」

事態を把握仕切れない里中さんは混乱した様に声を上げている。
気持ちは分かる。

——さあ、力を抜いて……。

そして、そこで音楽もやり取りも途切れた。

………意味深過ぎるやり取りの後の、耳の痛くなる程の沈黙に、察してしまった花村の顔面は蒼白に近い。

この中で、色んな意味で直接的な害を被る可能性が高いのは、男性

である花村だ。

最早、この先は花村にとっての死地にも等しい。行きたくない行きたくない行きたくない行きたくない行きたくない行きたくない——

花村の顔には、そう思いつきり書かれている。

気持ちは痛い程分かる。

自分とて、もし男性だったのなら、この先に進むのはどうしたって躊躇する。

そういう性的嗜好の持ち主でも無い限り、この先に好き好んで行く男性は居まい。

世の中には、そういう性的嗜好の持ち主たちの交流を見るのを好む人が居ると聞くが、少なくともこの場に居る誰もがその様な嗜好は持ち合わせていない。

本当にここに異くんが居るのか、と天城さんが訊ねると、クマは胸を張って、確かだと答えた。

………出来ればこの先には行きたくない。

が、しかし。

まだ入り口だというのに佇むだけでも軽く汗ばんでくるこの熱気を考えると、『シャドウ』云々の前に異くんが脱水症状で死にかねない。

……一昨日から此処に居るのだと考えると、あまり猶予があると考える訳にはいかないだろう。

何としても早急に異くんをここから救出する必要がある。

花村にもそれは分かっているが、色々な意味での身の危険に、どうしても躊躇してしまっている様だ。

「花村」

冷や汗をかく花村の手を、両手で優しく包んだ。

「花村の身は、私が守る。」

絶対に、花村が危惧している意味での危害は加えさせない。

だから、私を信じて一緒に戦ってくれないか」

真っ直ぐ花村の目を見てそう言うと、花村の身体の微かな震えは止

まった。

「そこまで言われて、無理だなんて言う訳ねーだろ。」

俺だつて、早いところ完二のヤツを助け出してやりたいとは思っているんだし。

勿論、行くさ」

「すまないな、……ありがとう」

入り口を潜りロッカールームの様な場所を抜け、奥に続く扉を開けると、そこは大浴場と言うよりもサウナの様な場所だった。

それが延々と広がっている。

檜の良い匂いもするのだが、こうも暑苦しいとそれすらも辛い。

執拗に『男子専用』と書かれた垂れ幕が掛けられていて、何とも言えない感じを漂わせている。

「センセイ、シャドウクマー！」

突入して直ぐに、見上げる程大きな太った警官の様な姿をしたシャドウが立ち塞がった。

腹が空洞になっているのが、何とも言えない。

数は三体。

一体は花村に、一体は里中さんと天城さんに、そして一体を引き受ける。

シャドウが手にしていた巨大な手錠を振りかぶって殴り付けて来たのを、横に大きく飛んで回避する。

「シャドウは『収賄のファズ』、アルカナは《法王》クマー！」

弱点が分からないから、そのまま物理攻撃で攻める事にした。

床に叩き付けられた手錠をイザナギが床に縫い留めてシャドウの動きを抑制し、ピンツと延びきったその手錠の鎖の上を駆け上がり、そのまま顔の部分に張り付いている仮面に、居合刀を突き刺す。

そしてそれを全体重をかけながら、重力に引かれる力も合わせて下に向けて叩き下ろした。

仮面の下半分を切り裂かれたシャドウはその勢いで倒れ、そのまま塵の様に消滅する。

他の二体も難なく倒せた様だ。

コノハナサクヤの焰が良く効いていた所を見るに、このシャドウは炎に弱いらしい。

覚えておこう。

「はわー、センセイたち強いクマねー……」

天城さんのお城に蔓延っていたシャドウよりは強いが、それでも、天城さん達の『シャドウ』に比べれば雑魚とも言える強さだ。

次に遭遇した『自律のバザルド』という岩の塊の様なシャドウは、面倒な事に妙に物理的な攻撃に強く、叩こうが蹴り飛ばそうが全くと言っていい程堪えた様子は無かったが、魔法攻撃には非常に弱く、そこを突けばあつという間に殲滅する事が出来た。

他にも、魚の様なシャドウ、人の手首から先がそのまま形になった様なシャドウ、レスラーの様なシャドウ、等々様々なシャドウとも遭遇したが、それらも蹴散らすとまではいかないが、そう手間取る事もなく倒して行き、そのままの勢いで一気に二つの階層を踏破する。

三層目に辿り着いた時、湯煙の向こうに、誰かの後ろ姿を見付けた。

巽くん、だろうか。

「巽くん!!」

呼び掛けて振り返ったソイツは、巽くん……ではなく、禪一丁の巽くんの『シャドウ』だ。

思わず花村を背後に庇う。

『ウツホツホ、これはこれは。』

ご注目ありがとうございます！

さあ、ついに潜入しちやった、ボク完二。

あ・や・し・い・熱帯天国からお送りしていまあす』

クネクネと色々なポーピングを取りながら、バチコン、と花村の方へとウインクを送る。

ビクツと背後の花村が震えたのが分かった。

『まだ素敵な出会いはありません。』

このアツい霧の所為なんでしょうか？

汗から立ち上る湯気みたいで、ん〜、ムネがビンビンしちやいまあす』

巽くんの『シャドウ』はビンビンの所を強調しつつ、大胸筋をピクピクさせる。

……流石に、これはちよつとな……と少し引きながら居合刀の柄に手を添えた。

もし巽くんの『シャドウ』がシャドウを嗾けてきたり、襲い掛かってきたら、遠慮なく叩つ斬るつもりである。

『ソッフ、みんなも暑くなってきたところで……、このコーナー、行つちやうよ!』

そう巽くんの『シャドウ』が言うのと、

【女人禁制!突・入!?愛の汗だく熱帯天国!】

と言うテロップが背後の虚空に浮かんだ。

もう、何でもアリ何だなこの世界……………。

それより不思議なのは、この時間帯に《マヨナカテレビ》は映らないのだから、一体誰に向けて『シャドウ』はコレを発信しているつもりなのだろう。

それは天城さんの時もそう思ったが。

「ヤベえ……………これはヤベえよ……………」

色んな意味で……………!!」

既にギリギリな花村の声は震えている。

確かに、コレは色んな意味でヤバイ。

どこからともなく大きなざわめきが聴こえてきた。

どうやら、巽くんの『シャドウ』に呼応してか、シャドウが騒いでいるらしい。

『ボクが本当に求めるモノ……………見つかるんでしょうか、んふっ』

妙に媚びた笑みを浮かべる巽くんの『シャドウ』はそう告げる。

巽くんの『シャドウ』が本当に求めているモノ……………。

それは『シャドウ』が紛れもなく本人の一側面であると言う事を考えると、巽くん自身が求めているモノだ。

天城さんの時がそうであった様に、『シャドウ』の言葉を額面通りに

受け止めていては、巽くんが本当に求めているモノが何かは分からないだろう。

しかし、『シャドウ』の言葉はそれを解く為の一助にはなる。

『それでは、更なる愛の高みを目指して、もつと奥まで、突・入！』

——張り切って……行くぜ、コリアアア！』

『突・入』の部分で腰を前後に振り、くるりと後ろを向いたかと思えば、素の勇ましい声を張り上げながら拳を握って、奥へと駆け去ってしまった。

……追わなくてはならない、とは思うが、あまり心情的には追い掛けたくない相手ではある……。

……しかし、巽くんが求めているモノとは一体何なのだろう。

彼が抱えているコンプレックスと、何か関わりがあるのだろうか……。



——お……男には……男には、プライドってもんがあるんだよ……。へへっ、俺はぜってえ負けねえぞ……。

五層目に足を踏み入れた時、巽くんの弱々しい声が無処からともなく聞こえた。

……これは、天城さんの時の様に、巽くんの心の声なのか……？

……あまりぐずぐずしている暇は無い。

早く、助けに行かないと……。

そう思いながら六層目を突っ走っている時、ふと何処からともなく巽くんの『シャドウ』の声が降ってきた。

『ハイ！』

そこのナイスなボーイ！

キミもボクと同じく更なる高みを目指しているのかい？』

何処の高みだ、と内心突っ込む。

此処へはあくまでも巽くん救出の為に来ているのであって、断じて愛の高みとやらを目指す為では無い。

『ヒューー… ボクを求めてるって？』

そうなのかい？

嬉しいこと言ってくれるじゃない！』

求めてねーよ、と花村が突っ込みを入れるが、此方の声は聴こえていないのか、それとも聞こえていても無視しているのかは分からないが、兎も角、巽くんの『シャドウ』はその声には反応しない。

『それじゃあ、とびっきりのモノを用意しなきゃ！』

次に会うのが、とても楽しみだ！

じゃあ、またね！』

しなくて良い…、と内心ゲンナリする。

次に会うのが、全く楽しみでは無い。

絶対にロクでも無い何かが待っている。

皆もそう思ったのか、声を聞いた全員が浮かない顔をしていた。



巽くんの『シャドウ』に会わない事を祈りながらやって来た七層目……。

異常に暑苦しい空気が漂っている。

先程迄の階層とは比べ物にならない程の熱気だ。

これは一体……？

特に熱気を感じる扉を、意を決して開けると。

『ようこそ、男の世界へ！』

思わず扉を閉めたくなったのは、多分悪くない。

そこに待ち構えていたのは、巽くんの『シャドウ』と、その横に控える巽くんの『シャドウ』の身長の数倍はあろうかと思われる巨大な

レスラーの様な姿をしたシャドウだ。

レスラーシャドウは、形こそ今までの階層で戦った『闘魂のギガス』と言うシャドウと同じモノだが、そのサイズは桁違いである。

そんなシャドウの足下で巽くんの『シャドウ』は実況を続けた。

『突然のナイスボーイの参入で、会場もヒートアップ！』

ナイスカミングなボーイとの出会いを祝し、今宵は特別なステージを用意しました！』

「お……おい、まさか……」

花村の声が震えた。

どう考えても嫌な予感しかしない。

『時間無制限一本勝負！』

果たして最後に立ってるのはどちらだ？

さあ、熱き血潮をぶちまけておくれ！』

巽くんの『シャドウ』がそう告げるのと同時に、レスラーのシャドウが此方に襲い掛かって来た。

力を溜め込んだ凶悪な拳が花村を襲う。

「させるかッ!!」

ペルソナを呼び出す暇すら無く、咄嗟に花村を突き飛ばす様にしてその位置を入れ換え、居合刀の鞘でその一撃を受け止めた。

凄まじい衝撃に身体が吹き飛ばされ、居合刀を取り落としてしまう。

「鳴上ッ！」

「コイツの狙いは、花村……お前だ……!!」

私に構わず、避ける事に専念しろっ……!」

その声に反応して花村が飛び退いた場所を、シャドウの巨大な手が空を切った。

どうやら、花村を捕まえる算段らしい。

避けられてからも執拗に花村に狙いを定めて、シャドウはその拳を振り回す。

「ッ……」

ペルソナの召喚こそ間に合わなかったが、幸い今現在降魔している

のは物理攻撃に耐性を持つペルソナ——『オニ』だった。

派手に吹き飛ばされこそしたが、そう大きなダメージは受けていない。

《剛毅》の絆をくれた一条と長瀬に心の中で礼を言いながら、取り落とした居合刀を拾って立ち上がる。

このシャドウは大分強化され、自己強化能力も持つてはいるものの、『闘魂のギガス』ではあるらしい。

ならば、コイツの攻撃手段はそのレスラー様見た目と変わらず、物理攻撃のみだ。

なら……!!

「ジャックランタン!!」

ペルソナをオニから、《魔術師》のアルカナの『ジャックランタン』に変えて呼び出す。

カボチャ頭に大きな帽子を被って、ランタンを持った見た目は可愛いペルソナだが、その外見からは想像も出来ない程強い力を持っている。

グンツとシャドウが《タルカジャ》——自身の攻撃力を引き上げるスキルで、その力を引き上げた。

それを見た花村がすかさず《デカジャ》——敵の能力強化を打ち消すスキルをかける。

それに追い討ちをかける様にジャックランタンが《タルンダ》——敵の攻撃力を下げるスキルを使い、更に重ねて《ラクンダ》——敵の防御力を下げるスキルも使う。

そんな状態のシャドウが放った一撃は、正面からそれを迎え撃つたトモエの、《タルカジャ》で強化された《アサルトダイブ》に押し負けた。

しかし下がっていても高い防御力に阻まれ、あまりダメージは通っていない。

それでも体勢を崩したシャドウに、追い討ちの様にコノハナサクヤが《アギラオ》をぶつける。

骨まで炭化しそうな轟々と燃え盛る炎にシャドウが包まれるが、

シャドウはそれにも耐えきった。

しかしそのダメージはそこそこ大きかったらしく、プスプスと全身から煙が上がっている。

しかし、本当に堅いシャドウだ。

《ラクンダ》の効果は永続する訳でもないから、断続的にかけ続けな
いとロクなダメージにはならないだろう。

だが、それならそれでも攻め様はある。

「オセー！」

再びペルソナを切り替え、今度は《愚者》アルカナの『オセ』を呼び出す。

両手に二刀を持った人型の豹の姿をしたペルソナだ。

見た目に違わず素早いオセは、果敢にシャドウに斬りかかり、反撃される前にその表面に幾つもの裂傷を刻んでいく。

それでも、それらは決定打にはならない。

だが、それで良い。

シャドウから反撃を食らいそうになったタイミングで、トモエの《アサルトドライブ》がその拳の軌道をずらした。

そこを更にジライヤとコノハナサクヤの魔法を重ね合わせた、業火を巻き込んだ竜巻がシャドウを襲う。

その隙にオセを下がらせて、イザナギへと切り換える。

火炎旋風を耐えきったシャドウだったが、突如その巨体をぐらつかせ、終には膝をついた。

再び立ち上がる程の体力はもう残っていない様だ。

「……効いたみたいだな」

頑丈極まりないシャドウの体力を奪ったモノ。

それは、毒、だ。

オセがシャドウを切り刻んだ際に、毒の霧も発生させていたのだ。オセの毒の効力を引き上げるスキルも手伝って、強力極まりないモノと化した毒は、堅い防御力をもモノともせずにシャドウを侵し、その体力を根刮ぎ奪っていった。

「これで、止めだ」

イザナギが、雷撃を纏わせた刃をシャドウの仮面に叩き付ける。仮面が砕けると同時に、シャドウは黒い塵へと還っていった。

「センセイ、お見事クマ！」

この辺りにシャドウの気配はもう無いクマよ」

どうやらこの階層にはあのシャドウしか居なかったらしい。

一先ず、今は安全だと言う事だ。

この辺り一帯が異様に暑苦しい事も相俟って、先程の戦闘は常以上に体力と気力を削っていた。

特に、執拗にシャドウの標的にされていた花村の疲労はかなりのモノだろう。

既に汗だくである。

ここは一旦休憩を挟むべきだ。

「この辺りは今は安全みたいだし、ここは一旦休憩を挟もう」

そう言って、クマに預けていた保冷バッグを受け取り、中身をみんなに渡す。

「鳴上、これって……」

「スポーツドリンク。」

一応、冷えてるし、ちゃんと調整してるヤツだから、飲みやすいと思うよ」

運動中に失った水分とか電解質とかを補給するのには最適なスポドリだが、市販のペットボトルのモノだと甘味が強すぎたりして、激しい運動をした後にはあまり向かない。

その辺りを考慮した、スペシャルブレンドのモノを用意した。

要は、運動部とかでマネージャーさんが作ってるスポドリの様な感じである。

「うわー、生き返るわー……」

「うん飲みやすいよ、コレ」

里中さんは早速ボトルを半分程空けている。

天城さんもゴクゴクと飲んでる様だ。

「ホント助かるけどさ、随分と用意が良いな」

「『マヨナカテレビ』を見た感じだと、相当暑そうな場所だったから、汗をかかなりかくなつて思つて……。」

流石に、こんなサウナみたいな場所とは思つてなかつたけど、まあ準備してて良かったよ」

やはり喉が潤うと気力も体力も回復していく気がする。

スポドリと一緒に持ち込んだちよつとした食べ物も分けあつて英気を養つた。



——違う……。俺が成りたかつた男つてのは、……そんなんじやねえ……。

更に階層を進んで行くと、巽くんの声が急速に弱々しくそして苦悩に満ちたものになつていく。

……巽くんは、『男らしさ』について悩んでいたのだろうか。

しかし、彼が望んだ『男らしさ』と現実とが合っていない……？
……考えろ。

巽くんを助ける為には、巽くんの『シャドウ』を……巽くんが抑圧していたモノを理解しなくてはならないだろう。

『シャドウ』の奇抜さに目を奪われて、大切なその本質を、見逃してしまつているからこそ。

考える為のヒントはもう、既に手にしている筈だ。

『シャドウ』の言葉、この場所そのもの、そしてコンプレックス、『男らしさ』。

……先ず目に付くのは、この場所の至る所ろに執拗に掲げられた『男子専用』の文字。

それに、テロップにも出てきた『女人禁制』の文字……。
字面通りに捉えるなら、それは『男だけ』『女は来るな』と言う意思の現れだ。

……男は良くて、女は要らない……？

……どういう事だ？

女性に対して、何かトラウマでもあるのか……？

それと『男らしさ』……？

それがコンプレックスに繋がっているのか……？

そして、巽くんが欲している『何か』にも？

お裁縫が好きだったと言う巽くん。

彼が作成したとても可愛らしい編みぐるみを見るに、今だって好きなのだろうとは察する事が出来る。

だが、今の周囲からの評価や噂からはそう感じられる部分はない。

寧ろ、手が早い部分ばかりが独り歩きしていて、いつの間にか手の付けられない不良の様な扱いになっている。

ならば、実際の自分と、周囲からの評価の溝に苦しんでいるのか……？

……いや、それにしても巽くんの行動は説明が付かない。

学校をサボりまくったり、夜中に出歩いたり。

まるで噂の方を助長させる様な行動だ。

流石に、そんな事をすれば不良扱いが酷くなる一方なのだとも分からない程愚かではないだろう。

巽くんの趣味はご近所の人だつて知らないみたいだし、それを知っているのは母親とかの極めて近い人間だけなのかもしれない。

つまりは相当ひた隠しにしている、とも判断出来る。

それらの情報と、『男らしさ』への拘りを加味すると、巽くんは自分の趣味とかを『男らしくない』と考えているのだろうか……？

だから、敢えて自分を不良に見せ掛けている？

でも『不良』という路線も巽くんの求めていた『男らしさ』には合っていないかった、だから苦しんでいる……？

………。……分らない。

じゃあ何故こんな場所を作り出会いを求めているのか、何故頑なに『男だけ』に拘るのか、その説明が付かない。

ただ、彼の苦しみが深く強い事だけは伝わってくる。

……急がなくてはならない。

◇◇◇◇◇

十一層目に足を踏み入ると、『おいでませ、熱帯天国』とデカデカと書かれた、桧作りの大扉が待ち構えていた。

どうやら、この先に巽くんが居る様だ。

全員の覚悟が決まっている事を確認してから扉を開け放つと、既に巽くと『シャドウ』が対面しているところだった。

『シャドウ』はまだ暴走してはいない様だが、それも時間の問題だろう。

正直、自分ならあの『シャドウ』に詰め寄られて「ボクは君」なんて言われても、『シャドウ』を否定してはいけないという事情を知らないなら、確実に「違う」と言ってしまうだろう。

『もうやめようよ、嘘つくの。』

人を騙すのも、自分を騙すのも、嫌いだろ？

やりたい事をやりたいって言って、何が悪い？』

絶句する巽くんは、シャドウはニヤニヤと笑いながら近寄った。

『ボクはキミの“やりたい事”だよ』

「違うっ！」

そう吼えた巽くんを止めようと声を上げる。

「巽くん！ 駄目だ!!」

そいつの言葉を否定しちや駄目なんだ!!」

「アンタたしか、この前の……」

『あー、もう……、煩いよ。』

大体何で此処に女が居るのさ。

ここは男だけの場所だよ？

これだから女は嫌なんだ……。

勝手にこっちの領域を侵しに来てさ。

女のくせに、ボクの邪魔しないでよね』

そう言つて『シャドウ』が此方を睨むと、傍らにあつた大きな湯船の様な何かから、透明の液体が溢れて床を濡らす。

お湯では無い様だけど……、これは一体……？

「完二くんっ!!」

巽くんに駆け寄ろうと、里中さんが足を踏み出し、その液体の中に足を踏み入れると、途端に足を滑らせてすつ転んだ。

更に、転びそうになった里中さんを支えようと腕を伸ばした天城さんまで巻き込まれている。

………：………：どうやら、この液体は何かのオイルの様なモノで、摩擦抵抗を軽減する作用があるらしい。

立ち上がろうとする里中さんと天城さんが再び滑って転ぶ。

オイルで転ばない様に一度膝をついて、それから二人を支え起こした。

しかし、このオイルの海をどうかしない事には、巽くんの所まで行けない。

オイルの前でもたもたしている内に、『シャドウ』はどんどんと巽くんととの距離を詰めて行く。

『女は嫌いだ……。』

偉そうで、我儘で、怒れば泣く、陰口は言う、チクる、試す、化ける……。

裁縫したり絵を描いてるボクを見てさ、気持ち悪いモノを見る見たいに『変人』、『変人』ってバカにして……。

で、笑いながらこう言うんだ。

”裁縫好きなんて、気持ち悪い”。

”絵を描くなんて、似合わない”』

陰鬱な狂気を帯びた声に気圧され、誰もが動けなかった。

嫌悪を滲ませた妖しく黄金に輝く目に射抜かれ、巽くんは立ち竦

む。

そこでシャドウは言葉を切つて天を仰いだ。

そして、巽くんの肩を掴み、顔を寄せて呪詛の様な言葉を吐き出す。

『男のくせに”……、”男のくせに”……、”男のくせに”……!!』
血を吐く様な声で執拗に繰り返される言葉は、きつと巽くんが言われてきた言葉だ。

そして、巽くんの心に棘の様に突き刺さっているモノ。

まるで、悲鳴の様な感じられるそれを聞き、……漸く理解出来た。

何故『女人禁制』なのか、を。

巽くんが人前で絵を描いたり裁縫をしたりしなくなり、不良と呼ばれる様になり始めたらしい時期を考えると、その心無い言葉を掛けられていたのは小学生辺りの年頃の事だろう。

その年頃の子供は、悪意なんて無かったのだとしても、いつぞ残酷な位の言葉を口に出す事が容赦なく出来る。

他者の気持ちを推し量る、と言う能力がまだ未熟であるが故に。

尤も、大人であつてもそういう思い遣りを持ってない人間は少なくはないが。

お裁縫もお絵描きも、確かにその年頃の男の子が好んでやるモノとしてはマイノリティーの部類に入る。

幼い頃の巽くんが、女の子から見た『男の子』という集団の、謂わば“外れ値”に見えたが故に、“男のくせに”と言う心無い言葉を打付けたのだろう。

そう言われた巽くんが、どう感じるのか迄は斟酌しないままに。

実際問題、そんな言葉を投げ掛けてきた女の子たちに「じゃあ男らしいって何」と問い返しても、答えられない可能性の方が高い。

男らしさも、女らしさも、そんなモノは『コレ』だと明文化出来て万人に当て嵌められる様なモノでも無い。

本人がその人自身の中でソレを定めるのは勝手だが、それは他者に押し付けられる様なモノでも無いからだ。

しかし、その言葉が巽くんの心の深い場所を傷付けてしまったが故に、『男らしさ』に強くに拘る様になったのだろう。

『じゃあ、男ってなんだ？』

男らしいってなんなんだよ？

女は、怖いよなあ……』

「怖く、なんか……」

そう答える巽くんの声は震えている。

そうと自覚しているかは分からないが、それはもうトラウマになってしまっているのだろう。

『女』と言う存在に忌避感に近いモノを抱いてしまっている程に。

そう、だからこそ。

『……そうだ、男がいい……』

……男のクセについて、言わないしき。

……だから、男がいいんだ……』

『男』だけ、と思ってしまったのだ。

巽くんの心が生み出した迷宮の至る所に、『男子専用』と執拗に書かれていたのは、巽くんの心の悲鳴だったのだ。

巽くんを心無い言葉で傷付ける『女』の居ない、そんな場所を望んでしまう程、その傷は深かったのだろう。

「違……う……！」

『違わないよ。』

キミはボク、ボクはキミだよ……』

「——っ！ ザっ……けんな！」

テメエ、人と同じ顔してやがって……！！」

「巽くん、駄目だ！ 言うなっ！！」

声を荒げ、巽くんを止めるが、余裕が無くてそれどころでは無い巽くんには聴こえない。

そして、巽くんは自分自身を切り裂く言葉を口にする——

「オレはテメエとは違うっ！」

テメエみてえのが……オレなもんかよっ！！」

『ふふふ……ふふふ……』

巽くんに否定されると同時に『シャドウ』は笑いながら闇に包まれ、巽くんは脱力した様にその場に倒れ込む。

『ボクはキミ、キミキアアツ!!』

闇が切り払われた其処には……。

正中線で右半身を黒に左半身を白に塗り分けられ、首から胸がある位置に薔薇の花が咲き乱れ更に其処から『シャドウ』の上半身が生えた、禪を身に纏った、七層目で闘った『闘魂のギガス』よりも遥かに巨躯の筋骨隆々の偉丈夫が現れた。

そしてその左右から、これまた正中線で黒白に塗り分けられた厳ついボディービルダーの様な巨人が現れる。

『シャドウ』の上半身が付いている方が本体であるらしく、他の二体はその一部であるらしい。

『シャドウ』は巨大なマークそのままの形をした武器を左右の手に各々構える。

『我は影…真なる我……』

ボクはジブんに正直なんだよ……。

だからさ……、邪魔なモンには消えてもらうよ!!』

そう吼えて、『シャドウ』はその武器を床に倒れ伏した巽くんに向けて叩き付けようと振り被る。

「モスマンツ!!」

召喚された《隠者》のアルカナの『モスマン』は、一瞬で巽くんの前まで飛んで行き、その身を武器の前に投げ出した。

モスマンが巽くんを庇ったのとほぼ同時に『シャドウ』の武器が振り下ろされ、周囲を電撃が駆け巡る。

巽くんを庇うモスマンを襲った電撃は、そっくりそのまま『シャドウ』に跳ね返されその身を襲うが、『シャドウ』は一向に意に介さない。それどころか、気持ち良さ気な声すら上げる。

「どうやら、あの『シャドウ』は電撃を吸収する様だ。」

召喚可能なペルソナの中で最も素早かった為に咄嗟に召喚したモスマンだが、『シャドウ』の電撃を跳ね返して逆に回復させてしまう為、『シャドウ』を相手取るには切り換えた方が良さそうだ。

今は兎に角、倒れている巽くんを『シャドウ』から引き離さなくては、彼が的になってしまう。

天城さんがオイルを焼き払い、里中さんが火を氷で鎮火した床を蹴って、巽くんのもとへと駆け寄った。

襲い掛かってきたボディビルダーみたいな二体のシャドウは、里中さんと天城さんと花村が引き付けてくれている。

武器で殴り掛かってきた『シャドウ』は、オニを召喚して対抗した。オニの金棒と、『シャドウ』の武器が派手にぶつかって火花が散る中、ぐったりと床に倒れてしまっている巽くんを抱き起こす。

「酷く汗をかいている……………」

「早いところ水分と電解質を補給させないと不味い。」

「巽くん、しつかり！」

「意識はある?!」

「アンタ……………何でこんな所に……………」

「半ば朦朧としているのか、薄くしか目は開いていなかったが、それでも確りと此方を認識していた。」

「意識はあるみたいだね、その話は後で。」

「今はこの場を離れないと」

「鳴上つ、援護するぜ!!」

再び電撃を放とうとした『シャドウ』は、ジライヤが巻き起こした上から叩き付ける様に吹き付ける烈風によって踏鞴を踏む。

その隙に『シャドウ』から距離を取ったオニに、巽くんを抱えさせて、壁際まで退避しているクマの所まで運ばせた。

「鳴上さん、コイツ、物理全然効かない!!」

「こつちもー！ 炎の効きが悪い!!」

「そつちの二体、風があんま効かねえっぽい！」

「多分耐性持ちだ!!」

「ッ！ 厄介な耐性持ちか！

兎に角一旦相手を交換して攻撃して！！

何に耐性持つてるのか、調べないと！」

「分かった！！」

ペルソナをオニからイザナギへと切り換え、取り巻きのシャドウの方を攻撃する。

そして耐性を調べた結果……。

『タフガイ』という名称の方のシャドウは物理攻撃と火炎攻撃を吸収し、疾風攻撃にも耐性を持つ。

『ナイスガイ』という名称の方は氷結攻撃を吸収し、火炎攻撃と疾風攻撃に耐性を持つ。

二体の取り巻きに共通してダメージが通る電撃攻撃は、『シャドウ』が吸収してしまう、という事が分かった。

しかも、『ナイスガイ』と『シャドウ』はどちらも火炎攻撃と氷結攻撃への耐性を付与するスキルまで持っていた。

全く、トンでもない耐性の持ち方だ。

あまりの厄介さ加減に思わず呻く。

兎に角、何処か一点だけでも崩せればかなり楽にはなるのだが……。

『シャドウ』は直接前に出て戦うよりも、取り巻き二体に直接攻撃は任せ、強力な電撃攻撃を離れた所から打ってくる。

『ナイスガイ』の方は主に補助役を果たしているらしく、攻撃に回るよりも『シャドウ』や『タフガイ』の能力を強化させている事の方が多いみたいだ。

『タフガイ』はほぼ純粋にアタッカー役の様だが、物理攻撃を吸収されるのはやり辛い事この上ない。

『シャドウ』を直接狙うのは難しいので、先ずは取り巻き二体の内の『ナイスガイ』を潰す事にする。

兎に角、コイツに補助技を使わせない様にしなければならない。

「花村と里中さんは物理で『ナイスガイ』を！」

天城さんは二人の回復に専念して！

『タフガイ』と巽くんの『シャドウ』は私が食い止める!!」

「了解!」

直ぐ様ペルソナを《女教皇》のアルカナの『ガンガー』に切り換え、『ナイスガイ』を守ろうと前に出ようとした『タフガイ』を氷付けにする。

その隙に、『ナイスガイ』をトモエの《アサルトダイブ》とジライヤの《パワースラッシュ》が襲い掛かった。

スキルの反動で削られる体力は、空かさず天城さんが回復させてゆく。

トモエとジライヤが交互に攻撃を仕掛けてくるので、『ナイスガイ』は補助スキルや回復スキルを使う暇が無い。

『ボクはもう、自分を押し通すって決めたんだ!』

だから、邪魔するなア!!』

『シャドウ』が吼え、広範囲に雷撃が躍り狂う。

こちらを飲み込もうとしてくるそれを、ガンガーが作り出した分厚い氷壁で防ぐ。

一時的には言え、完全に『シャドウ』と、『ナイスガイ』・『タフガイ』を分断する事に成功した。

「今だ! 一気に決める!!」

ペルソナをガンガーからモスマンに切り換え、《マハジオンガ》で、『タフガイ』と『ナイスガイ』の二体を電撃で薙ぎ払う。

その一撃で既に花村と里中さんにかなり削られていた『ナイスガイ』は消滅、『タフガイ』も膝を付く。

そして《ジオンガ》の二撃目で、『タフガイ』も完全に消滅した。

「よし、残るは巽くんの『シャドウ』だけだ!!」

みんな、気を引き締めてかかろう!」

取り巻きは倒せたとは言え、寧ろこれからが本戦だ。

電撃属性にしか耐性が無い為、花村たちにとっては取り巻きのシャドウよりも相手しやすいモノかもしれないが、強烈な電撃の範囲攻撃には油断出来ない。

特に、電撃属性が弱点の花村は。

更に、その筋骨隆々の体軀から見て、物理攻撃も得意としている可能性が非常に高い。

厄介極まりない相手である。

『何だよ、邪魔するなよ！』

やりたい様にやって、何が悪いっての!?!』

取り巻きを倒された『シャドウ』は、手にした武器で氷壁を砕きながら襲い掛かってきた。

モスマンをイザナギに切り換えて、振り下ろされた武器をイザナギが手にした刀で受け流す様にして『シャドウ』からの攻撃を防ぐ。

「異くんがやりたい事はコレなのか!?!」

異くんが欲しいモノは、こんなモノなのか!?!」

暴れ回って、力尽くで押し通して。

それが本当に異くんが望んでいた事なのか?

異くんが望んでいるモノ、欲しているモノ。

それはきつと、異くんが周りの人間に隠している、裁縫などを好む一面を見ても、それを「変」だとか「男らしくない」などと拒絶しない相手、だ。

だが、それはこんな所で暴れ回っても手に入るモノでは無い。

「良いじゃないか、お裁縫が好きでも、お絵描きが好きでも!!」

誰に迷惑をかけるモノでも無いだろ!

何も、変なんかじゃないさ!!」

そう、変なんかでは無い。

誰かに迷惑をかける様な趣味でもないのに、誰に憚る必要がある?

男だから駄目?

それこそ馬鹿みたいな理由だ。

『ツ……い。そんなの、嘘だツ!』

お前だって「変」だって思ってたくせに!

「男らしくない」って思ってたくせに!!

そんなの、心の底では思っても無いくせに!

口先だけの出任せを言うなアツ!!』

急速に異くんの『シャドウ』が力を溜める。

これは不味い……!!

「全員、攻撃に備えて防御!!」

その指示に、みんなはペルソナで防御を固める。

素早くペルソナを《正義》のアルカナのヴァーチャーに切り換えて、間に合えと祈りながら花村に《蒼の壁》——電撃属性の攻撃に耐性を付与するスキルを使い、壁際のクマたちの元へ走った。

そして、ジライヤに電撃耐性が付いた次の瞬間。

部屋中を超高圧の電流が駆け巡る。

視界が真っ白に染まり、雷の轟音に耳鳴りが止まらない。

頭がグラグラして、気分が悪い。

それでも、何とかそれを耐えて、言葉を紡いだ。

「巽、くん。」

怪我、……は、無い？」

咄嗟に巽くんを守ったのだが、巽くんの方が体格が良い為、もしかしたら攻撃を食らってしまったのかもしれない。

クマはヴァーチャーが守ったから無傷だ。

幸い、ヴァーチャーは電撃属性を無効化する為、降魔及び召喚中はこっちにもその耐性は適用されている。

実際、攻撃の余波にやられているだけで、雷撃そのもののダメージは受けていない。

振り返って被害状況を確認すると、予め防御に徹していた事からみんな膝を付いてはいるものの、十分無事と言える。

ジライヤには電撃耐性を付与しておいたのも、功を奏したのだろう。

花村たちと視線が合った一瞬でお互い頷き合い、花村たちは『シャドウ』に攻撃を仕掛ける。

「オレは何ともねーけど……。アンタ……」

「そうか……。なら、良かった」

巽くんが無事である事を確認してホッとしたり。

ポケットを漁って、巽夫人から借り受けていた編みぐるみを取り出し、それを巽くんに渡す。

「……！　おい、アンタこれ……！」

「巽くんのお母さんに、借りたんだ。

君を探す手掛かりになる、から。

巽くんが手作りしたんだって、君のお母さんが言ってたよ……」

「……悪いかよ。」

男がこんなモン作ってちや……」

そっぽを向く巽くんは、フルフルと首を横に振った。

まさか、そんな事は全く思っていない。

「悪くなんか、ないよ。凄く、可愛い」

「かつ、可愛い……!？」

何故か巽くんは顔を赤らめる。

……？

そう言う事を言って貰うのに、慣れてないからだろうか……？

「凄く丁寧に作られているし、デザインも拘ってる。

小物とかも、凄い手が込んでるし……。」

本当に可愛い。

……巽くんが、こういうの本当に好きなんだって、とてもよく伝

わってくる。

こんなに凄いものを作れるんだから……。」

巽くん、胸を張りなよ」

巽くんを心無い言葉で傷付けた女の子たちには理解出来なかった

のかもしれないけれど、巽くんには本当に凄い技術がある。

巽くんの趣味が、誰も彼もに理解されないなんて、そんな事は無い

だろう。

世界は広いのだし、手芸を嗜む男性だってそこそこいるし、それを

生活の糧にしている男性だっている。

それに、作品の出来の良し悪しに作者の性別も見た目も関係なんて

無い。

こんなに凄いものを作れるのだ。

巽くんはそれを誇ったっていい。

「だから、あそこで苦しんでいる君を認めてあげてね」

「アンタ、アレが何なのか知ってんのか……？」

「アレは異くんがずっと心の奥に押し込めていた君自身の側面の一つ。」

君自身に否定されてしまったから、ああやって暴れている。

だから、受け入れてあげて欲しい。

自分自身を否定して傷付けるなんて、とても悲しいから」

受け入れてくれる人が欲しいと願う一面が、そう願った本人に拒絶されて否定されるなんて、悲し過ぎる話だ。

……尤も、奇抜過ぎる姿形で現れた『シャドウ』にも少し責任はあるけれど。

「異くんなら出来るよ。」

だって君は、誰かに拒絶されてしまう辛さを、よく知っている人なんだから」

ポンポンと、壁に凭れ掛かっている異くんの頭を軽く叩く様に撫でながら、花村たちに加勢するべく『シャドウ』へと突撃をかけた。

「ダウン！」

《太陽》のアルカナに属する『ダウン』が疾駆し、野生の虎そのものの猛猛さで『シャドウ』の右腕に食らい付き、そして噛み付いた腕をその身に纏う炎で焼いていく。

『このッ、邪魔だア！』

首根っこを掴まれたダウンが床に叩き付けられそうになる直前に、コノハナサクヤが作り出した業火がダウンごと『シャドウ』を呑み込んだ。

火炎を吸収するダウンはその業火により傷付いた部分が治っていく。

「チエンジ、イザナギ!!」

ダウンをイザナギに切り換え、『シャドウ』に《ラクンダ》を使った。防御力の下がった『シャドウ』の身体を、ジライヤの風が切り刻み、トモエの《アサルトダイブ》が穿つ。

それでも、『シャドウ』はまだ堅い。

『シャドウ』は苛ついた様に《チャージ》で一気に力を高めた。

「させるか、ジャックランタン!!」

イザナギをジャックランタンに切り換える。

《タルンダ》で『シャドウ』の攻撃力を下げようとしたのだが……。

『ああん、可愛い！ 抱き締めたあい!!』

「?!?!」

ジャックランタンを目にした『シャドウ』が、突然相手をしていた筈のトモエやジライヤには目もくれず、ジャックランタンに接近し、巽くんの姿をした上半身の部分が力一杯抱き締めてくる。

ペルソナは自分自身。

だからペルソナのダメージはある程度は自分に返ってくるから、痛覚とかの一部の感覚は若干共有もしている。

つまり、『シャドウ』に抱き締められている何とも言えない感覚が此方にも伝わってきていると言う事で……。

ああっ、しかも今頬擦りまでされている……。

「~~~~っ!!」

「鳴上ーっ！ しっかりしろーっ!!」

怖気立ちそうになる感覚を堪えて、必死に抵抗を試みてはいるが、ガッツリホールドされている上にスリスリスリと頬擦りされていて抜け出せないし、これではペルソナを切り換える事も出来ない。攻撃されている訳でもなく、みんなへの攻撃も止んでいるのが唯一の幸いだが、心理的なダメージが蓄積していつてる気がしなくはない。

取り敢えず頬擦りは止めて欲しい。

可愛いものが好きだという巽くん（の一面が強く出ている『シャドウ』）に可愛い見た目のペルソナを見せてはいけなかった様だ。

「ああーっ！ センセイの目が死んでるクマーッ！

早く助けるクマー!!」

クマの声に、花村たちが動く。

こうも密着させているには、ジャックランタンが耐性を持たない魔法は迂闊に使えない為、ジライヤとトモエが、ジャックランタンをホールドしている『シャドウ』の腕に切り付けようとするが、筋骨隆々な

方の腕に阻まれてしまう。

その間も頬擦りは止まらない……。

心なしか、ジャックランタンの目にも生気がない様な気がする。

「くそっ！ このままじゃ鳴上が参っちゃまう!!」

早く何とかしねーと」

「千枝！ 花村くん！ そこ退いて!!」

ソイツ、灰にするから!!」

天城さんがそう声を上げた直後、ゴウツと音をたてて『シャドウ』が燃え上がる。

業火に焼かれても尚、『シャドウ』はジャックランタンを抱き締めていたが、一瞬その拘束が緩んだ隙に、その顔面を全力で殴って離脱。

直ぐ様《法王》アルカナの『フラウロス』に切り換えた。

「一気に畳んでやる……!!」

吠え猛るフラウロスの《スタードロップ》の一撃が『シャドウ』の鳩尾に突き刺さり、ダメージを与えると共に『シャドウ』の防御力を下げる。

フラウロスが少し『シャドウ』から距離を取るのと同時に、ジライヤの《ガルーラ》が『シャドウ』に膝をつかせた。

フラウロスをオニに切り換え《チャージ》で力を高め、更にオニを《道化師》のアルカナの『ペイルライダー』に切り換える。

ペイルライダーが手にした大鎌を振りかぶると、鎌の刃が異様な冷気を放ち始めた。

「トモエ、《タルカジャ》！」

「ジライヤ、《スクカジャ》だ!!」

里中さんと花村から補助を受け、威力と切れを増したその刃を掲げながらペイルライダーは『シャドウ』に向かって突進し、すれ違いざまにその身を深く切り刻む。

傷口は凍り付き、その周りには冷気が纏わりついていた。

「いくよ、トモエー！ 《暴れまくり》!!」

トモエの攻撃が三連続で『シャドウ』に命中し、その度にペイルライダーが付けた傷口の氷結が広がって『シャドウ』にダメージを与え

ていく。

仲間たちとの連携で追加でダメージを与えられる《連鎖の氷刃》が発動したのだ。

《連鎖の氷刃》が発動可能な時間は《三連の鎖》で多少は引き延ばされているが短い。

それでも、非常に強力な攻撃である。

「チェンジ、イザナギ!!」

イザナギがありつたけの力を込めて、《テッドエンド》を叩き込むと、氷結が『シャドウ』の全身を侵食し、「イクう……っ!!」と言う断末魔と共に『シャドウ』は元の巽くんの姿に戻った。





小さい頃から裁縫や絵を描くことが好きだった。

家が染め物屋だから、そういったモノに触れる機会も多かった……
と言うのもそれの一因かもしれない。

フワフワとしたもの、丸っこいもの、世間的に『可愛い』と言われるものも、大好きだった。

……だが……。

「……何だ、ここは……」

目が覚めると、そこは知らない場所だった。

視界が白く閉ざされている。

これは……湯気、か？

酷く暑い場所だ。

汗が滝の様に滴り落ちてゆく。

ここは何処だ。

何故オレはこんな場所に居る。

直前の記憶を思い出そうにも、どうにも頭に霞でもかかっているかの様にハッキリとしない。

家に居た……？

いや、何かに呼ばれて出ていったのだったか……？

フワフワと、考えが纏まらない。

暑さに浮かされて、頭までやられてしまったみたいだ。

湯気に覆われた周りを見回していると、何かが分厚い湯気の向こうで蠢いているのを感じた。

「誰だテメエ、出てきやがれ！」

恫喝する様にドスを効かせた声を上げるが、湯気の向こうから返つ

て来たのは、こちらを嘲笑う様な声だった。

——異完二。喧嘩ばかりの、ロクでなしの不良……。

「何だとコラアツ!!」

怒鳴り返しても、声は全く怯まない。

——暴走族潰して、自分が総長になって、今はお山の大将気取りかよ。

「テメエ、勝手な事言ってんじゃねえっ!」

オレはそんなモン、成った覚えねえぞ!!」

暴走族を潰したのは、お袋が夜眠れなくなっていたからだ。

それなのに、そんな集団の総長になるとか、それこそ有り得ない。

この前の腹が立つ特番の後、色んな奴等がそう噂しているらしいとは知っていたが、全くの事実無根である。

——最近カツアゲしてんのも、どうせお前なんだろ?

「違う! オレじゃねえっ!!」

決め付けてんじゃねえぞ!!」

カツアゲなんて、そんな事する訳がない。

自分より弱い人間を脅して金を奪うなんて、最低の行為だ。

オレはそんな事、絶対にやらない。

——どうせ異完二だ。アイツはそういう奴だ。

どうせとは何だ。

知りもしないクセに、勝手な事ばかり言い募りやがって……!

姿を見せもしないで勝手な事ばかり言っただけで嘲笑ってくるのは、フザ

けてやがる……!

「フザけんな!」

姿も見せないでコソコソと勝手な事ばかりか言いやがって!

出てこい! 締めてやるっ!!」

苛立つ気持ちを抑える事もせずそう怒鳴ると、急に空気が変わったのを肌で感じた。

『フッフ……』

また、そうやって《怖い不良》のフリをしちやってる……。

勝手な事言うな? 嘘ばっかり……!』

奇妙に裏返ってノイズがかかった様な声だが……、何故かオレはその声を知っている様な気がした

「なっ……今度は誰だ……？」

異様なモノをその声から感じとり、微かに後退る。

『恐くて、喧嘩も強い、不良の完二。』

……とつても《男らしい》よね？

だから、君は《そう思われたい》んだよね？

でも、本当は違う』

熱い湯気の向こうから姿を現したのは――

「……オレ……？」

何故か禪だけを纏った、オレ自身にそっくりのヤツだった。

だけれども、その表情はオレとは全く違う。

オレはあんな表情を浮かべたりなんかしない。

コイツは何だ？

何で、オレそっくりの顔をしているんだ？

『そう、……ボクはキミ……キミはボクだよ』

目の前の奴は肯定する様に頷くが、オレがここに居るのに、目の前の奴もオレだなんて事は有り得ない。

何処のどいつの仕業かは知らないが、変装だか何だかしているのだろう。

「テメエ、何フザけた事言っつてやがる！

大体此処は何処だっ!!

テメエがオレをこんな所に連れて来やがったのかっ!？」

『ここはキミが願った世界……。』

キミが望んだ、《ここ》に居る者にとっての、紛れもない《現実》さ』
意味が分からない。

コイツは一体何を言っつてる？

オレがここを望んだ？

何を言っつているんだ？

訳の分からない事を捲し立てて、煙にでも巻くつもりか？

「アツ？ 何言ってやがる！」

『ムッム』は女なんて要らない。

キミがやりたい事をやれる《現実》……』

言っている事の意味がちつとも理解出来ない。

その時、背後で扉が開く様な音がして、誰かが入ってくる。

振り返ると、そこに居たのは見たことがある奴等ばかりだった。

『もうやめようよ、嘘つくの。』

人を騙すのも、自分を騙すのも、嫌いだろ？

やりたい事をやりたいって言って、何が悪い？』

目の前の奴が、ニヤリと笑って近寄ってくる。

人を騙す？ 自分を騙す？

何を言ってやがる。

そうは思うが、胸がざわつくのを感じる。

ダメだ。

コイツの言う事を聞いてはいけない。

『ボクはキミの”やりたい事”だよ』

「違っ！」

咄嗟にそう言い返した時、背後から鋭い声が飛んできた。

「巽くん！ 駄目だ!!」

そいつの言葉を否定しちや駄目なんだ!!」

何故そんな事を言ってくるのかは分からないが、その声を上げてい

る奴には見覚えがある。

「アンタたしか、この前の……」

数日前に、身の回りに気を付ける様に警告しに来たお節介な先輩

だ。

何で、その先輩がここに？

『あー、もう……、煩いよ。』

大体何で此処に女が居るのさ。

ここは男だけの場所だよ？

これだから女は嫌なんだ……。

勝手にこっちの領域を侵しに来てさ。

女のくせに、ボクの邪魔しないでよね』

目の前の奴が何をしたのかは分からないが、俄に背後が騒がしくなる。

『女は嫌いだ……。』

偉そうで、我儘で、怒れば泣く、陰口は言う、チクる、試す、化ける……。

裁縫したり絵を描いてるボクを見てさ、気持ち悪いモノを見る見たいに「変人」、「変人」 ってバカにして……。

で、笑いながらこう言うんだ。

”裁縫好きなんて、気持ち悪い”。

”絵を描くなんて、似合わない”』

ドクリ、と胸が痛んだ。

覚えがある言葉ばかりだ。

ギリギリと胸を締め付けられている様な錯覚すら覚える。

小学生の時に、クラスの女子に言われた言葉。

まるで、あの日に戻った様な痛みだ。

似合わない、と何度否定されただろう。

気持ち悪い、と何度言われただろう。

オレはただ、自分の好きな事をやっていただけなのに。

でも、クラスの女子たちは誰もが指を指して言うのだ。

似合わない、変だ、と。

一方的にそう言い捨てるだけだった。

反論しても、泣かれて、逆にこちらが悪者にされた。

ユラリユラリと揺れていた目の前の奴が、急に接近し、オレの肩を掴む。

ギリツと指が食い込むその痛みよりも、胸を搔き乱されているかの様な傷みの方が強い。

奴は限界まで顔を近付け、恨みを込めた様な声で言葉を吐く。

『男のくせに”……、”男のくせに”……、”男のくせに”……!!』
身体が凍り付いた様に動けない。

今すぐにもコイツの手を振り払わないと、と思っても、指の一本も動きやしない。

『じゃあ、男ってなんだ？』

男らしいってなんなんだよ？

女は、怖いよなあ……』

「怖く、なんか……」

貼り付いた様な舌を必死に動かして、反論する。

怖くなんて、ない。

そんな事、思っていない。

『……そうだ、男がいい……』

……男のクセになって、言わないしき。

……だから、男がいいんだ……』

「違……う……!」

『違うよ。』

キミはボク、ボクはキミだよ……』

ニヤツと笑うソイツに、何よりも先に嫌悪感を感じた。

「——っ！ ザっ……けんな！」

テメエ、人と同じ顔してやがって……!!」

背後で誰かが何かを叫んでいる様な気もするが、何を言っているのかは分からない。

今は兎に角、目の前のコイツの言葉を否定しなくてはならない。

「オレはテメエとは違うっ！」

テメエみてえのが……オレなもんかよっ!!」

そう言っってやった瞬間、立っていられない様な疲労が身体を襲う。

いや、体からどんどんと力が抜けていく。

受け身もろくに取れず、床に倒れた。

意識が薄れていく……。

視界の端が何やら光った様な気がした。

そして、優しく抱き起こされる感覚。

「異くん、すっかり！」

意識はある?！」

誰かがオレを呼んでいる……。

薄く目を開けると、あのお節介な先輩が見えた。

何で、そこに居るんだ……?」

「アンタ……何でこんな所に……」

「意識はあるみたいだね、その話は後で。」

今はこの場を離れないと」

お節介な先輩はそう言つて、オレを抱き起こした姿勢のまま抱き抱え、何処かに移動し、オレを壁に凭れかけさせる。

薄れそうな意識の中、轟音が響いたり、誰かが叫んでいるのだけは分かった。



「異くんがやりたい事はコレなのか!？」

異くんが欲しいモノは、こんなモノなのか!？」

唐突に名前を呼ばれ、意識が少しハッキリとする。

お節介な先輩の声だ。

ぼんやりとした視界の中、先輩たちは……怪物と戦っていた。

「良いじゃないか、お裁縫が好きでも、お絵描きが好きでも!!」

誰に迷惑をかけるモノでも無いだろ!

何も、変なんかじゃないさ!!」

お節介な先輩の言葉に、一気に目が覚める。

裁縫が好きでもいい、絵が好きでもいい。

変なんかじゃない。

その言葉が胸に沁みていく。

だが不意に、先輩が何を知っているのだ、とも思う。

口だけなら、言うのは簡単だ。
その言葉が、本心からのモノであるかなんて、分からない。

怪物が吼え、焦った様な先輩の声が指示を飛ばす。

そして、急に走り寄って来た先輩に抱き締められた。

突然の出来事に頭が真っ白になって硬直していると、目の前に雷でも落ちたかの様な轟音と同時に視界が真っ白に塗り潰される。

グツと、抱き締める力も強くなった。

轟音が収まり、視界が効く様になると、辺りは一変していた。

床にも壁にも酷い焦げ跡が残り、焦げ臭い煙を上げている。

「巽、くん。」

怪我、……は、無い？」

気遣わし気にオレの顔を覗きこむ先輩の顔色は少し悪い。

……直感的に、この先輩に庇われたのだ、と理解した。

「オレは何ともねーけど……。アンタ……」

「そうか……。なら、良かった」

先輩こそ、大丈夫なのか。

そう訊ね返す前に、心底ホツとした様に先輩は微笑む。

そして、先輩はゴソゴソと自分の服のポケットを漁り、何かを掴み出してそれをオレの掌の上に載せた。

とても見覚えのあるそれに、思わず目を見開く。

「……！ おい、アンタこれ……！」

お袋にあげた、編みぐるみだ。

それが、何でこんな所に？

何故先輩がコレを持っていたんだ？

「巽くんのお母さんに、借りたんだ。

君を探す手掛かりになる、から。

巽くんが手作りしたんだって、君のお母さんが言ってたよ……」

「……悪いかよ。」

男がこんなモン作ってちや……」

この人も、思うのだろうか。

「変だ」と、男らしくない」と。

だが先輩はフルフルと首を横に振った。

「悪くなんか、ないよ。」

「凄く、可愛い」

「かつ、可愛い……!?!」

唐突に何を言っているのだ、この先輩は……!!

顔が熱くなるのを感じた。

「凄く丁寧に作られているし、デザインも拘ってる。」

小物とかも、凄い手が込んでるし……。

本当に可愛い。

……巽くんが、こういうの本当に好きなんだって、とてもよく伝わってくる。

こんなに凄いものを作れるんだから……。

巽くん、胸を張りなよ」

……初めてだった。

オレが作った『可愛い』ものを、お袋以外の人に褒められるのは。

凄い、なんて……今まで誰にも言っても貰えなかった。

胸を張れ、なんて……。

「だから、あそこで苦しんでいる君を認めてあげてね」

「アンタ、アレが何なのか知ってるのか……?」

そう訊ねると、先輩は小さく頷いて説明する。

「アレは巽くんがずっと心の奥に押し込めていた君自身の側面の一つだ。」

君自身に否定されてしまったから、ああやって暴れている。

だから、受け入れてあげて欲しい。

自分自身を否定して傷付けるなんて、とても悲しいから」

アイツが、オレの側面……。

先輩の言う事を一から十まで納得して受け入れた訳ではない。だけれど、その言葉に、思い当たる節があったのは確かだ。

「異くんなら出来るよ。」

だって君は、誰かに拒絶されてしまう辛さを、よく知っている人なんだから」

ポンポンと、先輩の手がオレの頭を軽く叩く様に撫でた。

……………分かってる。

誰かに拒絶されるのが怖い。

怖いから、…………だから、自分から距離を取ろうとする。

それが、俺だ。

乱暴者を装っていれば、誰も態々近寄ってこない。

誰も近寄ってこないなら、趣味がバレる事も無いし、それを「男らしくない」だなんて拒絶される事も無い。

こんな身体もデカくてガタイも良い男の趣味が裁縫なんて誰も思わない。

きつと、知られてしまったら、「変」だと「らしくない」だと、拒絶されるだろう。

オレはただ、それを恐がっていただけなのだ。

やつと、その事に向き合う事が出来た。





『シャドウ』は巽くんの姿に戻ったのだが、倒れ伏した『シャドウ』は再び起き上がってこちらににじり寄って来る。

まだ、戦う気なのか……？

警戒しつつ、居合刀に手を添える。

「ま、まだ向かって来るクマ！」

余っ程強く拒絶されてるクマか……？」

「そりゃ、こんだけギャラリーが居ちや、無理ねーよ……」

こんな奇っ怪な姿をした『シャドウ』を、一発で“己”だと認めるのは相当難しい。

『シャドウ』は巽くんにとって見たくない・見られたくない“自分”だ。

だからこそ、こんなにも観衆が居る中では認められないのもまた無理は無い。

だが、『シャドウ』の言動は、想定外の斜め上を行った。

「情熱的なアプローチだなあ……」

「……は？」

一瞬何を言ってるのか、理解が追い付かなかった花村が思わず問い返す。

「キミたちなら……素敵なカレになってくてそうだ」

「や、やめろって！ そんなんじゃねーっ!!」

渴望する様なその視線に、花村は腕を擦って嫌々と首を横に全力で振りながら後ろに下がり、自分は花村を『シャドウ』の視線から庇う為に一歩前に踏み出した。

にじり寄る『シャドウ』の姿に、巽くんは拳を震わせる。

「や……めろ……」

何、勝手言ってたんだ、テメエ……」

巽くんが絞り出す様な声を上げるが、『シャドウ』はそれを聞き入れない。

必死に、何か継るモノを探しているかの様な表情で、こちらに手を伸ばしてきた。

「誰でもいい……、ボクを受け入れて……」

「や……めろ……!」

あまりにも切実そうな『シャドウ』の声に思わず居合刀を掴む手を離す。

「ボクを受け入れてよおお!!」

それを見た『シャドウ』がこちらへと駆け寄って来た。

急接近してきた『シャドウ』に花村が悲鳴を上げて後退さる。

「う、うわ、ちよ、無理矢理は止めて!!」

「止めろっつっつてんだろ!!」

その時、花村の横を駆け抜けてきた巽くんの渾身の一撃が『シャドウ』の顔面を捉え、『シャドウ』は床に叩き付けられた。

「たく、情けねえぜ……」

「こんなんが、オレン中に居るかと思うとよ……」

「完二、お前……」

グツと拳を握る巽くんに、花村が驚いた様な声を上げる。

「知ってんだよ……テメエみてえのがオレン中に居る事くらいな!

男だ女だってんじゃねえ……」

拒絶されんのが怖くて、ビビッてよ……」

自分から嫌われようとしてるチキン野郎だ」

そう言つて巽くんは、倒れ伏した『シャドウ』に近付いた。

「……オラ、立てよ。」

オレと同じツラ下げてんだ……ちつとボコられたくらいで沈むほど、ヤワじゃねえだろ?」

その言葉に立ち上がった『シャドウ』の肩を掴み、巽くんは言い切る。

「テメエがオレだなんて事あ、とつくに知ってんだよ……」

テメエはオレで、オレはテメエだよ……クソツタレが!!」

その言葉に、『シャドウ』は救われた様な笑みを浮かべ、それは『ペルソナ』へと変化した。

カードの形になったそれが巽くんの中に消えると、途端に巽くんは力尽きた様に倒れ込む。

慌てて支え起こすと、酷く汗をかきすぎて、もう意識が朦朧としてフラフラな様だ。

こんな暑苦しい場所に長い事放置されていたのだ。

この世界が元々（普通の人にとっては特に）長居出来る場所でも無い為、その消耗がより激しくなっているのだろう。

「……やっぱり、凄い汗。」

脱水症状になりかけてるのか……。

ほら、これでも飲んで」

一先ず、向こうの世界に帰るまでの間、持ってきたスポーツドリンクを与える。

巽くんの方も用意していて本当に助かった。

……

……

……

……

▲▼▲▼▲▼

テレビから出ると、既にタイムセールが終了し、元々人気の無い家電売り場は勿論の事ながら、他の売り場からも大分人の出入りが少なくなっていた。

そのまま家電売り場に屯する訳にはいかないので、花村に頼んでバックヤードを開けてもらい、そこに巽くんを連れていく。

椅子に座らせると、相当疲労が強いのか息が微かに荒いが、それでも巽くんはスッキリとした表情をしていた。

「今日はここで解散だな。」

俺は完二をもうちよつとここで休ませてから、巽屋まで送っておく。

何か聞かれても、『その辺で適当に拾った』で通じるだろうしな」

花村がそう申し出てくれたので、ありがたく頷く。

「すまないな、花村。後は頼んだ」

部屋を出ようとした時、巽くん呼び止められる。

「なあ……、さつき、オレの前で起きたのあ……」

夢か現か、それすらも曖昧だとも言いた気な表情だ。

説明しなくてはならない事も、そして巽くんに訊ねなくてはならない事も、どちらも沢山ある。

が、それをするべきは、今ではない。

「今度、ちゃんと話すよ。」

今巽くんに必要なのはゆっくりと身体を休める事だ。

大丈夫、巽くんが元気になったら、すぐにでも説明するから。

だから、しつかり休んで」

「ああ……分かった。」

……ゼツテー、だからな」

巽くんが頷いたのを確認してから、その部屋を立ち去った。



家に帰った頃合いで、巽くんを無事家に送り届けたと花村から連絡が来た。

これで巽夫人も一安心出来るだろう。

夕飯の支度をしていると、……珍しい事に叔父さんが夕飯が出来上がる前に帰って来た。

手早く夕飯を作り、食卓に並べ、『いただきます』と手を合わせてから食べ始める。

黙々と食べていた叔父さんだが、不意に箸を止めてこちらに目をやった。

「……そう言えば、お前の友達の……花村という奴が、巽完二を見付けたそうだな」

「……それがどうかしたんですか？」

「実家の染め物屋から巽完二の捜索願いが出てたんだ。

それと……お前、巽屋に出入りしていたらしいな。

一体何の用事だ？

あそこは学生が立ち寄る様な店じゃないだろう」

「天城さんの付き添い、というか、町を案内して貰っていた関係で。

今度、浴衣か何かを縫おうと思ってまして、それを天城さんに話した所、それなら良い布があると、案内して貰ったんです」

全部が全部、嘘と言う訳でも無い。

浴衣を縫おうと思ったのは本当だ。

浴衣を縫う、と答えると叔父さんは驚いた様に目を丸くした。

「浴衣？　ほう、お前……縫えるんだな。

そうか、例の天城屋の娘さんか。

……まあ良いだろう。

ただ、危ない事には首を突っ込むなよ。

分かっているな？」

念を押す様に付け加えられた言葉に、軽く頷く。

残念な事に既に『危ない事』にドツプリ首を突っ込んでしまっているが、それは言っても詮無き事である。

「ああ、そう言えば小耳に挟んだんだが、お前、この前のテストで学年一位だったそうだな。

ま、これはそのご褒美だと思っておいでくれ

そう言っただけ渡されたシンプルなお茶封筒の中には、何と三万円も入っていた。

幾ら何でも多いのでは？　と首を傾げていると。

「何時も色々と世話になってるからな、まあそれとかのお小遣いも兼ねてるってのもある。

ま、悠希ならムダ使いはしなさそうだし、取っといてくれ」と付け加えられた。

そう言う事ならば有り難く貰っておこう。

◇◇◇◇◇

お風呂から上がると、叔父さんが台所で何かしていた。

……………?

……………どうやらコーヒーを淹れようとしている様だ。

お前も飲むか、と問われたので、折角なのだからミルクたっぷり目で貰う事にした。

そうオーダーすると、叔父さんは目を見開き、そして酷く懐かしそうな顔をする。

「……………どうかしたんですか?」

「あ、い、いや……………」

そう言われるのは、久しぶりだと思っただけ

久しぶり……………」

そう言われ、ああ、と思い至った。

成る程、叔母さんのコーヒーの好みはミルクたっぷり目だったのだろうか。

「お父さん、ニユース始まるよ。」

あ、菜々子もコーヒーのむ!」

「はいよ。ミルクと砂糖たっぷりだな」

「うん!」

叔父さんは苦笑して棚からマグカップを取り出す。

手前に置かれていた揃いのデザインの色違いのマグカップ三つから青色とピンク色のものを、そしてその奥にあった恐らくは来客用のモノを一つ。

それらに各々のオーダー通りにコーヒーを淹れて行く。

傍でそれを見ていると、叔父さんに座ってテレビでも見ていると居間を指さされてしまった。

しかし、一人で三人分も運ぶのは中々大変だろう。だから手伝いを申し出たのだが。

「あー、いや、いい。」

コーヒーを淹れるのだけは、家での俺の仕事だ」

叔父さんに断られてしまった。

どうやら、コーヒーを淹れる事に拘りでもある様だ。

優しい顔でコーヒーを淹れている叔父さんは、ポツリと答える。

「……千里にな、結婚するとき、約束させられたんだ。

家のことはこれだけでいい。

その代わり、必ずずっとやること、つてな。

だから……まあその、何だ。

すっかりクセになっちまったってわけだ」

……叔母さんとの約束だったのか。

なら、邪魔は出来ない。

言われた通りに、大人しく座って待つ事にした。

少しして、叔父さんは器用にマグカップを三つ持って台所から移動してきた。

テーブルに置かれたそれを、各自手に取る。

菜々子ちゃんはピンク色のものを、叔父さんは青色のものを、そして自分は来客用のマグカップを。

三人でコーヒーを飲みながらニュースを見ていると、死亡者が出た交通事故のニュースが流れた。

その途端に叔父さんの顔が険しくなる。

「菜々子、テレビを消せ」

「あ……うん」

叔父さんに言われた通りに菜々子ちゃんはテレビを消す。

居間が静かになるや否や、叔父さんは立ち上がり、部屋へと戻ってしまった。

「……………お母さん、じこで死んじやったから……。」

菜々子、ぜんぜんおぼえてない。

お父さん、……何も話してくれないし……。

………」

菜々子ちゃんは、微かに俯いて寂しそうな顔をする。

励ます為に色々な話をして、その晩は菜々子ちゃんが寝付くまで傍にいた。



………」

………」

………」

………」

………ここは……。

………目を開けると、其処は蒼い空間だった。

………ベルベットルームだ。

だが、マリーどころか、イゴールさんの姿も見当たらない。

どうやらマーガレットさんしか今はこの場に居ない様だ。

部屋の主だと言うイゴールさんが居ない、という事もあるものなのだなどぼんやり思っていると、此方に気が付いたマーガレットさんが居住まいを正す。

「これは、失礼しました。

何か、御用でしょうか。

………と言いましても、今丁度主は席を外しております。

急ぎでなければ、また時を改めてお越し下さると……。

………いえ、違いますね。

………ここはお客様の定めと不可分の部屋……。

………この部屋で全く無意味な事は起こらない……。

………今こうして出会った事にも、何か意味があるのでしよう」

そう言つて、マーガレットさんが微笑む。

「ようこそ、ベルベツトルームへ。」

フフ、一度言つてみたかったの。

前任が突然不在になつたのを受けて招かれた、〝力を司る者〟よ。主以外の出迎えを受けた人なんて、もしかしたら初めてじゃないかしら」

どうやらイゴールさんが居ない時に訪れるのは、珍しい処の話では無かつた様だ。

前任が突如不在になつたと言うが、果たしてその人（？）は何処へ行つたのだろう。

「ベルベツトルームは、招かれる客人の心と不可分……。」

景色も、住人の姿も、その時々客人の数や定めに応じて、主に選ばれ、変わりゆく……」

ポツリ、とマーガレットさんは呟いた。

「少し、話をしましょう？」

そうするべき、と言う気がするのよ……」

そう言つて微笑むマーガレットさんからは、確かに優しさを感じた。

勿論、と頷くとマーガレットさんは話始める。

「貴女は既に幾つか〝コミュニケーション〟……絆を築いている様ね。」

出会いを重ね、言葉を重ね……お互いの理解が深まる事で、絆はより深まるもの。

でも時に心は、千の言葉よりも、たった一つの行動で、大きく震えるわ。

貴女には分かるかしら？」

言葉も行動も、それらは思いを相手に伝える為には必要なモノだ。

どちらがより貴いとか、そんな事は特には無いだろう。

だけど、時には言葉というコミュニケーションツールでは伝えきれない何かを、たった一つの行動が余すこと無く伝える事だつてある。

逆もまた然り。

「フフ……、今日の出会ひの意味は、もしかしたらその辺りなのかもし

れないわね」

そう微笑むと、マーガレットさんは何かを考える様に俯き、そして大きく頷いた。

「決めたわ。」

貴女の辿る定めの糸に、この私も絡めて頂戴。

そこから、“絆”という新しい糸が紡がれるかもしれない。

私には知りたいたい事があって、最初に迎えた客人が貴女……。

そして、主不在の今日の出会……。

私たちは、きつとどちらも特別なのよ。

……お互いにとってね」

そう言つてマーガレットさんは微笑んだ。

特別……。

確かに、そうだろう。

どんな縁があつたのかは分からないが、ベルベットルームと言うとう考えても普通ではない場所で出会い、そしてその力を貸して貰っているのだ。

これで特に何もない関係、なんて言われたら逆にそっちの方が驚く。

マーガレットさんが知りたいと思つている事。

それを自分が教えたり、はたまたその手掛かりを示したり出来るかは、まだ分からない。

それでも、もし何か出来る事があるのなら、それには誠意を持って応えたい、とは思ふ。

「貴女の事をもつと知りたいわ。」

そうね、先ずはその類い稀なペルソナ能力から見せて貰おうかしら。

一つの言葉より、一つの行動に、心は震える……。

……もう忘れたのかしら？

フフ、楽しみがまた増えたわね。

それではまた、ご機嫌よう」

マーガレットさんが一礼して、途端に意識が薄れていく。

……何と無く、彼女が求めるものを自分が示せるのなら、それはきつと自分自身にとっても欠け替えの無い何かになると、そう感じた。

マーガレットさんの依頼に振り回されるのは、もう少し先の話だ。

……

……

……

……



『本当の“家族”』

【2011／05／20―2011／05／22】



【2011／05／20】

まだ巽くんは療養中らしい。

まあ、あれ程過酷な環境下に長時間放置され、極度の疲労と共に脱水症状も起こしかけていたのだから、幾ら身体が丈夫そうな巽くんとて限界だったのだろう。

しっかりと休息を取って、元気になって戻ってきて欲しいものである。

買い物しようとしてジュネスを訪れると、足立さんに呼び止められた。

どうやらまたサボっている様だが、一応話している相手がいれば事情聴取なのだと弁が立つから少し話し相手になって欲しい様だ。

……サボりの口実にされるのは気分があまり良くはならないが、まあ足立さんと話す機会だと思えばそれはそれで良いだろう。

了承すると、足立さんは思いの外喜び、まるで悪戯っ子の様に笑った。

「君、また夕飯の買い物？」

あはは、感心感心。

僕は独り暮らしだからさー、夕飯とか面倒なんだよね」

「……夕飯、食べてないんですか？」

「ああいや、食べるには食べてるよ。」

カップ麺とか、そういうのをテキトーにね」

……何とも荒んだ食生活だ……。

惣菜ばかり並んでいたかつての堂島家の食卓以上に荒んでいる。

……独り暮らし、と言うからには作ってくれる人が居ないのだろうか……。

「あー……君みたいな感じで作ってくれる彼女が居るんなら、マシな食生活になるんだろうけどねー。」

ま、残念ながら今はそういう人居ないし」

「不躰な質問ですみませんが。」

今は、という事は以前は居らしたのですか？」

「えー、そういう事訊いちやう？」

君、結構変わってるよね。

ま、良いけど。

ここに来る前は一応居ただけどね、まあ色々あって。

見た目と違って性格がさー……って、やだなあ要らない事まで言っちゃったじゃん」

そう言っつて足立さんは苦笑した。

……こちらが悪いのだろうか？

「あ、えっと、すみせん……？」

「やっぱ可愛い子……って言うか美人なタイプの子が良いよねー。」

あと、料理上手な子。

メシマズな人は僕的にはダメだなー」

急に足立さんの好みの女性像を聞かされ、どう反応するべきか戸惑う。

「はあ……、そう言うモノなんですか……？」

「いや、そりやそうでしょ。」

不味い飯なんて、それ何の為に作るのさ。

あー、そう言う点で見ると、君ってかなりの優良物件だよな。

料理は前に堂島さん家にお邪魔した時の感じだと凄く上手みたいだし、見た目も背がかなり高いけどかなり良い感じだし」

「えっと……？」

ありがとう、と言うべきなんですか……？」

……？ 褒められている、のか？

良く分からない……。

その時、足立さんの背後のエレベーターの扉が開き、老婦人が中から出てきた。

以前、足立さんが顔を合わせるのを意図的に避けていた老婦人だ。あつ、と思う間も無く老婦人は足立さんを目に留め、急に距離を詰めてきた。

「透ちゃん！透ちゃんじゃないの！」

老婦人の声に、足立さんはギクリと身を震わせ振り返り、ゲツと呻く。

「うっわ……見付かった……」

「お仕事、終わったの？」

危ない目に遭ってない？」

やけに親しげ（老婦人が一方的に）だが、……どういご関係なのだろうか？

親戚……という訳では無さそうだが……。

足立さんのご近所さん、なのだろうか？

ただのご近所さんがこんなに親しげにしてくるなんて考え難いが、この田舎町なら有り得るのかもしれない。

それにしても、少し度が過ぎている気はするが。

「あー……いえ、まだ途中で、今から署に戻る所」

足立さんはサボっているだけだったのだが……。

まあいい、今は口を挟むべき時ではない。

「お仕事頑張つて嬉しいわあ。」

「ご近所さんに、何時も自慢してるのよ。」

また煮物、持っていくからね。

体調に気を付けなきゃダメよ？

あ、そうそう。

お昼に見た刑事ドラマでね……」

もの凄くグイグイとくる老婦人である。

長々と話始めそうになった老婦人を足立さんは遮った。

「あの一、……そろそろ署に……」

足立さんに言われ、老婦人は礎と思い至った様に時計を見た。

「あら、もうこんな時間？」

それじゃあ、お仕事頑張つてね」

老婦人はそう言つてその場を立ち去る。

「やゝつと行つてくれたか……」

老婦人が去つて行くのを見送つて、ふうと息を吐く足立さんに、あの老婦人との関係を訊ねてみた。

「ああ、えつとね。」

あの人の息子さん、何か僕と同じ名前らしくつてさ。

それでは分かんないけど、やったら構われちゃつて……。

差し入れだか何だかで、いっつも署の方まで大量に煮物持つて来るとだよね。

話もやたら長いし……、ウザいつたらないよ」

……足立さんの名前が、偶々息子さんと同じだったからああいう風に接してくるのか……。

しかし……あの様子だと、『足立透』ではなく『あの老婦人の息子の透さん』扱いをしている感じである。

ああもグイグイと来られたら、そういうのに不慣れな人間にとつてはただ疲れるだけだろう。

「……大変ですね」

「でしよー？」

ほぼ毎日あんな調子でさ」

足立さんは肩を竦める。

「……ウチの親とは正反対のタイプだからさ。

ああいうの、あんま分かんないだよねー。

まあ、要はあの人は寂しいだけなんだろうけど。

息子さん、都会の方で働いてるらしいし、他に身寄りは無さそうだしや。

こつちじゃ、こんなのも仕事に入るから、無視も出来ないしね。

まあ、最近は警察も忙しいから、僕位しか相手してる人居ないみたいだけど」

言葉とは裏腹に、微かに足立さんは嬉しそうだ。

足立さんの親が正反対のタイプ……という事は割りと放置気味のご家庭で足立さんは育つたのだろうか。

……寂しい、ね。

しかしそれって詰まりは、あの老婦人は足立さんをあくまでも『息子さん』の代わりとして扱っているって事なのではないだろうか……。

……一々干渉するべきではない事柄であるものの、引っ掛かるものを感じる……。

「でもさー、僕まだ27なんだし、息子じゃなくなつてせめて孫にして欲しいよね。

さて、……そろそろホントに戻らなきや。

まーた堂島さんにドヤされちゃうよ。

じゃーね」

そう言つて足立さんはジュネスを出ていった。



家に帰ると、菜々子ちゃんが何やら差し出してきてくれた。

テストで『いっとうしよう』だったお祝い、なのだそうだ。

それは、似顔絵の付いた、折り紙で作られたメダルだった。

テストで一番だった事よりも、そういう風に祝つて貰えた事の方が、嬉しく思えた。

今晚は叔父さんの帰りは遅いらしい。

菜々子ちゃんと二人で夕飯を食べ、食後に一緒にテレビを見る。

今見ているのは、小さな男の子が実の父親を探す、と言うドキュメンタリー番組だ。

菜々子ちゃんは、何処か食い入る様に番組を見ていた。

物語も無事に父親と出会えてハッピーエンド、でスタツフロールが

流れる。

それを見た菜々子ちゃんは、ポツリと呟いた。

「ほんとの、お父さん……」

そして、菜々子ちゃんは顔を上げてこちらを見詰めてくる。

「ねえ、お姉ちゃん……」

”ほんと”……って、どういうこと？」

……”本当の”、か。

……中々難しい質問だ。

絶対に正しい解答、というモノは無い問い掛けなのかもしれない。

だから、自分の考えを菜々子ちゃんに伝えた。

「そうだね……」。

きつと、大好きな人で……傍に居たいって、思える人かな」

血の繋がりは、全てでは無い。

勿論、それはそれで大切なモノであるけれど。

世の中には血の繋がった実の子供を愛せずに虐待してしまう親も居るし、血の繋がりなんてなくなつたつてお互いを思い合える親子になれる事だつて無くは無い。

同じ屋根の下に住んでいたつて、家族とは呼べない様な繋がりがしかない人達だつて居るだろう。

結局は、相手をどう思えるのか、だ。

少なくとも、自分はそう思っている。

「そっかぁ……」。

じゃあ、お姉ちゃんは、ほんとのお姉ちゃんなんだね。

お父さんも、ほんとのお父さんだ！」

嬉しそうに言う菜々子ちゃんだが、直ぐ様その笑顔が翳る。

「……でも、お父さんは、菜々子のこと、すきじゃないと思うな……」。

……お姉ちゃん。

もしかして、……菜々子、”ほんと”じゃないの？

お父さんの”ほんと”の子どもじゃないから、……だから、……お

父さん、おうちにかえつてこないの……？」

泣きそうな顔で訊ねてくる菜々子ちゃんの頭を、出来る限り優しく

撫でながら首を傾げて逆に訊ねた。

「……お父さんが、そう、菜々子ちゃんに言ったのかな？」

その問い掛けに、菜々子ちゃんはフルフルと首を横に振る。

「……いつてない」

そして、安心した様に菜々子ちゃんは息を吐いた。

だが直ぐ様再びその表情は曇ってしまう。

「……お母さん……」

どうして、菜々子のことおいてっちやっただら……」

菜々子ちゃんは悲し気に眩く。

……叔母さんだつて、菜々子ちゃんを置いて逝きたくはなかっただらう。

それでも、命を落としてしまう時はある。

……理不尽な事だ。

残された人達の、「何で」や「どうして」に、ちゃんとした答えなんてきつと用意されていない。

人は何時か必ず死ぬ。

それが早くに訪れるのか、そうでないのかはそれこそ人各々だけだ。

でも、そんな「当たり前」の事実は、少なくとも、『何故大切な人の命が、今〃喪われなくてはならないのか』という多くの人が何時かは抱くであろう疑問の答えになんて、ならないのだ。

「……お母さんいたときね、お母さんとお父さんと菜々子の三人でね……、さめがわのところでお花つんでね……」

ポツポツと菜々子ちゃんが語る、お母さんとの想い出話に耳を傾ける。

毎日保育所までお母さんが迎えに来てくれていた事。

公園に遊びに連れていったりしてくれた事。

一緒に道を歩く時は、何時も手を繋いでくれていた事。

出掛ける時は「行ってらっしゃい」と見送ってくれた事。

友達の家から帰って来た時はお帰りなさい、と出迎えてくれていた事。

……どれもこれも、菜々子ちゃんの手から零れ落ちてしまった、とても大切な思い出たちだ。

今の菜々子ちゃんには、「行ってらっしゃい」と見送ってくれる人は居ない。

大概是菜々子ちゃんの方が帰るのが早いから、「ただいま」を言う相手が……「お帰りなさい」と言ってくれる人は居ない。

それはやはり、……とても悲しい事なのだろう。

「お姉ちゃん……、何か、おはなし、して……」

もう菜々子ちゃんは眠たそうだが、……きつと今はお母さんの事を思い出して、誰かと話したいのだ。

だから、菜々子ちゃんの部屋に自分の布団を敷いて、菜々子ちゃんが眠ってしまったまで、菜々子ちゃんの話聞いた。



【2011／05／21】

里中さんに誘われて「修行」を行った後、愛屋で小腹を満たした。里中さんは、ガツツリと肉井を幸せそうな表情で頬張っている。相当、肉が好きなのだろう。

アクション映画を見ている時と同じ位幸せだ、と里中さんは言った。

そして、ポツリと呟く。

「しっかり食べて身体作って鍛えておかないと、ピンチになった時に困るじゃん？」

雪子とかは特にさ……。

あたしがちゃんと、守ってあげないって……。

……雪子、無理してなきや良いんだけど……。

……何か心配なんだよね」

天城さんを守らなければ、とそればかり気にしている里中さんの頭を、ポフンと優しく叩いた。

「天城さんの事は勿論気を配るけど、私は里中さんの方が心配だな」

「へっ……、あ、あたし？」

あつ、あたしは平気だよ！

こーやって修行もしてるし！」

驚いた様にワタワタと手を振る里中さんだが、修行とか、そう言う問題では無い。

里中さんの『シャドウ』を見ているも思ったが、里中さんはきつと天城さんに重きを置き過ぎなのだ。

何をどう頑張っても、里中さんは天城さんの人生を生きられる訳ではないし、逆にそれは天城さんもそう。

自分にとつての大切な選択まで、何でもかんでも他人を理由にしてはいけない。

そんな事をしていては、自分にとつても……そして若しかしたらそれ以上に相手にとつても、長期的な目で見てみると、良い結果には繋がらない。

誰かを守りたいと言う気持ちは素晴らしいものだが、その為に視野を狭めてしまうのは戴けない。

もつと、周りを見渡してみたら良いのだ。

天城さんの周りには里中さん以外の人だって居るのだし、それは里中さんもそう。

……でもそれは、他人に言われてどうこうするのではなく、自分から気が付いてみない事にはあまり意味がない事だ。

「あたし、もつと強くなるからさ！」

それこそ、雪子の分まで！

だから、よろしくね、あたしらのリーダー！」

……里中さんがそれに気が付けるまでは、もう少し時間がかかるかもしれない。

ならばせめて、それまでの間に里中さんが傷付いたり潰れてしまわない様、それを見守っていこう。

それもまた、リーダーを任された者の務めだろう。

「あたしや花村とかは……いつも、あんなだけどき。」

皆、鳴上さんの事、凄く頼りにしてるんだよね……」

へへへ、と里中さんは照れた様に笑う。

純粹な信頼は、とても眩しい物だ。

「あ、何かまたお腹空いてきた。

おじさーん、肉チャーハン追加で！」

里中さんが追加注文を出した事に思わず驚きから目を見開く。

まだ食べるのか!?

肉丼は普通に大盛りだったのに、それでも足りないのか……。

しかも、この後夕飯も食べる予定らしい。

……まあ、食いつぶりが良い、というのも健康的である証だろう。
うん。

……それ以上は深くは考えない事にした。



夕飯後、叔父さんは一人、居間で何やら資料整理でもしているのか、忙しく古い新聞を繰っていた。

「あるとすりや、後は……。」

「つたく、今時の若えのは資料の整理一つ、まともにできねえのかよ」
愚痴を吐きながら叔父さんは持っていた新聞紙を置き、別の場所に積まれた新聞紙を手取る。

……資料か何かが見付からないのだろう。

事件の事には関わらせてはくれないとは言え、流石に新聞の中から探す程度なら、叔父さんとして許可してくれるだろう。

「探し物なら、手伝いますか?」

「あ、いや……いい。」

あんまり気い遣うな。

こいつは俺の仕事だからな」

手伝いを申し出てみたが、叔父さんは苦笑して首を振った。そして記事から目は離さずに言う。

「……昔の、新聞記事でな。

ボロくなつたからコピーを取り直したんだが……。

そのコピーがどっかに紛れちまつたらしくつてな。

……まだ犯人が挙がつてない、ある事件のものだ。

新しい事件の所為で風化しかかつてる……。

けどな、俺だけは諦める訳にはいかねえんだ。

……絶対にな」

余程、思い入れのある事件なのだろう。

新聞の束を見詰める叔父さんの横顔は、酷く思い詰めた様なものだった。

その時、もう寝ていた筈の菜々子ちゃんが起き出して、居間へとやって来て叔父さんと呼ぶ。

……顔色が良くない。

それにお腹を押さえている。

……これは……。

「なんだ、どうした？」

「なんか、おなかいたい……。

おなかの下のほう、ちくちくする」

気遣わし気に叔父さんが訊ねると、菜々子ちゃんはお腹を押さえながら言った。

まさか、食中毒か!?と思うが、同じ料理を食べた自分や叔父さんはピンピンしている。

それに、使った食材は新鮮な物だったし、野菜とかは確り洗ったし、加熱とかの処理も万全を期していた。

ならば、また別の原因だろうか。

「何だつて!? きゅ、救急……。

い、いや、確か前にもあつたな。

あの時と同じか!？」

叔父さんが慌てた様に大声を上げる。

前にも同じ様な症状があったみたいだ。

だが、分からない、という菜々子ちゃんの言葉に、叔父さんは困った様に辺りを見回す。

「参ったな……、あの時の薬は確か……」

薬箱を探そうとする叔父さんの携帯が唐突に鳴った。

こんな時間帯に誰だろう？

今はそれどころではないのだが、万が一の事を考えて着信を無視する訳にもいかない。

舌打ちしながら相手も見ずに携帯を取る叔父さんの代わりに、薬箱を取ってきて中身を探す。

「ああ、クソッ！」

何だっつてんだ、こんな時に……。

はい、堂島です！

足立か……切るぞ」

電話は足立さんかららしい。

こんな時間に……。

緊急の用件なのだろうか？

「……封書？ 俺に？」

叔父さんは訝しげな声を出す、直ぐ様何か気付いたらしく、慌てて電話を握り直した。

「ひよつとして、市原さんからか!？」

何時!?! ……忘れてただあ!?!

ふざけやがって……。

すぐ行く!！」

大声で電話の向こうの足立さんを叱りつけ、叔父さんは通話を切る。

そしてそのまま出かけようと身を翻し、不安そうに叔父さんを見上げている菜々子ちゃんに気付いて硬直した様に動きを止めた。

だが、数秒逡巡した後、後は頼む、と叔父さんは絞り出す様な声で

言う。

「薬箱の中に薬がある筈だから……頼む」

止める間も無く、薬の名前だけを告げて叔父さんは家を飛び出して行ってしまった。

言われた薬を見付け出し、その裏書きを確かめる。

そして、菜々子ちゃんに症状を詳しく確認して、その薬を適用すべき症例である事を確認してから菜々子ちゃんに薬を飲ませ、布団に寝かせた。

叔父さんが傍に居ない為不安で辛そうな菜々子ちゃんが、せめて寂しくはない様に、菜々子ちゃんが寝付くまでずっとその傍に居た。

◇◇◇◇

家を飛び出してから数時間後に、叔父さんはやっと帰って来た。

やけに機嫌が悪そうだ。

もう時刻は深夜十二時を回ってしまっている。

流石に眠たかったが、それでも……菜々子ちゃんの事は直接伝えるべきだと思ったのと、……具合の悪い菜々子ちゃんよりも優先してまで封書を受け取りに行ってしまった叔父さんの事が気掛かりだったのだ。

何時も早目に就寝しているだけに、まだ起きていた事に目を丸くして叔父さんは驚いていた。

夜更かしせずにさっさと寝ろ、と叔父さんに叱られたが、ここでも言わずにスゴスゴと寝てしまっただけはこんな時間まで起きていた意味が無い。

「菜々子ちゃんは薬を飲ませてもう寝かし付けました。

今の所症状は落ち着いていて、寝る前には大分痛みも取れていた様です。

……叔父さんは、大丈夫ですか？」

そう訊ねると、叔父さんは不機嫌を露にして「……うるせえな」と

言い捨てる。

だがそう言った直後に、叔父さんは額に手をあてて、自己嫌悪にでも襲われたかの様な顔をして、乱暴な言葉を謝った。

「……すまん。」

悠希に当たる様な事じゃ無かった。

……菜々子の事、伝える為に起きててくれたんだよな？

……ありがとうな。

お前が居てくれて、助かった。

もう遅いから寝なさい。

おやすみ、悠希」

そう言つて、優しい顔で頭を撫でてくる。

おやすみなさい、と素直に返して直ぐ様眠りに就いた。



【2011／05／22】

翌朝、起きてきた菜々子ちゃんは何やら困った様な顔をしていた。

どうしたのか訊ねてみると、どうやら学校で育てていた野菜の苗を、家で育ててみなさい、と先生から渡され、然し何処に植えれば良いのか分からず困ってしまった様だ。

昨晩は体調不良もあつて、言い忘れていたらしい。

菜々子ちゃんが貰ってきたのはプチソウルトマトだ。

これ位ならそこそこの大きさのプランターで事足りるだろうが……。

ふと、家の隣に使っていない空き地があつた事を思い出した。

菜々子ちゃんに確認を取ってみると、どうやらあそこも堂島家の所有地らしい。

あそこなら、ちよつとした家庭菜園を作るのには丁度良い広さだ。

しかも確か、それ用の道具類もあの空き地に置かれていた筈。外に出て確かめてみると、思っていた通り、家庭菜園を作れそうだし、道具も菜園用の土も揃っている。

この場にある物だけで事足りそうだ。

早速作業に取り掛かり、立派な家庭菜園が完成した。

「すごいすごい！」

もう、「なえ」うえてもだいじょうぶ？」

完成した家庭菜園に、菜々子ちゃんも大喜びで手を叩いている。

それに頷いて、早速プチソウルトマトの苗を植えた。

「おやさい、できるかな」

「頑張ってお世話すれば、きっと出来るよ」

「うん、菜々子ががんばるね！」

あのね、お姉ちゃん。

かんばん、作ろうよ！

やさいができるまでみんなわからないから、ここにやさいできるよって、ちゃんと書いておきなきゃ」

そうだねと頷き、菜々子ちゃんの要望を訊いて、余っていた木片でそれらしい看板を急遽作成した。

早速それを立て掛けると、菜々子ちゃんは満足そうに笑う。

「菜々子、ちゃんとお水あげるかかりだね！」

手伝うよ、と申し出ると、「うん」と嬉しそうに菜々子ちゃんは頷く。「いっしょにがんばったもん、おせわも、いっしょにしようね！」

やさい、いっぱいとれたらいいね！

えへへ……たのしみだね！」

菜々子ちゃんの言葉に、楽しみだ、と頷き返した。



家庭菜園を完成させた後、取り寄せておいた本を受け取りに行こう

と、商店街にある『四目内堂』を訪れると、天城さんと偶然出会った。どうやら天城さんは資格の本を購入したらしい。

何かの資格を取るつもりなのだろうか。

「うん、これから必要かなって思ってた……」

テレビの中の…… “もう一人の私” が言ってたでしょ？

『旅館を継ぐなんて、まっぴら……』って。

あれね、やっぱり……私の本当の気持ちなんだと思う。

だからね、もう少しし、自分に素直になってみる事にしたんだ……」

そう言って天城さんは息を整える様に深呼吸をしてから宣言した。

「わ、私ね、天城屋旅館、継がない！」

……高校出たら、この町、出てく！」

そう言い切った天城さんは、ふっと肩に入っていた力を抜く。

「……言っちゃった。」

……フフ、言っちゃった！」

心の中に溜めていた気持ちを言葉に表した天城さんは、清々し気に笑った。

「それでね、ここを出ても一人で生きていける様に、何か資格を取ろうかなって思ってた。」

インテリアコーディネーターとか、いいかなって……」

鳴上さんはどう思う？」

資格か。

確かに、それは生きていく為の力の一つにはなるだろう。

インテリアコーディネーター、か。

……ちゃんと実益に結び付く資格だ。

「良いと思うよ」

「……うん、何だか、カッコイイよね！」

自分の意見を肯定して貰ったからか、天城さんは嬉しそうに頷く。「でも、資格を取るのにもお金が掛かるから、中々難しくって……」

お小遣い貯めてる分はあるけど、限界はあるし……」

お母さんたちには勿論、言えないしさ……」

こっそり出来るアルバイトとか無いかな……」

確かに。

試験とかを受けたりするのにも元手は必要だ。

こつそり出来るバイト……。

在宅で出来るヤツなら良いのではないだろうか。

「翻訳とかどうだろうか？」

今家で空いた時間とかにやってるんだけど、あれなら自分の部屋でこつそり出来るんじゃないかな」

「翻訳……？」

そういうのあるんだ、全然知らなかったな。

早速応募してみるね！

ありがとう、鳴上さん。

私の気持ち、聞いてくれて。

……頑張ろうって、思えたよ」

善は急げとばかりに帰る天城さんを、手を振りながら見送った。



夕食後、叔父さんは居間で書類の整理をしていた。

……そう言えば、昨日探していた新聞のコピーとやらは見付かったのだろうか？

「昨日の探し物、見付かりましたか？」

「ん？ ……ああ、見付かったよ。」

すまん、心配させちゃったか？」

そして叔父さんは暫し逡巡する様な表情を見せ、そして何かを決したかの様に口を開いた。

「あれは、……千里の、記事なんだ。」

……轢き逃げされて、死んだ時の、な……」

痛みを滲ませる目でそう言い、叔父さんは手にしていた書類を机に置いて、視線を真っ直ぐこちらに向ける。

「…………昨日、話したよな。

まだ犯人が拳がってない、事件の事…………。

…………もう、分かっただろ？

…………これ以上は、この家の中でする様な話じゃない。

…………この話はこれで止めよう」

…………成る程、叔父さんが執着している事件も、その理由も、一応の理解は出来た。

だが、まだだ。

不調を訴える実の娘より優先しなくてはならない程の理由としては、まだ納得出来ない。

「なら、場所を変えましょう。

何なら、外でも良い。

だから、話を続けて下さい」

そう言うと、叔父さんは苦笑して溜め息を吐く。

「…………ははっ、ホント…………誰に似たんだか…………。

全く…………、敵わんな、悠希には…………。

良いだろう、…………ここで話すさ」

そう言って叔父さんは訥々と語り始めた。

「アイツは…………。

千里は、…………菜々子を保育園に迎えに行く途中で、轢き逃げに遭ったんだ。

…………寒い日で、…………雪も深く積もっていて、目撃者も無く、発見は遅れに遅れた…………。

…………あの日、俺に知らせが入るまで、菜々子はずっと一人で待ってたんだ…………。

何時まで経っても来ない迎えを…………、たった一人で、な…………。

…………殺された、なんて…………菜々子には言えなかった。

犯人を捕まえるのが仕事の父親が…………、足取りの一つも掴めてない、なんて事も、な…………」

…………叔母さんが亡くなったのはもう一年以上も前の事だ。

事件発生直後ですらそうなのなら、…………今から新たな手懸かりが見

付かるのは、非常に難しいのだろう……。

死亡者が出る轢き逃げの検挙率は、県によって多少は上下するが、それでも九割以上には上っている。

それなのに、家族が犠牲になった事故であるにも関わらず、未だに犯人に繋がる手懸かり一つ掴めていない現状が歯痒いのだろう。

「……だがな、俺は必ず犯人を挙げる。」

……その為にはプライベートなんて無い。

……菜々子だって、分かってくれるさ」

叔父さんの言葉に、思わずグツと拳を握った。

……分かってくれる……?」

何を言ってるんだ、叔父さんは。

だって、何も話していかないのだろう?

それで、何を分かれと言うのだ。

叔父さんは辛いのだろう。

それはそうだ。

大切な人を理不尽に喪って、しかもその犯人はきつと今も何処かでのうのうとしている。

なのに、自分は刑事なのに、その足取りすらロクに掴めていない。

歯痒いだろう、辛いだろう、苦しいだろう。

その気持ちに完全に同調する事こそ出来ないが、それでも共感しようとする事なら出来る。

犯人を挙げる為に、事件を追い続ける。

別にそれは構わない。

叔父さんなりのモーニングワークなのかもしれない。

だが。

それと菜々子ちゃんを思いを蔑ろにするのとは話が全く別である。

菜々子ちゃんは確かに聞き分けがよく、年齢に不相応な程、他人の事情というものを配慮出来る子供だ。

だが、叔父さんが仕事を優先する事を悲しんだり寂しく思っていない訳では全く無いのだ。

菜々子ちゃんにとっての肉親は、もう叔父さんだけなのに。

そんな叔父さんが仕事の方を優先する様を見て、どうして傷付かない等と思えるのだ？

分かってくれる？ 冗談は止してくれ。

叔母さんを喪った苦しみを、菜々子ちゃんもまた同じく抱えているのだと、どうして考えてあげられないのだ。

叔父さんが目を背けているから、菜々子ちゃんは一人で『お母さんがもう居ない』という寂しさや哀しみと向き合わなくてはならないというのに……！

もしかして、自分は叔父さんにとって不要な存在なのではないか、と菜々子ちゃんは苦しんで泣いていると言うのに……！

犯人を挙げる迄にどれ位の時間が掛かる？

一年？ 二年？ いやもつと掛かってしまうかもしれないし、それこそずっと見付からないかもしれないものだ。

そんな、何時までという期限すら無い個人的な執念に、何も知らない菜々子ちゃんを巻き込んではいけない。

どんなに頑張つて犯人を挙げたとしても、叔母さんはもう帰つてはこないのだ。

それなのに、どうして今日の前にいる菜々子ちゃんを蔑ろにしてまで、過去だけを追い続けているのだ……！

そんなものは、ただの言い訳だ。ただの甘えだ。

向き合うべき事から逃げている事への、言い訳以外の何物でもない。

「そんなの……、ただの言い訳です……！」

菜々子ちゃんが今望んでいるのは、そんな事じゃない……！！

そんな事を、叔父さんが菜々子ちゃんと向き合わない理由になんて、しないで下さい!!」

感情のままにそう言い切ると、叔父さんは衝撃を受けたかの様に見開き、そして唇を噛み締めた。

「……すまん、悠希。

……今は一人にしてくれ」

辛そうに言葉を絞り出す叔父さんに、……それ以上は何も言えな

かった。……言える訳など、無かった。

……叔母さんを喪つて辛いのも、苦しいのも。

それは叔父さんと菜々子ちゃんだ。

自分は、二人の間にある喪失の経験に関しては完全な部外者に過ぎない。

……その苦しみを共有する事も出来ない自分が、偉そうにまるで説教でもするかのように説いて良いものでも無いのだ……。

感情に流され過ぎた。

……反省の必要があるだろう。

「……私も、言葉が過ぎました。すみません」

叔父さんに頭を下げ、部屋に戻ろうと席を立つと、後ろから叔父さんの呟き声の様な小さな声が聞こえた。

「……………悠希。」

……ありがとな」

……返事はせずに、そのままその日は眠りに就いた。





漸く体調が良くなった巽くんは、今日から学校に復帰する。

元々サボりがちで、出席日数的にも危な気であっただけに、早目の復帰が叶って本当に幸いだ。

休養中に、何か不審な事が起こったりという事も無かったらしい。

……天城さんの時の事を考えると、巽くんはターゲットから外れた、という事なのだろうか？

放課後、屋上に巽くんを呼び出すと、気不味そうに何故か不馴れな敬語で話してくる。

「ぶつ、どうしちゃったの、急に敬語になってんじゃん」

里中さんにツッコまれると、巽くんはしどろもどろになって答える。

「や、だってその……先輩たちだったんすよね」

成る程、この場の全員が先輩だという認識になったから、急に敬語になったらしい。

結構律儀だし、所謂体育会系の上下感も持ち合わせている様だ。

「えと……ありがとうございます。」

あんま、覚えてねえけど……。

でも、先輩らが助けてくれたってのは、覚えてるっす」

「私たち、教えて欲しい事があるの。良いかな？」

天城さんに訊ねられ、それに巽くんが頷いたのを確認して里中さんが質問を始める。

「早速なんだけど、あん時に会ってた男の子って、誰？」

完二くんの知り合い？」

白鐘くんの事だろうか。

「ア、アイツの事は……オレも良くは分かんねっす……。

つか、まだ二回しか会ってねえし……」

「あれ、でも二人で学校から帰ってたじゃん？」

「何してたの？」

「や、えと……最近の事とか……ホントその程度で……」

でも、自分でもよく分かんねーっすけど、オレ……」

気付いたら、また会いたい、とか口走ってて……」

「男の子相手に？」

里中さんの質問に、気不味そうに巽くんは頷いた。

「オ、オレ……。正直、自分でもよく分かんねえっすよ……」

何っーのか、女って何かと煩くって、その………スゲー苦手で……」

男と居た方が気が楽で……」

そ、そんで、その………もしかして自分は女に興味持てねータチなんじゃねーかって……」

でも、そんなのゼツテー認めたくねーし、そんでグダグダしてたつて言うか……」

………それで、あの『シャドウ』に繋がった、と。

女性に苦手意識があったとはいえ、あの『シャドウ』は幾ら何でも突飛過ぎだろーとは思っていたが、そういう下地があったと言うのなら、多少は納得がいく。

「まー確かに、男同士が気楽ってというのは、分かるけどな」

花村は同意する様に頷いた。

確かに、同性の方が気楽な場合もあるのは分かる。

「………それで、気持ちちは落ち着いた？」

「あ、もう大丈夫っす。」

要はオレの勝手な思い込みだったって事っすよ。

オレが勝手に壁作って逃げてたっただけの話だったんす」

そう言っって、巽くんは自らの事を語ってくれた。

実家が染物屋だったからか小さな頃からそういうモノに興味を持ってた事、しかしそれを奇特に思われ排斥された事もあって何もかもが鬱陶しく思えてきていつの間にか暴れていた事。

「やっぱオレは、男だとか女だとかじゃなくって、人に対してビビってたんスよね。」

でも、何かスツキリ出来たっス」

そうスツキリとした顔で巽くんは言った。

それを見て、純情で可愛い、と里中さんたちにかからかわれ、巽くんは顔を赤くする。

うん、純情だ。

巽くんをからかう里中さん達を横目に、花村は改めて質問を再開させる。

「それはそうと、俺らを追い掛け回してた後の事で、何か覚えてる事は無いか？」

「あー、えっと、あん時は家に帰ってフテ寝してたんスよね……。」

あれっ？ でも、誰かが来た様な……。」

やはり巽くんの時も何者かが家に訪れている可能性が高い様だ。

……真正面からやって来て、誘拐しているのか……。」

手口はどうにも力業だが、それでも家の者に怪しまれずにこれと言った証拠を残さない内に事を遂行している点を見ると、相当に手際が良い。

しかも、【犯人】からの接触だと明確に断定出来るのがその一点しか無い為、その尻尾を掴むのにはかなり難航しそうだ……。」

「そいつの顔とか、覚えてる？」

「いや、……誰かが来た様な気がするっただけなんで、もしかしたらそうじゃなかったかも……。」

どっちにしろ、顔とかは分かんねっス。

あと思い出せんのは、……何か変な真っ暗な入り口みてえなのとか……。」

で、気が付いた時には、あの変なサウナみてえな場所にブツ倒れてたっス」

里中さんに問われ、巽くんは自信無さげに答えた。

……異常な状態に置かれていたのだ。

記憶が混乱するのは止むを得ない事である。

天城さんの時も、直前の記憶が大分あやふやであった。

「真つ暗な入り口……。」

……それって、テレビ画面とかだったたりしない？」

天城さんに問われ、巽くんは首を傾げる。

突然テレビ等と言われて、意味が分からなかったのだろう。

「あ……？ あー、言われりや、んな気も……。」

てか、何でテレビなんスか？」

「えつと、ちよつと思っただけ」

「警察には何か訊かれたりしたか？」

花村が問うと、巽くんは少し恥ずかし気に頬を掻く。

「あー、お袋が捜索願い出してたんで、ちよつとだけ訊かれたっス。

今と同じ様な事話したら、ワケわかんねーって顔されたんスけど。

……あつと、先輩ら、もしかして探偵みたいな事やろうとしてんスか？」

「あー、ま、大体そんなトコ」

里中さんが頷くと、突然巽くんは頭を下げる

「なら、オレもその頭数に入れてくんないっスか？」

あんな目に遭ったのが、「誰かの仕業」だってんなら、十倍にして返さねえと気が済まねえ」

「マジか！ スッゲー戦力になんじやん！」

で、どうよ、相棒？」

花村の言う通り、荒事に慣れていているらしい巽くんの協力はありがたいが。

「……巽くんがそうしたいって言うなら歓迎するけど、……かなり危険が伴う事になる。

遊びでやってる訳じゃない。

それでも、良いのかな？」

流石に、シャドウとの戦いは、町の不良を相手にするのは訳が違
う。

精々金属バットとか……ナイフで襲ってくるが関の山の不良とは

違い、シャドウの攻撃方法は実に多彩で外見からは完全には予測は出来
ない、まだ見た事の無い攻撃手段を用いる相手もいるだろう。

そんなバケモノみたいな相手と、戦う覚悟はあるのだろうか。

だからこそそれは、巽くんの申し出を了承する前に、確認しなければ
ならない事だ。

「へッ、上等っス。」

オレだって、先輩らが戦ってるトコちよつとは覚えてるんで、ヤ
ベえヤツら相手にしてんのは分かってるっス。

オレは先輩らに命救われたんだ……。

だから、オレは先輩らの為に命張るって、決めてるんで。

面倒見てやって欲しいっス！」

そうか。……ならば、良いだろう。

それが巽くんの意志であると言うのなら、それ以上は不要な問答に
なる。

「了解。よろしく、巽くん」

「あざっス！」

後それと、と、手を手刀の形にして、軽くトスンと巽くんの頭に振
り下ろす。

「折角助かった命なんだから、命張るとか軽々しく言うのは良くない。

巽くんには何かあったら、君のお母さんが悲しむし、私たちだってそ
れこそ寝覚めが悪くなる。

私たちの方針は、『いのちだいじに』、だから。

その所、ちゃんと理解してね」

「了解っス！」

巽くんが頷いたのを見て、なら良し、とこちらも頷いた。



巽くんが仲間になったお祝いに、と、〃特別捜査本部（要はジュネスのフードコート）〃へと移動する。

事情がまだ分かっていない巽くんは当惑気味だったが、お祝いに、とビーフステーキを奢ると、お腹が空いてきていたのだろうか、夢中で頬張っている。

モツギユツモツギユツとビーフステーキを口に運ぶ巽くん事情を説明しているのだが、果たしてちゃんと聞いているのだろうか……。

「あー、えっと、テレビを使って殺人……？　って事あ、撲殺で決まりスね？」

首を傾げながら答える巽くんは、花村の全力のツツコミが飛ぶ。

「ちげー！　テレビで殴ってんじやねーよ！

話聞けっつーの!!」

「……まあ、一度あちらの世界に行けば理解出来るだろうから、今は放っておこう。

それよりも、【犯人】の手口はどうかやら天城さんの時と同じだ」

「そうだな。

まずは拐って、それからテレビに落とす」

「うん、……怖いね……」

天城さんは暗い顔で頷く。

実際にその被害に遭ったのだから、無理もない。

「……今回の件で、【犯人】について、複数の協力者が居るか、或いは体格の良い男性であるという可能性が高まった」

「何でだ？」

不思議そうに首を傾げる花村に、分かり易く説明する。

「例えばだけど、花村は、巽くんの不意を万が一突けたとしても、気を失うなり無力化した巽くんを車まで運べる？

それも、家の人や近所の人に不審がられる事無く」

途端に、花村は首を横に振った。

花村だけでなく、里中さんに天城さんもだ。

「あー……まあ、無理だろうな。

気を失ったヤツって、確かかなり重たく感じるんだよな？

結構な力が必要になるんだろ。

それを、他の誰かに怪しまれない様に手早く車までって……俺には無理だろうな」

「あ、だから複数の協力者が居るか、体格の良い男の人なのかってなるんだ」

花村と里中さんが納得した様に頷いた。

「そう言う事。」

複数の協力者が居るのだとしても、そこそこ以上には体格が良い人たちじゃないと難しいし、もし体格の良い男の人が単独で犯行に及んだりしてるんだとしても、重たいモノを運んだりする力仕事にある程度は手慣れたる人なんじゃないかな、と思う」

「あー、確かに。」

店の手伝いで棚卸しとか品出しとかしてたら分かるけど、ああいう力が要る作業って、慣れてないと体力とかあっても手際よくは出来ねーもんな」

以前花村に頼まれてジュネスの品出しを手伝った時に、身を以て経験した事だ。

「それと……。」

……不意を突けるって事は、巽くんにとって自分を訊ねてきても違和感の無い相手でしかも警戒心を抱き難い相手なんじゃないかって、思うんだけど」

これにはビーフステーキを運ぶ手を休め、巽くんが首を傾げた。

「どういう事っスか？」

「例えば、絶対に普通なら自分を訊ねて来ない人とか、巽くんが潰した暴走族の人とか、警察の人とかが突然訊ねてきたら、巽くんは警戒しない？」

「あー、まー、確かに。」

全然知らないヤツとかが突然家に訊ねてきたら、多分警戒はすると思っつス」

ウンウンと頷く巽くんは、「だろっね」と呟く。

「正直、警戒している巽くんの不意を突いて気絶させたり無力化させるのって、相当難しいと思う」

「だよなあ。」

暴走族を一人で潰すヤツが警戒心丸出ししてる状況でそんな事しようとはフツーは思わんわ」

そもそも、誘拐しようなんて思う人間の方が少ないとは思うが。

……【犯人】はあの特番を見て、ターゲットを巽くんに定めたのだろうから、巽くんを暴走族の総長だと認識していた可能性は高いし、そうでなくとも稲羽の町では暴走族を潰した不良として巽くんの名前は知れ渡っているのだから、巽くんが荒事を得意としている事位は分かっていただろう。

……そんな相手に対しても、犯行に及ぼうと思える位に【犯人】は自分に自信があつたのか……？

「てか、不思議な事と言えばさ」

里中さんが急に声を上げる。

この場の全員の注目が、里中さんに集まった。

「雪子にしろ、完二くんにしろ、多分【犯人】の顔をガッツリ見ている可能性ってあるんじゃないの？」

突然あつちに放り込まれた混乱とかで覚えてないだけで」

「うーん……そう言うのは何も覚えてないけど……。」

でも、誰かに呼ばれた様な事があつた気がするのよ、覚えてるよ。

その時に、顔を見た可能性はあるとは思う」

「そつスね。」

オレも誰かが来た様な気がしてるつス。

もしかしたら、そんな時に顔を見てたんかも知らないっス」

天城さんと巽くんが頷いたのを見て、里中さんが「でしょ？」と頷く。

「いや、顔とか見る間もなく不意打ちで気絶とかさせたんかも知れないけどさ、それでも顔を見られる可能性だってあるじゃん？」

顔を見られても構わないって、スツゴい自信があるって言うか何て言うか……。」

「生かして返すつもりが無かったのなら顔を見られ様が構わないのは分かるが……、【犯人】はターゲットが無事に生還しても何のアクションも起こして無いし……」

……確かに、何かが妙だ。

【犯人】は、姿を見られていない絶対の自信でもあったのか、或いはあちらの世界に放り込んだ段階で記憶があやふやになって覚えてはいられないと確信があったのか。

それか、……顔を見られる事に、不利益を感じていなかったのか。何て言うかさ、そういうトコが引つ掛かんだよねー」

その時、隣のテーブルで談笑する男子生徒達の話し声が耳に届いた。

「つかさ、例のテレビ、最近結構面白くね？」

”次に出んの誰？”とか、気になるな」

「オレ前から、次はぜってーアイツって思ってたんだよ。

名前何だっけ、1年の暴走族上がりの……」

……なんと、彼等は巽くんあの『シャドウ』が映った《マヨナカテレビ》を見てしまったらしい。

その本人が丁度彼等の真後ろの席に座っているのだが……。

……気が付かないとは、げに恐ろしき事である。

「次は誰だと思ってたって？」

巽くんが席を立ち、低い声で訊ねると、談笑していた男子生徒達が凍り付く。

「そいつあ多分、”巽完二”って名前だな……。

因みに、ゾク上がりじゃなくて、ゾク潰した方だけだな。

誰だテメエら……！」

一瞬巽くんがドスを効かせて凄むと、男子生徒達は蜘蛛の子を散らす様にその場から逃げ出した。

舌打ちして座り直す巽くんは、里中さんは溜め息を吐く。

「何か、やり切れないよね……。

殺人事件との絡みとか、よく知らないからああ言う事言ってるのかもだけど、同じ学校の子なのに……」

「関係ねーとか、自分は大丈夫だとか、要は観客気分だつて事なんだろう……」

「そういう事だろうな。」

自分にとつて近しい相手でも無い限りは、ただの娯楽程度の感覚なんだろうなあ……。

傍観者のつもりで何処までも無責任な事とか酷い事言える人つて、結構居るし」

自分に関わる周り全てに対しても無責任な人間というのも居る位なのだ。

自分に関係無いと思っっている限りは、何処までも無責任になれる人間は決して少なくなどはない。

「何か、そういうの悲しいね……」

「てか、やっぱり鳴上の読みが当たってるっぽいよな」

天城さんが少し悲しそうに呟き、花村はこちらを見ながら言う。

それに大きく頷いた。

「その可能性は多いに高まったな。」

テレビでの報道が、ターゲットの基準か……」

ターゲットの基準からの犯人像の絞り込みは難しそうだ……。

「愉快犯だか何だか知らないけど、ホントふざけてる!!」

義憤に駆られたかの様に、里中さんは気炎を上げる。

ふざけている、というのには全面的に同意したい。

「……多分【犯人】にとつては、被害者の生死はどっちでも良い可能性が高い。」

天城さんの時も、そして今回の巽くんの時も。

二人とも生きて戻ってきたのに、【犯人】からは何のアクションも無い」

少なくとも、天城さんと巽くんの件に関しては、『殺害』が目的の犯行ではないという事になる。

しかし、その目的は一体何なのか……。

当初は、『殺害』を目的として……そして確たる証拠が残らず立件が

出来ない様に、あちらの世界を凶器として用いているのだと考えていた。

次に、世間を賑わす為に、……世間で注目されている人を殺害し、尚且つあの異様な死体発見状況を作って世間からの注目度を上げる為に、あちらの世界を凶器として用いているのか、と考えた。

……しかし、現に二人が生還し、【犯人】の思惑は阻止され、連続怪死事件は小西先輩の件だけで止まっている、と世間からは認識されている。

あちらに放り込んでも死ななかつたら、新しく別の人間をターゲットに据える、と決めているだけなのかも知れないが……。

しかし、どうにも矢張妙だ。

ターゲットをあちらに放り込む為の最初のステップである誘拐（この場合は強行手段を使っているだろうから正確には略取）の段階で、既にリスクが高い行為だ。

刑法の224条には、『未成年者略取及び誘拐』には3月以上7年以下の懲役を課すると定められている。

二件立て続けに起こしているし、万が一逮捕されて起訴されても情状酌量される余地はほぼ無いだろう。

殺人の立件をされない様にあちらの世界を凶器としているという、ある種の狡猾な面を見せながら、そういうリスクは平気で犯すあたり、どうにもチグハグな印象を受ける。

……誘拐のリスクを犯してでもあちらに放り込む理由は、果たして何なのか。

「……って、事はだ。

【犯人】の目的はターゲットの殺害、じゃなくって他にあるって事だよな？」

花村が纏めた考えを、頷く事で肯定した。

「……そういう事だ」

【犯人】の目的……？」

里中さんは、花村が何を言いたいのかわからなかった様で、首を傾げる。

里中さんに理解して貰える様に、分かりやすく説明した。

「取り敢えず、『犯人』の行動を整理すると、ターゲットを誘拐して、テレビに落とす。

これだけだ。

なら、その中に犯人の目的が含まれている筈」

「誘拐が目的……な訳無いし……。」

後は……。」

天城さんが首を捻りながら呟くと、里中さんが「あつ」と声を上げ、全員の視線が里中さんに向く。

「《マヨナカテレビ》って線はどう?」

「《マヨナカテレビ》が?」

「ほら、被害者の人があつちに入ったら、《マヨナカテレビ》が変化してたじゃん。」

雪子の時も、完二くんの時も」

山野アナの時と小西先輩の時は未確認だが、天城さんの時と異くんの時は、確かにあちらの世界に人が放り込まれていると、その人の『シャドウ』が映っていた。

……先程の男子生徒たちの様に、件の《マヨナカテレビ》を見ていた人は彼等以外にもそれなりには居るのだろう。

「あの《マヨナカテレビ》を映すつーか、見るのが目的って事か?」

……それが、有り得るな。

見るヤツが見れば、面白いつて感じるんだらうし」

先程の男子生徒達の事を思つてか、花村が頷く。

『シャドウ』とは何なのかという事情を知っている身からすれば、面白いか感じる前に、居た堪らなさとかを感じる代物ではあるが……。

見る人によつては、はっちゃけたバラエティー番組程度の面白味は感じるのかも知れない。

……だがしかし……。

「……それはそうかも知れないけれど。」

……それだと、腑に落ちない事がある」

「何の事だ?」

こちらを見てくる皆の目には、疑問符が浮かんでいる様である。

自分が感じた疑問点を、率直に言葉にした。

「天城さんと異くん、それと小西先輩の時はそれが目的なのかもしれないけれど、それだと一番初めの犯行だろう山野アナの時間が少し不自然だ。」

……一件目の犯行の時に、「犯人」は、『あちらの世界に人を落とすと《マヨナカテレビ》にその人の『シャドウ』が映る』って事を知っていたのだろうか……」

「それは……」

「……山野アナの時以外に、「犯人」に『シャドウ』が映るあの《マヨナカテレビ》の仕組みとかを知る機会はあったんだろうか？」

そんな事を言い出せば、「犯人」はどうかしたら山野アナの事件の時には、『シャドウ』などのあの世界の仕組みとかを知らなかったんじゃないか、という話にもなってしまいが……。

……正直な話をしてしまうと、山野アナの件に関してだけは、ある種の事故である可能性もある、と考えている。

どんな事をしていて、『テレビに落とす』等という状況になるのかは全く想像が付かないが、はっきり言うと、あちらの世界が『自力での脱出は不可能な、高い確率で死の危険が待ち受けている世界』であるとⅡで結び付けられる事を、実際にあちらに訪れて『シャドウ』の驚異を体験していない人間がそれを出来るとはそうは思えない。

自分だって、テレビの画面に体が入ってしまう事に気が付いた時に感じたのは『霧がかかった変な場所に繋がっている』という程度の認識であった。

クマの言葉によれば、「犯人」があちらの世界に直接訪れた事は無さそうだ。

そうであるにも関わらず、最初からあの世界がどういう場所なのか理解した上で犯行を引き起こす、という事は現実的に有り得る事なのだろうか……。

「あー、もう、分っかんねーよ!!」

チクシヨウ、何で俺、もっと頭がよくねーんだ!!

全然、解決出来てねーじゃん！」

ガンツ、と机に頭を打ち付ける様な勢いで、花村は落ち込んだ様に頭を抱える。

……花村が落ち込む必要性は無い。

全知全能の存在で無い以上、分からない事があるからと言って己を責める必要性など無いだろう。

それに……。

「何で落ち込む事あんスか？」

オレ、先輩らの事スゲーって思ってるんスけど。

だって先輩ら、オレの事に気付いて、体張ってでも助けに来てくれたじゃねえっスか。

それで十分っスよ」

「私だって、助けて貰った。

解決はまだでも、もう二人も助け出してる」

巽さんと天城さんにそう言われ、花村は顔を微かに顔を上げる。

「それは……、そうだけどさ……」

「それに、完二くんがターゲットになってるのは、当たってた。

大丈夫だよ。

このまま行けば、「犯人」にも辿り着けるよ、きつと」

里中さんの言葉に頷いてから、花村を励ました。

「私たちはそう言う事のプロじゃない。

知る事が出来る情報も、そもそもやれる事だって、限られてくる。

それでも、手に出来た情報から新たに考える事は出来るし、やれる

事だって何も無い訳じゃない。

私たちは私たちが出来る事を、出来る範囲で精一杯果たせば良いんだ」

自分たちは、物語に出てくる様な名探偵たちではないのだ、残念な事に。

何もかもを直ぐ様解決出来る様にはできていない。

小さな一歩ずつでも、地道に進んで行くしか無いのだ。

だから元気を出せ、と花村の頭を軽く叩いた。

花村は気持ちが悪く落ち着いたのか、顔を上げる。

「そーだな。」

自分にやれる事、やってかなきゃな。

取り敢えずは、今まで通り雨の日に《マヨナカテレビ》を確認するって事だよな」

その言葉に、そうだな、と頷く。

ある程度ターゲットになる人の目星は付けられるだろうが、《マヨナカテレビ》が大きな手懸かりになる事は間違いないだろう。



.....
.....
.....
.....
.....

巽くんはクマを引き合わせると、クマは巽くんの《可愛いものセンサー》に触れたらしく、やたらクマを触りたがったが、当のクマには却下されてしまった。

その様子に爆笑した天城さんに毒気を抜かれた巽くんは、気になっていたのか、天城さんも「犯人」のターゲットだったのか、と訊ねる。

そうだよ、と天城さんが肯定すると、余程気になっていた事だったのか、巽くんは重ねて訊ねた。

「てこたあ、先輩も何かこう、晒け出したんスか？」

プライバシーに踏み込み過ぎの質問だ。

言い淀む天城さんに、更にしつこく巽くんが訊ねた。

それにイラッと来たのか、天城さんは凄まじい切れの平手打ちを巽くんに喰らわせる。

スナップを効かせ過ぎたのか、かなりいい音がした。

「あ、ごめん、スナップ効いちやった……」。

次からは、もっと優しくするから……」

何故か、もつと優しく、と言われた巽くんは、頬を押さえながらも喜んで……。

……そつとしておこう。

巽くんが仲間になった記念に、とクマが眼鏡を渡すのだが……。

……何故か鼻眼鏡を渡している。

途端に天城さんは目を輝かせて、早く掛ける様に巽くんを促した。訝しみながらも巽くんがそれを掛けると、途端に天城さんはお腹を抱えて大爆笑する。

……天城さん的には、鼻眼鏡はかなりツボを突くモノなのだろう。どうやら、天城さんの強い薦めで作成されたモノらしい。

案外似合っているそれに、天城さんだけでなく、当人の巽くん以外は笑いだす。

ワナワナと震えた巽くんはクマに詰め寄り、クマがもう一つ持っていた眼鏡を強奪するが、しかしそれも鼻眼鏡（スピア）であった。キレた巽くんは、それを筆取り、霧の彼方へと放り投げる。

そして、三度目の正直として、やっと普通のデザインの眼鏡がクマから手渡された。

グラサン仕様で、巽くんによく似合っている眼鏡だ。

「要らねえモン作るくらいなら、最初っからこつちを渡しやがれっ！」
気焰を上げる完二くんを宥めながら、改めてこの世界やシャドウについて説明する。

巽くんも大体は理解してくれたらしい。

今日はもう遅いからこの辺りで引き上げるか、と花村が提案した時、どうしてもクマに訊ねてみたい気掛かりな事があった為少しだけ解散を待って貰う。

「そう言えば、クマ。」

一つ気になつてゐる事があるから、訊いても良いかな？」

「ん？ どしたのセンチ？」

「いや、……天城さんのお城も、巽くんの大浴場も、それから小西先輩の商店街も、各々場所が大分離れてるけど……。」

それって、何で分かる？」

「んー、多分だけど、そつちの世界で入れられたテレビの場所がバラバラだからだと思うクマ。」

同じ場所のテレビから入ったなら、こつちでも同じ場所に出れるし、バラバラな所から入ったなら、全然別の所に出ちゃうクマ。

それがどーしたクマ？」

……成る程、やはり、そうか。

あちらとこちらに場所と場所の対応があるのなら、被害者たちがこちらに囚われていた場所がバラバラの場所であると言う事は、【犯人】が被害者たちをテレビに放り込んだ場所がバラバラであるという事だ。

クマに肯定されたその事から、ある一つの可能性が浮かび上がる。一人を入られる程の大きさテレビと言うのは、そこそこ以上に値が張る物だし、そう何台も用意出来る物ではない。

それに、人を放り込む為のテレビを置いてある場所を複数持つというのは非効率的だ。

ならば、何故被害者たちが放り込まれた場所がバラバラなのか。

それは、【犯人】が犯行に用いているテレビ自体が移動しているからだ、とは考えられないだろうか。

拐った人を一々何処かまで運んでからテレビに放り込むよりは、無力化させて拐った直後に車に用意しておいたテレビに放り込んでしまう方が、余計なリスクは負わない。

万が一車を調べられた所で、出てくるのはテレビだけ。

誘拐の証拠も殆どと言って良い程残らない。

……そうやって捕まるリスクを極力抑えているのだとすれば、【犯人】は嫌な方向に頭が回る人間なのだろう。

「……いや、【犯人】の手懸かりになるんじゃないかと思ってね」

もし、テレビを持ち運んで犯行に及んでいるのなら、【犯人】が使っているのは大型のテレビを運搬しても不自然では無い位の大きさはある車だろう。

それもまた、一つの手懸かりにはなる。

待たせてしまっていたみんなに、一言礼を言ってから、テレビの中の世界を後にした。

……

……

……

……

▲▼▲▼▲▼

【2011／05／24―2011／05／26】



【2011／05／24】

部活で汗を流した後、愛屋で駄弁る。

何時もの流れだが、今日は前回は家の用事で来れなかった一条も一緒だ。

一条は明るいが……。

……何だろう、何処か元気が無い。

無理に訳を話せ、とは言わないが、それでも気になるモノは気になった。

どうやら長瀬が一条の家について話したのを、一条も知っているらしい。

それについて一条は軽い口調で話す。

どうやら前の時は社交場で挨拶回りをしていたのだそう。

この自分がだぜ、等と一条は茶化すが、元々細かい部分での一条の仕草が良い所の育ちを感じさせるモノだったから、あまり意外には思わなかった。

一条の家では、正に名家の跡取りな態度でいるらしく、『康様』と呼ばれているとか。

康様については、あまり似合わないなど思ったが……、勉強や習い事を頑張っている一条は、純粹に凄いな、と感じた。

そう言った名家の跡取りらしくある為に努力する事を、『給料分は働く』と一条は言う。

給料……と言う言い方に違和感を感じ、首を傾げていると、一条が苦笑して説明してくれた。

……どうやら、一条は子宝に恵まれなかった一条家の当主が、一条の家を潰さない為に孤児院から引き取ってきた子供だったらしい。

しかし、子宝に恵まれなかった当主夫婦にも今は二歳となる娘が生まれたのだとか。

それを明るく打ち明けられて、一瞬どう返すべきか迷い、思わず一条に大丈夫か、と訊ねてしまった。

それに一条は明るく笑って頷く。

家を継ぐと言うのも堅苦しいし、やはり血の繋がった子供に継がせるべきだろう、と。

……果たしてそれで良いのか、それはあくまでも部外者でしかない自分には判別出来る事では無かった。



今日の夜から家庭教師のアルバイトを始める事となった。
教える相手は中学二年生の男の子だ。

「どうも、中島秀です」

そう挨拶したのは、眼鏡をかけた利発そうな男の子だ。

少々理屈屋っぽく小生意気そうな顔をしているが、この年頃の男の子としてはそう珍しくもない。

どうやら中島くんのお母さんは、中島くんが自慢で仕方が無い様だ。

お母さんの中島くん自慢が始まりそうになったのを、中島くん自身が遮ってお母さんを部屋の外に追い出そうとする。

「それにしても、鳴上さん、だったかしら？」

八高って最近目覚ましい伸びをみせてるでしょう。

秀ももう二年生だから、志望校とかもそろそろ考えていかなきゃいけないのよねえ。

まあこの子の事だから、私も心配はしてないけど、行く行くは国公立大を目指すとなると……」

また自慢が始まりそうになったのを、中島くんが遮って今度こそお

母さんを部屋の外へと追い出した。

……………。

大変だな、親にこうも勉強に関して期待されて、他人にも自慢されるというのは。

自分の両親は無関心という訳では決してなかったが、良い成績を修めた所で「よく頑張ったな」位の反応だったし、少なくとも娘の成績を他人に自慢した事は無かっただろう。

「……………鳴上さん、でしたよね。」

言っておきますけど僕は、八高なんかに行く気はありませんから。行ってた塾のレベルが低かったから家庭教師に切り替えただけですし……………、直ぐに来れる家庭教師が鳴上さんしか居なかっただけです。

鳴上さんの能力が低ければ、直ぐ様変えて貰いますから、そのつもりで」

それはそうだろう。

態々能力の低い家庭教師を雇い続けるなど、実に無意味な事だ。

言い方こそ少々生意気だが、中島くんの言っている事は至極当然の内容である。

それに八高はまかり間違っても進学校ではないから、将来的に受験を念頭に置くと、選択肢として入ってこないのも当然の話だ。

尤も、それを現八高生に言うのはやはり生意気なのではあるけれども。

「中島くんの期待に沿える様に頑張るよ。」

これから宜しくね」

「……………どうも。」

……………じゃ、早速始めましょうか。

苦手な教科は特には無いですよ」

自分も、一般的な高校受験に必要な科目で、教えるのに自信が無いモノは無い。

「中島くんが、一番興味がある科目にしようか」

「興味がある科目？」

「その科目が好きって理由でも良いし、何か気になっている問題があるとかって理由でも良い。」

そういう科目、中島くんにはあるかな？」

興味がある、というのはその分野を理解していく為にもとても大切な要因だと自分は思っている。

苦手科目が無いと言うのなら、得意科目を徹底的に伸ばせばいい。

「えっと、じゃあ……数学でお願いします」

中島くんの勉強を見ると、確かに理解が早い様だ。

スラスラと問題を解いていつている。

少し詰まった問題も、少しヒントを出せば直ぐに解答を導き出す。

これは実に教え甲斐がありそうだ。

「あつ……もうこんな時間だ……。」

続きは次回ですね。

……意外と、教え方上手かったですね。

分かり易かったです。

……まあ元々、数学は好きだったってのもあるからだとは思いますが、

次からは来て欲しい日を予め連絡しておきますので、先生の都合がつく日に来て下さい。

えつと……、これから宜しくお願いします」

そう言って、中島くんはペコリと頭を下げる。

どうやら中島くんは家庭教師として認めて貰えた様だ。

バイト代を受け取って、その日は家へと帰った。



【2011／05／25】

放課後になり、図書館で本でも借りようかと廊下を歩いていると、

何に急いでいたのかは知らないが、後ろから廊下を走ってきていた男子生徒にぶつかりかけた。

男子生徒は「悪い」とだけ言って、そのまま階段を駆け降りて行く……。

……………。

ふと、足元に何かが落ちているのに気が付いた。

何かのキャラクターもののキーホルダーの様だ……。

先程の彼の落し物だろうか？

届けてあげようにも、彼の名前やクラスも知らないし……。

少し困っていると、階段脇で友人たちと談笑していた長瀬が声を掛けてきてくれた。

「どうした、鳴上？」

「いや……。」

……………さつき走ってきた男子生徒なんだが……」

長瀬の知っている奴か、と訊ねると、どうやら同じクラスの生徒だった様だ。

「あー、高山だな。」

「アイツ、放課後になったら何時も急いで帰るんだ」

「そーそー、アイツ、付き合い悪いよなー。」

何か色んな所でバイトしてるんだっけ……？」

長瀬と談笑していた生徒も話に加わる。

「らしいよな。」

高山が前に沖奈でバイトしてんの見たって言ってた奴がいるし、ジュネスでバイトしてる所なら見た事あるぜ。

つかさ、そんなにバイトばっかしてどうするって言うんだろかな？」

さーな、と長瀬たちは再び談笑を始め、高山の話題はそのまま流れていった。



本を借りて、そろそろ下校しようと下駄箱に向かうと、下駄箱の辺りでもう帰った筈の高山が何かを探している様にウロウロしている所に出会った。

……もしかして……。

「……これを探しているのか？」

先程拾ったキーホルダーを見せると、高山は驚いた様に顔を上げた。

「あ、ああ……。

鳴上……だったか？ 二組の。

拾っててくれたんだな、ありがとう」

高山は手早く礼を言いながら、キーホルダーを受け取る。

「大事な物なんだ……これ。

……つと、そろそろ行かないとヤバイな……」

そう言っただけで軽く頭を下げた高山は、時計を確認するなり慌てた様に校舎を飛び出していった……。



帰りが遅くなる叔父さんを抜きにした夕食後、菜々子ちゃんは何やらソワソワとしている。

何があったのか訊ねてみると、少し躊躇いながら「お父さんに内緒にして」と頼まれた。

勿論だ、と固く約束すると、菜々子ちゃんは一枚のプリントを差し出した。

来月行われる授業参観の開催日に関するアンケートだ。

開催希望日を探ねているモノで、学校の先生から親に渡す様に言われていたらしい。

「……お父さん、おしごとあるから……。

きつと、来れないよね……」

そう呟く菜々子ちゃんは悲しそうだ。

……菜々子ちゃんはまだ一年生だ。

自分だって、この歳の頃は、学校行事に親が来てくれたら嬉しかった。

「……そうかも、知れないね。」

叔父さんにはお仕事があるから、もしかしたら、行けないかもしれない。

……お姉ちゃんもね、お父さんもお母さんも……仕事が忙しい人だったから、授業参観とか運動会とか、そういう行事に親が来れなかった事もあったよ。

でも、……ほんの30分だけとかでも、……無理にでも仕事を空けてでも見に来てくれた時は、凄く、嬉しかった」

そんな時、相当に無理をさせてしまっているのは子供心に分かっていた。

両親共に多忙を極める人で、休みを予め申請していても急に潰れてしまう事なんて、しょっちゅうだった。

何時しか、無理に来て貰わなくても良い、と思う様になり、そういう行事に関しても学校から渡されるプリントを見える場所に貼るだけにしよう様になっていたが。

それでも。

一コマ分の半分の時間も居なくても、ほんの十数分だけでも。

急いで来たのが分かる位に息を切らせてやって来てくれていたのは、……本当に嬉しかったのだ。

確かに、叔父さんは忙しい。

日によつては最初から無理だろうし、休みを取っていたとしても、何か事件が起こったら駆り出されてしまうかもしれない。

絶対に来れるとか、そんな保証はどう頑張っても出来ない。ただ。

叔父さんが、最初から行きたくない、と思うとは思えないし、それに。

『叔父さんに来て欲しい』という菜々子ちゃんの思いは、言葉や行動に

示さなければ伝わらない。

思っているだけでは、何も伝わらないのだ。

「どうしても叔父さんの都合が付かないかもしれない。

急にお仕事が入ってしまうかもしれない。

絶対に来れるよ、なんて、お姉ちゃんは言えない。

「ただどね、菜々子ちゃん、『来て欲しい』って気持ちは、言葉にしないと叔父さんに伝わらないんだ。

だから、頼んでみない？」

「……いっても、いいのかな……」

「大丈夫だよ。」

「……それに、お姉ちゃんも菜々子ちゃんと一緒に頼んでみるから」「ほんとう？」

「お姉ちゃん、ありがとう！」

「これ、お父さんにわたしてみるね。」

「来てって……ちゃんという。」

「お姉ちゃんにはなしてよかった！」

「パアアツと明るく笑った後、菜々子ちゃんはポツリと、自分に言い聞かせる様な様子で呟く。

「きつと、……来てくれるよね。」

「……“ほんと”のお父さんだったら……。」

「……ね、お姉ちゃんのむかしのはなしして？」

「菜々子ちゃんに頼まれ、自分の昔の話を語った……。」



叔父さんが帰ってきたのは、それから凡そ一時間程後の事だった。

「疲れた顔をして座る叔父さんに、菜々子ちゃんは意を決してプリントを差し出そうとするが、「後にしてくれ」と断られる。

「すみませんが、見て上げてくれませんか」

そう自分からも頼むと、叔父さんは渋々とプリントを受け取った。しかし、内容を見て深い溜め息を吐く。

「授業参観のアンケート、ね……」

希望日って言われてもな……」

暗に無理だ、と言われているのは分かったのだろう。

菜々子ちゃんは拳を握り、俯いて震え、そして絞り出す様な声を上げた。

「……………」

……………いい。

もう、いい……。もういいよ！

かかなくていいよ！ 来なくていい！！

どうせ、ジケンなんでしょ!? おしごとなんでしょ!?

お父さんはいつもそう!!

ゴールドンウィークのときだって、そうじゃないときだって！

お父さんは菜々子より、わるい人とか、ほかの人の方が、だいじなんでしょう!?

想定外の反応だったのだろう。

叔父さんは癩癩を起こしてしまった菜々子ちゃんに、どうして良いのか分からず、オロオロと狼狽えて視線を彷徨わせる。

縫る様な目で此方を見詰めてきたのだが、それには首を振って答える。

自分が口を挟むべき事では無い。

「ほんと”じゃないから……」

お父さんは、”ほんと”のお父さんじゃないから!!」

溜め込んでいた思いを、泣き出しそうな声で叔父さんに叩き付けて、菜々子ちゃんは家を飛び出して行ってしまった。

「なっ……菜々子!」

待ちなさい!

……………」

叔父さんがそう声を掛けても、菜々子ちゃんは戻って来ない。

何が起こったのか理解仕切れていないのか、呆然と立ち尽くす叔父

さんの頬を軽く叩く。

「叔父さん、呆然としてる場合ではありません！」

早く探しに行かないと！」

「あ、ああ……」

急いで家を飛び出しても、菜々子ちゃんの姿は見えない。

……こんな夜中に菜々子ちゃんの年頃の子供一人は危険過ぎる。

早急に見付け出さなくては。

携帯を取り出し電話帳を開き、急いでメールを作成する。

「ジュネスの方には花村に、商店街の方も友達に声を掛けて探して貰います!!」

菜々子ちゃんの足ではそう遠くには行けない筈!!

兎に角、菜々子ちゃんが行きそうな場所を探して下さい!!

私はこつちから探すので、叔父さんはあつちからお願ひします!!」

叔父さんが領いたのを確認し、その場を駆け出す。

花村に巽くん、天城さんに里中さん、一条に長瀬、と、菜々子ちゃんを知ってる人や菜々子ちゃんが行きそうな場所の近くに住む人全員に頼み込んで、菜々子ちゃんを探して貰う。

商店街の辺りに関しては、自分よりも地元民のみんなの方が詳しいし、ジュネス近隣は花村が探してくれている。

他に菜々子ちゃんの足で行ける範囲内で、菜々子ちゃんが行きそうな場所は……。

……通っていた保育園……?」

いや、それは遠い。

お母さんとよく遊んだという公園……?」

……それは場所が分からない……。

『……お母さんいたときね、お母さんとお父さんと菜々子の三人でね……、鮫川の所でお花つんでね……』

その時、脳裏に以前菜々子ちゃんから聞いた話が思い浮かんだ。

「……鮫川か……?」

そこに居てくれる事を願ひ、鮫川へと足を運んだ。

するとそこには、同じ結論に至ったのだろうか、叔父さんもやって

くる。

「くそつ、何処だ……、菜々子……！」

焦って周りを見回す叔父さんの視線が、ある一点で留まった。

その視線の先を辿ると……、河川敷に降りる階段に菜々子ちゃんが膝を抱えて座り込んでいた。

……微かに体が震えているのは、寒いからではなく泣いているのだろう。

菜々子ちゃんが無事見付かった旨を搜索してくれている皆にメールで一斉送信しつつ、「早く迎えに行け」と視線で叔父さんを促すと、叔父さんは何故か首を横に振った。

「……『本当の父親じゃない』、か……。」

……すまん。

お前が……行つてやつてくれないか……」

「ですが叔父さん……」

「悠希……。」

……頼む、迎えに行つてやつてくれ。

……お前の言う事の方が、素直に聞くだろ……」

「そういう問題では……！」

素直に聞くとか聞かないとか、そんな問題なんかではない。

そう反論しようとした言葉は、苦し気に首を横に振った叔父さんに遮られた。

「……いや、そうさ。」

お前は、あいつの『家族』だ……。」

俺なんかより、余つ程歴とした……な。

俺は……、菜々子が無事なら、それで良い」

「なら、それを直接菜々子ちゃんに伝えてあげれば良い！」

それだけで、良い。

菜々子ちゃんが求めているのは、その言葉だ。

簡単な話だ。

それを面と面を向かつて伝えれば良いだけ。

出来る筈だ。

だって、菜々子ちゃんの『家族』は、叔父さんなのだから。

「……頼むよ、悠希……」

だが。そう言い残して叔父さんは身を翻して去ってしまった。

呼び止めても振り返らない叔父さんを、どうする事も出来ずに仕方無しに見送る。

……今は菜々子ちゃんの方を優先しなくては。

階段を降りると、菜々子ちゃんは此方を見上げてきた。

「……お姉ちゃん……」

泣き腫らして赤くなつた目を擦る菜々子ちゃんを、そつと抱き締める。

「……帰ろ、菜々子ちゃん……」

「……」

微かに首を横に振つた菜々子ちゃんに、優しく囁いた。

「菜々子ちゃんを見付けたのは、叔父さんだ。」

……叔父さんは、ちゃんと菜々子ちゃんを捜していたんだよ」

「……お父さん、さめがわのこと、なにかいつてた……?」

……それには静かに首を横に振つた。

叔父さんも、菜々子ちゃんとの思い出を思い出したからこそここに捜しにきたのかもしれないし、単に偶々だったのかもしれない。

……それは、叔父さんではないから自分には分からない事だ。

「……お父さん、わすれちゃつたのかな……お母さんのこと……」。

お母さんの話、ぜんぜんしてくれないし……」

叔父さんは、叔母さんの事を忘れてなどいない。

……忘れる事など出来ないからこそ、今も苦しんでいる。

叔母さんの事を話題に出せないのは、それが今も尚生々しく叔父さんを苛み続けているからだ。

「菜々子、……お母さんにあいたい……」

ポツリと呟かれた菜々子ちゃんの思いに、抱き締める力をそつと強め、ポスポスとその頭を撫でる。

お母さん会いたい。

それは、そうだろう。

菜々子ちゃんの年頃の子供にとっては、お父さんやお母さんと言った身近な家族が世界の全てだ。

お母さんが居ない、と言うのは、謂わば世界の半分以上が突然無くなってしまったにも等しい。

その喪失感、計り知れない。

会いたい、お母さん会いたい……。

そう思うのは当然だし、今迄心に押し込めていたその思いが溢れ出してしまいうのも仕方が無い。

……合わせてあげられるなら、何と少しでも会わせてあげたい。

しかし、もう叔母さんは、この世界の何処にも居ないのだ。

「きつとお父さん、お母さんのことわすれちゃったんだ……。

しやしんもなくなってた。

……きつとすてちゃったんだ……。

……お父さん、菜々子もすてちゃうのかな……。」

写真……。

そう言えば、叔母さんの写真は仏間に飾られた遺影以外には見掛けた事が無い。

きつと、叔父さんが何処かに仕舞ってしまったのだろう。

……叔母さんとの思い出を、思い出してしまふのがきつと辛いから。

……それでも、罷り間違っても叔父さんは写真を捨てたりなんかしていない。

それは、断言出来る。

もう、その写真たちしか、叔母さんとの思い出の写真は残っていないし、それ以上新たに増える事は決して無いのだから。

それと同じく、叔父さんが菜々子ちゃんを忘れたり、それこそ捨ててしまうなんて有り得ない。

叔母さんを思い起こさせてしまうから、菜々子ちゃんと向き合う事を避けてしまっている叔父さんだが、それでも、菜々子ちゃんへ向ける思いは無くなったりなんてしない。

「……そんな事、無い。そんな事無いよ。」

……叔父さんは忘れたりなんかしないし、捨てたりもしてない。

……だからね、菜々子ちゃん。

一緒に帰ろう」

不安がらせない様に可能な限り優しく微笑んで、手を差し出す。

「うん……」

差し出したその手を、ギュツと掴んで菜々子ちゃんは立ち上がった。

此処まで走ってきた疲れたと、泣き続けた疲れで足元が覚束無い菜々子ちゃんを、背負って家へと向かう。

「……お姉ちゃん。」

……菜々子“ちゃん”、じゃなくって……、『菜々子』って、よんで……。

……だって、お姉ちゃんは菜々子の“かぞく”なんだもん……」

その道中で、ポツリとそう呟かれ、良いよ、と頷く。

“ちゃん”付けを何処か他人行儀に感じたのだろう。

「そうだね。うん、分かったよ、菜々子」

そう答えると、菜々子がコクリと頷いたのが背中越しに分かった。

家に帰り、菜々子を寝かせて部屋へと戻ると、携帯に随分とメールが届いている事に気が付く。

開いてみると、菜々子の搜索に手を貸してくれた皆からのメールだった。

菜々子が見付かった旨を一齐送信した後、携帯を見ている余裕がなくて、返信に気が付かなかったのだ。

皆、夜遅くの唐突な依頼であったにも関わらず、「良かった」や「安心した」と返信してくれている。

その事が、どうしようも無い位に、只々嬉しい。

各々に、こんな時間にも関わらず快く搜索に手を貸してくれた事に感謝と礼を述べたメールを送り、その日は眠りに就いた。



【2011／05／26】

……バスケット部の活動日なのだが、一条の姿が見えない……。結局、部活中に一条がやって来る事も無かった。

急用だったのだろうか、と思いながら下駄箱を見ると……。どうやらまだ学校内にいるらしい。

……どうかしたのだろうか。

気になって一条の姿を探すと、一条は屋上で大の字になって仰向けに寝転び、夕暮れ時の空を見上げていた。

その横に腰掛けると、一条が視線をこちらに向ける。

「あ、鳴上……。部活、終わった？」

「ああ、今日の分はもう終わった。

……何か、あったのか？」

「何も無い……。」

や、違うな、ある。

……でも、大した事じゃ無い」

一条は言葉を選びながら溜め息を吐いた。

……何かはあったのだろう。

「大した事じゃ無くても、何だったら私に話してみないか？」

多少はスッキリするかもしれないだろ」

「そっか、ありがとな。

……オレさ。

……バスケット、好きか分かんなくなつた」

黙って続きを促すと、一条はポツポツと語り出す。

「好きにしろって、言われたんだ。

バスケットやんの、あんなに反対してたお婆様とかが……。急に、バスケットでも何でも、好きにすれば良いって。

んでき、朝一人で練習してたんだけど。

……何も感じなかった。

楽しいとか、悔しいとか……、そう言うのも何も。

……で、分からなくなった」

そう言って一条は空を見上げた。

「放課後、ずっとここに居てさ。

したら、色んな部活の音が聞こえてきて……。

……何でみんな、あんなに楽しそうなんだろうなーとか、そんな事

思ってた。

楽しそうにしてるみんなの事とか、急に遠くに感じて……。」

空を見上げていた一条が、あつ、と声を上げる。

どうやら鳥が目に留まった様だ。

「……鳥は良いよな。

あんな高い所飛べて。

オレ……、何か……海の底に居るみたい」

……一条の悩みは、外野がどうのこうのと言ってどうにかなる問題

では無い。

だから……。

「……ゆっくり、休めばいいさ。

何なら、何処かに出掛けたって良い。

一条はずっと頑張ってきたんだ。

偶には……そうやって休む時があったっていいだろ」

ゆっくりと身も心も休めたら、気持ちの整理だつてつくだろう。

今は、そうとしか言つてやる事が出来なかった。

「はは……ありがとな、鳴上。

……それも、そうだよな。

別に、何か今すぐに結論が必要って訳じゃないし。

偶には、こうやってサボってみるのも、いいしな……。」

そう言って一条は笑った。

しかし、その表情は晴れない。

「次の部活は、ちゃんと行くよ……。」

捜しに来てくれたんだよな？

……ありがとな」

礼を言った後、一条の表情は翳る。

「もうちよつとだけここに居るよ。」

……今夜、一条の親戚が来る事になってさ。

心の準備、……まだ上手く出来て無いんだ。

仮面被んの、結構上手いんだけど、偶にシンドくなるんだよね。

……悪い、今は、一人にして……」

「そうか……。」

……なら、私はもう行くよ」

後ろ髪を引かれる様な思いだったが、一条の希望を叶えるためその場を離れた。



叔父さんと色々な事を話ながら時計を確認する。

……もうそろそろ菜々子は眠る時間だ。

その時、居間にやって来た菜々子ちゃんは一冊の本を抱えていた。

「ん、どうした？」

「……お父さん、……きょう、ねるまえに本よんでくれるっていった

……」

「あ……ああ、そうだったか……。」

分かった分かった、少しだけだぞ」

「やったー!!」

良かったね、と微笑ましく菜々子が喜ぶ様を見ていると、叔父さんの携帯が鳴った。

急いでそれに出る叔父さんに、菜々子の笑顔が翳る。

「はい、堂島。……市原さん！」

……市原、と言えば、先日叔父さんが夜遅くであつたにも関わらず

急いで取りに行つた封書の送り主であつた人だ。

……その人から直接電話が掛かつてきたという事は、叔母さんの事件に関して何か新たに見付かつた事でもあつたのだろうか？

「はい……はい……。」

それじゃ、結局……。

あの、市原さんの都合さえよければ、今からそちらに……。

……分かりました。

それじゃ……。」

そう言つて叔父さんは携帯を切る。

……会話は断片的にしか分からなかつたが、それでも、叔父さんが今から市原さんの所に行こうとしているのだけは分かる。

それを察した菜々子も、表情を暗くする。

「……お父さん、行つちやうの？」

「仕事……だからな」

そう言つて立ち上がる叔父さんに、約束したのに、と菜々子は食ひ下がる。

……自分の事が、要らなくなつてしまつたのではないかと、菜々子は不安なのだ。

何時になく食ひ下がる菜々子に、叔父さんは眉を顰める。

「そんなの、いつでも……。」

「『何時でも』って、何時のつもりですか？」

叔父さんの言葉を遮つて、その言葉を逆に問う。

『何時でも』 『何時でも』 ……。

その言葉を理由に、叔父さんは菜々子との約束を反故にしてきた。

『何時でも』なんて、嘘っぱちだ。

何時でも、叔父さんは仕事を……叔母さんの事件を追う事を優先してきたのだから。

自覚はあつたのだろう。

叔父さんは言葉に詰まつて、微かに呻いた。

そして視線を彷徨わせ、自分を不安気に見上げる菜々子と目があつた叔父さんは、観念した様に苦笑いする。

「けんか……してるの？」

い、行つていいよ……お父さん」

「そんなんじゃない……。」

ごめんな、菜々子。

それより本つてのは、それか？」

心配そうに見上げた菜々子の頭を撫で、菜々子が抱えていた本を受け取る。

「……いいの？」

「約束、したからな。」

ほら、行くぞ、菜々子」

叔父さんに促され、菜々子ちゃんは笑顔で頷いて部屋に入る。

暫しの間、叔父さんが本を読み聞かせる声が菜々子の部屋から聞こえてきた。

大体本一冊分を読み終えた辺りで叔父さんは戻ってくる。

やれやれ、と口では言っているが、その顔は優しさに満ちていた。

「話をしよう」、と叔父さんは目の前に座る。

そして、訥々と語り始めた。

市原さん、というのは叔父さんの先輩にあたる人で、叔母さんの事件の鑑定をやってくれている人であるらしい。

先程の電話は、その鑑定結果が出た、という報告だった様だ。

だがしかし、電話口の様子では、新たな手懸かりは見付からなかったのだろう、との事。

そしてそれは叔父さんにも分かつてはいたのだが、……やりきれない思いがあるのだろう。

……叔母さんを轢き逃げしたのは、恐らくは大型の白いアメリカ製のセダン。

……稲羽にはそんな車の持ち主は居ないし、修理・廃車された車にも該当する記録は無い。

もしかしたら、もう日本に存在しない可能性すらある……。

そう語った叔父さんは、ポツリと溢した。

「……怖いんだ。」

……犯人を捕まえられないかもしれないねえって事が……。やりきれねえ気持ちをも、ぶつける所すら見付けられず、呑み込めかねえって事が……！

……菜々子を見る度に……。

千里と似ている所を見付ける度に……。

……千里が、もう居ない……帰って来ないって現実を突き付けられている気がして。

……怖いんだ……」

……初めて、直接語って貰えた叔父さんの心情に、半ば無意識に微かに目を伏せた。

……叔父さんの様な大人の人が、高校生位の年頃の子どもに、「怖い」と素直に吐露する事が何れ程大変な事なのか、それは分かっている。

……それでも、叔父さんが生きてるのは、今だ。

例えそれが、何れ程怖くても、辛くても。……向き合わなくてはならないのは、もう変える事も取り戻す事も出来ない過去ではなく……、菜々子と生きる今と、それに続く未来なのだ。

「……まさかお前にこんな事を話す事になるたあなあ……」

……叔父さんの深い葛藤に触れる事が出来た……。

……辛い思いを誰かに話す、と言う事は重要な事だ。

言葉に出す事が辛く苦しい事なのだとしても、黙して抱え続けているとは何時かそれは膿んでしまい、もつと苦しみを抱えてしまう事になりかねない。

……叔父さんは叔母さんを喪ってから今迄、自分の思いを吐き出した事は無かったのだろう……。

……自分が、叔父さんの苦しみを解決する為に、具体的かつ直接的な何かをしてあげられるとは、思っていない。

叔母さんを轢き逃げした犯人を見付け出して来る事も、叔母さんを生き返らせる事も、自分には出来ない。

自分出来るのは、ただ話を聞く事、向き合う事、目を逸らさない事、……後は温かい料理を用意して帰りを待っている事位だろうか？

……叔父さんにしてあげられる事など、たったそれだけしかない。だからこそ、せめて出来る事には全力を尽くせる様に誠実で在りたいとは思っているし、そうするべきだとも思っている。

話なら、何度だって聞こう。

それで、叔父さんが抱えている苦しさに何かの答えを見付けてあげられるのなら、何度だって。

「……何時までも、このままでもいいワケねえってのは……分かってるんだ。」

「……お前がここに居てくれる内に……、向き合わなきゃいけねえよな……」

……黙り込む叔父さんを居間に残し、その日は早めに眠った。





【2011／05／27】

放課後、鮫川沿いを歩いてみると、後ろから何か走ってくる様な音が聞こえたかと思うと、ドンツと足の辺りに何かぶつかった。振り返ると、菜々子よりも小さな……まだ幼稚園か保育園に通っている年頃の男の子が、呆然とした様な顔でこちらを見上げていた。目が合うと、男の子はオロオロと辺りを見回す。

「こら、悟！」

前も見ずに勝手に走るなって何度も言ってるだろ！」

「せいにしちゃん！」

悟と呼ばれた男の子は、その声にパツと顔を明るくして、声を掛けてきた男子にそのまま駆け寄る。

後ろから男の子を追い掛けてきたのは、三組の高山だった。

「鳴上か。」

悪かったな、うちの弟が迷惑をかけて。

ほら、悟。

他の人にぶつかったんだから、ちゃんとこのお姉さんに『ごめんなさい』しなさい」

高山に促されると、男の子はおどおどとしながらも謝罪の言葉を述べる。

「えっと、ぶつかってごめんなさい」

「いいよ。今度から、前はちゃんと見ておこうね。」

それより、悟くんの方こそ、何処か怪我とかしてないかな？」

ぶつかった相手が自転車とか車とかではなく、自分であったのは幸いと言えるのかも知れないが……。

結構勢いよくぶつかっていたので、鼻の頭とか、体の何処か打ち付けてしまっているかもしれない。

悟くんは、「へいき」と答えて、そのまま高山の後ろに隠れてしまう。

……高山の後ろには、もう一人女の子が既に隠れていた。

女の子は悟くんと同じ年位だろうか？

「保育園か何処かにお迎えに行ってたのか？」

「ん？ ああ、まあな。」

この時間に悟と志保を迎えに行けるの、俺だけだし。

ま、日課だからな。もう馴れてる」

だから何時も急いで学校から帰っていたのだろうか。

バイトだけでなく、こういう事も日々こなしているとは、本当に凄い事だ。

「おっと……早いとこ帰らなきゃバイトに遅れるか……。」

じゃあな、鳴上」

そう言って、高山は悟くんと志保ちゃんを連れて手を振ってその場を去った。



その後、虫取りで捕獲した数々の昆虫を四六商店の店主さんに引き渡したりしてから、ジュネスへと買い出しに向かうと、商品を棚に陳列させている高山に遭遇した。

どうやらそろそろバイトの時間も終わるらしく、バイトのチーフらしき人物に声を掛けられた高山はそのままバイトを上げるらしい。

買い物を終えて外に出ると、少し前を高山が歩いていた。

手には、野菜等の生物が入ったビニール袋を提げている。

声を掛けると、高山は少し驚いた様に振り返った。

「おっと、鳴上か。何か用か？」

「用って程でも無いけど、放課後に二回も会うなんて中々奇遇に思っ

て。

バイト帰りの様だが……、夕飯の買い出しも高山がやっているのか？」

チラリとビニール袋に目をやりながら問うと、高山は「そうだけど」と頷いた。

「まーな。母さんは仕事で忙しいから。

俺はやれる範囲で、家の事をやってるってワケ。

夕飯作ったら、またバイトに行くんだけどな」

長瀬たちが言っていた、高山がバイト三昧だというのは事実の様だが、それに加えて家事もかなりやっている様だし、忙しさはバイト漬けの生活処では無いのだろう。

「本当に凄いな、高山は……」

「そーでも無いけどな。

やんなきゃいけない事をやってるだけだし。

でも、そう言っただけで貰えて悪い気はしないし、ありがとな、鳴上」
別れ道で互いに手を振って、高山と別れた。



家に帰ると、菜々子は何やら困った顔をして何かを探していた。

どうしたのか訊ねてみると、どうやら学校で貰ったプリントが見当たらないらしい。

先生に叱られてしまう、と落ち込む菜々子を励ましながら、一緒に探す為に何のプリントなのかを訊ねると、どうやらあの『授業参観の開催日希望アンケート』のプリントが見当たらない様だ。

菜々子が自分の部屋を探している間に、居間の辺りを探していると、……ふと、叔父さんがよく見ている資料が目に入った。

もしかして、この中に紛れてしまったのではないかと、それを動かすと、挟まっていたプリントが机の上に落ちた。

探していた『授業参観の開催日希望アンケート』だ。
プリントには、叔父さんの字で『いつでも可能』と記入されている……。

それと一緒に一枚の写真も落ちてきた。

……叔父さんと今よりも小さな菜々子と……そして叔母さんが写っている写真だ。

取り敢えず、プリントを菜々子に見せる事にした。

プリントをじっと見詰めた後、菜々子はポツリと呟く。

「『いつでも……なんとか』ってかいてある……」

『可能』はまだ菜々子には読めなかった様だ。

「『いつでもかのう』……、何時でも良いよって事だよ」

「……ほんとうにだいじょうぶなのかな……」

何時も『仕事』ばかりだったのだ、今になって急に『いつでも可能』なんて、素直には喜べないのだろう。

「……お仕事とかで、ダメになっちゃうかもしれないけど。

それでも、『行きたい』っていう叔父さんの気持ちはきつと本物だよ」

叔父さんなりの、『向き合うための一歩』がこれなのだろう。
行けないかもしれない。

それでも、『行きたい』のだと『行ってやりたい』のだと。

その思いを、ちゃんと菜々子の目に見える形で示す事。

それこそが、向き合う為の一歩だ。

「そっか……」

菜々子はそれを聞いて嬉しそうに笑った。

そして、そんな菜々子に先程見付けた写真を渡す。

写真を受け取った菜々子は驚いた様に目を丸くした後、とても嬉しそうにそれを眺める。

「お母さんだ……」

みんなで、さめがわにいったときのしゃん……」

「そのプリントと同じ場所に、叔父さんが挟んであったんだ」

「……お父さん……、さめがわのことわすれてなかったのかな……」

「きつとね」

だからこそ、プリントと一緒にこの写真は挟まれていたのだろう。
「……………」

お父さん、わらってる……………」

確かに、気難しそうな顔をしている事の方が多い叔父さんが、その写真の中では楽しそうに笑っていた。

「…………お父さん……………」

どうして、わらわなくなっちゃったんだろ……………」

「…………きつと、寂しいんだよ、叔父さんも。」

…………菜々子がお母さんが居なくなってしまうって、寂しいのと同じに、ね」

寂しくて、辛くて。

叔父さんはまだ喪失の痛みの中で躓いている。

だから、叔母さんが居た昔の様には、まだ笑えないのだろう。

「お父さんも、さびしい…………？」

そっか、そうだったんだ……………」

お母さんが死んじゃって、菜々子、さびしかったけど……………」

それはお父さんもおんなじだったんだ……………」

菜々子だけがさびしかったんじゃない、なかつたんだ……………」

お父さんも…………、きつとさびしかったんだね……………」

そっか、と何かに気が付けた様な顔をして菜々子は頷いた。

…………驚いた。

菜々子位の年頃の子供が、たとえ親とかの身近な相手だとしても、自分以外の人間の痛みを理解するというのは、困難を極める。

いやまだ親が絶対であるからこそ、逆に最も難しいかもしれない。

それをやってのけた菜々子に、驚嘆するしかない。

「でも、だったらどうしてお母さんのしやしん、なくしちやっってたんだろ……………」

「叔父さんが写真を見ちやうとね。」

もう叔母さんと会えないだなんて、そう思っちゃってね、とても悲しくなっちゃうからだよ、きつとね」

喪ってしまったモノの重さを突き付けられてしまっている様に……そう、感じてしまっていたのだろう。

叔母さんとの思い出を、懐かしみと喜びを持って思い出すには、まだ時間が掛かるのかもしれない。

「そうなのかな……」

でもね、菜々子はしやしんみれてうれしいよ」

「うん、そうだね」

大切な人に会えないのは、悲しく辛い事だ。

それでも、大切な人との思い出は、その時の喜びも思い出させてくれる。

そう、自分は思っている。

「ありがとう、お姉ちゃん。

お父さん……、いつかまた、こんなかおでわらつてくれるかな」

「きつと、何時かは笑ってくれるよ」

何時かは叔父さんも、喪失の痛みがチクリと胸を刺しても、それ以上に幸せな思いで、叔母さんと過ごした日々を思い起こせる様になるだろう。

そんな日が来ると、そう、信じている。



【2011／05／28】

……一条がサボってから次の活動日。

一条は部活には参加しに来たが……どうにもやる気は出ない様だ。

活動時間が終わり、他の部員たちが帰ってしまった事にも気が付いていなかった。

その様子に、熱でもあるのか、と長瀬は心配する。

熱……という問題でも無いのだろうか。

先日言っていた件がまだ続いているのだろうか……？

どうであるにせよ、早く帰ってゆつくりと心も身体も休めた方が良いだろう。

そう思っていると、唐突に一条は語り出す。

「オレってさ、……バスケットやるにしちや、背が低いじゃん」

それは確かにそうだ。

バスケットは身長が思いっきり有利不利に関わってくるスポーツである。

背が高ければ高い程、ゴールポストに近付くのとだからそれだけでも有利になる。

身長に恵まれない選手が皆無とまでは言わないが、バスケットが強い人と言うのは大抵背が高い人たちであるのもまた事実だ。

身長が女子平均を飛び越え男子平均からも10センチ以上高い自分だって、(男子)バスケット部員としてみれば、全国的には平均に届くかどうかだろう。

一条は、バスケット選手としては大分小柄の部類に入る。

「……まあ、そうだな」

そんなの態々言うまでの事か？ とでも言いた気な顔で長瀬は頷いた。

「だから、背が高いヤツ抜いたりすんのがスゲー楽しいの。

オレ自身の力って気がして。

……家もお婆様も妹も……。

何も関係ない、オレだけの力」

「……………」

「けど、それが何になるんだろうって、……そう思っちゃってさ。

……結局、オレが一人で頑張っても、試合だって組めないんだし。意味も価値も……何も無いな、って」

そんな事は、無い。

……そんな事など、無いだろう。

努力する事には、意味も価値も……ある筈だ。

……今の一条は、疲れているのだろう。

家からの反対が急に無くなってしまつて、……ある種それへの反発も秘めてバスケに打ち込んでいたのだから、気持ちの行き場を見失っているのだろう。

だけれども、今、その意味が分からなくなつてしまつているのだとしても。

今迄積み重ねてきたもの全てを、その意味を、否定して捨ててしまつては、きつと何時か、もう取り戻す事が出来なくなつてしまった様な時に、後悔してしまうかもしれない。

だから、……そんな事は言つて欲しくは無い。

「一条……本気で言つてるのか？」

長瀬は怒りを隠し切れない表情で訊ねる。

それには答えず、一条は暗い表情のまま背を向けた。

「……………」

……今日はもう帰る。じゃあな」

そしてそのまま振り返る事も無く去つてしまう。

一条の様子に、長瀬は不可解だとも言いた気に首を傾げた。

「どうしたんだ、アイツ……………」

……長瀬は一条の事情を知らない様だ。

あまり他人に話すべき内容でも無いが、長瀬には以前一条の事情を教えて貰つた事がある。

一条との付き合いも長く、親しい長瀬なら、今の一条の力になつてくれるかもしれない。

だから、出来るだけ主観を混ぜ過ぎない様にして、一条の事情を長瀬に話した。

「バスケ、反対されなくなつたつてんなら、寧ろ喜ぶんじゃないの、フツーは」

話を聞いた長瀬は釈然と出来ない、とでも言いた気な表情で首を捻る。

……そんな単純な問題でも無い。

考えても分からなかつたらしく、長瀬は頭を掻き毟つて吠えた。

「ぬあー！俺、アツタマ悪いから分かんねーよ!!
けどアイツ、〃意味も価値も無い〃つつつたる？

〃試合も出来ない〃からって。

「だつたらさ、試合、やらしてやればいいんじゃないやねーの？」

……成る程、それは妙案だ。

本人不在の所でどうにもならない事をウジウジと悩む位なら、兎に角何でもやってみる方が事態は動く。

結局、やってみない事には何事も始まりはしないのだ。

ならばやるのみである。

長瀬の意見に賛同し、頷いた。

が、しかし。

試合をやるにしても、まずその相手を見付ける必要があるし、それにこちらの（幽霊）部員共も集めなければならぬ。

残念ながらバスケット部は初心者だしこの辺りの他の高校に詳しい訳でもないから、この件に関してはあまり力になれそうにない。

公式試合、という訳でもないだろうから、多分女子部員が参加する事にはそこまで目くじらは立てられないだろうけれど。

……長瀬にはそのアテがあるのだろうか？

だが、長瀬もあまりバスケットの事にはそう詳しい訳でもないらしく、試合の相手やらその日取りやらの決め方は分からないらしい。

が、ふと思いついた様に、制服に着替えて帰ろうとしているバスケット部員を呼び止めた。

そして、彼が密やかにバイク通学を行っている事をネタにして脅し、諸々の手続きを全て丸投げする。

そして、他の部員達も弱味は握っているから多分ある程度の数は揃うだろう、と長瀬は笑う。

「成る程。

こつちも、花村とか、来て戦力になってくれそうな人に声を掛けてみる」

花村と巽くんなら、都合が合えば来てくれそうな気がする。

「おう、集められる数は、多ければ多い程良いだろうしな」

「所で、長瀬はどうする？」

「あー、そうだな。」

人数がキツそうだったら、俺も出るよ。

バスケ、あんま知らねーけど、大丈夫だよな？」

……多分、大丈夫だろう。

そんな事よりも、試合が出来るだけの人数を掻き集める方が余程大切だ。

「取り敢えず、人数を揃える方が先決だから問題無しだ」

分かった、と答える長瀬と二人で頷き、一条を励ます為の計画がスタートした。



お風呂から上がると、叔父さんは何かの資料を熱心に見ていた。どうやら、車の資料の様だ。

暫くは手を離せそうにないだろう。

……コーヒーが何か、用意した方が良いだろうか。

……いや、コーヒーを淹れるのは叔父さんにとっては叔母さんとの約束だから、そこは断られる、か。

「お茶でも淹れましょうか？」

そう訊ねると、叔父さんは資料から顔を上げる。

「いや、いいさ。」

要らん気は遣わんでいい」

苦笑した叔父さんは、ふと優しい目で此方を見上げた。

「そういや、さつき菜々子と話してて思ったんだが……」

……菜々子のやつ、最近、少し変わった様な気がするな。

……何て言うか……、強くなった。

……俺ばっかりが取り残されている様な気がするな……」

……悠希が来てから、ここが、……その、”家らしく” なってきた」

“家らしく”……。

「家つてのはただの入れ物じゃない。

家族が共に暮らし、共に生きる場所だ。

一緒に笑い、泣き、時にはケンカもして……、人生の長い時間を共に過ごす……。

そういう、暖かい場所だ」

……叔母さんを亡くしてから、この家にはそう言った暖かさが足りなかったのだろう。

叔父さんは叔母さんの事件を追う事で頭が一杯だったし、菜々子はそんな叔父さんを慮って自分の思いを黙殺するばかりであったから。

「……千里を喪つてから、そんな事も忘れちまってたよ……。

何よりも取り戻したかった筈なのに……、……何よりも避けていた気がするな。

……どうしてだか、分かるか？」

「……そう、ですね。

……きつと、叔父さんが怖がっていたからじゃ、ないですか？」

叔父さんの気持ち分からない訳ではない。

喪つたものが大き過ぎて、それを再び喪うかもしれない、という事が恐かったのだ。

もし、再びそれを喪つてしまつては、きつと自分は耐えられない、と、怯えてしまつていたから。

だから、菜々子と向き合う事を避けてしまつていたのだろう。

「ははっ！ 遠慮なく言いやがったな。

……ああ、そうさ……その通りだ」

そう言つて頷いた叔父さんは、少し俯く。

「後は……俺自身の問題なんだろう。

どこでケジメをつけるかっていう……。」

叔父さんは目を閉じ一つ息を吐くと、首を横に振つてから、勢いよく見ていた資料を閉じた。

「あー、止めだ止めだ！

まったく、俺は今日は飲むぞ！

悠希、お前も付き合え。

当然、お前はアルコールは抜きだな。

俺より先に寝たら逮捕だ!!

いいな！ よし！」

そんな横暴を言って冷蔵庫からビール缶を取り出していきなり栓を開ける叔父さんに苦笑しながら、自分もコップにお茶を入れる。

乾杯、と缶とコップを触れ合わせた。

その後は、叔父さんにおつまみを急遽用意したり、酔い潰れてしまった叔父さんを寝室まで運んだりしてから、眠りに就いた。



〔2011/05/29〕

本を買いに「四目内堂書店」に行くと、偶然一条と長瀬に行き遭った。

長瀬が誘って、一条を連れ出したらしい。

まあ、元気が無い時は、こうやって他の事で気を紛らわせる事も大切だ。

どうやら長瀬は漫画を買ったらしいのだが……。

何の手違いなのかは分からないが、少年漫画を購入したつもりが、少女向けの『魔女探偵ラブリン』を買ってしまったらしい。

日曜日の朝の時間帯にアニメもやってるあの作品の漫画版だ。

菜々子も毎回楽しみに見ている。

……内容的には、魔法少女ものと探偵ものを混ぜた子ども向けの作品なのだが、相棒のキメ台詞が「蜂の巣にされたいか!!」というやら物騒なものだったり、そもその謳い文句が「愛に疑問を感じたら、素行調査は弊社にお任せ!」だったり、本当に子ども向けなのかは

偶に首を傾げてしまいたくなるが……。

まあ兎も角、長瀬が好んで見る様な内容では無いのは確かである。本の処遇に困った長瀬は、返品及び交換するのではなく、何故かこちらに「やる」と言って渡してきた。

……くれるというのなら、有難く貰っておくが……。

「えっ、鳴上って、そういうの読んじゃうの？」

ハイエンドだなー……」

一条が驚いた様に言うが、それには「違う」と首を横に振った。

「……いや、私が読む訳では無いのだけれど……。

菜々子がこれのアニメが好きだから、折角だし、あげようと思って」

「あ、そっか。

鳴上ん家もちっちゃい子いるもんな」

一条が納得した様に頷く。

そして、何となくの流れでオススメの漫画について三人で語り合った。

好みの漫画を語り合う事で、二人との仲がより一層深まった気がする。

そこに里中さんが通り掛かった。

珍しい組み合わせの様に思われたらしいが、直ぐに同じ部活だったか、と思いついた様で納得した様に頷く。

「どうやら今から修行に向かう所の様だ。

修行と聞いた一条は驚いていたが、長瀬は逆に流石だと頷いた。

少し四人で話してから、その日は別れる。

尚、お土産の『魔女探偵ラブリーン』は菜々子に大層喜ばれた。



【2011／05／30―2011／05／31】



【2011／05／30】

日中のバイトとして、学童保育も始める事にした。
応募して簡単な面接を受けた所、「何時でも来て下さい」と言われたので、今日から始める事にする。

職員の人から渡されたエプロンを纏い、新しい先生として子供たちに紹介されると、物珍しかったのか、あつと言う間に子供たちに周りを取り囲まれた。

「スッゲー、背えたっけー!」

「ねーねー、せんせーって、かわいいのー?」

「もう、そう言うのってエッチだからダメなんだよ!」

ワイワイガヤガヤと、皆がみな思い思いの事を口々に言っている。

男女比は半々位だろうか?

「じゃあ色オニしよーぜ!」

「せんせーがオニな!」

子供たちの誰かがそう言うと、一気に蜘蛛の子を散らす様に子供たちが離れていく。

うん、子供が元気な事は良い事だ。

どうやらオニに任命されてしまった様なので、柔軟体操をしながら三十秒数えてから、目についた子供目掛けて駆け出した。

遠くを走り回っていた子供たちが、ギョツとした様に声を上げる。

「うわっ、ヤッベーっ、速ええーっ!」

「色オニだから、色言っつてーっ!!」

「よし、なら紫色!」

「うわーっ、どこだムラサキー!」

ワーワーキヤーキヤーツとはしゃぐ子供たちの相手を、全力でこなした……。



学童保育の時間も終了間際となって、親が迎えに来た子供たちから帰って行く。

ふと、親を待つ子供たちの集団から離れた所にいる子供に気が付いた。

ポツンと、彼は高台のベンチに腰掛けて俯いている。

「あの……、あの子、どうかしたんですか？」

他の職員の人に尋ねてみると、職員の方は彼を見て深く溜め息を吐いてから教えてくれた。

「ああ、俊くんか……。」

あの子、いつもあなのよ……。」

その時、中年に行くか行かないか位の優しそうな女性が高台にやって来た。

どうやら、俊くんのお迎えに来たらしい。

「ごめんなさいね、俊くん。」

少し、待たせてしまったかしら……？」

「……別に……。」

優しく声を掛ける女性に、俊くんはより俯いてぶつきらぼうに答えた。

そして、ベンチから立ち上がると、女性を置いて駆け出していってしまう……。

女性はこちらに目をやってペコリと頭を下げた後、俊くんを追い掛けて行った。

「あの子ね、荻原俊くんって言うのだけれど……、……貰われっ子なのよね。」

だからなのかしら……」

ふう、と職員の方は溜め息を吐きながらそう溢す。

「……………貫われっ子、ですか？」

「ええ。」

俊くんのご両親は事故で亡くなってしまっていてね……。

……………それで、さつきお迎えに来ていた宇白さんに引き取られたのだそうだけど……………。

あまり上手くいってないみたいね……。

ここでみんなと遊んでいる時は俊くんも普通なんだけど、宇白さんが迎えに来る時間になるとああなのよ……。」

職員の方がそう溢す間も子供たちのお迎えが次々にやって来て、最後の一人も無事にお迎えが来た為、バイト代を受け取ってからその日は家へと帰った。



家に帰り、夕飯の支度をしようとしていると、菜々子が何やら話したそうなウズウズとした顔でこちらを見ながらソワソワとしていた。どうかしたのか菜々子に訊ねてみると、菜々子にはっこりと笑って話してくれる。

「あのね、こないだお姉ちゃんが見つけてくれた『しゃん』……、お父さんにかえしたんだ。

お父さんね、そのとき、やさしいかおで、ちよっとわらってたよ」嬉しそうにそう報告する菜々子の頭を、よしよしと撫でながらそれを聞いた。

何時か叔父さんに昔の様に笑える様になって欲しいと、そう思っているだけに、少しだけでも笑ってくれたのがとても嬉しかったのだらう。

「良かったね」

うん、と大きく頷いた菜々子は、「あのね」、と切り出す。

「ねえ、お姉ちゃん……。」

菜々子ね、お父さんだいすき」

菜々子は、そう曇りの無い目で言い切った。

「そうだね。」

そして、菜々子がお父さんの事が大好きなのと同じ様に……、お父さんも菜々子の事が大好きだよ」

「きつと」も「多分」も、必要ない。

何故なら、そう確信出来るから。

「うん、菜々子もそうおもうー！」

菜々子は明るく笑って頷いた。

確かに愛されているのだと、そう実感出来たのなら、菜々子がこの先、『お父さんはもう自分を要らなくなった』なんて思いに苦しむ事は無いだろう。

寂しいと感じる事はあっても、本当の意味で『独りぼっち』になつてしまう事は無い。

「お父さんね、さめがわで、お母さんといっしょにお花つんだこと、わすれてなかったよ。」

しゃしんかえたときに、『お前もおぼえていたのか』って、うれしそうにわらつた。

お父さんは、お母さんがだいすきなんだね」

そうだね、と何度も頷く。

叔父さんは叔母さんを愛していた。

そして今も、想い続けている。

想い続けているからこそ忘れられず、忘れる事など出来ないからこそ苦しんでもいたのだ。

「……だいすきな人が、いなくなつて、かわいそうだね」

大人の使う憐憫の混ざつた『可哀想』という意味合いではなく、ただただ叔父さんの哀しみに寄り添う様に、菜々子は『かわいそう』だと言う。

それに同意して頷いた。

大切なモノを、愛する者を、喪う事は辛く苦しい。
それでも。

何もかもを喪う訳では無い、筈だ。

残るモノは、きつとある。

……それは、何か形のあるモノかもしれないし、思い出の様に、形にはならないものかも知れないが。

……そして、叔父さんには……。

「そうだね、哀しいね……。

でも、叔父さんには菜々子が居るよ。

叔父さんの大好きな人は、ちゃんとここに居る。

だからね、菜々子。

絶対の絶対……、叔父さんを置いて居なくなっちゃったら、ダメだよ」

叔母さんの忘れ形見であり大切な実の娘である、菜々子が、居る。

叔母さんへの想いと、菜々子への想いは同じではないだろうけれど、それでも、叔父さんは“一人”では無い。

叔母さんとの思い出を共有出来る、大切な人がいる。

「うん！ 菜々子、いなくならないよ！」

菜々子は元気良く頷いた。

「菜々子ね……、お父さんの子どもで、よかった！」

幸せそうに笑う菜々子に、「そうだね」と何度も頷く。

すると、菜々子はふと思いついた様な顔をして、ポケットの中から何かを取り出した。

「あつそうだ……、お姉ちゃんにこれあげる！」

菜々子から手渡されたのは、叔母さんが菜々子と……そして叔父さんと一緒に映っている、あの鮫川の写真だ。

「お父さんがね、やきまし……？ してくれた。

お姉ちゃんも、かぞくだから、かぞくのしやしん、あげるね。

今度、お父さんとお姉ちゃんと菜々子で、しやしんとうろうね！」

「やくそくだよ」と笑う菜々子と、指切りをして約束をする。

何のてらいもなく、菜々子が“家族”の輪の中に自分を入れてくれ

たのが……、本当に嬉しく思えたから。

「……あのね、かぞくは助けあうんだって、先生、いつてた。

だから、お父さんがさびしくないように、菜々子、がんばりたい！

だからね、お姉ちゃん、菜々子に“りょうり”をおしえて……！」

「料理を？ それは良いけれど、どうしたの？」

菜々子は前々から料理には興味を抱いていた様だけれども、一体こんな急にどうしたと言うのだろうか。

訊ねると、少しだけ寂しそうな顔をして菜々子は答えた。

「うん、先生がね『バランスのいい食事がたいせつです』っていつてたの。

お姉ちゃんがつくってくれるりょうりはとつてもおいしいし、お野菜とかもたくさんはいつてるけど……。

でも……お父さんりょうりできないし、菜々子も“めだまやき”しかまだつくれないから……。」

菜々子が言わんとしている事を、そこで漸く察した。

……自分は何時まで此処に居られる訳では無い。

来年の春には、戻らなくてはならないから。

……それは最初から決まっていた事で、分かっていた事でもあったけれど、それをついつい意識の外へと……気付かない内にも押しやってしまっていた。

「お姉ちゃん、春がきたらかえつちやうだよね……。」

ずっといっしょにはいられないんだよね……。」

ポツリポツリと、言葉を続ける菜々子に、僅かに頷く。

「……そう、だね」

ずっと一緒には、居られない。

……とても、残念な事だけれども。

……だが、……いや、だからこそ。

「……よしっ、お姉ちゃんが菜々子に一杯料理を教えてあげる！」

……お姉ちゃんは、次の春が来たら帰らないといけないけれど……、でもそれまでに出来る限りの全てを教えてあげるよ。

菜々子一人でも、立派に料理が作れる様に」

ここを去る前に、少しでも多くのモノを、菜々子に残してあげたい。形があるモノ・無いモノを問わずに。

「それにね、春には帰っちゃうけれど、何度でもここに戻ってくるよ。だって私は、菜々子の『お姉ちゃん』だから」

帰っても、離れてしまっても。

繋がりが途絶えてしまう訳でも無い。

距離を隔てていても、一緒に過ごせる時間が少なくなってしまうっていても。

思いだけでも、傍には居れると、そう信じたい。

何故ならば、『家族』、なのだから。

その言葉に、菜々子は「うん、うん……！」と何度も頷いて、そして顔を上げる。

「えへへ……」

お姉ちゃん、だいすき！」

そう言って菜々子が浮かべた満面の笑みは、何が起きたとしてもきつと忘れる事など出来はしないだろう。

そう、確かに思えた。



【2011／05／31】

久方振りに演劇部の部活動に参加した。

今度やる予定の劇で使う小道具を作成する為だ。

普段は緩く活動している部員たちも、練習に熱が入ってる。

中でも、部内でも群を抜く演技力の高さを誇る小沢さんの力の入り

様は一入だ。

主役を熱望する小沢さんは、それを望むに値するだけの実力も熱意も持っていて、努力の量も質もこの部内ではその右に出る者は居ないだろう。

その直向きな姿勢は、純粹に尊敬に値する。

練習により一層の熱が入り始めたその時、見知らぬ女子生徒が外から部室に飛び込んで来た。

彼女は息を切らせて小沢さん呼び、そして、小沢さんのお母さんが倒れて入院したのだと伝えてくる。

その知らせに動揺し混乱する小沢さんに、早く病院に行った方が良く、と声を掛けると、ほんの数瞬躊躇いを見せたが、直ぐ様小沢さんは部室を飛び出して行った。

部室内は暫し騒めいていたが、部長に促され、練習を再開する。

……必要な小道具は粗方作り終えた。

なので、部長に断って早めに部活動を切り上げる。

そしてその足で稲羽市立病院へと向かった。

◇◇◇◇◇

小沢さんの姿を探し、病院の中を歩いていると、とある階の病室が並ぶエリアから小沢さんの怒鳴り声が聞こえた。

内容は分からないが、何かあったに違いない。

……急いでその声が聞こえた方向に走ると、小沢さんは、病室前のソファに座る中年女性に詰め寄っていた。

……中年女性をよく見ると顔立ちとかが小沢さんに似ている。

……親子か親戚なのだろう。

「ねえ……どういいう事!？」

何で、アイツがいるワケ!？」

何で、お母さんが、会ってるワケ!？」

お母さんが倒れたんじゃないの!？」

ウソ吐いたの!？」信じられない!？」

説明してよ、説明!!」

大きな声を上げていている為、離れた場所に居るといふのに内容が確りと聞こえてきてしまう。

……どうやら込み入った事情の様だ。

……立ち聞きするのも悪いかと思ひ、その場を離れ様かとも思ふが、小沢さんのあまりの剣幕に、思わずその場に留まつてしまった。

「……結実。」

倒れたのはお母さんじゃない、あの人よ。

でも、本当の事を言つたらあなたは来ないと思つた。

……だから、ウソを吐いたの。

……あなたに、会つて欲しかったから……」

「信じらんないっ!!」

私がアイツに、会いたいとでもおもつたの!？」

「いいえ。」

あなたが辛い思いをしてきたのも分かっているし、それに責任を感じてもいるわ。

……でもね。

あの人の最期の我儘なの。

命を賭けた、最期の我儘なのよ。

もう、長くは持たないって……。

だから、結実に会いたいわ……」

「だ、だから何？」

あんなヤツ、何時何処で死んだって、もう関係無いじゃん……。

もう、他人じゃん!

あんなヤツ、お父さんなんかじゃないじゃん!!」

感情的になつた小沢さんは、興奮のあまり声が震えている。

「お母さんも私も……アイツに捨てられたんだよ!？」

それを何? 死ぬ間に許してって!？」

バカ言わないでよ!!」

「……お母さんね、決めたの。」

あの人息を引き取るまで、傍に居ようって。

……独りで逝ってしまうのは、可哀想だから……」

「バカじゃないの!? 可哀想って、何!？」

「そんなの……」

「結実……ごめんね。」

「だけど、お母さんは、そうしてあげたいの」

「勝手にすれば!? 私、関係無いし!」

「もう、知らないっ!!」

ダツとその場を駆け出した小沢さんは、そのままこちらに向かって来る。

その目尻には涙が浮かんでいた。

「……!! い、何時から居たの?」

「まさか、聞いてたの?」

曲がり角の所で、立っていた此方に気が付いた小沢さんは急いで目を拭って、此方を問い質してくる。

「……ごめん。」

小沢さんが怒鳴っている声が聞こえたから気になって……」

「立ち聞きしたって事!？」

「信じられないっ!!」

小沢さんは混乱しているのか、刺々しい態度で詰め寄る。

だが、次第に混乱した感情が収まってきたのか、はたまた抱えた激情を誰かにぶつけたかったのか、小沢さんはまだ感情に震える声でポツポツと語ってきた。

「……………お母さん、倒れてなかった。」

……………病室行ったら、ベッドに寝てたのは、父親……………「だった人」で……………。

……………お母さん、私にウソを吐いたの。

……………アイツ、10年ぐらい前にね、私とお母さんを捨てたの。

他所に女作ってさ……………ホント最低最悪なヤツ。

……………それで、病気になって、今度はその女に捨てられて?

……………もう長くないからって、「娘に会いたい」……………だもんね……………。

恥を知れって感じ……………」

そして、小沢さんは大きく溜め息を吐く。

「ハア……もう、最悪……。」

ずっと、忘れてたのに……。

アイツの顔も存在も、全部忘れてたのに……！」

……小沢さんはそう言うが、恐らくはベッドに寝ている人を見て直ぐにお父さんなのだど気が付いたのだろう。

10年前と言えば、まだ小沢さんは小学一年生だ。

そんな時の記憶の中の父親の姿と、10年も経った……しかも病魔に侵されて余命幾許もない父親の姿が直ぐ様一致した段階で、少なくとも小沢さんは……お父さんの顔を忘れていた訳なのでは無いとは思うが……。

いや、そういう複雑な家庭の事情に一々部外者が口を挟むべきではない、か。

「しかも、お母さんが、ずっと看病するってさ。

バカだよ、お人好しにも程があるよ！

自分を捨てた男だよ？

しかも、新しく作った女にすら捨てられた、お下がりだよ？

二人とも、恥知らずだよ……っ!!」

小沢さんに掛けるべき言葉が見付からず、黙るしかなかった。

「……ごめん、落ち着いた。

……何で、鳴上さんがここに居るのよ……。

こんなの、見られて……。

笑えるじゃん……。」

気掛かりで追い掛けてきた、とは言えず、そこは黙る。

「私、もう、帰るから……。」

……そこまで、一緒に行こ……。」

その後、小沢さんとは一言も会話も無く帰路の分かれ道で別れた。



夕飯後、何故か叔父さんは菜々子を部屋へと追いやった。

「……？ 何かをするつもりの様だが……。」

何故か追いやった当人の叔父さんに、菜々子呼んで来て欲しいと頼まれた。

「……何かサプライズでもやるつもりなのだろうか。」

言われた通りに菜々子呼んで来ると、戻ってきた時にはテーブルの上にケーキが1ホール丸々置かれていた。

母のショートケーキだろうか。

よくあるマジパンやらチョコやらでできたお祝いのプレートは乗っていない。

しかし、今日は何かあっただろうか？

菜々子の誕生日は10月4日だし、叔父さんの誕生日ももう過ぎている。

叔母さんの誕生日は今日では無かった筈だし、結婚記念日とかでもないだろう。

勿論、自分の誕生日でもない。

菜々子も、ケーキには歓声を上げたが、何のお祝なのかは心当たりが無いらしく、不思議そうにしている。

「なんのおいしいのケーキなの？」

「あー、それはだな……。」

今日は「家族」の大事な日なんだ」

そう言われても、心当たりは無い。

菜々子もそうらしく、二人で首を傾げた。

「だいじな日……？」

「そうだ。」

お前と、コイツと、俺が、「家族」になる記念日だ」

「……いままではちがったの？」

そう菜々子に問われた叔父さんは、「そ、それはだな……。」と言葉に詰まってしまう。

結局説明出来る言葉が見付からなかったのか、とにかく、と強引に

話を持っていく。

「ちゃんと、『家族』になる記念日なんだ」

「ふうん……。」

よくわかんないけど……。

でも……なんかうれしいね!!」

ねっ、とこちらを見上げてくる菜々子に、そうだね、と頷いた。

要は、先日言っていた叔父さんなりの『ケジメ』とやらがこれなのだろう。

「よし、じゃあ食べるか」

「うん!」

ケーキは六等分して、半分を食べ、残りは明日に取っておく事にする。

流石に食後にケーキを1/3ホール食べるのは無謀だ。

ケーキを食べ終わると、叔父さんの提案で散歩に行く事になった。

寝間着に着替えていた菜々子が、服を着替えに自分の部屋に戻ったのを、居間で待っていると、叔父さんが声を掛けてくる。

「あー、……悠希。」

今日は、妙な事に付き合わせちまって、その……悪いな」

「いえ、楽しいですよ。」

サプライズパーティーみたいで。

ありがとうございます」

少し驚いたが、それもまた楽しみの一つである。

何より、菜々子が喜んでいるのなら、それ以上の事はない。

「そうか……優しいな、悠希は」

叔父さんはそう言うが、『優しい』、というのは自分ではあまり分らないものだ。

菜々子が笑ってくれたり喜んだりしてくれるのが、自分にとって嬉しい事だからやってるだけで。

叔父さんが辛そうにしてたりするのを、自分が見ているのが嫌だし見ない振りも出来ないから、励ましたり悩みを聞いているだけで。

結局の所、それは徹頭徹尾自分の為でしかない。

要はただの自己満足だ。

それは果たして、『優しい』のだろうか。

その判断は、自分には出来ない。

だけど、『優しい』と言われるのは嫌いではなかった。

「どうにもな。」

こんな事でもしないと、ケジメは付けられないと思ってな……。

自己満足かもしれないが……、それでもちゃんと伝えられたんだ。
だ。

菜々子に……、俺がちゃんと『家族』として大切に思っているんだって事を……」

「伝わったと思いますよ」

菜々子の様子を見ていたら、直ぐに分かる。

元々、菜々子はずっと叔父さんを見ていたのだから、叔父さんが菜々子と向き合いさえすれば、その思いは伝わるのだ。

「そうか……。」

……段々と、千里に似てくるな、菜々子は……。

笑った顔も、案外気が強い所も。

……菜々子の顔を見る度に、千里の事を思い出して辛かった事もある。

……菜々子を迎えに行った所為で、と……。

そう、考えそうになっちゃった事もあった。

それでもな……。

菜々子が居てくれただけで、俺は救われてきたんだ。

……もし、俺一人だったなら、悠希を預かるなんてのも考える事も無かっただろうしな……」

そう言っただけで、少し辛そうに溜め息を吐いた。

「……多分、俺は……悠希が言った通りに……、怖かったんだ。誰かを真っ直ぐに受け止めて……、大切な家族を作って……。

そしてまた、それを喪ってしまうかもしれないって事が。だから、逃げていた。

臆病になっていた、怯えていた。

それらしい言い訳を作って、自分を誤魔化しながら、菜々子と向き合う事自体から逃げていたんだ。

……逃げるヤツを追うことに逃げていたなんて、……全く、滑稽だよな……」

そう言つて叔父さんは、哀しみを含んだ笑みを浮かべる。

その言葉には、首を横に振った。

「滑稽なんかじゃ、無いです。」

……だつて叔父さんは、辛かつたんですよね」

勿論、辛かつたから、なんて理由で何もかもが許される訳では無いだろう。

だけど、辛くて悲しくて、どうしようも無い時と言うのはやはり存在する。

逃げたくなる事も、あるだろう。

それが、間違っているのだとしても、だ。

叔父さんの苦しみの深さは分からなくても、叔父さんが苦しんでいた事も悲しんでいた事も、それは理解出来る。

だから、そんな叔父さんの姿を、滑稽だなんて思う事は、少なくとも自分には出来ない。

「ああ……。ああ、そうだな……。……」

叔父さんは、声を詰まらせて、微かに震えた。

「逃げるのも、悔やむのも、今夜で全部、仕舞いだ。」

俺はもう二度と、大切なものを失くさない。

絶対に……。……絶対にだ」

強い決意を滲ませた声で、そう宣言した叔父さんは、ふと柔らかな笑みを浮かべてこちらを見る。

「これは……。お前が俺に教えてくれた強さだな。」

……。ありがとう」

それは、どうなのだろう。

自分は、叔父さんに対して何かを教えたり示したりしたつもりは無い。結局の所、自分のやりたい事をしたいたい様にやっているだけだし、や

るべきだと思つた事をやっているだけ。

そこから何かを感じ取つたのは、叔父さん本人だ。

教わるまでもなく、そういう強さは元々叔父さんの中にあつたのだ
とは思ふ。

「自分がどうするべきなのか」、自分がどうしたいのか」という
答えは、何時だつてその人本人が自分で見付けるしかないからだ。

「それとな……」。

「……お前に、渡したい物があるんだ」

そう言つて叔父さんが差し出してきたのは、マグカップだった。

叔父さんや菜々子が使つているモノと同じデザインで、色だけが、
叔父さんの青色のものとも、菜々子の桃色のものとも、そして恐らく
は叔母さんのものだったのであろう。橙色のものとも違い、若草色をし
ている。

「これはお前専用だ。」

後で名前を書いといてやるからな」

色分けされているんだから、一々名前を書かなくつたつて問題は無
いけれど。

それでも。

叔父さんや菜々子の……そして叔母さんのカップの底には各々の
名前が書かれてある事を知っている。

だから。

「……ありがとうございます」

……嬉しかった。

叔父さんの想いが、そしてそれを形にした様なこの揃いのマグカッ
プが。

マグカップを貰つた事自体が嬉しいのではなく、そこに込められて
いる想いが、『お前は “家族” だ』という心が、この上なく、嬉しかつ
たのだ。

柄にもなく、思わず少し声が震えてしまった。

それを仕事柄鍛えた観察眼で見抜いたのか、叔父さんは何故か嬉し
そうに笑う。

「おう。……大切にしろよ？」

……俺たちは、家族だ。

だから、お前のカップも、菜々子のカップも。

何時だって俺が満タンにしてやる。

……忘れるなよ」

忘れない、と頷いた。

忘れる事なんて、出来ない。

叔父さんがそう思ってくれている、というただその事実だけで、それだけでももうどうしようも無い位には、嬉しくて幸せだ。

それから少しして、準備が出来たらしい菜々子が居間に戻ってきて、三人で夜の散歩に出掛けた。

叔父さんが連れてきたのは………鮫川だ。

夜の河原はとても静かで、月が水面に月影を落としている。

どうやら、菜々子が来たがっていたから、ここに連れてきた様だ。

また今度来る時は、天気の良いお昼間にでも弁当を持って一緒に行くこう、と叔父さんが言うのと、菜々子は喜んで頷いた。

川縁から魚を観察したいから、とよく釣り人達が竿を構えている辺りから、楽しそうに菜々子は川を観察している。

それを少し離れた所から見守って、叔父さんは幸せそうに微笑んだ。

まるで、昨日菜々子から貰ったあの写真の中の様な、優しい笑顔で。

「菜々子のあんな顔……」

久し振りに見た気がするな……」

そして、何かを宣言する様な面持ちで、顔を上げる。

「……俺は、これからも千里を轢いた犯人を追う。

……けどな、それはもう何かから逃げる為じゃない。

俺が……刑事だからだ」

そう、決意を表明した叔父さんは、一つ頷いてこちらを見つめた。

「そんな当たり前前の事ですら、俺はいつの間にか、忘れちゃってたんだ。

……大切な事はみんな、悠希、……お前が思い出させてくれたんだ。本当に、感謝している」

……自分が何かをしたつもりは特には無いけれど、それでも、叔父さんが大切な何かを思い出す手伝いが出来たというのなら、それはとても嬉しく誇らしい事だ。

「この町はなあ、俺の町だ。」

菜々子やお前の居る、俺の居場所だ。

……だから俺はこれからも、ここを守って生きていく。

デカとして……父親として、な」

そう言つて叔父さんは清々しそうに笑つた。

……きつともう、叔父さんは大丈夫だ。

そう、思えた。

ちやんと前を見て、『菜々子と生きていく』『今』を重ねていけるのなら、きつともう大丈夫だ。

その時、土手の方から何かドタバタという音が聞こえた。

どうやら、何者かが警察から逃げているらしい。

偶々追い掛けている警官に顔見知りか居たのか、叔父さんが何があつたのか訊ねてみた所、どうやら稲羽付近に出没するカツアゲグループを摘発しようとしている所らしい。

カツアゲとはまた……、しよっぱい事をやっているもんだ。

……そんな事する暇があるなら、ちやんとバイトでもすればいいのに……。

「お父さん、行くの？」

叔父さんを見上げる菜々子に、叔父さんは大きく頷いた。

「……おう。」

悪いヤツらを捕まえるのが、俺の……いや、お父さんの、仕事だからな」

そしてこちらを見て、菜々子を頼む、と言う。

「任せて下さい。」

……叔父さんもお気を付けて」

そう返すと、叔父さんは満面の笑みを浮かべた。

「ああ、行ってくる。

心配すんな、俺を誰だと思ってる。

泣く子も黙る、稲羽署の堂島だぞ？

だから、お前たちは安心して先に帰って寝てろ」

そう言つて叔父さんは、カツアゲグループを締め上げに、駆け出していった。

その怒鳴り声が土手の向こうから聞こえてくる。

「お父さん、がんばれー!!」

聞こえてきた叔父さんの怒鳴り声に、菜々子は声援を贈つて、そして嬉しそうにこちらを見上げて笑う。

「ね、お姉ちゃん。

……お父さん、カッコいいね！」

そうだね、と頷いた。

本当に、叔父さんはカッコいい人だ。

逃げていた事を認める事も、そして逃げる事を止める事も、向き合う事も。

どれもこれも、それらが出来ない人もいる中で、それをやってのけた叔父さんは、やはりとてもカッコいい。

勇気ある人だと、そう思う。

その姿勢は、本当に心から尊敬出来る。

「さっ、菜々子。お家に帰ろうか。

お風呂を沸かさなきゃだし、それに、叔父さんも帰ってくる頃には走り疲れてお腹ペコペコかもしれないから、夕食作つてあげないかね」

「やしよく、菜々子もつくるのでつだう！」

夕食に何を作るのか菜々子と話し合いながら帰った帰り道は、月明かりしかない夜道でも、不思議と暗いとは思わなかった。



【2011／06／01―2011／06／03】



【2011／06／01】

長瀬と二人で仕組んだサプライズの練習試合の決行日は今日。

花村と巽くんに大まかな事情を話して協力を仰いだ所、有難い事に二人とも快諾してくれた。

遅れて体育館にやって来た一条は、バスケット部でもない長瀬と花村に……学校では不良扱いされている巽くんが居る事に目を丸くする。

更に続いて対戦相手の他校の選手がやって来て、そこで初めて試合をする事を知った一条は啞然として、驚愕のあまり鈍くなった思考で辛うじて絞り出す様に出す。

「えっ、はっ？」

ちよっ、いやいやいや、だって人数足んないじゃん！

試合出来ねーよ」

慌てる一条に、長瀬が花村たちと自分を指す。

「人数？ それならここに居るだろう？」

「どもっス」

「お邪魔してまーす」

長瀬に言われ、巽くと花村は一条に挨拶をする。

まだ事態を呑み込み切れしていない一条に、長瀬は指を突き付けて言い切った。

「いいか、お前一人で頑張ったって何も出来ねえ。

けど、俺らがこうやってここに居るし、こうして集まってきてくれた奴らだっている。

それを忘れんな」



そうこうする内に試合が始まった。

戸惑っていた一条も、いざ試合が始まると途端に目付きが変わり、その目に闘志が灯る。

矢張一条の動きは凄い。

こちらを負けじと、敵のデイフェンスを躲したり、フェイントをかいたりして善戦するが、相手チームの動きも鋭い。

シュートを決めた直後に取られたボールが素早く自陣へと流れる様なパスで回される。

点を入れては逆に入れ返され、気の抜けない一進一退の状況が続く。

ルールをあまり分かってない長瀬や花村たちも善戦してくれているが、敵のフェイントに翻弄されて、中々得点源になれない。

そして、相手側のブザービーターで試合は終了。

点差は一点だった。

練習試合を組んでくれた他校の選手に礼を言い、そして、急な話だったというのにも関わらず集まってきてくれた花村たちに礼を言ってから解散する。

解散して花村たちを見送った後、一条と長瀬に連れられて三人で屋上へ行く。

仰向けに寝転ぶ一条の顔は何処か清々し気だ。

「あーあ、負ーけちったなー。」

オレと鳴上、何か乗り移ったみたいだに絶好調だったのに……」

「……………」

「まー、トラベリングも知らないヤツとか居たからなー……」

「……………」

「いいか、お前一人で頑張ったって何も出来ねえ。」とか、カツコイイ事言ってたなー」

「……………るっせーよ、アホ！」

大体なあ、今日の試合は……」

黙って一条の言葉を聞いていたが、カチンときて言い返そうとした長瀬の言葉を遮って、笑いながら一条は言った。

「分かってるって。」

……オレの為、だったんだろ？

うん、何か……スツキリした。

何つーかさ……、〃一人じゃない〃って、そう思えたよ」

そう言う一条の顔は、試合をする前よりも格段に明るい。

……どうにか、励まし作戦は成功した様だ。

それでも、一条の悩みの根本が解決された訳でもなく、一条は訥々と心境を語る。

「……最近、両親に申し訳なくってさ。」

今の両親がオレを育ててくれたのって、一家の家を継がせる為じゃん。

でも、幸子が生まれてさ……。

きつと将来は幸子が家を継ぐだろうし……。

そしたら、何の役目も無いし血も繋がってないオレなんて……。

……居たってしょうがないって言うか……。

育てる価値、全く無いじゃん……。

……オレ、……出てった方が……良いのかな……」

「……それを誰かに言われたのか？」

フツと暗い顔をする一条に問い掛けると、違う、と首を横に振った。

「いや。みんな優しいからさ、何も言わない。」

……オレがそう思ってるだけ」

そう言って一条は空を見詰める。

「血が繋がってなきや、本当の親子じゃないって思うのか？」

長瀬の言葉に、一条は肩を竦めた。

「……そりゃキレイ事だよ、長瀬」

「キレイ事って、そんな言い方……」

そう言い返されそうになった一条は起き上がって、長瀬に感情を抑えきれない声で捲し立てる。

「血が繋がってなくても親子って言うなら、何でまだ二歳の幸子に英才教育すんだよ！」

家庭教師まで付けてさ！

オレにバスケして良いって……何で言うんだよ……。

習い事も、もう止めても良いし、公の場に出なくても良いって……、何で言うんだよ!?

オレが要らないって事だろ？

もう、役目も無いって事なんだろ!?!」

「……………」

一条の思いに、長瀬も自分も、何も言えなかった。

「それは違うだろう」、「そんな事はないだろう」、なんて、軽々しくは言えない。

特に自分は、一条の家の人たちに逢った事もないのだから。

一条はふと我に返った様に顔を微かに伏せた。

「…………ごめん。」

お前らに怒鳴ったって、仕方ねーのに……。

…………今度、…………施設に行ってみる」

「施設って…………お前が居た所か?」

長瀬が訊ねると、一条は頷く。

「そう、孤児院」

「…………何か、そこに用事でもあるのか?」

そう訊ねると、ポツリと一条は言葉を返す。

「…………本当の親の事、聞こうと思って。」

オレ、何も知らないんだ。

スツゲー小さい時から孤児院に居たし…………」

…………本当の、親、か。

一条をその孤児院に預けたのはどういった理由だったのだろう。

事故とかで命を落としてしまったからなのかかもしれないし、その他の止むに止まれぬ事情だったのかもしれないし、はたまた下らない理由や、もしかしたら虐待とかなのかもしれない。

…………一条のその目は微かに不安に揺れていた。

「……一緒に行くのか？」

一緒に行つたからどう、とはならないかもしれないが、少なくとも独りではないという気持ちにならなれるだろう。

そう思い申し出たが、一条は戸惑つた様に首を横に振つた。

「えっ……？」

あ、……いい、いいよ。

流石にそんな迷惑、かけらんねーし」

迷惑等では無いのだけれど……。

まあ、一条がそれで良いと思うのならそれ以上は何も言うまい。

「お前がそうしたいなら、そうすりゃ良い。

……帰つて来んだろ？」

長瀬に問われ、一条は確かに頷いた。

……帰つて来るつもりなのならば、それでいい。

帰つて来た一条を出迎えてやる位なら、一条も構わないだろう。

「その、……あ、ありがと、な。

今日の試合の事もさ……。

オレの為つて、分かつたから……、スゲー嬉しかった」

一条は照れた様に笑う。

喜んでくれたのが分かつたから、こちらも嬉しくなる。

「試合、負けちゃつたけどな」

一条がそう言うのと、長瀬は頭をガシガシと掻きながら反論した。

「るっせ。あー、アレだよ。

「試合に負けて、勝負に勝つ」ってヤツだ」

「何も勝つてねーし」

そもそも何と戦っているつもりだ。

そう内心でツツコミながらも、二人の言い合いに思わず笑みが溢れた。

すると、一条も長瀬も笑い出す。

夕暮れ時の屋上で。

一頻り、三人で笑い合つた。



食材の買い出しに行くと、偶然にも里中さんと天城さんが立ち話している所に出会った。

こちらには気が付いていない様で、二人の話には花が咲いている。……どうやら、里中さんは天城さんの和服や黒く長い髪を誉めている様だ。

……確かに、高校生が普段から和服を着るといのはあまり無いだろうし、天城さん程艶やかで射干玉の様な黒く長い髪は、地毛が黒髪である事が多い日本人でも珍しい。

大和撫子、をイメージする容姿である事は確かだ。

そう言う魅力が男性陣の心を掴むのだろう、と里中さんが言うと、天城さんは、里中さんにも他には無い魅力があるのだと返す。

それはそうだろう、と内心思ったが、続いて天城さん具体的な魅力のポイントとして、何故かジャンプ力を挙げた所には内心ずっこけた。

それに心惹かれるのは、天城さんや割りと少数派の男性諸君だけだろう。

だがしかし、その次に挙げた「何でも美味しそうに食べる」という点には確かに同意する。

やはり、モノを不味そうに食べる人には魅力は感じにくい。

所謂、「美味しそうに食べる君が好き」というヤツだ。

が、里中さんは物凄く微妙な顔をしてその場を走り去り、天城さんもそれを追い掛けてその場を去ってしまった。



夕食後、バイトの応募を見事通過出来た為、早速バイト先の市立病院へと向かった。

仕事内容は院内の清掃だ。

制服と掃除用具を受け取って、仕事を開始した。

……清掃していると、医師達の仮眠室のある区画の近くまで来ていた。

更に奥の方へと進むと、救急救命室の方にも続いているらしい。

……………?

廊下にあるソファの下の所に、何かが落ちている。

拾ってみると、どうやらネームプレートだった。

どうやら、ここに勤務している医師のネームプレートの様である。

……何処かに届けなくては……。

受付か何かを探そうと立ち上がると、奥の救急救命室の方から深緑色のスクラブを着た医療スタッフが、何かを探しているかの様にキョロキョロと下を見回しながらやって来た。

……もしかして、このネームプレートの持ち主だろうか。

「あの、すみません。」

お探し物は、これではないでしょうか？」

そう声を掛けてネームプレートを差し出すと、医師は驚いた様にそれを受け取った。

「ああ、これだよ、これ。」

これを探していたんだ。

えっと……………新しく入った清掃アルバイトの子かい？

拾ってくれてありがとうね。

所でこれ、何処にあったのかな？」

医師は穏やかな笑みを浮かべて礼を言った後で尋ねてくる。

「そのソファの下に落ちていましたよ」

「ああそうかい、それは見付けてくれてありがとう。」

……………寝転んでた時に落としたみたいだな……………。

おっと、もう行かないと。

じゃあね、バイト頑張って」

そうやって、受け取ったネームプレートを胸元に留めて、医師は去って行った。



【2011／06／02】

今日は朝から雨が降り続けている……。

雨は明後日の朝方まで降り続く予定らしい。

恐らくはこの雨が上がった時に、『霧』も出るだろう。

今の所、誰かが失踪した等との噂は聞こえてこない為、恐らくは【犯人】の動きは無いのだろうが……。

兎も角、注意は払わなければならぬだろう。

……今日は異くんたつての希望で、あちらの世界での戦闘の肩慣らしを行う事になっている。

早く準備をして、ジュネスに行かなくてはならない。

後は、ペルソナの調整を行うだけだ。

そう思って、商店街にあるベルベットルームへと繋がる扉を開けた。

……

……

……

……

目を開けると、もう見慣れてきた蒼い空間だった。

……

……、また、マリーの姿が見えない。
そして、床に便箋が落ちている。
……物凄く、嫌な予感がする……。
……マーガレットさんは、微笑んでいる……。
……イゴールさんからは、僅かにフイツと視線を逸らされた。
……。
仕方無い、拾うか……。

『 【飛べ！】

どこへ行くのかって？
ツマンナイこと聞かないで
地図なんか要らない
コンパスはとづくに捨てた
アタシのココロが道を示すわ
アタシは一人で歩いていく
寂しくないかって？
冗談！ 影だつてジヤマなのに
自由 それがルール！
できるものなら縛ってみたら？
アンタの前で華麗に死んでみせる
アタシの翼は 誰にも折れない！

……また図らずも目に入ってしまった文面に、思わず居た堪らなさを
感じて視線を彷徨わせた……。
……マリーは、何と言うのか……独創的なポエマーだなあ……。

「……わああああつっ!!」
思わず遠い目をしていると、前と同じくマリーが慌てて駆け込んで
きて、便箋をひったくる。

「読んだっ!? また読んだっ!?
どうして!? なんな何なのキミッ!

読まないでって言ったじゃん！

それがルール、キミに自由なんてない！

……………。

きらいばかりやるやぶりむし。

有り得ないからッ！」

マリーは顔を真っ赤にして、感情的に言葉を並べ立てた。

……………マリーには同情する。

もし、あのポエムを何かの気の迷いで自分が書いたのだとしたら、誰かに見られてしまったら、恥ずかしさの余り穴を掘って埋まりたくなるだろうから……………。

「おっかしーなあ……………」

ちゃんとしたものに……………」

ブツブツ呟きながら便箋をしまうマリーを、マーガレットさんが微笑みながら見ていた……………。

多分……………マーガレットさんも読んだんだろうな、あのポエム……………。

……………ポエムの事は取り敢えず脇に置いて、ペルソナの調整を行うってから、何とも言えない気持ちのままベルベットルームを後にした。

……………

……………

……………

……………

▲▼▲▼▲▼

……………

……………

……………

……………

テレビに入ると、早速クマが出迎えてくれた。

そしてクマが言う事には、巽くんのある大浴場に強力なシャドウが居座っているらしい。

天城さんの時と同じだ。

そして、これまた天城さんの時と同じく、その強力なシャドウは最深部に居るのだと言う。

そのシャドウ討伐も目標にしながら、巽くんの為の肩慣らしは始まった。

◆◆◆◆

巽くんのペルソナ、『タケミカヅチ』は、強力な物理攻撃と電撃属性の魔法を使う、魔法よりは物理寄りのパワーファイターだ。

同じくパワーファイター寄りの里中さんよりも、一つ一つの動きの速さこそ劣るが、それを上回る力強さと、何よりも頑丈さを兼ね備えている。

巽くん自身の頑強さも相俟って、一撃で高火力を叩き出せるタイプだ。

道中戦ったシャドウを、千切っては投げられる様な奮闘ぶりは、流石暴走族を一人で潰しただけの事はある、と思わず唸ってしまう程だった。

道中には、以前巽くんを救出しに来た時には遭遇しなかったシャドウも現れた。

どうやら、雨の日は『霧』が晴れた時程ではないがシャドウ達が活発になっていくらしく、シャドウの中には雨の日位にしか滅多に出てこない様な、所謂レアなモノも居るのだそうだ。

『霧雨兄弟の四男』と『霧雨兄弟の四女』はスモッグが形になった様なシャドウで、どちらも氷結属性と万能属性以外の攻撃は全て無効化するという厄介な性質を持っていた。

尤も、弱点さえ突ければ、直ぐ様殲滅出来たのだが。

ホラー映画やホラゲにでも出てきそうな『雨女の壺』の攻撃は受けた相手から冷静さを奪うモノで、それを食らった里中さんがまるでバーサーカーの様になって敵に突っ込んでいきそうになったのを止めたりしなくてはならず、その点は手こずった。

しかしこのシャドウも、弱点の電撃属性を突けば直ぐに制圧出来たのであった。

そんなこんなで、初見のシャドウ達もそれなりに大きな問題はなく倒していき、とうとう最深部の扉の前まで辿り着いた。

皆の気力・体力とも問題無い。

目線で合図してから大扉を押し開くと、部屋の中央に鎮座していたシャドウが、それに気が付いた様にその巨体を揺らす。

見た目だけならこの大浴場で散々戦った『収賄のファズ』に似ているが、元々大きな『収賄のファズ』よりも格段に大きい。

まるで巨人だ。

「ムムツ、ソイツは『狭量の官』！」

アルカナは『法王』クマ!!」

そうクマが叫ぶとほぼ同時に、強烈な烈風が部屋中を薙ぎ払う。

「ぐツ……!」

後ろに居たクマと巽くんは何とか無事だが、強烈な一撃に里中さんと天城さんは膝を付いてしまう。

花村はジライヤは疾風属性に耐性を持っているし、自分は降魔中のペルソナが偶々疾風属性に耐性を持つペイルライダーであった為、何とか軽微なダメージで済んだ。

「里中さん、天城さん、立てる!」

幸い天城さんにとっても里中さんにとっても、膝を付きこそしたものの疾風属性は弱点では無かった事も奏効してか深刻なダメージにはなっておらず、直ぐ様二人とも立ち上がる。

「花村と里中さんは魔法使ってみて、耐性を調べて!」

天城さんは回復優先で魔法を、巽くんは風を食らわない様に警戒して魔法!」

兎も角は、敵の耐性を調べなくてはならない。

またあの烈風が来たら、疾風属性が弱点かつ回避能力には難がある巽くんは一溜まりも無いだろうから、迂闊に接近戦に持ち込ませる訳にはいかないだろう。

ペルソナをペイルライダーから『永劫』のナーガラージャに切り替

え、《マハタルカジヤ》で全員の攻撃力を高めてから、《ジオンガ》を叩き込む。

身を撃ち抜いた雷撃に、シャドウは倒れた。

どうやら電撃属性は弱点らしい。

倒れこんだシャドウは、続けざまに叩き込まれた烈風や業火や冷気に削られ、タケミカツチの放った《ジオンガ》で完全に気絶した。

「よし、今だー！ 一気に攻め落とせ!!」

このシャドウは、巨体故にその体力は高く防御力こそそこそこ高いものの、耐性自体は貧弱と言っても良い。

ペルソナをイザナギに切り換え、《ラクンダ》で気絶しているシャドウの防御力を下げる。

そこに先ず花村とジライヤが飛び込んだ。

風を纏ったジライヤの一撃がシャドウの仮面に叩き込まれ、そのジライヤの体を駆け昇って、倒れ伏しても尚厚みだけでも二メートルはあるシャドウの巨体の上を取った花村が投げ放った山刀が、ジライヤの力を受けて風を纏いながらシャドウの巨体に突き刺さる。

そして、続いてトモエに投げ上げられた里中さんが落下する勢いも乗せた全力の脳天落としを決め、間を置かずトモエの黒点撃が更に叩き込まれ、シャドウの仮面に微かな罅が入った。

「二人とも、退いてー!」

と、天城さんの声に花村と里中さんがシャドウから距離を取るや否や、シャドウの巨体全体が炎の渦に飲み込まれ、巨体はそのダメージで跳ねた振動が床を揺らす。

「先輩、いっちょぶちかましてやりましょう!」

巽くんが気合いと共に叩き込んだ《ジオンガ》は、花村が突き刺した山刀を伝ってシャドウの体の奥までダメージを与え、イザナギの雷撃を纏った刃がそれに追随した。

それらの攻撃の余りのダメージに、気絶から醒めたシャドウは、床を激しく揺らしながら起き上がり、手にしていた最早大砲の様な大きさの拳銃を、天城さんへと向け、その引き金を引いた。

「させるかアッ!!」

現実には当て嵌めれば何mm弾になるのかも考えたく無い程巨大なその銃弾を、イザナギの刀の腹で受け止める。

物理への耐性は無いイザナギは、その一撃を殺し切れずに後ろへと弾き飛ばされ、床に叩き付けられた。

「鳴上、大丈夫か!？」

焦った様な花村の声に、頷いて返す。

大丈夫、ではあるが、随分と重い一撃だった。

自己強化能力を使った素振りは見受けられなかったから、あのシャドウは素の攻撃力が非常に高いタイプなのだろう。

物理攻撃に耐性は無いとは言えそこ以上に防御力のあるイザナギが防御に徹していても、それすらも押し切られる様な攻撃力……。

非常に厄介だ。

そこそこ以上の防御力と高い体力故のタフさと、強化するまでも無く高い物理・魔法の攻撃力……。

下手に戦闘を長引かせれば、手酷い傷を負いかねない。

ここは短期で一気に決めるしかなさそうだ。

幸い電撃属性でダウンを取れるのだから、攻め様はある。

「もう一度、私がヤツのダウンを取る！」

皆はその時一気にヤツを削ってくれ!!」

そして、現在召喚可能なペルソナの中で最も威力が高い電撃魔法を放てる《女教皇》のパールヴァティにペルソナを切り換え、全力を込めた《ジオンガ》をシャドウに食らわせる。

パールヴァティの持つ電撃属性の攻撃の威力を引き上げるスキルの効果も手伝って、雷撃はナーガラージャやタケミカツチの放つそれよりも鋭さと威力が段違いに引き上げられ、それを仮面目掛けて撃ち込まれたシャドウは、その一撃で轟音を立てながら床へと倒れ伏した。

空かさず攻撃を次々に叩き込まれ、シャドウは悲鳴を上げるが、それでもまだ沈まない。

ボロボロになり、身体のうちこちらから煙を立ち上らせたり焦げた匂

いを漂わせながらもシャドウは立ち上がる。

だが既に、その仮面には無数の罅が走っている。

もう一押しだ。

シャドウが抵抗しているつもりなのか、その手にしている巨大な手錠を闇雲に振り回したが、それをイザナギとジライヤとトモエの三人掛かりで押さえ込まれ、逆に動きを拘束される。

そして、そこに。

「これで、止めだアツ!!」

激しく電撃を迸らせるタケミカツチの拳がシャドウの罅だらけの仮面に叩き付けられ、仮面を粉碎されたシャドウは悲鳴を上げて塵へと還っていった。

……

……

……

……

▲▼▲▼▲▼

巽くんの肩慣らしと『狭量の官』の討伐を終えてテレビの向こうから帰還した後、その場で解散して各自帰宅した。

あちらの世界での活動も大分熟れてきたからか、あちらでシャドウ相手に散々暴れまわっていても、活動を始めた当初に感じていた様な極度の疲労は感じ難くなっている。

今夜なんて、中島くんのお宅に家庭教師のアルバイトをやりに行く余裕すらあった。

それは、ペルソナを使つて戦う事に慣れてきたからなのか、それともペルソナの力と共に自分自身も成長出来ているという事だからな

のか……。

どちらにせよ、成長している事には変わりはない、か。それを実感しながら、その日は早めに眠った。



【2011/06/03】

……今日も朝から雨が降り続けている。

明日の朝方にかけてまで降り続く、と予報では言っていた。

恐らく、明日の朝方に『霧』が出るのだろう。

昨晚確認した《マヨナカテレビ》には誰も映っていなかったから、

【犯人】が新たに誰かをターゲットにしたとは考え難い。

……このまま、何事も無いのが一番であるが……。

ともあれ、今晚も《マヨナカテレビ》を確認しなくてはならないだろう。

夕飯の買い物をしにジユネスへ行くと、食品売り場で天城さんに出会った。

旅館のお使いかと思ったが、どうやら違うらしい。

一人立ちした時の為に、料理の特訓をするつもりの様だ。

その志は実に良いものだと思う。

「あ、そうだ。

出来ればね、偶にで良いんだけど、鳴上さんに作った料理の味見をして貰いたいんだ。

誰かに食べて貰って、評価して貰う方が、上達も早くなるかなって思っ

鳴上さん、料理する人みたいだし、そういう意見とかアドバイスとか、ちゃんとやってくれそうだから……。

えつと、……ダメかな？」

……確かに、誰かに食べて貰う方が、上達は早くなるだろう。誰かに食べさせるモノだ、と意識する事は大切だ。

「いや、そういう事なら構わない。

そういうのは、努力しようって姿勢が大切なんだし。

私に出来る事なら、喜んで協力させて貰うよ」

「本当!? ありがとう!!」

天城さんは嬉しそうに笑った。

「私ね、ペルソナの力を得て、思ったんだ。

「私、やれるかも」って。

一人じゃ何も出来ないって思って、人に頼ってばかりだったけど。

でも、意外とやれるんじゃないかなって、思って……。

これからは、頼られる位になりたい……。

私、頑張るからね！」

何故、ペルソナを得て『料理も出来るかも』という思いに繋がるのかは今一つ分からないが、自分の力で出来る事をしていこうとするその姿勢は素晴らしいものだ。

「あ、そうだ。それでね、鳴上さん。

伊勢海老って何処に売ってるか分かる？」

「い、伊勢海老……!???

いや、そういう高級食材はジュネスには置いてないんじゃないかな、流石に」

こんな田舎町でそんな高級食材を売った所で買う相手など極めて限られているだろう。

だから、そういうのは売ってないと思う。

何かのフェアとかなら一時的に置いてあるかもしれないが……。

少なくとも、今の様な普通の時期には置いてないだろう。

と、言うよりも。

何故いきなり伊勢海老なのか。

天城さんの発言を考えるに、彼女は料理初心者の筈だろう。

それで初挑戦が伊勢海老とか、どんな大冒険をするつもりなんだ、天城さんは。

伊勢海老は、何をどう間違えても初心者向けの食材ではない。

剥き海老とか、それこそ市販の冷凍シーフードミックスから始めた方が良いのでは……。

「えっ、無いの？」

……残念。

じゃあ……、蟹にしようかな……」

「いやいや、蟹も冒険し過ぎだろう。」

既にボイルされたモノなら兎も角、一から味を付けて美味しく仕上げるのは、初心者には難しくはないだろうか……。

「うーん、えっと、料理とかあんまりした事が無かったのなら、こういうのを使う所から始めた方が良いんじゃないかな」

近くにあった冷凍のシーフードミックスの袋を手に取り、天城さんに渡す。

「でも、こういうのよりも新鮮な素材を使った方が美味しく仕上がるんじゃない……」

「それは料理に手慣れている人が使えば、の話。」

まだ料理に不慣れなんだったら、下ごしらえに失敗してしまう位なら、こういう既にある程度下処理が済んでいるモノを使った方が美味しく仕上がる。

最初からハードルを高く設定するんじゃないやなくて、簡単なモノで良いから、まずは一品仕上げてみる所から始めた方が良い」

それこそ、目玉焼きとか、野菜炒めとか。

そう言う簡単な料理をちゃんと作れる様にしてから段階的に腕前を上げていけばいいのだ。

「そっか……。まずは一品……。」

うん、私……頑張るね！

鳴上さん、アドバイスありがとうー！

天城さんはシーフードミックスを買い物籠に入れてその場を立ち去った。

……罪も無き食材たちが無駄にならずに済んだ様で何よりだ。



夕飯を食べ終えた後、稲羽市立病院へと夜間清掃のアルバイトに向かう。

担当区画を清掃していると、……廊下に置かれているソファの所に、誰かが疲れ果てた様な顔をして、天井を仰ぎながら座っていた。

……たしか、あの人は。

一昨日拾ったネームプレートの持ち主の医師だ。

今日も夜勤だったのだろうか。

ふと、医師と目が合った。

「おや、君はこの前の……。」

今夜もバイトなのかい？」

疲れていた顔に優しい微笑みを浮かべながら、医師は暇なのか話相手が欲しかったのかは分からないが、こちらに話し掛けてくる。

「はい、そうです」

「見た所、学生さんみたいだけど……。」

高校生かな？」

「はい、今高校二年生です」

「そうかそうか……。」

まだ若いのに偉いね」

まだ若い……か。

そう言う医師も、充分若い方に見えるのだけれど……。」

「いえ……アルバイト代の為ですから。」

偉いとか、そんな事は無いですよ」

「ははっ、いやいやそんな事は無いよ。」

僕が君位の歳の時は、バイトなんて全くやってなかったからね……。」

勉強か部活して遊んでいるか、それ位だったものさ」

うんうん、と頷きながら医師は話すが、あつ、と何かに気が付いた様に顔を上げた。

「おつと……まだ名前を言っただけでなかったね。」

これじゃあまるで不審者だ。

僕は神内、ここに勤務している救急医だよ」

神内さんは救急医だったのか……。

先程疲れた様な顔をしていたのは、急患でも運ばれてきたからか……。

「私は鳴上です。」

先日からこの夜間清掃アルバイトにきています」

そうかい、と微笑んだ神内さんは、おつと、と腕時計を見て立ち上がった。

「さて……もうそろそろ戻らなきゃな……。」

じゃあね、鳴上さん。

今夜は君と話せて少し楽しかったよ。

アルバイト、頑張って」

神内さんはそう手を振って、奥の救急救命室の方へと去っていった。



【2011／06／04】



【2011／06／04】

昨日一昨日と降り続いていた雨は早朝には上がり、今は爽やかな青空が広がっている。

その時に霧も出ていたみたいだが、誰かの遺体が発見された、とは騒ぎになっていないので、今回も【犯人】の思惑を防ぐ事が出来たのだろう。

今の所は被害者たちを無事に救出出来ているし、ペルソナの力だつて大分慣れてきた上に磨けてきている実感もある。

だけれど、【犯人】の後に回ってしまっている事には変わり無い。そこまで考え、ダメだなあ……と溜め息を吐いた。

『自分にやれる事を』と、鳴上に今朝も言われたばかりなのに。

それでも、気持ちばかりが焦ってしまう。

事件が起きて、もうそろそろ二ヶ月が経とうとしている。

二ヶ月は決して短い時間では無い。

既にあの二人の事件の事が、この町の人々の口の端にのぼる事が減ってきている。

……このまま何の進展も無かった場合、皆忘れ去ってしまうのだろうか……。

被害者たちの事を。

そういう人達が居たのだという事すら忘れて……？

ぼうつと、考え事をしながらも、そろそろ帰ろうと下駄箱まで降りてきた時、バスケ部の活動を終えてきたらしい鳴上と偶然に出会す。

「……まだ残っていたのか……。

何か、用事でもあったのか？」

俺に気が付いた鳴上は、少し驚いた様に微かに目を丸くした。

部活に参加した後の鳴上は、結構な頻度で一条や長瀬と一緒に帰っている様なので、こうやってここで出会すのは中々珍しい。

「ん、あー……途中で先生に掴まっちゃまってな……。」

資料室の片付けを手伝わされてたんだ。

んで、それが終わってもう帰ろうとしてた所」

そう説明すると、鳴上は少しだけ目を細めて、僅かに微笑んでいる様な顔をした。

「成る程、それは大変だったな。

お疲れ様、花村。

劳いがてら、惣菜大学か何処かで奢ろうか？」

「マジ？。」

マジだ、と鳴上は頷く。

そのお言葉に甘える事にした。



「ビフテキ串DXで良いか？」

「DX？ ビフテキ串にそんなのあったっけ？」

店先で注文しようとしていた鳴上がこちらに振り返りながら訊ねてきた。

初めて聞いたその商品名に、俺は少し首を傾げる。

「お得意様限定で、売ってくれているらしい。

この前、店主さんとちょっとしたご縁があつてな。

それからこのDXも売ってくれる様になつたんだ」

はい、と鳴上から渡されたビフテキ串は、「DX」の名に相応しく、通常の倍近い大きさだ。

鳴上にだけ奢らせるのも悪いと感じ、近くの自販機でオレンジジュースを買ってそれを渡す。

「へー、ご縁って、何があつたんだ？」

「ちよつとした頼まれ事だ。

まあ、割りとそういうのを頼まれ易い質なんだろうな、私は」
そう言いながら、鳴上は店先に設置されたテーブルに腰掛け、ピフ
テキ串DXを頬張った。

……頼まれ事、か。

鳴上が色んな人からの頼まれ事を色々と引き受けている様だ、とい
うのは前から知っていた。

ちよつと無茶な事を頼まれても、嫌な顔一つせずにそれを要望通り
にこなしてしまうからだろうか。

思い返せば、虫籠一杯に虫を捕獲している所に出会った事もあつ
た。

今になって気になったので鳴上に尋ねてみると、どうやらそれも誰
かからの頼まれ事であつたらしい。

鳴上曰く「アキヒコに貢いでいるんだ」そうだ。

アキヒコとは、何処の虫取り小僧だろうか……？

また、恐らくは釣りに行ったのだろうクーラーボックス一杯の魚
を持って、夜の商店街を歩いている所にも出会った事がある。

それもまた、誰かが欲しがっているから持ってきていたらしい。

迷い犬を探して、稲羽の町を歩き回った事もあったのだとか。

校内外問わず、色んな人の相談に乗ったりもしている様だし……。

気付けば、町の色々な人から、鳴上は好意的な目で受け入れられて
いた。

鳴上は、他人に対して「頑張ってるな」とか「お疲れ様」と言つて
小まめに相手を労つたり、相手の努力とかを褒めたりしているが、鳴
上の方こそがどう考えても頑張り過ぎている事も結構ある様に俺は
思う。

色々な事を幾つも抱え込みながらも全てキツチリやれる位、鳴上は
能力が高いのだろうけれど、それを鳴上が誇った事は無い。

高圧的な所や嫌味な所が無いからこそ、色んな人が安心して鳴上に
相談事を持ちかけているのだろう。

要は、鳴上は良いヤツなのだ。

普段は無表情だけど、爆笑したりこそしないが結構頻繁に微笑んだりはしているし、哀しい事があつたらそつと目を伏せたりする。基本的には真面目だけど、案外ノンビリしている所もあつて、偶に押しに弱い。

ふとした拍子に、ボケたりもしている。

かなりマイペースで、割りと天然な所もある様な気がする。

そして何よりも、鳴上は人をよく見ている。

……鳴上を見ていると、敵わないなあ、と時折思う。

その（肉体的・精神的な）強さも、心の広さも、俺では敵わない様な気がして、その事に憧れと少しだけ複雑なモノを感じる。

相棒だと俺は思ってるし、鳴上もそれには頷いていたけれど、俺は本当に鳴上の相棒としてやっていけているのだろうか……。

鳴上からの信頼は感じている。

しかし、俺が望む様な……肩を並べてお互いを補い合う様な相棒であれているのかは、少し自信は無い。

……それを直接口に出して鳴上に言う事は、絶対に無いだろうけれども。

その時、視界の端を、数人の買い物帰りと思わしきジュネスの買い物袋を提げた主婦たちが通り過ぎた。

「……ほら、あそこに居るのって……」

「あのジュネスの……」

『惣菜大学』の横にある、閉店してシャッターが降りたままの『ナカニシドラッグ』の前で立ち止まった主婦たちが俺を見てヒソヒソと……しかしこつちにまでハッキリと聞こえる声で立ち話を始める。

……態とそう話しているのだろう。

……よく、ある事だ。……商店街の近隣では、特に。

商店街の客がジュネスに取られてしまったのは否定し様も無い事実だし、それについては俺だって思う所は確かにある。

特に、八十神高校は商店街に一番近い市内の高校であるだけあつて、商店街の関係者が多く通っている。

必然的に、意識しない訳にはいかなかった。

勿論、商店街とは無関係な生徒も居るし、例え関係者でも皆が皆ジユネスに対して敵意があるのかと言えば、それは違うが。

目に見える敵意も、目に見えない敵意も、散々ここに来てから味わってきた。

抵抗が、反発が、そういつた諸々の負の感情がそれらの敵意に対して生じていない訳じゃない。

……あつたからこそ、俺の『シャドウ』は生まれたのだから。

俺は確かに『シャドウ』を認めてそれと向き合った。

だけれど、自分の『シャドウ』を俺自身が認めたからと言って、商店街の関係者の人たちや町の人たちがジユネスや俺に向ける悪意が無くなったりした訳では無い。

……田舎と言うのは、かなり排他的な場所で、波風立てる事を善しとはしない。

……だから俺に出来るのは、その悪意を黙殺する事だけだった。

俺が何も言わず、更には反応しない事を良い事に、主婦たちの立ち話の内容はどんどんとヒートアップしていく。

最初は、閉店した店がその後どうなっているのだとか、潰れた店の子供が八十神高校の生徒なのに、どんな気持ちで通っているのだろうだとか、そう言った話から、次第にジユネスへの恨み節へと移行し、遂にはそこでバイトをしていた……小西先輩を誹謗中傷するかの様な内容へと移っていった。

「それでね、家業が危ないって言うのに早紀ちゃんがジユネスなんかでバイトするから……」

「そうよねえ、小西さんの所、ジユネスが来てからの売り上げが……」

「そう言えば早紀ちゃんと言えば、去年の夏に……」

「そうそう、そんな事があつたのよねえ。」

本当に、親不孝と言うか……」

小西先輩を好き放題に無責任に誹謗中傷する主婦達の会話に耐えきれられず、俺は俯いて意図しない内に唇を噛む。

その時、何かが破裂した様な……そして金属がひしゃげる様な音が耳に飛び込んできた。

驚きのあまり反射的に顔を上げると、鳴上が、見事にひしやげたジューズ缶の残骸を片手に、今だかつて見た事が無い程その瞳に怒りに似た感情を灯しながら、主婦たちを憤りを含んだ視線で射抜いている。

鳴上の腕の辺りまで飛び散ったオレンジジュースがポタポタと垂れ落ちていた。

しかし、垂れ落ちる滴は一顧だにせず、鳴上は静かに……いつそ気品を感じさせる所作で席を立つ。

「……あなた達に……」

何時もの様に静かな……、しかしその胸の内に湧き上がった怒りを殺し切れていない声で、鳴上は主婦たちに向けて声を上げた。

「花村の何が分かる……」

花村の何を知っている……！

ロクに知りもしない花村の事を悪し様に言う権利など、あなた達にあるのか……？

花村の事も、小西先輩の事も……！

あなた達が中傷して良い理由なんて、何も無い……!!」

決して鳴上は主婦達に怒鳴った訳でも声を荒げた訳でもない。

しかし、そこには有無を言わせぬ程の、そういう力が有った。

鳴上の迫力に気圧されたかの様に、主婦達は顔を強張らせながらそそくさとその場を退散して行く。

主婦達が完全に立ち去って行った事を確認してから鳴上は再び座り直し、そこで漸く「あつ……」と小さく呟いて、握り潰したスチール缶を認識した様だ。

途端に戸惑った様な……困った様な顔をしてチラリとこちらを窺ってくる。

何か言うべきだとは思うのだが、初めて見た鳴上の姿に、頭が何処か上手く働いていない。

鳴上は腕にかかったジュースをハンカチで拭い、僅かに溜め息を吐いてから頭を振った。

そして、意を決した様な顔をして一瞬俺を見てから、ポツポツと話

し始める。

「……………すまない、花村。」

……………何て言うのか、その……………。

あの人たちが、花村の事とか……………小西先輩の事とかで勝手な事を言っているのが、どうにも気に障ったと言うか……………、許せなかったと言うか……………」

何事もハツキリと言葉にする鳴上らしくなく、何時になく戸惑いながら鳴上は言う。

「……………オバサンたちの井戸端会議の噂話なんだし、……………一々気にしなかつたって良かったんじゃないのか？」

「……………それは、……………そうなのかも知れないが……………。」

しかしだな、あの人たちは、ここに花村が居るのを分かってた上で、あんな勝手な事を言つて……………。

……………いや。花村が、波風を立てない様に色々黙って耐えていたのは知っていたんだけど……………」

歯切れ悪くそう語る鳴上は、心底困った様に息を吐いた。

「……………正直、私自身、困惑しているんだ。」

何と言うのか……………さつきみたいに、感情任せに行動した事って、殆ど無くてだな……………。

……………でも、花村が辛そうだったから。

……………つい、カツとなつて……………？」

恐らくは怒りの余り握り潰してしまったスチール缶を、溜め息を吐きながら鳴上はゴミ箱に捨てる。

鳴上自身、整理が付いていない事らしい。

「……………ま、でも、何かありがとな、鳴上」

……………鳴上がある意味俺の為に怒ってくれたのは事実だろう。

そしてそれは、俺にとつてとても嬉しい事だったのだ。

だからそう礼を言うと、鳴上はキョトンとした様に首を傾げた。

「何故花村が礼を言うのかは分からないが……………」

まあ、……………どういたしまして……………？」

その後、鳴上と事件の話をしてから、その日は鳴上と別れた。
その日は、少しだけ何時もよりも楽に眠れた気がした……。





【2011／06／05】

マリーに頼まれ、沖奈駅前へとやって来た。

どうやら、稲羽の外も気になった様だ。

電車が物珍しかったのか、マリーは車窓の外を流れていく風景をキラキラとした目で眺めていた。

尚、電車賃はこちら持ちである。

休日という事もあって、沖奈駅前の通行人はとても多い。

「ここが『街』……？」

ふくん……」

キヨロキヨロと辺りを見回していたマリーは、ふと首を傾げた。

「……変なの。」

広いのに狭いし、四角と…灰色ばかり。

……何をする所なの、『街』って？」

「『何かをする』って、そういう目的がある場所でもなくって、基本は稲羽と同じかな。」

人が住んでいて、そこで生活している。

でも、単純に稲羽よりも人が多いし、他の場所に行く為の交通の便も良いから多くの人が集まって来るから、そういう人達の為に、娯楽を提供するお店とか、物を売る店が色々多い、かな」

「ふうん……。」

キミって、こういう所で遊んでる『遊び人』？

だから、あんまりあの部屋に来ないんだ……。

ばかきらいさいてー。

……キミが来てくれるの、待ってるのに……。

こっちの身にもなってよ……」

ぷうっと、マリーは頬を膨らませてそっぽを向いてしまった。いきなり「遊び人」認定されて思わず少し苦笑してしまう。

「遊び人」って……ドラクエでもあるまいに。

あのゲームで、ネタで「遊び人」ばかり育ててみた事はあったけど。

遊ぶ時は結構遊んでいるけれど、「遊び人」って呼ばれる程放蕩した覚えは無い。

まあでも、マリーはこうやって連れ出している時以外は、基本的にあの部屋でずっと待っているのだから、退屈を覚えて拗ねてしまっても仕方無いか。

「ごめんね、今度からはもうちょっと小まめに行くよ」

「……なら、ゆるす」

頬を膨らませるのを止めたマリーは、やっとこちらを向いた。

「そう言えば、マリーは夜は出歩いてはダメなのか？」

もし夜間も出歩けるのなら、夜の商店街と一緒に散策したり、夜釣りをしてみたりしても良いなと思ったのだが……。

果たしてどうなのだろう。

今の所、マリーを外に連れ出しても大丈夫だと分かっているのは、雨の日ではない日中位なモノだ。

しかし、これから先は夏祭りとか花火大会とか、そういう夜間に行われる催しモノもあるだろうから、一応訊ねておきたかった。

「えっ、どうだろ……分かんない……」

「そうか……、もし出歩けるのなら、夜釣りとかにでも誘おうかと思っただけ……」

「よづり……?」

分かんないけど、……まーがれつとに訊いてみる」

その時、背後から誰かに呼ばれる。

「あれ、鳴上さんとマリーちゃんじゃん!」

振り返ると、「おい」と手を振りながら近付いてくる里中さんと、見慣れないマリーに首を傾げている天城さんが居た。

「こんにちは、鳴上さん。」

えつと……そつちの子は、鳴上さんの友達？」

「あつ、そつか……雪子は会った事無かったっけか。」

この子、鳴上さんの友達のマリーちゃんって言ってね、前に何回か稲羽で会ったんだ」

首を傾げて訊ねてきた天城さんに、里中さんが説明をする。

そして更に、マリーに天城さんを紹介した。

「あ、こっちは天城雪子。」

あたしらの仲間なんだ」

「……なかま……」

快活に笑いながらそう説明した里中さんの言葉を眩き、マリーはこちらを見上げる。

「奇遇だね、二人とも。」

そつちも何か買物に？」

「まあ、そんな所かな。」

“も”つて事は、里中さんたちは買物に来た？」

「うん、二人で服買いに来たんだ」。

あつちだと、ジュネス位にしか服売ってないから」

成る程。確かに、稲羽には所謂お洒落な服を売っている店は無い。

「緑の人、緑の服買うの？」

「みつ、緑の人？」

あつ、そつか前会った時も何時も緑色着てたからか。

あはは……変、かな？」

「変じゃないよ、似合ってる。」

でも、緑の人もそつちの赤の人も、どっちも同じ色ぼつかな感じ」
マリーの言葉に驚いた様に里中さんと天城さんは目を見開いた。

凶星だったのかもしれない。

そして二人して苦笑しつつも俯く。

「うう……痛いトコ突かれた……」

「でも、当たってるよね……」

二人の様子に、マリーは首を傾げた。

「何で落ち込んでるのか分かんないけど……。

何か……勿体ない。

人間は服変えられるじゃん。

もつと色んなの着ればいいのに。

他のも、似合うと思う」

「そ、そういうものかな。

あまり自分で選んだりとか、しないから……」

「天城さんのその服も似合ってるけど、他の色合いとかにも挑戦してみても良いと思うよ」

天城さんが今着ている服も大変似合っているが、他の色合いの服だって似合うだろう。

「マリーちゃんって、もしかしてファッションセンスある感じの人？

だったらさ、マリーちゃんも一緒に行こうよ！

勿論、鳴上さんも一緒にさー！」

「ちよつと千枝、いきなり誘ったら迷惑かもしれないよ？

鳴上さんたちにも用事あるんだろうし……」

良い事を思い付いた、と言いたげな里中さんを天城さんは窘めた。

「私はマリーが良ければ構わないけど。

……マリーはどう？」

マリーを見やると、マリーも少し戸惑いながら頷く。

「え……私も……別に……いいけど」

「よしなら決まり！ ホラ、早く行こー！」

マリーの言葉に里中さんは我が意を得たりとばかりに大きく頷いて、マリーの手を掴んで駅前のショップへと引っ張っていった。

店の主なターゲット層は若い女性の様だが男性用の服もそこそこ売場面積を占めている。

服の種類も、ゴスロリ程ではなくともフリルが少々施されたモノから、ユニセックスなモノ………果ては映画に出てくるFBIが着込んでいそうなスーツなど、品揃えはかなり豊富な様だ。

里中さんと天城さんが楽しそうに服を選ぶ傍らで、マリーは時折アトバイスを与えている。

しかし、里中さんは無意識なのかほぼ確実に緑系統の色合いの服を選んでいるし、天城さんはシンプルなものだと目に痛い位の真紅のものを選び、脱シンプルを目指すと目がチカチカしそうな程カラフルなモノを選んできたりと、中々『脱緑色』・『脱赤色』は果たせそうにない。

「……緑の人は、この組み合わせが似合うんじゃない?」

服を眺めていたマリーは、シャツとスカートをひよいと取ると里中さんに渡す。

そして、天城さんにも同じ様に服を渡した。

「あつ、凄い! マリーちゃん、センス良いね!!」

「ホントだ、コレ良いかも!」

どちらも緑や赤色ではないが、二人にとても似合っている。

二人ともその組み合わせを気に入った様で、早速自分に合うサイズのモノを探し始めた。

しかし、何故か里中さんの分はサイズが売り切れだった様で見付からず、里中さんは残念そうにガツクリと肩を落とす。

次は入荷されているかもしれないからまた来よう、と天城さんが励ますと、里中さんは元気良く頷いた。

「じゃあそんな時はさ、またこの四人で来ようよ!」

マリーが良ければ喜んで、と頷くと、マリーは戸惑った様に視線を彷徨わせる。

「え……私も? 何で?」

「何でって? 友達じゃん、あたしたち」

あつけらかなと言う里中さんの言葉に、マリーはキョトンとした顔をする。

「……『ともだち』?」

そうなの? いつから?」

友達という言葉に実感が湧かなかったのか、マリーがそう訊ねると、里中さんはショックを受けたかの様に微かに呻いた。

「ひよつとしてマリーちゃん……楽しくなかった感じ!」

今日とか、この前とかも……め、迷惑だった?」

「え……迷惑じゃないよ。

”ともだち”って言うから訊いただけ。

……”ともだち”になると、何か意味あるの?」

慌てた様な里中さんに、マリーは首を横に振るが、”ともだち”自体があまりよく分かってないのか、マリーは不思議そうに首を傾げる。

「と、友達の意味?」

うくん……、説明とかどうすれば……」

説明の為の言葉を探し、里中さんは頭を抱えた。

「友達になってみれば、分かるんじゃないかな?」

そんなに難しく考えるモノではない。

”ともだち”なんて、気が付けばなっているものだろう。

”意味”なんて、無理に探さなくても、何と無く見付かるモノだ。

「うん……意味は、あると思うよ。

一人じゃ無理だと思った事でも、二人なら出来る事もあるじゃない。

ほら、今日だって、マリーちゃんのお陰で、新しい服見付けられたんだし」

天城さんの言葉にマリーは俯き、首を横に振った。

「……わかんないよ。

だって……私には……」

マリーが何か言おうとしたその時、里中さんが唐突に顔を上げて、何かを思い出したかの様な声を出す。

「そうだ! 欲しいDVDあったんだ!

早く行かなきゃ、売り切れちゃう!」

「カンフー映画だったよね?」

多分、売り切れないと思うけど……」

そう言う天城さんの背を軽く押して、里中さんは駆け出した。

「いいからいいから!」

ほら、全員駆け足くっ!」

天城さんも走って行く里中さんの後を追って行く。

「え……私も?」

戸惑いこちらを見上げるマリーに、「その様だね」と頷いた。

「早く行こう。……それとも、嫌なのか?」

「意味わかんない……。」

別に、行きたくないとかじゃないけど……」

嫌では無いが、里中さんの言う“ともだち”がよく分からない為戸惑っているのだろう、マリーは。

大分先を走っている二人を見ながら、マリーは言葉を溢す。

「ね、あの人達ペルソナ使ってるでしょ?」

キミと一緒に、“真実を追う”人達……。

一人じゃ無理でも二人なら出来るの?

“ともだち”だから……?」

立ち止まって黙りこむマリーを急かす様に、里中さんは「早く早く」と両手を大きく振ってピョンピョンと飛び跳ねながらこちらを呼んでいる。

何かしら納得のいく答えが見付かったのか、マリーは静かに頷いて里中さんたちの方へと駆けて行った。



里中さんたちの買い物に付き合い、先に帰る二人を見送ってから、マリーと二人で駅前をフラフラしていると、ある店の前でウロウロしている異くんを見掛けた。

……異くんが前をウロウロしているのは、……所謂ファッションショップだ。

「異くん、どうかした?」

声を掛けると、異くんは盛大にキョドツた。

そして、初めて出会うマリーに首を傾げる。

「誰っスか、そいつ?」

巽くんに答える前に、マリーは巽くんを指差しながらこちらを見上げてきた。

「……誰、このオツサン」

「オ、オツサン!？」

酷い言われ様に、巽くんは目を見開く。

まあ、巽くんはガタイが良いから歳上に見え易いのは分かるのだけれども……。

「マリー……彼は巽完二くん。」

私よりも一つ年下なんだから、オツサンは辞めてあげてくれ、頼むから。

あつ、巽くん。この子はマリー、私の友達だ。

……巽くんはこんな所でどうしたんだ？」

「えっ、あー……、家の手伝いでこの近くまで手拭いを届けに来てたんすよ。」

で、その帰りに駅前に寄ってたんす。

新作に使う毛糸を見繕ってたんで」

そう言つて巽くんは、手芸店の紙袋を持ち上げて見せてくれた。

……しかし、では何故ファンシーショップの前をウロウロしていたのだろうか。

「入らないのか？」

親指でファンシーショップを指し示すと、巽くんは慌てた様に辺りを見回す。

「いや、そのっ、気になってたんすけど、流石に入るのは気が退けるっつーか……」

要は入ってみたいけど、一人で入るその勇気が無かったらしい。

……仕方無い。

まだ少し帰るまでに時間はあるし……。

「マリー、この店に興味はないか？」

「……何をしてお店？」

唐突に訊ねられたからか、コテンと首を傾げてマリーは訊ねてきた。

「そうだな……、可愛らしい小物とか、そういうモノを売ってる店かな。」

まあ、一度入ってみるのも面白いと思う」

「そうなの？ ……君が言うのなら、入ってみたいかも」

よし、マリーの許可も貰ったし……。

「よし、ああそうだ、巽くんも荷物持ちとして付き合ってくれないかな？」

「へっ、オレがっスか？」

「沢山買ったなら、マリーや私だけでは持ち帰るのが難しいかもしれないからね。」

こういう店は入り辛いかもしれないが、なに、荷物持ちなら男性が入ったってそう不思議でも何でもないだろう。

「どうかな？」

要は、荷物持ちを口実に入ってはどうか、と巽くん提案しているのだ。

勿論、乗るか乗らないかは巽くんの自由であるけれども。

「えっと、オレは……」

「……この店は、この店オリジナルの商品が有名らしくてな。」

フワッフワのテイベアとか、モッコモコの愛らしい縫いぐるみとか、そういうモノを多く取り扱っているそうさ。

で、どうなんだ？ 入るのか、入らないのか」

巽くんはフワッフワモッコモコの魔力の前に見事に陥落した。

尚、即答である。

一頻り（特に巽くんが）堪能した後、（巽くんだけが）買い物を済ませ、嬉しそうにファンシーショップの袋を抱えた巽くんとは（巽くんは自転車で沖奈まで来ていた為）駅前別れ、マリーと二人で電車で稲羽へと帰った。



買い物帰りに商店街を通り掛かると、足立さんが困った様な顔をして、シャッターが下ろされた惣菜屋の前に立っていた。

「どうかしたんですか、足立さん？」

「あつ、悠希ちゃんか。」

いやねえ、折角早めに上がったからさ、偶には何か作ろうかなって思ったんだけど、メンドくさくなっちゃって……。

惣菜で済ませようかなって思ったんだけどね。

田舎の店って閉まるの早過ぎだよ……」

「家に何かないんですか？」

「あー……煮物ならあるんだけどなー……、それも大量に……。

参ったなー……」

その時、例の老婦人が前を通り掛かった。

もしかして、この辺りの人なのだろうか。

「あら、透ちゃんじゃない！」

お仕事どう？ 頑張ってるの？」

老婦人は足立さんを見るなり、詰め寄る様に近付いていく。

「あ……どうも。」

さつき上がった所で……」

「あらそうなの。」

「あつ、そうだわ透ちゃん。」

夕飯は済んだのかしら？

若いんだからしっかり食べなきゃダメよ。

何だったらウチに来ない？

透ちゃんが大好きな煮物、沢山用意しているの」

その煮物が好きなの『透ちゃん』とは、足立さんではなくこの老婦人の実の息子さんなのではないだろうか。

……何とも言えない気持ちになる。

「あー、いや、今日はそのー……」

困った様な顔をした足立さんがこちらに目を留めて、妙案を思い付

いた様な顔をした。

「今日は僕、彼女の家で食べる約束してて」

そんな話は聞いていない。

単純に老婦人の誘いを断る為の、口から出任せの口実だろう。

「上司のトコの子だから断れなくって。」

はは……お家にお邪魔するのは、また今度でお願いします」

「そう……残念ね。」

それじゃ、今度は絶対ね」

そう言つて老婦人は名残惜しそうにその場を去っていった。

老婦人の姿が見えなくなった途端、足立さんはげんなりとした顔を
して溜め息を吐く。

「……参るよなあ。」

他人の家でサシで夕飯とか、気不味いでしょー。

大体、あの煮物蓮根が硬すぎて苦手なんだよね。

つと、ごめんね、ダシに使っちゃってさ。

あーでも言つとかなないと、あの人しつこいから。

でも、お陰で助かったよ」

あの老婦人の所で夕飯をご馳走になるのは、自分でもちよつと嫌
だ。

と、言うよりも。

自分を通して自分ではない『誰か』を見ていて、しかも自分の事自
体はその『誰か』の代替品程度にしか思っていない相手は、あまり好
きにはなれそうにない。

「いつそ本当に来ちゃいますか？」

どうせ、作るのは今からですし。

足立さん一人の分位なら、増えても大丈夫ですよ」

「えっ、堂島さん家に？」

君も意外とオープンな感じなんだねー。

あれ、でも堂島さんまだ仕事してるし……。

つて事は僕らだけ？

……何か変じゃない？」

まあ、確かに。

それはそれで足立さんのにも気不味いかもしれない。だから、別に無理にとは思っていないが。

「まあ、そうかもしれないんで無理にとは言いませんけど。

でも、足立さんが不健康な食生活とか空腹とかで倒れたりしたら、叔父さんの負担も倍増なんで、その予防線みたいなモノです」

前に足立さんの食事生活が不健康だ、と溢していたから、叔父さんも結構気には掛けているのだろう。

「はー……君って変わってるよね。

あ、でも、確かにあの煮物とかよりも君の料理の方が美味しいのは間違いないだろうけど。

んー……でも、今日はいいや、また今度って事で。

ま、誘ってくれてありがとね」

「そうですか」

まあ、そう言う事ならば仕方がない。

今度、家に叔父さんが連れてきた時にでも、ご馳走するだけだ。

「でもホント、君位の歳で料理出来るのって、凄いやね。

僕なんて、その位の時は料理の「り」の字も知らなかったからさ」

「どんな高校生だったんですか？」

足立さんの高校生時代、か。

想像出来そうで、あまり想像は出来なかった。

どういう友人が居たのだろうか？

どういう風に毎日を過ごしていたのだろうか？

「勉強ばっかだったかな。

それなりの進学校だったからさ、成績が全てだったし。

まあ、でも嫌って訳でもなかったよ。

成績なんて、やれば上がるんだし。

親も、成績が良かったら何も言わなかったしね。

ま、でも……。

そんなんで上手く行くのは、所詮は学校の中だけなんだよね」
社会では勉強が出来れば良いという訳ではない。

対人関係とか、それ以上の柵とか、そういう物がやはり多いのだろう。

両親を見ていると、そうなんだろうな、とは思っていた。

「やっぱり働き始めると、大変ですか？」

「そりゃあね。」

仲間内での泥の擦り付けあいとか、足の引っ張りあいとか、……ま、

大人は大変だつて事さ」

そう言つて足立さんは笑つた。

足立さんは昔は本庁……要はエリートコースに居た人なのだと、聞いた事がある。

その時に色々あつたから、稲羽に来たのかもしれない……。

トンでもなく狭き門である国家試験を潜り抜けて、エリートとして頑張つてきたのなら、少なくとも稲羽の様な田舎町に来たのは足立さんからすると全くの不本意であろう。

「けどまあ、最近結構、楽しいかな。」

僕にもやれる事があるつて感じで。

……ハハツ、恥ずかし」

そう言つて足立さんは笑つた。

……足立さんなりに、遣り甲斐を見出だしているのだろう。

それは良い事だ。

遣り甲斐を見付けられるなら、それに越した事は無い。

足立さんとはそこで別れて、家に帰つた。



【2011／06／06】

今日は、天城さんに頼まれて、買い物に付き合う事にした。

行き先はジュネスなのだが、ペンやルーズリーフは兎も角、勉強机

や蛍光スタンドなど、大分色々と買いたいらしい。

しかし、そんなに買っても持って帰られるのだろうか。

そして、それらを何に使うのだろうか。

フードコートで休憩しながら訊ねてみると、天城さんは気合いの入った顔で教えてくれた。

「あのね、資格の勉強を、本格的に始めてみようと思ってる！」

……取り敢えず、どれが良いとかまだあんまり分からないから、取れそうなのを手当たり次第にやってみようかなって。

前に鳴上さんに教えて貰った翻訳のアルバイト、こつそりやっってお金も少しだけ貯まってきたんだ」

「そうか、天城さん、頑張っているんだな。

資格か……。

スタンダードだけど、『簿記』の資格とかどうかな。

一級とか取れたら、大分生計を立てるのにも役に立つと思うよ」

『簿記』か……。

うん、考えてみるね」

二人でオススメの資格などについて話していると、何やら胡散臭そうな男達が三人程連れ立ってやって来た。

「あれえ？ 天城屋旅館の、女将さんじゃないですか。

あつ、違った。次期、女将さんかあ」

特に胡散臭いスーツ姿の男がニヤニヤしながら話し掛けてくる。

「……まだいらっしやっただんですね」

天城さんの応対にかなりの棘がある。

……知っている相手なのだろうか？

「だって、ここバスも電車も、全っ然来ないからさあ。

ほーんと、田舎だよねえ、稲羽って。

そうになると、ここいらでやれる事なーんも無くつてさ。

ほんと、田舎って嫌だねえ」

じゃあ来るなよ、と心の中で返した。

そんな言葉は、実際にそこに住んでいる相手に向けるべき言葉では無い。

こういうゲスな人ってやっぱり居るんだな……、と思う。

「……そうは思いませんけど」

天城さんが内心苛立った様に返すと、スーツ姿の男は嘲笑う様に顔を歪める。

「オイシイ話に乗らないってのも、田舎の特徴かなあ？ あはは〜」

バカにした様に笑った後、胡散臭い人達は去っていった。

……天城さんが説明してくれた所によると、何処かのテレビ局の取材班らしい。

天城屋旅館の取材を申し込みに来たのだとか……。

取材させて貰う方の態度としては有り得ない位には最低だ。

どうやら、旅番組とかではなく、所謂ワイドショーの番組らしく、山野アナの一件の影響で、宿泊客が減った事を下世話に取り上げたかったらしいが、あまりにも酷い内容なので、女将さんである天城さんのお母さんは断ったらしい。

女将さんの判断で正解だと思う。

そんなゲスいワイドショーに出された所で益は無い。

「でも、断らなくなったら良かったかも……」

天城さんのその呟きを不思議に思い、首を傾げると、暗い表情でポツポツと語ってくれた。

「だって……、悪い評判が立つたらさ……」。

お客さんが来なくなると、旅館が本当に潰れるのかも……。
そしたら……。

……せいせい、する」

しかし、言葉とは裏腹に、全くそう思っている様には見えない。

「天城さん、それ、本気で言ってるの？」

「……本気、だよ」

そう、天城さんは暗く呟いた。

……。

「……なーんて、言ってもしょうがないよね……」。

私は私の力を出ていくし……。

私が、私の人生を決めていくんだから。

それにね、私はもつとみんなの役にも立ちたい。
何時も、こんなにも私の用事に付き合ってくれてる鳴上さんの為にも……」

熱いやる気が天城さんから伝わってくる。

休憩を終えて、再び買い物に戻り、バス停まで天城さんを見送ってから家へと帰った。



【2011／06／07】

昼休み。

皆でお弁当をつついていると、ふと、天城さんがもうそろそろ梅雨入りだ、と溢す。

……梅雨、か。

もしずつと降り続く事態になったら、連日《マヨナカテレビ》を確認しなくてはならなくなるだろう。

……仕方は無い事だが、考えるだけでも少し疲れる。

「てか、今雨を気にするついたら、今度の『林間学校』じゃねえの？」
楽しみだ、という雰囲気隠せない花村がそう言うと、里中さんと天城さんは至極微妙そうな顔をする。

……？　どうかしたのだろうか。

「えー……」

何でアレの話でそんなに楽しそうにするワケ？」

「……あつ、そっか。」

二人とも初めてだからなんだ……」

何故か、天城さんがお気の毒に、とでも言いた気な面持ちでこちらを見てくる……」

「えつ、えつ？ 何でそんな反応なんだよ？」

「林間学校」だろう？ 楽しみだよな、な、鳴上？」

「うん、まあ……楽しみだけど……」

要はキャンプみたいなものなのだから、それなりには楽しみにして
いたのだけれど……。

どう考えても、里中さんたちの様子を見るに、そんな良いモノでは
無さそうだな。

「あんねえ、林間学校の目的、若者の心に郷土愛を育てる」だよ？」

「建前としてはそんなモンじゃね？ フツーじゃん」

何処の学校も、林間学校の謳い文句なんてそんなモノだ。

別に、珍しくも何とも無いのだが……、二人の様子を見るに少なく
ともそれだけでは無いのだろうか……。

「残念ながら、やる事ついたら、山でのゴミ拾いだから。」

花村が期待してる様な楽しみ、何も無いよ」

「ゴ、ゴミ拾い？」

何で態々山行つてまで、そんな修行やんだよ」

何とまあ……。

何故態々ゴミ拾いに行くのだろうか……。

「文句はそれ決めてる先生たちに言いなよ。」

あつ、でも、夜はちよつとだけ楽しいかも。

飯盒炊飯とか、テントで寝たりとか」

飯盒炊飯か……。それは楽しみだ。

恐らくはカレーとかの煮込み料理になるのだろうかけれども。

「私たち四人、班一緒だよ」

「一緒……。ま、まさか……。夜も!？」

興奮した様に立ち上がった花村の頭に遠慮なく手刀を落とす。

「そんな訳は無いだろう。冷静に考えろ」

「花村、あんた最低。」

当たったり前だけど、テントは男女別々だから。

言つとくけど、夜にテント抜け出したら一発停学だかんね」

何せ、このクラスの担任は常日頃から異性交遊や規律の乱れなどに

関してやたら厳しい諸岡先生だ。

定められたテントを抜け出したりなどしたら、大騒ぎするに違いない。

「ハア……何か詰まんなそーだな。

折角面白いイベントが来たと思つたのに……」

「一泊だけだし、翌日にはお昼前に現地解散だから、直ぐ終わっちゃうけどね」

早く終わる事だけは幸いとも言える。

「そう言えば、去年は河原で遊んで帰つたね」

「河原で……って、もしかして泳げるとこあんの？」

何故か花村の顔が輝いた。

遊べそうな場所があつて、嬉しいのかもしれない。

「んー、泳げるんじゃない？」

毎年入ってるヤツ、居るみたいだし」

「そっか……なら……」

花村はどうやら、遊ぶ為の算段を立てている様だが……。

しかし、6月のこの時期の川は、泳いだりして遊ぶにはまだ水温が低過ぎるのではないだろうか。

「花村、川遊びにはまだ寒いから、あんまりはしゃぐのは良くないぞ。

少なくとも、泳ぎは却下だ」

そう釘は刺しておいたが……。

果たして聞いていたのだろうか……。



「おい、鳴上！」

「はい、何ですか？」

放課後、廊下で突然諸岡先生に呼び止められた。

何の用件だろうか。

「お前は委員会に入っておらんかっただろう」

「確かに……入ってはいませんが」

それがどうしたのだろう。

委員に入っていない生徒など、他にも居る筈だが。

「ふむ、なら病欠者の代わりに保健委員として仕事をしてこい！

話しは既にワシが通しておいたから、さっさと保健室に行け！

分かったな！」

言われた通りに保健室に向かうと、……どうやら人手が足りない様で何やら揉めていた。

怪我か病気かと訊ねられたので、違うと首を横に振る。

諸岡先生は話を通しておいた等と言っていたが、どうやら他の委員の人たちにまでは伝わっていなかったらしい。

なので、病欠した保健委員の代理でやって来たのだと説明すると、途端に喜ばれる。

どうやら今から校内の見回りに行かなくてはならないらしいのだが、このままだとその間保健室で留守番してくれる人も足りなかった様だ。

臨時の代理、という事で半ば必然的に留守番を任される事となった。

……留守番役と言っても専門知識は無い為、万が一の際に救急車を呼んで対応したり、業者からの電話に対応する程度の役割らしい。

班分けをして校内に散って行く保健委員たちを見送って、留守番をする。

途中で製薬会社の営業の人が納品の確認に来たが、特に問題なく対応しておいた。

程無くして戻ってきた本来の保健委員たちにその事を伝えておく。保健委員たちはその場で見回りの報告会を行おうとしたが、どうやら一人まだ来ていないらしい。

来ていないのは、一年生の小西くん。

……小西先輩の、弟さんらしい。

“あんな事があって、可哀想なのだから”と、小西くんの仕事は極力割り振られていない様だ。

「すみません、遅れて」

ガラリと扉を開けて保健室に一人の男子生徒が入ってきた。

色の薄い癖っ毛を後ろに流している。

……彼が、小西くんだろう。

髪の色が、小西先輩にとてもよく似ている。

「いつ、いーよいよよー！」

委員会、来なくていいんだって、ホント。

おうちの手伝いとか、大変でしょ？

代わりいるし、大丈夫だから」

保健委員の女子生徒は焦った様にそう言う。

「……けど、俺だけ……」

小西くんはどうやら自分だけ仕事が無いのを気にしている様だ。

「じゃっ……じゃーさー、鳴上さんとここの整理と棚卸ししてくれる？

あたしたち今から見回りの報告会するけど、小西君はテキストに

やって帰っても大丈夫だから、ね!？」

「そ、それじゃ、お疲れ様ー!」

そう言っつて、小西くんが返事をする前に保健委員たちは足早に保健

室を出ていった。

何処か別の場所で報告会を行うのだろう。

………。

保健室には、小西くんと自分だけしか居ない……。

「……1年の……小西です。」

3年の、小西早紀……知ってますよね。

あの人の弟です」

黙りこくつていた小西くんが口を開いた。

知っている、と頷く。

「あんだ……花村の友達ですよね？」

俺、嫌いです。

花村も……あんたも。

「……もう、帰っても良いですか？」

突然面と面を向かって『嫌いだ』と言われたのには少し驚いたが、まあ自分がどんな人からも好かれる様な人間では無い事は分かっている。それ以上は特には思わなかった。

「ただ、そうか、と思っただけである。」

「……帰りたいのなら、帰っても良い。」

本来の委員の人から、テキトーで良いと言われてるんだし。

小西くんの好きにすれば良い。

別に、それを咎めるつもりは無いから」

「……それじゃ」

そう言っただけで小西くんは保健室を出て行ってしまった。

頼まれた棚卸しと整理を一通り終わらせたが、他の保健委員たちはまだ帰ってこない……。

先に帰らせて貰う旨をメモに残し、保健室を後にすると、下駄箱近くの窓際に黄昏る小西くんに出会った。

「……先に帰ったのではなかったのか……」

「……どうしたのだろうか？」

「あれ、何か用事でも残ってた？」

「あ……いえ。」

「……他の皆がまだ働いてるのに、自分だけ先に帰るのは……何となく嫌だったんです……」

「……」

「そうだ……あれから他の委員に呼ばれて、俺、保健委員を”おみそ”扱いになりました。」

「”おみそ”って……知ってます？」

「居ても居なくても、良いってやつ……」

「言いながら、小西くんは疲れた様に笑う。」

「俺、出ても出なくても……居ても居なくても、良くなったんです。」

「家が大変だから、”特例”だって。」

「……”可哀想だから”って、言えがいいのに。」

「皆、俺に”やらなくてもいい””帰ってもいい”って、そればっか」

なんです。

「可哀想だから」って、遠巻きにしている……。

……居心地が悪いってワケじゃ無いんですけどね。

でも、アイツらそう口では言いながら、好奇心丸出しの顔なんですよ」

少し嫌悪の混じった顔で、小西くんは言う。

「どうやって殺されたの?」。

” どうして殺されたの? ”。

” 犯人が憎い? ” ……。

聞く勇氣も無いくせに、目だけは輝かせて俺を見てるんですよ……。

一挙手一投足をね。

……うんざりします」

そして、溜め息を吐きながら、訊ねてきた。

「……あんたも、何か聞きたいから話し掛けてきてるんですか?」

「……否定はしないね」

聞きたい事が無い訳でもない。

自分は小西先輩の事を殆ど知らないから。

……知らないまま、彼女は殺されてしまった。

心無い噂話などは時折耳に入るけれど、それは小西先輩の実像を捉えているとはあまり言い難いものだ。

だから、彼女をよく知る人に、小西先輩がどういう人だったのかを訊ねてみたい、とは前から思っていた。

「……ははっ、面白いっすね、あんた。

あんま知りもしないのに、いきなり『嫌い』とか言っつて、すみませんでした。

直接言っつてくれたからには何か話したい所だけど、残念ながら俺の口から言える事は無いっすよ。

テレビで発表されている事が、俺の知ってる全部。

……あー……、「犯人が憎い?」には、「いいえ」……ですね……」
「いいえ」、か。

別に、小西くんが【犯人】をどう思っているとも、それは小西くんの自由だから、それはどうでも良いのだけれども。

「あつ、スカートの裾が汚れてますよ。」

……さっきの、……棚卸しの所為ですね。

すみません、本当は俺の仕事でもあったのに……。

……これ、良かったら……。」

こちらのスカートの裾の汚れを指摘した小西くんは、自分のポケットを漁って、何かを取り出して渡してきた。

……渡されたのは、綺麗に折り畳まれた、男子生徒が持つには少々女性的とも言える、小さな花柄模様の付いた可愛いハンカチだ。

「あつ、……。」

いえ、やつは何でも無いです」

渡してからそれが何であるかに気が付いたのだろう。

一瞬その顔に痛みが走った様に見えた。

これはもしかして……。

「それじゃあ、もうそろそろ俺は帰ります」

ハンカチを返す前に、小西くんは去ってしまった。

……。折角貸してくれたのだし、ここはありがたく使わせて貰おう。

そして、ちゃんと洗って返さなくては……。



中島くんは理科を中心に教え、勉強の合間で途中休憩を取っていると、中島くんのお母さんがチーズケーキを差し入れてくれた。

美味しいチーズケーキだ。

どうやらネットで今話題になっているお店のモノらしい。

ケーキの話題から、中島くんの自慢へと移り、そして中島くんの将

来の話へと移る。

「それで先生、秀なんですけど……東大に入れますかしら？」

「東大、ですか？」

思わず首を傾げた。

いやまあ、中島くん位の歳の頃から、東大を目標にして頑張る人は確かに居るが……。

……気が早くはないだろうか？

「ええ、この辺りの大学だと秀ちゃんに見合う様ないい大学は無いですし……。」

この子には、苦勞をさせたくないんです。

良い大学に入れれば、『安泰』でしょう？」

良い大学、か。

……大学とは、あくまでも通過点の一つに過ぎない。

大学に入って終わりでも無いし、更に言えば企業に就職した所でも、それで終わりにはならない。

自分が学びたい事を学べる場所に行けば良い。

まあ、東大とか辺りになると、色々と最先端の研究をしているから、そういう点では興味があるが……。

……だがそれも、単に自分の考えでは、というだけなのだけれども。

「人には各々向き不向きがあるけれど、丁度秀ちゃんは勉強に向いているから……。」

是非とも、良い大学に入って、良い企業にお勤めして、良い人と……」

それまでお母さんの話を黙って聴いていた中島くんの顔が曇り、俯く。

そして、顔を上げて、お母さんの話を遮った。

「……大丈夫だよ、お母さん。」

僕、何時だってトップだったろ。

今迄も、これからも」

「そうよねえ。」

ほくんと、手の掛からない良い子で……」

中島くんの言葉に頷いたお母さんは、中島くん自慢をまた始める。それは暫くの間続いて、お母さんが部屋を出た後に、中島くんは思い悩んでいる様な顔で溜め息を吐いた。

「……………いい大学に入れば、『安泰』なんですか？」

ポツ、と呟かれた中島くんのその言葉に、微かに首を横に振る。

「……………どう、だろうね。」

まだ大学に入っていないから、ハッキリとは言えないけれども……………

『安泰』と、いい大学に入るってのは、別に『じやないと思うよ』

「……………そうなんですかね。」

お母さんは、良い大学・良い企業ってしよっちゅう言うんですけど……………

……………でも別に、僕は『安泰』が欲しいって思ってるんじゃないです。

どんな事かも、よく分からないし……………

……………まあ、どっちにしても、勉強はしないと。

……………頭良くないと、『意味』無いみたいだし……………」

『意味』無い、と口にした瞬間に中島くんは悩まし気に顔を微かに歪め、そして下を向いた。

そして、再び上を向いて、今度はしつかりとこちらを見る。

「レーゾン・デートル。……………知ってます？」

存在価値、か。

「『raison d'être』。フランス語だね。」

日本語にすれば、『存在理由』とか『存在価値』とかまあ『生き甲斐』とかの意味。

英語だと直訳で『reason to be』、意識して『reason for existence』って所かな。

あるモノがそこに存在する意味・理由・価値……………って意味だね。

実存主義哲学でよく使われる、哲学术語でもある。

……………村上春樹の短編集でも、読んだの？」

多分そうではないのだろうけれど、中島くんの暗い表情を和らげようと、態と少しおどけた様に逆に訊ねた。

「あつ、いえ……そうじゃないんですけど。」

……先生、よくご存知ですね。

つて言っても、三つも歳上なんだし当然か」

中島くんは何かに納得した様に頷く。

「……下らない事、言いましたね。」

……。

ウチ、お母さんしかいないし、学校の奴らは子供過ぎて話になんなく……。

……何でも、無いです。

……もう時間ですね。

……あと一問、残っているんですけど……。」

言葉を途中で飲み込んだ様な顔をし、それを誤魔化す様に中島くんは時計を見て声を上げた。

「よし、ならそれを終わらせないとね」

大問一問位ならそう時間は取らないし、どうせならスッキリと終わらせたい。

「張り切っても、バイト代は変わりませんよ？」

……まあ、お願いします」

中島くんは口ではそんな事を言いながらも、嬉しそうに頷いた。



【2011／06／08】

「そう言えばさ、鳴上」

放課後、唐突に花村が話し掛けてきた。

また、ジュネスでの臨時のバイトの依頼だろうか。

「いや、そうじゃねーんだけど……。」

鳴上の様に、バイクってどうよ？」

「バイク？ どうした、藪から棒に……。」

まあ、便利だとは思いますが……。」

ツーリングとかやるのも楽しいだろうけれど……。

唐突過ぎやしないだろうか。

「いや、そーいうんじや無くってさ。」

バイク持つてるヤツとか、お前的にどーなんよ」

どうと言われても……。

バイクと、それを所持している人と、そう関連は無いだろうに。

バイクを持っている人を見掛けた所で何とも思わないだろうが

……。

「いや別に。あ、でも……バイク自体は結構好きだな。」

仮面ライダーとか小さい時には物凄く憧れたし、白バイの人達のあの操縦技術は素晴らしいと思う。

ヒーローものとかの、変型機構とか付いてるバイクとかはロマンを感じるな。

で、それが一体どうしたんだ？」

「あ、実はだな」

花村が説明しようとしたその時、教室に巽くんが入ってくる。

「ちーつす、先輩。」

今度の林間学校なんすけど……。

……？ 何か取り込み中っすか？」

「あー、ちつとな。バイクの話してる所」

首を傾げた巽くんは花村が説明すると、何をどう理解したのかは分からないが、突然巽くんは腕を捲った。

「バイク？ どっか潰しに行くんで？」

カチコミなら手伝いますよ！」

「いやいや、行かないから、潰さないから！」

大体カチコミって何だよ！

やんねーよ、んな物騒な事！

バイクの免許取んねーかって話してんの！」

あ、そう言う話だったのか……。

なら、そんな回り諄い言い方ではなく、もつとストレートに言えば良いのに……。

「あれ、先輩ら、免許持ってないんすか？」

「えっ、まさかお前、既に免許を……」

そう問う花村の言葉に、巽くと二人で頷いた。

「私は持ってるが」

「オレはねっす。まだ15っすからね」

「えっ、鳴上もう持ってるの、ってかあの言い方で完二、オメーは持つてねーのかよ！

てか、バイクとか無しでよく族とやりあえたよな……。

どうやって追い回してたワケ？」

「あんなん、チャリで充分だろ」

どうやら巽くんは自転車でバイクに対抗していたらしい。

凄いスタミナだ。

「それは凄いな、流石だ、巽くん」

「うっすー」

そう褒めると、巽くんは嬉しそうにガッツポーズを決めた。

「まあ今はそれは良いや。」

てか、鳴上、お前持ってたのかよ！」

「えっ、まあ一応。」

四輪の免許取る時に筆記試験が免除になるから、16歳になった時に序でに。

ちゃんと教習所に行つて、普通二輪の免許を取ってる」

バイク自体はまだ持っていないが……。

普通二輪の免許自体は、四輪免許よりも取るのが大分楽だ。

だから、既に取ったのだから……。

何かいけなかったのだろうか？

「うわー、マジかー。」

一緒に原付きの免許取ろうぜって誘うつもりだったのに……」

「原付きにするのか？」

原付だと、色々と制約があるだろうに。

「この辺りだと教習所は遠いし、予算的にも筆記試験だけで取れる原付きが精一杯だつて。」

それにホラ、原付きだとしても、バイクあつた方が行動範囲も広がるし、それになー、夢じゃね？

バイクに二人で乗ってどっか行ったりすんの。

鳴上のにもそういうの、憧れたりしねーの？」

そう花村はキラキラとした目で語ってくるが、その思いに水を指すと分かっていながらも、思わず訂正を入れた。

「二人乗りって事か……？」

いや、別にそれには憧れたりはしないな。

友達とツーリングするのならやってみたいけど。

……と言うより、原付きは二人乗り禁止だぞ？」

「えっ、マジ？」

「普通二輪でも、免許の交付から一年は経ってないと、二人乗りは出来ない。」

知らなかったのか？」

調べれば直ぐに分かる事だと思ふのだが。

二人乗りが出来ない事に気が付いた花村は「け、計画があー……。」とガツクリと項垂れた。

何の計画を立てていたのかは知らないが、御愁傷様である。

「うう……、二人乗り出来ねーのはこの際置いといて、とにかくバイクはあつた方が便利じゃん！」

捜査とかの絡みもあるし、何よりバイクあつたら沖奈行くのも直ぐだし、海とかそういう所に遊びに行けるんだぜ！

つまり、バイクは必要！

相棒もそう思うよな!？」

ガバツと顔を上げた花村は、バイクへの熱い思いをそのままこちらにぶつけてくる。

本当にバイクが欲しいのだろう

バイクがあれば色々と便利になる事は認めるし、欲しいか欲しくないかで問われれば、自分だって欲しいのではある。

しかし、バイクはそこそこ以上の買い物になるし、何より家族（この場合は叔父さんと両親）からも同意を得なければならぬ。

バイクを購入する位なら貯金を崩せば何も問題無いが、同意を得るのが少し大変な気もする。

両親は、国際電話やメールで確認すれば割りとおつさり許可してくれそうな気もするが、問題は叔父さんだ。

「……まあ、バイクはあった方が便利なのは認める。

……今夜辺りにでも叔父さんに話してみるよ」

「いよっし！ 絶対だかんない!!」

花村は喜んで立ち上がり、そしてバイトのシフトの時間が迫っている事に気が付いたらしく、そのまま慌てて帰っていった。

「そう言えば、巽くんは何の用事だったんだ？」

どうやら何か用事があったのにバイクの話ですっかり流れてしまっていた様だったので訊ねると。

巽くんは頭を掻きながら答えてくれる。

「あつ、今度の林間学校で、先輩らン所に行っても良いか聞きたかったんス」

「一年と二年は班が別になるんじゃないや無かったっけ？」

「あー、そうなんスけど。」

オレが居ると、班の奴らが葬式みてーに静かになっちゃまうし……、バックレたら進級させねえって釘刺されちまってるから、フケる事も出来ねーし……」

成る程……。

確かに、それはお互いが気不味くなってしまうだけだろう。

流石にあと十日も無い今の状況で、班の人たちと打ち解けるとは言えないし……。

「そう言う事なら、別に構わない。

と言っても、私が許可出来るのは夕飯の時位だから、テントとかも一緒にしたいんだったら、花村に許可取ってからだけど」

「あざっス！」

花村先輩には、後でちゃんと許可取りますんで大丈夫っスよ！」
巽くんは嬉しそうだ。

しかし、巽くんも来るとなると、林間学校の時は結構多目に夕飯を
作らなければならなさそうだ。

うん、腕が鳴る。

その時ふと、巽くんに訊ねたい事があつた事を思い出した。

「そう言えば巽くんって、刺繍とかつて出来るのか？」

「刺繍っスか？ まあ、出来ませけど……」

どうしたんスか？と首を傾げる巽くんに、両手を合わせて頭を下げ
る。

「折り入って巽くんに頼みがある！

私に刺繍を教えてくれないだろうか？」

「はっ!? えっ、ちよっ、オレが先輩に？」

「頼む！」

混乱したのかワタワタと手を振る巽くんに、再度頭を下げた。

「えっと、えと、教える位なら、いつ、いつスけど……」

どうしたんスか、突然……」

「菜々子に贈ろうと思つて作つたエプロンに、刺繍をしてあげたいの
だけど……」

不慣れだからか、どうにも納得のいく出来にはならなくて……、
困っていたんだ」

菜々子が本格的に料理を習いたいと言い出してから、こつそりとそ
の為の道具類を買い揃え、包丁などは『いだら』の店主に頼み込ん
で作つて貰つたり、エプロンは自作したりと、その準備を進めてきた。

エプロン自体は完成しているのではあるが、折角なので刺繍か何か
を入れてやりたい、と挑戦しようとしてみたものの、中々自分で納得
の出来る様な仕上がりにはなりそうになく、インターネット等でやり
方を調べてみても、今一つなのであった。

ここまでやって最終的にアップリケでお茶を濁すのも、何と無く負
けを認めてしまっている様で嫌なので、刺繍の腕がある人に教示して
貰おうと思つたが、そもそも刺繍が出来そうな知り合いが巽くん位し

か思い当たらなかつたのである。

「そう言う事なら、オレに任せて下せえ！」

全力で先輩に、キュン死するくれえの刺繍のやり方を教えさせて貰います！」

ガッツポーズを取ってやる気に溢れる顔で、巽くんは了承してくれる。

早速明日、刺繍を教えて貰える事になった。



今晩は足立さんを連れてくるので、夕飯を多目に用意しておいてくれ、と叔父さんから連絡があった。

言われた通りに足立さんの分の食材も買い込んで帰宅する。

今日のメインはお肉たつぷりのロールキャベツだ。

回鍋肉と迷ったが、それは今度にしよう。

圧力鍋を使って煮込んだロールキャベツの出来栄は上々だ。

スープは確りと裏漉ししたジャガイモを使ったポタージュ。

これも満足のいく出来である。

「ただいま」

「お邪魔しまーす」

叔父さんと一緒に家にやって来た足立さんは、机の上に並べられた料理に目を輝かせた。

「すまん、悠希。

コイツの分まで作らせちまって。

毎日毎日カップ麺をズルズル啜って煩せえから、呼んでやったんだ」

やはり、叔父さんも足立さんの荒んだ食生活は気になっていた様だ。

ロールキャベツに箸を付けながら、叔父さんは溜め息を溢す。

「まったまたあー。」

ホントは堂島さんも、同僚とメシ食べたかったんでしょ？」

「馬鹿か」

「あはは。でも、悠希ちゃん、偉いなあ。」

こういう風にちやんと美味しく料理出来る子って、貴重なんですよー、堂島さん」

ロールキャベツを食べながら足立さんは言った。

「どうやら足立さんの口にも合った様であり、それは何よりだ。」

叔父さんと比べると体格的にヒョロく見える足立さんだが、見掛け以上に結構食べる人の様である。

あつと言う間に、ロールキャベツもジャガイモのポタージュもペロリと食べてしまった。

もしまた足立さんに料理を振る舞う機会があれば、もう少し多目に作ってあげた方が良いのかもしれない。

「今日のロールキャベツは、菜々子が包んだんですよ」

「ほう、そうなのか、菜々子？」

「うん！ キャベツでね、くるくるってしたんだよ！」

やり方、お姉ちゃんに教えてもらった！

お姉ちゃん、上手だねってほめてくれたよ！」

菜々子が嬉しそうに報告するのを、叔父さんも「そうかそうか」と嬉しそうに聞いている。

それを見て和んでいたのだが、ふとバイクの事を叔父さんに言ってみなくてはならない事を思い出した。

「あつ、そうだ、叔父さん」

「どうした？」

「バイクを購入する許可を貰いたいのですが……。」

「良いでしょうか？」

「バイク？」

ああ、お前の歳ならもう乗れるんだったな……。」

「てか、お前免許持ってたのか？」

「普通二輪の免許を持っています」

免許の用意はバツチりだとアピールする。

それを聞いた叔父さんは、参ったな、と頭を掻いた。

「そうか……。けどなあ……。姉貴に何て言やあ良いんだか……」

渋る叔父さんに、意外な所から援護射撃が飛ばされる。

……足立さんだ。

「まーまー堂島さん、そう言わずに。

ここじゃバイクも欲しくなりますって。

悠希ちゃんの気持ち分かりますよ、同じ元“都会人”として。

電車含めた公共交通機関も不便だし、そのクセ無駄に広いから徒歩つてのも無茶があるしねえ？」

「まあ、不便なのは確かです」

稲羽は人口の割りに土地がとても広く、稲羽を移動するだけでも徒歩だとそこそこ時間が掛かる。

同じ稲羽内を移動するのでさえもかなり不便なのだが、稲羽の外に出ようとすると、更に輪をかけて不便になる。

電車やバスの時刻表も、驚く程スツカスカだ。

足が無いと不便なのは、否定しようもない事実なのである。

「だよなー？ 都会じゃ考えられない位だもんねー」

「そうは言ってもな……」

まだ渋る叔父さんに、足立さんはニヤリと笑って小声で叔父さんに囁いた。

「そーいや堂島さん、前に言ってませんでしたっけ？」

若い頃はバイクで相当無茶を……」

「馬鹿か、余計な事は言うな。

食い終わったら、サツサと……」

あまり触れられたくない話題だったのか、叔父さんは足立さんをキツと睨んで黙らせる。

その時、叔父さんの携帯に着信が入った。

「ったく……」

舌打ちしながら携帯を取って叔父さんは立ち上がる。

「俺だ。……」

分かった、直ぐ行く」

電話を切って、叔父さんは深い溜め息を吐いた。

「酒飲まなくてアタリかよ……」

足立、例の資料確かお前持ちだったよな」

「資料？ あゝ……………」

あの不審者、また出たんスか？」

「一々口に出さんでいい」

戻るぞ、先に車乗ってろ」

「戻るって、署にですか!?!」

今から!?! とでも言いたげな顔をして渋る足立さんの頭を、叔父さんはバシンツと叩いた。

「いいからサツサとしやがれ」

「はいはい、分かりましたよ、もー……………」

あつ、夕飯美味しかったよ、ありがとね」

そう言って足立さんは足早に出ていってしまう。

それを見た叔父さんは、フウと溜め息を吐いてからこちらに向き直った。

「バイクの話だが…………、ちゃんと自分で考えてから決めた事なんだろうな」

「勿論です」

「足が無いと不便ってのは分かる」

だが、分かっちゃいるだろうが、二輪ってのは危険も多い」

「安全運転を心掛けます」

「まあ、悠希はヤンチャする様には思えんから、その辺りは大丈夫だろうが…………」

簡単に許可するワケにもな…………」

「母さんに連絡して、許可を貰いましょうか?」

今の時間帯なら電話かメールのどちらでもかなり早目に返信されてくるだろう。

「…………姉貴から許可が降りたんだったら、考えておく」

じゃあ、留守電は頼んだ」

そう言つて、叔父さんは再び仕事に戻っていった。

母さんに電子メールを送つてから、夜間の病院清掃のバイトに行き、それから帰つて来た頃合いに母さんから返信が届いていた。

叔父さんの言う事をちゃんと聞く事、安全運転を心掛けて無茶な運転はしない事、その他諸々の細かな事を条件に、バイクを購入する為の母さんからの許可は無事降りたのだった。



【2011／06／09】

翌朝。

通学路で出会つた花村は寝不足なのか、やたら欠伸をしている……。

「花村、何かあつたのか……？」

「あー、いや……。」

今日の放課後、早速原付き免許取りに行こうと思つてな……。教本読んでたらドンドン細かいトコが気になってきて……。

ベッド入つても、細かいところ気になつて起きて、本見直して、の三拍子がエンドレスで……。

お陰であんま寝れてねー……。」

早速免許を取るつもりなのか。

筆記試験のみとはいえ、凄い熱意である。

余程バイクが欲しかった様だ。

「まっ、やるからには一発合格を目指すさ。」

「そうか、応援する。頑張つてこい。」

「おう！」

欠伸をしながらも、ニツと親指を立てて花村は笑った。



放課後、筆記試験を受ける為に早速教室を飛び出していった花村を見送ってから、巽くんに刺繍を教えて貰う為に、巽屋へと向かった。

巽夫人に挨拶をして、奥へと上がらせて貰う。

そして早速、作成したエプロンを取り出して巽くんに見せた。

「スツゲー丁寧で作られてるっスね。」

こりゃー相当裁縫出来る感じだな。

で、先輩。

どういう図を入れたいんスか？」

「菜の花とかかな……。」

……後は兎とか小鳥とか、菜々子位の年齢の子供も好きそうな図柄も入れてあげたい」

あげるからには、心から喜んで貰えるモノを贈りたいものだ。

「んー、じゃあこういう風な感じになって事スか？」

さらさらっ、と巽くんはスケッチブックに図案を描いてくれる。

それに少しずつ要望を描き足していつて貰うと、とても納得のいく図案が完成した。

しかし、問題はその図案通りに刺繍出来るか、である。

早速刺繍に取り掛かると、躓きそうになる度に巽くんは丁寧にそれを修正したりアドバイスをくれたりした。

「あつ、そこはこんな感じにバックステッチで仕上げるんスよ」

「………こうか？」

「そうっス。先輩、筋が良いっスね。」

おっと、そこはクロスステッチでお願いします」

巽くんの指導を受けながら刺繍と格闘する事数時間……。

日が傾き夕暮れ時になり始めた頃に、漸く刺繍を入れたエプロンは

完成した。

「よしっ、完成だ！ 巽くん、ありがとう!!」

「いや、先輩が器用だったってのが大きいっスよ。」

正直、初心者ってのが信じられない位っス」

「そんな事は無い、巽くんが適宜アドバイスしてくれたお陰だ。」

巽くん、こういうのを教えるの、向いてるんじゃないかな?」

「オレが? いやー、オレ頭良くないからなー……。」

多分教えたりするのは向いてるとは思えないっス」

そんな事は無いと思うのだが……。」

それにそもそも、こういう事を教えるのに学力はあまり関係無いだろうに……。」

「巽くん、もし良かったらなんだが、これからも時々刺繍とか裁縫とか、私に教えて貰えないだろうか」

「先輩、もう充分裁縫出来るじゃないっスか」

別に態々教わらなくても、と首を傾げる巽くんに、いや、と首を振った。

「まあ、不得意とは思わないが……。」

それでも、巽くんの様な作品を作る腕前は無い。

何と言うのか……。」

うん、意地みたいなモノだと思ってくれていい」

「意地?」

「……何と言うのかな、巽くんが作った編みぐるみを見て、菜々子が可愛いって褒めてて火が着いたと言うか……。」

まあ要は、〃やりたい〃と思ったんだ。

こんな風なモノを、作ってみたってね。

〃やりたい〃と思ったからには、全力を尽くしたい。

ただ、それだけだ。

……そんな理由では、ダメだろうか?」

巽くんは少し悩む様に頭を掻く。

そして、意を決した様にこちらを向いた。

「……良いっスよ、先輩なら。」

先輩の理由、ダメなんかじゃ無いっス」

「そうか、ありがとう。」

その代わりと言ってはなんだが、私に出来る事があれば、何でも言ってくれ。

学校の勉強とかなら、私も教えてあげられるから」

「そんならテスト前とか、オレの勉強見て貰っても良いっスか？

先輩、確かスゲー頭良かったっスよね？

オレ、前の中間がボロボロで、今度悪かったらお袋パンチが飛んで来るんす。

あつ、でもそしたら、オレの方が先輩の世話になりっぱなしになっちまうか……」

成る程、巽くんは学力に不安を抱えている様だ。

確かに、教える時間自体は釣り合わないかもしれないけれど、それに何の問題があろうか。

「いや、それで全然構わないよ。

各々、足りない所を教え合えるのなら、それで何も問題無いさ。

……これからよろしく、巽くん」



巽屋を後にして、家に帰ろうと商店街を歩いていると、丁度試験会場から帰って来た花村に出会った。

どうやら、無事に原付き免許を修得出来たらしい。

「割りと余裕だったぜ！

寧ろちよい気合いを入れ過ぎたっつーか……」

そう言いながら、花村は嬉しそうに免許を見せてくる。

それに、良かったな、と頷いた。

「家帰ったら、早速カタログ読み込まねーと！

くーっ、楽しみだ！

「そーいや、鳴上の方はバイク買う許可降りたのか？」

「母さんと父さんからの分は。」

でも、叔父さんからの許可はまだだ。

一応朝方に、両親から許可が降りた事は伝えておいたんだけど……。

まあ朝は色々忙しいし、返事を聞く前に家を出てしまったんだ」
花村とはそこで別れ、そのまま歩いているとガソリンスタンドに叔父さんが立っているのに気が付いた。

給油かと思つたが、近くに車はない。

……仕事だろうか？

「叔父さん、お仕事ですか？」

声を掛けると、叔父さんはこちらに気が付いた様に顔を上げる。

「ん？ ああ、悠希か……。」

まっ、ちよつとした野暮用だ。

ガソリンを入れようと思つてたんだが……。

丁度良い所に来たな」

丁度良い？ 一体何が？

首を傾げていると、叔父さんは足立さんと呼んだ。

「はいはい、堂島さん。」

満タン、丁度今終わりましたー。

ってあれ？ 悠希ちゃんだ、うわっ、偶然だねー」

そう言いながらガソリンスタンドの奥から現れた足立さんが押し
てきたのは、一台の白い原付きだった。

そう言えば、家の車庫にずっと置かれていたモノだ。

型こそ古めだったが、錆が浮いたり埃を被っている様子は無かった
ので、大切に手入れされているのだろうと思ひながら見ていた。

叔父さんはその原付きを微笑みながら見て言う。

「……俺の愛車だ。」

バイク屋で治させてな。

年季は入ってるが、中々良いモノだぞ。

ガソリンを今入れてた所なんだが……その場で早速渡す事になる

とはな」

「えつと……それって……」

叔父さんの言葉を普通に解釈すれば、『このバイクを譲る』と言っているのだからうけれど。

良いのだろうか？

大切なモノなのではないのだろうか？

乗っている気配こそ無かったが、それでも大切に扱われているのは見てて分かっていたし、もう乗らないのだとしてもそれこそ所謂『思いの品』というヤツだったのではないのだろうか？

「お前に譲る」

叔父さんはしつかりと頷いた。

「もうこれには乗らないんですか？」

「仕事じゃ車の方ばつかになつちまつてるから……」

何時か乗るかもしれない、と一応手入れは欠かして無かったが、そうそうそんな機会は無いだらう。

……コイツも、置物みたいに扱われているよりは、誰かに乗って貰った方が良いだらうさ」

そう言つて、叔父さんは原付きのヘッドライトの辺りを撫でる。

本当に、この原付きを大切にしていたのだらう。

それを譲ると言つてくれたのが、純粹に嬉しい。

「ありがとうございます……、叔父さん！

私も、精一杯大切にします。

これは良いモノですから」

そう言つと、叔父さんは途端に嬉しそうな顔をする。

「おつ、コレの良さが分かるか！

この辺りの店じやグリップギアの扱いがなくなつてなあ、こつそり職場の整備係に手伝わしたんだ。

おつと、これは内緒だぞ？」

それは内緒にしなくてはならないな、と思ひ少し笑つて頷いた。

「署じや難しい顔ばつかりなのに、すっかり優しいお父さんっすねー」

ニヤニヤ笑う足立さんに、叔父さんは少し顔を赤くして怒鳴る。

「うるせえぞ足立！」

「もー……すぐ怒鳴っちゃうんだから……。

けど僕らも、もっと小回りが効く足が欲しいですよ。

例の不審者だって、何時出没するか分かんないし。

プロ並みの機材を負って、天城屋からこの辺りまで、他人の家を撮って回ってるんでしょ？

細い道も知ってるみたいだし、四輪だけじゃ……」

「余計な事を喋ってるんじゃない!! 車戻ってろ！」

そう言われ、足立さんは慌てて車を停めてある方へと走り去ってしまった。

叔父さんは頭を掻きながら先程の続き、とでも話し始める。

「……まあ、何だ。

俺も免許取ってバイク乗り回してたのは、お前位の歳の頃だったんだ。

親に黙って勝手に取っちゃってな……。

で、バイクもこっそり購入して乗り回していた所を親に見付かって、親父にしこたまぶん殴られたよ……。

懐かしいなあ……はは……。

おっと、菜々子には内緒だからな」

……叔父さんにも、そう言うヤンチャしている時代があったのだと思うと、少し不思議な様な、まあ案外そうでもない様な、そういう言葉にはし辛いものを感じた。

「バイクを譲った以上とやかくは言わないが、くれぐれも安全運転を心掛けるよ？」

「はい、勿論です！」

仕事へと戻る叔父さんを見送って、譲り受けた原付きを押しながら家へと帰った。



家に帰り、既に用意していた特注の子供用の包丁やその他子供も使える調理道具と、そして今日完成したばかりのエプロンを持って、コッソリと下に降りた。

「菜々子、ちよつとおいで」

畳んだ洗濯物を仕舞い終えた菜々子を手招きして呼ぶと、菜々子は直ぐ様寄ってくる。

「どうしたの、お姉ちゃん？」

首を傾げる菜々子に微笑みながら、後ろ手に隠していた袋を菜々子に手渡す。

「はい、お姉ちゃんから菜々子にあげるね」

「菜々子に？ なんだろ……」

「ここであけてもいい？」

「良いよ」と頷くと、菜々子は早速袋を開けて中身を取り出して、歓声を上げた。

「すごい、ほうちようだ！」

ほかにもいっぱいある！

これ、エプロンだ！

すごいすごい！

お花とかことりさんとか、たくさんついてる！」

喜んで貰えた様で何よりだ。

特にエプロンは、菜々子のイメージに合わせた薄桃色の綿布を使い、成長期に合わせてある程度は大きさを調節出来る様にし、ポケット等も完備、そして可愛らしさも追求して異くんから教わりながら入れた刺繍（洗濯機での洗浄にも強い糸を使ったモノ）が良いアクセントになっている、自分でも非常に高い満足感を得られた作品である。それを特に喜んで貰えている様で、充足感も一入だ。

「この包丁や他の道具は、私と一緒に料理して、そして私が『良いよ』って言った時にしか使わない事。

約束出来るかな？」

「うん！ 菜々子、ちゃんとやくそくまもるよ！」

お姉ちゃん、ありがとう!!」

ギューツと菜々子に抱き付かれ、それにキュツと抱き返す。

「どういたしまして!」

よし、なら早速料理しようか!

今日は、鮭のホイル蒸しだ!

菜々子も一緒に作りたい?」

「うん、菜々子もやる!」

菜々子に包丁等の調理器具の使い方をレクチャーしながら、一緒に楽しく料理をした。





【2011／06／10】

放課後……、天城さんと一緒に買い出しに出掛けた。

天城さんは少しずつだが、基礎から料理の練習をこなしているらしく、少しは上手くなっている……と思う、との事だ。

それでも中々上手くはいかないらしい。

……誰かに見て貰うなり直接教わるなりした方が早く料理の腕前は上達するとは思うのだが、天城さんは一人でやり遂げたいそうで。元々、一人立ちする時の為の練習なのだから、一人で出来なくては意味がない、と思っっているのだろう。

……ならばその意思は出来る限りは尊重してあげたい。

「……そうか。」

それなら、反復練習するに限る。

まあ、何か料理に関して私が教えられる範囲内で、教えて欲しい事ができたのなら、言ってくれば何時でも力になるよ」

「うん、ありがとうね鳴上さん。」

……うちの板前さんたちはね、直ぐに手伝おうとしてくれるの。

最初はアドバイスしてくれるだけだけどね、その内包丁を取られちゃって……。

でも、それで立派な料理が出来上がったって、私がちゃんと作った訳じゃないから意味ないし……。

放っておいて、って言ったら、今度は遠くからずっと見ているの。

私が料理するの、そんなに心配なのかな……？」

心配……か、それはそうなのだろう。

だがそれも、天城さんを思っただけの事だ。

どうでも良い相手になんて、態々そんな事はしない。

板前さんたちからも、大切に思われているのだろう、天城さんは。

「……天城さんが怪我とかしないか、心配なんだろうね。」

板前さんたちにとつて、天城さんは大事な人なんだろうし」

「あの人たちが……私を？」

「……そう、なのかな……」

驚きながらも、嬉しそうな顔をする。

そして天城さんは、板前さんたちとの料理を巡る話を聞かせてくれた。

「この間もね、『見てられない！』って包丁取り上げられて、板前さんがその後全部作っちゃって……。」

それを見てた仲居さんが、板前さんに『下手でも雪ちゃんが自分で作りたい筈』って言い出してね……」

楽しそうに語る天城さんと一緒に買い物を買って、その日はジュネス前で別れた。



ジュネスからの帰り道、商店街の所で足立さんに出会った。

「どうやら今日も早く上がったのは良いのだが、夕飯に困っているらしい。」

折角なので夕飯に誘ってみると、足立さんは少し驚いた様な顔をしたが、結局は一緒に食べる事にしたらしい。

「独り暮らしの足立さんにとつて、温かな手料理というのは中々魅力的なのかもしれない。」



今日の夕飯はクリームシチューだ。

この手の料理は量を増やすのが比較的簡単である。菜々子も野菜を切ったりするのを手伝ってくれた。

「あのね、あだちさん。」

今日は、シツーなんだよ！」

「シツー？」

「……あー、シチューの事？」

「シチュー」と言えずに「シツー」と言ってしまう菜々子を微笑ましく見ていると、「シツー」に少し首を傾げた足立さんが「ああ」と声を出す。

言い間違えに気が付いた菜々子は、うんと頷いた。

「そう、しつ……しちゅー！」

「おつ、ちゃんと言えたんだね、偉い偉い」

「あだちさんは、しちゅー好き？」

菜々子に訊ねられた足立さんは少し考えてから頷く。

「シチューかあ。まあ、割りとかな」

「わりと？」

好きかどうかで訊ねて、返ってきた「割り」という答えの意味が解らなかつた菜々子は、「どういうこと？」とばかりに不思議そうにしている。

「んー……好きって事。」

実際、シチュー食べるの久々だし。

て、ゆーか悠希ちゃん、毎日こうやって作ってるの？

最近の堂島さん、お昼が手の込んだ手作り弁当になってるし。

堂島さん、君が来て助かってるんだろーねー。

そういうの、言われたりしてないの？」

「時々、ありがとうとは言われてます」

ニヤツと笑って訊ねてきた足立さんにそう返すと、足立さんは驚いた様な……そして何故か一瞬だけ……感情が剥がれ落ちたかの様な……いや、微かに落胆した様な顔をした。

しかしその表情の変化は、瞬きする程の時間すらもない極めて僅かな間の事で、自分の目の錯覚の所為かも知れない……。

「えっ、ホントに？」

へー……。

あの人、そういうの思っても素直に言わなさそうな人なのにね」
取り繕った様子など寸毫程も見せずに、足立さんは自然体でそう
言って肩を竦める。

そして、あっと思いついたかのような軽い調子で続けた。

「あーでも、たしか悠希ちゃん、春には向こうに帰るんだっけ？」

堂島さん、泣いちやったりしてねー」

あははと足立さんは笑ったが、ふと菜々子が悲しそうに俯いている
のに気が付いて、足立さんは途端に慌てて菜々子を慰め様とする。

「あ、ごめんごめん！」

帰るっていつても、まだ先の話だしね！

お姉ちゃんとまだまだいっっぱい遊べるよ、うん！」

「うん……」

そう励ましても中々菜々子の気が持ち直さないからか、足立さんは
少し困った様な顔をしながら、ポケットに手を突っ込んだ。

「えーっと……、そうだ、菜々子ちゃん。

こんなの知ってる？」

そう言って足立さんはポケットから手を出して、その掌を広げて5
00円玉を見せてきた。

「よく見ててねー」

そう言って、足立さんがその500円玉を握り締めると……

「ほら」

そう言って再び指を広げた時には、掌の上に確かにあった500円
玉は忽然と消えていた。

手品だ。

でも、どういうトリックなのだろう。

「なんで!? なんでー!?」

もっかい! もっかいやって!!」

「えっと、じゃあ今度はもっと凄いやつねー」

そして足立さんは再び500円玉を取り出し、先程と同じ様にそれ

を握り締める。

しかし今度は掌の中を見せずに、こちらを指差してくる。

「お姉ちゃんのポケット」

足立さんに言われ、ポケットの中を探すと……。

「……!!」

確かに、500円玉が出てきた。

いつの間に仕込んでいたのだろう。

全く気が付かなかった。

「すごいー！」

あだちさん、すごいー!!」

「ビックリしました……!」

全然気が付かなかったです……!」

「手先は器用な方でき。」

これ位なら出来ちゃうんだよね」

菜々子が元気に笑っているのを見た足立さんは、ホツとした様な顔をする。

そして、スゴいスゴいと褒め称える菜々子に気を良くしたのか、ヘラッと笑った。

「僕、マジシャンになれば良かったかなー」。

そしたらさ、こんな……。つとと。

まあでも、公務員に勝る職業は無いか。

手先がちよつと器用な位じゃ、何にもならないし」

そう言つて足立さんは肩を竦める。

……まあ、足立さんにも色々と思う所はあるのだろう。でも。

「……何にもならなくなんて、ないですよ。

だつて、足立さんがやって見せてくれた手品、とても楽しかったですから」

「うーん、そうかい?」

でも、手品出来ても、それで生活していくには難しいのさ。

おつとそんな事を言つてる間に、良い匂いしてきたね。

そろそろなんじゃない、ッシツッ」

そう言つて少しだけ苦笑いした足立さんは、軽くからかう様な目で菜々子を見て、そして態と間違えた。

それに反応した菜々子は、足立さんに言い聞かせる様にその間違いを指摘する。

「し・ちゆ・う！」

「シツッ？」

「し・つ・う！」

「はい、ブツブ」

再び言い間違えた菜々子に、楽しそうに足立さんはそれを指摘した。

すると、プウツと菜々子は頬を膨らませて抗議する。

「菜々子ちゃんと言えたもん！」

足立さんのイジワル！」

足立さんも交えた三人で、楽しい夕食の時間を過ごした……。



【2011／06／11】

「とうとう来週だな、林間学校！」

昼休みの屋上で、特捜隊の皆と一緒に弁当をつついていると、唐突に花村が嬉しそうな声で話し出した。

「えー……花村、あんた何でそんなに楽しそうなのよ」

「いやー、ゴミ拾いつてのは羨えるけどさ、それでも純粹に楽しみじやん。

だって、天城の手料理食える機会なんて早々に無いぜ。

鳴上も料理上手だしさ。

うん、夕飯は楽しみじやね？」

なあ、と花村が巽くんに話を振ると、巽くんも「そつスね」と頷く。
……天城さんの料理、ね……。

……以前、手始めに伊勢海老を使う料理をしようとしていた点や、その他諸々の事を考慮すると、不安材料しかなくて逆に笑えてきてしまいそうだ……。

里中さんも……限り無く初心者の様だったし。

果たして自分一人でフォロー出来る範疇なのだろうか……？

「うん、任せて！ 私、頑張っておいしい料理作るから！」

「あたしも！ 花村をギャフンって言わせられる料理作るよ！」

天城さんと里中さんはやる気に満ち溢れている……。

……何でだろう、空恐ろしい……。

「そーいや、先輩ら何作るつもりなんスか？」

「えーっとね、カレーにしようかなって思っているんだけど」

天城さんの言葉に、少しホツとする。

良かった、エキセントリックな料理を作ろうとしてなくて。

カレーなら、一からスパイスを調合して作るのなら兎も角、普通にカレールーを使うのなら早々失敗しようもない料理だ。

うん、カレールーは偉大である。

「おっ、カレーか！」

キャンプとかの定番だな！」

「ラーメンと迷ったんだけど、そっちの方が良いかなって」
「!?」

花村の言葉に頷いた天城さんの言葉に、思わず口にしていた米を喉に詰まらせそうになって慌ててお茶で流し込む。

いやいや、ラーメンって……。

少なくとも、キャンプで作るモノとしては普通は候補に上がらないだろう。

即席麺なら兎も角、一からラーメンを美味しく作るのは中々大変だ。

初心者が手を出してそう簡単に美味しく作れるモノではない。

これは……不味い、不味過ぎる。

兎も角、未知の領域にある天城さんと里中さんの料理の腕前を把握しなければならぬ。

それが急務だ。

もし二人が、手の施し様が無いレベルの、所謂「飯マズ」さんだった場合は、自分一人で調理した方が良い。

花村や巽くんの胃袋を守る為にも。

「……キャンプでぶっつけ本番で作る前に、一度料理してみないか？

……丁度明日は休みだけど叔父さんは仕事だし、菜々子も友達の家遊びに行くみたいだから家には居ない。

私の家で、……その、天城さんも里中さんも、一度試しにカレーを作ってみた方が良いと思うんだが……」

「おっ、良いなソレ！」

「ゴールデンウィーク時は流れた料理対決って事か？」

「いや、ちが……」

「料理勝負？」

「うん、受けて立つよ！ 私、負けないからね!!」

「あたしも！ カレーには自信あるから！」

「鳴上さんに負けられないね！」

「ねえ雪子、あたし達一緒に作らない？」

「鳴上さんも、普段から料理する人だからハンデとして良いよね？」

「うん良いよ、二人なら鳴上さんのにも負けられないカレー作れるよ！」

「って事は、俺らが審査員って事か？」

「そうみたいっスね」

「よし、明日は鳴上さん家に集合だね！」

「ね、雪子、早速放課後に材料買いに行こ？」

一言も勝負するとも、更には勝負を了承するとも言っていないのに、話がドンドンと進んで行く。

……もう、どうとでもなれ。

兎も角、二人の料理の腕前を把握出来たらそれで良いんだし……。

二人一緒なら美味しく作れるというのなら、それはそれで構わない。

「あー、用意する材料は二・三人前分で良いから。
もし足りなくても、カレーばかりじゃ飽きるだろうから私が何か
適当に作るよ」

そんなこんなで、明日は天城さん・里中さんとのカレー対決となっ
た……。



放課後、部活に行く前に一条がやって来た。

一条には何処か落ち着きが無い……。

「今から、その……」

施設、行って来るから。

……鳴上には、それ言つとこうと思つて……。

……じゃ」

成る程。

前に言つていた、昔居たという孤児院を訪ねに行くのだろう。

……心配ではあるが、こうやって見送る事しか出来ない。

「そうか……。気を付けて。」

いってらっしやい」

そう手を振ると、一条は「ありがとう」と笑つて去つて行った。



一条抜きで部活に勤しんでいると、長瀬がやって来て首を傾げる。

「うーす……あれ、一条は？」

どうやら一条は、長瀬には言つてなかつたらしい。

孤児院を訪ねに行った、と説明すると、長瀬は心配そうに微かに眉

を寄せた。

「そっか、今日か……。」

……ちつと、心配だよな……。」

長瀬の言う通り、心配ではある。

訪ねに行つて知らされた事実が、良いものであるとは限らない。

「……駅まで迎えに行かないか？」

流石に場所が分からないから孤児院までは迎えに行けませんが、駅までなら大丈夫だ。

「ああ、それが良い。

よし、ならもうそろそろ行かないとな。

じゃ、さっさと後片付けも切り上げようぜ」

長瀬に促され、後片付けを切り上げて駅へと急ぐ。

駅前で少し待っていると、一条が改札口から出て来て、そしてこちらに気が付いて驚いた様に目を丸くした。

「何だよ、二人とも……。」

「……何か、収穫はあったか？」

「……いや、まだ……って、もしかして心配してここまで来たのか？」

……ヒマ人どもめ」

暇人などと言いながらも一条は嬉しそうである。

そして、少しだけ懐かしむ様な表情で語り出した。

「建物も先生らも全然変わってなくてさ……、何かすっげー、歓迎されちゃった。

……けど、本当の親の事とか、あそこに預けられた理由とかは、教えられないってさ」

「そうか……。」

一条当人には、教える事が出来ない様な……そんな理由だったのだろうか……。

「……でも、……これ貰った……。」

一人だと、何か怖くて……、まだ読んでないけど。

……オレを孤児院に預けた人からの、手紙だって」

そう言つて一条が取り出したのは、一通の茶封筒だった。

……………?

封筒の角の尖り具合等から見ると、相当新しい封筒だ。

「よ、読むぞ……………」

そう言つて一条は封筒から便箋を取り出す。

……………ボールペンで書かれている様だが、インクの滲み方を見るにまだ新しい……………」

まるで、つい最近書かれたかの様だ。

「康くん、これを読んでいるあなたは、さぞ大きくなつた事でしょうね。」

あなたの名前の「康」は、あなたのご両親が、あなたに、ただ健康であつて欲しいと願つて付けました。

偉くなつたり、お金持ちになつたりするより、ずっと大切に、大変な事です。

体の弱かつたあなたのご両親は、あなたが園に入つて半年程で、二人とも亡くなりました。

「育てる事が出来なくてごめんなさい」と、ずっと言つてました。

「愛してる」と、ずっと言つていました。

あなたは、ご両親の希望の光です。

辛い事があつても、挫けてはいけません。

胸を張つて進みなさい。

あなたを見守っています」

一条は便箋や封筒を何度も確かめて溜め息を吐いた。

「……………名前、無し。」

手懸かり、無し。

……………。

死んでたんだな……………ホントの親」

「……………」

長瀬も自分も、何も言つてやる事が出来ず黙っているしかなかつた。

封筒とかの状態を見るに、本当に一条を孤児院に預けた人が書いたのかは怪しいが、それでも、書かれた内容全てが嘘とは思えない。

「予想はしてたけどさ……」

……やっぱ、シヨック、かな。

繋がり……無くなってたんだな」

「そんな事は無いさ」

例えば死に別れたとしても、繋がりはその簡単に無くなるモノでもない、とは思う。

例えば一条がもう覚えていない程昔に死に別れているのだとしても、もし手紙の通りに、一条が確かに両親から愛されていたというのなら、その繋がりはまだ残っている。

《健康であれ》と願って付けられた『康』という名前や、そもそもの一条の存在自体に。

そう、信じてみたい。

「……そうかな、……まだあんのかな……」

よく、分かんねーや……」

一条は苦笑いを浮かべ、空を見上げた。

夕暮れ時の空は、あの練習試合の後に見上げたものと同じ位に澄み切っている。

「けど、知って良かった。

……知れて、良かったよ。

……ありがとな」

知ろうとした、その勇気を出したのは一条本人だ。

だけど、自分や長瀬が、その勇気を出す為の助けになれたと言うのなら、一条がそう思ってくれるだけでも、何にも代え難い幸せに思える。

「そろそろ暗くなってくるな……」

帰ろうぜ……、一条。

お前の事心配してる人、他にも居るだろ」

自分や長瀬も一条の事を心配しているが、他にも、一条の家の人たちだって、きっと一条を心配している。

と、そう思う。

長瀬と二人で一条を途中まで送ってから、家へと帰った。



少し早めに帰って来た叔父さんに明日の料理対決の事を話すと、叔父さんは笑いながら許可を出してくれた。

カレー対決と聞いた菜々子が目を輝かせていたが、……そんなに良いものであるかはかなり妖しい……。

三人一緒に夕飯を食べてから、家庭教師のバイトに出掛ける。

中島くんたつての希望で数学を中心に教え、キリの良い所で休息を取っていると、中島くんが徐に話し掛けてきた。

「……あの。先生の学校って、どんな感じの所ですか？」

……八十神高校、か。

学校としては普通だとは思うが……。

「楽しいけど、時々厳しい事もある……かな」

比較的自由ではあるが、緩過ぎるといふ事も無く、締めるべき所はそれなりに締めている学校だとは思う。

「へえ……、校則とか結構緩いイメージだったんですけど、案外そうでも無いのかな……」

中島くんは意外そうに頷いた。

そして少し話題を変える。

……恐らくは、中島くんにとっての主題はこちらだったのだろう。

「……全然、関係無い話なんですけど、クラスに転校生が居るんです。都会の方から来たヤツで、ここを『田舎だ』ってバカにしてて

……、……無視されてますけど」

稲羽が田舎なのは、まあ事実である。

しかし、それを口にしては、反感を買うのも仕方ない話ではある。

「田舎、か……」。

まあ、確かに『田舎』である事は否定出来ないね。

だからって、バカにして良い訳じゃないけれども」

「ですよね……、……稲羽が『田舎』ってのは、正しいです」
そう言つて中島くんは少し笑つた。

しかし、急に中島くんは俯く。

「……こんな田舎じゃ、『井の中の蛙』だ……」

「……どうかしたの？」

「あ、ええと……ソイツが言つたんです。

『井の中の蛙だつた』って。

……ここが田舎で……。

……あれ？」

途中で自分が言っている事がおかしいと気が付いたのか、中島くんは口を噤んだ。

……『蛙』だつた』、か。

成る程、その転校生とやらが本当にそう言つたのかどうかは知らないが、中島くん自身は『井の中の蛙』だと思つているのだろう。

「……学校、面倒です。

……クラスの奴らはバカばかりだし、授業だつて……意味無いし……。

先生の教えの方が、ずっと分かりやすいです」

話題を変えた中島くんは、そう言いながら俯いた。

「……お褒めに預り恐悦至極、つて所だね」

しかし、学校でそんな態度でいるのだとすると、中島くんはかなり浮いているのではないだろうか。

中島くん自身がそれを気にしていないのなら、それはそれで構わないが、中島くんの様子を見るに、勉強以外の学校生活があまり上手くいってない事自体は気にはしているのだろう。

……イジメとか、そういう問題に繋がらなければ良いのだが……。

中島くんの様子を注意して見る事を心に決めてから、その日は無事に家庭教師のバイトを終え、明日の料理対決に備える事にした。



友達の家に遊びに行く菜々子を見送ると、ほぼ菜々子と入れ違いに、天城さんと里中さんがやって来た。

……天城さんと里中さんは、妙に大きな買い物袋を下げている。何れだけ買い込んで来たのだろうか……。

「私、負けないよ！」

「あたしも、絶対勝つから！」

肉パワー全開で、準備も万端！

何時でも始めれるよ！」

何やら既に燃え上がっている二人に、少し気圧されながらも頷く。

「ああ、うん……。じゃあ、早速食材を切り始めといて。

包丁とか、使うだろう道具は予め出してあるけど、何か足りなかったら言ってくれたら出すから」

一応、自分が作る分に関して言えば、調理は皆が来る前にある程度は済ませてある。

包丁とかは、二人がメインに使って貰っても大丈夫だ。

異くと花村が来るのはまだ先だから……。二人が来る迄には出せるモノを用意しておきたい。

「鳴上さんは道具使わなくて大丈夫？」

「ああ、カレーももうそこに作ってあるし。

今は一応弱火に掛けているけど、もう消して貰っても大丈夫だ。

カレー以外のヤツももう下準備は終わっているから、二人が存分に台所を使ってくれ」

それを聞いた二人が早速食材を切り始める。

出来れば、何をどの様に作るのか（と言うよりも何を“材料”にしているのか）を確かめたかったのだが、敵情視察は禁止、という事で台所（と居間）を追い出されてしまった。

くれぐれも火事は起こさない様に念押ししてから、その場を離れ

た。

まあ、別に天ぷらとかの揚げ物をする訳でも無いし、そもそもカレーは大量の油を使ったり大火力を要求する様な料理じゃないから、多分火事の心配は無いのだろうけれども……。

◆◆◆◆

そろそろ花村たちが来る時間だろうと、台所まで降りてくると、二人は蓋をした鍋を前に難しい顔をしている。

「えっと、……他の料理も作りたいから、台所使っても良いかな？」

「あつ、な、鳴上さん……！ うん、うん、大丈夫だよ」

何故か天城さんはオーバー気味に頷く。

「そ、そうか……。えっと、カレーは完成した？」

「ま、まあね。うん、多分、きつと、恐らく」

里中さんが連ねる言葉に最早不安しか沸いてこない……。

……………。

……死なば諸共だ、覚悟を決めよう。

恐ろしくて蓋を開ける事すら憚られるその鍋を少し脇に退けて、唐揚げの準備に取り掛かる。

（里中さんと天城さんの作ったシロモノが食べられるものだととしても）二人前少々のカレー（×2）だけでは、食べ盛り的高校生五人の昼食には足りない。

その為、もう一品二品作り、デザートも既に用意してある。

肉を愛する里中さんが居る事だし、肉を使う料理にしようとは思いい、ある程度は各人で量を調節出来る唐揚げにする事にした。

これとサラダがあれば、それで足りるだろう。

カレーを再び過熱して、唐揚げが丁度出来上がった頃合いに、異くと花村がほぼ同時にやって来た。

「ちーっす。おっ、良い感じっすね」

「お邪魔しまーす。

既に良い匂いが漂ってんじゃねーか！

こりや期待出来るな！」

期待に胸を膨らませる二人の前にもカレーをよそった皿（×2）とサラダの皿を置き、テーブルの真ん中に唐揚げを山盛りにした大皿を置く。

……里中さんと天城さんの合作のカレー（？）も、一応カレーらしき色はしている。

……臭いは、何だかおかしいが……。

それをよそったのは、里中さんと天城さんなのだが、二人とも蓋を開けた瞬間に青い顔をしていたのが、どうしようも無い位に不安を掻き立てる……。

並べられた皿に、花村と巽くんは目を輝かせた。

……知らないって事は恐ろしい事である……。

取り敢えず、勝負という名目になっている為、先ず審査員となる花村と巽くんが、カレーを食べてそれを評価する、という段取りになっている。

「おっ、マジ旨そーじゃん！」

老舗旅館の跡取り娘のカレーに、堂島さん家の食事を一手に担う鳴上のカレー……。

んで、この瑞々しいサラダに、若者の心を掴む唐揚げの山……！

完璧だぜ！

ああ、どっちも旨そうだよなー、どっちからにしようかなー……」
花村はウキウキとスプーンを手にとって、どちらのカレーから食べようか迷ってる様だ……。

尚、天城さんと里中さんは冷や汗をかいている。

「じゃ早速、鳴上先輩の方を食べさせて貰います」

巽くんはまずはこちらが作った分を食べる事にした様だ。

豪快にカレーとライスを混ぜて、一気に掬って食べる。

「おっ、豪快にいったな。

で、どうなんよ、鳴上のカレーは？」

「…………ヤベー位に旨いっス」

花村に訊ねられても、巽くんは喋る時間すら惜しいとでも言いた気にそれだけしか答えず、まるで取り憑かれた様に只管カレーをかつ込んだ。

「鳴上のは相当旨いのか…………」

ん、じゃ俺は天城たちの方から食べようかな」

そう言つて、花村はスプーンをクルクルつと回して、カレーを掬う。それを見て、冷や汗をかきながら里中さんが一言添えた。

「あー、愛情は入れたよ、うん」

寧ろそれはそこしかアピールポイントが存在しないとも言えるのでは無いだろうか…………。

「おつ、マジ？　愛情入っちゃってる？」

それベタな台詞だけど、男心にはグツと来るな！

んじゃ、頂きまーすっ!!」

そう言つて、花村は躊躇なくカレーを口に含んだ。

そして、次の瞬間には噎せて倒れる。

「は、花村!!　だ、大丈夫か!!」

やはり、あのカレー(?)は人体に有害なモノだったのか!?

倒れた花村に、慌てて水を飲ませる。

水を弱々しく飲んだ花村は、震える様にそのまま撃沈した。

…………一撃だった…………。

「ふ…………」

鳴上先輩のカレー、マジ旨かったっス。

今度作り方教えて下さい。

ん？　どしたんスカ、花村先輩…………。

ぶっ倒れてんじやないっスカ…………」

カレーを食べるのに夢中になり過ぎて、先の騒動に気が付かなかつた巽くんが、食べ終わってから漸く花村の身に起きた惨劇に気が付く。

「辛い闘いだっただよ、多分」

主に味覚的な意味合いで。

「んじゃ、次は里中先輩たちの分っスね」
そして、止める暇も無く巽くんもカレー(?)に挑み、そして散つた。



「あんじゃコリヤーアアツ!!」

おつめーら、どんな作りかっ……ウツ、ゲホゲホツ!!」

少しして復活した花村は、跳ね起きるなりそう絶叫したが、まだ口にカレー(?)の味が残っていたのか、苦しそうに噎せる。

辛そうな花村にお茶を渡すと、それを一気に飲み干した。

「あれはヤベー、マジでヤベー……」

同じく、復活した巽くんは、虚ろな目でブツブツと呟いている……。

……復活、しているんだよな……?」

「カレーはフツ、辛いとか甘いとかだろ!」

コレくせーんだよ!! 有り得ねー位にっ!!

それとジャリジャリしてんだよ!

ジャリジャリしてる上にドロドロしてて、ブヨブヨん所もあつて……!!

ウツぶ……。

とにかくつ、要するにつ、色んな気持ちワリーのだらけで飲み込めねーんだよ!」

そう吼える花村に、天城さんと里中さんは冷や汗をかきながらも一応の言い訳をする。

「な、何か食材が上手く混ざんなくて……」

「ば、バラエティ豊かな食感って事で……」

「なんねーよ!」

ただの気持ちの悪い物体Xでしかねーよっ!!」

『物体X』……それこそがこのカレー(?)の適切な名称だろう……。花村や巽くんの反応を見る限り、この物体はカレー(?)と呼ぶ事すら憚られる程の品だった様だ……

「そつ、それはアンタの感想じゃん！」

他の人が食べたら違うかも shouldn't!!」

「完二のこの有り様を見てもそう言い張るのか!？」

「ヤベー……」しか繰り返さない巽くんを指差して、花村は里中さんの反論を封殺する。

「……頂きます」

花村と里中さんが言い合っているのを尻目に、手を合わせてから、敢えて『物体X』をスプーンで掬った。

「ちよつ、鳴上……!？」

この惨劇を見ても、それを食おうとするとか……。

お前、気は確かか……!？」

止めろよ!？」

遊びや罰ゲームで勧めんのも躊躇うシロモノだぞ、コレ!？」

必死の形相で花村が腕を掴んできて、『物体X』を食べるのを阻止しようとしてくれる。

その気持ちはとても有り難い。

だが、「否」と首を横に振る。

「花村……この惨劇を止められなかった私にも、責はある。

……それにだな、お前と巽くんの二人を死地に追いやっておいて、私一人おめおめと逃げる訳には行かない……。

『死なば諸共』と言うじゃないか……。

ならば、花村と巽くんが受けた苦行……、私も受けるさ……。」

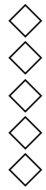
「鳴上……!？」 お前つてヤツは……!!」

花村が感動した様に、身を震わせ腕を離してくれた。

そんな花村を安心させる様に、全力で微笑む。

「よし、逝くか」

グツと一口『物体X』を口に含んだ瞬間、意識がぶっ飛んだ。



「……二人とも、何を。 どういう風に」 入れたんだ……？」

まだ口の中に残る「えぐみ」を、サラダ用に用意してあったドレッシング(醤油ベースの濃厚タイプ)をそのまま口に含む事で打ち消し、鼻の奥に残っている様な気がする悪臭を手近な所にあつた臭いの強いもの(トイレ用の芳香剤「レモンガラスの香り」)で上書きする様に紛らわせながら、里中さんと天城さんを正座させて問い詰める。

『正直に、全部詳らかに話すんだ』と二人に視線で圧力を掛ける事も忘れない。

「ええつとー……」。

ニンジン、ジャガイモ、玉ねぎ、ピーマン、まいたけ、それと……ふきのとう……？

後……お肉として、豚バラとか牛肉とか……あつ、後ベーコンも入れた」

里中さんが上げる食材の段階で、既にツツコミ所が満載だ。

しかし、それだけでは無いだろう。

それだけなら、あんな……「味」と表現するのも憚られる、料理とか味覚とか……心とか。人に大切な諸々を侵食する冒瀆的な何かと
言うか、《ムドオン》よりも悍しい闇属性の何かにはならない。

「それに、魚介としてタコとイカとあざりとナマコとフカヒレと……海老も入れたよ、大きいの。」

……良い出汁出るかと思つて……」

妙にジャリジャリしていたのは、浅蜷の砂抜きを怠つたからだろう。

口に含んだ時に、異様な程の生臭さを感じたのは、魚介をテキトーにぶちこんだからか……？

チラリと確認した所、車海老やブラックタイガー等が殻を取つたり何らかの処理を施した形跡も無いままに丸ごと放り込まれていた

……。

「……他には？」

しかし、それだけでは謎の食感の説明が付かない。

あの食感が、得も言われぬあの味の衝撃と言うか威力を倍増しにさせていたのだ。

ジツ……つと目に力を入れて二人に続きを促す。

「えっと、とろみを付けようと思って、片栗粉と……小麦粉も入れた。

強力粉……だっけ、そっちの方。

男の子いるし、強い方が良いと思って」

……意味が分からない。

片栗粉に小麦粉……？

しかも強力粉とはグルテンの含有量の多い、パンや麺等に使われる粘性の強い小麦粉だ……。

チラリとごみ箱を確認した所、片栗粉の袋と、強力粉の袋が空になって捨てられていた……。

片栗粉は、そんなに大量に使わなくてもトロミが付く。

片栗粉の袋は比較的小さいモノだが、どう考えなくても入れ過ぎだ。

……しかも、そのままぶちこんだのだろう。

だから、妙にダメになったりして、それが場所によって違う最悪な食感を生み出しているのだろう。

「それとね、辛くしないかと思って唐辛子にキムチ、白胡椒と黒胡椒……。

隠し味に、チョコレートとヨーグルト、コーヒー……は苦手だから
コーヒー牛乳も……あ、後莓ジャムにオリーブオイルも入れた……」

……何と言うカオス……。

カレーに辛みを出す為に、唐辛子やキムチも入れない。

隠し味も、何でもかんでも入れれば良いというモノでも無い。

それに、コーヒー牛乳は入れない。

ヨーグルトも、加糖タイプの物（アロエ入り）を、一パツク丸々入れたりもしない。

莓ジャムとか、最早論外だ。

「……一応訊ねるけど、カレールー使った？ 市販のヤツ」

ごみ箱に市販のカレールーの箱が見当たらない事に疑問を感じ、訊ねてみると、二人は揃って首を横に振る。

「えっ、使つてないよ」

「要るの、それ？」

「……初めてカレーを作るんだったら、使った方が良かっただろうね」
そして、ふう、と一つ溜め息を吐く。

「言いたい事は沢山あるけれど、まず最初に聞きたいのは、二人ともカレーの作り方をちゃんと調べた？」

作り方を知らないのに、想像とかだけで勝手に材料を選んで放り込んで煮込んだのだとしたら、それは料理とは到底呼べないシロモノだ……。

食材に対する冒涇とも言って良い。

もし、作り方は知っていたのだとしても、それはより一層悪いかもね。

アレンジを加えるのは、その料理をちゃんと一般的なレシピ通りに作れる様になってからだ。

世に一回っているレシピって言うのは、今日に至るまでの多くの先人たちが試行錯誤で磨き上げた、『初めて作る人でも美味しく作る為のマニュアル』なんだから。

それを蔑ろにしたら、美味しいモノは作れない」

世に聞く『飯マズ』さんのパターンとしては『料理をレシピ通りに作らない』・『料理にアレンジと称して妙なモノを入れる』という物が多いと聞く。

それがまさに今の二人に当てはまる。

「でもホラ……料理人さんとかつて、何も見ずにパツパツ作つていくじゃん」

里中さんが恐る恐る反論するが、それは一睨みで霧散した。

「それは、そこに至るまでの膨大な経験と、センスがあるからだ。

初めてで右も左も分からないヒヨッコが形だけ真似しても意味が

無い。

それに、だ。

そもその材料の使い方自体が大いに間違ってる。

野菜の切り方もバラバラで、細かく切り過ぎているのもあれば、サイコロ状に分厚いモノもある……。

これじゃあ、熱の通り方がバラバラだから、ある部分では固かったり、反対にドロドロになってたりする部分が出来てしまう。

それも、この危険な食感を形成しているのに一役買ってしまってる。

軽く炒めもせずに入れたから、野菜から旨味が殆ど逃げてしまっているのもあって、余計に不味く感じるのだろう……。

それと、だ。

魚介類も処理がテキトー過ぎる。

浅蜆はちゃんと砂抜きをした？」

「砂抜きって？」

キョトンと天城さんは首を傾げる。

「浅蜆は買ってきた状態のままだと、砂を含んだままなんだ。

だから、塩水に漬けておいて、中の砂を吐かせる。

そうしないと、砂でジャリジャリするんだ。

多分、妙にジャリジャリしてたのは、これも原因だと思う。

更に言えば、海老を何の処理もせず殻も取らずにいきなり入れるのは大間違いだ」

「えっ、でも……前にテレビで見たカレーには、魚とかの頭がそのまま入ってたよ？」

だから、海老も殻ごと入れるんだと思っただけ……」

天城さんの言葉に、深く溜め息を吐いた。

「天城さんが言っているのは、『フィッシュヘッドカレー』というカレーだな……。

確かにあれは、鯛の一種の魚の頭を香辛料と一緒に煮込んだモノではあるけれど、魚をそのまま入れている訳では無い。

それに、だ、

魚介類を全く下茹でせずに放り込んであるから、この『物体X』が異常な位に生臭くなっている。

あと、小麦粉の強力粉と言うのは、グルテンを多く含む……：麵やパンを作る用の小麦粉なんだ。

間違つてもカレーには突っ込まないし、そもそもそのその量もおかしい。

小袋を丸々一袋も入れて、どうするつもりだったんだ……。

更に言えば、カレーにとろみを付けるのに片栗粉は使わないし、片栗粉自体はほんの少しでとろみを付けられるし、まずそのまま放り込むものでもない。

そういう風に入れたから、色んな所でダメになったりして妙にブヨブヨしている部分とかが出来てしまったんだ」

「うう……」

「ご、ごめんなさい……」

里中さんと天城さんは、反省した様に頭を下げて謝る。

「……結論を言うと、この『物体X』の原因は。

『作り方を知らなかった事』・『作り方も知らないのに、勝手にアレンジを加えた事』・『材料の選択を間違っていた事』・『材料の処理の仕方やその使い方が間違っていた事』、その他諸々だ。

……次に料理をする時は、今回の反省を生かして、『レシピを調べてその通りに作る』・『材料の処理の仕方を正しく理解して実践する』事を厳守出来る？」

「はい、守ります……」

「私も、ちゃんと調べます……」

二人が確かに領いた事を確認して、二人に正座を解かせた。

「なら、よし。」

じゃあ、この『物体X』は……使われた材料の事を思うと心苦しいけど、明日の生ゴミに出すとして、他の分を食べようか。

里中さんも天城さんも、……何もまだ食べていないから、お腹空いているよね？」

もう作ってしまったものは仕方無い。

間違っていた部分・改善するべき部分を把握して、充分に二人とも反省したのだから、これ以上のお説教は不要である。

二人とも頷いて、カレーを前に手を合わせる。

口の中をお茶で洗浄していた花村と巽くんも、それに続いた。

「ヤッペー……これ旨過ぎんだろ……」

あの『物体X』との格差が半端ねーな……」

「これ食った後に、さっきのアレだったんで、衝撃がデカ過ぎたっス……」

危うく、カレーがトラウマになる所だった……」

そんな感想を述べる花村と巽くんは、染々とカレーを食べている。

巽くんはもう食べ切ってしまったので、鍋の底に残っていた分を掻き出しておかわりとして出した。

「分かる、分かるぜ、完二……！」

俺、鳴上のカレーを一口食ってみるまで、カレーを掬った手の震えが止まらなかった……」

これ食わずにあの『物体X』食べただけで帰ってたなら、もうカレー食えなくなってたかも……」

「花村、それは言い過ぎだっつーの。」

そんな事は、流石に……無いんじゃないかな、って思うんだけど」「アレはトラウマになるレベルだよ！」

結局一口も食ってねー里中に、抗議する資格はねー！」

里中さんと天城さんは、結局食べる事無く『物体X』を鍋に戻している。

それを咎めるつもりは無いが、花村的には思う所があったのだから。

「でも、これ本当に美味しいよね。」

今まで食べたカレーの中でも、一二を争うと思う」

「それはあたしも思った。」

何て言うのか……味わい深いよね。」

このお肉とか、解ける様な舌触りで。」

今までこんなに美味しいビーフカレー食べた事無いかも……」

天城さんと里中さんに褒められ、少し気恥ずかしくなり頭を搔く。
まあ、あの『物体X』よりは遥かに美味しいものだという自負はあるが。

「それは流石に言い過ぎな気もするけど……」

「いやホント、どうやって作ってるんスか？」

これ、多分市販のカレールー使ってないんじゃ……」

首を傾げつつも訊ねてきた巽くんには、そうだよ、と頷いた。

「あつ、分かった？」

これは一から自分なりにブレンドしたスパイスで作ってるんだ。

どういうカレールーにするか迷ったけど、皆も食べ慣れているだろう、英国式の方が良いかなって思ってた」

一般的に日本でカレールーライスと称されているモノと同じ作り方である。

具は出来るだけシンプルにした分、食材自体の旨味を引き出せる様に工夫はした。

なお、どれもジュネスで普通に売っているモノである。

「えっ、鳴上ってこういうんじゃないカレーも作れんの？」

「まあ、色々作れるよ。」

インドとかネパール辺りのカレーとか、タイカレーとか……他にも色々。

材料が手に入るヤツなら、だけど」

流石に、見た事も無い様な食材を使っていきなり料理をしると言われても難しい。

「てか、この唐揚げ……、ホント美味しい。」

こんなに美味しいの、初めてかも」

「一応、唐揚げ用にソースも作ってある。」

そう、その皿とこの皿とあっちの皿のヤツ。

そのままでもイケると思うけど、味に変化を付けてみたかったら試してみて」

「サラダも旨いな。」

特にこのドレッシングがヤベー。

このドレッシング、何処の？

ジュネスに売ってたっけ？」

「それは私が作ったヤツだ。」

普通に売っている材料で作れるし、自分好みに作れるから結構オススメ」

「マジっスか。作り方教えて下さいよ」

『物体X』の衝撃を吹き飛ばす勢いで皆で美味しくご飯を食べ、そしてデザートに用意したフルーツ大福（中身は苺と白桃の二種類で、餡は白餡）を平らげた頃には、すっかり『物体X』の後味は消えた。

これで、あの『物体X』の記憶を緩和……出来たら良いのだが……。

「しっかし、こりゃ林間学校では鳴上に夕飯は全部お任せだな」

「一応あたしらも……野菜切る位なら、何とか……」

「いや……里中先輩らの野菜の切り方……滅茶苦茶だったんすけど……」

「えっと、洗い物とかなら……」

「まあ、二人にもちゃんと手伝って貰うから、安心して」

しかし、林間学校で何を作ろうか……。

今から考えておこう。





【2011／06／13】

学童保育のアルバイトに赴き、子供たちの相手をし終えて、保護者が迎えに来るのを待っていると、また俊くんが一人ベンチに座って夕空を見上げているのが目についた。

「やあ、隣に座ってもいいかな？」

そう声を掛けると、俊くんは無言で端に寄って、座る場所を空けてくれる。

「空を見ていたみたいだけど、何か面白いものでもあったのかな？」

訊ねても、俊くんは浮かない顔をするばかりだ。

「……別に。」

面白いわけじゃないよ。

……やる事ないから、空見てただけ」

「そっか。今日は曇り空だったけど、今は良い感じに雲の切れ間が出てきているから、夕日が綺麗にみえるね」

「そういうの、あんまり興味ないし。……どうでも良い」

そう言う割りには会話を続けるあたり、話をする事自体には消極的では無いらしい。

「そう？ うーんと、じゃあ俊くんはどういうのモノに興味があるのかな」

「……そーゆーの聞いて、何かイミあるの？」

まあ、別にいいけど……。

……ボクは……フェザーマンが好き、かな……」

俊くんが挙げたのは、戦隊ものの中ではかなりの長寿シリーズである『不死鳥戦隊フェザーマン』だった。

不死鳥の名を体現するかの様に、再放送されたりやら新シリーズやらを作られ続けている大人気特撮だ。

現行作品は『ネオフェザーマン』で、初代『フェザーマン』と『フェザーマンR（リターン）』の後継作である。

尚、『フェザーマンV（ヴィクトリー）』の制作も決まっているらしいとまことしやかに囁かれている。

チームメンバーのスーツが赤やら青やらと色分けされているのは他の戦隊ものと同じだが、フェザーマンは各々鳥をモチーフにしているのも特徴だ。

今のチームメンバーは、フェザーホーク（赤）・フェザーオウル（黄）・フェザーパラキート（黄緑）・フェザーアーズ（桃）・フェザーシユール（紫）・フェザーファルコン（黒）・フェザースワン（青）・そして謎のフェザーミミズク（銀…？）である。

玩具会社とタイアップしていて、変身グッズや合体ロボットの玩具は小学生位の男子のマスターアイテムでもあるらしい。

「フェザーマンか……私が小さかった頃からやっているね。」

今もシリーズが続いてて……確か、今はネオフェザーマンだったよね？」

俊くんは頷き、そして付け加えた。

「ネオフェザーマンも好きだけど、ボクはフェザーマンの方が良いと思う」

俊くんは初代派であるらしい。

初代フェザーマンが放送されていた頃は、俊くんがまだ生まれていない様な時期なので、きつと再放送か何かで見たのだろう。

「……先生、変な人だよな。」

……嫌いじゃないけど」

帰り際に俊くんはそう言って手を振ってくれた。



学童保育からの帰りがてら、夕飯の食材を買おうとジユネスに立ち寄り鮮魚コーナーに向かうと、ちよつと不思議な事を言っている主婦に出会った。

確か……倉橋さんのお家の奥さんだ。

会った時には挨拶を交わす程度の付き合いのご近所さんなのだが、……何故か倉橋さんは「オイスターソースを作らなきゃ」と言いながら、加熱用の牡蠣を大量に買っていた。

……オイスターソースを一から作るつもりなのだろうか。

倉橋さんはこちらに気が付く事無く、そのままレジの方へと行ってしまった。



【2011／06／14】

演劇で使う衣装に付ける小物の作成の為に、演劇部の部室へと訪れた。

部長さんたちの要望を聞きながら小物を作る傍らで、部員たちは今日も熱心に演技の練習をしている。

その中には、小沢さんの姿もあった。

何時も練習に人一倍熱意を持って取り組んでいる小沢さんだが、……今日の練習は何処か鬼気迫る何かを感じてしまう程だ。

……あの病院での一件が何か関係しているのだろうか。

昼間降り続いていた雨も何時の間にか上がり、窓の外からは傾きつつある日の光が差し込んでいた。

「さて、ちよつと早いけど、キリ良い所だし、今日は上がるっかー！」
どうせもうそろそろ下校放送が流れるのだし、という部長の言葉

に、緊張の糸を切れさせる部員たちだったが、それに小沢さんが待ったをかけた。

「まだチャイムが鳴ってないじゃないですか！

なのにもう帰るなんて、弛んでます！

もつと本気でやって下さい！」

小沢さんのその剣幕にたじたじになる他の部員を庇う様に、副部長が一步前に出る。

「お、小沢さん、あまり根を詰めると……」

しかし、宥める為にかけたその言葉は、小沢さんには逆効果だった。

小沢さんは副部長へ噛み付く様な言葉をぶつける。

「私は真剣なだけです！」

足、引つ張らないで下さい！」

そんなんだから副部長は、主役取れないんじゃないですか!？」

「小沢！」

「あ……………」

その空気に割って入るかの様に下校放送が流れ、副部長が取り成す様に解散を宣言して、部員たちは部室から立ち去っていった。

しかし、小沢さんは黙ったまま動かない。

「……………鳴上さん。」

……………私、……………間違った事、言ったのかな……………」

「別に、真剣にもつと練習したいっていう内容は悪くは無かった。

でも、言い方は悪かった、かな」

伝えたい内容がどんなモノであったとしても、言葉使いやその時の表情とかシチュエーションとかを含めた諸々が悪かったら、相手にはちゃんと伝わらないし、無意味に相手を不快にさせてしまうだけだ。

「ん……………、そう、だよね。」

……………演技……………こんなに練習してるのに、実生活じゃ役に立たないや……………」

小沢さんはそう言って、疲れた様な苦笑いを浮かべた。

「私、残って練習しとくから……………」

……………河原でも何処でも……………、家じゃない所なら、いいや……………」

……小沢さんの顔は暗い。

……あの病院での一件がまだ何か続いているのだろうか。
気には掛かるがしかし、流石に軽々しく口を挟める様な事情ではない。
い。

「……付き合おうか？」

何か悩んでいるのなら、一人で練習していても、余計に気が滅入るだけではないだろうか。

自分に何が出来るとは思わないが、近くに人が居れば気は紛れるだろう。

気が滅入ってる時程、一人で考え込んで落ち込みがちになる。

「ううん……それは良いや。」

でも、ありがと

小沢さんは少し微笑んだ。

「……今家に帰っても、誰も居なくてさ。」

……お母さん、アイツの看病で、会社と病院を行き来してるから。だから、帰ってもしようがないって言うか……。

……ひとりぼっちで家に居るとき、色々、考えちゃって……。

……昔の事とか、何でこうなっちゃったんだろ……とか、ね。

もう……忘れてたと思ってたのにな……。」

疲れた様にそう言った小沢さんは、あつと顔を上げる。

「ごめん……何か、愚痴っちゃってさ……。」

……忘れて？」

「それは無理だね」

小沢さんが悩んでいる、というのに、それを理由を忘れるなんて出来ない。

少なくとも、小沢さんがちゃんと元気になるまでは。

「えー……。」

もうちよつとこう、優しくしてよ。

……うん、でもありがとね、鳴上さん。

一人だったら、ズーンって落ちちゃってただろうし。

一緒に居てくれて、嬉しいよ」

そうやって、少し元気が出てきた様な表情で小沢さんは微笑んだ。
……元気付ける事が出来た様で、何よりだ。

「私には、演劇あるんだし。

うん、頑張れる。だから、頑張れる！

よっし、私何処か寄って練習するから！

折角主役取れたんだもん、絶対、やってやらなきや！

じゃあね、鳴上さん!!」

ガッツ溢れる小沢さんを見送り、夕飯の買い出しへと出掛けた。



今晩は鮭の照り焼きにでもしようかとジュネスの食品コーナーを回っていると、……溜め息を吐きながら刺身用の切り身を手にしている、あのご近所の倉橋さんに出会った。

目があったので、軽く会釈をする。

「あら、堂島さんの所の悠希ちゃんよね？」

夕飯の面白い物かしら？

お料理も悠希ちゃんがやっているのよね、確か。

ふふ、スゴいわね」

「あつ、えつと、どうも。

倉橋さんも、面白い物の最中ですか？」

「ええ。今日の夕飯と、主人の明日のお弁当の材料を買いにね。

明日のお弁当は……お刺身にしようかしら……」

………えつ？

……いや、流石にそれは不味いっていうか、流石に冗談だと思いたいのだけでも、しかし倉橋さんの表情は冗談を言っている様な感じではない。

刺身をお弁当に突っ込むとか、どんな暴挙だ。

この季節にそんな事をすれば、傷むというか、腐る。

飯マズとか、そんな次元の話ではない。

本気でそんな事を言っているのであれば、何としてでも止めなくては。

「えっ、あの……。」

差し出がましいかもしれませんが、お弁当にお刺身は止めた方が……。

そもそも鮮度が保ちませんし、それに、この季節だと最悪食中毒の原因になります」

「あら、そうなの？」

ウチの主人はお刺身が好きみたいだから、喜ぶと思ったのだけだ。

それなら止めた方が良いわね」

そう言つて倉橋さんは切り身をショーケースへと戻した。

うん、食中毒を未然に防げた様で何よりだ……。

「ふう……悠希ちゃんの色々と詳しいのね、料理の事」

「うーんと、そうなんですかね……？」

正直、刺身は弁当に入れないなど、料理に詳しいとかそういう以前の知識だと思うのだが……。

「私の料理、全然お義母さんは食べてくれないのよ。」

昨日も、豚バラ肉とキャベツのオイスターソース炒め……自信があつただけけれど一口も食べて貰えなかったわ。

オイスターソース、頑張つて牡蠣を搾つたのに……。

何がダメだったのかしら？」

ダメとか、そんなレベルでは無い。

オイスターソースは、牡蠣を搾つて作るものではない。

大体、市販のモノを何故買わなかったんだ……。

「えーつと、ですね……。」

オイスターソースって、牡蠣をそのまま搾つて作ってる訳じゃないんですよ」

オイスターソースは、牡蠣を塩茹でした時の煮汁を加熱濃縮したものを元になっている。

そこに小麦粉とか砂糖とか入れたりして味を調整しているのだ。

生の牡蠣から作る場合や、干し牡蠣から作る場合など、色々がある。

家で一から作る事も可能だが、数時間単位で煮汁を煮詰めなくてはならないので、普通に市販のモノを買った方が早いと思うのだが……。

「えっ、そうだったの？」

新鮮な内にと行って、買った時のまま搾ったのだけ……」

下茹ですらしなかったのか……。

それはオイスターソースでも何でもなく、ただの生臭い汁だ。

……作っている途中で、何かおかしいとは気が付かなかったのだろうか？

何とも言えない心境で黙っていると、何かを考える様に黙り込んでいた倉橋さんが唐突に顔を上げた。

「あのね、悠希ちゃん……。」

もしよければなんだけど、偶にで良いから私に料理を教えてくださいな
いかしら？」

「えっ……と？ 私、ですか？」

唐突な申し出に驚いて目を瞬かせていると、倉橋さんは悩まし気な表情を浮かべて頷く。

「ええ、本当は料理教室とかに通った方が良いのかも知れないけど、……稲羽にはそういう場所が無いのよね……。」

本当に偶にで良いの」

倉橋さんの言葉に、少し考えてから頷いた。

この稲羽ではご近所付き合いという物が重要なのだ。

まあ料理を時折教える程度、大した手間でも無いのだから、それ位でのご近所付き合いを円滑に出来ると言うのなら安いものだろう。

「……分かりました、私でよければ」

そう答えると、倉橋さんは嬉しそうに笑う。

「本当に良いのね！ ありがとう、悠希ちゃん！」

そう言つて倉橋さんは焼き魚用のシシヤモを買い物カゴに放り込んでその場を立ち去っていった。



【2011/06/15】

「おっす、相棒！」

朝から花村のテンションが高い。

何か良い事でもあったのだろうか？

「あつ、分かっちゃおう？ 分かっちゃった？

へっへーん、実はだな、ついに俺も、バイクゲットしたんだぜ！

念願のバイクですよ、バイク！

もう、朝から嬉しくってさー！

でさ、早速、今日の放課後、沖奈まで一緒に行ってみね？

お前、前にツーリングしてみたいつつってたじゃん」

確かに言った。……覚えていてくれたのか。

「ああ、言ったな。

……花村の都合は大丈夫なのか？」

「おうよ！ 今日はずっとバッチリシフトは空けてきたからなー！

あーっ、楽しみだ！ 放課後速攻で出発しよーぜ！」

ウキウキとした様子で提案する花村に、勿論、と頷いた。



放課後、直ぐ様一旦家に帰ってバイクを取りに行ってから、再び花村と合流して、一路沖奈駅を目指した。

小まめに慣らし運転をしつつ土地勘を掴んでいたから、沖奈駅までの道程もバッチリだ。

来る道の途中で自転車に乗る巽くんとも出会い、何故か彼も付いてきているのだが……。

「マジでここまでついてきやがったか……」

沖奈駅前に到着した花村は、バイクを停めて後ろを振り返り呟く。

その言葉に答える様に、自転車のベルの音がして、ギョギョと自転車を漕ぎながら巽くんが追い付いてきた。

「楽勝っすよー。慣らし中の原チャリなんざ、相手になんねツス！」

花村の横に自転車を止めながら巽くんはそう言う。

だが、巽くんも多少は息が乱れているし汗もかなりかいている様だ。

「ほらこれでも飲んで一息吐けば？ 汗、凄いし」

喉が渴いた時様に持ってきた未開封のお茶のペットボトルを巽くんに投げ渡す。

巽くんは、「あざっす」と礼を言って、ゴクゴクと一気に中身を飲み干した。

さて、折角ここまで来たのだから、駅前で少し遊んでおこうか……。確か、駅前のゲーセンにあるクレイニングゲームのプライズに新しいのが入荷していた筈だ。

うん、それに挑戦してみるか……。

「私はそのゲーセンに行ってみるけど、二人はどうするんだ？」

「俺も……折角沖奈来たんで、その……しゅ、手芸の……。

……とにかく、買い物あるんでここは離れるっす」

巽くんは少し顔を赤くしながらそう言った。

手芸店に行くのだと、素直に言えば良いのに……。

まあ、良いか……。

「で、花村はどうするんだ？」

私と一緒にゲーセンでも行くか？」

「ん、いや……俺はちよつと作戦があるからな。

今回はパスだ！」

作戦？と首を傾げたが、まあいいかとそつとしておく事にした。

バイク置き場から動かない花村をその場に残し、巽くんが手芸店へ

行くのを見送って、駅前のゲーセンへと足を運んだ。



沖奈に到着してから三時間。

新入荷されたプライズの内、興味を引かれたモノは粗方入手出来た。

腕が鈍っていなかった様で何よりだ。

他にもシューティング等も楽しんで、実に充実した時間だった。

こういう風にゲーセンで時間を過ごすのも、やはり悪くはないものだ。

……張り切って遊んだ結果、結構な大荷物になってしまったが、まあ持って帰れなくはないだろう。

フロスト人形を調子に乗って三つも取ってしまったが、一つは自分用、一つは菜々子へのお土産として、残った一つは巽くんにもあげるか。

巽くん、こういうの好きそうだし。

ホクホクとした気持ちでバイク置き場に戻ると、花村が少しへばった顔でまだその場に残っていた。

……まさかとは思いが、あれからずっとここに居たのだろうか？

……作戦とやらの仔細は分からないが、初夏のこの日差しを三時間も浴びていれば、流石にバテてしまうだろう。

……というか、花村は何がしたかったのか。

丁度、手芸店から帰って来たらしい巽くんも、怪訝そうに首を傾げている……。

「……花村？」

「一体何をしてたんだ……？」

「いつ……いやー……」

「ちよつと作戦に手違いがあったみてーでな……」

おつかしーなあ……………。

どっかから視線は感じるんだけどなあ……………。

もうちよい粘らなきやダメかな……………」

ブツブツと呟く花村に、思わずツツコんだ。

「これ以上何を粘るつもりかは知らないが。」

日が暮れる方が先になるんじゃないのか……………？

それに大体、作戦って何なんだ？」

「いやー……………」

ホラ、バイクは男のステータスっつーか……………、バイクあつたら魅力が倍増しっつーか……………。

バイクあつたら、男のフェロモンが増幅するらしいじゃん？」

「フィ、ファイル……………、ファイルモン？」

異くんはフェロモンを聞き取れなかったのか、戸惑った様に言い間違えた。

ファイルモンだと、ユングの夢に出てきた老賢者がギリシヤ神話の人物になってしまいうだろう。

と、言うよりも、花村は何を言っているんだろうか……………。

「ファイルモンじゃねーよ、フェ・ロ・モ・ン！」

「それで？」

そのフェロモンとやらを増幅させてどうするつもりだったんだ？」

首を傾げて訊ねると、何故か花村は困った様に言い淀み口籠った。

「バイクがあれば、その……………と……………と思つて」

「……………？ すまないが、聞こえなかつたんだが……………」

バイクがあれば、何だつて？」

再度訊ねると、花村は気恥ずかしいのか顔を覆つて答える。

「バイクがあれば、女の子も寄つてくるかなつて！」

そんで、女の子と仲良くなつて、彼女作つて……………。

何時か金貯めてもっと大きなバイク取つて、二人乗りで密着したかつたんだよーっ！

チクシヨウ、悪いか!!」

別にどうとも言つてもいないのに花村は顔を覆つたまま動かなく

なった。

「えっ、ええつと……、だな……。」

好きにすれば良いとは思うのだが……。

まあ、その……。……元気だせ……。花村……。」

まあ、花村の願望は、所謂お年頃の男子達が抱くというヤツの一環なのだろう。

まず、バイク⇨女性が寄ってくる、とはならないとは思うのだが……。

……とは言え、夢を見るのは自由である。

尤も、花村は現在、夢と現実の差を突き付けられているみたいなのだが……。

「バイクは男のアイテムっつー話ツスけど、それ原付ツスよ？」

巽くんが首を傾げながら言ううと、ガバリと花村は顔を上げて巽くんに噛み付いた。

「しょうがねーだろ!？」

そりや俺だって、雑誌で見た様なでつけーヤツの方が良かったよ!!
でも、夢と現実には開きがあんの!

高いのは買えないのっ!

俺のお財布的には、原付で精一杯だっつーのっ!」

花村の心の叫びを聞いた巽くんは何かを考える様に俯いたかと思
うと、強い意思を感じさせる目で花村を見据える。

「……花村先輩、俺に十分くんねーか?」

「はっ。」

何言い出したんだコイツ、的な目で花村が巽くんを見る。

その点は花村に同意したい。

……巽くんは何をするつもりだ……??

「やられたまんま黙ってらんねっしよ!

先輩の仇、俺がとってやんぜ!」

「ケンカじゃねーっての!」

仇とるってどーすんだよ。

お前、ナンパでもするつもりか!？」

グツと腕を捲つてみせた巽くんに、花村は慌てて訊ねる。

「つたり前つすよ！ この状況で、他に何すんスか！」

いや、他にする事はあるだろう。

「ナンパする」とか、何でこの状況でそうなるのか逆に尋ねたい。

「あのな……バイク持つてる俺で駄目なのに、お前に仇取れるかつーの。」

なあ？」

なあ？ と問われても……。

そもそもその話、バイク自体があまり関係無い要素だろうに……。

「いやいや、そういう問題ではないだろう。」

が、まあ……ナンパは止めた方が良いと思うぞ、流石に……」

色んな意味での大火傷を負いかねない。

謎の黒歴史を作ろうとしているだけなのでは……？

「なっ、鳴上先輩までオレにやれねーと思ってんスか？」

「いや、そう言うつもりでもないけど……」

「いやいや、ムリだろ。暑さで頭イカれたか？」

「いいツスよ、上等ツス。」

ここで引き下がったら男が廃る……。

だったら三人で勝負ツス！

巽完二、男の生き様見せてやんぜ！」

ただ、巽くんを止めたいと思ったただけだったのに……。

花村が不用意に煽ったからか、巽くんはガッツポーズを取ってそう叫んだ。

いや、待て……！ 三人つて、まさか……！

「私も頭数に入っているのか……!?!」

「お、落ち着けての！」

完全に全員参加の流れじゃねーか!?!

鳴上は女子だぞ？

それにだな、マジ分かってんのか？

それってこっちから声かけんだぞ？

なんかカツコ悪いっつーか……いい思い出もないっつーか……」

花村は巽くんの威勢に、しどろもどろになりながらも必死に巽くんを翻意させようとするが、巽くんはそんな花村を煽る。

「怖えーんスか？」

「そうじゃなくてだな……」

「友達になれつつて、〃ハイ〃 って言わせりやいいんスよね？」

「そんだけの話じゃねーか」

完二の単純明快な言葉に、少し悩んだ後花村は大きく溜め息をついた。

「ま、失うもんねーし。いいか……」

「良くないぞ！ 私断固として拒否するからな……」

何が悲しくてやるつもりもないのに、ナンパせねばならないのだ。

花村、正気に戻れ……！

失うモノが無いんじゃない、新たに傷が増えるだけの苦行だぞ、これは……！

「流石先輩ツス！」

負けたらパンイチで町内マラソン、ついでに鼻メガネかけてやらあ！

「いやいやいやいや、意味が分からないし、それは止めてくれ、ホント、お願いだから。」

それに、私はやると一言も言っていないぞ……？」

しかし、ヒートアップした（より正確には花村は自棄になっている）だけなのだが……）男二人には届いてない様だ。

「……男はダメだかな？」

念を押す花村に、巽くんは更にヒートアップする。

……もう、止めてくれ……。

思わず頭を抱えそうになるが燃え上がった二人は止まらない。

「まだそれ言うのかよ!？」

クソツ、ぜってー負けねえかな！」

そう言い残して巽くんは勇ましく駆け去って行き、花村もそれに続く様にその場を離れた。

……どうしようか。

もう帰っても良いかな？ とは思うが、流石にこの状況で二人を放置して帰って、二人が面倒事に巻き込まれていたら洒落にならない……。

……仕方無い。

ナンパ勝負に参加する気は更々無いから、適当に駅前を彷徨いておこう。

……花村たちも、その内諦めがつくだろう、多分。

◇◇◇◇◇

駅前で迷子になっていた子供を交番に送り届けたり、財布を落としたり困っている人と一緒にその財布を探したり、とそう言う風に時間を過ぐしてバイク置き場に戻ってくると、二人とも戻って来ていた。

「……どうだった？」

「や、上手くいかねーッス」

「そうだよな……」

花村と巽くんは疲れた様に話し合っている……。

しかし、花村はニヤリと笑って誇らし気に携帯を掲げた。

「でもな、俺……」

番号、一個ゲットしましたー！」

「花村先輩、イケたんスか!? さすがッス！」

「花村、それ本当に大丈夫なヤツなのか？」

ヤミ金とかに直通の電話とかだったりしないよな？」

巽くんは純粹にスゲーと目を輝かせているが、何だろう……不安しかない。

悪質な業者とかに繋がっている可能性も高いのだから、ハッキリ言えれば止めた方が良い。

「んー、それはねーんじゃね？」

すっげーイカしたお姉さんでさ。

ちよつと背伸びしちつたかなー。

大人の色気っていうかさ……。

いつや、ゲツトすんの苦勞したわー。

早速かけてみっか！

……期待しとけよ？」

花村はそう言つて、自慢気に携帯を開き、その電話番号へと掛けた。暫くして、誰かが出たのだろう。

花村はニツと笑つた。

内心ハラハラしながら、それを見守る。

「もしもーし？ 俺つすー、分かりますー？」

『花村くん？』

電話先の相手の声が大きいらななのか、周りにいる自分たちにまで電話相手の声が聴こえる……。

……？ この声……何だか物凄く聞き覚えがあるのだが。

「うーす、バイクデートの彼でーす！

いつやー、嬉しいなあ……あれ？

でも俺の名前、なんで？

言いましたっけ？」

電話相手に名前を呼ばれ、花村は嬉しそうに返事をするが、どうやら名乗った覚えは無かつた様で、直ぐ様怪訝そうな表情でそう尋ねる。

『なんでって、分かるわよ。同じ学校だもの』

あつ、とその時、電話先の相手の心当たり思い至つた。

そして、慌てて花村に直ぐ様電話を切る様にジェスチャーする。

「同じ学校？ んなはずないっしょ、だつてお姉さん……」

花村も漸く電話相手に思い至つたのか、ザーつと血の気が引いた様な青い顔になつた。

「つーか、その声……、まさか……」

『大谷花子に決まつてるじゃない。』

あんだ、あたしの番号調べた訳？」

その瞬間、花村は半ば反射で電話を切る。

「……なんスか今の。」

地面の底から響くみてーな……、悪寒が走るみてーな……」
横で聞いていた異くんも、身を震わせて呟く……。

「えっ、えっ……?!」

ヤベー、完全にヤベーよ……。

何で大谷が出んだよ、俺、番号間違えたか？」

「いや、多分……その電話番号をくれた女性に騙されたんだろう……。適当に教えられた電話番号が、偶々大谷さんの電話番号だったんだと思う……」

多分、と付け加えた。

いや、花村に電話番号を教えた相手が態と大谷さんの電話番号を教えた可能性とてあるが……。

何にせよ、花村が騙されたという可能性の方が高い。

花村は顔面蒼白でガタガタ震え、冷や汗の様なものもかいている様だ。

しかし、めげずに再度掛け直そうとしている。

多分、再度掛けても大谷さんに繋がるだけだろう。

……大谷さんは、正直ちよつと分からない人の部類だ。

やたらこちらを敵視してきていて、態度も悪い。

彼女に何かをした覚えは無いのだが、兎に角張り合ってくるのだ……。

男子生徒からの評判が頗る悪いのは、花村の反応を見てもよく分かる。

「花村、悪い事は言わない。」

ナンパの事は、もう忘れるんだ。

掛け直さなかったら、大谷さんだって間違い電話だと処理してくれる筈だから」

しかしそうは警告したものの、折角のナンパの成果を諦め切れないのか、花村の反応は芳しくない。

だが、花村が大火傷をする前に、ここは何としてでも友達としては止めなくてはならないだろう。

花村が握りしめている紙を奪い去り、その携帯を強奪……。

紙に書かれた番号と、先程花村が掛けた番号が確かに同じであることを確認してから、紙を細かく折り畳みながら引き千切って近くにあったごみ箱へと捨て、携帯は花村に返した。

「ああっ、鳴上……何て事を……！」

「花村、お前が教えて貰った番号は、確かに大谷さんの番号だったんだ。」

……現実を受け入れろ……、花村、お前は騙されたんだよ……。

もうその女性の事は忘れるんだ……悪い事は言わないから」

まだ電話番号に未練があるのか、花村はごみ箱を見て悲痛な声を上げるが、ここは心を鬼にしてで止めなくてはならない。

……大谷さんに繋がっていたのは、幸い……とは言えないだろうが、もっと悪質な場所に繋がっていた可能性だっただけなのだ。

傷心の花村を引き摺って、稲羽へ帰ろうとしたその時……。

「あら、アンタたち……」

背後から、何故か大谷さんの声が聞こえてきた。

振り返ると、何とも言えない感じの、八十神高校の制服を着た女子生徒が歩み寄ってくる。

「大谷……さん!? 何故、ここに……」

「アタシ、田舎が似合わない女でしょ？」

散歩してたら突然電話よ。

ほんと、強引よね。

バイクデートかあ……」

大谷さんは、花村とその原付をジロリと見詰め、花村は「ヒイツ」と小さく悲鳴を上げた。

「そ、それなんだがな……。」

花村の間違い電話だったんだ……!」

大谷さんにとっては唐突な電話で災難だったかもしれないし、失礼な事だとは思うんだが、どうか花村を許してやって欲しい……!」

「この通りだ、頼む……！」

一方的に掛けておいて悲鳴を上げるのは、流石に失礼な反応だとは思うのだが、それでも花村が全力で嫌がつているのは伝わってくるので、どうか勘弁してあげて欲しい……。

そう思い、大谷さんに頭を下げた。

すると、何故か大谷さんは苦虫を噛み潰した様な顔をする……。

「何で鳴上さんが一々口を出すのよ。」

……まあでも、花村のそれじゃ、シヨボ過ぎるわね。

アタシを誘いたいなら、もう少し頑張らなきや。

いい女を独り占めするには、それなりの努力が必要なんだから」

そう言つて、大谷さんは自信満々な足取りで何処かへと去つて行つた。

「た、助かったのか……？」

花村は震えながら、大谷さんが何処にも見えない事を確認し、喜びの余りにか、身体を震わせる。

「な、鳴上いー！　ありがとう、ホントありがとう……！」

お前は俺の恩人だよ……！」

「恩人つてまた大袈裟な……。」

まあ、でも……これに懲りたら、もうナンパとかで貰った電話番号に不用意に掛けるのは止めろよ？

大谷さん相手だから……まあまだ良かったものの、それこそヤクザとかの取り返しが付かない様な相手に繋がっているかもしれないんだからな……。」

「うう……反省します……。」

ガックリと項垂れる花村の頭を、ポンポンと撫でた。

「まあ、そんなに落ち込むな。」

今回の事は、良い勉強だったと思えば良いさ。

それに、そんなに無理にがつつかなくなつて、花村の良い所をちゃんと見て好きになつてくれる様な良い女性と出会えると思うよ、きつと」

「鳴上いー……お前、ホント良いヤツだよな……」

「鳴上先輩……マジカッコいいっス！」

花村は瞳を潤ませ、巽くんも感動か何かにうち震える様に身を震わせる。

「……さ、帰ろうか」

色々と疲れ切った花村達と一緒に、稲羽へと帰った。

別れ際に巽くんがフロスト人形を忘れない内に渡すと、彼は酷く喜んでくれた。

このタイプのフロストくんは、クレイゲームでしか取れないので、巽くんが入手する機会が無かった代物の様だ。

少し引いてしまいそうになる位に何度も礼を言う巽くと別れ、家に帰ると菜々子が満面の笑みで出迎えてくれる。

「お帰りなさい、お姉ちゃん！」

「ただいま、菜々子。」

今日はハンバーグ作ろつか。

そうだ、おみやげがあるんだよ。ホラ！」

そう言いながら、フロストくんを菜々子に渡すと、巽くんと同じ位喜んでくれる。

その後、二人で戦利品を分け合ってから、仲良く料理を作った。



病院清掃のバイトをこなしていると、再び廊下のベンチに座って天井を仰ぐ様にして休憩している神内さんに出会った。

神内さんもちちらに気が付いた様で、視線をこちらに向けて来たので、「今晚は」と軽く会釈を返す。

「おや、また会ったね……」

……鳴上さん、だったかな」

どうも、と軽く会釈を返してくれた神内さんは、少し思い出そうと
している様に首を傾げる。

「はいそうです。神内先生ですよね」

「はは、……先生なんて、付けなくても良いよ堅っ苦しいし。」

今は休憩中なんだし、もっと気楽にしたっていい」

「そうですか……。では、神内さん、で」

付けるな、と言われたのならば、それに甘える事にしよう。

「うん、そっちの方が良いね」

軽く神内さんは頷き、ふとこちらを見上げる。

「今、時間大丈夫かな？」

「はい、一通り終わりましたので、もうそろそろバイトを上がる所でしたから……。」

時間なら、大丈夫ですよ」

「そっかそっか……。」

……なら、少し時間を貰っても大丈夫かな？

少し、他愛も無い話がしたくなつてね……」

微かに神内さんの目に暗い陰が落ちた。

……何か、あったのだろうか。

……まあ、良い。

「ええ、構いません」

座って、と促され、神内の横に腰掛ける。

少し沈黙した後、神内さんは訥々と話し始める。

「鳴上さんは高校生、なんだよね？」

……高校生活は、楽しいかい？」

「楽しいです。」

友達も居るし、部活とか……打ち込めるモノもあって、充実してる

と、思います」

そう答えると、神内さんは「そうかい」と頷いた。

「それは良い、……実に良い事だね。」

そういう風楽しめる時間というのは、とても良いモノだ……。

そうだ、部活って何をしているんだい？」

「バスケット部を主にやってて、小道具の製作係りとして演劇部も少々。バスケットは友人に誘われて始めたばかりなので、まだまだ初心者的なモノですが……。」

「……神内さんはこの前、『自分の学生時代は勉強か部活して遊んでるかだった』って言ってましたよね？」

神内さんは、何の部活をなさってたんですか？」

「僕かい？ 僕はね、……登山部に入ってたね、ずっと。中学生の時に試しで入ってみたら、山登りの魅力にはまっちゃってね。」

大学に入ってもずっと登山部だったんだ」

中学の頃からか……。」

十年以上も登山部に居るとは、神内さんは筋金入りの登山好きなのだろう。」

「山登りが趣味なんですか？」

「そうだね。」

「……ああ、でも……、最近は山に登ってないなあ……。」

もう、勘とかも鈍っちゃってるかもね」

そう言っつて、神内さんは少し寂しそうに笑う。

「……今は時間が取れないのだろうか？」

「はは、何だか懐かしいなあ……。」

そうだ、鳴上さんは山に登った事はあるのかい？」

「学校の行事とかで近隣の山に登った事はありますが……。」

本格的な山登りというのは、やった事がないです」

「そうか……。」

山登りはシンドイものだけど、山の頂上まで行けた時に見える景色がね……、僕は何よりも好きで、何度も登っちゃうんだ。」

何時か、君も何かの機会があつたら、一度本格的に山を登って見るのもオススメだよ」

神内さんはそう言っつて、微笑む。

「……ありがとうね、僕の話に付き合っつてくれて」

「いえ、私も楽しかったですから。」

お気になさらないで下さい」

「はは、そう言つて貰えると、僕も嬉しいね……。」

……また会う事があれば、もつと君と色々と話したいな。
名残惜しいけど、もうそろそろ僕は行かないと。

お仕事お疲れ様、夜道に気を付けて帰つてね」

そう言つて神内さんはベンチから立ち上がり、病院の奥へと去つて
行った。



【2011/06/16】

放課後、稲羽の書店では取り扱いの無い本を購入する為に沖奈市ま
で行つたその時、偶々工事現場の前を通りがかった。

今度駅前に新しく立つ商業施設の建築現場だ。

重機を動かす音などが響く工事現場内を横目で見てみると、ヘル
メットをした男性達が流れ落ちる汗を首にかけてタオルで拭きなが
ら忙しく作業をしていた。

暑くなりつつある中、ご苦労様な事である。

そのままその場を通り過ぎ様としたその時、ふと視界の端に見知つ
た姿を見付けた様な気がして、もう一度工事現場に目をやった。

……！

……なんと、三組の高山が、中年から壮年辺りが中心の年齢層の男
性たちに混じつて、働いていた。

日雇いのバイトか何かなのだろうか……。

忙しそうに働く高山に声は掛けられない為、その場は通り過ぎた。

本を購入し、駐輪場に向かおうと再び工事現場の前を通りがかる

と、偶々休憩中であつたらしい高山と目があつた。

「ここでもバイトしているのか？」

「まあな、ここ給料良いし。」

ジュネスのバイトが入ってない時は、今はここでバイトしてんだ」
そう訊ねると、冷えたスポドリを飲みながら高山はそう事も無げに
言う。

……給料は良いのかも知れないが……。

……毎日あれだけ忙しそうに働いたり家事を受け持っているとい
うのに、更に土建屋のバイトまでこなすとは……。

バイトか家事、そのどちらかだけだと言うのならまだ分かるのだ
が、両方とも抱え込んでいて高山は大丈夫なのだろうか……。

……どうしてそこまでしてバイトをやっているのだろう。

……色々と気になりはしたがそれ以上は訊ねずに、高山に別れを告
げてその場を離れ、その日は家へと帰った。



林間学校の用意をしてから、家庭教師のバイトへと行く。

今日は中島くんは英語を教える事にした。

相変わらず理解力は高いけれども、少し苦手意識でもあるのか、英
語は問題を解く速さが比較的遅い。

休憩時間に改めて訊ねると、やはり英語はどちらかと言えば苦手科
目であつた様だ。

教科書の暗記で点数は取れているものの、何処か理解仕切れていな
い感じがあるのだそうだ。

しかし、そういう機微を、学校の先生は分かっていないのだと中島
くんは言う。

「……いい商売ですよ、バカでも威張れるんだし……。

……何も、分かってないんだ……教師なんて……」

そう言つて、何処か暗い顔で中島くんは俯く。

「……まあ、先生だつて何もかもは分からない。

見える形にしないとちゃんとは分からないのは、誰だつてそうじゃないかな」

「……まあ、先生だつて何もかもは分からないのは、誰だつてそうじゃないかな」

「……テストの点数がイコールで生徒の価値……。」

「……分かり易いですけどね」

「……テストの出来が全て、か。」

「……そういう考え方の教師は確かに居るが、……中島くんの担任もそうなのだろうか？」

「……こないだ言つた、転校生の事なんですけど。」

「……あいつ、割りと成績良いけど……僕には勝てないんだ。」

「……そしたら、クラスの奴らも、先生も、『転校生は意外と駄目だ』つて顔をして……。」

「……見下してて……。」

「……なのにあいつ、偉そうにしてるから……嫌われてて。」

「……最近じゃ誰も、話し掛けない。……下らないです、全部」

「……中島くんはそう言つて俯いて暫く黙つた。」

「……『転校生の話』、ね。」

「……それにしても、中島くんの言葉には色々感情が籠っていた。」

「……果たして、中島くんの話の『嫌われ者の転校生』とは、本当に転校生の事なのだろうか。」

「……『転校生』の行動に当てはまる人物。」

「……それは……。」

「……考え込んでいると、中島くんはボソツと呟いた。」

「……こんなに下らないのに、何で学校に行かないかやいけないんだろ……。」

「……あんなトコ……。」

「……中島くん、甘えちゃ駄目だ」

「下らない、詰まらないと、そう感じるのなら行かないのか？
それで良いと？ ……そんな訳はない。」

勿論、どうしても無理をしてまで行かなければならない場所でも無いが、しかし……中島くんの考える其れは自分を甘やかす為の逃避に近いのではないだろうか。

「甘え……？ ……ああ、そうか、皆嫌々行ってるのか……」

そう言うと、中島くんは何かを考え込む様にじっとこちらを見て、少ししてから口を開いた。

「……八高つて楽しそうですよね、先生見ていると……。」

……あ、でも。

僕が一年生の時、先生はもう卒業しちゃってるのか……。

じゃあ、意味無いですね」

何処か残念そうに、中島くんは言う。

問題集を解き終えて、その日のバイトの時間は終わった。



【2011／06／17―2011／06／19】



【2011／06／17】

朝御飯と昼御飯のお弁当、そして叔父さんと菜々子の晩御飯を作ってから、早目に家を出て、現地の集場所である、山間のキャンプ場へと向かった。

内容が内容だけにか仮病等を使って不参加する人が多いと聞く行事なのだが、想定以上に欠席者が多い。

どうやら半数近い欠席者が出ている。

更に、ここから途中離脱者が出る事もあるそうだ。

今夜の就寝用に割り当てられたテントは、大きな八人以上の大人数用であるにも関わらず、自分と里中さんと天城さん……それと班は違うが大谷さんの四人しか、初めから人が居ない。

それは花村の方も同じらしく、あちらに至ってはテントに自分一人しかないのだそうだ（尤もこれは他の生徒は仮病で不参加なだけだからだが）。

途中で巽くんが自分のテントを抜け出して、花村のテントにお邪魔しに来る予定らしいが。

まあ、広々とテントを使えるのは、ありがたい事である。

女子は途中で清掃作業を切り上げて夕食作りに回されるとは言えども、それまでは男子たちと混じってゴミ拾いを行う。

学年毎に大雑把に担当する清掃エリアが決まっていて、そこから更に班毎に別れるのだが、まあ厳密という程には決まっていない為、応援と称して班の持ち場を離れて他の班の所へ行く人も多い。

自分たちの班が指示されたエリアは林道から少し外れた場所なのだが、誰が捨てに来たのかは知らないが、冷蔵庫やテレビ、タンスなどの大型の粗大ゴミが不法投棄されていた。

これは、かなりの力仕事になりそうだ。

里中さんと天城さんは、近くを通るハイキングコース脇の林に大量に投棄されている缶やペットボトルの回収を手伝いに行った。

そして二人が向こうに行つたのと入れ違いに、一条と長瀬がやって来る。

「おーつす、鳴上に花村。」

応援に来たぜ。こりや二人じゃ厳しいだろうしな」

「ありがとう、一条、長瀬。」

じゃあ、あのテレビをお願い出来るか？

私はこの冷蔵庫を運ぶから。

花村は、あの割れたテーブルを頼む」

古めのブラウン管テレビだがかなり大型で重たそうなモノを応援に来てくれた二人に任せ、花村には半分に割れているテーブルを、そして自分は冷蔵庫を運ぶ。

中身は空だし、冷蔵庫としては中型のモノだから見た目程には大して重くはない。

これ位なら、一人で運べる。

ゴミを荷台に積み、そしてまた粗大ゴミを拾う。

そんな事を繰り返す途中で、巽くんもやって来た。

どうやら巽くんは色んなエリアをウロウロとしながら、力仕事になりそうな所に加勢していた様だ。

以前の練習試合に助っ人として呼んでいた事もあって、一条と長瀬ともかなり早く打ち解けて一緒に粗大ゴミを片付ける。

そのエリアに投棄されていた粗大ゴミを粗方回収した頃には荷車が一杯になっていて、更には女子が夕食作りに回される時間にも近付いてきていた。

◇◇◇◇◇

炊事場で再び合流した里中さんと天城さんには、主に火の調節をやって貰う事にする。

種火は既に起こしたから、後は適宜薪を投入するだけのお仕事である。

時間短縮の為に持参した無洗米を素早く飯盒に入れ、火に掛けた。

この時間から炊き始めたら、目論見通りにかなり早目に炊き上がるだろう。

野菜の下ごしらえも終え、鍋を火に掛ける。

そんなこんなで、順調に調理は進んでいった。

◇◇◇◇◇

そろそろ出来上がる、という頃合いで男子たちも清掃を終えて炊事場脇に設置されたテーブルに集まってきていた。

多くの班がカレーを選択した様で、あちらこちらからカレーの良い匂いが漂ってきている。

途中で、班員に夕飯作りを放棄されてしまったらしい一条と長瀬に応援を頼まれて、急遽カレーを作ったというアクシデントはあったが、概ね問題なく夕飯は出来あがった様だ。

料理から目を離れた隙に里中さんと天城さんがアレンジという名の何かを行う可能性はあったが、前回のカレー対決での『物体X』にはそれなりにちゃんと反省していた様なので、それは大丈夫だろう、多分。

「はい、お待たせ」

皿をテーブルまで運ぶと、花村と巽くんは「待ってました」とばかり

りに目を輝かせた。

「おおーっ！」

鳴上の作った飯とか、絶対に絶品だよな！

俺、マジで楽しみにしてたんだ！」

「カレーにはしなかったんすね」

「日曜日に食べたばかりだし、カレー以外にした方が他の班の分と交換した時に楽しめるだろうと思って」

するかどうかは知らないが、他の班と交換したりする可能性も視野に入れての選択である。

成る程な、と花村は頷き、「そんじゃ」とスプーンを手に取った。

「いただきますっすっ！」

花村と巽くんはそう手を合わせてから、豪快に料理を掻き込んだ。

里中さんと天城さんも、それに続いて食べ始める。

そして、全員の顔がパアアツと輝いた。

どうやらみんなの口に合った様で何よりだ。

「うっ……めーっ!!」

何だコレ、ホント旨い……！」

「野菜と肉の旨味がしっかり出てるっす……」

「これはラタトウイユって言うフランス南部の野菜の煮込み料理。

入れる野菜は主に夏野菜だけど、それ以外も自由に入れれるし、キヤンプみみたいな竈でも作り易い」

フランスの刑務所で出される事も多い料理の為、「粗末な料理」という実に不名誉なイメージもあるラタトウイユだが、ちゃんと新鮮な材料を使って手間を掛けると、プロヴァンス地方の名物料理として恥じないモノになる。

今回は肉を愛する里中さんの為に鶏肉も入れた。

「このお肉……！ 堪りませんな……！」

里中さんには肉を多目によそったのだが、物凄い勢いで食べている為もう殆ど皿には残ってない。

「で、こっちは……焼きおにぎりだよな？」

「それは醤油味のヤツ。」

「こっちは味噌味で、バター醤油とかもある」

無洗米を使って米を研ぐ手間を省略した事で、米が早目に炊き上がったので、焼きおにぎりにも少し手間を掛ける時間が出来た。

味も色々取り揃えてある。

「中までしつかり味が付いてるね。」

本当に美味しい」

食欲をそそる焼き色が付いた焼おにぎり（醤油）を嚙って、天城さんも染々と頷く。

「デザートには、莓白玉を用意してる。」

莓ソースは家で作ってきたヤツだから、ちよつと味が落ちてるかもしれないけど」

「いやいや問題ねーよ。」

至れり尽くせりだよな、マジで」

そう言った花村の言葉に、全員が頷いたのだった。

花村と里中さんと巽くんがラタトウイユのお代わりをよそいに行った辺りで、一条と長瀬もやって来た。

手には、カレーの皿も持っている。

「鳴上、カレー作ってくれてマジで助かった。」

サンキュな！」

「えっ、何お前……一条たちの班の夕飯も作ってたのか？」

一条の言葉に、花村は驚いてこちらを見た。

「そうだ、と頷く。」

「オレの所も長瀬の所も、班の奴らが逃げちゃってさ。」

二人して材料の山を前にして途方に暮れていた訳。

で、ダメ元で鳴上にヘルプをお願いしたら、もの凄い勢いで作ってくれて。」

マジ助かったわ」

「鳴上が居なかったら、飯抜きになっていたかもしれない」

「まあ材料は揃っていたし……、一条も長瀬も材料切ったり炒めたりするのは手伝ってくれたから、そう手間でも無かったよ」

二人とも料理はマトモにした事は無いと言う話だが、少なくとも指示した通りには切ったり炒めたりしてくれるし、途中で変なアレンジを加える事も無かった。

その点は、里中さんと天城さんよりも遥かに戦力になる。

一条の班は恐らくはチキンカレーを、長瀬の班はイカと海老のシーフードカレーを作ろうとしていた様で、どちらのカレーにするかは少し迷ったが、チキンがかなり多目に用意されていたのもあって、野菜とチキンのカレーにする事にした。

カレーには入れなかったシーフードも、同じくカレーには使わなかったピーマン等の野菜と、何故か用意されていた卵と共に炒め物にしてある。

凡そ八人前近い量だったのだが、そこは運動部男子の胃袋的には何の問題もあるまい。

事実、二人のお気に召した味だった様で、二人は何度もお代わりしたらしい。

一条たちの所のカレーと、ラタトゥイユや焼おにぎりを交換したりして楽しい夕飯の時間を過ごした……………。



「ふう……………食った食った……………」

夕飯をたっぷりと食べた陽介は満足そうに息を吐いた。

今夜寝る場として割り当てられたテントには、陽介と完二しかいない。

他の生徒は病欠……………という事になっている（要は仮病だ）。

完二は本来は別のテントなのだが、完二がそこに居ると葬式の様にならずに静まりかえってしまうので、こうして抜け出して陽介のテントにお邪魔しているのだ。

前々から了承していた事もあって、陽介も文句は言わない。

二人だけなのでスペースに余裕があるというのも大きな要因だろう。

「いやホント、助かったっすよね。」

あの『物体X』が出てきたのが今日の夕飯じゃなくて」

「それな。夕飯がアレとか、軽く死ぬる」

先日食べた『物体X』の恐怖を思い出し、二人はぶるりと体を震わせる。

「『カレー』って料理作って、何であんなに悍しい物体になんだ……」

あの味を思い出してしまったのか遠い目をしながら完二は言い、それに陽介も同意した。

「アイツらには料理任せられねーってのが分かったのが、唯一の幸いだったとか……泣けるよな。」

鳴上が居なかつたら、終わってたぜ、色んな意味で……」

「鳴上先輩にや世話になりっぱなしっす……」

完二の言葉に、陽介は「そうだよな」と頷いた。

「そういや先輩らの担任、モロキンとかってヤツでしたっけ？」

さつきそいつに外で捕まったんすけど、腹立って軽くキレかけたっすよ。

知りもしねえクセに、やれ中学時代がどーの言ってきたやがって……。

しかも厄介事起こしたら即停学とかなんとか……大概にしやがれってんだ」

「あいつ、思い込み激しいからな……」

ふと思いついて苛立ってきたのか、完二の語気は荒い。

それに陽介は溜め息混じりに返した。

去年も、都会からの転校生という事で散々絡まれたし、今年に至っては担任にまでなってしまうのだから、諸岡がどうという教師なのかは陽介は分かっているからだ。

「そーいや、前にクラスの奴らが言ってたんすけど。」

あの野郎、例の殺された二人の事、ボロクソ言ってたらしっすよ」
「モロキンが？」

山野アナと……小西先輩の事をか？」

小西先輩の名を出す時に陽介の顔に僅かに苦みが走ったが、完二はそれには気付かずに大きく頷いた。

「不倫だの、家出だのする人間は狙われて当然だ」とかんなんとか……。

ま、尾ヒレついてんのかも知らないスけどね。

相当嫌われてるみてえだし」

「アイツなら言いそうだからな、ったく……。

俺も去年、越してきた時色々言われたからな……。

一々覚えちゃいねーけど」

色眼鏡でモノを見過ぎている諸岡は、「都会Ⅱいかがわしい」とでも思っているのか、何かと陽介に突っ掛かっていたのだ。

悠希も転入当初は何かと諸岡に絡まれていた様だが、悠希本人はそれを全く気にしていなかった上に、その素行や学業自体に攻撃する為の粗と呼べるモノが無く、突っ掛かって行く度に悠希の鋭く冷静な目で見下ろされてしまう為、もう遂にはそれも下火になった様だ。

この事もあって、悠希は『あのモロキンを撃退した転校生』と噂もされているらしい。

本人は全く気が付いていない様だが。

「たとえ、話半分でもムカつくぜ……。

てめ腐ってもセンコーだろってんだ。

死んだ相手を悪し様に言うなんざ、人としてどうなんだって話になるつつんだ……」

「あんなヤツ、むかつくだけ損だぜ？」

凝り固まってんだろーよ、モノの見方ってヤツがさ」

諸岡の話をした所で腹が立つだけだし、日中の活動で疲れたからもう眠ろう、と陽介は横になり、完二もそれに続いた。

暫しの間沈黙が続き、それに耐え切れなくなった陽介はポツリと訊ねる。

「い、この際だから……その……。

しよ、正直に言って欲しいんだけど……」

「はあ……?」

陽介は少し引き気味な、何とも言えない表情で横にいる完二を見た。

「お、お前って、やっぱ……アッチ系なの?」

「……アッチ?」

何の話題についてなのか、全く見当が付かなかった完二は怪訝そうな顔をする。

「お、俺……貞操の危機とかになってない? 今……」

「のあ!」

陽介の言葉に、完二は顔を真っ赤にして奇声を発しながら立ち上がった。

「なななな何言ってるじゃ、コラア!

そ、そんなんじゃねっつてんだろが!!」

「ちよ、ちよつと待て、なんで豪快にキョドるんだよ!?

な、尚更ホンモノっぽいじゃんかよ!

てか、うつせーよ! 声落とせて!!

モロキンか誰かが寄ってくるだろ!」

キョドリながら大声で叫ぶ完二に、陽介も跳ね上がる様にして起き上がり、ギリギリ小声で完二に叫ぶ。

「んなワケねえだろうが!

そんなのあ、もう済んだ話だ!

今はもう、そのっ……な、なんっーか……」

完二は顔を赤くして言い淀んだ。

それに陽介はツッコむ。

「口籠んなよこえーよ!!」

「今はもう、女ぐらい平気って事ツスよ!」

「そう言われてもイマイチ信用出来ねーっつか、隣で寝るのはキケンを感じんだよ!

俺の身にキケンはねーって、証明出来んのかよ!」

「……しよ、証明だ……?」

陽介に言われ、完二は困った様に一瞬目を逸らす。

「じゃなきや、俺が一晩ビクビクしながら過ごす事になんたる！」

「ケツ……も、いッスよ」

陽介の言葉に、完二は舌打ちしながら眈を吊り上げた。

そして、唐突に宣言する。

「んなら俺、女子のテント行って来ッスよ!!!」

想定外の斜め上を飛び越えていったその宣言に、慌てた様に陽介が完二を止めにかかる。

「……え!? ハアッ!?」

ちよ、そりやマズいつて!

お前の行動は一々極端なんだよ!!

バレたら停学って、自分でさつき言ってたろ!

モロキンにまで目エつけられてんのに!」

「んな事で引き下がんのは男じゃねえ!

妙な疑い掛けられてんのに、黙ってられっか!

先輩にも、男の生き様ってヤツ見してやるっスよ!」

そんなもの見せなくていい、と陽介は止めるが、完二は聞く耳を持たない。

「モロキンがなんぼのモンじゃ!!」

巽完二なめんなコラアアアアアアッ!!!

うおおおおおおおおおおーっ!!!」

「あ、ちよ、おい!!」

腕を掴んで引き止める暇も無く、完二は絶叫しながらテントを飛び出していく。

「あー……バカが走ってくよ……」。

もー知らない、俺……」

その光景に陽介は、もう諦めた様な疲れきった声でそう呟いた。



一方その頃、女子テントでは……。

眠れない千枝は広いテント内を無意味にウロウロと歩き、同じく眠れない雪子は壁の方を向いて正座をしている。

「鳴上さん、本当に直ぐに寝ちゃったね」

千枝の視線の先には、すうすう……と安らかに寝息を立てて眠る悠希の姿があった。

しかし、時折「うっ……」と微かに眉を寄せたりもしている。

その原因に目を向けて、千枝は溜め息を吐いた。

「ハア……なんでここだけこんなに広いのに最初から四人だったのか、分かったよ……」

千枝の視線の先には、まるで地鳴りの様な、そんなトンでもない大音量の最早爆音と言っても良い程の鼾をかいて大の字に眠る大谷さんの姿があった。

尚、悠希は大谷さんよりも早く眠った為（寝る準備を済ませたかと思っただ次の瞬間には既に寝息を立てていた）、この鼾による不眠にはならなかった様である。

しかし全く影響が無い訳でもない様で、その結果時折寝苦しそうな息を吐いたりもしているのだろう。

「眠れないね……」

「ハア……あーも、寝れないし、やる事もないし……」

あたしすらも鳴上さんみたくソツコーで寝れば良かったのかも……」

「あれだけの早さで寝るのは難しいと思う……」

何せ、一瞬目を離れた際には既に安らかな寝息を立てていたのだ。

眠りに就くのが早い質なのだとしても早過ぎる。

のび太くんクラスの寝付きの良さだ。

「うん、そうだね……」

そういえばクマくん、今頃なにしてんのかな。

一日中独りって、考えてみたら寂しいよね。

そう言えばあいつ、前にさ……」

ポツポツと千枝が話す合間にも、轟音の様な鼾は絶え間無く響いている。

それにととうとう耐え切れなくなったのか、我慢できないとばかりに耳を押さえて千枝は叫ぶ。

「ああああ……うああーっ！ も、やだあ！」

無理っ、こんなの無理!! 雪子、逃げようよ！」

「逃げるって……どこへ？」

こんな時間に山を降りるとかは、ちよつと……」

雪子はそこまで呟くと、妙に据わった目で大谷さんを見た。

その目にはハイライトが無い。

「……鼻と口塞いだら、鼾って止まる？」

「ちよつ、やめなさいアンタ！」

そんな事をすれば、鼾どころか生命活動が止まってしまう。

大谷さんの人生を物理的に終わらせようとする雪子のその提案を、流石の千枝も全力で止めた。

「あー……もー嫌……」

千枝が呟くとほぼ同時に、外からガサガサという何かが近付いてくる物音が聞こえた。

二人は直ぐ様反応し、テントの入り口に顔を向ける。

「だっ、誰!？」

千枝がそう叫んだ瞬間、テントの入り口が勢い良く開いた。



完二が出て行ってしまった為、陽介は一人テント内に寝転がっていた。

完二の行く末が気になって、流石に眠気が中々訪れない。

万が一教師の誰かに見付かって、停学になんてなりでもしたら、完二の暴走を止め切れなかった事もあって、後味が悪過ぎる。

騒ぎになっている気配は無いから、多分諸岡に捕まったりもしていないだろうけれど……。

「ねえ……起きてる?」

そんな時、突然外から普段から聞き慣れた千枝の声、息を潜めた音量で聞こえてきて、思わず勢いよく陽介は起き上がる。

「何してんだよ、こんなところで! こつち男子だぞ!」

そして諸岡や他の教師の注目を惹かない様に、小声で言い返す。

「入れて! テントに!」

「バカ言うな!」

モロキンにバレたら即停学なんだぞ! 戻れって!」

「それが無理なんだって!」

帰れないし、あそこじゃ寝れないの!」

二人して小声で言い合っていたその時だった。

「腐ったあミカンはあー、いねえーがあー!」

淫らな行為をするやつあーなあー……」

「……! しよ、しよーがねーな、早く入れよ!」

諸岡の声が遠くから聞こえ、しかも段々と近付いて来る。

仕方無いとばかりに陽介は入っても良いと許可を出した。

すると、千枝だけでなく雪子と……それに悠希も入って来た。

悠希の目は見ていて恐ろしくなる程据わっている上に、ここに来て
も一言も話さない。

そして、テントに入るなり倒れる様にして横になってしまった。

何かあったのかと一瞬陽介も焦ったが、その直後に聞こえてきた安らかな寝息に思わず脱力する。

「で、何があったたつーんだよ、一体?」

「その、完二君が……」

陽介に問われた雪子がそう口火を切ったが、どう説明するべきか迷った様に千枝の方へと一瞬目を向ける。

「気絶して、のびちやつてるから……」

「気絶って、何があった?」

気絶したとは穏やかでは無い。

陽介も心配そうに千枝に訊ねる。

「あの、えーつとね。」

あたしらのテント……大谷さんとも一緒になっちゃっててき……。大谷のいびきが凄過ぎてあたしら寝れなかったワケ。

……鳴上さんは大谷さんよりも先にソッコーで寝てたから、被害は少なかつたみたいだったけど、でも寝苦しくはあつたみたいで……」すうすうと安らかに眠る悠希に、千枝は一瞬目をやった。

心無しかその顔は引き攣っている。

「あの大谷と、か……」

まあ、大変だったつーのは察するぜ。

で、何でそれと完二が気絶した事と関係あんだよ」

「いや……何でかは知らないけど、完二くんが凄い勢いであたしらのテントにやって来てさ。

そんな時、結構煩かつたんだよね。

で、完二くんが一步テントに踏み込んだ瞬間に、鳴上さんが跳ね起きて、そのままの勢いで完二くんの顎に物凄くキレイなアッパーカットを決めて、完二くんその一撃で気絶しちゃった……」

完二くん……あの一撃で身体が完全に浮き上がってたし……」

その時の事を思い出したのか千枝はブルリと身を震わせ、その言葉の続きを雪子が引き継ぐ。

「のびちゃった完二君の首根っこを鳴上さんが掴んで……、大谷さんの横に投げ棄てたの。」

『うるさい』って一言だけ言いながら」

「そんな時の鳴上さんの目……、メツチャ恐かつた……」

絶対零度つて感じで……」

……まあそんな状況で寝れないしき、起きたらほら……完二くんが騒ぎそうでしょ？」

だから、置いてきちゃった。

てか、あのままだと鳴上さん、大谷さんの軒を物理的に止めかねなかつたし……」

半ば仕方無しにここに……」

「……………」

テントから追い出そうにも、すうすうと安らかに眠っている悠希は

ちよつとやそつとではもう起きないだろう。

万が一無理に起こしでもしたら、完二の二の舞になつて朝まで意識を強制的に刈り取られかねない。

溜め息を一つ吐いて、陽介は三人を追い出す事は諦めた。

「いいかあー、〝ふらち〝と〝みだら〝は違うんだからなあ〜……」

その時、諸岡の酔った様な声が近付いて来た。

三人は慌てて悠希に毛布を被せ、灯りを消して千枝と雪子も毛布に隠れる。

「あー……ここは花村だけかあー。

おい、花村、いるなあー。返事しろおー。

それとも寝てるのかあー」

諸岡はテントの外から確認を取った。

その声は確実にアルコールが入っているモノだ。

「うっすー！ もう寝てますー！」

「あー、寝て……ないじゃないかっ！」

いいから、黙つて寝てろおー……!!」

花村の返答に諸岡は怒鳴つて返した。

しかし確認は済んだという事で、諸岡は欠伸をしながらぼやく。

「いかん、ちよつと飲み過ぎたか……?」

諸岡はそう言つて去つていき、気配が遠ざかつていった。

もう付近に諸岡の姿が見えない事を、陽介がテントから顔を出して確認して千枝と雪子は毛布をから出て灯りを点ける。

「はあ……一氣に年食つた気分だぜ……」

……んで、お前らはどーすんだ？

鳴上は……下手に起こしたらヤバいってのは分かったから動かさねーけど……」

毛布を被つて心地良き氣に寝息を立てる悠希に目をやって、陽介は溜め息を吐く。

それを受けた千枝も、困った様に頭を搔いた。

「向こうのテントにも帰れないし、今は外出れないしなー……」

「朝、人が起き出す前に出てくから、それでいいかな……?」

鳴上さんも、朝は何時も早いみたいだから、多分その頃には起こしても大丈夫だろうし……」

雪子に頼まれ、仕方無いと陽介は諦める。

そもそも、悠希を動かせないのだから、もう二人それが増えた所でどうしようもない話だ。

そんな訳で、四人で夜を過ごした。



〔2011／06／18〕

朝目が覚めると、何故かテントに花村が居て、そして大谷さんが居なくなつて、とても驚いた。

まだ早い時間帯だったから他のテントでまだ寝ているだろう人達を起こすのも忍びなかつたので、声には出さなかつたけれども。

その時点でかなり混乱したけど、直ぐにそこがそもそも自分たちのテントですらない事に気が付いて、更に混乱した。

少しして起き出してきた里中さんや天城さんの説明によると、どうやら昨晩は様々な要因があつた為、花村のテントの方へと移動したらしい。

……しかし、そんな記憶は全く無い。

と言うよりも、起きた直後は混乱しててそれどころでは無かつた為気が付かなかつたが、巽くんは何処行つたのだろう？

昨晩は、花村のテントにお邪魔しているのでは無かつたのか……。

巽くんの行方を二人に訊ねると、里中さんも天城さんも、大変微妙そうな顔をしてこちらを見てきた……。

もしかして、何かやらかしてしまつたのか？

しかし、そんな記憶は無い……。

とにかく、どうやら巽くんは、元々は自分たちに割り当てられたテ

ントで寝ているらしい。

……大谷さんも其処にはいるのだろうか、大丈夫なのだろうか……？

まだ日の登り切らない内に花村のテントを抜け出し、自分たちのテントへと戻る。

……其処には、爆音の様な鼾をかいて熟睡している大谷さんと、その腕に押し潰されている巽くんが居た。

巽くんは白目を剥いて眠っている。

一応寝息は微かに聴こえるから、押し潰されて息苦しくなっている訳ではないのだろう。

それにしても、大谷さんがこんなに激しく鼾をかいているのは、少し心配だ。

舌根沈下等による上気道閉塞性の睡眠時無呼吸症候群とかになつてやしないだろうか……？

もしそうなら、呼吸器系・循環器系への負担も心配になる。

しかし今は大谷さんの心配ではなく、巽くんを大谷さんの腕の下から救出し、序でに花村のテントまで連れて行かなくてはならない。

大谷さんの腕を里中さんと天城さんに持ち上げて貰って、巽くんをその下から引き摺り出すが、巽くんは反応しない。

余程深く眠っているのだろう。

昨日の清掃活動で疲れていたのかもしれない。

起きないのはいつそ都合、と言う里中さんたちに従って、眠ったままの巽くんを背負って花村のテントへと戻り、そのまま花村に巽くんを託す。

その後は自分たちのテントへと戻り、二度寝するにも微妙な時間であつた為(鼾が煩いというのもあるが)、起床時間まで天城さんが持ち込んできた花札や、里中さんが持ってきたトランプで時間を潰した。



朝食は、学校から配給された食パンに牛乳のパック、それにジャムとかマーガリンとか、更にデザートとしてかバナナが一本。

準備は直ぐに終わり、食べるのもあつという間だ。

……朝食の時に見掛けた諸岡先生は、どうやら気分が悪い様だった。

アルコールの臭いもしていたから、飲み過ぎからの二日酔いだろうか。

二日酔いの人にこの朝ご飯は少し辛いだろう……。

卵雑炊とか、肉うどんとか、そういう料理の方が二日酔いの人には良いのだが……。

朝食後は一時間少々清掃活動を行った後、現地で解散となった。

解散した途端、諸岡先生はフラフラとした足取りで何処かへ向かう。

……大丈夫なんだろうか……？



解散後、五人で河原に向かった。

山水からなる川は綺麗に澄んでいて、飛び込んでも大丈夫そうな深さの滝壺まである。

水深自体は滝壺になっている所以外はそう深くは無く、川遊びをする分には確かに程好い河ではある……。

尤も、川遊びを楽しむには、まだ水温が充分ではないが……。

「おっ、ラッキー！」

俺らしか居ねーじゃん！」

花村の言う通り、河原には自分たちしか居ない。

この山での遊びスポットとしては、八十神高校生には有名な場所ら

しいから、もつと人が居るのだろうかと思っていたのだけれども……。
……やはり、水温が充分ではないからだろうか……。?
はしやく花村とは対照的に、巽くんはテンションが非常に低い。
どうしたのだろうか。

訊ねてみると、巽くんは不思議そうな顔をしながら答えてくれた。
「や……。なんかオレ、昨日の夜にカツとなってテント飛び出したよう
な気がするんすけど……。」

つかしーな、夢だったんすかね？

起きたら花村先輩のテントだったし……。」

「ゆ……。、ゆめゆめっ。夢だから」

巽くんの疑問を、里中さんは慌てて否定する。

どうやら、昨晚の事は無かった事にするらしい。

……記憶が曖昧なのならば、大谷さんに押し潰されていた事は一々
思い出させる必要性は無いだろうし、別に良いか……。」

「やっぱ夢っすか……。」

巽くんも、少し怪訝そうにしながらも一応の納得はした様だ。

「よーっし、折角来たんだし、とりあえず泳ぐか！」

「花村先輩、マジで泳ぐんすか？」

……オレあダリいし、パスで……。」

花村がハイテンションでそう言うのと、力無くぐったりと座る巽くん
は、首を横に振った。

「大丈夫か？ 巽くん」

大谷さんに押し潰されていた事で何か悪影響でもあったのだろうか
か……。」

「あー……。何か顎の辺りが特に痛いんすよね……。」

「顎？」

大谷さんが寝返りを打った際にでも、殴られたのだろうか……？

……何故か、里中さんと天城さんが遠い目をしている。

「鳴上たちは泳がねーの？」

花村が首を傾げて訊ねてきたので、首を横に振った。

「泳ぐも何も水着を持ってないし、それにまだ泳いだりして遊ぶには

水温が冷た過ぎる。

風邪を引くぞ、この冷たさじゃ」

そもそも川で遊ぶ予定は無かったのだから、水着を持ってきている筈は無い。

それは里中さんも天城さんも同じだった様で、二人とも同じく首を横に振る。

「あたしもパス。

泳ぐつもり無かったから、水着持ってきてないもん」

「私も、泳がないよ？ 水着無いし」

しかし、全員に断られたと言うのにも関わらず、花村はめげない。

「ふっふーん！」

そんな事もあるうかと思っただな……」

そう言っつて、花村は鞆の中から何かを取り出した。

……水着だ、それも女性ものの。

「花村……まさかお前……、そんな趣味が……」

「ちげーよ！ つーか分かっててそれ言っただろ、鳴上！」

まあ、少しふざけただけだ。

三着も持っているんだから、多分自分や里中さんたち様に持ってきたんだらうな……、というのとは大体察せられる。

「ジュネスオリジナルブランド、初夏の新商品だぜ！」

いやー、結構三人に似合うの探すのに頑張ったんだぜ！

特に鳴上は背が高いからな……、中々イイのが無くって！」

背が高過ぎるとそういうのは確かに探すのが面倒だ。

「花村先輩……それずつと持ってたんすか？」

……引くわー……」

巽くんも、そして里中さんも天城さんも、花村を白い目で見ている。

多分、呆れているのだろう。

「良いじゃん！」

折角だし皆で林間学校でも楽しい思い出作りたかったんだよ！」

「それなら、最初から水着持参って提案すれば良かったんじゃない……」
よくこちらの水着のサイズが分かったな……。

まあ、花村がこちらをそういう目で見ていた、という事なのかもしれないが。

しかし、態々水着を探すなんて無駄な労力を割くのもバカらしくないだろうか……。

……この前の『密着作戦』と言い、どうしてこう……無駄に残念な方向性に行動力を発揮しているのだろうか……。

「素直に言っても、鳴上とかに却下されると思ったから……」

「分かっているのなら、何故持ってきた」

「……俺の熱意を認めてくれるかな、って」

はあ、と溜め息を一つ吐いた。

「……コブラツイスト、キヤメルクラッチ、ベアハッグ、スリーパーホールド……好きな技を選ばせてやろう……」

「こえーよ！ 何でプロレス技から選ばせんだよ!!」

「と、まあ……冗談は置いといて……」

「冗談かよー」

「……やって欲しかったのか?」

物好きだな……。まさか、花村には被虐趣味でもあったのだろうか?

「んな訳ねーだろー!」

それは即座に否定された。

ともかく、と花村に説明する。

「熱意は認めるが、さっきも言った様に水温が低い。

単純に、泳ぐのに適していないんだ。

思い出を作りたい気持ちも分かるが、それで風邪を引いては元も子も無いだろう。

そんなに泳ぎたいのならば、今度皆で沖奈のプールにでも出掛けよう。

夏になれば、海にも行けるしな。

それでは、ダメか?」

一見賑やかし屋に見るが実は相当な気遣い屋である花村は、他人に本気で嫌がられる事は基本的にはやらないタイプだ。

花村的には、本当に林間学校での楽しい思い出を作れたかったのだ

ろう。

若干の下心があつた事自体は、否定は出来ないのだろうけれども。まあ、そこは思春期の男の子のサガというヤツなのだろうから、大目には見てあげた方が良さだろう。

実際に花村が自分たちにと買ってきた水着は、各々に良く似合うし、かなり好みを突いている。

男子生徒諸君の妄想の行く先となつていゝ様なギリツギリの布地面積のモノでは無い。

そこはちゃんと真剣に選んでくれたのだろう。

トスツと、少し強めに花村の頭に手刀を落として、勝手に水着等を購入してきた事は許してやる。

「うう……りょーかい」

少し未練がある様だが、結局は花村も了承してくれた。

水着は折角買ったのだから、とそのままプレゼントされる事になつた。

稲羽には水着は持って来なかつた為、買う手間が省けたので個人的には少し嬉しい。

結局、川で遊ばずにそのまま家に帰る事になった。

……帰る途中に、川の上流の方で諸岡先生が川に向かって嘔吐しているのを見掛けてしまう……。

……恐らく、二日酔いにあの朝食が堪えてしまったのだろう。

……色んな意味で、川に入らなくて本当に良かった……。



【2011／06／19】

林間学校も終わり、少しゆつたりとした気持ちで目覚めた日曜日だが、どうやら今日は昼夜を通して曇天が続くらしい。

まあ、雨が降るよりは良いのだが。

今日は、巽くんから手芸を教わる予定なので、早速巽屋を訪ね、店番をしていた巽夫人に断って店の奥へとあげて貰う。

「今日は手芸を教えるつっ—話つスけど、編みぐるみで良いっスか？」
編みぐるみ用の毛糸を用意しながらそう訊ねてきた巽くんに頷いた。

編みぐるみでも、普通のぬいぐるみでも、それこそ織物とかでも、ドンと来いという気持ちである。

何も問題など無い。

「勿論。前に見た巽くんの作品も編みぐるみだったけど、巽くんは編みぐるみが好きなのか？」

以前巽夫人から借り受けたマスコットも、編みぐるみで出来ていた。

全て編みぐるみで出来たストラップサイズの小さなマスコットだったのに、付いている小物（編みぐるみ製）が異様な程凝っていたのは記憶に新しい。

あれは、相当の愛が無くては作れないだろう。

ふと気になって訊ねてみると、巽くんは少し言葉を濁しつつも頷いた。

「ま、まあ。あの独特の風合いが出る感じが……」

確かに。編みぐるみは編んで作る事によって、独特の風合いが出る。

それが良い、という声も多いのは知っている。
どっちがより優れているとかそんな話ではなく、各々良い所があるという事だ。

「確かに、編みぐるみは普通に布とかを使って作るぬいぐるみとはまた違う感じになってて、そこがまた良い。

私も、編みぐるみは好きだ」

そう答えると、巽くんは嬉しそうな顔をした。

「よっし、じゃあ早速作り始めましょう」

巽くんからレクチャーを受けながら、編みぐるみを編み始めた。

そして数時間後――

途中で巽夫人が作った美味しいお昼ご飯をご馳走になったり、休憩を挟みつつも、漸く編みぐるみは完成した。

自分がモチーフとして選んだのはセキセイインコだ。

お喋りも出来る手乗りの鳥としてペット界限では（個人の主観で）非常にポピュラーだと思われるオーストラリア原産のオウム目インコ科の鳥である。

原種は頭は黄色の羽で胴体は緑色の羽がメインでそこに背中や翼辺りに黒い羽が模様のように混じっている。

品種改良によって実に様々なカラーバリエーションがあるのも特徴だ。

まあご託は置いて、セキセイインコとは、凄く、極めて、可愛い生き物なのである。

編みぐるみで作ったのは、その中でもオパールインブルーパイドと呼ばれる色合いのセキセイインコだ。

背中の部分の黒い模様がなく、頭の色は白、胴体は主に青だが所々白い羽がまるで模様の様に混じっている。

完成した編みぐるみは、鼻黒目に見ているのだとしても良い出来だとは思う。

粗は見当たらないし、巽くんが丁寧に教えてくれたお陰で、難しいような羽の色合いも見事に表現出来ている。

鼻黒目に見ても可愛い。

家に帰ったら早速飾ろうと思う。

しかし……。

「いやー、やっぱり先輩は器用っスよね。

初めてでここまで作れるのって、すげーっスよ」

そう褒めてくれる巽くんのその手には、信じられない程凝っている編みぐるみがある。

ウサギがモチーフなのだが、まるでビスクドールの様な凝った衣装

を着ていて、更には寧ろそれが1つの作品じゃないのかと言いたくなる程の凝った小物を持っている。

勿論の事ながら可愛い。

彼我の実力差は一目瞭然、圧倒的である。

更に絶望を感じる事に、巽くんの過去の編みぐるみ作品だと言うモノを見せて貰った所、思わず我が目を疑う程の代物が存在した。

それは、某ジブリ映画のマスコット三匹(?)だ。

小・中・大と揃っているそれは、小物らしい小物は無く、極めて高い完成度を誇っているとは言え巽くんの作品としてはシンプルなものである。

……その大きさが、三匹並べても人差し指の爪先から第一関節までの大きさが合わない事を除けば、だが。

……完敗だ。

どうやって作るのか教えて欲しいと言うか、目の前で是非とも作って頂きたい。

だが、ここで膝を屈しては試合終了だ。

それが何れ程遠くとも、高みを目指し努力し続ける事に意味がある。

巽くんと言う、極めて高く偉大なその壁を越える為にも、まだまだ努力が必要なのだと言う事が分かったのだ。

ならば、歩き出すだけである。

そう決意を新たにしていると、巽くんがポツリと訊ねてきた。

「なんつーのか、先輩的には正直な所どうなんスか……?」

その……俺がこう言うのやってるのって……」

……もしかして、教えている内に不安になってきたのだろうか。

……気味悪く思われているんじゃないか、男らしくないと思われているんじゃないのか、と。

……仕方無い、か。

巽くんの悩みの根はそれだけ深いのだ。

だから、素直に自分の気持ちを伝えた。

「ゴッドハンドの持ち主かと思った」

「ゴツドはん……？」

どうやら通じなかった様だ。

少し気恥ずかしくなりつつも言い直した。

「異くんは神業の持ち主だって事。

いや、本当に凄いよ、コレは。

この極小サイズのモノなんて、ネットのオークションに掛けたら万単位で値が付くレベルだと思う」

「えっと、そうなんスか……？」

自分の技術の凄さが今一つ分かっていないのか、異くんは頬を掻きながらそう首を傾げる。

……異くんの作品の大半は、凄まじい値が付くのは確実だろう。

「それにだな、良いじゃないか。

可愛いモノが好きだろうと、それを作るのも大好きだろうと。

可愛いモノをこんなにも可愛く作れるんだから、それは誰に対しても胸を張れるレベルの特技だし、人目を気にしてコソコソする必要性なんて無いって事だ」

他人に迷惑をかけるモノでもないのだから、外野が異くんの趣味にとやかく口を出す権利などはない。

それに、技術は技術として評価するべきである。

異くんだからダメなんて事は全く無い。

「……先輩にそう言って貰えると、何か胸が軽くなった感じがするっス」

そう言つて少し安心した様に笑った異くんは、畳み掛ける様にして提案を述べる。

「それでだな、異くん主催の手芸教室……割りと真剣に検討してみてはどうだろうか。

異くんの趣味とその技術の凄さを理解して貰える切欠になるだろうし。

弟子1号としては、師匠の腕が認知されて居ないのは悔しいモノがあるのだが」

手芸教室を開いてみるのが、異くんの悩みを解決する一番の方法な

んじゃないかと思う。

要は、巽くんの趣味とかを受け入れてくれる人を作るのが必要なのである。

手芸教室なら、そもそも手芸に興味がある人が来るのだし、手芸に興味がある人ならば巽くんの技術の凄さが分かる。

まあ見た目のギャップが凄いのは事実だが、それでも受け入れてくれ易いだろう。

うん、考えれば考える程、名案な気がする。

尤も、巽くんが乗り気でないのならどうしようも無いのだが。

「せ、先輩が弟子1号!」

あ、……そうなのか……?」

いやでも……。」

つか、手芸教室つつつても唐突過ぎるっスよ。

需要とかってのも、あんのか分かんねーし」

この稲羽でも需要は確実にあるだろう。

可愛いモノ好きは決して少数派ではない。

「……だったら、巽屋の二画で巽くんの作品を売り出してみてもどうだろうか。

最初は巽くんの名前を伏せて。

『こんなのを作りたい』って人が出てきたら、製作者を明かして手芸教室を開けばいい」

そう提案してみたのだが、巽くんの反応はあまり芳しくなかった。

……残念だ。

その日はそこで巽くんに礼を言ってから巽屋を後にして、家へと帰った。





【2011／06／19】

今日は父の日だ。

だからかは知らないが、叔父さんも早い目に帰って来た。

「お父さん、いつもありがとう。」

お父さんだいすき！」

「叔父さん、いつも色々ありがとうございます。」

心許りの品ですが、これをどうぞ」

菜々子と二人で用意していた贈り物を叔父さんに渡す。

菜々子からは肩叩き券。

こちらからは、少し洒落たシャツとネクタイを贈った。

本当はお酒とかを贈りたかったのだが、未成年者の為酒類は一人では購入出来ず、止むを得ずに断念するしかなかったのだ。

「悪いなあ、菜々子、悠希」

そう言いながら叔父さんはとても喜んでくれた。

服とネクタイも気に入ってくれた様で何よりである。

そして早速三人で食卓を囲んだ。

今日の夕飯はマナガツオの西京焼きをメインに、京料理で固めてある。

菜々子も張り切って手伝ってくれた。

菜々子は飲み込みが早いのか熱意が凄いのか……、メキメキとその腕を上達させている。

野菜の皮剥きも、始めたばかりの頃の半分以下のスピードで剥ける様になった。

目覚ましい進歩だ。

簡単な料理なら、近い内に一人でも仕上げられる様になるだろう。

テレビでは、アイドルの休業に関する記者会見が流されている。

『久慈川りせ』という、今人気上昇中のアイドルだそうだ。

CMか何かで顔を見た事がある様な気がする。

……アイドル自体には、そう深い興味は無いから、あまり自信は持てないが。

菜々子はこのアイドルのファンだった様で、『りせちゃん』という愛称で呼んでいる。

……どうやら休業して、親戚の家がある稲羽の町へとやって来るらしい。

その親戚の家は老舗の豆腐屋を営んでいるのだと、芸能記者が言及している。

……稲羽の町の、老舗の豆腐屋。

「商店街の、丸久豆腐店か……？」

店主の老婦人が高齢であるからか、店を開いてない時もあるが、それでも開店しているのを見掛けた時には豆腐は何時も彼処で購入している。

今日の夕飯に使った湯葉も、丸久さんで購入したモノである。

店主の老婦人とも既に顔見知りだ。

お得意様認定して貰えているのか、何時もオマケして貰っている。

丸の中に久が入った看板を掲げていたから、『久〇〇』さんなんだろうな、とは思っていたが……久慈川さんだったのか……。

今日買いに行った時に、「孫娘が今度からやって来て店を手伝ってくれるから、頻繁に店を開けられる様になるかも」とは言っていたが……。

まさかその孫娘が、休業宣言をした人気上昇中のアイドルとは、驚きである。

不思議な縁もあったモノだ。

「りせちゃん、テレビやめちゃうのっ？」

ファンだからか、残念そうに菜々子は声を上げた。
それに叔父さんは溜め息を一つ溢して答える。

「さあな……けど実家が此処って事あ、面倒な野次馬が増えそうだな、こりゃ……。」

『久慈川りせ』、か……。

何も無いのが取り柄だったような田舎町が、今年はエラく騒がしいな……。

これ以上何か騒ぎが起きなきや良いんだが……」

思いつきり記者会見で暴露されてしまったのだから、丸久さんに『久慈川りせ』を一目見ようと、稲羽の内外から野次馬たちが沢山詰め掛けてしまいかねない。

……。

……あまり良い予感はないが……、だからと言ってどうこう出来る問題でも無い、か。



【2011／06／20】

翌日、学校では『久慈川りせ』の話題で持ちきりだった。

人気が落ち目であったのなら未だしも、人気上昇中での突然の休業は、やはり衝撃的であつたらしい。

出身が稲羽という事もあつてか、稲羽一帯でも彼女のファンは相当数いたらしく、昨晚の記者会見はかなりの視聴者が居た様だ。

巽くん曰く、朝方から商店街の方に人が詰め掛けていたらしい。

恐らくは、野次馬たちが押し掛けてきていたのだろう。

……幾らアイドルとは言っても、休業しているのだから、迷惑になる行為は慎めば良いのに……。

丸久さんとしても、豆腐を購入してくれると言うのなら話は別か

もしれないが、野次馬ばかりでは商売にならず、いい迷惑だろう。
ファン心理というモノなのかも知れないが……。

花村も彼女のファンであつたらしく、妙にソワソワとしている。
彼女が今居るであろう丸久さんにも行ってみたい様だが、今考えるのはそれではないだろう、と里中さんに軌道修正された。

そう、今までのパターンを考えると、「犯人」に『久慈川りせ』が目を付けられる可能性がある。

アイドルである以上、注目されているのは今に始まつた事でも無いし、テレビにだつてもう何度も以前から出ているが、彼女は今まさに『稲羽の時の人』となつていて、しかも現在は稲羽に滞在しているのだ。

今までのパターンも『テレビで映されたから、狙われた』と言うよりも、どちらかと言えば『テレビで映されて』《稲羽で話題になつてゐる》人だから『狙われた』とも考えられる。

それならば、今その話題で町中が持ちきりになつてゐる『久慈川りせ』は格好のターゲットだろう。

《マヨナカテレビ》を見てみるまでは、まだ何とも言えないのではあるけれど。

取り敢えず、今の所は『久慈川りせ』の動向には注意する、という事になつた。



放課後、一階の廊下で漸く捜し人を見付けた。

……小西くんだ。

前に借り受けたハンカチを、まだ返せていなかったのだ。

どうやら、小西くんは相当早くに帰宅してしまう事が多い様でしかも休み時間は教室ではなく何処かをフラフラしているらしい。

その為中々校内では出会えず、出来る限り直接手渡して返したいと

いうこちらの勝手な思いからクラスの人を経由して貰う事もせず、今の今まで返す機会が無かったのである。

尚、ハンカチ自体は何時でも返せる様にキツチリと洗っていつも準備していた。

「小西くん、ずっと借りっぱなしになっちゃってたけど……」

これ、ありがとうね」

小西くんを呼び止めてハンカチを返すと、小西くんは驚いた様な顔をしてそれを受け取る。

「別に、捨ててくれててもよかったですけど……」

……これ、姉のハンカチなんです。

親が間違えて俺のカバンに入れて……」

……もう、使う人居ないから……」

……このハンカチも役目を果たせて、嬉しいと思いますよ。

……ども」

何故か礼を言われてしまった……」

小西先輩のハンカチを態々貸してくれていたのだ。

礼を言うのはどう考えてもこちらからだろう。

「こちらこそ、ありがとうね。」

そのハンカチを貸してくれて、助かった」

そう礼を言うと、小西くんは少し戸惑った様な顔をする。

そして、フツと暗い顔になった。

「……俺、さつき保健委員……クビになりました。

もう、来なくて良いって……」

……まあ、俺の所為なんですけど……」

居たら気不味くなるから……」

でも……また、取り上げられちゃいました。

……それじゃあ、今日はもう帰らないと……」

……家の手伝い、あるんで……」

寂しそうな顔をして、小西くんは帰ってしまった……」

……」

……小西くんを取り巻く状況は、あまり良いものとは言えない様

だ。

自分ならどうにか出来るなんて自惚れている訳では無いけれども。
……知ってしまった以上は、放っておく事なんて出来ない……。



夕食を食べながら、叔父さんが眉間に僅かに皺を寄せながら、丸久さんの辺りに野次馬が押し寄せて来ているから、その近くを通る際は気を付ける様にと注意してくる。

……稲羽署の方でも、野次馬たちの動向を注視しているのだろうか？

まあ『久慈川りせ』はアイドルなので、悪質なファンやストーカー等が付いている可能性があるから、多少の警戒はしているだろう。

悪質なパパラッチとかも跋扈しているだろうし、警察としては仕事が増えて大変なのかもしれない。

……このまま何事も無く、野次馬たちも収まってくれば、それが一番なのではあるが……。



【2011／06／21】

放課後に演劇部を覗いてみると、小沢さんの姿は見当たらなかった……。

小沢さんが演じる予定であった主演女性は、副部長が演じている……。

……心配、ではある。

前に部活に参加した時の、あの余裕の無い様子を見ると、小沢さんの身に何か悪い事でも起きたのでは無いのかと、そう考えてしま

う。
……深入りするべき事では無いのかもしれないが、放つてはおけない。

……お節介なのかもしれないけれども。

自己満足でも何でも良いから、とにかく、放つてはいけないう感じしているのだから行くしかない。

病院に行くと、病室の並ぶエリアのベンチに、暗い顔をした小沢さんが座っていた……。

……小沢さんの「お父さん」の病室では無い様だが……。

小沢さんはこちらに気が付き、顔を上げた。

「……鳴上さん、どうしたの、こんな所まで……」

「……小沢さんが、心配だったから……」

ここまで来ておいて、態々嘘を言つてまで偽る必要性は無いだろうから、そこは素直に理由を話す。

すると僅かながらも、小沢さんの鬩りは薄くなった。

「鳴上さん、優しいね。」

部活、出てなかったから……ワザワザ見に来てくれたんでしょ？」

優しいのではなく、ただの自己満足に過ぎないが……。

小沢さんは顔を伏せ、部活に居なかつた理由を話してくれる。

「……お母さん、倒れたんだ。」

朝から晩まで仕事しているのに、あんなヤツの看病までやってるから……。

……過労、だつてさ。

すぐ退院出来るみたいだけど……。

……無理、……しちやつてさ……。

……バカみたいだよ……。」

お母さんに対して「バカみたい」という言い方は良くはないが、そこに確かにお母さんを心配する気持ちが込められていたから、それに

は何も言わない。

「……そうか、……大変、だったね……」

だから、一言だけ、そう言った。

「うん……」と頷いた小沢さんは、何もかもに疲れきった様な空虚な顔をする。

「でも、……もう……どうでも良いや……」。

……お母さんの看病、しなきゃだし……

……部活止めて、バイトとかでもやらないと、お母さん……また無理して倒れちゃう……

……主役も、降りた……

せつかく、貰えた主役……

頑張つて、全部セリフも覚えたし、ずっとずっと……一人の時も練習してきて……

……でも、もう……意味無いや……

何もかも、上手く行かない……

全部、親……

親が……アイツが、ジヤマする……」

取り留めなく語る小沢さんの言葉を、静かに聞いた。

小沢さんが今度の劇の為に頑張ってきたのは否定しようも無い事実だし、それがダメになり折角掴んだ主演の座を他人に渡さなくてはならない悔しきは、自分では想像も出来ない程だ。

しかし、だからと言って自棄になって無理を重ねても、良い事など一つも無い。

「……小沢さんは、無理をしたらダメだ。

身体を、大切にしなきゃ……」

「……うん、そうだね……」。

私まで倒れたら、お話にもならないもん……

……ありがとう、鳴上さん……

……関係無いのに、色々言っちゃって……、でも……それなのに文句も言わない。

……本当に、優しいんだね」

優しいのとは違うだろうとは思う。

ただのお節介な自己満足なのだから。
だけれども。

「……関係無くなんて、ない。

だって、友達の事なんだから、関係無くなんてない」

友人が困っていたり悩んでいたりを、見ないフリは……自分
は出来ないし、したくもない。

独善的だろうけれども、自分はそう感じる質なのだ。

「乗り掛かった船って事？」

……何でだろね、そう言って貰えると、安心する……。

……ありがと、鳴上さん……」

お母さんの病室に行く小沢さんと別れ、その日は家へと帰った。

◇◇◇◇◇

雨が降り続く深夜零時。

《マヨナカテレビ》はぼんやりとした映像を映し出した。

……これは……、水着、を着ているのだろうか……？

粗い映像とは言え、服の輪郭が殆ど見えないから、水着なのか下着
姿なのか、そのどちらかなのだろう……。

ぼやけた映像でも、特徴的な左右のツインテールは確りと確認出来
る……。

……。

……髪型と大体の体格は、この前の記者会見の中継の時にチラリと
見えた『久慈川りせ』ととても似ている……。

……やはり、これは『久慈川りせ』が映っているのだろうか……？

画面が切り替わり、何故か胸や太股、そしてヒップのラインを強調

するかの様に拡大して映されている。

……これは一体……？

……今まで見た《マヨナカテレビ》では、ここまで特定の身体部位を強調した事は無かった筈。

……『久慈川りせ』が、アイドルだから、なのか……？

……どうであるにせよ、《マヨナカテレビ》に映ってしまった以上、【犯人】が何らかの行動を起こすかも知れない。

明日、様子見程度にでも、丸久さんを訪れた方が良いでしょう。



〔2011/06/22〕

やはり昨晚の《マヨナカテレビ》に映ったのは、『久慈川りせ』なのだろう、と意見は大まかに一致した。

里中さんもあの《マヨナカテレビ》には少し違和感を覚えた様ではあるが、あの特徴的な髪型は見間違えるとは思えない。

とにかく、一旦丸久さんによって様子見をしようという事になったのだが、天城さんと里中さんはどうやら今日は何か用事がある様なので、異くと花村との三人で向かう事になった。

花村がやたらとソワソワしているので、店……というよりも『久慈川りせ』に会っても迷惑は掛けないようにしっかりと釘を刺しておく。

まあ、豆腐を買いに行く用事もあったので序でで丁度良い。

一昨日・昨日と、一応豆腐を買いに行こうと寄ってみたのだが、人だかりが凄過ぎてかは分からないが、店は閉まったままであった。

……今日は開いていると良いのだが……。



商店街の一角、丸久豆腐店の前は異様な人だかりが出来ていた。車道を我が物顔にはみ出ている野次馬が邪魔で、道を行くトラックなどの車両が立ち往生しかけている。

そこに何故か足立さんが誘導灯で車両の誘導を行い、交通整理をしていた。

「こんにちは、足立さん。」

交通整理中ですか？」

声を掛けると、足立さんもちちらに気が付いた様だ。

足立さんは疲れた様な顔で答えてくれる。

「ああ、悠希ちゃんか。」

いやねえ……『久慈川りせ』見たさに野次馬が次々に車で押し掛けてきて、商店街の真ん中で止まろうとしてくるからね。

交通課が人手不足って事で、応援に駆り出されてるってワケ……。

朝からずっとこの調子なんだよね……。」

「それは……お疲れ様です」

朝からこの人ばかりだったのか……。

それは大変だっただろう。

まあ、こんな野次馬が集る様な事稲羽ではそうそう起きないだろうから、ただ事では無いのだろう。

本来なら刑事の仕事では無いのだろうけれども、駆り出されてしまったというのなら仕方無い。

……………。

足立さんがここに居るといふ事は、叔父さんもここに居るのだろうか？

「悠希ちゃんは何の用？」

もしかして、『久慈川りせ』を見に来たとか？」

一応、目的としては『久慈川りせ』の様子を見に来たのであるが……。

「一応お豆腐を買いに来たのですが……。」

まあ、その時に序でに会えば良いな、という程度の下心なら多少は」

「あー……成る程ねえ。」

でも、この人だけじゃあ買い物するのも難しいかもしれないね」
確かに。

この人ばかりを掻き分けて店に入るのは一苦労だろう。

……。

しかし、野次馬たちに全く動きが見られない。

ザワザワとはしているが、目的の『久慈川りせ』に会えたのならもつと騒いでいるのではないのだろうか？

……久慈川りせは店先には居ないのかもしれない。

まあこんな騒ぎになっているのだし、それも無理は無いか。

「はい、失礼、ちよつと道空けて……おーい、足立！

ん？悠希か。」

お前たち、こんな所で一体何を……」

その時、叔父さんが人混みを掻き分けてこちらにやって来た。

そして、横にいる巽くんに目を留め、驚いた様な顔をする。

「巽完二……？」

悠希、こいつと仲が良かったのか……？」

「ええ。巽屋さんに行った時の縁で。」

巽くん、裁縫とか刺繍とかとても詳しいんですよ。

私、巽くんの一弟子なんです」

そう叔父さんに答えると、巽くんが後ろで照れた様な焦った様な顔をしているが、それは無視だ。

「……裁縫？ ああ、染物屋の息子だからか？」

……まあ、なら良いが……。

それで、三人してこんな所でどうしたんだ？」

叔父さんの鋭く射抜く様な視線が突き刺さる。

その目をジツと見詰め返しながら答えた。
「買い物です。」

「今晩は豆腐ハンバーグにしようと思つてて」

「あー……、そういうやお前、ここの豆腐よく買つてたな……。」

「で、悠希はそれで良いとして、残り二人は何しに来たんだ？」

叔父さんからジロリと視線を向けられた花村は、しどろもどろになりながら答える。

「えつと、『久慈川りせ』に会いに来たんです。」

「その……俺、ファンなんで。」

「完二は……まあ、俺が引つ張つてきたつーか、その……」

叔父さんは花村と異くんを交互に見て、「ハア……。」と溜め息を吐いた。

そして鋭い目付きで花村を見て、しつかりと釘を刺す。

「……まあ、良いだろう。」

だが、幾ら芸能人でもここは自宅だ。

迷惑にならないように、行動は弁えろよ」

そして、交通整理を続けていた足立さんを連れて、叔父さんは何処かへと立ち去つて行った。

「あのデカ、先輩の知り合いっすか？」

叔父さんとの関係性が分からなかったのか、異くんは首を傾げながら訊ねてくる。

「知り合いというか、私の母方の叔父さん。」

「稲羽では叔父さんの家に居候させて貰つてるんだ」

「へー……、先輩の叔父貴がデカたあね……。」

「てかもしかして、先輩、あのデカに疑われてるんすか？」

「あー……まあ、ね。」

天城さんとか異くんとか、一時的にとは言え行方不明になった人と、親しくなっているから。

それに、異くんがあつちに放り込まれる前に異屋に行ったのも、家電売り場をウロウロしてるの知られてるし……。

「怪しまれる要素はあるから、仕方無い」

本当に、こちらの行動だけを見ると不審な事この上ない。

犯人として疑われているのでは無いだろうけれど、事件に何かしが関わっているのではと疑われているのだろう。

まあ、被害者の救出という形で事件に関与しているのは事実ではあるのだけど。

「何か話したりはしてねえんすか？」

「話して分かって貰える様なモノでもないからな……」。

話した所で、正気を疑われるか、……無駄に疑われて動き辛くなるか、だろうし」

実際に見てみない事には、『シャドウ』も『ペルソナ』もあの世界も、到底信じられる様な代物では無い。

実際に連れて行けば、流石に信じてくれるのかも知れないけれども……。

……しかし、何が起こるのか分からないあの世界に、多少の力の向き不向きはあれどシャドウへの対抗手段を持つペルソナ使い以外は、不用意に招くべきでは無いと思う。

ペルソナ使い以外がもしシャドウに遭遇すれば、一方的に矚り殺しにされるだけである。

里中さんの時については、考えが甘かったと言わざるをえない。

あの時も一歩間違えれば大惨事だった。

もう、それと同じ轍を踏む訳にはいかないのである。

叔父さんの目の前でテレビに手を突っ込んでみるのも良いのかも知れないが、その場合自分をあの世界に連れて行けと言われるのがオチであろうし、もしそうでなくとも、叔父さんは幾らペルソナの力を扱えると云えども公的な立場としては一介の高校生である自分たちが命の危険も有り得る場所で戦う事は良しとはしない。

だが、【犯人】が犯行を重ねる中、被害者を救出する為には、ペルソナ使いだけでチームを組んであの世界を探索するのが一番効率的で、最も確実に安全な方法なのだ。

………

……心苦しいが、今のまま黙って活動を続ける方が、現段階に於い

ては最善の道だろう。

「あー……。」

ま、確かにそつスね」

巽くんも納得した様に頷く。

その時、野次馬たちに動きがあつた。

……どうやら『久慈川りせ』の姿が見えなかつたらしく、退散する事にしたらしい。

一人が豆腐屋の前を離れると、それに続くかの様にゾロゾロとその場を去つていく。

……あつと言う間に人だかりは姿を消した。

「えつ、『りせちー』居ねーの？」

ガセネタつて事か!? マジで!？」

野次馬たちの言葉に、花村が素つ頓狂な声を上げ、肩をガツクリと落として見るからに落胆する。

その落胆ぶりに、巽くんが嘔き出した。

それに噛み付いた花村を宥めながら、取り敢えずは人だかりが捌けた店内へ行つてみる事にする。

……? ……店には何時もの店主さんの姿が見えない。

奥の方には割烹着を来て布巾を着けた誰かが何やら作業をしていた。

「あのーすみません、お豆腐を買いたいのですが」

そう声を掛けると、居住区画と繋がっている店の奥から何時もの店主さんがやつて来る。

「はいはいお客さんかい？」

おや、悠希ちゃん。

いつも有り難うねえ」

「いえ、ここのお豆腐、とても美味しいですから。

……外、大変でしたね。

今は、少し波が引いたみたいですけど。

あ、絹を二丁お願いします」

「いえいえ、おおきに。」

絹二丁、お願いね」

丁度店の奥で電話が鳴って、それを取りに店の奥に戻ろうとした店主さんが店の奥で作業していた人にそう声を掛けると、「はい」という返事があって、ビニール袋に入れた絹ごし豆腐を持ってきてくれた。

代金と引き換えにそれを受け取る。

「……はい、絹二丁ね」

「ありがとう。」

……あなたが、『久慈川りせ』さんかな？」

豆腐を持ってきてくれたのは、割烹着を着た同年代位の女の子だ。

ツインテールの特徴的な髪型等から、恐らくは彼女が件の『久慈川りせ』さんなのだろう。

しかし、CMとかで時折見掛けた様な明るい雰囲気は欠片も無く、何処か疲れた様な、そんな暗く感情に乏しい顔をしている。

「……えっと、そうだけど」

「うそ…ホントに、りせちゃん？」

途端に興奮した様に、花村が身を乗り出した。

しかし久慈川さんはそんな花村に暗い雰囲気です。

「……だから、何？」

テレビ等で見る『アイドル』の『りせちゃん』とは全く様子が違うから、花村は戸惑った様に言葉に詰まってしまった。

花村がそんな様子なので、こちらが本題を切り出す。

「えっと……、最近この辺り、ちよつと物騒で……。」

変な事に久慈川さんが巻き込まれるかもしれないから、警告に来たんだ」

「……へえ……。」

久慈川さんは特に興味も無い感じでそれを聞いている。

そしてその後を、戸惑いから回復した花村が継いだ。

「えっとさ、……『真夜中に映るテレビ』の事って知ってる？」

つつても深夜番組とかじゃなくて……。

んー、説明がちよい難しいんだけど……。」

《マヨナカテレビ》をどう説明するべきなのか、花村が迷っている。

久慈川さんが口を開いた。

「……昨日の夜のやつ？」

「……《マヨナカテレビ》だっけ？」

久慈川さんは既に《マヨナカテレビ》の事を知っていたらしい。しかも、実際に昨晚のものを見た様である。

花村が驚いた様に声を上げた。

「えっ、見たの?!」

「噂、前に知り合いから聞いてたし。」

見たのは、昨日のが初めてだったけど。

「……でも、昨日映ってたの、私じゃないから。」

あの髪形で水着、撮った事無い……」

そう説明した久慈川さんは俯いた。

視線は自分自身の胸部に向かっている。

「それに……、胸、あんなに無いし……」

そう言われ、花村の視線が久慈川さんの胸へと向く。

「えっと、あー……なるほど……、確かに、言われてみれば……」

「……花村……、女性に対してのその発言……」

「デリカシーに欠けてるぞ」

沁々とそう呟きながら久慈川さんの胸をガン見する花村の頭に、軽く手刀を落とす。

「って、あー、何言ってるの俺!？」

あ、その、ごめん!

そんなつもりじゃなくってさ、いや、ホント!」

途端に自身の発言を顧みて慌てた様に何度も謝る花村のその様子が面白かったのか、久慈川さんは少しだけ笑った。

「ふふっ、謝り過ぎ」

自然に溢れてきたのであろうその笑みは、とても柔らかくて素敵な笑顔だ。

少なくとも、さっきまでの暗い顔よりはずっとずっと良い。

……暗い顔よりは、そうやって笑っている方が、久慈川さんはより魅力的だ。

笑ったからか少し雰囲気も柔らかくなった久慈川さんが、不思議そうに首を傾げる。

「……でも、あれが私じゃ無いとして、だったら何が映ってたんだろ？」

……確かに、不思議だ。

本人がそう言っているのだし、久慈川さん本人の映像では無いのは事実なのだろう。

もしかしたら所謂コラージュというやつなのかも知れないが……。

……実際に映されていたモノの正体が何であったのかはさておき、あれが久慈川さんに関わる何かであったのは確かだろう。

「それは……まだ分からない。」

ただ、あれに映された人が、失踪……正確には誘拐されている事件が、ここ最近数件起きている。

だから、もしかしたら久慈川さんの身にもそれに近い害が及ぶかも知れない。

……だから、身の回りには気を付けてね。

特に、もし家に誰かが訪ねて来た時は……、例え知っている相手だとしても、一応気を付けて欲しい」

天城さんと巽くんの件を考えると、今回も玄関から真っ正面に来る可能性が高い。

警戒しているのとしていないのでは、誘拐のし易さも随分と違うだろう。

事件を未然に防ぐ為にも、例え知人友人相手にでも、完全には気を赦さない様には忠告しなくてはならない。

「あー、まあ突然言われても信じらんねえよな。」

けど、嘘じゃねえ。

実際に映されて被害に遭った奴らがいる。

オレもその一人だ」

「誘拐するのは冗談でも何でもなくつてさ。」

俺たちの友達とかも巻き込まれて、それで色々調べて……。
とにかく、知らせなきやって」

巽さんと花村も、真剣な顔で久慈川さんに言う。

久慈川さんは少し考える様に黙った後、頷いた。

「……そっか、あれ、やっぱり夢じゃないんだ。

……昨日は、疲れてたけど眠れなくて。

丁度雨降ってたから、偶々、聞いてた噂、試しただけなんだけど……。

……分かった。

ありがとう。気をつける」

「そうか、良かった」

どうやら忠告するには成功した様だ。

これで誘拐を未然に防ぐ事が出来れば良いのだけれども……。

「あつ、そうだ……」

ふと何かを思い付いた様な顔をした久慈川さんは、そう言って
ショーケースから『がんもどき』を三つ取り出して袋に入れる。

「これ、みんなにオマケ。

何か、心配してくれていたみたいだし」

「ありがとう」

礼を言つて『がんもどき』を受け取る。

そして、ああそれと、と久慈川さんに付け加えた。

「外で交通整理していた刑事さん、足立さんと堂島さんって言うんだ
けど、もしかしたら久慈川さんに何か訊いてくるかもしれない。

……その時に、私たちが忠告しに来てたつてのは、出来れば黙つて
おいて欲しい」

「……何か不都合でもあるの?」

「堂島さんは私の叔父さんで、今お世話になっている人なんだけどね
……。

前々から、あんまり事件とかに首を突っ込むなって散々言われてて
……。

でもまあ、こっちも友達の事とか他にも色々事情があるし、黙つ

て見ているってのも出来なくってね……。

まあ、叔父さんには黙ってこっそりやってるって事なんで。

出来れば、ナイショにして欲しい」

事件の事を調べている事、そして解決するべく関わっている事は叔父さんには極力知られたくない。

相手が誰だとしても、ペルソナやシャドウ関連の事は関係者以外には余程切羽詰まっていけない限りは話さないと決めているので、叔父さんから問い詰められても本当の事は話せない。

結局はぐらかすしか無いし、それはそれで今後の身動きが取り辛くなる。

叔父さんにも、余計な心労をかけさせてしまうだろう。

だが、あまり真剣に隠蔽しようとしていると、逆に久慈川さんには色々と不信感を抱かせてしまうかもしれない。

だから敢えて少し茶目つ気を入れながら、ナイショにしてね、と右手の人差し指を唇に当てて、ウインクする。

「そっか、そういう事なら、黙っとく」

久慈川さんはそう言っただけ頬を緩めて頷いてくれた。

買い物も忠告も済ませた事だし、今日はこの辺りで家へ帰るとしよう。



店を出て、解散する間にふとその存在を思い出し、鞆から包みを取り出して花村に手渡した。

「ん？ どうしたんだ、鳴上」

「いや、確か花村の誕生日は今日だったよな？

だから、そのお祝い」

友人の誕生日なのだからプレゼントの一つや二つ、そう大したものではなくとも贈りたい。

今日は朝から《マヨナカテレビ》と『久慈川りせ』の事で立て込んでいたから、今の今まで頭の隅へと追いやられていたが、丁度思い出したのだから良しとしよう。

「えっ、マジか。」

覚えててくれたんだな。

……なんか、スツゲー嬉しい。

ここで開けても良いか？」

パアツと顔を輝かせた花村にそう訊ねられて、「構わない」と頷いた。

花村は包みを慎重に開け、中身を取り出す。

「これって、手袋？」

「正確にはバイク用の、だな。」

まあ、夏場には不要だろうけど、冬場になれば必要だろ？」

少し早いだろうけど、まあ良いかな、と」

プロテクターが付いたレザー製のグローブだ。

色合いが花村好みのオレンジ調であったのと、防護性と耐久性と装着性が両立していたので、花村への誕生日プレゼントに丁度良いかと思いい、先日沖奈に買い物に行った時に購入した。

サイズも目算ではあるが、恐らくは大丈夫だろうと思われる。

原付きは花村の貯金から出した様だったし、高い買い物なのでこういった小物までは手が回っていないだろうと思ったのも、購入の動機の一つだ。

「そっか、夏過ぎたらこういうのも必要になってくるよな。」

ありがとう、鳴上。

大事に使うから」

花村が喜んでくれた様で何よりである。

その日はそこで解散し、各々で家路についた。



日も暮れかける頃合いになると、悠希たちが帰った後も散ってはまた店の前に集ってと繰り返していた野次馬たちもめつきりと姿を消した。

野次馬たちへの対応を終えた遼太郎と足立は、丸久豆腐店に足を運ぶ。

「一先ず騒ぎは収まったみたいなので、自分ら、取り敢えずこれで。今後も騒がしい様なら署まで連絡ください」

「はい」

足立の言葉にりせは頷いた。
すると、遼太郎がりせに話し掛ける。

「あー、失礼、幾つか訊きたいことが」

微かにりせが首を傾げたのを了承と受け取ったのか、遼太郎は続けて質問した。

「最近、この辺りで物騒な事件が連続してるの、知ってるね？」

身の回りで、怪しいヤツは見ませんでしたか？」

「別に……今まで通りです」

りせの返答に、遼太郎は困った様に頭を搔く。

「あー、今まで通り、か……」

仕事がアイドルじゃ、ストーカーだの、ハナから怪しいのだからって事だな……」

……どうして突然休業されたんです？」

次の質問には、りせの表情が微かに強張った。

そして、俯く様に目を伏せる。

「……疲れただけです」

「学校はどちらへ？」

「八十神高校の予定です。ここから近いし」

幾つかの質問の後、遼太郎は少し言い辛そうに切り出した。

「脅かすつもりはないんだが……あなたには、これまでの被害者と幾つか共通点がある。」

だから、その……」

「……事件に巻き込まれるかも、って事ですよね……。」

「……分かりました、気を付けます」

遼太郎が濁した言葉の後を、りせが言う。

「遼太郎と足立はそれに驚いた様な顔をするが、「話の流れで分かる」と言うりせの言葉に、少しだけ違和感を感じながらも、特に矛盾した点は無いので一応は納得した。」

何か不審な人物を見掛けたり、不審な出来事があれば直ぐに連絡する様に、と遼太郎はりせに付け加える。

「あー、それと、私的な話にはなるが、うちの姪がここに豆腐を買いに来たみたいだな。」

もしかしてあなたと会ったんじゃないかな？

「背が俺より高い、高校生なんだが」

「その人なら、昼過ぎにお豆腐を買いに来てました」

「その時に何か話は？」

「……特には」

りせの応答に不自然な点は無かった。

りせへの質問をそこで切り上げ、遼太郎と足立は丸久豆腐店を後にする。

「この所の失踪事件……二件の殺しも含めて、警察でも掴めていない謎は多い。」

その内三件……八十神高校の生徒が関わる事件で、あいつはその周りをウロウロしてやがる……。

……偶然と言われればそれまでなのかもしれないが、やはり引っ掛かるな……。」

考え込む様に空を見上げた遼太郎に足立が声を掛けると、遼太郎は視線を下げて微かに首を横に振った。

「八十神高校……な。」

四件の事件の内、三件がその生徒で、久慈川りせが通学予定なのもあそこ、……か」

「学校関係者の捜査の方も、何も出てないんですよえ……。」

「このままだと、ウチらマズくないですか？」

県警もそろそろ……」

立て続けにその生徒が被害に遭っているのだ。

何らかの関係はあるものと思われるが、被害者三人で共通項は、それこそ『八十神高校生』というその一点だけ。

捜査状況も芳しくない中、県警が捜査に介入してくるのも時間の問題なのかもしれない。

だが、そんな心配をしている暇があるなら、少しでも捜査を続けなくてはならない。

そう足立に釘を刺し、遼太郎は署の方へと戻っていった。



夕飯の時間になると叔父さんも帰って来た。

どうやら叔父さんもあの後丸久豆腐店に立ち寄ったらしく、豆腐を持って帰ってきている。

……それは明日の朝の味噌汁にでも入れるとしよう。

叔父さんに予告した通りに、今晩は豆腐ハンバーグだ。

豆腐ハンバーグは初めてだったのか、「おとうふからハンバーグってつくれるんだ」と、作る最中に菜々子は感心した様な目で見ていた。

「そっぴいや悠希、お前、今日の放課後に久慈川りせに会ったみたいだが……」

何かを考えているかの様に黙々と食べていた叔父さんがふと訊ねてきた。

箸と器を置いてからそれに答える。

「ええ、まあ。」

豆腐を買った時に、久慈川さんがお店に居たので、それで」

そう答えると、途端に菜々子が驚いた様に声を上げた。

「えっ、お姉ちゃん、りせちゃんに会ったの？」

「うん、商店街のお豆腐屋さんがね、久慈川さんのお家だったんだ。」

買い物に行った時に、会えたよ」

すると、『りせちー』のファンであった菜々子は、「そうなんだ！
菜々子もりせちゃんに会いたい！」と目を輝かせる。

「じゃあ、今度お豆腐屋さんと一緒に行ってみようか。」

色んな人が久慈川さんに会いに来て今大変みたいだから、行くのはもう少し先になるかもしれないけどね」

「うん、〴〵やくそく〴〵だよー」

指切りをして約束すると、菜々子は嬉しそうに笑う。

余程楽しみであるらしい。

その時。話の筋がそれてしまったのを軌道修正しようとしてか、叔父さんが訊ねてきた。

「あー、それでだな……。」

久慈川りせと会った時に、何か話したりとかしたのか？」

「話、ですか？」

いえ、これと言って特には……。」

花村はファンだったみたいで、直に会えてかなり喜んでいましたが……。」

「……そう、か」

何か引っ掛かるものでもあったのか、叔父さんは困った様に頭を掻く。

……この様子だと、久慈川さんはこちらの事は叔父さんたちに黙っててくれた様なのだけれども。

……刑事の勘か何かで引っ掛かりを感じているのだろうか？

「どうかしたの？」

「あ、いや……。……何でもない」

菜々子に訊ねられ、叔父さんはそこでその話題は切り上げた。



今晚も雨が降り続けている……。
そして迎えた深夜零時……。

《マヨナカテレビ》は昨晚と同様に映像を映し出す。

……胸や腰から太もも辺りが重点的に映し出されているが、やはりこれは『久慈川りせ』なのだろう。

昨晚のものよりも、顔の判別が可能な程よりハッキリと映っている。

本人そのものでは無い様だし、また『シャドウ』が映った時の様な感じでもないが……。

……何はともあれ、久慈川さんの身边により気を付けなくてはならないだろう。

詳しい事は明日話し合う事にして、今日はもう眠る事にした。



【2011／06／23】

《マヨナカテレビ》に映ったあの映像の正体が『何』であるかはこの際置いておくとして、やはりあれに映っているのは『久慈川りせ』なのだろう。

《マヨナカテレビ》に顔がバッチリ映っていた為、そこは間違いはない。

あの世界に放り込まれた後に映っているのなら、それは久慈川さんの『シャドウ』なのだが、花村が朝方に軽く確認した所、久慈川さんは店番をしていた様なので、あれが『シャドウ』である可能性は低いだろう。

「『テレビで報道された、稲羽の人間』。

『久慈川りせ』もバッチリ条件に当てはまってるよな。

って事は、やっぱターゲットは『久慈川りせ』って事か……」

花村の言葉に頷く。

「恐らくは。」

今現在、稲羽で最もその条件に当てはまっているのは久慈川さんだからな」

久慈川さんがメディアに露出していたのは前々からだ。

だが、今回の休業報道で一気に話題を集め、町を歩けば常に誰かしらが『久慈川りせ』の話をしている程になった。

以前からファン自体は稲羽の町中に居た様だが、ここまで『久慈川りせ』一色になったのは間違いなくあの休業報道と、久慈川さんの休養先が稲羽であった事が原因だ。

……稲羽に居る人間しか狙わない事から、「犯人」は稲羽かその周辺に住んでいるのだろう。

今迄の傾向を考えると、「犯人」はターゲット個人への『感情』自体は無い可能性の方が高い。

『条件』に見合う人間を半ば無差別に（と言ってもその条件に当てはまる人間はあまり多くは無いが）ターゲットにしているだけであるからだ。

故に、被害者の傾向がかなりバラバラなのだろう。

だが、被害者があちらの世界に放り込まれる前に映る《マヨナカテレビ》が、愉快犯である【犯人】からの『予告』に相当するものと考えると、……昨晩と一昨日の晩の《マヨナカテレビ》は少し違和感を感じてるモノであった。

久慈川さんの胸や腰ばかりを強調して映していたり、実際よりも胸を大分大きめにされていたりと、久慈川さんへの『感情』が随所に感じられた。

……久慈川さんだけは特別という事なのか……？

……考えてみても、分からない。

そもそも、《マヨナカテレビ》に予告の様なモノを映す理由すら、分からないのだ。

………。

世間を騒がせたいのなら、見ている人がどの程度居るのかも分から

ない《マヨナカテレビ》ではなく、警察とかマスコミとかに犯行予告を送った方がより良いだろう。

……【犯人】の目的が『シャドウ』が映った《マヨナカテレビ》だとすると、【犯人】は間違いなくあのまだ誰も放り込まれてもいないのにターゲットが映る《マヨナカテレビ》を見ている。

あの世界は、『シャドウ』然り『ペルソナ』然り、“心”の作用に依って如何様にも変化する世界だ。

自分たちと同じくあの世界に自力で入る力を持つ【犯人】は、言い換えればあの世界に干渉する力も持っているとも言えるのではないだろうか。

無意識の内に【犯人】の“心”が何らかの作用に依って《マヨナカテレビ》に映っているが為に“犯行予告”の様になっているという可能性もなくはないだろう。

だがその場合も、その映像が映っているのに気付きながらも《マヨナカテレビ》に自身の“心”を映し続ける理由は分からない。

……《マヨナカテレビ》、か……。

雨の日の夜に起きるあの不可思議な現象は一体何であるのか……。

………？ 今、何かが引つ掛かった。

………。

……そうだ、《マヨナカテレビ》は『雨の日の夜にしか』映らないのだ。

そこに【犯人】の犯行が全て“予告されている”、その考えこそが、間違いなのではないか……？

「……もしかして、私たちは思い違いをしているのか……？」

「急にどうしたんだ、鳴上？」

【犯人】について、里中さんたちとあーでも無いこうでも無いと話しか合っていた花村が、唐突な一言に驚いた様に声を上げた。

《マヨナカテレビ》が【犯人】のターゲットを映している……、そう私たちは思っていた」

「えっ、だって今までもターゲットにされた人たち、ずっと《マヨナカテレビ》に映ってたじゃん。」

何か違うの？」

里中さんが、よく分からないとでも言いた気に首を傾げる。

「結果的に『マヨナカテレビ』に映った人が、ターゲットになっているのだとしたら……。」

つまり、「犯人」がその人をターゲットにしたから『マヨナカテレビ』に映っているんじゃないかと、『マヨナカテレビ』に映ったからこそ「犯人」にターゲットにされたんだとしたら……。」

そちらの方がより辻褄が合う」

「辻褄？ どういう事？」

天城さんに訊ねられ、出来る限り分かりやすく答えた。

「……『マヨナカテレビ』は雨が降っている夜にしか映らない。」

そして、「犯人」があの世界にターゲットを放り込むのは、『マヨナカテレビ』にターゲットが映った後だ。

……今の所は、必ずに。

ターゲットの条件が、『テレビに映った、稲羽の人間』なのだとすると、実際にテレビに映ってから、彼方の世界に放り込まれるまでのブランクが存在している。

本来、「犯人」には『シャドウ』が映らない『マヨナカテレビ』が映るまでターゲットを放置しておく必要性なんて無い。

『シャドウ』が映らない『マヨナカテレビ』が映ろうと映らなからうと、そんなの「犯人」の知った事では無いだろう。

「犯人」の目的が単に『シャドウ』が見たいだけなんだとしても、『マヨナカテレビ』が映るよりも前から放り込んでおいたって何の問題も無い。

尤も、既にターゲットが決まっているならば、の話にはなるが」

「いや、えーっと、それって『マヨナカテレビ』が「犯人」からの『予告』だからだって話じゃなかったスカ？」

巽くんの言葉に首を横に振る。

「「犯人」が愉快犯で、世間を騒がせたいから犯行に及んでいるのだとしたら、『マヨナカテレビ』で『予告』を出すのは不自然だ。」

『予告』を警察とかマスコミとかに出した方が、より世間は騒ぐから

な。

あの《マヨナカテレビ》は「犯人」からの『予告』ではないとして考えて、ならば何故犯行は《マヨナカテレビ》が映った後なのか……それに最も辻褃が合う答えは『「犯人」は《マヨナカテレビ》を見てターゲットを決めている』という事になるんじゃないだろうか」

そもそも、ローカル番組位になら、取り上げられている人間は、ターゲットになった人よりも大勢居る。

犯罪に関する報道も含めると、更に増えるだろう。

それらの人々をスルーして、今までのターゲットが選ばれた理由……。

それは、《マヨナカテレビ》に映ったから、ではないか？

「《マヨナカテレビ》に映ったから、ターゲットにされるって事か!？」

こちらが言わんとしている事を理解した花村が、驚いた様な顔で、イスを蹴る様な勢いで立ち上がった。

「その可能性は十分にあると思う」

まだ確証は無いのだが、そう頷くと「クソツ」と花村は頭を抱えてイスに座り直す。

結果的に《マヨナカテレビ》が被害者を映すというのは変わらないが、順序が入れ替わるだけでもその違いは大きい。

天城さんの時や巽くんの時、そして今回の久慈川さんの時も、被害者を早めに突き止められたのは事前にある程度の情報がある相手だったからだ。

『テレビで注目を集めた稲羽在住の人』という条件であれば特定するのも比較的容易だが、《マヨナカテレビ》に映った人”という条件なのであれば、今後全く見ず知らずの何の情報もない知らない一般人が映ってしまった場合、最悪被害者の特定が出来なくなる恐れがある。

「えーっと、《マヨナカテレビ》に何が映るのかには「犯人」は関係無い、って事……?」

じゃあ、《マヨナカテレビ》って何を映してるんだろ……」

里中さんの言葉に、皆頭を抱えて考え始めた。

尚、巽くんは早々に思考放棄してたこ焼きを食べている。

そもそも、考える材料が足りないからあまり考えない様になっているだけで、《マヨナカテレビ》という現象自体、分からない事だらけだ。「《マヨナカテレビ》があの世界と関係してるってのは間違いないんだよなあ……」

「あの世界に放り込まれた後に、その人の『シャドウ』が《マヨナカテレビ》に映るもんね。」

……じゃあ、誰もあの世界に放り込まれていない時に映るものは何なのかって話にやつぱりなるんだけど……」

花村の言葉に天城さんも頷く。

「うーん……『シャドウ』も『ペルソナ』も元を辿れば“心”なんだし。

誰かがあつちに放り込まれて『シャドウ』が《マヨナカテレビ》に映るんだったら、その前に映る映像も《誰か》の“心の中”ってのも有り得るんじゃないか？」

花村の言葉に、話に付いていけない巽くん以外は頷いた。

“心”、か……。

……あの世界が何であるのか、まだ完全には分からないが、『ペルソナ』や『シャドウ』といった存在の事を考えると、あの世界が“心”と密接に関係しているのは間違いないだろう。

ならば、あの世界との関連がある《マヨナカテレビ》にも“心”との関係がある、というのは可能性としては高い。

《誰か》の“心”の中が《マヨナカテレビ》に映っているという可能性は十分に有り得る。

「その可能性はあるだろうけど……、じゃあ《誰》の“心”が映ってるのかって話になるよ。」

【犯人】………じゃないんだよね」

天城さんは悩まし気に考えている。

《誰》の“心”の中なのか、か……。

天城さんの時は天城さんの事を考えている人、巽くんの時巽くんの事を考えている人、久慈川さんの時は久慈川さんの事を考えている人………。

……今の所のターゲットになった人に共通するのは、『テレビで報道された、稲羽に居る人』だという事……。

……《誰か》は恐らくは、稲羽あるいはその周辺地域の人間だ。

「《マヨナカテレビ》が映る直前つてき、町みんながその人の話題一色だったよね。」

「今回のりせちゃんは特に凄いけど、雪子の時だつて『テレビ映つたよね』みたいな感じだったし」

「確かに。」

小西先輩の時も事件の話で盛り上がつて、何処行つてもその話題で盛り上がつて……小西先輩が第一発見者らしいつて、凄いやつになつてたな」

ふと思ひ出した様に言う里中さんに花村も頷く。

……町中で噂されていた為、《誰》であるのかの特定は非常に困難である。

「だからさ、《誰》なのか特定しなくても良いんじゃないかなーつて」「……!!」

里中さんの言葉から思考が急速に整理されていくのを感じた。

《マヨナカテレビ》は“心”に関係がある。

そして同じく“心”に深く関わっているあの世界……それはそこに居る人間により強く影響されているが、あの世界を徘徊する多くのシャドウ達は『特定の誰か』の“心”から生まれたという訳ではない。ならば《マヨナカテレビ》に映されているものも、『特定の誰か』の“心の中”という訳ではない可能性もある。

不特定多数の人間の、心。

多くの人間の、何かへの指向性を持つ共通する“心”が映っているという可能性は無いだろうか。

町中で話題になるという事は、多くの人から興味を持たれているという見方も出来る。

その《興味》が、より正確には《興味》の“対象”が《マヨナカテレビ》に映されているのだとしたら……。

……《マヨナカテレビ》に何を映すのか決めているのは、町に居る

極普通の人々……ここに居る自分たちを含めた、町の人間だ。

……だからあの『久慈川りせ』は実際の久慈川さんよりも胸が大きくなっていたのだろう。

人々が思い描く『久慈川りせ』がアレだったのだから。

【犯人】が何故『マヨナカテレビ』に映った人間をあの世界に放り込むのかは分からない。

だが、【犯人】が『マヨナカテレビ』で被害者を決めているのだとすれば……。

大雑把な意味で言えば、被害者を決めているのは、自分たち自身であるとも言えるのかもしれない。

この町の人間は、誰もが知らぬ内に被害者を指名してしまっていたのだ。

……明確な根拠の存在しない、ただの推論の域を出ない仮説に過ぎないから、まだ花村たちには言えないが……。

「……確かにな。」

例え『誰』の心が映ってるんだとしても、ソイツが被害者を放り込んだんじゃねーなら、犯人探しをしてたってしようがない」

溜め息を吐きながら言う花村の言葉に、皆が頷いた。

現段階で『マヨナカテレビ』に『久慈川りせ』が映し出された以上、【犯人】は既に動き出しているかもしれない。

今考えるべきはその犯行をどう防ぐか、である。

取り敢えず、張り込みをする事になった。



久慈川さんは基本的に丸久豆腐店の店番をしている様なので、店の近くで張り込みをする事にした。

あまりど真ん前で張り込みするのは流石にアレなので、丸久豆腐店の横の『四六商店』前に異くんと里中さんに天城さんが、豆腐店から

は少し離れた『四目内堂書店』前に自分と花村が陣取る。

【犯人】は犯行時にある程度以上の大きさの車を使つて移動している筈だ。

店の付近に停車する車だけに注目していればいいので、車を視認出来るのならある程度離れていても問題はない。

……問題なのは、今張り込みをしている時間帯に【犯人】が訪れてくれるかどうか、だ。

巽くんの時と同じく、ターゲットに【犯人】よりも先に接触出来た所で、自分たちの目が届く時間帯を外されて犯行に及ばれた場合はどうしようもない。

これが警察ならば、組織的に日夜の張り込みが出来るのかもしれないが………。

一学生の身である自分たちにはどうしたって限界がある。

まあ、一連の事件との関連性を疑っているかは分からないが、休業中の大人気アイドルである久慈川さんの身边には警察もそれなりに気を配ってはいる………と思いたい。

流石に日夜の張り込みなどはしてないだろうが、悪質なストーカー紛いのファン対策とかで警邏の強化とかはしている可能性はある。

「あれっ、悠希ちゃん?」

雑誌を立ち読みするフリをしながら豆腐屋の方へと気を配っていると、背後から聞き慣れた声をかけられたので振り返ると、そこには足立さんが居た。

今日は連日の野次馬たちも落ち着いてきたのか、パラパラとやって来る程度で、交通整理は必要ないだろう。

………付近の警邏にでも来たのだろうか?

「足立さん、今日は見回りとか聞き込みとかですか?」

「うん、まあそんなトコ。」

今からその豆腐屋に行かなきゃならなくてね」

「お疲れ様です」、と声を掛ける。

そして広げていた雑誌を棚に戻した。

どうせなら序でに一度久慈川さんの様子を直接確認してみた方が
良い。

「あれ、悠希ちゃんも豆腐屋行くの？ また買い物？」

足立さんに尋ねられ、違うと首を振った。

「いいえ。久慈川さんと少し会えたらな、と思ひまして。」

……昨日は人が多くて、立ち話とかは出来ませんでしたから」

「あつれ？ 悠希ちゃんも、『りせちー』とか気になる感じなんだ」

別に、芸能人だから興味がある訳でも無いが……。

まあ良いか。

そう思われていた方が、色々都合が良い。

「まあ、多少は。」

迷惑になる様な行為は慎みたいですが、折角の機会なので、話とか
はしてみたいです」

そう答えると、足立さんは少し考えて「まあ良いか」と呟いた。

そのまま花村と足立さんとの三人で、丸久さんへと向かう。

店の手前まで来たその時。

「……ちよつ、オイ、あれつて……」

花村がふと上を見上げ、そして絶句する。

花村の視線の先には、背にリュックを背負い双眼鏡とカメラを首か
ら下げた、見るからに不審者と言える男性が、電柱によじ登った状態
で、久慈川さんの家を覗きこむ様にしてカメラを構えていた。

彼は盗撮しているのか……？

……悪質なストーカー紛いのファン、なのだろうか。

流石に今の所大した手懸かりも残さずに犯行を遂げている【犯人】
が、こんな目立つバカみたいな行為に今更走るとは思えない……。

「だつ、誰だー！」

同じく花村につられて電柱を見上げていた足立さんが大声を上げ
ると、不審者は素早く滑り降りる様にして電柱から降り立ち、一目散
に逃げ出した。

「待ちやがれッ！」

花村が声を上げてその後を追う。

足立さんもそれに続いて不審者を追った。

里中さんたちも追いかけて様としたが、それは止める。

あの不審者は「犯人」とは無関係だからだ。

まあ盗撮は立派な犯罪行為であるのだが。

「あいつは「犯人」とは多分無関係のヤツだから、里中さんたちはこのままここで待機しておいて!!」

三人が頷いたのを見てから、花村たちの後を追った。

追い掛ける内に、幹線道路手前で車に行く手を阻まれて不審者は突如立ち止まる。

そしてこちららに向き直り冷静さを喪った震える声で、これ以上近付くと車道に飛び込むと脅しをかけてきた。

……こう言う自棄になった人間とは面倒なものである。

しかし万が一がある為、無視して取り押さえるのは不味いか……。

チラリと花村と目配せし合った。

「……その道路を走行する車の平均速度は大体時速50K m。

その速度で一般的な、車の前にボンネットがあるタイプの車に、人が衝突した場合に起こりうる現象は——……」

淡々と事故が起きた場合の一般的な現象を説明していくと、不審者の顔はあからさまに蒼くなっていく。

勢いで飛び込むと脅してみたものの、実際にその後になんかどうなるのかを説明されると、とてもではないがそんな積もりにはなれなくなったのだろう。

そしてその隙を突いた花村が、「あつ、りせちーだっ!!」と明後日の方向を指差した。

盗撮までする程のファンだったからか、不審者は見事にそれに釣られる。

そして、意識がこちらから逸れたその一瞬を狙って不審者の懐に飛び込み、胸ぐらを掴んで大外刈を掛けて引き倒してから崩壊装固めで不審者を逃げられない様に取り押さえた。

受け身が上手く取れなかったらしい不審者が痛みに呻いているが、頭は打ってないし加減はしたから大丈夫だろうと無視をする。

「足立さん、後はお願ひします」

具体的にこの不審者がどの様な罪に問われるのかまでは分からないが、少なくともストーカー紛いの覗きの現行犯である事には間違いない。

取り押さえる所までは一般市民でも可能だが、その後は速やかに警察……この場合は足立さんに引き渡さなければならぬだろう。

「きつ、君らね、善良な一市民にこんな乱暴なマネして……」

「いや、どー見てもあんた不審者だから」

不審者の発言に、花村が呆れた様にツツコミを入れ、自分もそれに頷く。

「善良な一市民は、電柱によじ登ってまで他人の部屋を盗撮しません」
「い、いやそれはその、僕あただ……、りせちーが好きで、部屋とか、ちよつと見てみたくて……」

「それで他人の家を盗撮するんですか？」

不審者の言い訳にそう尋ね返すと、不審者は言葉を失って黙る。

「不審者の確保に、ご協力感謝します！」

じゃ、後はこの僕が預かるからね。

さて、話は署で聞こうか……」

足立さんにそう言われ、不審者を解放する。

倒れこんだ不審者を立たせ、足立さんは神妙な顔付きになり、警察手帳を見せながら意識しているのか低い声で告げた。

そして直ぐ様表情を緩ませる。

「くー……この台詞、言ってみたかった！」

気持ちが分からない訳でも無いが、直後にそれを言ってしまったのは台無しだろう、色々。

不審者は警察手帳を見せられた段階でかなり動揺して視線を泳がせている。

「やつ、やめてくださいよお！」

僕がなにしたっていうんですかあ!?

し、知ってんだから！

日本には「盗撮罪」ってのはないんだ！」

「確かに、猥褻行為目的の「盗撮」では無いのかも知れませんが、あなたの行動は『ストーカー行為等の規制等に関する法律』……『ストーカー規制法』に引掛かっているんじゃないでしょうか。

尤も、ここから先は警察の領分なので。

何か言いたい事があるのなら、稲羽署の方でどうぞ」

自分の行為を犯罪では無いと喚く不審者にそう言つてやると、諦めたのか不審者は項垂れた。

そして、手錠を取り出した足立さんに「まだ（任意同行の範囲なので）早いのではないか？」と訊ねると、そうだった様で慌てて手錠を懐に仕舞う。

そして再度こちらに礼を言つて、足立さんは不審者を署の方へとつれて行ったのであった。



不審者との一連の騒動の後、豆腐屋を覗くと久慈川さんは何事も無く店番をしていた。

騒ぎに気付かなかったとは思えないが……まあ、手慣れているのかもしれない。

里中さんたちに確認を取った所、不審な車両が付近に停車するとう事もなく、あの不審者以外は今の所は特にこれと言つて怪しい動きをするものは無いそうだ。

……………。

……その後、暫くの間張り込みを続けていたが特に不審な車両や不審な人物が現れるという事もなく、日が暮れ始める頃合いでその日は切り上げる事になった。

一応、家が一番近い巽くんには出来れば豆腐屋を店仕舞いする迄は

久慈川さんが店番をしているか、解散後も何度か確認して貰える様に頼み、了承して貰っている。

……これで、何事も無ければ良いのだが……。

◇◇◇◇◇

その電話が巽くんから掛かってきたのは、夕飯の買い出しを終えて、家に帰りそろそろ調理を始めようかとしていた頃合いだった。

「先輩、りせのヤローの姿が見えねえっス。

つい30分くれえ前に店覗いた時には店番してたはずなんス。

何か、黙ってどつかに行つちまう事は偶にあるんだって、婆さんは言ってるんすけど……。

でも、このタイミングでって、やっぱり……。」

電話の向こうの巽くんの声は焦りを隠せない様子だ。

……今回も、「犯人」の犯行を許してしまったという可能性が高いのだから、当然か……。

しかも、今回は「犯人」よりも先に久慈川さんへ接触し警告する事が出来たというのに、今までと結果としては変わらない。

「……この時間じゃ、クマに確認を取りに行くのも難しい……。

今夜も《マヨナカテレビ》が映る条件は整っている。

……久慈川さんが、単に外出しているだけである事を祈りながら、今夜の《マヨナカテレビ》を確認しよう」

……もし久慈川さんが既にあの世界に放り込まれてしまっているも、前回巽くんを救出した時の様に、まず久慈川さんを特定出来る情報を集めなくてはならないのかも知れない。

……久慈川さんが、「犯人」の手にまだかかっている事を祈るしかない、か。

巽くんもそうするしかないのは分かっているので、素直に了承してそこで通話は切れた。

……花村たちにもこの旨をメールで知らせておこう。





時計が零時を指した瞬間、テレビが唐突に点った。

……《マヨナカテレビ》だ。

僅かに砂嵐が画面を走った後、それを拭い去る様に鮮明な映像が映った。

現れたのは、『久慈川さん（のシャドウ）』だ。

水着を着た姿で、ポーズをきめてウインクした顔がアップで画面に映し出されている。

『マルキュン！ りせチーズ！』

みなさーん、こんばんはー！

この春から華の女子高生アイドル、りせちーです！』

一度顔から外れた画面が、『久慈川さん（のシャドウ）』の太ももをアップして映し、次第に再び顔の方へと画面が動いていく。

『今回はですね、もうスゴい企画に挑戦しちゃいます！』

『久慈川さん（のシャドウ）』がそう言うと、カメラが『久慈川さん（のシャドウ）』からアップを外し、背後にあるミュージカルとかの劇場の様な《何か》を映し出した。

そして、急に屈む様な姿勢を取った『久慈川さん（のシャドウ）』の胸が強調されて映される。

『えつとね、この言葉、聞いたことあるかなあ？』

スウ・トオ・リイツ・ツプウー。

ん、もう、ほんとにいい？』

耳元で囁く様な言い方でそんなトンでもない事を宣った『久慈川さん（のシャドウ）』はガバツと体を起こした。

そしてそれと同時に、画面には……

【りせちー！見せちー！ チャレンジ企画】

《蒼い果実も一皮むけて！》

【見頃食べ頃お年頃!!】

と言う、やはり危険な方向性にブツ飛んだテロップが表示される。そのあまりのブツ飛び具合に何も言えずに唾然としてみると、『久慈川さん（のシャドウ）』は両頬に手を当て恥ずかしがるかのような仕草を見せ、そしてクルリと後ろを向いた。

『きやあ、恥ずかしー！』

つて言うか、女子高生が脱いじやうのつて、世の中の的にアリ!?』
アリじゃない。

全然、全くもつて、確実に、アリじゃない。

セウト所ではなく、完全にアウトだ、一発レッドカードだ。

そんな事を内心で全力でツツコンでいると、後ろを向いていた『久慈川さん（のシャドウ）』がクルリと画面に向き直った。

『でもね、やるからには、どくんと体当たりで、まるつと脱いじやおっかなつて思いますっ！』

きやはっ、おっ楽しみにー！』

太もも・腰・腹・胸、と順に強調する様にアップされて映した後、顔をアップされた『久慈川さん（のシャドウ）』は画面に向かって投げキッスをして、そしてそこで今晚の《マヨナカテレビ》は終わった。
……………これはヤバいな、色々。



【2011/06/24】

翌朝、学校にやって来た花村は興奮しっぱなしだった。

お年頃の青少年には『ストリップ』という単語は、心を捕らえて離

さないものなのだろう。

まあその辺りは兎も角として、あの《マヨナカテレビ》の久慈川さんはやはり『シャドウ』なのだろう。

巽くんが出掛けに丸久さんを覗いてみた所、久慈川さんの姿は見えなかった様だし、警察が何やら尋ねてきていたそうだ。

捜索願いが出されたのかもしれない。

何はともあれ、久慈川さんが行方不明になっているのは事実の様である。

【犯人】の手によってあちらの世界に既に放り込まれた可能性が高い。放課後、早速クマに確認を取る事にしよう。

しかしそれよりも気になるのは、あの後巽くんが丸久さんに不審車両を見掛けなかったか訊ねた所、その様なモノは見えていないと答えた事だ。

勿論、単純に丸久さんが目撃し損ねたという可能性はあるだろう。

だが、もう一つある可能性としては、丸久さんがその車を“不審車両”と認識しなかったという場合も考えられる。

例えば、豆腐の材料の大豆等を卸している店のトラックなどは、それが停まる事は“日常”の風景である為、それを“不審車両”とは考えないだろう。

そういった、日常的に停まっても不自然はない車両を、【犯人】は犯行時に用いているのではないだろうか。

問題はそれが何であるのかだ。

それさえ分かれば、【犯人】へと大いに近づく事は間違いない。

【犯人】は、家に訪れても不自然ではなく、警戒心を抱き辛い相手。犯行時に用いているのは、家の前に停まっても不自然ではない大型の車……。

順当に考えれば出入りしている業者などが考え付く。

奇しくも天城さん、巽くん、久慈川さん、そして……亡くなった小西先輩の家はそういう業者が出入りしてもおかしくはない。

顔見知りの業者相手なら、家を訪問された所で特に不審には感じないだろう。

……その場合、天城屋旅館に宿泊中であつたであろう山野アナの件は若干事情は異なるだろうが。

まあ、それにした所で天城屋旅館に出入り可能な業者だったのなら犯行は可能だ。

しかし、三人……いや、四人の家に共通する業者などあるのだろうか……。

今度時間がある時にでも、天城さんと巽くんに訊ねてみる事にしよう。



……
……
……
……

何時もの広場の様な場所に出ると。

……？ ……何故かクマがいじけた様に隅の方で後ろを向いて俯いていた。

「どうしたんだよ、クマ」

花村がそう声をかけても、クマはその質問には答えずにポツリといじけた様に呟く。

「クマ、泣いてないよ」

クマが何が言いたいのかわからず、皆して頭に『？』マークを浮かべている様な顔になった。

「みんな、クマの事忘れて楽しそうに……。

クマ、見捨てられた……」

「あっ」とそこで全員がここ最近は全くクマに会いに来ていなかった事に気が付いてばつが悪そうに少し目を泳がせる。

「そ、そんな事あるワケないじゃん！」

「ごめんね、ココ最近はこっち来てなかったから、寂しかったんだよね」

里中さんと天城さんの言葉に、クマは益々気落ちした様な声で返してきた。

「ダイクツでヒクツしてたクマ。」

どーセクマは、自分が何なのかも知らんダメな子クマ。

答え見付からないし、みんなは来ないし……。

……そっちの世界の楽しそうな声まで聞こえた気がして……。

寂しくて泣いてみようと思っただけど、ムリだったクマ……」

「まあ、中空っぽだしな……」

クマの言葉に花村が小さく呟くと、それを耳聴く聞き付けたクマがその言葉に噛み付く。

「カラッポカラッポって、煩いクマ!」

「そんな煩くは言ってるねーし!」

大体、ココがお前の現実なんだから!?

お前がココで静かに暮らしてーつつから、【犯人】探しする約束したんじゃないか!」

……元々は確かにそう約束した。

しかし、心境の変化と言うのは誰にだってあるものだ。

他者を知る内に、『静かにこの世界で暮らしたい』というクマの望みも、変化していったのかもしれない。

「まーまー、クマくんも考え過ぎで疲れちゃったんだよ、ね?」

言い合うクマと花村を里中さんがそう取り成すと、クマは寂しそうに俯いた。

「独りだと色々考えちゃって、寂しさ倍増中クマ……」。

みんながいないと寂しくて切なくて……、胸が張り裂けて綿毛が飛び出しそうクマよ……」

綿毛……、比喻表現ではなくそれは物理的に裂けているのでは……。

落ち込むクマを励ます様に里中さんと天城さんが優しく撫でると、少し気持ちが上向きになったのか、「いつか逆ナンしてもいい？」と浮かない顔ながらも二人に尋ねた。

里中さんは頷いたが、天城さんは浮かない顔だ。

『逆ナン』ネタはもう止めて欲しいのだろう。

「あー、それよか確めてー事あるんだよ！

今、こっちどーなってる？

『久慈川りせ』って女の子、こっち来てるっぽいんだけど、何か分からない？」

『クジカワリセ』……？

んむむ……？」

花村に訊ねられたクマは、キョトンとした顔をした後、少し難しい顔をして唸る。

……個人の判別を抜きにして、誰かがこの世界に放り込まれたかどうか、クマにも分からなくなってきたのだろうか。

……それはかなり不味い事態だ。

被害者の位置処か、本当にこちらに放り込まれたかすらも分からないのは、救出に向かう以前の問題になってしまう。

「……もしかして、分かんないのか……？」

……何かお前の鼻、段々鈍くなってきたくない？」

花村もそう思ったのか、不安気にそうクマに尋ねると、クマは沈みこむ様に暗い顔をして落ち込んだ。

「……クマは何やってもダメなクマチャンね……」。

誰かが居る様な気がするけど……、詳しい事は分かんないクマ……。

このまま、みんなの役に立てなくなったら、クマ、……きつと捨てられちゃうんだクマ……」

役に立たなくなれば捨てる……？

そんな事は有り得ない。

クマは仲間だ。

それに、クマが居てくれたからこそ、天城さんと巽くんを助ける事

が出来たのだ。

それを、少しクマが不調だからなんて理由で役立たずと断じて捨てるなど、論外だ。

そんな事をする人間に思われているのなら、心外だと抗議したい。

「そんな事無い。」

役に立つ立たないは問題じゃないよ。

クマは、私たちの仲間だ。

何があっても、クマを捨てたりなんかしない」

「クマ……みんなと一緒に居てもいいの……？」

クマの言葉に、全員が「勿論」と頷いた。

「よっし、じゃあ完二くん時みたいに、何か手掛かりになるの探してくるよ」

クマを励ます様に、明るい笑顔で里中さんはそう言う。

「うん、きつともつとその『クジカワリセ』ちゃんの事が分かったら、前みたいに場所も分かると思うクマ」

そうと決まれば情報収集だ。

今日一日は情報収集に当てて、有力な情報が集まれば明日に再び久慈川さんの居場所を探す、という段取りとなる。

丸久さんへは、常連客であり顔見知りである事から自分が担当する事になった。

花村と里中さんは主に学校を、天城さんは旅館周辺を重点的に、異くんは商店街の辺りをと、それぞれ情報収集する場所を分担する。

早速行こうと、皆が出口のテレビを潜ろうとした時、クマがこちらを呼び止めた。

皆には先に戻って情報収集を始めて貰う事にしてから、クマに向き直る。

クマは、どう言葉にするかを迷っているかの様な表情をしながら、ポツリポツリと話し始めた。

「センセ……」

クマ……色んな事が、分からんクマ……。

どうしたら良いのかも、分からんクマ……」

クマが様々な事に迷っているのは薄々察していたが……。

その悩みは、どうやら想定していたよりも大分深刻なものの様だ。しかし、それも仕方無い事ではあるかもしれない。

『己』とは《何》であるのか……………。

それは、それを意識していなければどうと言う事も無い問題なのかも知れないが、一度それを意識すると、途端に意識の大半を割かねばならなくなる程の《謎》である。

明確で絶対的な答えなど存在しようが無いと言うのにも関わらず、自らの存在に深く関わる《謎》であるだけに、あやふやで不確かなそれを定義しようと、多くの偉大なる先人たちが挑んできた。

自分たちだって、その《謎》の答えを見付けようとしている最中とも言える。

己の『シャドウ』に向き合うと言う事は、『己』が何者であるのかと問う事にも繋がるからだ。

そんな中クマは、自分以外の他者が(クマが認知している限りでは)存在しないこの世界で、『己』を問う事もなく生きていたのだろう。

他者なくしては、ある意味『己』という明確な区分は存在し得ないのだから、一々問う必要性も無かったと言うのが正しいかもしれない。

しかし、『犯人』を追う中で……、他者と関わっていく中で、初めて『己』と言うものを意識したのだろう。

そして、意識して考えたが故に分からなくなった、と。

「……なら、クマが探しているその答えを、私もクマと一緒に探している。」

ゆっくりでも焦らずにいけば、きっと何時か答えは見付かるさ」人は他者の存在無しに『己』とは成れない。

意識し認識しなくては、それは存在しないものと同義であるからだ。

自己とは異なる他者が存在するからこそ、『己』を定める事が可能となる。

だが他者ありきの『己』であれど、『己』を定めるのは自分自身……。

クマが探し求めている『答え』とは、クマが自分で見出ださなくてはならないモノである。

しかし、その答えを共に考え・共に悩む他者が居たって良いだろう。

「……ありがとうクマ。

センセイは優しいクマね……。

クマ、もっと頑張るクマよ……。」

少し元気が出たのか、そう言って微笑むクマを後に残し、テレビの向こうへと帰還した。

……

……

……

……

▲▼▲▼▲▼

久慈川さんの話を聞くなれば、やはり丸久さんが一番だろう。

豆腐屋を訪れると、何時もの様に丸久さんが店番をしていたが、その顔はやや曇っている。

行方の分からない久慈川さんが心配なのだろう。

買い物序でを装って、久慈川さんについて訊ねた。

アイドルとしてデビューしてからは、休業してこちらに来るまでは、あまり稲羽に帰って来なかつたらしいので、より詳しいと思われるデビュー前の久慈川さんについてを重点的に訊ねる。

久慈川さんは、どちらかと言えば大人しいタイプの女の子であった様だ。

少なくとも、アイドル『りせちー』として売り出しているキャラクター付けとは全く違うのは確かなのだろう。

どうやら、アイドルデビューした切っ掛けは、友人がオーデイション

ンに書類を送った事によるものらしい。

その辺りの詳しい経緯は分からなかったが……。

……まあ、兎も角、久慈川さんが抑圧しているモノとは、アイドル関連であるのはやはり確かなのだろう。

だが、昨晚の《マヨナカテレビ》を思い起こしてみれば、『シャドウ』は自らをアイドル『久慈川りせ』だと名乗っていた。

“アイドル”である事自体に抑圧があったのなら、『シャドウ』が“アイドル”を名乗る事は無かつただろう。

……“アイドル”である事に関連する悩みであるが、“アイドル”である事自体が悩みなのではない……。

……流石にこれだけでは漠然とし過ぎているだろう。

次に『シャドウ』が見せたあの《マヨナカテレビ》から考える。

あの《マヨナカテレビ》では“ストリップ”を主張していた。

内容が過激極まりないがそれは脇に置いておくとして、“ストリップ”から連想されるものを考える。

……脱衣……裸、露出させる……晒け出す……。

……この辺りだろうか。

流石に、“脱衣したい・裸になりたい”という抑圧では無いだろう……、恐らくは。

ならば、更にそこから連想させて、“身一つの己になりたい”“ありのままの己でありたい”……そんな所なのだろうか。

それにアイドル関連の抑圧と考えると、“アイドルとして作られた《己》ではなく、ありのままの《己》でありたい”……か？

……どうであるにせよ、結論付けるにはまだ早い。

みんなの首尾は如何程だろうかと、一度連絡を取り合うと、校内で情報収集に励んでいた里中さんが『りせちー』の熱心なファンを自称する生徒から、『久慈川さんは休業前に“悩み”がある、とブログに書いていた』という情報を手に入れていた。

更に、どうやら久慈川さん狙いのパラッチが付近に出没しているらしいとの情報を得た花村は、そのパラッチから情報を得るべく現在町を捜索中であるらしい。

巽くと天城さんにも、もしパラツチらしき人物を見掛けたら情報収集を行う様に頼んでおく。

……しかし、アイドルに関連する悩み……か。

久慈川さん本人とは全く違うキャラ付けをされている『りせちー』に疲れた……というのには有りそうだが、もしそうならば『シャドウ』が自らをアイドルとは名乗らないだろう。

勿論、キャラが違うというのが悩みに関連している可能性は高いが……、それだけでは無さそうだ。

……アイドルデビューする迄の経緯をもっと詳しく調べられたら良かったのかも知れないが……流石に難しいだろう。

アイドルデビューした頃は、久慈川さんは既に稲羽を離れていて、丸久さんもその辺りはあまり詳しくなさそうだったし……。

……困ったものだ……。

そう内心で嘆息しつつ鮫川の堤防を歩いていると、思わぬ人物に出会った。

……以前、巽くんについての情報を集めている時に出会った、白鐘くんだ。

今日はあのネイビーのコートではなく、鮮やかな青いシャツに黄色のネクタイを締めているが、あのキャスケット帽は相変わらずに被っている。

……どうしたのだろう。

また、調べものなのだろうか。

「どうも、また会いましたね」

白鐘くんが先に軽く会釈をしてくれたので、それに会釈を返す。

「また、何かの調べもの？」

「ええ、そんな所です」

そう言つて白鐘くんはこちらを鋭い眼差しで見ってくる。

「所で、鳴上さんはご存知ですか？」

今、久慈川りせさんが行方不明になっていると言う事を「

……成る程、久慈川さん関連か……。

ならば、下手に誤魔化しや嘘を吐くのは良くはない。

だから素直に頷いた。

「まあね。」

丸久さんに寄った時に。

……白鐘くんは、久慈川さんの事を捜しているのかな？」

そう訊ねると、白鐘くんは頷いてから帽子の鍔を下ろし、こちらを見透かす様な目で見てくる。

「そんな所です。」

……以前、同じ様に巽くんの行方が分からなくなった後、発見された後の巽くんは何故かあなた達と行動を共にしている。

それはその前に起きていた天城雪子さんの件の時も同様に。

……あなたは、最近起きている失踪事件について、何か知ってらっしゃるんじゃないですか？」

……天城さんの件も知っていたのか。

……まあ、知っていると言えば知っているが、流石にそれを言う事は出来ない。

「いや、詳しい事は分からないよ。」

それに、天城さんと親しくなったのはクラスメイトだからだし、巽くんとは偶々手芸を教えて貰う仲になったからだね」

そう答えると、白鐘くんは全く納得していない様な、疑いを深くした目でこちらを見てきたが、こちらがもうこれ以上話すつもりが無い事を悟ったのか、白鐘くんは引き下がる。

「……そうですか」

そしてそのまま、白鐘くんはその場を立ち去ったのだった。



家に帰り、再び皆と情報を交換すると、どうやらあの後パラッチは無事に発見したらしい。

なお、発見者は巽くんだった様だ。

巽くんがそのまま尋ねると無駄に威圧してしまうかもしれないから、実際にパパラッチから情報を入手したのは連絡を受けて駆け付けた花村だった様だが。

パパラッチによると、久慈川さんの休業の理由とは………アイドルとしてキャラ付けされたそのキャラクターと実際の自分との齟齬に苦しんでいたからだというのが、パパラッチ界限での見解なんだろうだ。

……アイドルとしてのキャラが、抑圧に関わっているのはかなり可能性が高まった。

それそのものが抑圧になっているのかは分からないが、少なくともその一因ではある筈だ。

一先ず、明日この情報を持ってクマの所へ行くでしょう。

情報収集に協力してくれた事に礼を言って、その日は明日に備えて早めに眠る事にした。



【2011／06／25】



【2011／06／25】

.....

.....

.....

.....

今日は土曜日なので昼からは放課後だ。

激しい雷雨が降り頻る中、各自準備を整えてから、直ぐ様ジュネスに集合してテレビの向こうへと向かった。

そして、そこで待っていたクマに、久慈川さんについて分かった限りの事を伝える。

「なるほど……クマと同じね。

繊細でセンチメンタルなタイプね。

ムムムムム……。

おおっ、コレクマか？

見付けた？ クマ見付けちゃった!?

こっちクマよ!」

どうやら、あれだけしかない情報でもクマは久慈川さんの特定に成功したらしい。

クマに案内されて辿り着いたその場所は……。

……異様に暗い、というか真っ暗だ。

足元が覚束無い程である。

「何……真っ暗じゃん」

里中さんがそうボヤいた瞬間、一斉に明かりが灯されたのか、視界が真白に染まった。

急な明暗の変化に思わず目を瞑り、少しして明かりに目が慣れてからソロソロと目を開けると……。

……そこには、《マヨナカテレビ》に映っていた、劇場の様な場所が広がっていた。

しかし、妙に怪しいというか如何わしさが漂っている気がする。

眩しい程の光源に照らされ、緞帳の様に厚いカーテンにはハートマーク様の模様が乱舞し、派手な真っ赤な革貼りのソファと木製のテーブルが立ち並び、ステージの奥からはスモークの様な霧がモワモワと漂ってきていて……何とも妖しい。

「ここに久慈川さんが……？」

「そークマ！ クマの鼻がビンビン反応してるクマよ！」

思わず眩いた言葉に、クマは胸を張って答えてみせた。

花村たちはと言うと、如何わしい妖しさを漂わせるこの場所に戸惑っている様な顔で視線を忙しく動かしている。

「……これって、温泉街には付き物のアレ!？」

暫しの沈黙の後、花村がそう声を上げた。

花村の言う通りこの場所には、温泉街で見掛ける如何わしい店の雰囲気は確かに漂っている……。

天城さんもそれを肯定したが、天城屋旅館の周辺には無いよ、と慌てて補足を入れた。

「ストリップ……てやつっすか」

巽くんの眩きを拾ったクマが、何故かドヤ顔をする。

「はっはーん！」

読めたクマよ……シマシマのやつクマね!？」

「……それは、『ストライプ』、だね」

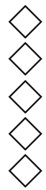
「ストリップって……シマシマのやつクマね!？」

訂正しても、クマはしつこく繰り返す。

……どうやら、わざとボケているつもりらしい。

しかし、ツツコミを貰いたいのならそんなボケでは甘い。

結局、全員に無視されたクマが先に折れた。



劇場の内部は、息苦しくなる程ピンクや紫色の内装で、目が痛くなる程眩しくライトアップされた場所と全く光の当たらない薄暗い場所がある等、照明が偏り過ぎているのも見ている辛い。

やや狭い通路は、幾つもの分岐路を出しながら緩やかにクネクネと曲がっていて、視覚的な変化に乏しいのも相俟って、ともすれば方向感覚を喪ってしまいそうにもなる。

巽くんの大浴場も長居はしたくない場所であったが、ここはそれとは異なる理由で長居したくない。

「つーかさ、《マヨナカテレビ》……どんどんヤバイ内容になってっつねーか」

微妙に薄暗い通路に注意しながら先を急いでいると、不意に花村がそう溢した。

その言葉に足を止めず頷いて、肯定を示す。

「確かに、過激さが増していつてるな。」

それだけ抑圧が大きかったという事なのかも知れないが……」

……しかし、果たしてそれだけが原因なのだろうか。

あの『シャドウ』が映らない《マヨナカテレビ》を映し出しているのが、不特定多数の人間の心なのだとしたら、『シャドウ』が作り出した《マヨナカテレビ》だって、不特定多数の人間の心の影響が無いとは言いい切れない。

ただでさえ、《マヨナカテレビ》が胸やら太ももやらをやたら強調する映像となっていただけに、その可能性は否めないだろう。

「脱ぐとかシャレになんないし、早く助けてあげなきゃー！」

里中さんが気合いを入れる様に上げたその声に全員で頷く。

兎も角も、どんな経緯があったのだとすれども。

幾ら『シャドウ』の暴走とは言ってもこのままストリップなどを敢行させる訳にはいかない。

そんな事をして一番傷付くのは、久慈川さん自身なのだから。そう思いを強くして先を急いでいると、行く手にシャドウが立ち塞がった。

以前雨の日の大浴場で戦った『霧雨兄弟』と全く同じ様な外見で、ここに付いている仮面だけが異なるシャドウと、それとは別のまるで巨大な彫刻の様なシャドウだ。

内訳としては各々が三体ずつ立ち塞がっている。

通路は狭く、シャドウを倒して行くしか先に進む術は無さそうだ。

「その彫刻みたいなシャドウは『生成の彫像』、アルカナは《女帝》！霧の塊みみたいなシャドウは『霧雨の三女』、アルカナはこっちも《女帝》クマー!!」

以前大浴場で戦った『霧雨兄弟』は氷結の魔法以外の全ての属性攻撃を無効化・吸収する厄介な相手だった。

この『霧雨の三女』が氷結属性を弱点としているのかは分からないが、それでも単一属性のみを弱点としている可能性は大いに有り得る。

ここは『霧雨の三女』を、ペルソナを切り換える事によって全属性で攻撃が可能な自分が引き受けるのがベストだろう。

「私が『霧雨の三女』を引き受ける！」

皆は『生成の彫像』の相手を！

見るからに固そうな相手だ、もしかしたら物理攻撃はあまり効果が無いかもしれない！

魔法で攻撃する事も念頭に置いて相手をしてくれ！」

四人が領いて『生成の彫像』を引き受けてくれたのを確認してから、『霧雨の三女』へと対峙する。

取り敢えずは以前出会った『霧雨兄弟』にも有効だった氷結属性を試してみた方が良いだろう。

万が一反射された場合の事を考えて、氷結属性を無効化する耐性を持っている《節制》アルカナの『ゲンブ』へとペルソナを切り換えて召喚する。

「ゲンブ、《マハブフーラ》！」

ゲンブがその力を奮い、猛吹雪が『霧雨の三女』たちを呑み込んだ。その途端、『霧雨の三女』を構成するスモッグの様な霧は圧倒的な冷気によって瞬時に凍てつき、『霧雨の三女』たちは床へと叩き付けられる様に落下し、その仮面が砕けると共に塵へと還っていくのだった。『生成の彫像』の方も、どうやら電撃属性が弱点だったらしく、巽くんの活躍により殲滅に成功した様だ。

特にこれといった負傷等の問題は無さそうなので、先を急ぐ事にしよう。

その後もゴムで出来た二本鎖DNAを模したかの様な棒人間モードのシャドウや、社交ダンスでも踊っているかの様なシャドウ、岩の様なシャドウ、カラスの様なシャドウ、目玉が宙に浮かぶ頭だけのシャドウなどにも遭遇したが、時に物理攻撃でそのまま押し通ったり、ハマ・ムドなどの即死魔法で蹴散らしたりしつつ、一気に三層目まで駆け抜けた。



三層目に到達した時……、久慈川さんらしき人影を見付けた。

……しかし、その格好から察するに、久慈川さん本人では無く、久慈川さんの『シャドウ』の方だ。

広場の様な場所できると此方を振り返ったその瞳は、『シャドウ』である事を表すかの様に金色に妖しく輝いている。

『ファンのみんな〜！』

来てくれて、ありがと〜お！』

まるでコンサート会場か何かでファンに声を掛ける様な調子で、『シャドウ』はこの場には居ないファンに語り掛けた。

『今日はりせの全てを見せちゃうよ〜！』

……ええ？ どうせウソだろって？

アハハ、おーけーおーけー！』

そう笑顔で話す『シャドウ』だが、その目は妖しい光を湛えている。そして、スルリとビキニのヒモに手を掛けかけたが、寸前でその手を止めた。

『なら……で……、あ、でもここじゃスモーク焚きすぎで見えないかな？』

じゃあもう少し奥で、ウソじゃないって、ちゃんんと証明したげるネ!!』

その言葉と共に、

【マルキュン真夏の夢特番！

丸ごと一本、りせちー特出しSP!】

と言うテロップが『シャドウ』の背後に浮かぶ……。

……異くんの時も思ったが、どういう仕組みなのだろうか。

テロップが現れた瞬間、シャドウの騒めきが途端に激しくなる。

最早耳を塞ぎたくなる位だ。

この時間に《マヨナカテレビ》は映らない。

この場に『久慈川りせ』のファンは……まあ花村はその様ではあるが、少なくとも『ファン』として今この場に居る人間は居ない。

しかし、ここがああ《マヨナカテレビ》と同じく不特定多数の人間の心の影響も受けている場所なのだとすれば、今この瞬間も、不特定多数の誰かが、意識に上らせているかどうかは兎も角として、『久慈川りせ』に興味を抱いていると言う事なのかも知れない。

『シャドウ』が語り掛ける『ファン』とやらは、そう言う人間の事を指しているのだろうか。

『じゃあ、ファンのみんな！

チャンネルはそのまま！

ホントの私……よく見てね！ マルキュン!』

とキメ台詞の様な何かを言うなり、『シャドウ』は奥へと駆け去ってしまう。

「……待ってっ!」

……ダメだ、反応しない……。

とにかく、あの『シャドウ』を追わないと!」

「だな。ストリップなんて、イタイ話聞かれるだけなのとは訳が違
うって！」

この世界で『シャドウ』がやらかした事が、あちらの世界にどう影
響するのは分からないが、どうであれストリップなどは喪うモノ
が大き過ぎる……。

兎も角追うしかない、と駆け出したそこへ。

行く手を塞ぐ様に、車か何かの車輪にライオンの頭が付いた様な姿
のシャドウが8体も現れる。

そのシャドウに阻まれて足を止めた僅かな間に、『シャドウ』はス
モークの向こうへと姿を消し、完全に見失ってしまった。

「ムムムツ、コイツらは『雨脚の滑車』！」

アルカナは《戦車》クマ!!」

……雨、か。

コイツらも雨の日にはか現れない珍しいシャドウなのか……？

だとすると、特定の属性しか効かないか、厄介な状態異常にしてく
る攻撃を仕掛けてくるのかもしれない。

どちらにせよ、心してかからなくては……。

そう思ったその時、『雨脚の滑車』たちはまるで中空を滑走するかの
様にこちらに一斉に突撃してくる。

「全員、回避!!」

瞬間的な判断で、降魔中だった《太陽》アルカナの『ヤタガラス』を
召喚して《マハスクカジャ》で全員の回避能力を引き上げた。

『雨脚の滑車』たちが一気にトップスピードで突っ込んでくるその勢
いは、まるで高速道路を走行するダンプカーの様だ。

『雨脚の滑車』の大きさ自体は2メートル弱だろうが、その大きさのモ
ノがそんな勢いで激突したらタダでは済まない。

防御に徹していても、弾き飛ばされ、そこを後続の『雨脚の滑車』に
襲われるだけだ。

咄嗟の判断で、しかもギリギリでの回避指示だったが、皆は半ば反
射的にか回避に成功する。

そして、『雨脚の滑車』たちがUターンしようとするそこを狙って、

ヤタガラスが《マハガル》を叩き付けるが。

「チツ、疾風属性は吸収するのか……!」

叩き付けられた烈風を『雨脚の滑車』は全く意に介する事なく、寧ろよりその勢いを増した。

厄介な事に、単一属性のみが弱点のタイプの可能性が高い。

ここは如何なる耐性をも無効化してダメージを与える、《メギド》で振り払うべきなのだろうか。

「なら、これでどうだっ!」

その時、花村が手にしていた山刀を勢いよく振りかぶってから、『雨脚の滑車』へ向けて投擲した。

ジライヤの力で風を巻き込みながら、山刀は深く『雨脚の滑車』に突き刺さったのだが、『雨脚の滑車』は一向に意に介さずに、寧ろ心地良さげに唸る。

「物理無効……、いや、吸収か……?」

ともかく、物理と疾風は効かないみたいだ!

このままでは再度の突進を許してしまう。

先ずは『雨脚の滑車』の動きを止めなくてはならない。

ペルソナをヤタガラスから、《月》アルカナの『アルウラネ』へと切り換えた。

「アルウラネ、《オールド・ワン》!」

相手を老化させる光が『雨脚の滑車』たちを包み込む。

途端に『雨脚の滑車』たちは精彩を失い、明後日の方向へと向かうとするものも出てくる。

これで一先ず突進を封じた。

後は弱点を突くなり、万能属性で薙ぎ払うか、だ。

「あーっ、もう、しやらクセエ! これ、どうだ!!」

若干苛立った様な声を上げ、翼くんが呼び出したタケミカヅチが雷を『雨脚の滑車』へと落とす。

途端に、まるで融けたかの様にあっさりと『雨脚の滑車』は塵へと還った。

どうやら電撃属性が弱点だった様だ。

それを見てペルソナを《正義》アルカナの『ドミニオン』へと切り換える。

「ナイスだ、異くん！ 薙ぎ払え、ドミニオン!!」

ドミニオンが手にした秤を掲げると、『雨脚の滑車』たちを雷撃が一瞬で飲み込み、塵すら残さず消滅させた。



『シャドウ』の姿を追いつつ、久慈川さんを捜して5階へと踏み込んだ。

『あれー!? こんなトコまで来るなんて、りせのファンの人?』

途端に、何処からともなく久慈川さんの……いや、『シャドウ』の声が降ってくる。

『りせちー、超うれしー!』

せっかく来てくれたんだからあ、特別にサービスしちゃおっかなあ……』

どう考えてもロクなモノではないだろうサービスなど不要だ。

要らない。

熨斗を付けてお返ししたい。

そんな心境を察しているのか否かは分からないが、『シャドウ』はこちらの反応に構う事なく捲し立てる。

『……でも、ここじゃダメ!』

りせちーに、あなたの頑張りをもうちよつと見せてほしいな!

待ってるからね!』

そう一方的に言い捨てて、声はすっかり止んだ。

……『りせちー』、か。

……『シャドウ』はやはりアイドルである事自体は否定していない様に感じる。

では、あの『シャドウ』は一体何を抑圧して生まれたものなのだろう

う。

……今はとにかく、先に進むしかない、か。

フロアを進み、6階へと繋がる階段を発見したその時。

サイコロの様なシャドウがゴロゴロと降ってきた。

2つの正六面体で1つのシャドウとなしているそのシャドウ計三
体は、行く手を阻むかの如く中空に浮かぶ。

「コイツらは『シルバーダイス』！」

アルカナは《運命》クマ！」

そのものズバリな名前のシャドウは、特にこちらに襲いかかる様子
もなく浮かんでいる。

……何のつもりなのだろうか？

そう首を傾げそうになったその時、耳が微かな……まるで時計の秒
針が立てているかの様な音を拾う。

まさか、と思いながらも、半ばその直感に突き動かされる様に《女
帝》アルカナの『ガブリエル』を召喚し、《マハガルーラ》で『シルバ
ーダイス』の集団を出来るだけ遠くへと吹き飛ばした。

叩き付けられた突風によりゴロゴロと転がっていく『シルバーダイ
ス』たちからは次第に大きくなっていく秒針の音が絶えず洩れてい
る。

そして、その音が止まった瞬間。

カッ——、と眩しい光を放った『シルバーダイス』たちは爆発四散
し、爆発が起きた辺りの炭化した床には僅かな金属片のみが残り、そ
してそれも直ぐ様塵へと還っていった。

「うつわ……、自爆かよ」

巽くんは微かに呻きながら呟く。

「あの爆発に巻き込まれていたら大惨事だったな。

今後、あのシャドウを見掛けたら自爆されない様に注意しなくては
……」

あの爆発は所謂万能属性……どんな耐性をも無効とする攻撃だ。
食らえばタダでは済まないだろう。

今後、シャドウとの乱戦中などに『シルバーダイス』が紛れ込んで

ないかどうか、警戒しなくてはならない。

……今は先へ進もう。



6階はこれと言って問題はなく踏破する事が出来た。

『雨脚の武者』と言う、《剛毅》のアルカナに属する、雨の日のみに活動すると思わしきシャドウと切り結んだりもしたのだが、物理攻撃が通用する相手ならば早々手こずる事は無い。

皆と連絡して素早く沈める事が出来たのであった。

そして7階に到着したその時、また何処からともなく『シャドウ』の声が降ってくる。

『うれしい！ ホントに来てくれたんだ！』

でも、やつぱりちよつと恥ずかしいからあ……電気、消すね！』

その途端、フロアの照明が一齐に消え、辺りは真っ暗闇へと変わる。急激な明暗差に狼狽える皆を落ち着かせた。

一度目を閉じ、暗闇に馴れた頃合いでもう一度目を開けると、僅かながら先が見える。

光源が全く消えた訳ではなく、僅かながらも豆電球の様な照明は生きている様だ。

しかしこれでは足元すらも覚束無いし、敵襲に気付けなくなる怖れもある。

カバンから常備しているペンライトを取り出して、それを灯した。

この暗闇の中では頼り無いが、無いよりはマシだ。

そして、皆には携帯画面の明かりで足元を照らす様に指示をした。

電波が通っていない為、この世界では無用の長物と化している携帯だが、光源としてはまあ悪くはないだろう。

花村たちは指示に従って携帯で足元とその周囲を照らし始める。

これで僅かながらも視界は確保出来た。

先頭を自分が、殿を花村に任せ、左右は里中さんと巽くん任せ、真ん中に回復役の天城さんと打たれ弱くシャドウへの抵抗手段の無いクマ、という陣形を組んで先へと進む。

この暗闇の中では戦闘になるのは非常に不味い。

その為極力戦闘は避けて行く事になる。

戦闘を避けながら道なりに沿って進んで行くと、大きなカーテンで仕切られた部屋の前へと辿り着いた。

『いいよ。りせ、心の準備はできてるから……』

カーテンに手を掛けると、カーテンの向こうからそんな『シャドウ』の声が聞こえる。

……この向こうに『シャドウ』が居るのは間違いない様だ。

準備は良いか、と後ろを振り返ると、全員が頷く。

それを確認してから一気にカーテンを開け、部屋の中へと雪崩れ込んだ。

暗い部屋の中央には、『シャドウ』と思わしき人影が佇んでいた。

『りせ、初めてなの……やさしくしてね？』

じゃあ、電気つけるよ?』

その言葉に嫌な予感を覚え、瞬間的に目を瞑る。

そしてその瞬間、照明が一斉に点いたのか、部屋が一気に眩しくなったのを、閉じた瞼の裏で感じた。

花村たちは突然の明暗差に声を上げつつ目を瞑ったり、顔を覆ったりしている様だ。

みんなよりも少し早く明るさに順応した為目を開けると、そこには。

確かにそこに居た筈の『シャドウ』の姿は無く、代わりに見上げる程巨大な純白の大蛇が、その身を妖しく踊らせていたのであった。

女性・男性を表すマークを象徴的に身に付けたシャドウは、鎌首をもたげてその口を大きく広げて、濁った吐息を辺りに撒き散らす。

毒を疑い、咄嗟にハンカチで口元を覆うも、体にこれと言った異常は無い。

「コイツは《恋愛》アルカナの『淫欲の蛇』クマ！」

今のこの場では状態異常になり易くなってるクマ！

気を付けるクマよ!!」

クマに警告され、先程の攻撃の正体を認識した。

どうやらこの蛇型シャドウは状態異常の成功率を上げてから状態異常攻撃を仕掛けてくるタイプの様だ。

蛇の外見からしてその状態異常とは毒だろうか。

何にせよ、シャドウの動きには注視しなくてはならない。

様子見で投げ付けたシャーペン、引つ掻き傷の様なものを僅かながらも蛇の鱗に残す。

どうやら物理攻撃は通用する様だ。

ならば、属性攻撃への耐性を調べるのみ。

皆には一旦威力を弱めた魔法で様子見をする様に指示を飛ばした。

各々のペルソナは、各自が得意とする属性攻撃には耐性を持つ。

弱めた魔法ならば、万が一反射され様とも大事には至らない。

「ディースー！」

皆が耐性を調べている合間に、自分はその補助を行う。

敵が状態異常攻撃を仕掛けてくるといふのなら、その攻撃の威力を下げるのではなく、その攻撃の命中率を下げた方が良い。

故に、降魔中であつた《魔術師》アルカナの『ディース』を召喚し、

《スクンダ》でシャドウから速さを奪った。

動きの鈍った『淫欲の蛇』に、弱い威力の魔法が集中砲火される。

風・雷・氷には僅かに身動きした程度だったが、火の粉の様な炎には明らかに身を振って苦悶の鳴き声を上げた。

……このシャドウの弱点は炎か。

他の属性にも耐性は無さそうである。

「天城さんは火炎攻撃に専念、他の皆は私の後に続いて攻撃！」

ディースから《刑死者》アルカナの『オルトロス』に素早く切り換えて召喚した。

そこに、こちらの意図を汲んだ里中さんが、《タルカジャ》で速やかにオルトロスを強化してくれる。

「食い千切れ、オルトロス！」

オルトロスは大きく跳躍して、その双頭で『淫欲の蛇』の喉元に食らい付いた。

業火の如く燃えるその牙が、シャドウの身に深く食い込んでそこを燃やし始める。

途端に悲鳴を上げた『淫欲の蛇』は、オルトロスを振り払おうと、大きく身を踊らせた。

それに無理に抗おうとはせずに、オルトロスは『淫欲の蛇』から離れる。

その際に、シャドウが振り払おうとしている力をも利用して、全力でその身を食い千切っていくのは忘れずに。

『連鎖の炎刃』の効果で、『淫欲の蛇』の首回りに纏わりつく炎はまだ消えない。

「追撃行くぜ！」

オルトロスが『淫欲の蛇』から離れて一番最初に動いたのは、仲間内で最も素早い花村とジライヤだ。

ジライヤが巻き起こした烈風は、シャドウに纏わり付く炎の勢いを強め、炎はシャドウの上半身を包む程にまで燃え広がる。

身を焼く炎にのたうつシャドウの身体に、花村は山刀を突き刺した。

突き刺さった山刀はそのままに、花村は素早くシャドウから身を離す。

その直後に、床から生えた氷柱がシャドウを捕らえた。

いきなり身体の一部を氷に拘束された事でシャドウはバランスを崩し、床に倒れ伏す。

そして、その頭部に付いた仮面を叩き潰すかの様な勢いで、タケミカツチの雷を纏った拳がシャドウを穿った。

追撃する度に轟々と勢いを増して燃え上がる炎は、既にシャドウを火だるまにしている。

燃え盛りながら悲鳴を上げてのたうち回るシャドウは苦し紛れにか、その牙を向いて襲い掛かろうとするが、ダメージと《スカンダ》に

よりその動きは鈍く、誰にも掠り傷一つすらも与えられずに牙は空を噛んだ。

「天城さん、止めを！」

そして、威力を可能な限り高めて放たれたコノハナサクヤの《アギダイ》によつて、シャドウは瞬く間に炭化し、業火の中へと消えていった。



『淫欲の蛇』を下し、更に先へと進む。

——みなさん、こんばんは！ りせちーです！

——みんないつも見てくれて、どうもありがとうー！

薄暗く何処か不安にさせる照明のみが照らす中を進んで行く内に、何処からか声が降ってくる。

『シャドウ』のものでは無い……………。

恐らくは、久慈川さんの心の声だ……………。

久慈川さんの声は、ここには居ないファンへと向けられている。

——ファンのみんなに、りせのこと、ちよつとだけ語っちゃおうかな？

——んーと……………何から話そっかな……………。

——そうだなあ……………今の仕事は……………

——ウン、とつても充実してるかな。

——小さい頃からずっと憧れてたから今は毎日がとても楽しいよ！

——理想の男性は……………うーん……………

——やさしくて清潔感がある人かな？

——あ、顔とか別に興味ないかも。

——あたし、逆にかっこいい人とかって苦手なんですよね。

——やっぱり人は中身が大切じゃないですか？

……“中身”。

その言葉に、クマが反応した。

クマには物理的に“中身”が無い。

だが、クマはもつと根本的な意味に於いて、己には“中身”が無いのだと悩ましげに呟いた。

……久慈川さんの悩みもクマと同様に、己の“中身”に関する事だったのだろうか。

それはまだ分からない。だけれども。

『私の全てを見せる』『ホントの私を、よく見て』……。

この劇場で出会った『シャドウ』は、そう主張した。

それは誇張や曲解はあれども、元を辿れば紛れもなく久慈川さんの想いである筈だ。

……“アイドル”としての、“自分”とは違う、“作られたキャラクター”……。

……臍気ながらも、久慈川さんの悩み・抑圧が見えてきた気がする。

——メンドーなもの、我慢するもの、りせには、ムリ！ キラ

イ！ シンドスギ！

久慈川さんの声は、そんな『りせち』の口癖で締め括られ、それ以降は途絶えた。

……今は先を急ごう。

フロアの行き当たり、恐らくはその先が階段だと思われる箇所のカーテンを開け放つと、そこには数台の戦車が待ち構えていた。

いや、戦車では無い。

戦車の形をしたシャドウだ。

側には秤の様な姿のシャドウも見受けられる。

戦車型のシャドウが何らかの自己強化能力を使ったのか、一気にその威圧感が増した。

「戦車型のシャドウは《戦車》アルカナの『魔弾の砲座』！

秤型のシャドウは《正義》アルカナの『雷と風のバルンサー』クマ
！」

魔弾……、属性攻撃を仕掛けてくると見た方が良さそう。

それに、『雷と風のバルンサー』か……。

……以前に戦った『バルンサー』の名を冠するシャドウには、その名に含まれている属性攻撃が通用しなかった。

このシャドウもそうだと見た方が良さそう。

「花村と巽くんは『魔弾の砲座』の相手を、天城さんと里中さんは『雷と風のバルンサー』の相手をお願い！」

『雷と風のバルンサー』が仕掛けてくるのは、電撃属性と疾風属性の魔法攻撃だろう。

しかし全く初見の『魔弾の砲座』の攻撃手段は未知数だ。

数は……『雷と風のバルンサー』が6体に、『魔弾の砲座』が3体。

数が多いのはやはり難点である。

「パズス、《ナバスネビュラ》！」

《悪魔》アルカナの『パズス』へとチェンジし、敵全体への物理攻撃と同時に相手を衰弱させる事もある一撃を放つ。

激しい熱砂の渦はシャドウの集団を呑み込んだが、『雷と風のバルンサー』には何の変化も無い。

どうやら物理攻撃は通用しない様だ。

だが、『魔弾の砲座』の方には効果があったらしく、3体の内2体は心なしかグツタリとしている。

しかし、状態異常を免れた1体が、ギャリギャリと音を立てながら砲台を天城さんへと向けて、そして砲身から強大な氷塊を打ち出した。

天城さんは《マハラギオン》で『雷と風のバルンサー』を薙ぎ払った直後で、防御は間に合わない。

「パズス!!」

咄嗟に、召喚状態を維持したままだったパズスの名を叫んだ。

パズスは瞬時に天城さんの前に降り立ち、その翼を広げて氷塊の前に立ち塞がる。

直後、氷塊はパズスを直撃した。

だが、パズスよりも巨大なその氷塊は、パズスに接触したその瞬間に、打ち出された直後の勢いのままにそれを放った『魔弾の砲座』自身を襲う。

パズスは氷結の属性を反射するからだ。

『魔弾の砲座』自身は氷結属性への耐性が無かった様で、跳ね返ってきたその一撃で消滅した。

強化されていただけに、その威力は強大なものだったのだろう。

その後、衰弱状態にある残り2体の『魔弾の砲座』は花村と巽くんの連携の前に成す術なく消滅し、『雷と風のバランサー』たちは《死神》アルカナの『サマエル』の《沈黙の魔方陣》で魔法を封じられた上で天城さんと里中さんによる属性攻撃で削られ、止めに放ったサマエルの《メギド》で跡形も無く消し飛んだのだった。



押し寄せるシャドウたちを蹴散らしながら11階に辿り着くと。

階段を登った先には、一際巨大なカーテンが行く手を遮っていた。

……恐らく、この先に『シャドウ』と久慈川さんは居る。

覚悟は出来ているか、と皆を振り返ると。

誰も彼もが頷いた。

それを了承と受け取り、一つ息を整えてから一気にカーテンを開け放つ。

部屋に飛び込んだ直後、薄暗い中に噎せる程のスモークが焚かれていた部屋が一気に眩しくなる。

どうやらスポットライトを一齐に当てている様だ。

巨大な円形型の部屋の内、中央から奥にかけてはステージのようになっていて、更にステージ中央には、見上げても視界が悪い為果てが分からない天井まで伸びる一本のポールが聳え立っている。

『レディース&ジェントルメン！』

ようこそ！ これより目眩く世界にご案内します！！』

そんな口上を、何処からともなく聞こえてきた『シャドウ』の声が述べるや否や。

スモークがもうもうと焚かれる中、バツとステージ全体が一気にライトアップされ、ステージの下から床がせり上がってきた。

そこには……何故か各々が違う衣装を身に纏った……『久慈川りせ』が6人も並んでいた。

興奮を抑えきれない花村曰く、どうやらどれもアイドル『りせちー』が番組などで着ていた衣装らしい。

そして、その6人から少し遅れて、あの『シャドウ』が下から姿を現した。

『ハアーイ！ お・ま・た・せ!!』

可愛くウインクを飛ばしてくる『シャドウ』に、花村のテンションが振り切っている。

そんな花村の脇腹に軽く突きをかまし、一先ず落ち着かせた。

『シャドウ』はこちらのそんな行動に構う事なく悠々とポールの前に移動し、スポットライトを一身に浴びながらその金色の瞳を妖しく輝かせる。

『今日はあ、もう、りせの全てを見せちゃうよ！』

ええー、どうせ嘘だろうって?』

『シャドウ』は右耳に手を添えて、居もしない観客の声を聞いているかの様な仕草を見せた。

『アハハッ、OKOK!』

嘘か真か……とくとご覧あれ!!

ちゃーんと見ててねえ、ホントのお……ア・タ・シ!!!』

誰も何の声も返さなかったと言うのに、自己完結した様に、指先を

チツチツと振った『シャドウ』はそう言うと、突如ポールダンスを披露し始める。

「……久慈川さんは何処に……？」

ここがこの建物の行き止まりなのだから、恐らくはここに居る筈なのだが……。

スモークがきついからか、久慈川さんの姿は見えない……。

「ん、もう……、何かノリ悪うーい！」

んじや、ここで特別ゲスト、呼んじやおつかなあ？」

「特別……ゲスト？」

この世界に居る『シャドウ』が現時点で呼べるゲストなど、この世界を徘徊するシャドウか……久慈川さん本人しか居ない。

『本日のゲストは……』

そう『シャドウ』が溜める中、舞台上の『シャドウ』以外の『りせちー』が声でドラムロールを始める。

『久慈川りせちやーん!!』

予想通りの名が上がり、バツとスポットライトが当たったそこには、店番していた時の割烹着を着たままの久慈川さんが茫然とした顔で、倒れた状態から体を起こして、そして自分を見下ろす『シャドウ』を怯えを含んだ目で見上げていた。

「止めて……止めてよ……！」

声を震わせながら、久慈川さんは必死に『シャドウ』を制止しようとする。

しかし、『シャドウ』がそれで止まる筈もない。

「久慈川さん!!」

久慈川さんに気付いて貰える様に大きく声を上げて走り寄ろうとするが、『シャドウ』が指を鳴らすなりワラワラと警備員のようなシャドウ……『固執のファズ』が現れて、それに足を止められた。

物理攻撃と万能属性攻撃以外は一切効かないシャドウだ。

強くはないが、切迫したこの状況では相手をしたくないシャドウである。

行く手を阻む様に隊列を組んでやって来るシャドウに舌打ちしつ

つも、ここは応戦するしかない。

「やれ、ヒトコトヌシ！」

《隠者》アルカナの『ヒトコトヌシ』が、召喚と同時にその特性を發揮して仲間全体の速さを上げる。

そして、ヒトコトヌシがその腕を振るうと、無数に舞い上がった木の葉が刃そのものの様な鋭さを伴って、宛ら矢の雨の如く『固執のファズ』の隊列を蹂躪する。

皆も、各々のペルソナで『固執のファズ』に応戦を始めたが、如何せん『固執のファズ』が後から後から湧いてくる。

細菌類の様に分裂増殖してるんじゃないか、と思わず考えてしまった。

そして、こちらが『固執のファズ』たちへの応戦に追われている中、切羽詰まっているからかそんな状況の変化にも気が付けない様子で、久慈川さんは『シャドウ』に追い詰められている。

「嫌……こんなの、嫌あ……」

弱々しく否定の言葉を溢す久慈川さんに、『シャドウ』は目を細めた。

『止めて？ 嫌？』

もおー、ホントは見て欲しいクセに。

ほうら、こんな感じでおお？

見て見てえ、ホントのワタシ！」

そう言つて『シャドウ』はポールダンスを続ける。

その艶かしさを感じる動きに、久慈川さんは耐えきれないとばかりに声を上げた。

「止めて！……こんなの、ホントの私なんかじゃ……」

久慈川さんのその言葉に、『シャドウ』の雰囲気は剣呑なモノに変わるのを肌で感じる。

『ぎあっけんじゃないわよ!!』

じゃあ、ホントのアンタって？

何れよ？ 何れがホントのアンタよ？』

そう『シャドウ』が叫ぶなり、舞台上に居た『りせちー』が一斉に久慈川さんを取り囲んだ。

「ホントの……私は……」

『シャドウ』に問われても、久慈川さんはその答えを返せない。

そんな久慈川さんに畳み掛ける様に『シャドウ』は語気を荒くする。

『さあ、言ってみなさいよ。』

ホントの「久慈川りせ」って?』

『シャドウ』がそう尋ねると、久慈川さんを取り囲む『りせちー』たちが口々に「自分こそが本当だ」と主張し始めた。

それに耳を塞いで頭を抱え込んだ久慈川さんは、叫ぶ様に『シャドウ』に答えた。

「分かんない!!」

ホントの私って、何!?!」

『ホントの「久慈川りせ」はアタシ。』

アタシはアタシ。

アタシはアタシ』

金色にキラつく目を細めながらそう宣った『シャドウ』に、久慈川さんは耳を塞ぎながら必死に体ごと首を横に振った。

「違う!・ 違うってば!!!」

『違うないでしょおお!!!』

ベツタベタなキャラ作りして、ヘド飲み込んで、作り笑顔なんてもう真っ平!

ゲーノージンの「久慈川りせ」なんかじゃない!!

『りせちー』? 誰それ!?

そんなヤツ、この世に居ない!!

アタシはアタシよおお!

ほらあ、ここに居る、このアタシを見なさいよおお!!!』

シャドウの魂を吐き出す様な叫びに、久慈川さんは言葉を喪う。

「『本当の私』を見て。

『りせちーじゃない私』を、ここに居る私を見て。」

……それが、久慈川さんの抑圧だ……。

久慈川さんの悩みとは、心理学的な意味合いでの“ペルソナ”に“自分”が呑み込まれてしまっているというモノだった。

“本当の自分を見て欲しい”。

そんな願望は誰にだって……勿論自分にとって存在する。

何を以て“本当の自分”とするのかは人各々ではあるうけれども。

それが“抑圧”に……そして『シャドウ』にまで至ってしまった、久慈川さんの事を思うと、胸が痛くなる様な錯覚すら覚える。

「わ、たし……そんな、事……」

否定しようとする久慈川さんの声には、力が全く無かった。

『さーて、お待ちかね。』

今から脱ぐわよお!!

丸裸のアタシを、よく見て目に焼き付けなア。

コレが、ホントのア・タ・シ!!

するりと『シャドウ』は水着の紐に手をかけてそれを解く。

そしてその紐を手放そうとしたその時、もう耐えきれないとばかりに久慈川さんが悲鳴の様な声を絞り出した。

「……いや……やめ、て……止めて……!」

あなたなんて……」

「言っちゃダメ!!」

里中さんが制止の声を上げるが、久慈川さんにはその声は届いていない。

「アンタなんて、……私じゃない!!」

否定された瞬間、『シャドウ』は確かにその瞳を歪ませる。

しかし、その直後には籠が外れた様に、狂った様な笑い声を上げた。

そして、その姿は濁った影の奔流に呑み込まれていく。

増殖が止まった『固執のファズ』を即座に殲滅するや否や、力が抜け落ちた様にステージへと倒れた久慈川さんへと駆け寄った。

『シャドウ』が異形の姿を曝す前に、久慈川さんを保護してクマと共に極力安全な場所まで退避して貰う。

そして、各々でペルソナを召喚して『シャドウ』の攻撃に備えた。

『これで！』

あたしわあ、あたしイイツ!!』

影の奔流を払って現れたのは、極彩色の裸身に近い概ね人型を取った巨大な異形だった。

極彩色のその身体は、見ているだけで酔ってしまいそうだ。

顔に当たる場所にはアンテナの様なモノが鎮座して不気味に時折光り、そして久慈川さんの姿をしていた名残の様に頭部には茶髪のツインテールが残っていた。

『シャドウ』はポールに掴まってユラリユラリとその巨体を揺らしている。

『我は影、真なる我……』

さあお待ちかね、モロ見せタ〜イム。

フフフ……特等席のお客さんには……。

メチャキツツーいのを特別サービスよッ!』

『シャドウ』が何を仕掛けてくるのかは分からない。

だから、取り敢えずは弱点が存在しない《塔》アルカナの『トウテツ』を召喚している。

「トウテツ、《ミリオンシュート》!」

トウテツが腕を上げると、幾重もの衝撃波が『シャドウ』を襲う。

『シャドウ』はそれに小さな悲鳴を上げた。

……どうやら物理攻撃は有効だ。

だがしかし、……『シャドウ』の表情は物理的に読めないから確かな事は言えないが、『シャドウ』がニヤリと嗤った様な気がした。

直後に、緑色の光がこちらを透過する。

……攻撃ではないみたいだが……。

『イツターイ。』

もう、ステージ上に手エ出すなんて。

でもオ、もう分かつちやったから……』

『シャドウ』のその言葉の真意は分からないが……嫌な予感がする。

……しかし、攻撃の手を緩める訳にもいかない。

「トウテツ、続けて《マインドスライス》！」

だが、確かに『シャドウ』を狙って放った筈のその一撃はスルリと回避される。

偶然かもしれない。

だが、これ以上トウテツで攻撃していても無駄だという直感が確かにあつた。

だから素早く《法王》アルカナの『ホクトセイクン』に切り換える。

ペルソナが変わった事に、『シャドウ』は僅かに動揺した。

……恐らくは、今が攻め時だ。

それは皆が感じたのだろう。

「鳴上、合わせんぞ！」

「了解だ！」

花村が声を上げ、ジライヤが上から押さえ付ける様な烈風を『シャドウ』に叩き付けてその動きを抑制する。

間髪入れずにホクトセイクンの《利剣乱舞》によって作り出された幾つもの剣状のエネルギー波が『シャドウ』を縦横無尽に切り刻んだ。

そして、『シャドウ』が体勢を戻す前にトモエの凍て付く刃が『シャドウ』を切り裂き、タケミカツチの拳が腹部を捉え、そして最後にコノハナサクヤの火炎が『シャドウ』を焼く。

……どの攻撃も『シャドウ』にダメージを与えた。

しかし、シャドウは緑色の光を放ちながら不気味にユラリユラリと揺れるだけ。

そして、やはりこちらを嗤っている気がする。

『ホーント、なっていないお客ね。』

ウフフ、でも、もうムダよ』

『シャドウ』のアンテナが不気味に明滅した。

……こちらを見透かしている気がする。

更に、と皆が放った攻撃は『シャドウ』に掠りもしなかった。

『シャドウ』はただ揺れているだけの様にしか見えなかったが、それでも全く当たらないのだ。

《スクンダ》で速さを奪おうとも、《スクカジャ》でこちらの命中率を補おうとも、結果は同じ。

まるで全てを見通しているかのように、『シャドウ』はただユラリユラリと揺れている。

『じゃあ、反撃開始い』

『シャドウ』がユラリとポーズを決めたと思うと、『シャドウ』を中心に冷気が迸る。

「クツ……い」

「ぎゃつー」

現在召喚中のホクトセイクンには氷結属性への耐性は無い。

咄嗟に盾にしたお陰で、冷気の殆どはホクトセイクンが遮ったが、フィードバックによって腕先などが霜焼けにでもなったかのように感覚が鈍くなる。

だがそれよりも、氷結属性が弱点の天城さんが膝を付いてしまった。

不味い、この調子で攻撃を食らうと……！

「雪子ー」

最悪の状況が脳裏を掠めたのか、耐性の為ほぼ無傷の里中さんが天城さんに駆け寄ろうとした。

だが、同時に半ば絶対的な予感が自分を突き動かす。

「守れ、オルトロスー」

最早脊髄反射の様に思考する暇も無く、ホクトセイクンからオルトロスへと切り換えて召喚し、天城さんの腕を取ろうとした里中さんに覆い被さる様に伏せさせる。

直後、灼熱の炎が里中さんに覆い被さるオルトロスに直撃した。

オルトロスに炎は効かない。

しかし、だからと言って炎の熱を完全に遮断出来る訳でもない。間近に感じた熱波に、里中さんは悲鳴を上げた。

『あらあ……、邪魔されちゃった。』

ふーん……、アンタのソレ、厄介ね』

ユラユラと揺れる動きを止めた『シャドウ』はこちらを睨んでいる様な気がする。

……この『シャドウ』、こちらの手の内を解析している可能性がある。る。

恐らくは、一度攻撃してきた相手の情報を解析してしまう能力があるのだろう。

だから、こちらの二撃目は当たらず、あちらはピンポイントにこちらの弱点を狙ってくるのだ。

自分の攻撃が二撃目以降も命中しているのは、ペルソナチェンジによってペルソナが切り替わっているからに過ぎない。

それも全て解析されてしまえば、もう成す術は無くなる。

ならば、こちらが『シャドウ』を削りきるのが早いのか、『シャドウ』がこちらの手の内全てを解析するのが早いのか……その勝負だ。

同じ考えに至ったのか、花村はこちらを見て頷いた。

「鳴上、俺たちはサポートに回る……！」

だから、アイツは頼む……！」

「了解だ、花村。」

来い、ジャアクフロスト！」

イザナギと同じ《愚者》アルカナの『ジャアクフロスト』を召喚し、《コンセントレイト》で一気に魔力を高める。

そして、トモエがかけた《タルカジャ》の相乗効果により更に高まった力を一気に解放させた。

「やれ、《極寒パラダイス》!!」

『シャドウ』を中心に全てを凍て付かせる冷気が渦巻く。

範囲攻撃ならば、範囲内に居れば確実にダメージが入る筈だ。

実際、『シャドウ』の身体の半分はそれで凍てつく。

まだ、粘れるか……?」

そんな淡い期待で続けざまに放った《アギダイン》は、『シャドウ』が生み出した氷塊で相殺された。

「……っ！ ネコシヨウグン!!」

ジャアクフロストの攻撃は全て解析されたと判断し、それ以上の深追いはせずに素早く切り換える。

《星》アルカナの『ネコシヨウグン』は、召喚されると同時に《獣の咆哮》を上げて自身の攻撃力と速さを底上げた。

そして間髪入れずに叩き込んだ《黒点撃》は『シャドウ』の中心を捉える。

それには堪らず『シャドウ』も悲鳴を上げた。

『じゃあ、これでどう!!』

だが攻撃を与えた直後に『シャドウ』は烈風でネコシヨウグンを薙ぎ払おうとしてくる。

ネコシヨウグンの弱点は疾風属性だ。

これは不味い、と焦った瞬間。

ネコシヨウグンに叩き付けられ様としていた烈風は、別方向から吹き荒れた烈風によってその向きをズラした。

花村が助けてくれたのだ。

ありがとう、と花村に目で礼を言つて、直ぐ様ペルソナを《道化師》の『ロア』へと切り換えた。

ロアの放つ烈風が『シャドウ』を床に叩き落とす。

だがそれも直ぐ様対応されていく。

ロアの力がもう通じないと判断するや否や、またペルソナを切り換えた。

……。

……。

出せるペルソナは出し尽くし、『シャドウ』をあと一步の所まで追

詰めた。

だが、あちこちに傷を作りアンテナの至る所に罅を走らせた『シャドウ』は、それでも尚、倒れない。

……端的に言えば、仕留められなかったのだ。

既に己の手札は出し尽くし、補助に回ってくれていた皆も、『シャドウ』からの攻撃により、もう動く事もままならない。

『……しぶとかったけど、もうゼーンブお見通し……。』

ウフフ、解析完了……、じゃあ……いくよオ!!

かわせるもんなら、やってごらんツ!!』

光、としか表現しようの無い攻撃が、叩き付けられた。

攻撃範囲の外に居たクマと久慈川さん以外は、全員がその一撃で吹き飛ばされる。

……現在降魔中だった《皇帝》アルカナの『オオクニヌシ』のスキル……《食い縛り》で、自分はギリギリ踏み留まる事が出来たが、花村は、里中さんは、天城さんは、翼くんは、倒れたまま動けない。

もう、誰も彼も限界なのだ。

自分とて、クマに逃げろと叫んでやりたくとも、もう、声が出ない。

口から零れていくのは、掠れた荒い息だけ。

息が苦しくて、無意識に顎全体で息をしている様な動きになっている。

……まるで死戦期呼吸だな、と何処か他人事のように、ボヤけた思考が頭の片隅を過った。

せめて皆だけでもここから逃がしてやりたいのに、ペルソナを召喚する程度の力すら、もう自分には残っていない。

『シャドウ』は追撃とばかりに二射目を放とうと力を溜めている。

己に近づく『死』を、何処か冷めた様に見詰める自分がいた。

……あれは万能属性の攻撃だ。

……万能属性を防げるペルソナは、少なくとも今の自分が扱えるペルソナの中には無い。

せめて耐久力の高いペルソナで皆の壁になりたくても、もうペルソナを呼び出す力すらない。

……自分一人では、肉壁にすらなれないだろう。

必死にこの場を凌ぐ方法を探そうと思考が蹴く一方で、
『どうしようもない事だ』という思いも頭の片隅にチラつく。

……出来る手は打ち、己に出来る全てで事を成してきた。

少なくとも、その一瞬一瞬で己が最善と考えた道を選んできた。

それだけは、確かに言える。

ただ、自分の力ではどうする事も出来ない事はこの世には確かにある。
これがその一つであった、というだけの事なのかもしれない。

——だが、本当にそれで良いのか？

己の脳裏に、そんな思いが過る。

その思いに弾かれた様に、僅かに振り返って、床に倒れて動かない花村たちを見た。

皆、胸は動いているから、息はある。

だが、それも、『シャドウ』の二射目で止まるだろう。

この攻撃を止める術が無い以上、皆、ここで、『死ぬ』。

それを、その『現実』を、実感を伴って『認識』してしまった。

……………。

……いや、だ。

……いやだ、嫌だ、嫌だ、嫌だ……！

……こんな所で、皆を死なせたくない！

こんな風に、仲間を死なせられる訳が無い……！

そんなの、何があっても、この世の中の誰よりも、この自分が、赦しはしない……！！

『死ぬ』なんてダメだ。

『死なせる』なんて、ダメだ。

死なせたくない……、死なせない……！

……何をしても、絶対に。

仲間を、死なせたりなんかしない！

だから……！

『死』を……自分以外の仲間の『死』を認識した瞬間に、思考を支配したのは。

今まで感じた事も無い程の、《恐怖》とも表現し難い激しい感情だった。

自らの『死』自体は、実感が無いのじゃないかと自分で自分を疑う程に、冷静に思考していた筈なのに。

それでも、感情は思考を凌駕し、自らを突き動かす。

何でも良い。自分はどうなっても良い。

だから……。

守る為の、皆を死なせない為の力が、欲しい……！

そう強く願ったその時。

——……悠希……。

……声が、聞こえた。

花村のものでも、里中さんのものでも、天城さんのものでも、異なるものでも、クマのものでも、久慈川さんのものでもない声が……。思考がマトモに定まらない中、その声が誰のものなのかは分からない。い。

だけれど、それは自分にとってとても大切な声だ。

それだけは、確かに何処かで感じている。

『シャドウ』から目を反らすまい、と、重い瞼を抉じ開ける様にして、霞む目で必死に前を見た。

そして、一歩。

『シャドウ』に向かつて、痛みだけを訴える身体を剣を支えにしながら、皆を背にしてよろめく様に前へと踏み出す。

額が切れたのか、血が流れ落ちてきて赤く染まっている様にも見えるボヤけた視界の中に。

そんな状況でもハッキリと分かる程、青く輝いているカードが目の前に浮かんでいた。

——……………俺たちは、家族だ。

——……………忘れるなよ……………。

その力を今使う事が、どうなる事になるのかは、その青い光を見た時に何と無く分かった。

……………それでも良い。……………それで、良い。

……………皆を守るのなら、それで構わない。

だから、躊躇無くその青く輝くカードを砕いた。





りせの『シャドウ』が放った二射目の攻撃は、悠希が青く輝くカードを破壊すると同時に現れた巨大な《何か》によって遮られた。

美しい金色に輝くその巨大な《何か》は、龍のような姿をし、とぐろを巻く様にして悠希たち全員を護っている。

『シャドウ』の攻撃を一身に受け止めたと言うのにも関わらず、その美しい金色の鱗には傷一つ存在しない。

無意識の内にも畏敬の念を懐きそうになるその龍は、己が護った者達へと目を向けた。

龍が頭を巡らせると、柔らかな光が倒れ伏す陽介たちを包み込み、その傷を癒してゆく。

『何コレ……？ 解析不能……？？？？』
『どうなっているの?!』

『シャドウ』は金色の龍の前に、初めて焦りを見せた。

その声に龍は鎌首をもたげ、ギリリと鋭い眼光を『シャドウ』へと向ける。

龍から圧倒的な力を感じ、『シャドウ』はたじろいだ。

そして龍が大きく顎を開き、『シャドウ』に襲いかかろうとしたその直後。

龍の姿はまるで幻であったかのように一瞬で霧散した。

そして、ドサリ、と。

陽介たちよりも一歩前に出て『シャドウ』と対峙していた悠希が。

龍の姿が消えると同時に、受け身を取る事も無く床に力なく倒れた。

「鳴上り?! おい、しっかりしろ!!」

必死に身体を起こした陽介の声にも、悠希は動かない。

握り締めていたツヴァイハンダーは取り落とされ、悠希から少し離れた場所まで滑っていく。

「センセイ、しっかりするクマー!!」

クマは全力で声を張り上げて悠希を呼ぶ。

悠希がこんな風に倒れる事なんて、幾度もの『シャドウ』たちとの激闘を潜り抜けてきた中でも、今だかつて無い事だった。

しかしクマが幾ら声を張り上げても、悠希は指の一本も動かさず、全く反応が無い。

そして、金色の龍がその傷を癒したとは言え、動く事が出来ない程重傷だった陽介たちはまだ立ち上がる事は出来ない。

そして、『シャドウ』はまだ健在である。

悠希たちとの激闘の末に刻まれた傷は深く、その動きに精彩は無いが、それでも再びあの光を放とうと力を溜め始めた。

その時、クマの心にどうする事も出来ない程の恐怖が芽生える。

《今またあの『シャドウ』の攻撃が来たら、今度こそ皆が死んでしまおう》と。

どんな状況でも何時だって何とかしてきた悠希は、生きているのか死んでしまったのかすらも確認出来ない。

悠希と力を合わせて強力なシャドウたちを倒してきた陽介たちだって、今は動けない。

今ここで動けるのは……。

——クマ自身だけだ。

しかし、クマに何が出来ると言うのだろうか。

アナライズを武器として悠希たちを倒した『シャドウ』とは比べ物にならない程、弱いアナライズの力。

自慢の鼻だって、段々と鈍くなってきている。

シャドウに対抗する術を持たず、悠希たちと出会うまでは只々逃げる事しか出来なかった。

そんなクマに出来る事なんて何も無い。

他でも無いクマ自身がそう結論付けそうになる。

『シャドウ』はクマに気を払わない。

払う必要も無い存在だと見なされているからだ。

だけれど、ここでクマが何もしなかったら、確実に皆は死んでしま
う。

『死』……………。

それを初めて意識したクマは、その恐怖に身を震わせた。

『死ぬ』とは、居なくなる事だ。

もう二度と、会えない。

この霧の世界で、クマはずっと独りだった。

シャドウは居たけれども、シャドウは意思を通い合わせる事が出来
る相手では無い。

クマは真実孤独だったのだ。

気が付いた時には既に独りで、それ以外の記憶を持たぬクマには、
己が孤独であるという認識は無かった。

それがクマにとつての当たり前であったからだ。

だが、事件が起き、悠希と陽介が再びこの世界に訪れた時。

その時から、クマは《他者》を知った。

そして、己が孤独であったという認識が生まれた。

『犯人を捕まえて、この世界で平穩に暮らしたい』と願った筈が、『皆
と居たい』という思いに変わっていった。

被害者の救出時を含めて、数える程しか悠希たちはこの世界を訪れ
なかつたが、それでも次に何時会えるのかと、クマは何時もあの入り
口の広場で悠希たちが訪れるのをずっと待っていた。

悠希たちと話をして一緒にこの世界を探索する僅かな時間だけで、
それまで悠希たちが訪れるのを待っていた長い時間なんて、クマの中
では何処かに吹き飛んでしまっていた。

力が弱くなってきているクマを、それでも《仲間》なのだ、皆は
そう言ってくれた。

一緒に答えを探していこう、と悠希は優しく言ってくれた。

そんな、クマの《仲間たち》が、皆居なくなる……………？

その後にクマに訪れるのは、絶対的な孤独だ。

「クマは、また独りぼっちになるの？」

「……いや、いやクマよ……」

一度他人を……《仲間》を知ってしまったからこそ、もうクマは孤独には耐えられない。

故にクマは『孤独』を恐怖した。

『今度こそさよなら……永遠にね!!』

力を溜め終えた『シャドウ』の言葉に、反射的にクマは前に飛び出る。

「か、考えるより先に、か、身体が……」

な、なに前に出てんだ、わしやあ!？」

クマ自身でも、何故そこで動いたのかは説明出来なかった。

皆の前に出たからと言って、クマには『シャドウ』に対抗する力は無い。

あの凶悪な攻撃を止める事は出来ないし、皆の盾としてすら不十分だ。

光を放とうとしている『シャドウ』を前に、己に迫る絶対的な『死』を感じて、クマの身体はガタガタと震える。

そんな時。

——クマの耳に声が届いた。

「おい、バカクマ！」

何してんだよ、さっさと逃げろよ!!」

クマが自分たちを庇う様に前に飛び出してきた事に焦った陽介は、必死に身体を起こして声を上げている。

自分の身が危ないと言うのにも関わらずに、ただただクマの身を案じて、陽介は己の身体に鞭打つてでも叫んだ。

その声には、必死さはあれど力は無い。

大声を上げる程の気力が、陽介にはまだ戻っていないのだ。

本当は声を上げるのも辛いだろう。

だが、そんな事は知った事かとはかりに、陽介は全力で声を張り上げて、クマを……《仲間》を逃がそうとする。

陽介の声に弾かれた様に、クマは己の背後を振り返った。

そこには、倒れたまま動かない悠希が、必死に身体を起こそうとする陽介が、千枝が、雪子が、完二が居た。

悠希を、陽介を、己の《仲間》たちを見て、クマの震えは止まった。悠希たちが死んで『独り』になる事に比べたら、どんなに強大な『シャドウ』でも恐ろしくは無かった。

自分に振りかかる『死』すらも、『孤独』の恐怖を前にすれば、今のクマには小さなものだった。

だから、クマは一步前に踏み出す。

その身体からは、金色の光が溢れ出した。

『……!? なにこの反応……!』

測定出来ない位の高エネルギー……!』

クマから溢れ出す光に、戦く様な声を『シャドウ』は上げる。

更に一步、クマは恐れる事なく踏み出した。

『独りぼっちはもう嫌クマ……!』

クマの仲間は、クマが守るクマ……!!』

どうすれば良いのかなんて、クマには分からない。

どうすれば《仲間》たちを守れるのかなんて、クマには分からない。

だから、唯々只管に、愚直にクマは前へと突撃する。

「クマの生き様……じっくり見とクマーツ!!」

『シャドウ』が放とうとしていた光に向かってクマは突進した。

「止める、クマーっ!!」

陽介が絶叫し、千枝も雪子も完二もクマを止めるが、覚悟を決めたクマは止まらない。

そして。

クマから溢れ出す光が、『シャドウ』が放とうとしていた光に衝突した瞬間。

部屋中が真白の閃光で満たされた。

「クマー!!」

光で何も見えない中に、陽介の絶叫が響いた。

そして、パサリと何かが床に落ちた音がする。

閃光が消え去ったそこには、異形の姿は無く、りせの姿をした『シャドウ』が倒れていた。

そして、ペラペラになった煤けたクマが床に落ちている。

「バカ野郎が……無茶しやがって……!!」

何とか身体を起こした完二がクマに駆け寄り、その身体を抱き起こす。

陽介は床に倒れたままの悠希の身体を起こしてから、クマの元まで引き摺る様にして連れていった。

悠希は気を失っているのか、ぐったりとしているが、それでも息はある。

「クマ……みんなの役に立てたクマか……?」

仲間に囲まれ、皆が無事である事を確認したクマはそう力尽きつつも嬉しそうに訊ねた。

「立ったどころじゃねーよ……命の恩人だよ!」

「クマさん……カツコ良かったよ……」

涙声でそう答えた陽介たちに、クマは嬉しそうに笑う。

「センセイも無事で良かったクマ……。ん……?」

悠希が息をしている事に少し涙目になりながらも喜んだクマは、ふと己の腕を見詰めて固まった。

己の身体の惨状を漸くここで認識したのだ。

そして身悶えして絶叫する。

「な……なんじゃこりゃああ!」

おおお……クマの自慢の毛並みが……!!

おおお……!」

その様子に、涙を浮かべながらクマを取り囲んでいた陽介たちは半笑いになる。

「……とりあえず、死にそうではないな」

陽介は、安心した様にそう結論付けた。

その言葉に千枝と雪子も頷く。

「こっから出たらブラッシングしてやつから、安心しろよ」

完二がそう声を掛けると、漸くクマは落ち着いていた。

そして、心配そうに悠希を見る。

「センセイは大丈夫クマか？」

「息はしてるし、傷は見当たらないから大丈夫だとは思うけどな……。……『シャドウ』の攻撃から俺たちを守ってくれたあの龍……。」

あれは、きつと鳴上が何とかした結果なんだろうが……。」

一目見ただけで、強力無比な存在であると分かる程だった。

そんな存在を、流星の悠希でも扱い切れるとは、陽介には思えなかった。

間違はなく、相当な無茶をやった結果がコレなのだろう。

今は安静にしておくしか無い。

悠希はステージ脇にあった座席に一先ず寝かせておく。

そうしていると。

「あの……、ごめんなさい……、私の所為で……。」

陽介たちの元に、やっと歩ける程に回復したりせがやって来て、そう謝罪した。

その言葉に陽介たちは皆首を横に振る。

「良いつて良いつて、謝らなくて。」

ここに居る奴等全員、『シャドウ』を暴れさせちまっつてっから……。それに、りせちゃんに謝らせたなんて知られたら、鳴上から怒られちまうしな」

そう言つて陽介は少し茶目つ気を見せてウィンクした。

その言葉にホツとした様な顔をした後、りせは気を失った悠希を氣遣わし気に見る。

そんなりせに、声を掛けたのはクマだった。

「『ホント』の自分が分からない不安……。」

……クマにも分かるクマ……。」

クマも、りせちゃんと同じだから……。」

でも、独りぼっちで悩まなくなつて良いクマ。

センセイは、クマと一緒に《答え》を探そう、つて言ってくれたクマ……。」

……センセイたちも、クマも居るクマ。

……みんな、りせちゃんと一緒に《答え》を探すクマ……。

だから、……自分で自分を傷付けちゃダメクマよ……」

「クマさん……。」

……ありがとうね」

クマの言葉にりせは目を閉じて頷いた後、意を決した様に、ステージに倒れている己の『シャドウ』に歩み寄った。

そして、その横に膝を付き、「ごめんね」と謝罪の言葉を口にする。

『シャドウ』は、その言葉に倒れたまま目をりせの方へと向けた。

「今まで、……辛かったよね。」

私自身の一部なのに、ずっと私に否定されて……」

りせはそう言つて、倒れている『シャドウ』へと手を差し伸べて、その身体を起こさせた。

『シャドウ』は何も言わずに、ただ黙つてその言葉の続きを聞く。

「……私、どれが『本当』の自分なのかつて、ずっと必死に考えてた。

……でも、そんな風を探していたつて見付からないよね……。

……『本当』の自分なんて、何処にも無い」

「『本当』の自分なんて……無い……」

りせの言葉に、少し離れた所で陽介たちと共に見守っていたクマが呟いた。

「あなたも、私も、『りせちゃん』だって……。

全部、私から生まれた『私』なんだよね……」

りせの言葉に、『シャドウ』は救われた様に柔らかく微笑んだ。

そして光の中でペルソナへと変じていく。

それは一枚のカードへと変わり、りせが緩やかに己の元へと舞い落ちてくるそれを受け止めると、青い光となつてりせに溶けていった。

そして、その途端にふらついたりせを慌てて陽介が抱き止める。

「大丈夫か、りせちゃん！」

「りせ、でいいから……。」

確か、お店に来てくれた人だよ……?」

りせの質問に頷いた陽介は、「それとこいつらも」と千枝たちの方

へも目を向ける。

それで察したりせは、「そつか……」、と安堵した様に頷いた。

「みんな、私を助けに来てくれたんだよね……」

「ありがとう……」

礼を言われた陽介たちは嬉しそうに頷くが、りせの消耗具合を見て、早くここから出ないといけない、と判断する。

「色々聞きたい事とかあると思うけど、今は取り敢えずここから出ないと。」

「後で必ず全部説明するから」

陽介の言葉に、りせは了解した様に頷いた。

まだ意識が戻らない悠希に目を向けると、自分が担いでいくから、と完二が進み出る。

それに全員で頷き、この場を後にしようとしたその時に。

「『本当』の自分なんて……ない……?」

呆然とした様に呟くクマの周りに異様な空気が漂っている事に気が付き、陽介たちは全員警戒した様にクマを振り返った。

「クマさんの中から、何かが……!!」

りせはクマに起きている異変に気づき、焦った様な声を上げる。

『……『本当』?』

……『自分』?』

ククク……: 実に、愚かな事だ……!』

クマと似た声が響いたその直後、クマの背後からまるで影が実体化したかの様にそれは現れた。

クマに似た外観のそれは、クマよりも大きく、そして何よりも。

その目は、不気味さしか感じない程にギョロリとした、クマ自身とは似ても似つかない目であった。

そしてその目は、爛々と金色に妖しく輝いている。

「何、アイツ……」

まさか、『もう一人のクマくん!』?』

今までのパターンからそう推測した千枝が声を上げた。

陽介は焦りと共に違和感を感じつつ呟く。

「クマの『シャドウ』か……?!

でも、何だつてこんなタイミングで……」

『『シャドウ』……』

確かにそうなんだけど、……でも違う。

……何かからの、強い干渉を受けているみたい……」

りせはクマの背後のそれを見詰めてそう補足を入れた。

「干渉だ？ んなモン一体何が……」

「そこまでは分かんないけど……」

でも、凄く強い力だと思う」

そんなやり取りを見て漸く我に返ったクマは、様子がおかしい事に気が付いて、皆の視線の向かう先……己の背後へと振り返る。

そしてそこに居た存在に、驚愕の悲鳴を上げた。

そんなクマの様子に構う事なくそれは淡々と告げる。

『【真実】など、得る事は不可能だ……』

【真実】は常に、霧に隠されている。

手を伸ばし、何かを掴んでも、それが【真実】だと確かめる術は決してない……。

……なら、《真実》を求める事に何の意味がある？

目を閉じ、己を騙し、楽に生きてゆく……。

その方がずっと賢いじゃないか』

「な……何言ってるクマか！

お前の言う事、ぜんぜん分からんクマ！

クマがあんまり賢くないからって、わざと難しい事を言ってるクマね！」

その言葉に対し、クマはそう言い返す。

クマはクマなりに一生懸命に考えているのだと、そうクマが続けた言葉をそれは嘲笑った。

『それが無駄だと言っているのさ……』

お前が望む《答え》など、何処にも有りはしない……。

そもそもお前は、無。

「初めから」カラッポなんだからね』

その言葉に、クマは動揺した様に身を震わせる。
そんなクマを見てそれはニヤリと口元を歪めた。

『お前は心の底では気づいてる……。』

でも認められず、別の自分を作ろうとしているだけさ……。

……失われた記憶など、お前には初めから存在しない。

何かを忘れているとすれば、それは“その事”自体に過ぎない』

「そ……そんなの……ウソクマ……。」

止めろクマ……。」

その言葉にクマは力無く項垂れる。

『なら、言ってみようか。』

お前の正体は、どうせただの——』

「止めろって言ってるクマー!!」

そんなの聞きたくない!

《答え》は自分で探すクマー!!」

その言葉は、直前までの焦燥した様子を吹き飛ばしたかの様なクマの絶叫により遮られた。

そんなクマにそれが視線を向けると、触れてもいないのにクマは遠くへと吹き飛ばされる。

焦ってクマを呼ぶ陽介たちに、それは目を向けた。

『お前達も同じだ……。』

……【**「真実」**】など探すから、辛い目に遭う……。

そもそも、これだけの深い霧に包まれた世界……。

……その正体すら分からないものを、この中から、お前達はどうかやって見つけるつもりだ?』

「分かんなくっても、探すしかねーだろ!

その為に俺たちはここに居るんだ!!」

その言葉にそう言い返した陽介を、それは嗤い、更には僅かながらも憐憫の情にも似た様な表情を見せる。

『……実に滑稽だな。』

愚か者とは、見ていて実に愉快だ……。

真実が欲しいなら、簡単な事だ。

お前達がそれを【真実】だと思えばいいだけさ……』
途端に辺りの霧が異常な程に濃くなった。
メガネをかけているのに、一寸先も見通せぬ程に。
そんな中、その声だけが響く。

『では、お前達が望む【真実】とやらを一つ教えてやろう……。』

お前達は、ここで死ぬ。

お前達自身の、愚かさ故にな』

「ダメ、みんな、伏せて!!」

その言葉に、リセは弾かれた様に叫ぶ。

その言葉に、皆が反射的にその場に伏せた。

その直後。

陽介たちの頭上を、霧の壁を切り裂きながら、巨大な鉤爪が薙ぎ
払っていく。

霧を吹き散らして姿を現したのは。

あまりにも巨大な異形であった。

床をブチ抜いてなお脇までしか見えないその巨体は、シルエットだ
けならクマに似ていた。

しかし、顔の部分は陶器か何かの硬質なモノで出来ているのか、至
る所に罅を走らせ、少しずつその破片をその内へと吸い込んでいる。

罅割れの向こうは完全なる闇で、その中にまるでネオンライトの様
な目だけがキラリと輝きながら浮かんでいた。

『我は影、真なる我……。』

さあ、愚かなる隣人よ……。

末期は潔くするものだ!』

「くそ、戦うしか無いってか!」

陽介はそう吼えながら、チラリと悠希の方を見る。

悠希が目覚める気配は、未だ無い。

悠希は『シヤドウ』の攻撃も届かぬ程離れている為、戦闘の巻き添
えを食らう事もほぼ無いだろうが……。

……リーダーである悠希不在の戦闘とは、未だかつて無かった事である。

しかし、やるしか無い。

陽介がそう覚悟を決めた横で、りせもまた覚悟を決めていた。

そして、つい先程得たばかりの己のペルソナを呼び出す。

「……皆、構えて」

「ちよ……、まさかその体で戦う気!？」

既に消耗が激しかったのにも関わらずペルソナを呼び出したりに、千枝は驚愕の声を上げる。

「私は大丈夫。」

多分、私にはクマくんの代わりが出来る……。

直接戦う力はないけど、でも。

今度は私が皆を助けてあげる！」

そう答えてりせは己のペルソナ——ヒミコの力を使う。

ヒミコの力は、情報解析の力だ。

ヒミコから被せられたそのバイザーの内に、『シャドウ』の情報が映し出される。

「……分かった、頼りにさせて貰うぜ、りせ！」

でも、無理は絶対にすんなよ」

陽介の言葉にりせは頷き返し、『シャドウ』との戦いは始まった。

◇◇◇◇◇

「右手払い攻撃来るよ！」

みんな、避けて!!」

りせの指示に、雪子と完二は『シャドウ』から距離を取り、陽介と千枝は各々のペルソナの力を借りて中空へと飛び上がる。

その直後、『シャドウ』の右手が床を削り取る様に周囲を薙ぎ払った。

「ジライヤ、やれ!!」

「トモエ、《黒点撃》!」

ジライヤが巻き起こした豪風が追撃を行おうとしていた『シャドウ』の左手を押し返し、その隙にトモエの《黒点撃》が『シャドウ』の顔面に叩き付けられる。

その一撃に、『シャドウ』の顔面の罅割れは一段と広がり、大きな欠片が幾つか内なる虚空へと吸い込まれていったが、あまり『シャドウ』に堪えた様子は無い。

すわ物理耐性があるのか、と陽介たちは危惧したが、それは直ぐ様子のアナライズによって否定される。

『シャドウ』の耐久力の高さ故に、微々たるダメージにしかならなかっただけの事であった。

「物理も疾風も効くつてのは俺としちや有り難いが、単純に頑丈なだけつつーのも、厄介だな……!」

相手の防御力が高い場合、悠希が補助に回ってまず相手のガードを削っていたが、今はその悠希は戦闘に参加出来る状況に無い。

一人、しかもリーダーが欠けているという厳しい状況だが、それに輪をかけて不味い事に、陽介たちは先のりせの『シャドウ』との戦いから回復しきれていなかった。

あの金色の龍の力で身体の傷こそ完全に癒えているものの、精神的な損耗は回復したとは言い難い。

故に長期戦になると、陽介たちは非常に不利になるのだ。

だが、相手にこうも耐久力があると、短期で仕留めるのはほぼ不可能である。

置かれている状況の不味さに、陽介は思わずそう歯噛みした。

しかし、どれだけ悪状況であろうとも、負ける訳にはいかないのだ。『シャドウ』の身体が床に埋まっているから回避される心配はほぼ無いってのはありがたいよ!」

こんな状況下でもせめて士気は上げようと、千枝は敢えて闘志を燃え滾らせた声でそう言った。

床をブチ抜いている為、『シャドウ』の回避力はほぼ存在しないも同

然である。

更に付け加えるならば、『シャドウ』の動き一つ一つは、緩慢とまで
いかないものの素早くは無い。

だからこそ、りせの攻撃予測が追い付いているのだ。

しかし、その一撃の威力は凡百のシャドウのものとは文字通り桁が
違う。

『シャドウ』がただ腕を払うだけでも、耐久力にはやや難のある雪子
や、守勢に回ると存外脆い千枝などには致命傷にもなりかねない。

『シャドウ』とは一端距離を取った雪子と完二も、攻勢に回る。

コノハナサクヤが全力で放った《アギダイン》は僅かながらも『シャ
ドウ』を仰け反らせ、続けざまにタケミカヅチが叩き込んだ《紫電碎》
は『シャドウ』の身体に僅かな焦げ痕を残す。

だが、それだけだった。

『シャドウ』は有象無象らの攻撃など意に介さぬとばかりに、己の力を
高める。

「火炎耐性無し、電撃耐性無し！

……っ！ ヤバイよ！

『シャドウ』の攻撃力が跳ね上がった！

次、強い魔法来るよ！

みんな、ガードして!!」

りせに言われるがままに、全員が防御を固めた。

それとほぼ同時に、触れたもの全てを凍てつかせるかの様な冷気が
『シャドウ』を中心に吹き荒れる。

ガードしていたにも関わらず、圧倒的なその威力に皆が膝を付い
た。

特に、元々氷結属性を弱点としていた雪子は、手首から先が凍傷に
なったかの様に感覚が無い様だ。

冷気が吹き荒れた場所は、『シャドウ』を中心として床が見事に凍り
付き、氷柱がまるで刺の様に生えている。

悠希を寝かせてある椅子は、幸運な事に、冷気の効果範囲から外れ
ていた。

冷気が収まるや否や、直ぐ様雪子は回復魔法で皆の傷を癒すが、凍傷による消耗が激しかったのか、その足元は微かにふらついている。そんな雪子を空かさず千枝が支えているのを横目で見つつ、陽介は焦りを隠し切れない顔をした。

よりによつて回復役の雪子の弱点属性を『シャドウ』は攻撃パターンとして持っている。

益々不利になる状況に、焦るのは仕方が無い。

「氷結魔法……っつー事は、氷結属性は効かねーかもな。

里中は物理攻撃に専念してくれ！」

平時ならば、耐性を調べる為にも威力を弱めた氷結魔法をぶつけた方が良いのだが、今は効果の無い可能性が高い攻撃を行える程の余裕が存在しない。

今は兎に角、有効な攻撃を一つでも『シャドウ』に叩き込む必要がある。

「りせ、属性攻撃の前兆は掴めるか？」

「うん、多分出来ると思う。」

攻撃される直前になるかも知れないけど……」

陽介がそう訊ねると、少し悔しげにりせは答えた。

元より攻撃の予測自体難しいものだ。

そこから更に氷結属性攻撃か否かを事前に判断するのは至難の技である。

故に警告が遅くなるのは致し方無い事だ。

「それで構わねーから、また氷結魔法が来そうになったら最優先で指示してくれ」

それでも、一瞬でも早くに防御に回れた方が受けるダメージは少ない。

今は兎に角、『シャドウ』の一撃で戦闘不能になりかねない雪子の被ダメージを減らすしかないのである。

その時、『シャドウ』が動いた。

『無駄な足掻きだ……』

何をしようとも、お前達の定めは覆らない。

《死》という絶対の定めが、お前達に与えられた《真実》なのだから……!」

そう言うなり『シャドウ』が右手を僅かに持ち上げる。

直後、りせが焦った様な鋭い声で警告を発した。

「マズいよ！ みんな防御力が下げられてる!!」

『シャドウ』は《マハラクンダ》で陽介たちの防御力を下げにかかったのだ。

ここで《デクンダ》なり《マハラクカジャ》を使うなりしてその効果を打ち消さなくては非常に不味いのだが、陽介も千枝も雪子も完二も、それらのスキルを持ち合わせていない。

その二つを扱えるのは、今は戦闘に居ない悠希なのである。

陽介たちが扱えるのは強化能力（ゲームで言う所の「バフ」）だけだ。

それも、ジライヤの《スクカジャ》とトモエの《タルカジャ》だけ。弱体化能力（所謂「デバフ」）は基本的に悠希が行ってきた。

悠希が居ない事が、ここまで厳しい戦いになるとは……。

陽介は思わず唇をキツく噛んだ。

「効果が切れるまでは避けるしかねえ！」

よし、ジライヤ!!」

ジライヤは『シャドウ』への攻撃の手を止め、《スクカジャ》で一人一人の速さを底上げする。

ジライヤがその隙を狙われない様に、その間トモエとタケミカヅチが『シャドウ』の攻撃を引き付けていた。

『小賢しい真似を……』

「……! 何か全体攻撃、来るよ！」

『シャドウ』が陽介の行動に僅かに苛立ったかの様に左手を振り上げると同時に、りせがそう警告する。

直後、『シャドウ』が床に叩き付けたその左手を中心に、強烈な揺れと衝撃波が走った。

その一撃は床に張った氷を砕き、砕けた氷柱は衝撃波によって散弾の如く周囲に撒き散らされる。

皆は底上げされた回避力によって事なきを得たが、撒き散らされた氷柱が周囲の座席に深々と突き刺さっているのを見て、陽介は慌てて悠希を寝かせている辺りを目で確認した。

幸いにも攻撃は届かなかった様だ。

悠希の側にはペラペラになったクマが力なく凭れかけさせられている。

二人に被害が出ていない事にホツとしながら、陽介は気を引き締めた。

今の所は攻撃が届いていないが、今後どうなるかは分からないのだ。

これ以上周囲を破壊される前に、何とんでも『シャドウ』を止めなくてはならない。

「ヤバイ！ 『シャドウ』の能力が軒並み上がったよ！」

気を付けて!!」

『シャドウ』が《ヒートライザ》で自身の能力を軒並み引き上げた事をりせが知らせる。

『シャドウ』が能力強化を行った直後、格段に鋭さを増した薙ぎ払い攻撃が陽介たちを襲った。

それを何とか回避した陽介は、直ぐ様体勢を立て直す。

「それなら……！」

ジライヤの《テカジャ》——相手の能力強化を打ち消すスキルにより、『シャドウ』の能力は即座に基礎状態に戻った。

急な能力の変動に、『シャドウ』の動きが鈍る。

そこを逃さずに、コノハナサクヤの《アギダイン》が『シャドウ』の直下から一点を打ち上げる様に叩き込まれ、『シャドウ』は少し仰け反った。

そして、がら空きの顔面に、《タルカジャ》と《チャージ》で強化されたトモエの《黒点撃》と、《タルカジャ》により強化されたタケミカツチの《紫電碎》が両側から叩き込まれる。

トモエの一撃は罅割れを砕き、タケミカツチの一撃により激しく迸った電撃は虚空に浮かぶ目を焼いた。

途端に、何をしても堪えた様子は無かった『シャドウ』が呻き声を上げ、トモエとタケミカツチを振り払おうと、激しく身を振らせて周囲を薙ぎ払う。

爪の一撃に切り裂かれそうになったトモエをジライヤが素早く救出し、タケミカツチは己の得物を盾にその一撃を耐え忍んだ。

「あの目！ あの目が弱点みたい!!」

そこを集中的に狙って!!」

りせの指示に、雪子が《アギダイン》を『シャドウ』の目に目掛けて放つが、それは『シャドウ』が撃ち出した氷塊によって相殺され、辺りに濃霧を撒き散らす。

視界を封じられるのは不味いと判断した陽介によって霧は直ぐ様吹き散らされたが、僅かなその合間に既に『シャドウ』は動いていた。『シャドウ』の口元が何か動いているのを視認した瞬間、ジライヤとコノハナサクヤの姿が掻き消される。

突然の出来事に陽介と雪子は愕然とした。

「大変！ ペルソナが封じられてる！」

これが解けるまで、ペルソナの召喚は出来ないよ!!

二人とも、気を付けて！」

ヒミコには何とも無かったりせがそう叫ぶ。

陽介たちは『シャドウ』のスキル——《愚者の囁き》により魔封じ（ペルソナを封じられた状態）にされたのだ。

ペルソナ召喚が出来なくなり魔法等の能力も行使出来なくなる、非常に厄介な状態異常である。

魔封じ状態でも降魔による身体能力強化は生きているのだけは、本当に不幸中の幸いとも言えるが。

ともかくにも、強大な『シャドウ』との戦闘中にペルソナの力が使えなくなるのは不味いと言いか言いようが無い。

しかも、回復役である雪子が封じられたのが最も痛手だ。

『シャドウ』の狙いはそこだったのであろうけれども。

「マズイよ！ 氷結属性攻撃が来る！」

ペルソナが封じられた雪子を狙って『シャドウ』は再び腕を振るっ

た。

その鋭爪は冷気を帯びていて、そこに触れている空気中の水分が瞬く間に凍結していく。

擦っただけでも、雪子の体力を根刮ぎ持っていてしまうだろう。そんな凶器が雪子に迫る直前で受け止めたものがいた。

……タケミカツチだ。

今にも雪子を叩き潰さんとしている『シャドウ』の右腕に、タケミカツチは両手を使って抗う。

『シャドウ』の右腕から伝わる冷気が、パキリパキリとタケミカツチの手を凍らせていった。

己に返ってくる痛みにも顔を顰めながらも、完二は押し返そうとする力を緩める事はしない。

しかし、『シャドウ』の圧倒的な力の前に、タケミカツチは少しずつ押されていく。

このままだと押し負ける……！

そう完二が焦ったその時。

『シャドウ』の右腕に、横方向からトモエが《チャージ》を使って威力を高めた跳び蹴りを放ち、その軌道をずらした。

雪子とタケミカツチから逸れて床に叩き付けられた右腕は、その辺りの床をブチ抜き、そしてその周囲を凍り付かせる。

『抗う事など無意味だ。』

【真実】など求めた所で、何も得るモノは無い。

何故、それが分からないのだ』

『シャドウ』がそう言った瞬間、陽介たちの身体が重くなった。否、その表現は正しくない。

正確には、底上げされていた身体能力が元に戻されたのだ。

『シャドウ』の使った《テカジャ》により、強化が打ち消された陽介たちは、その前後のギャップに常よりも動きが鈍る。

その隙を見逃す『シャドウ』では無かった。

『さあ、これで終わりだ。』

知ろうとしたが故に、何も知り得ぬままに死ぬ!!』

グツと身を振らせて『シヤドウ』は左腕に力を集める。

高まったその力は、まるで闇夜の如く光すら逃がさない暗黒の様だ。

そして間髪入れずに、それを陽介たちに叩き付けんと周囲を薙ぎ払った。

陽介たちには、防御する暇も、回避する暇も存在しない。

成す術もなく、その一撃に曝されたのだった。

その一撃は、その凄まじいエネルギー故に、触れてすらも居ない周辺のを床を抉り取り、粉碎された瓦礫は悉く虚空へと吸い込まれていく。

辺りの光景は、たった一撃によって一変していた。

ステージ周りの椅子も照明も、その一撃によって殆どが消滅していたのだ。

その一撃が通過した場所に、息がある者であろう筈はない。

だがしかし――





.....

.....

.....

.....

緩やかな振動を感じて、目を開けると、視界には鮮やかな蒼が広がっていた。

ここは……、ベルベットルーム、なのか……？

思わずそう考えてしまったが、何時もの様にイゴールさんが出迎えてくれる。

……間違いなくベルベットルームだ。

……しかし、何故自分はここに居るのだろうか？

直前の記憶が曖昧だ……。

……久慈川さんの救出に向かった事までは確かに覚えているのだが……。

その後、どうしたのだろうか……。

何とか記憶を辿ろうとしていると、イゴールさんが厳かに口を開いた。

「この度は、些か変則的なお呼び立てになってしまいましたな。

一つ、貴女にお伝えしなくてはならぬ事が御座います故」

変則的……？

……ここに来る直前に何かあったのか……？

……考えても、思い出せない……。

それよりも、イゴールさんが伝えたい事とは何だ？

イゴールさんがテーブルに手を翳すと……。

……一際眩い光を放つカードが二枚、現れた。

これは……？

「これは貴女が【真実の絆】を手に入れた証……」

【真実の絆】……………？

それは、こう……。物凄く強い絆という事だろうか？

「左様。貴女が結ばれた『絆』が真に深まったという証で御座います」

『絆』が真に深まった、と言われて思い浮かべたのは。

叔父さんと菜々子だった。

恐らくはそれで合っているのだろう。

イゴールさんは深く頷いた。

「これらは【真実の絆】により貴女の内目覚めた『ペルソナ』たちで御座います。

その『力』は強大無比……。

必ずや、貴女が【真実】へ辿り着く為の力となりましょう。

しかし、貴女は『力』に目覚めてまだ日が浅い。

【真実の絆】の『力』を御するには、貴女の『力』はまだ未熟……。

己が丈に合わぬ『力』は、自らに仇成します」

……それは、要は凄い『力』があっても、それを扱い切れる程には、自分の実力がまだ無い、という事か……？

……それは何だか、そのペルソナをくれた二人に対して申し訳ない気持ちになる。

「その『力』を御する事が出来ぬからと、焦る必要は御座いません。

『力』の目覚めが、貴女の成長よりも早かっただけの事。

いずれは貴女もこの『力』を真に御せる時が来ます。

貴女は貴女の思うがままに、旅路を行けば宜しい」

……それはそうだろうか……。

このベルベツトルームの主であるイゴールさんをして、強大無比と言わしめる『力』、か……。

イゴールさんの口振りから、その『力』を全く使えない訳では無いのだろう。

しかし、自分へのダメージが大きいとか、そう言うデメリットも存在する、という事なのだと思う。

……自分にその「力」をくれた二人の事を思うと、その「力」で自分自身を傷付けるなんてバカな事はしたくない。

だけれども。もし手段を選んでいられない時が来たら……。

きつと自分は躊躇わずに、その「力」を使ってしまおうのだろう。

その確信が、己にはあった。

「……左様ですか。

それもまた、貴女が選ぶ道なのでしょう。

……だからこそ、貴女は今ここに居るのでありますが」

……だからこそ、ここに？

…………。……ッ！

頭がズキリと痛み、何かが急に決壊した様に、目の前にある光景が浮かぶ。

己の全てを出しきっても、それでも尚届かなかった強大な『シャドウ』……。

倒れ伏す、仲間たち。

そして、そこに迫る『死』が――

…………！　　そうだ。

自分は、先程まで、ここで目を覚ますまで、確かに久慈川さんの『シャドウ』と戦っていた筈だ。

だが、あの光景の後の記憶が、ここで目覚める迄の間の分が、全く無い。

まるで焼き切れてしまっているかの様に、そこで自分の中の記憶は途切れている。

あの後、一体どうなったのだ。

花村は、里中さんは、天城さんは、巽くんは……！

焦って立ち上がるうとしかけた所を、イゴールさんに宥められた。「貴女が対峙しておられたものは、既に倒されました。

ただし、貴女が守ろうとしていた方々は、新たなる試練に立ち向かっておられますが」

新たなる試練……？

……まさか、あの後また別の『シャドウ』が現れたのか？
ならばこうしては居られない。

早く、花村たちが戦っている場所へ行かなくては……！

「もう行かれますか」

当たり前である。

仲間が戦っているのだ。

それなのにここで1人、呆つとしているなど、自分自身が許しはしない。

「フフ……それではまた、ごきげんよう……」

イゴールさんが微笑んだのを最後に、視界はブラックアウトした。

……

……

……

……



……

……

……

……

目を開けるとそこは、久慈川さんの心が作り出した劇場の最奥の、ステージがある広間であった。

どうやら自分は椅子に寝かされていたらしい。

身体を起こすと、側に謎の物体が垂れかかる様に置かれている。

……よく見ると、異様な程ペラペラになってしまったクマだった。
こんな状態で大丈夫なのかと焦ったが、微かに身動きをしている。

……生きてはいる様だ。

しかし、一体クマの身に何が起きたのだろう。

ふと周りを見てみると……。

花村たちが巨大な異形と戦っていた。

しかも、久慈川さんまで見慣れぬペルソナ（恐らくは久慈川さんのものだろう）を召喚して一緒に戦っている様だ。

先の久慈川さんの『シャドウ』との戦いの結末を自分は見届ける事が出来なかったが、ペルソナを得ている所を見るにどうにかなった様だ。

そこは安心した。

……しかし、久慈川さんの消耗は『シャドウ』との戦いが始まった段階で既にかなりのものであった筈。

……大丈夫なのだろうか……？

それよりも、あの異形は何なのだろう。

……大雑把な見た目はクマみたいな姿をしているが、デカイ上に可愛げは0である。

……クマの、『シャドウ』か？

まあ相手の素性は置いといて、どうやら皆はかなりあの敵に苦戦している様だ。

それならばこうして見ている訳にはいかない。

立ち上がったって、疲労や痛みは感じなかった。

眠っていたからなのか、はたまた天城さんあたりが傷を癒してくれたのか……。

どちらにせよ有難い事だ。

これで、何の憂いも無く闘えるのだから。

その時、何が起きたのかは分からないが、視界の端で花村たちの動きが鈍る。

そして。

『シャドウ』が左腕を振り上げているのを見た瞬間、その危険性を半ば本能的なもので把握した。

「……いー・ゲンブ、《ボディーシールド》！」

その衝動に突き動かされる様にゲンブを召喚して、《ボディーシールド》——効果範囲内の味方のダメージを肩代わりする能力を行使す

る。

そして、一切の躊躇いなく、『シャドウ』の腕が薙ぎ払うであろう場所……、花村たちが居る所へと飛び込み、防御の体勢を取った。

直後、『シャドウ』の攻撃が周囲をまとめて薙ぎ払う。

この場の全員分のダメージの肩代わりという凄まじい負荷を受けたが、ゲンブは辛うじて持ち堪えた。

「鳴上!!」

花村が、驚いた様に声を上げる。

それに、ゲンブからのフィードバックの痛みに耐えつつ、振り向いて答えた。

「すまない、待たせた」

それ以上は、『シャドウ』を前にして長々と話している暇は無い。手早くゲンブからイザナギに切り換える。

そして、攻撃には参加せずに指示を出していた事から、久慈川さんは敵の分析を担当しているのだろうと当たりを付けて戦況の説明を求めた。

「すまないが、状況の把握をしたい。

アレは一体何だ？」

どの様な耐性で、どの様な攻撃を仕掛けてくる？」

戦況も含めて、詳しく教えて欲しい」

こちらの求めに、久慈川さんは頷いて手早く説明を始めてくれる。

「あれはクマさんから出てきたの。

氷結は分からないけど、物理・火炎・電撃・疾風は効くよ！

今、皆の防御力が下げられているの」

それならばイザナギを召喚しているのは、都合が良い。

《デクンダ》を使って、皆に掛けられていた弱体化補正を打ち消した。

そして、『シャドウ』が叩き潰さんと振り下ろして来た右腕を横に飛んで避けつつ、イザナギが手に握る刃に雷を纏わせながら『シャドウ』の右腕を深く切り裂く。

切り裂かれた布地の向こうは、仮面の向こうとおなじく虚空であつ

た。

久慈川さんは『シャドウ』の状態を逐一分析しつつも、説明を続けてくれる。

「《マハブフーラ》・《ヒートウェイブ》・《氷殺刃》……あとそれと、さっきの強烈な攻撃……《魔手ニヒル》を仕掛けてくるみたい。

《魔手ニヒル》は特に危険だから、ガードして！」

《愚者の囁き》、《コンセントレイト》・《ヒートライザ》・《デカジャ》も使ってくるよ！」

どうやらクマの『シャドウ』は氷結属性を仕掛けてくるらしい。ならば、氷結属性に何らかの耐性がある可能性が高い……か。

氷結属性を仕掛けるのは止めた方が良さだろう。

花村と天城さんは、どうやらペルソナを封じられているらしい。

イザナギをアルウラネへと切り換えて、《解放メモメント》で二人を状態異常から回復させると同時に、その予防を行う。

少しの間とは言えども、これで『シャドウ』の《愚者の囁き》を封じた。

「サンキュな、鳴上！」

礼を言ってくる花村と天城さんに頷いて、指示を飛ばした。

「魔封じは無効化した。

今の内に『シャドウ』を叩くぞ！」

直ぐ様、アルウラネを《戦車》のアルカナである『トリグラフ』へと切り換え、《龍の咆哮》で自分を強化し、花村に目で合図する。

それに一つ頷いて、花村が真つ先に動き、ジライヤが巻き起こす豪風がシャドウを仰け反らせた。

そして、そこに突っ込む様にして、《チャージ》で更に力を高めたトリグラフが手にした剣を振りかざして、全力の一撃を『シャドウ』の虚空に浮かぶ目に突き刺す。

その一撃に呻き声を上げながら顔を覆った『シャドウ』は、その頭上にタケミカツチに投げ上げられたトモエが、コノハナサクヤの力を受けて、その手の刃に焔を宿らせているには気が付いていない。

タケミカツチは意識をトモエに逸らさせまいと、《デッドエンド》を

『シャドウ』へと叩き込む。

そしてその直後に、トモエの刃が『シャドウ』の顔を、焼きながら深く切り裂いた。

それらの攻撃により、顔の半分以上を損壊させた『シャドウ』は、大きな叫び声を上げる。

鼓膜をビリビリと震わせるその振動に顔を顰めていると、里中さんが気を失ったかの様に倒れた。

「不味いよ！今の叫び声には、気絶させる効果があるみたい！」

両手で耳を塞いでいる花村と天城さん、それに巽くんは無事の様だ。

自分は、どうやらトリグラフが偶々、気絶にならない耐性を持っていた為無事だったらしい。

「天城さん、里中さんを！」

天城さんに里中さんを回復させる様に指示し、その間に天城さんや里中さんに攻撃が集中するのを防ごうと、トリグラフから《剛毅》アルカナの『ハヌマーン』に切り換えて召喚する。

物理ダメージが通り辛く、氷結属性を無効化するハヌマーンは、この『シャドウ』との戦いには最適だ。

ハヌマーンには《ヘイトサーチャー》という能力があり、敵の攻撃対象を己に固定する事が出来る。

敵の攻撃が集中する為リスクな能力ではあるが、こういう状況下では有難い。

そして、敵の狙いが固定されるという事は、その動きを予測し易くなるという事だ。

『シャドウ』は凍て付く鋭爪をハヌマーンに叩き付けて来たが、それは正面切って迎え撃ったハヌマーンにかすり傷一つ負わせる事無く、逆にハヌマーンからのカウンターで仕掛けた《剛殺斬》は『シャドウ』の爪を砕いた。

そして、タケミカヅチとジライヤの追撃により、『シャドウ』の右腕は、僅かな布地で辛うじて繋がっている様な状態にまで破壊される。

『何故だ……』

何故、無駄な事の為に、何処からそんな力が湧いてくる……!」

『シャドウ』はそう吼えて、周囲をまとめて薙ぎ払おうと千切れかけの右腕を振り翳した。

「行くよ、千枝!!」

その攻撃を迎え撃ったのは、天城さんと、気絶から《アムリタ》で回復した里中さんである。

コノハナサクヤが巻き起こした業火は、二人の友情が成し遂げているのか、トモエを傷付ける事無く逆にその力となるかの如くその身を覆った。

そして、火炎の力を己がものとしたトモエの渾身の一蹴りは、『シャドウ』の右腕を、胴体部分から離断させる。

離断された右腕は忽ちの内に黒い塵となって霧散した。

『何故、抗う事を止めない……!?!』

例えお前達が勝っても、その先にあるのは苦しみだけだと言うのに……!」

『シャドウ』はそう吠えながら、残った左腕で再度あの《魔手ニヒル》を放つ。

「クシナダヒメ!」

だがそれは、《永劫》アルカナの『クシナダヒメ』による《テトラカーン》で弾かれ、逆に『シャドウ』の身を削った。

『シャドウ』は反動で大きく仰け反り、硬直する。

今がチャンスとばかりに、イザナギに切り換えて、《マハタルカジャ》で皆の強化をし、《ラクンダ》で『シャドウ』の防御力を削った。

豪風が、雷撃が、業火が『シャドウ』の身を壊していくが、それでもまだ『シャドウ』は持ちこたえる。

「氷結魔法、来るよ!」

反撃とばかりに『シャドウ』から放たれた《マハブフーラ》は、ジャアクフロストによって遮られ、天城さんには届かない。

「天城さん、花村、私に合わせて!」

「おう!」「分かった!」

《コンセントレイト》から繋げた《アギダイン》は、全てを一瞬の内

に焼き滅ぼすかの様な業火となる。

そこに更に天城さんが《アギダイン》を重ね、花村が《ガルダイン》を重ねる事で、劫火を巻き込んだ触れるモノ全てを灰塵に帰す強大な竜巻が完成した。

それは『シャドウ』を呑み込み、その身体を燃やしていく。

炎に身を焼かれながらも、『シャドウ』は言葉を連ねた。

『【真実】など、不確かで元より存在するかも分からぬモノ……。』

何故それを、己を苦難に晒してでも求めるのだ……!』

『シャドウ』の言う通り、『【真実】に確たるカタチ等はない。

あやふやで、何を以て【真実】と成すのか……それすらも不確かである。

どんな物事でも、それに疑問を持ち問い掛けなければ、ただ過ぎていくだけの事象に過ぎない。

だが。

……この世のあらゆる事には因果がある。

それを己が理解出来るか否かは別として。

どんなに理解不能に感じる現象でも、そこには必ず何かしらの原因があり、それ故の結果があるのだ。

何かし方が起きた結果として、事実が生まれる。

【真実】とは、その事実の原因だ。
なればこそ。

【真実】もまた、それを掴めるか否かは別として存在する。

ならば、掴んでみせるまでだ。

……きつと、その術は、存在するのだから。

【真実】はある。

そして、それを掴む方法も……きつとある筈!

【真実】を探す事は、無駄なんかじゃ無い!」

それに、【真実】を求める事を『シャドウ』は苦難だと言うが、それは違う。

何事も、向き合う事とは“痛み”を伴うものだ。

だが、その“痛み”から逃げ出したとて、そこにはまた別の痛みや

苦しみが待っている。

全てから目を反らし耳を塞ぎ己の内へと閉じ籠った所で、『己』が存在するのであれば、何かしらの苦しみからは逃れられない。

そもそも。

意志ある者が生きていく上で、無痛などは有り得ないだろう。

それこそ、夢幻の中にしか無いし、それですら、己を夢で固めていたとしても苦痛とは無縁になれない。

結局は、己が何を選択していくのかという問題に過ぎない。

だからこそ。

「痛み」から逃げずに、己が心の信じるまま望むままに向き合いたいと、自分はそう思うのだ。

『……そうやって、己を更なる苦難に晒すのか……』

全く、理解し難いが……。

それもまた……』

『シャドウ』は、そう言い遺して炎の中へと消えていった。



怪物の姿が炎の中に消え、クマに似た姿の『シャドウ』だけが後に残った。

ペラペラになったクマは、器用にもその状態で歩き、『シャドウ』へと向き合う。

「クマ……クマは、自分が何者か分からないクマ……」

『シャドウ』は、何も言わずにクマの言葉に耳を傾ける。

「ひよっとしたら、答え無いのかも……」

なんて、確かに時々、そんな気もしたクマ……。

ただクマは、今ココにいるクマよ……。

クマは、ココで生きてるクマよ……」
己の心中を、クマはそう吐露した。
自分が何者なのか、分からない。
答えなんて、無いかも知れない。
だけど、自分は今ここに生きている。
……それだって、立派な一つの答えだ。
だから……。

「見付かるよ」
迷わずにクマにそう答えた。

「センセイ……。」

ホントに、見付かるクマか……?」

見上げてくるクマに、一つ頷く。

クマの疑念通りに、今のクマに「答え」など無いのだとしても。
それならば、今からその「答え」を、クマが胸を張ってこれが「自分」なのだと思える何かを作っていけば良い。

「自分」なんて、生まれた瞬間から存在するのではなく、成長していく過程で育まれていくものなのだから。

「必ず、見付かる。」

クマは一人じゃない。

私が……皆が居る。

だから、一緒に探していこう。

クマの「答え」っていうヤツを」

そう微笑みながら言うのと、クマは感極まったかの様に目に大粒の滴を浮かべながら訊ねてくる。

「クマはもう……一人で悩まなくても、良いクマか……?」

それにクマ以外の全員で深く頷いた。

「そんなに深く悩む前にさ、誰かに相談してみりゃ良かったんだよ。
ま、こーなる前に気付いてやれなかったってのはあつからな。

しゃーねーし、一緒に探してやるよ」

仕方が無い、等と口では良いながらも、花村は真剣な目で笑って頷く。

「あつたりめーだろ、水臭え事言いやがって」

巽くんは、ヘツと笑って言う。

「そっだよ、クマくんは仲間じゃん!」

里中さんは、クマを元氣付ける様に笑みを浮かべる。

「この世界の事を探っていくうちに、クマさんの事も、きつと分かると思っ」

天城さんも、優しい顔でそう答えて頷く。

クマは皆の言葉に、まるでダムが決壊したかの様に、滂沱と涙を溢す。

「……み、みんな……!」

クマは……クマは……。

クマは果報者クマね……。

おおよよ……

クマのそんな様を見て、『シャドウ』は何も言わずにゆっくりと目を閉じて、青い光に包まれながら、ペルソナへと変じて行き、やがて一枚のカードとなってクマの元へと舞い降りた。

「これ、クマの……ペルソナ?」

まだ涙を浮かべながらも、クマは驚いた様に言葉を溢す。

久慈川さんが微笑みながら、そっだと頷いた。

「それ……すごい力、感じるよ……。

よかったね、クマさん……」

そして、その直後に。

力が抜けたかの様に久慈川さんはその場に崩れ落ち、それを咄嗟に支えた。

「大丈夫か、久慈川さん!」

慌てて声をかけると、久慈川さんは弱々しく頷く。

不味い、大分消耗している様だ。

「そっだよ、イキナリ戦闘だったもんね……。

ゴメン、無理させて……。

イキナリこんな所に放り込まれて、すんごい疲れてたのに……」
里中さんは申し訳なさそうに、そう謝った。

だが、それには久慈川さんは首を横に振る。
戦いに参加したのは、久慈川さん自身の意志だったのだから、と。
……今はとにかく、一刻も早くこの世界から出た方が良いでしょう。

◇◇◇◇◇

久慈川さんを自分が背負い、クマは巽くんに任せて、何時もの広場まで戻ってきた。

「りせちゃん、大丈夫？」

もうちよつとで外だからね？」

天城さんが気遣わし気にそう声をかけると、久慈川さんはコクリと頷くが、クマの方へと心配そうな視線を向けた。

回復魔法をかけても、クマはペラペラのままだった。

クマの身体には詳しくないが、この状態は良くは無いだろう。

クマが心配なのは、自分達も同じである。

「……お前、大丈夫か？」

オレら、戻んなきゃなんねえけど……」

心配そうにそう異くんが声をかけると、クマは何かの決意を感じさせる目で、暫く一人にして欲しい、と答える。

「自慢の毛並みも、カサカサでボロボロだし。

鼻も利かんで、皆に迷惑をお掛けしてるし……。

だから……」

と、突然クマは広場の床に寝転んで、唐突に腹筋トレーニングを始め。
め。

「毛が生え変わるまで、トレーニングにハゲしく励むクマ！

誰も、オラを止める事は出来ね！

あ、ソーレ！」

唐突な出来事に、皆呆然とする。

そんな中、比較的早くに復帰した花村が、何かとクマに訊ねても。

「話し、かけ、ないで、欲しい、クマツ!!」

あ、ソーレ! ふんっ! ふんっ!

あ、ソーレ! ふんっ! ふんっ!」

熱い気持ちを感じさせる目のまま、クマは淡々と腹筋に励み続ける。

どうしたものか、と皆が視線を行き交わしていると。

巽くんが、そっとしておこう、と言い出した。

「男には、一人で越えなきゃなんねえ時が、あるもんなんだよ……」

……巽くんには、何か伝わった様だ。

そんなハイブローな話なのかと里中さんは首を傾げたが、クマが腹筋を止める気配が無い以上は、放っておくしか出来ない。

……クマなりに、色々と思つての行動なのだろう。

ならば、自分はそれを見守るまでだ。

何はともあれ、久慈川さんは一刻も早く休ませなければならぬ。

丸久さんまでは、里中さんと天城さんが送っていく事になった。

里中さんは、クマにエールを送ってから、天城さんと共に久慈川さんを連れて向こうへと戻る。

花村と巽くんも、それに続いた。

自分も、クマにエールを送ってから向こうへ帰ろうとした所、トレーニングを続けるクマに呼び止められる。

「前にも、言った、けど、センセイの、力には、どこか、特別な、ものを、感じる、クマよ!」

腹筋を止めない為、妙なリズムであるが、クマはそう言う。

特別……。

『ワイルド』の力の事だろうか……。

それとも、クマにしか……この世界の住人にしか分からない何かなのだろうか……?

「きつと、クマにも、クマだけの、役目が、ある!

センセイと、いると、そんな、気が、する、クマ!

だから、それを、探す、ために、強く、なる、クマ!

クマーツ!」

クマの燃える様な瞳を見て、一つ頷いた。
クマだけの役目……。

それが何かは分からないが、あるのだとしたら、それを見付けられた時、きつとクマの「答え」にも繋がる筈だ。

クマは「己」と向き合い、『ペルソナ』を得た。

ならば、探していけば、その役目とやらも見付かるかもしれない。

「そうか。……きつと、見付かるよ」

腹筋を続けるクマに一つ微笑んでから、向こうの世界へと帰還した。

……

……

……

……

▲▼▲▼▲▼

向こうの世界から帰還すると、もう夕刻と言うよりは夜に近い時間帯であった。

早く帰って、夕飯の支度をしなくては……。

そう思いながらジュネスで食材を買っていると、メールが入った。

叔父さんのケータイからなのだが……どうやら送り主は足立さんからの様だ。

何やら叔父さんたちは二人で飲んでいるらしく、夕食は多分要らないであろうという事と、叔父さんは足立さんが家まで連れて帰ってくれるがベロンベロンに酔っているであろう、という主旨の事が書かれていた。

……何があったかは知らないが……。

取り敢えず、明日の朝食は二日酔い対策のご飯にしておこう。

足立さんも酔っているだろうから、泊めていった方が良さかもしれない。

ない。

朝食は足立さんの分も用意するとして、足立さんが泊まる用意もしておこう。

◇◇◇◇◇

菜々子と二人で夕飯を食べ終え、叔父さんの部屋に布団を敷いてその帰りを待っている、玄関が開く音がした。

「かえってきたー！」

菜々子に頷いて、玄関まで出迎えに行く。

足元が覚束無くなる程に酔った叔父さんと、それに肩を貸している足立さんが立っている。

「叔父さん、お帰りなさい。」

お布団はもう敷いてるんで、何時でも寝れますよ。

足立さん、叔父さんを連れ帰ってくれて、有難うございます。

足立さんも酔っている様なので、良かったら泊まっていって下さい」

そう声を掛けると、足立さんは酔っている赤い顔を上げた。

「えっ？ ああ、悪いねえ、悠希ちゃん。」

て、あ！ ホラ堂島さん、前、危ないですよー！」

足立さんがそう警告するも、酔った叔父さんは三和土の段差に蹴つ躓いた。

足立さんを巻き込んで膝を付きそうになった所を、慌てて支えると、物凄いアルコールの臭いが鼻に付く。

叔父さんの様子を見ても分かるが、これはかなり呑んできた様だ。

「いって！ あー、悠希い、すまんなあ。」

……つたく、誰だ！

こんなところに段作ったヤツあ」

「大工ですよ。」

てか家にツツコんでないで、ほら。

あ、悠希ちゃんありがとうね」

かなり呂律が回っていない叔父さんに対して、足立さんは一応ハツキリしている。

あまり呑んでいないのか、単純に叔父さんよりもアルコールに強いのだろう。

足立さんと二人で叔父さんに肩を貸して、居間まで連れていった。

「おーおー、帰ったぞおー。」

菜々子ただいまあ、ただいまなあ」

「お、おかえり……」

居間で自分を出迎えた菜々子に、叔父さんは酔った人特有のテンションでその声を上げる。

それに引き気味に菜々子は返事を返した。

そのままソファーまで連れていき、そこに叔父さんを座らせると、ぐでーとなつてしまった。

「ふー、やれやれ……。」

いくらなんでも飲みすぎだよ、ハハ」

「これが……ヒック！」

飲まないで……やつてられるかってんだ！

つたく、あのガキ偉そうに……」

叔父さんの様子を見て苦笑いした足立さんに、ソファーに体重を預けながらも叔父さんはそんな抗議の声を上げた。

叔父さんのネクタイや上着を回収しつつ、「ガキ」と言う言葉に首を傾げる。

「こつちあな……こつちあ、オメーらがランドセルだった時分から

……このショールバイやってんだ！」

何故か叔父さんの視線がこちらに向いていた。

……何か自分が仕出かしてしまったのだろうか？

そんな心当たりは無いが……。

自分が不思議そうな顔をしていたからか、足立さんが苦笑いを浮かべながら説明してくれた。

「実は、県警から”特別捜査協力員” ってのが送り込まれて来たんだよ。

いやほら、4月からの連続殺人に、あんまり進展が無いからさ……はは。

で、その協力員ってのが、名の知れた私立探偵事務所のエースらしいんだけどさ。

会ってビックリ、君くらいの子供なんだよ！

頭はやたら切れるって話だけど……」

……成る程。

察するに、その”特別捜査協力員” に捜査に口出しされたりして苛立っていたのだろう。

こちらに視線が向いていたのは、似た様な年頃だから、か。

しかし、高校生位の年頃で、”特別捜査協力員” として呼ばれるとは、凄まじい人も居たものだ。

これぞ、ホンモノの”高校生探偵” というヤツなのだろう。

コナンくんしかり、金田一少年しかり。

創作物の中で位にしかお目にかかれない存在だ。

純粹に、凄いなという感想しか浮かんでこない。

こちらが、その会った事は無いだろうその”特別捜査協力員” に感心していると。

足立さんの言葉で思い出したのか、叔父さんは苛立ちを顕にした声で愚痴を溢す。

「ただのガキだろ、あんなの。

役に立つワケねーよ、ヒック。

やれ推理、推理、推理……ケツ。

エースだかなんだか知らんが、ガキの遊びに付き合わされる身にも、なりやがれてんだ……。

バカにしやがって……ヒック」

そんな叔父さんの言葉を、困った様な表情を見せながら、足立さんは補足した。

「……その彼ね、『難事件を解く力になれば報酬は要らない』なんて

言っちゃっててさ。

おかげで上がすつかり気に入っちゃって、僕らも断れなくて……」

「足立ッ！」

そう嘆息しつつ、ペラペラと内部情報を洩らす足立さんに、叔父さんの叱責が飛んだ。

「どうやら、その”特別捜査協力員”がやって来たのは、足立さんがあの久慈川さんを盗撮しようとしていたストーカー紛いの変質者のなファンを、誘拐未遂犯として引っ張ってしまってしまったかららしい。」

……。

言うだけ言って叔父さんは寝落ちしてしまう。

そんな叔父さんを布団まで運んでから居間に戻ると、足立さんもややウトウトとし始めていた。

泊まっていくか再度訊ねると、足立さんはコクリと頷く。

足立さん用に、居間の卓袱台を動かして布団をそこに敷いた。

そして、用意していた寝間着代わりの服を渡し、上着等を回収する。明日また着ていくだろうから、アイロンがけ等を行っておくつもりだ。

洗濯物を洗濯機に放り込んでから居間に戻ってくると、足立さんも寝息を立てている。

「……おさげくさいね……」

ポツリと呟かれた菜々子の言葉に、全力で頷いた。



『彼岸と此岸の境界線』

【2011／06／26―2011／06／29】



【2011／06／26】

久慈川さんの救出に成功してから、一夜経った。

……久慈川さんは、まだ寝込んでいる様だ。

まあ、あの世界に居た事による疲労もあったというのに、更に情報支援担当とは言えペルソナを使って戦いもしたのだ。

天城さんや巽くんよりも、確実に消耗していただろう。

ゆっくりと身体を休めて、元気になって欲しいものだ。

自分はと言うと、特にこれと言った問題は無く、気力体力共に充実している。

今日はマリーに頼まれ、八十神高校まで連れていく事になった。

休日ではあるが、入れない訳でも無いだろう。

「キミってさ、毎日『学校』行ってるんでしょ？」

それって、飽きないの？」

「いや、楽しいよ」

『飽き』が全く無い訳でも無いが……。

それでも、同じ『毎日』など無いのだし、大きいもの・小さいものの区別は付け難いが日々変化はしている。

その変化を見付けるのもまた、楽しくはある。

高校に通う日数など900日も無いのだから、楽しまなければ損だ。

「楽しい……？ あ、テレビあるって事？」

『野次馬ゲノー速報』見える？」

マリーは何かを誤解している様だが、楽しそうだし放っておこう。

と、言うよりも、やたら『野次馬ゲーノー速報』を推すな……。
そんなに気になつていゝのだろうか、その番組が……。

『楽しい』『テレビ』』という図式も如何なものだろうか。

その時、T字路の向こうから花村が歩いてきた。

そして、こちらを見て驚いた様な顔をする。

「あれっ、鳴上！ それにマリーちゃんも！」

どーしたんだ？

そっちの方向つて学校だぜ？」

休みの日なのに、態々通学路を歩いているのが不思議に思えたのだらう。

「ああ、マリーに学校を案内しようと思つて。

花村も一緒に来るか？」

「学校見学つて事か……。

ウチの学校、見てて楽しい所あつた様には思えねーけど、マリーちゃん他校生だからそれでも良いんか。

そーゆー事なら俺も一緒に行くぜ。

八十神高校へようこそ、つてな」

花村も加えて、一路八十神高校を目指した。

◆◆◆

今日は休日だから、クラブ活動等で用事がある人を除いて、校内に殆ど人は居ない様だ。

取り敢えず、という事で二年生の教室が並ぶ教室棟二階へとマリーを連れていく。

「ここが俺らのクラスの教室。

レトロな感じでこじんまりしてゐるっしょ？」

「……広い」

半ば自虐的に花村はそう言つて教室を見せるが、ポツッとマリーは

眩いて、興味津々の顔で窓硝子越しに教室の中を覗く。

教室の広さは平均的かやや狭い位だろうけれども、それでもあのベルベツトルームよりは広いだろう。

何せ、あそこは車内なんだし。

「えっ、そうか？」

まあムダに敷地は広いから、校庭も入れれば広い、かな。

てか、マリーちゃん所ってどうよ？

「やっぱ都会だから狭い？」

そう言えば、花村は(というよりもマリーと出会ったほぼ全員が)マリーを引越す前の学校からの友達、だと誤解していたのだった。

ベルベツトルームの事は説明し難いし、あまり不都合は感じなかった為、誤解をそのままにしてあるが……流石にそろそろ修正しておかないと、齟齬が洒落にならないレベルにまで広がりかねない……。

「私の所？」

………。狭いよ。部屋、一つしか無いし。

狭いし、暗いし、鼻喋らないし。

ずっと黙ってるから、つまんない」

学校の事について訊ねられたというのにも関わらず、案の定、マリーはベルベツトルームについての話をしてしまう。

まあ、マリーはそこしか知らないのだし、仕方無いのだけれども。

「ひとつっ！？」

てか、狭いし暗いって、何じやそりや!？」

ハナって誰だよ、先生か!？」

ずっと黙ってる先生とか、職務放棄もイイトコだろ、ソレ!!」

花村が至極マトモな感性からツツコミを入れるが、マリーは意に介さず、興味の赴くままにフラフラと校内を歩き出す。

「何っ！か、相変わらずだなー、あの子……」

花村はそう溜め息を溢しながらも、マリーを追い掛けた。

マリーはフラフラと歩きながらあちらこちらを見て回る。

職員室の前まで来た時、不意に職員室のドアが開いて、中から何故か巽くんが出てきた。

「ん、先輩ら何してるんすか、こんな所で？」

「学年案内、かな。マリーに頼まれて。」

と、言うよりも巽くんこそ、何で学校に？」

しかし、巽くんが答える前に、マリーが巽くんを指差して声を上げる。

……他人を無闇に指差してはいけないのだ、と今度教えてあげなくては……。

「あつ、オッサンだ」

「だから、オッサンじゃねーつつつてんだろ!!」

コンマ秒単位の反応速度で、巽くんは即座にマリーに反論する。

うん確かに、巽くんはオッサンではない。

少し実年齢よりも上に見えるのは確かだけれども。

「ちよつ、完二。」

お前、オッサン扱いされてんの!？」

マジかー、と花村は爆笑する。

それにヘソを曲げてしまったかの様に、巽くんはそっぽを向いて舌打ちをした。

それを取り成して、もう一度、何故休みの日なのに学校に来ていたのか巽くんに訊ねると、どうやら出席日数と成績の事で呼び出されていたらしい。

最近は多少真面目に来ていたとは言え、4月・5月はほぼサボっていた為、中々危ないのだとか。

そしてそれに輪をかけて危ないのが前回の中間試験だった様だ。

7月に行われる試験の結果如何では、夏休み中に補習が課される事も視野に入れなくてはならないらしい。

「補習にかかると、それよっぽどだな。」

「つーか、お前何点位だったんだよ、前の中間」

呆れた様に言う花村は、大体学年順位で中間層の若干下辺りとほぼ中間をゆらゆらと揺蕩っている感じの成績だ。

里中さんも大体その辺りで、天城さんは学年上位一桁にいる。

対する巽くんはと言うと……。

少し気不味そうに自己申告してくれたその点数は、確実に下から数えて直ぐの順位だろう。

ブービーとかかもしれない。

うん、相当に危ない点数だ。

特に理数系が苦手らしく、辛うじてある点数は択一式問題で勘で選んだ答えが偶々合っていただけなのだとか。

「何っーか……。」

イジるのも躊躇する様な点数だな、そりゃ」

「補習の条件は、三科目以上で赤点を取るか、総合点が赤点になった場合、だったっけ……?」

「今から頑張つて勉強すれば……脱赤点なら……何とか……?」

なる、のだろうか……。分からない……。」

巽くんの点数を聞く限り、断定は無理だ。

「流石に補習なんてなったら、お袋パンチが飛んでくるっス……。」

……何とかならねっスかね、先輩……。」

「俺が教えてどうにかなる様な点数じゃないしなー……ソレ。」

つか、俺の方こそ誰かに勉強教えて貰いてーよ」

巽くんが溜め息混じりにそう呟くと、花村はそう返した。

「あつ、花村先輩にはそういうのは期待してねっス」

「思つてても言うなよ!」

キレのあるツツコミが飛ぶのを見て、話についていけてなかったマリリーがキョトンとした顔で首を傾げる。

「ほしゅー?…つて、大変なの?」

あかてん、とかよく分かんないけど」

「ああ、うん……。」

色々よね、大変なんだよ。

学校生活も楽しい事ばかりじゃないしね」

「ふーん……。」

それなのに、学校行ってるんだ……。」

よく分からない、とでも言いた気な顔でマリリーは呟く。

ここにきてマリリーとの齟齬をハッキリと認識した花村が、どうい

事だとばかりに訊ねてきた。

「鳴上？ マリーちゃんって、お前の前の学校での友達なんだよな？」

「いや……、学外での友人だ。」

マリーには色々と特殊な事情があつてだな……。

説明は少し難しいんだが……。

まあ、極端に世間の常識に疎い子だと思つててくれ」

そもそも、多分（というより十中八九）人間ではない。

更には、ベルベットルームにやつて来る迄の記憶も無いという事も判明している。

特殊過ぎる存在だ。

「特殊な事情……ね」

花村はまだ色々と納得はしかねている様だが、一先ず追及する事は止めてくれた。

尚、巽くんはどうでも良いというよりは、よく分かっていない様で「？」を浮かべているかの様な顔をしている。

一々ツツコむ必要性など無いから、ここは放っておこう。

話題の渦中にあるマリーはと言うと、我関せずとも言いた気な様子であつた。

火災警報器に興味を示したらしく、どうしても押したくなる衝動にかられる（小学生位だと実際に押ししてしまう人もいる）あのボタンに視線が釘付けだ。

放置すると押しかねなかつたので、マリーの腕を取って、実習棟の方へと引き摺っていった。



校舎内をマリーに案内して周り、最後に連れてきたのは屋上だ。

フェンスの向こうに見えるグラウンドでは、運動部が休日練習を行っているのが見える。

「ここが俺らの溜まり場だな。」

「どーよ、青春するには悪くないロケーションだろ？」

「……セーシユン？」

「セーシユンって、何するの？」

「具体的に」

花村の言葉にマリーは首を傾げ、花村に問う。

すると、花村はあからさまな程に狼狽した。

「ぐ、具体的にっ？」

「えーつとだな、……。」

友情を育んでみたり、悩みを打ち明けてみたり……とか？

言葉にすつとかなり気不味いな、コレ……。」

普通は『青春』と言われれば、具体的には言われなくても、大多数の人にはある程度の共通する認識が成されている。

しかし、マリーはそういう共通する認識についての知識は極めて乏しい。

花村の説明でも納得がいかなかったのか、マリーは再び首を傾げた。

「……分かんない。」

あの緑とか、赤の人も？

してるの？ セーシユン」

「勿論。」

あと、緑の人とか赤の人、じゃなくって、里中さんと天城さんだから」

一応、訂正を入れておく。

マリーの認識が改まるのかは分からないが……。

「……何でセーシユンするの？」

ヒマだから？」

まだ疑問があるのか、マリーは再度花村に訊ねる。

「えっ、まだ言わないとダメな感じ!?!」

「……そんな難しく考える必要ねーだろ。」

自分自身に向き合うのに、理由なんざ一々要らねー」

花村が困った様に視線を彷徨わせていると、巽くんが頭を掻きながらそう言った。

「ああ、うん。」

完二の言う通りだな。

自分自身に向き合う為にも、それで本当の自分を見失わない為にも、上っ面の付き合いとかじゃなくなつてき、必要な事一つか……。

……やっぱ、ハズいな、これ。

もう勘弁してくれ……」

花村はそう言つて手で顔を覆つてしまう。

耳が少し赤い……。

余程恥ずかしかつたのだろう。

「……本当の、自分。」

……自分自身に、向き合う……」

花村の言葉に思う所があつたのか、マリーは考え事に耽る様な目でそう呟いた。

「気になるのか？」

本当の自分自身、というものが」

「……ううん、ならない。」

だって、ホントの事なんて、……無いもん」

マリーはそう答えるが、しかしまだ何か考えている様に微かに目を伏せている。

……マリーには記憶が無い。

その事で何か考えているのだろうか……。

マリーに声を掛けようとしたその時、花村の声がそれを遮る。

「その話終わり！」

見るモン見たんだし、もうそろそろ帰ろうぜ、なっ!!」

また話を振られては敵わないとばかりに花村がそう強引に締め、学
校案内はそこで終わった。



マリーをベルベットルームまで送っていった帰りに、商店街の店仕舞いした惣菜屋の前に立っている足立さんに遭遇した。どうやら、今晩も閉店までに間に合わなかった様だ。夕飯に誘ってみると、足立さんは少し嬉しそうに乗ってくる。そのまま足立さんと二人、家へと帰った。



今日の晩御飯は、ビーフストロガノフだ。

サワークリームを生クリームで代用したり、トマトも放り込んだ日本風アレンジのモノだが。

足立さんの好みにも合った様で、旨い旨いと言いながら、皿に多目に盛り付けたビーフストロガノフをペロりと平らげてしまった。

腹が満たされて気を良くしたのか、足立さんは突然「勉強、見てあげようか？」と言い出す。

どうしようかな、と一瞬考えていると、足立さんはニヤつと笑って続けた。

「なーんてね、冗談冗談。」

君の勉強見るの長そうだからヤだし。

菜々子ちゃんの位の位のならいいんだけどねー」

足立さんの言葉に、菜々子は目を輝かせる。

「菜々子の、いのの？」

あのね、宿題、ある！

かんそうぶん、だつて！」

「かんそうぶん……？」

あー、読書感想文かあ。

コツ知ってれば楽なもんだよ。

後書きだけ読んで、まとめるの。

中身は読まなくてもオツケー」

……ギリギリまで読書感想文を貯めて提出間際になってから焦る学生のやりそうな事だ。

そもそも、菜々子の歳位の子供が読む本の場合、後書きを読むよりは普通に内容を読んだ方が感想文は書き易いだろう。

と言うか、菜々子に何を教えるつもりなんだ、足立さんは。

「読まないの？」

本を読んで、思ったこと書くって、先生言ってたよ？」

「大丈夫大丈夫。」

そういうのは要領よくいかなきゃ」

「要領よく、というのは確かに一理ありますが。」

いきなり手抜きの方法を教えるのはどうかと思いますよ？」

要領よくやろうとするのは、別に間違いではない。

極力手を抜こうとするのも……。

まあそう誉められた事では無いのは確かだが。

手間を省こうと努力する事によって、世に生み出されてきたものは多くある。

しかしまあ、まだ小学生になったばかりの菜々子に、いきなり手抜き感想文の書き方をレクチャーするのは良くない。

そう言うのと、足立さんは愉快そうに笑った。

「あはは、まあねー。」

悠希ちゃんは真面目だなー。

ま、それよりほら、菜々子ちゃん。

本持つてごらん」

「あつ、かんそうぶんじゃなかった！」

えつとね、本を読んで、それでそのしるしをもらうんだって」

成る程、読書感想文ではなく、音読してこいという宿題だった様だ。

「あ、そう。良かったね、簡単なので。」

読めば良いだけなんだし……って、印？

あー……堂島さん、今日は遅いんだよなあ」

どうしたものかと、足立さんが頭を搔くと、菜々子が何かを期待する様な目で足立さんを見た。

「あだちさん、しるしくれる?」

「えー、僕?」

……良いよ、上手かったら花丸あげる」

菜々子の言葉に少し驚いた様な顔をした足立さんは、優しく何時もとは違う笑みを浮かべる。

「花丸、ほしい!」

「はは、じゃあ、スタート」

花丸の言葉にはしゃいだ声を上げた菜々子は、足立さんに促されて音読を始めた。

「ふかいふかい森のおく、ほそいほそい川のそばに、ピンク色のワニがすんでいました……」

菜々子が音読しているのは、『ピンク色のワニ』という絵本だ。

目を惹く可愛いピンク色のワニが目立つ表紙から連想される明るそうな雰囲気とは裏腹に、ストーリーラインは中々悲しいものだった。

ピンク色のワニはその奇妙な色の所為で、仲間たちの輪に入る事も出来ずずっと独りぼっち。

色が目立ち過ぎて、エサを取るのも難しい。

そんな中、やっと出来た友達の小鳥を、ピンク色のワニは間違えて食べて殺してしまう。

それを嘆き悲しんだワニは、その涙で湖が出来る程泣き続けて、そして死んでしまった。

ワニの涙で出来た湖は、多くの動物たちの糧になる。

……動物たちは誰も、ピンク色のワニが居た事を思い出さない、そもそもワニが死んだ事にすら気が付かない。

動物たちの生活を支えているその湖が、ピンク色のワニが流した涙で出来ているとは、彼ら自身は知らない。

……それでも、ワニが生きた意味、それは多くの動物たちへ影響を与えている。

……と、まあそういう話だった。
あまり子供向けの話ではない。

奥付けを見ると、どうやらこの絵本は2010年に出版されたものらしい。

……どうやら、作者の処女作にして遺作になってしまった様だ。

この神木という作者（恐らくはペンネームではなく本名だろう）が何を想いこの物語を書いたのかは知らないが、『ピンク色のワニ』に深い思いを抱いていたのは確かだろう。

菜々子が読み終わると、足立さんが印を貰う用の紙に花丸を描く。

キレイなその花丸に、菜々子は歓声を上げて喜びを表した。

「はは、良かったね。」

で、悠希ちゃんは？

何か花丸欲しいのとか無いの？」

ニヤつと笑う足立さんの言葉に、首を傾げながらも考えた。

花丸……。

そういうものを付けられそうなのが自分にあっただろうか？

「花丸ですか……？」

……何かありましたかね？」

「いや、それを僕に訊かれても。」

あー、君の料理なら花丸あげられるね、うん」

逆に足立さんに訊ねると、足立さんが想定外の質問に少し困った様な顔をした後、あつと思いついた様に頷いた。

「えつと、有難うございます」

「君さ、大人びて見えるけど、でも、結局まだ高校生でしょ？」

何かあったら、素直に大人に頼りなよ？

別に、僕に頼れとは言わないからさ」

……足立さんなりの気遣いを感じる。

素直にそれに頷くと、足立さんはハアつと溜め息を吐いてソファにゴロンと横になった。

「あー、疲れたなあ……。」

ちよつと寝てつて良い？」

「構いませんが……、どうかしたんですか？」

訊ねてみると、足立さんは困った様に頭を掻きながら話してくれる。

「んー……、例のお婆さんが、署にお見合い写真持ってきちゃってね。良い子だから会えだとか何だとか……、お陰で残業しなきゃだし。はあ、結婚とか有り得ないっての」

その言葉に菜々子が首を傾げた。

「けっこん、いやなの？」

菜々子位の年頃の女の子だと、《結婚》とは遠い未来の出来事だ。結婚式のきらびやかなウエディングドレスの様なものに憧れを抱いたりする年頃である。

《結婚》が嫌、というのはあまり分からない感覚であろう。

そんな菜々子に苦笑しながら足立さんは頷いた。

「結婚は人生の墓場だよ。」

菜々子ちゃんも、あと20年もすれば分かるんじゃない？

つて言うか、菜々子ちゃんの旦那さんになる人つて、堂島さんがお義父さん”になるのか……。

……わー、無理だなー。

菜々子ちゃんは無理だなー」

そもそも年齢的に厳しいものがあるだろう。

が、それにしても……。

「菜々子を指して無理だとか、聞き捨てなりませんね。」

どういう意図でその様な発言をしたのか、詳らかに説明して下さい」

足立さんの発言の意図を問い質すと、足立さんは肩を竦めながら答えた。

「えー、や、だって、ねえ？

無理じゃない？

ごめんね、菜々子ちゃん」

足立さんにそんな言葉を言われた菜々子は、ムウツと頬を膨らませながら反論する。

「……菜々子だって、やだもん。」

くつ下に穴あいてるひと、やだもん！」

「空いてませんー」

「こないだあいてたよ！ 菜々子見たもん！」

菜々子と下らない言い合いをした後、叔父さんが帰ってくるまで足立さんは眠った。



【2011／06／27】

放課後、小西くんに誘われて商店街の愛屋にやって来た。

「旨いっすよね、こーい。」

家近いし、よく来てたんですけど、最近あんま来てなくて……」

「……少し飽きた、とか？」

何せ同じ商店街の中にある店なのだ。

通い過ぎて少し飽きる、という事はあるだろう。

しかし、小西くんは首を横に振る。

「あつ、いえ。」

ガキン頃から来てましたけど、何でか飽きないんすよ」

不思議です、と心底そう思っている様な顔で、手にしている丼を眺め、ふと溜め息を吐いた。

「……ウチの酒屋、今結構忙しいんですけど、……あんま手伝える事とか、無いんすよね……。」

……だって、商売で忙しい訳じゃなくて……」

そこで一旦言葉を止めた小西くんは、微かに目を伏せる。

「マスコミが連日押し掛けてくるってのは減りましたけど、他に事件とかが無かったりしたら急に来る事もあるし……。」

……近所の人たちも、入れ替わり立ち替わりやって来て……。」

……急に泣いたりするんすよ、『まだ若いのに可哀想』って……。
姉ちゃんと話した事なんて無い様な、町内会のおばさんたちまで
……」

そして、目に苦悩を滲ませ、苦し気に息を吐いた。

「で、何時も決まった様に俺に言うんすよ。」

『お姉ちゃんの分まで、立派に生きなきゃね』って……。

……正直、息苦しいです。

……『立派に生きる』って……、何なんでしようね」

まるで独り言の様な小西くんの問いに、少し目を閉じて考える。

『立派に生きる』、ね。

それは外野の人間がとやかく言って決める事ではない。

自分が納得して、それに胸を張れるのならば、それは『良い人生』
だとは思う。

それでも他人からの評価というものも無視しきれない要因では無い。

例えばその人当人にとっては良い人生であっても、それが他人から見
て良い人生に『見えるか』と問われればそうとは限らないだろう。

だが、どんなに大勢の人々から『立派な人生』だと評価されても、
自分自身が納得出来ないならそれは違うとは思うが……。

……難しい話だ。

何を以て『立派な人生』とするのかは、それこそ人各々だろう。

「……私には、これと断言する事は出来ないな。」

……私だって、それを探している途中なのかもしれない」

ただ、小西くんが悩む『立派な人生』とやらは、結局他人からの押
し付けの意見に過ぎない。

それ通りに生きなくてはならないなんて事は全く無いだろう。

言いたい人には勝手に言わせておけばいい。

小西くんの心情を無視して自分の意見を一方的に押し付けてきて
いる輩の大半は、ただ単に（大して知りもしない）隣人の不幸を悲し
んでいる自分に酔っているだけだろうし。

一々マトモに取り合っているだけだろキリが無い。

「鳴上先輩にも……、分からないんすね。」

……難しいっすよね、〃生きる〃って。
もう、生きちゃってるのに……」
そう言って、小西くんは少し途方に暮れた様な顔で、困った様に笑う。

「……鳴上先輩相手だと、何だか要らん事まで話しちやいますね。すみません」

「いや、気にしなくても良いよ。」

小西くんが話したいのなら、好きに話せば良い」

そう返すと、小西くんは少しだけ柔らかかな表情で笑う。

そして、ポツリポツリと少しだけ話をしてから、小西くんとその日は別れた。



見上げた夏の夜空は澄んだ様に晴れ渡り、星の海が一面に広がっている。

稲羽には街灯が少ないからか、街にいる時よりも見えている星の数は多い。

揺らめきながら月と星の光が水面に映し出されている。

絵に描いた様に、穏やかな夏の夜だ。

「ねえ、まだ？」

その時、横に座ったマリーが少し退屈そうな顔でそう訊ねてきた。
「うん、まだだね」

竿を持つ手は緩めず、そう返す。

浮きには何の変化も無い。

もう少し経てば何か釣れる気がするが……。

あくまでも気がするだけだ。

まだ何も掛かっていないのは事実である。

……マーガレットさんから無事に許可を貰ったので、マリーを誘っ

て夜釣りに出掛けた。

ここ最近の色々と忙しかったので夜釣りは少し久しぶりだ。前に来たのは、6月の初めの方だったか……。

マリートを夜に連れ出して良いのは、晴天の時だけらしい。

理由は詳しくは教えて貰えなかったが、夜は昼よりも更に存在が揺らぎ易いので、曇りの時でもダメなのだとか。

夏祭りの時とかは、晴れている様に今の内から祈っておこう。

釣りと言うのは、基本的に待つ時間の方が遥かに多い。

入れ食い状態になるのは滅多に無い事である。

始めてから十数分程待っているが、今の所魚が反応している様子は無い。

最初は興味津々といった風に竿を眺めていたマリイだが、待ち続ける事に飽きがきた様だ。

「これ、どこが楽しいの?」

「うーん……まあ、何処が楽しいのかは人によるとは思うけど、私はこうやって待つてる時間が好きかな。

色んな事をのんびり考えられるし。

それに、今晚はこうやってマリイとゆっくり話す事が出来る」

そう言つて、横で釣り餌用の虫を入れた虫籠を見ていたマリイに目をやると、マリイは何故か頬を少しだけ赤くしてパイツとそつぽを向いてしまった。

「全然意味分かんないし、このてんねん人たらし!

……でも、私も……キミと話すの……嫌じゃないし……」

「……そっか」

マリイのその様子を微笑ましく思いながら視線を浮きの方へとやる。

……どうやら魚が反応しているのか、浮きに動きが見られた。

グイツと浮きが沈んだのを見計らつてアワセを行い、魚の口に針を引っ掛ける。

その途端に、凄まじい力で竿がグイグイと引っ張られた。

これはトンでもない大物だ……!

最低でもオオミズウオ……いや、若しかしたら噂に聞く川の主と言
うヤツなのかもしれない。

「オオモノってやつ?」

「多分ね、もしかしたら川の主なのかも」

油断すると竿ごと持っていかれてしまいそうな魚の力と勝負しな
がらジワリジワリと糸を巻きながら、先程までの退屈そうな色を吹き
飛ばしたワクワクとした目で見ているマリーに頷いた。

川の主に出会うのはこれが初めてだ。

是非ともこの場で釣り上げてみたい……!

「……大丈夫なの、コレ?」

最早折れる直前とでも表現したくなる程にしなる竿を見て、不安そ
うにマリーが訊ねてくる。

「大丈夫、だと思いたいけど……」

釣れるのが先か、糸が切れるか竿がイカれるのが先か……、それは
正直な所分らない。

そう答えると、マリーは意を決した様に、何故かこちらの腰に手を
回してグイツと引つ張ってきた。

……まるで幼い頃に見た『大きな蕪』の挿し絵の一場面の様である。
きつと、マリーなりに手伝おうとしてくれているのだ。

これは気合いを入れなくてはならない。

掛かった時よりは魚もかなりこちらまで引き寄せてきている。

某栄養ドリンクのCMではないが、正に「ファイト、一発!」とで
も叫ぶべき場面だ。

「よーしっ、気合い一発……」

「ペル……ソナーツ!!」

「呼んでどうするのツ?!」

テンションの勢いのままにそう声を上げると、間髪入れずにマリー
が突っ込みをくれた。

「ナイス突っ込みだ。」

そして、気合いを入れたからか、見事に川の主様を釣り上げる事が
出来た。

一般的に、大きな声を上げると力が出しやすくなる。

恐らくは先程上げた声でその効果が出たのだろう。

釣り上げた川の主様は……超巨大に肥大化したアロワナの様であった。

1メートルどころか、葉々子よりも大きい。

釣り上げてなおも元気に暴れている。

多分在来種であろうから川に返してあげるつもりではあるが、その前に記念撮影と洒落込みたい所である。

携帯を取り出して、川の主様だけを写した写真を一枚撮る。

そして、釣り上げた証拠としての記念撮影を行おうと、タイマーモードを起動させてマリーと二人で川の主様を掲げた写真を撮った。

「何で私も写したの？ その大きな魚釣ったのキミじゃん」

「それはそうだけど、マリーが手伝ってくれたから釣れたんだ。」

だから、釣り上げた記念撮影なんだしマリーも居なきやダメだね」

そう答えながら川の主様を川へと返す。

主様はあつという間に遠ざかり、夜の暗い水の中へと消えていった。

マリーは「そっか……」と呟いて、何やら納得してくれた様である。

今度写真を現像したらマリーにもあげよう、と思いつながら、その夜はマリーをベルベットルームまで送り届けてから家へと帰った。



【2011／06／28】

部活帰りに商店街に立ち寄って、家の手伝いを終えて休憩していた小西くんを誘って、近くにある「惣菜大学」で買い食いしながら、店の前に設置されている簡易なテーブルに腰掛けて、二人で他愛も無いちよつとした失敗談などの笑い話をした。

小西くんはこちらの話に爆笑し、お腹を抱えてしまう。

「はははははっ！ ま、まじっすか!？」

先輩でもそーゆー事するんすね！ やっべーっ!」

一頻り爆笑した小西くんは、笑い過ぎて目の端に浮かんでいた涙を手で甲で拭いながら、柔らかな表情で笑う。

「……はは、こんなに思いつきり笑ったの、久々かも。

楽しいっすね、やっぱり」

そして、ほんの少しその表情に影を落として呟いた。

「何時も、何て言えば良いのか…… “監視の目”があるんすよ。

……もう、慣れましたけど……。

俺が被害者面してないと、満足出来ない人達っているみたいで……。

今日みたいにならねー話で笑ったりとか……、全然……」

暗い声でそう呟いた小西くんは、ふと顔を上げて「何か愚痴っちゃって……すみません」と謝ってくる。

それに「構わない」と返したその時。

偶然近くを通り掛かった、買い物帰りと思われる主婦が、突然こちらに近寄って小西くんに話し掛けてきた。

「尚紀くん!」

学校帰りにこんな所に寄り道してちやダメよお。

あなたまでフラフラ遊んでいたら、ご両親に心配かけると思わない?」

お家の酒屋さんのお手伝いは?

お父さん、大変そうじゃない」

「……はあ、……」

主婦の捲し立てる様な一方的な物言いに、小西くんは言い返す事も、然りとて頷く事も出来ずに、少しばかり嫌気を滲ませた曖昧な態度で応じる。

「はあ、じゃないわよお。

お姉ちゃんがあんな事になって大変なのは分かるけど。

今こそ、家族の力を合わせなきゃ。そうでしょ」

小西くんは何も言わず、ただ黙って俯いた。

その態度が気に触ったのだろう、主婦はあからさまに眉を顰め、語気を少し荒くする。

「あらあ、尚紀くんの為に言ってるのに、その態度は無いんじゃない？」

小西くんは辛そうに、にじり寄ってくる主婦から目を反らした。

……流石に幾ら何でももう限界だ。

小西くんが反論しないからと言って、これ以上好き勝手な事を口に出させる訳にはいかない。

「……お言葉ですが、貴方は何を以て、〃小西くんの為〃だと仰っているつもりですか？

貴方のその主張は、随分と一方的で独善的な……ただの押し付けにしか私には聞こえませんが。

友人と休憩している程度で、何故貴方に咎められなくてはならないのでしょうか」

席を立つて主婦に向き直って淡々と訊ねると、何故か主婦は気圧された様に狼狽え、小西くんが慌てた様に立ち上がった。

「い、いいんです……鳴上先輩……」

「そ、それじゃああたし、もう行かなきゃ。

尚紀くん、しつかりしなさいね！」

小西くんにそう制止され、一瞬そちらに顔を向けた途端に、主婦は慌ててそう言い捨てて、走り去る様にその場を後にした。

後には、少し気不味そうに俯く小西くと自分だけが残る。

「……すみません、何か……、変な空気にしちゃって」

「小西くんの所為じゃ無いんだから、気にしないで」

事実、小西くんは何も悪くは無い。

小西くんがあの子に言い返した所で、より面倒な事になっていただろうし。

あの主婦の気が済むまで、黙ってただ待つというのもそう悪い選択では無かった。

「……はい。でも、ありがとうございます……」。

……言い返してくれて、何か……嬉しかったです……」
そして、小西くんは困った様に苦笑する。

「……一人だったら……困ってました。
ウチ、商売やってるんで……」

「近所付き合いは特に大切だし……、怒鳴ったり……反論も難しい、
のかな、やっぱり」

やはり地域に根差した商売をしているだけに、狭いコミュニティ内
での柵も多いのだろう。

小西くんは静かに頷く。

「……そうっすね」

「そっか、……大変、だな」

「……はい……」

ビフテキ串を食べ終えてから、その日はそこで別れた。



今日は家庭教師のバイトの日だ。

今日は中島くんが苦手だという英語を、出来るだけ理解し易い様
に、頑張って教えた。

休憩時間に、中島くんはフウと溜め息を吐きながら一人呟いてい
る。

「……英語も暗記科目なのかなあ。

数学も、公式覚えて当て嵌めるだけ。

理科だって、化学反応式を覚えるだけ。

テストは、覚えられたかどうか判定して、忘れている箇所を落とす
だけ……」

そして中島くんは暫く何かを悩む様に俯いて黙った後、急に顔を上
げてこちらを見た。

「……ねえ、先生の学校って、イジメとかある？」

中島くんは訊ねられ、少し考える。

多少対人関係が上手くいっていない人とかは知り合いにも居るが、少なくともイジメレベルでの問題を抱えている人は、少なくとも自分の知る限りではない。

「……私が把握している限りでは、無いと思うよ」

「……高校生にもなっていたら、そうですね……」

中島くんは何度も頷いて、そして俯いた。

……別に、高校生だからイジメをしないとかでは無い。

イジメなんて、高校でも大学でも、それこそ社会に出た後だって、やる人はやるし、探せばきつと沢山見付かるのだろう。

今把握している範囲で、八十神高校でイジメが無いのは単に偶々でしかない。

それよりも、そんな事を訊ねてくると言う事は……。

やはり、中島くんは……。

「別に、暴力を振るわれるって訳じゃないんです。

……物を隠されたりとか、何かを盗られるって事でもない。

……ただ、居場所が無いだけ……。

それは、イジメとは、違うのかな……」

所謂シカトをされている様だ。

……クラスに居場所が無いというのも、ツライものである。

……まあ、中島くんの対人スキルが低めである事は否めないのだから、そこに至るまでの過程も何と無く想像は付くが……。

……勿論、幾ら相手の対人スキルが低いからといって、シカトして良い理由にはならないが……。

「……よし、私に任せろ」

取り敢えず、中島くんの対人スキルを磨く所から始めてみるべきだろうか。

そう決意すると、中島くんは驚いた様に見開いた。

「……先生……。あ……と、どうも」

そう言っただけで中島くんは何処と無く嬉しそうに笑うが、ふと慌てた様に訂正を入れた。

「あ……、えつと……。」

……僕の仕事じゃ無いですよ。

クラスの……転校生の事です。

……僕じゃない」

目を逸らしながらそんな事を言っても、信憑性は0だが……。

「……何か、先生には言わなくても良い事まで言っちゃうな……。」

そう言っつて中島くんは苦笑した。

「別に良いさ、気にしていないから」

寧ろ、一人で抱え込んで自爆するよりは余程良いだろう、お互いに。

「……うん。あ、えつと……。」

また、来て貰えますよね？」

「勿論」

そう領くと、中島くんは安心した様に笑った。



【2011／06／29】

部活終わりに商店街に立ち寄った際に、店先で出会った小西くん
に、相談したい事がある、と、連れられてやって来たのは愛屋だった。

店内の客は皆各々の会話に夢中で、こちらに気を払っている人など
居ない。

小西くんは迷い、そして言い淀みながらも相談事を話し始めた。

「……あの、……相談したい事ってのは……。」

……その、俺……。」

……学校、辞めようと思ってるんです……。」

……ウチの酒屋、継ごうと思っ……。」

予想外の内容に、少し驚いたがそれを極力表に出さず、小西くん
にその続きを促す。

「……家業とか、興味も無かったし……、正直今も無いですけど……。
……残った家族で力を合わせろって……そう言われるから、……
まあそうなのかなって……」

ポツポツと語る小西くんの顔は、苦悩の中に何処か少し投げ遣りな部分も垣間見えた。

……小西くんがその考えに至ったのには、やはり周囲からの無責任な声も大いに影響を与えているのだろう……。

「……それは、小西くんが自分で考え抜いて、決めた事？」

……小西くんが自分で考え抜いて、そして、自分自身が納得出来るというのなら、それはそれで良いのだろう。

……高校中退、というのは将来的にはあまり良い方向には働かない要素ではあるけれども。

それを背負うリスクとかも考えて決めた事であるのなら、そこから先はもう小西くん自身が結果を背負っていかなければならない事になる。

……ただ、小西くんが置かれている状況を考えると。

本人が自覚しているのか否かは置いておくとして、小西くんが周りの声に流されて、自分自身の将来にとって重要な事を決めようとしている様に感じてしまう。

「……それは……」

正直、分かんないっす……。

……でも、何かしなきゃって……」

息をする事すら辛そうに、小西くんは息を吐く。

……小西くんは、同情などから次々と「やらなくてはならない事」「やるべき事」を取り上げられていってしまい、出来る事が無くなっていってしまっている状況に参ってしまっていた。

何かをしなくてはならないと感じているのに、するべき何かが見付からない。

それ故に、周りから『こうしなさい』・『こうするべきなのよ』と言われた事に流されてしまいそうになっているのだろう。

……だが。

小西くんにそう無責任に声を投げ掛けた人達は、誰一人として小西くんの将来に責任なんて持てない。

それは……今ここで小西くんの話を聞いている自分とてそうではあるが。

「……今まで、店を継ごうなんてこれっぽっちも考えた事も無かつたんすよ。

……先輩には言いにくいですけど、ジユネスがある限り、うちみたいな個人の酒屋に、未来無いですし。

伝統ある店って訳でも無いんで、オヤジの代で潰すのかなって……。

けど、……こうなったら仕方無いと、……俺がやるしか無いのになって……。

……そう思うんです」

机の上で組んだ手をジツと見詰める小西くんの表情は暗く、目は何処か遠くを見ていた。

「……そうか。

……小西くんがその選択に後悔が無い、というのならそうすれば良い。

……何を選ぶも、どう行動するも、それは小西くんの自由だから。……ただ、何も今ここで結論を出さなくてはならない訳じゃない。だから、ゆっくり考えて、一度御家族とも話合ってみれば良いんじゃないかな」

そうアドバイスにもならない様な提案を投げ掛けると、小西くんは小さく頷く。

そして……。

「……何で、姉ちゃん……死んだんすかね」

ポツリとそう呟いた小西くんは、まるでそう口にした事自体を自身に驚いた様な顔をした。

そして、少し気不味そうに続きを話す。

「あつ、……その……。

……死因とか、凶器とかってのじゃなくて……。

……どうして、姉ちゃんが死ななきやならなかったのか……。
……俺や、家族も巻き込まれて……。

……。

……すんません。

……こんな事、先輩に話したつて、先輩もどうする事も出来ないのに、何か愚痴っちゃつて……」

「……別に、構わないよ。」

……私に話して、少しでも整理がつくというのなら、幾らでも話してくれて良い」

他人に対して言葉にして初めて、心の整理がつくという事もあるだろう。

そう返すと、小西くんは静かに頷いた。

そして、深く考え込む様に沈黙する。

その日はそこで小西くんと別れ、家へと帰った。



病院の夜間清掃バイトに向かうと、バイトの終わり間際に救急救命室の前のベンチで、また休憩中だったらしい神内さんと出会った。

お互いに軽く会釈をして、少し話をしようか、と神内さんに誘われたので一緒にベンチに座る。

「そう言えば、鳴上さんはどうしてこのバイトをしてるんだい？」

この辺りの高校生がこんな時間帯のバイトを選ぶのつて、中々無いんじゃないかなつて思うんだけど」

まあ確かに。

八十神高校の生徒たちの大半は、こんな時間帯の……しかも病院清掃というバイトは選ばないだろう。

そういう点では自分は割りとレアケースなのかもしれない。

「まあ、時給が良いからですね。」

何かとお金は入り用なので。

貯金はしているんですけど……」

やはりあちらの世界で使う武器の代金の為というのが大きい。

何度も言うが、(自称アートの) 武器は高価だ。

それを人数分用意しなくてはならないのである。

特捜隊用のお財布の中身は、常に自転車操業状態だ

そう答えると神内さんは少し楽しそうに笑った。

「はは、確かにね。」

僕も学生の頃は支出ばかりが多くて困ってたなあ。

貯金したり、バイトして稼ごうとする鳴上さんは偉いよ、うん」

「……そうなんでしょうか……。」

……そう言えば、神内さんはどの辺りの高校に通っていたんですか？」

八十神高校に登山部……或いはワンダーフォーゲル部は無い様だから、神内さんの出身高校は八十神高校では無いのだろうけれど。

「僕かい？」

この辺りの学校じゃないし、そんなに有名って訳じゃないから、名前を言っても分からないと思うよ」

「この辺りの出身じゃ無かったんですね」

頬を掻きながらそう答えてくれた神内さんの言葉に、特にこれと言った感慨もなくそう返した。

「うん、まあね。」

小・中・高と地元の学校に通って、大学は地元を離れて下宿して……。

この病院に来るまでは、そもそも「稲羽」って町がある事すら知らなかったんだ」

まあ、ここが地元でなかったのならそんなモノなのかも知れない。

自分だって、叔父さんたちが稲羽に住んでいたのだから、稲羽に来る事も、そもそもこの町の存在自体を知らなかっただろう。

「この病院にはどれ位お勤めなんですか？」

何の気なしにしたその質問に、神内さんは僅かに詰まる。

そして、微かに俯いて息を吐いた。

「……二年、になるのかな」

……神内さんの見た目からの年齢を考えると、二年前も他の場所の病院で働いていたのだろう。

……そこで何かがあったのかも知れない。

デリケートな領域に踏み込んでしまったのだろうか……。

言葉を探して少し黙っていると、神内さんは力なく微笑んで立ち上がる。

「さて、そろそろ時間だからもう行かなくちゃね……。

ありがとう、今晚も鳴上さんと話せて楽しかったよ。

じゃあ、また。夜道には気を付けてね」

そう言って立ち去る神内さんを見送って、その日はバイトを終えた。



【2011／06／30―2011／07／04】



【2011／06／30】

部活終わりに商店街に立ち寄ると、家の手伝いを終えて休憩中の小西くんと出会った。

何かを話したような顔をした小西くんを連れて、いつもの愛屋に向かう。

愛屋のカウンターに座り、天津飯を頼んだ小西くんは一つ息を吐いてから、意を決した様に話し始めた。

「……昨日話した、学校辞めて家を継ぐっての、……昨日帰ってから親に話してみたんです。

そしたら、すっげ反対されて……。

『そんな事望んでない、好きに生きろ』って……」

そして、小西くんは微かに俯いて少し顔を歪める。

「それから、『学校が嫌なんじゃないか、逃げてるんじゃないか』って……。

……変に、勘繰られました」

小西くんの様子を見るに、ご両親から言われた事に思う所はあったのだろう。

「全部が全部、そうって訳じゃ無いだろうけど。

……小西くんのお父さん達の言ってる事、少しでも心当りがあった？」

そう訊ねると、小西くんは微かに頷いた。

「……俺、何も言い返せなかったんです」

小西くんは唇をキュツと噛み、俯く。

視線は、テーブルの上で握った拳に向けられていた。

「……逃げようと思つたら、幾らでも逃げられるんですよ。

みんな、『優しい』から。

委員会だけじゃない……。

クラスの仕事も部活も、全部。

……俺の好きにして良いって。

……今度の期末テストだって、課題提出に変えても良いって。

遅刻・早退も、俺だけカウント無し。

すげー、ぬるい……。

……バカらしい。

誰も俺に、命令しないんですよ……。

『今はゆっくりしてなさい』って、ただそれだけ。

んで、全部取り上げるんです。

居ても居なくても同じ……って位に。

……立ち上がらなくても、良いんですよ……」

そして、フィツと顔を上げた小西くんは、ジツとこちらを見詰めて訊ねる。

「……俺ってそんなに、『可哀想』ですか？」

『可哀想』、か。

……それは嫌だから、小西くんは悩んでいるのだ。

「それで、私が『小西くんは可哀想だ』って言つたら、小西くんは納得する？」

……小西くんは、それで良い訳？

……それが嫌だつて思うのなら、周りのその『ぬるい』状況に甘えてちやダメなんだと思うよ」

「……分かってます」

小西くんは唇を少し強く噛んで頷いた。

そして、途方に暮れた様な顔で訊ねてくる。

「……俺、どうしたら良いんですかね。

特別扱いするなって、今まで通りで良いんだって、言つて回れば良いんですか？」

姉ちゃんの事、無かつたかのように振る舞えばいいんですか？」

そして、苦し気に、小西くんは溜め込んでいた思いを吐き出した。「皆が遠巻きで見ているのを……」

同情されるのを、友達が疎遠になっていくのを……。

……知らないフリしてれば、良いんですか？

……皆が、飽きるまで？

皆が飽きた時、俺は……。

……俺は、独りになるんじゃないですか？」

……興味関心の対象が移るまで待つていれば、それで事態は解決するのか、と言われればそうではないだろう。

事件を切っ掛けに遠巻きになってしまった友人は、何もしなければそのままだ。

……それも、小西くんには不安なのだろう。

「すみません……」。

何か、上手く言えないし……。

今、よく分からない……」

内心がぐちゃぐちゃしていて、気持ちの整理がついていないのだろう、きつと。

気持ちの整理を付ける為には、今の状況に向き合わなくてはならないが、それもまた苦しくて、どうすれば良いのか分からずに途方に暮れている……。

……それが今の小西くんなのだろう。

「はは……すみません」。

飯食いながらす話じゃ、ないっすね……。

……最近、何か、味とか、全然分からないんですけどね……」

気が滅入っているからか、小西くんはちよつとした味覚障害も起こしている様だ。

……気持ち落ち込んでいる時は、美味しいご飯を食べて、ゆっくりと眠るのが一番だ、と信じている自分としては、これは放って置けない。

……今度、何か手を打つてみるか……。

そんな事を考えつつ、その日は小西くんとはそこで別れた。



今日も夜間の清掃バイトに向かった。

神内さんは今日は夜間の担当ではないのか、その姿は見えない。バイトを終えて着替えて帰ろうとしたその時、看護師さんたちが立ち話をしているのが聞こえてきた。

他人の話に聞き耳を立てる趣味は無いので、特に気にする事なくその場を通り過ぎ様としたのだが、ふと耳に飛び込んできた『神内』という名前に思わず足を止める。

「神内先生って、良いわよねー。」

処置とか的確なのに凄く速いし。

ウチの救急の先生の中じゃ一番じゃない?」

「そうよねー。」

だって、ホラ、神内先生って前は都内の大きな病院にお勤めしてたんじゃないかってっけ?

そこでも有望視される程腕が良かったんでしょ、確か」

……どうやらあの神内さんの話の様で間違いない様だ。

本人不在の状況でこう言う話を盗み聞きしてしまう事に気不味さを感じながらも、その場を動けない。

「でも、じゃあどうしてここに来たのかしら?」

「さあねえ。所謂島流しとかなんじゃないの?」

「何かやらかしたって事?」

「さあ……。」

そういう話しは、神内先生の周りでトンと聞かないし……。
どうなのかしら?」

看護師たちはその辺りで立ち話を止め、職務へと戻っていった。

……気にしていても仕方がない。

今日はもう帰る事にしよう。



【2011／07／01】

神社の不思議な狐からの頼み事で、口下手な後輩に良い人との付き合い方を伝授して、喧嘩してしまった友人と後輩との関係修復に成功した事を報告する序でに神社で狐と戯れていると、誰かがやって来る足音がした。

人が来る事を察知した狐は、素早く身を翻して何処かへと隠れてしまふ。

境内にやって来たのは、天城さんだった。

「あれ、鳴上さん。どうかしたの？」

「まあ、ちよつとした用事があつてね。

天城さんはお参り？」

特に何かがある日では無いとは思うが、地元だし、天城さんは小まめにお参りに来ているのかもしれない。

「うん、時々時間を見付けて来てるの。

ここに、静かで落ち着くから……。」

仲居さんたちともね、お参りに来る事があつて。

大切なお客さんが来る前とかにね。

初詣も毎年ここだし、受験の時のお守りもここのだったんだ。

……この町を出たら、……ここにももう、来られなくなるね……。」

ここでの思い出話を語って、寂しそうな顔をする天城さんに思わず訊ねた。

「……やっぱり、本当に出ていくのか？」

「あ、うん……。」

天城さんは曖昧に頷いた。

出て行きたいという気持ちは無い訳ではないのだろうけれども

……、それ以上に迷っているのだろうか。
迷っているのか訊ね様としたその時。

「あら、雪ちゃんー！」

和服を来た女性が境内にやって来て、天城さんを見付けて少し驚いた様に声をかけた。

天城さんも驚いた様に首を傾げる。

「葛西さん……どうしてここに……？」

「酒屋さんに注文するついでに、ちよつと休憩にね。」

……あーあ、雪ちゃんにバレちゃったあ」

「えつ、や、別に言い付けたりなんか……」

少しオロオロとする天城さんを、葛西さんは笑い飛ばした。

「あはは、冗談よお。」

……あ、そちら、もしかして、ウワサのお友だち？

料理の勉強を急に始めたのって、やっぱりそちらの子の影響なのかしら？」

「そうだったのか？」

全く知らなかった。初耳だ。

てつきり、独り立ちした時の練習なのだろうと思っていたのだけ
れど……。

「えつえつ、違うよ、うん！」

「ふふふ、そう言う事にしておくわね。」

雪ちゃんをよろしくお願いしますね」

焦って否定する天城さんを残し、一礼して葛西さんはその場を去っ
ていった。

葛西さんが立ち去ったのを見て、天城さんは小さく溜め息を吐く。

「も、もう……。」

あ、葛西さんはね、うちの仲居さんなの。

仲居さんたち、私が料理を始めた切っ掛けを、鳴上さんなんじゃな
いかって、何か勘違いしてて……。

さっきの葛西さんとかの仲居さんたちや、板前さんたちが、料理教
えてくれるの。

一人でやりたいって言い張ってたけど、失敗ばかりで、火傷とかもしちやってさ……。

そうしたら、『教えさせてくれ』って言われちゃった。

「ふふっ、普通は逆だよね？」

「優しい人たちなんだね」

思い出して嬉しそうに笑う天城さんを見ると、お互いに大切に思っているのがよく分かる。

「うん……。私の為に休憩時間を潰してでも教えてくれて……。

なんか、優しくして……。

一度、ちよつと成功した時なんて、みんな集まって味見して、褒めてくれて……。

何て言うか……嬉しかったな……。

それに私には、仲間もいる……。

結構、私、幸せ者だよね……。

私ね……皆の為に、頑張ろうって思う……。」

静かに決意を固める天城さんだったが、ふと少しだけその表情に影を落とした。

「……でも私、あんなに優しい人たちを裏切って出て行こうとしてる……。

……でも、仕方無い……よね……。」

そう言葉にはしたがそれでも思う所があったのか、天城さんは浮かない顔で神社から立ち去った。



今夜も、病院清掃のバイトへと出掛けた。

何時もの様に仕事をこなしていると、帰り間際に何時ものソファア―で休憩中の神内さんの姿を見掛ける。

神内さんに少し声を掛けようかと思っただその時に。

唐突に昨日耳にしてしまった噂話を思い出して、僅かに躊躇ってしまおう。

すると、神内さんの方がこちらに気が付いた様に顔を上げた。

「おや、鳴上さん。」

「今日もバイトだったんだね。」

「はは、偉いなあ……」

「あちらから声を掛けられ、心の中で僅かに安堵の息を吐く。」

「今晚は。神内さんは、今日もまた夜勤なんですね」

神内さんが勧めてくれたので、その好意に甘えて横に座らせて貰った。

「まあね。何時も夜勤……って事はないけど、この病院も人手に余裕がある訳じゃ無いからね……」

「救急つてのは中々大変なのさ……」

「少し肩を竦めて、神内さんはそう言った。」

「……確かに、実際がどうなのかは知らないが、救急は大変そうないメージはある。」

「24時間、何時でも急に傷病者が運ばれて来るのだし。」

「神内さんは、二年前からこの病院に来た、と前に言っていました。ここに来る前も救急医をやっていたんですか？」

「……そうだよ」

「少しだけ沈黙した後、神内さんは曖昧な笑みを浮かべて頷いた。」

「……やはり前の病院か何処かで、何かあったのだろうか？」

「……が、流石にそれをおいそれと根掘り葉掘りとは聞けない。」

「話題が途切れてしまい、どうしたものかと考える。」

「数瞬考えてから、良い機会だとばかりに、神内さんの仕事について色々と質問する事にした。」

「神内さんは少し驚いた様だが、「将来の選択肢として知っておきたい」と答えると、納得した様に頷く。」

「自分ももう高校二年生。」

「来年には大学受験も控えている。」

「就職という道もあるが、自分は進学するつもりである。」

自分の興味のある分野として、所謂理系の学部に進むつもりだが、具体的にどの学部にするのかはまだ決めてはいない。

理学部や農学部などで研究に邁進するのも、例えば医学部などの医療系の学部に行つて社会にそういう面から貢献しに行くのも、どちらも迷つてしまう程に魅力的な道である。

そう言つた観点からも、実際に医師として働いている神内さんの話は、非常に興味深い。

そんな中、救急医療の話からDMATの話が出てきた。

DMATとは、『Disaster Medical Assistance Team』の頭文字から取られ、『災害急性期に活動できる機動性を持った、トレーニングを受けた医療チーム』と定義されている。

要は、地域では対応出来ない様な災害や大事故等の発生時に、現場に急行してその場で災害医療を行う医療チームの事だ。

確か、日本DMAT・東京DMAT・大阪DMAT等があつた筈である。

どうやら神内さんは、ここに来る以前はDMAT指定医療機関で働いていたらしく、DMATとして出動した事もあつたそうだ。

そんな事を話している内に、そこそこの時間が過ぎてしまった。

ふと時計を見た神内さんは、ソファアールから立ち上がる。

「ああ……そろそろ戻らなきゃダメだ。

じゃあ、またね、鳴上さん」

そう言いながらヒラヒラと手を振つて、神内さんは廊下の奥へと去つていた。



部活で汗を流した帰り道、途中で合流した長瀬と、一条との三人で帰宅する途中で、不意に一条が川を見たいと言い出し、鮫川の河原までやって来た。

夕陽の照り返しでキラキラと光る水面を見詰めながら、一条がポツリと話し始める。

「……………さ、一条の家に引き取られて初めてこの町にやって来た時に、歩いた場所なんだ。

……………よく晴れた日の夕方……………、陽が当たった川面がキラキラしてた。

それがすつげーキレイでさ、……………それ見た時、オレ……………、一条家の子として、生きよう” って……………、そう思った。

“今までの自分は、死んだんだ” って……………、思おうとした”

昔を思い出しているのか目を閉じてそう言った一条に、長瀬が少し不思議そうに訊ねる。

「……………ガキン頃でか？」

「まーな。

生意気かもしんないけどさ、……………子供だって、色々考えてんだぜ」

一条の言う通り。

個人差はあるだろうけれど、幼い子供だって、その年齢の子供なりに色々考える。

他人の感情の変化とかは、どうかすると小さな子供の方がよく分かっているかもしれない。

「……………ああ、そうだな」

そう頷くと、一条は少し嬉しそうに笑った。

「ははっ、鳴上はそういうの分かるクチャか……………」

……………でもさ、オレは “一条家の子として”、なんて生きてやしなかつたんだ。

……………ただ、ソレっぽい仮面を被って誤魔化してただけ。

……………その仮面すら上手く被れなくなったんじゃ、……………舞台から降りるしかないよな……………」

そう言つて夕空を仰いだ一条の目には、寂しさにも似た何かが映つ

ている。

「一条、一人で勝手に結論を出すんじゃない」

長瀬も「鳴上の言う通りだ」と頷いて、一条を止めようとした。すると一条は、「まだ決めた訳じゃないから」と頷く。

「ん……まだ結論は出してない。」

それに、お前らに相談もしないでどっか行くとか、しないから
そう言っただけは優しく笑った。

そして、何処か遠くを見ながらポツポツと心境を語る。

「何かさ、氣イ抜けたんだ。」

ホントの親が死んでるって、分かってさ。

根っこ……みたいなのが、やっぱオレには無いんだな……とか、
思っただけ……」

……幾ら記憶にも無い相手とは言っても。

……この世に生まれて一番最初に得る繋がり先の相手が、もうこの世に居ないというのは、一条にとってやはりショックであったのだ。

「……」両親のお墓とか、そういうものの場所は分かるのか？」

墓の所在が分かって墓参りに行った所で、状況が変わる訳でも無いのかも知れないが、それでも、やはりそういうものは一つの心の区切りになると思うのだ。

長瀬も同じくそう思っただけか、一条を励ます様に言う。

「夏休みにでもさ、墓参りにでも行くこうぜ、一緒に」

長瀬の言葉に、目の端を少し潤ませて一条は溜め息を吐いた。

「……二人とも、優しいなあ……」

……でもさ、分かんないんだ、お墓とか、そういうの。

スッゲー小さい頃から施設に居たから、そこに行く前の記憶つても無いし……。

……手紙は貰ったけど、差出人も何も無かったし、親の名前すら無い。
い。

全くのノーヒント」

「あの手紙か……」

確か、お前を預けた人から、なんだろう？

って事は、えーつと……？

十数年以上前から、保管されてたって事か……」

長瀬も困った様に眉間に皺を寄せた。

「一条が施設に預けられたのが十数年前となると……当時の状況を
知ってそうな人は、施設の職員さん位しか心当りが無いな……」

しかし、職員の人は、一条には教えられないと、そう言っているら
しいし……。

当時の職員さんだったが、今は退職されている様な人を探し出せ
ば、あるいは……。

「……十数年前……」

微かに眉を寄せた一条がポケットに手をつ突っ込み、中からあの手紙
を取り出した。

「お前、それ持ち歩いてんのか？」

少し呆れた様に言った長瀬に、一条は少しバツが悪そうな顔で答え
る。

「まあ、ほら、家の人が見たら気不味いかなって……。

……宛名の、『康様』って字が、滲んでる。

慌てて書いた時みたいなのに、手で擦った跡っぽい。

……それに、封筒のカドで手が切れそうな位だけど……。

……。

……どう、思う？」

長瀬は何を言ってるのか分からないと言いた気に首を傾げた。

長瀬は放っておく事にして、一条に自分の考えを述べる。

「……幾ら大切に保存していた所で経年劣化は免れないし。

……この手紙は、最近書かれたモノだと思う」

「……やっぱ、そうだよな」

一条は真剣な顔で頷いた。

話に付いていけなくなっている長瀬は戸惑った様に訊ねる。

「えーつと、……つまり、どういう事だ？」

「この手紙……。」

……多分、施設の、オバチャン先生が書いたんだ。
……オレが訪ねてった時……、悩んでるのに、きつと気付いたから
……」

ギユツと、一条は手紙を握る手に力を込めて俯いた。

「お、落ち込むなよ。」

偽モンでも……や、偽モンつっーのもアレだけど！

その人だって、別にお前を騙そうとした訳じゃなくなってだな……」
長瀬が慌ててそうフォローしようとするのを遮って、一条は「違
よ」と首を横に振る。

顔を上げた一条のその目からは、涙の雫が後から後から溢れては零
れ落ちていた。

「違う、違うんだ、長瀬……」。

……嬉しいんだよ、オレ。

優しい人が居るんだって、そう思ってた……。

この手紙の内容、本当かも知れないし、先生の吐いた優しい嘘なの
かもしれないけど……。

生んでくれた人がいて、育ててくれた人がいて……。

こうやって、見守ってくれる人がいて……。

お前らみたいに、支えてくれる人がいる……」

涙を堪えようとしてか、空を仰いだ一条のその顔には、先程の寂寥
感は微塵も残っていなかった。

「………オレ、誰とも繋がってないって、そう思ってた……」。

でも、そうじゃないんだよな……」

涙を溢しながら自分に言い聞かせる様にそう言った一条に、長瀬は
少し呆れた様な……でもホツとした顔をする。

「……今頃気付いたのか、……遅エよバカ」

「うっせ、お前の方がバカじゃん」

グシグシと涙を拭って、一条は長瀬にそう言い返す。

「俺らがいるって、ずっと言ってるんだろっつーんだ、このバカ」

「……バカだった方がバカだかなー！」

バカとお互いに言い合う二人が面白くて少し笑うと、それに釣られ

てか、長瀬も……そして赤くなつた目で一条も、お互いに顔を見合せて笑い声を上げた。

「……ヒデー顔してんぞ、お前。」

何なら、泳いでくか？ 昔みたいにさ」

長瀬にとつても、鮫川は一条との思い出のある場所の様だ。

「そーいや、お前とよくここで遊んでたよな。」

だな、行つとく？」

勿論、やるよな？と言外に訊ねてくる一条に、少しだけ笑つて頷いた。

「流石に泳ぐのは却下する。」

でも、少し川遊びする位なら、喜んで」

「よーしつ、言つたな！ うりゃー！」

そう答えるなり早速川に飛び込んだ長瀬が、一条の顔に思いつきり水をぶっかける。

長瀬が飛び込んだ時の水飛沫が掛かつて、思わず身を震わせた。

もう夏の熱気が蒸し暑く感じる季節になっているとは言え、流石に水温は冷たい。

「うわつ、冷てえ!! よくもやったな、そりゃ!!」

一条と此方も水に飛び込んで、服がずぶ濡れになるまで三人で遊んだ。



家に帰ると、服を絞れる位にずぶ濡れだった為、叔父さんに何の後ろめたさも無い経緯を話しても流石に叱られてしまった。

青春するのは構わないが、ちよつとは身体に気を使えとの事だ。

間違ひなく正論なので、そこは神妙に頷く。

制服がびしょ濡れになつてしまったが、幸いにも明日は休日だ。

今晚の内に洗濯して明日の朝一で干せば、明後日の朝までには乾く

だろう。

制服を洗濯機に放り込み、晩御飯を食べてから、家庭教師のバイトへと向かう。

今日は中島くんの期末試験に向けて、英語を重点的に教えた。

「外国人は、物を考える時も自分とこの言語で考えてるんですよね？」

……何か、変な感じ」

休憩時間に、中島くんは心底不思議そうな声でそう言った。

「確かに。英語とか、日本じゃ日常生活で使う事ってまず無いし、英語で何時も考えているって思うと、ちよつと不思議だね」

そう領くと、中島くんは「ですよね」と何度も領く。

そして、憂鬱そうな顔で深く溜め息を吐いた。

「今度、学校で創立記念祭があるんですよ。」

で、クラスで出し物やる事になって、女子とかが騒いでて……。

……はあ」

「そういうの、苦手な感じなのかな？」

中島くんが、そういう熱気というのか……バカ騒ぎが得意な様には見えない。

「苦手って言うよりも、……面倒って感じです。」

凄く、ね。

……全員、バカですよ」

まあ、そういうったうバカ騒ぎはアホらしく見える事はあるだろうが。

「全員がバカって言うよりは、そういう時期って事」

中学生の時、或いは高校生の時にしか無い熱気の様な何かが、そういった形で表れているだけだ。

それを一括りにバカとカテゴライズするのは、少しばかり狭量と言うモノだろう。

「……先生も前はそう思ってた、今はそうは思わない、って事？」

そんなものなのかなあ……」

中島くんは不思議そうに、首を捻った。

そして、暗い顔で続ける。

「……学校はそんなだし、家に帰ったらお母さんが居る。

……『あなたは優秀なんだから』、『あなたなら一番取れるから』。

……『お母さん、あなたが自慢なの』、『自慢の子供なの』……。

……でも、僕は……。

「……………」

中島くんは苦しそうに顔を歪め、俯いた。

……中島くんは大分追い詰められている様だ。

学校に居場所が無く、かと言って家ではというと、過剰な程のお母さんからの期待……。

考えるだけでも息が詰まりそうなモノだが、更に付け加えるならば中島くんは多感な中学生である。

その辛さは、こちらが想像しているものよりも遥に強いものかも知れない。

……毎日が、息苦しくて仕方無いのだろう。

……何とかしてあげたいのではあるが……。

悩んでいると、中島くんが不意に訊ねてきた。

「……先生は、……お金貰えるから、ここに来ているんだよね？」

まあ、バイトとして金銭を報酬に受け取っているのは確かだが……。

それ以上に、中島くんを放っておけないという気持ちの方が、このバイトを継続させ続けるつもりのもりの動機としては強い。

「そう言う訳でも無いよ。

お金が欲しいってだけなら、他のバイトあるし。

それだけじゃないから、ここに来ている」

「……僕、頼んでないですよ」

そう言いながらも、中島くんは嬉しそうに笑った。

「今まで学校と家しか無かったんで……。

……先生が来るの、結構、楽しみです」

どうやら家庭教師の時間が、中島くんにとっての息抜きにもなっている様だ。

……少しばかり名残惜しかったが、バイトの時間を過ぎてしまった

ので、中島くんの家を後にした。



【2011/07/03】

一条と長瀬に誘われ、花村も交えて沖奈市へと遊びに行く。

ゲームセンターで、長瀬と二人で「太鼓の達人」の難易度：鬼に挑戦したり、ジューズの奢りを賭けて格ゲーで仁義無き戦いを繰り広げたり、四人で如何に早く景品を取れるかをクレインゲームで勝負したりした。

ゲームセンターで一通り遊んだ後、八十稲羽に帰る前に一息吐こうと、駅前にある全世界に店舗を持つコーヒーのチェーン店に入る。

呪文の様なメニューを注文し、フラツペを人数分受け取ってから一条達が取ってくれた席へと向かった。

室内に居た時間が長かったとは言え、この暑い日だ。

喉をひんやりと冷やしてくれるフラツペの美味しさは一入である。

四人で雑談していると、ふと一条が何かを思い出したかのような顔をした。

「そう言えば、19日から期末テストだよなー。」

うわー、憂鬱だわー」

そんな事を言いながら一条は、はあ……と溜め息を溢す。

テスト……と言われてその存在を意識してしまったからか、花村と長瀬もうげっ……と呻いた。

「……？　憂鬱になる程、一条の成績は悪かったか？」

花村と長瀬は兎も角として……。

確か、前回の中間で一条は上の下の上辺りから上の中の下辺りの成績だったと思うのだが……。

「そりゃ赤点とか補習とかの心配しなきゃなんねー程は悪く無いけど

さ。

なんつーのか、暗記で何とかなる科目はともかく、数学とかはやっぱなー……。

公式丸暗記しても、解けない問題は結構あるじゃん」

そう言いながら一条は再度溜め息を溢した。

一条の苦手科目は数学らしい……。

まあ、数学は苦手な人はトコトン苦手な科目である。

自分が知ってる限りでは、花村と里中さんも数学を苦手としていた筈だ。

尚、巽くと長瀬はほぼ全ての教科が苦手なのだそうだ。

「まず公式を暗記しようって点を尊敬すんぜ。

数学はマジで分かんらん」

両手を軽く上げて降参ポーズを取る長瀬を、花村が茶化す。

「長瀬の場合は、数学以外もヤバイだろ。

ま、俺もあんま人の事は言えねーけどさ……。」

ハア……。と三人は深い溜め息を吐いた。

そして、何故かジト目でこちらを見てくる。

「その点、鳴上は良いよなー……。」

前の中間、断トツの総合点でトップだったじゃん」

ズズツと音を立てながら一条は口を尖らせる。

「まあ、総合点は確かに良かったが……。」

科目毎に見れば、社会系の科目とかは私よりも点数が良い人は普通に居たぞ」

八十神高校のテスト問題はかなり科目担当者の好みが反映されているらしく、普通はほぼ習わない様な事項もテストの問題になっていた。

それが特に顕著だったのが社会系の科目だ。

大半の問題は解けたが、中にはどうしても分からないモノがあった。

社会系の科目は純粋な暗記科目なので、覚えていないのならその段階で手も足も出ない。

その分の失点があったので、社会系の科目では他の人が一位だった。

「その社会系科目でもトップ3には入ってたじゃん」

嫌味かよー……と一条は愚痴る。

嫌味等では無く、事実を言っているだけなのだが……。

こちらが少し反応に困っていると、一条はやれやれとばかりに肩を竦めた。

「ま、鳴上がそういうつもりで言ってるじゃねーってのは分かっているって。」

ま、ただの愚痴だし気にすんなよ」

それならばそれで構わないが……。

話がテストになったからか、花村と長瀬も気が重そうな顔をしている。

「取り敢えず、期末に赤点が付くのは回避したいよな、やつぱ。」

あーあ……、後二週間ちよいかねーし、もうそろそろ勉強始めねーとやべーな」

そう花村が言うと、長瀬も同意する様に頷いた。

「だな。」

あんま成績が悪かったら、部活とかも出れなくなるし。

取り敢えず、世界史と英語と数学と古文・漢文と……」

「って、多過ぎだろそれ！」

取り敢えずつつー量じゃねーだろ」

長瀬が挙げてゆく教科に、一条が思わずといった風に全力でツッコミを入れる。

幾ら苦手科目が多いのだとしても、取り敢えずでやる様な量では無い。

その量を一気にやろうとした所で、途中で投げ出してしまうのがオチである。

その後は、オススメの勉強方法を教えあったり、ヤマ勘で乗り切ろうとする長瀬に三人でツッコミを入れたりとしながら、中々に賑やかな時間を共に過ごした。



【2011/07/04】

放課後、巽くんの手芸を教えて貰う為に巽屋に向かった。

巽くんは今日は少し趣向を変えて、レース編みを教えてくれる様だ。

巽くんはレース編みも出来るのかと驚いたが。

よく思い返せば、巽くんの作品の編みぐるみ等が持っている小物類の中には、レースが施されたモノが結構あった。

最早、手芸の類で巽くんに不可能な事など無いのではなからうか……。

巽くんの手から、繊細で可愛らしいレース細工が生み出されてゆくのは、誇張無しに魔法の様である。

自分が編んでいるレース細工も決して不細工なモノでは無いのだが、横で巽くんが作っているモノとは次元が一つか二つは違う。

巽くんは、間違いなくその道のプロとして食っていけるだろう。

一通り作り終えて、巽夫人が淹れてくれたお茶を飲みながら一息吐いていると、ふと巽くんが何かを言いたそうにしているのに気が付いた。

「巽くん、どうかしたのか？」

「あー………どうかって訳じゃないんすけど………。」

先輩って、最近尚紀とつるんでるんすか？」

そう訊ねられ思わず首を傾げた。

確かに、ここ最近は何度か放課後に小西くんと過ごしてはいるが……。

「小西くん？」

つるむって表現が適切かは分からないけど、まあ一緒に居る時もある

るって感じかな。

で、それがどうかしたのか？」

「尚紀のヤツ、その……どんな感じっすか？」

どんな感じか、か……。

どう答えるのが適切なのだろう。

「私は以前の小西くんを知らないから、ちゃんとした事は言えないけど……。

……色々とまだ整理が出来てない状態、ってのは言えると思う」

「そっすか……。」

そう答えると、巽くんは何故か少し気遣わし気にその眉根を寄せた。

……小西くんと巽くんの家は同じ商店街の中でもかなり近距離にあると言えるし、二人とも同じ年だ。

今の二人の関係性がどうなのかは知らないが、幼少期からの顔馴染みである可能性は大いにあるだろう。

「心配なのか？ 小西くんの事が」

「えっ……と……。」

……まあ、そんな感じっす」

そう訊ねると、少し戸惑い気味にだが、それでも確かに巽くんは頷いた。

「なんつーのか……、尚紀とは幼馴染みってヤツで……昔はつるんで遊んでた事もあったんす。

つつても、まあ中学上がる前くれえからあんま付き合いも無くなつてったんすけど……。」

成る程。

最近の付き合いは無いものの、幼馴染みの小西くんの事を純粹に心配しているのだろう。

……あ、そうだ……。

「巽くんは、小西くんの好きな料理とか食べ物とかを知ってるか？」

「へっ、尚紀の好物っすか……？」

何でまたそんな事を唐突に？

とでも言いたげな表情で巽くんは首を傾げる。
それに大きく頷いた。

「まあ、色々あつてね。」

で、何か心当たりとかあるか？」

そう訊ねると、巽くんは少し考える様に腕を組む。

そして、何かを思い付いた様な顔をした。

「あー……コロツケとかっスかね」

「コロツケ？」

「昔俺が作ったコロツケを、アイツ旨い旨いって喜んで食ってたんで。」

ま、アイツはあのコロツケ作ってたの、お袋だと思ってたポインス
けどね」

成る程、コロツケか……。

よし、問題なく作れるな。

「そうか、うん、ありがとう。助かったよ」

そう礼を言くと、巽くんは軽く頭を下げてくる。

「尚紀の事、よろしく頼みます」

本当に小西くんを心配しているのだろう。

そんな巽くんを安心させる様に、大きく頷いた。



夜、釣りたての戦利品を、魚を欲しがっている神社に居る少し不思議な女性に渡した後の事。

家に帰ろうと、店仕舞いを始めている愛屋の前を通りがかると、店
の中から見知った顔が出てきた。

三組の高山だ。

こんな時間に愛屋に何の用があったのだろう。

高山の方を見ていると、あちらもこちらに気が付いた様で「あつ」と
声を上げてきた。

「鳴上、どうしたんだこんな時間に」

高山はこちらの釣竿やクーラーボックスをチラチラと見ながら、そう訊ねてくる。

「私か？ 私は鮫川で夜釣りをしていたんだ。

と、言うよりも。

『こんな時間に、どうした』とは、それはこっちの台詞だ」

釣竿を軽く叩きつつそう答え、逆に高山に訊ねる。

前に夜間もバイトをしているとか言っていた様な気もするが……。

まさか、それなのだろうか。

「あー、俺？ 俺はバイトだよ。

夜は、大体は愛屋で働いてるんだ。

厨房スタッフってヤツ」

まさかと思っていたのが正解だった様だ。

まあ、愛屋は商店街の中ではかなり繁盛している。

それ故に、厨房スタッフも雇い入れないと回らない時もあるのかも知れない。

まさかその厨房スタッフが、高山だとは思わなかったが。

……前にも思ったが、何故ここまでして働いているのだろう。

高山は、放課後も何処かでバイトした上で、ここでも夜間にバイトに入ってる様だし……。

何か事情があるのかは知らないが、普通は中々出来ないレベルでのバイト漬け生活である。

その上更に家事までやっているのだから、ここまで来るともう、身体を壊さないかどうかの方が心配になってくる。

「そうなのか……。

……なあ、高山。

どうして、そこまでしてバイトに打ち込んでいるんだ？

……言いたくないなら、言わなくても良いんだが……」

高山は、少し困った様な顔をして、頬を掻いた。

だが、まあ良いか、とばかりに口を開く。

「……俺ん家って、所謂母子家庭でさ。

それも、子供が俺を含めて三人も居るんだよな。悟と志保なんて、まだ5歳で手が掛かる盛りだ」以前に出会った、高山の幼い弟と妹を思い出す。

……勿論各々の家庭の事情等があるから一概には言えないが、客観的な事実として、母子家庭で子供を三人も育てるのは大変だと言わざるをえない。

黙ったまま、高山に言葉の続きを促す。

「……子供ってさ、育てんの、スツゲー金かかるじゃん。

親の仕事によっちゃ、両親健在で共働きしてても、子供育てるのは1人で限界だったりするらしいし……」

経済的な問題……か。

それは確かに存在するだろう。

自分は極めて幸運な事に、裕福と言える家庭に育った。

だが、そうでない家庭も当然の如く存在し、時として経済的な理由から子供を自分で育てる事が出来ない親が居るというのも知っている。

親を……しかも往々にして稼ぎが多い父親を亡くすと、経済的に厳しくなる事が多いという事も。

だから、なのだろうか。

こちらの表情から何かを読み取ったのか、高山は少し首を横に振る。

「あつ、別に貧しい暮らしをしてる訳じゃ無いからな？」

母さんが毎日毎日長い間働いて稼いでるから、親子四人が普通に食っていけるだけの収入はあるし。

……でもさ、ヨユーがあるって訳でも無い。

……そんな訳でさ、俺がバイトして、少しでも家計の足しになりた
いんだ。

微々たる額でもさ、貯めとけば何時か、悟や志保に必要なになった時に使ってやれるしな」

……高山は嘘を言っている訳では無さそうだが……。

……何でだろう。それだけが理由では無いのだろう、と己の直感が

囁いた。

……だが、まあ別に高山の事情を根掘り葉掘り尋ねたいという訳では無いので、それ以上は訊ねようとは思わなかったが。

その後は他愛無い話をして、高山とは別れて家へと帰った。



【2011／07／05―2011／07／09】



【2011／07／05】

昼休み、何時もより早起きして気合いを入れて作ったお弁当を携えて一年の教室を訪ねると、小西くんは一人机に座って、昼食のパンを開封しようとしている所だった。

一緒に食べないかと誘ってみると、小西くんは少し戸惑っていたが確りと頷く。

屋上に向かうと、もう大分暑くなってきたからか、自分たち以外の人影は見当たらない。

……好都合だ。

座るのに丁度良い感じに出っ張った場所に腰掛ける。

すると、少しの沈黙の後に、小西くんが意を決した様に顔を上げた。

「あの、この前はすみませんでした。

何か、意味分かんない事言って……。

それ、謝りたくって……。

でも、何か出来なくって……」

「気にしてないよ」

小西くんは何やら気にしている様だが、自分は本当に全く気にしていない。

そもそも、小西くんに言われるまで、全く意識に上らせてすらいなかったのだし……。

小西くん自身で整理が付いていない事柄が、ふとした弾みで言葉になってしまったただけに過ぎないだろう。

それを咎める事など、自分には出来ないし、したくもない。

まあ、今はそんな事よりも昼食だ。

早速、お弁当を広げる。

小西くんにお裾分けする分も含めて、かなり多目に作ってあるのだ。

それ故に、何時も使っている物よりも大きな、ピクニック用の弁当箱になった。

メインは勿論、昨日巽くんから聞き出した、小西くんの好物であるらしいコロツケだ。

牛肉を入れたコロツケに、豚挽き肉を使ったミートコロツケ、カボチャコロツケ、野菜たつぷりのお野菜コロツケなどを、各々2つずつ入れてある。

今朝の朝食にも出したが、どれも菜々子と叔父さんには好評だった。

こちらが食べ始めると、小西くんもモソモソとパンを食べ始めるが、美味しいとか以前に、味を何も感じていなさそうな顔で、ただ義務的に口にはしている。

味が分からなくなってきた、というのは本当の様だ。

取り敢えず、ビーフコロツケを小西くんに勧めてみた。

箸は、予備の割り箸も持ってきてきてあるので問題ない。

最初の内は小西くんは、遠慮して食べようとはしなかった。

が、流石にパンだけでは足りなかったのだろう。

少し遠慮しながらもビーフコロツケを持っていく。

それを一口囓るなり、途端に目を大きく見開いた。

そして、ガツガツという擬音が聴こえてきそうな勢いでコロツケを

あつと言う間に食べきってしまう。

「その様子だと、口に合った感じかな？」

「えっと、はい……。」

なんて言うのか……。

こんなに、「味がする」って、感じた料理って……。

久し振りに言うか、……初めてで……。

……凄く、美味しかったです」

お世辞を言っている訳では無さそうな、自然な笑みを浮かべなが

ら、小西くんは小さく頷いた。

「それは良かった。」

小西くんは、コロツケが好きだっていうのを聞いたから。頑張って作った甲斐があったみたいだ」

「聞いたって……誰から……？」

首を傾げながら訝し気に訊ねてくる小西くんは、正直に答える。

「一年の異くん。」

幼馴染み、なんだってね」

小西くんにとってその名前は予想外であったのか、驚いた様な顔をしてから、僅かに俯いた。

「完二が……」

「最近はつるまなくなつた、って異くんは言ってたけど、小西くんの事を心配してたみたいだったから。」

その時に、小西くんの好物を訊いたんだ」

「えっと……。何で、俺の好物を……？」

意図を理解出来ない、とでも言いたそうな困惑した顔で、小西くんは訊ねてくる。

「前に一緒に愛屋で食べた時に、小西くん、『最近味とかが分からないう』って言ってたから。」

だったら、小西くんが好きな料理を食べれば、”味”を実感出来るんじゃないかと思って」

その効果はあった様で、何よりだ。

空腹は人間の敵だが、味のしない食事というのも、同じ位良くないものだと、自分は思っている。

「良かったら、他のも食べてみてくれないか？」

結構自信作なんだ。

コロツケが好きだとまでは異くんに聞いてたんだけど、どんなコロツケが好きなのかまでは分かんなかったから、手当たり次第に作ってしまつてね」

材料の都合上、クリームコロツケ系は今回作ってないが。

まあ、それはまたの機会が良いだろう。

他のコロツケも勧めると、今度はすぐに箸を伸ばしてくれる。

どれも美味しく感じて貰えた様で、一つ食べる毎に、小西くんは「美味しい」と感想を述べてくれる。

コロツケを全部食べ終わった小西くんは、満足そうに息を吐いてから、少し俯いてポツリポツリと話し始めた。

「……鳴上さんって、変わってますよね。

皆みたいなのに、遠巻きにしないし……。

何でも分かっている様な顔で説教もしないし……。

それでも、こうやって傍に居てくれる……。

……居心地、良いです、鳴上さんと居ると」

小西くんはそう言って、何も気負った風も無く、少し嬉しそうに笑う。

「そうか……。それは良かった」

……それは、放っておけないと決めたのだから遠巻きにする訳など無いからだし、小西くんに説教出来る様な「何か」を自分は持っていないからだ。

それでも、居心地が良いと言って貰えるのは、やはり純粋に嬉しかった。

小さく頷いてから小西くんは、顔を上げて、何処か遠くを見ているかの様な優しい顔で語る。

「……俺ね、シュークリームが好きなんです。

女みたいですけど。

家の近くに、美味しい店があつて、時々買って帰るんですけど……。冷蔵庫に入れておくと、何時も姉ちゃんに食われちゃうんですよ。

『賞味期限が切れかけてたから食べてやった』とか、適当な事言うから……毎回口喧嘩になるんです」

“だった”ではなく現在形で小西先輩の事を語ってゆく。

その口振りから、……仲の良い姉弟だったのだろうと容易に想像が付いた。

そして、……小西くんの中で、小西先輩の事はまだ何の整理も出来ない事なのだろうという事も。

「…………でももう、シユークリームは無くならない。

……冷蔵庫の中で、賞味期限が切れました。

……俺ね、それ見た時、『あ、ひよつとして』って……『ひよつとして、姉ちゃん、居なくなつたんじゃねーの』って……。

……だから、そのシユークリーム、捨てました」

痛みが走つたかの様に顔を僅かに歪ませながら、小西くんは俯いて己の手に目を落とす。

そして、小西くんは顔を上げてこちらを見た。

「前に鳴上さんに『犯人が憎いかと訊かれれば、ノーだ』って、俺、言いましたよね……。

でも、本当はノーですら無いんです……。

何も、分からない……。」

軽く頭を振って想いを言葉にした小西くんに、何も言わずに黙ってその続きを促す。

小西くんはふと空を見上げた。

朝から曇り続きの空は、まるで小西くんの心の内を映しているかの様に、分厚い雲に覆われている。

そんな空を見上げながら、小西くんは溜め息を一つ溢した。

「俺にはただ、ぬるい日常があるだけ……。

虚勢を張る親と、電気が消えた家があるだけ……。

賞味期限の切れたシユークリームがあるだけ……。

どうやったらそこから抜け出せるのか、何が自分や、……姉ちゃんの為なのか……。

それすらも、何も分からない……。」

迷子になつた子供の様な目をしながら、小西くんは俯く。

……何をしたら、か……。

小西くんでは無いから、自分にはその「答え」を出す事は出来ない。

だけ。

考えても悩んでも、そこに……自分の内に、その「答え」が無いのならば、動くしか無い。

それだけは分かる。

「考えて、悩んで、それでも何も分からないんだったら、後は行動あるのみ、じゃないかな」

「……分かってます」

小西くんは溜め息混じりに頷いた。

「立ち止まっちゃってるんだってのは、分かっています。

このままじゃダメで、動き出さなきゃいけないんだって事も……。

……分かつては、いるんです……」

頭では分かっているけど、それでも動き出せない、なんてよくある事だ。

……よく分かっているが故に、小西くんはより一層苦しいのだろうけども。

暫しの間、小西くんは黙ったまま俯いていた。

そして、何かを決めた様な顔をして、こちらを顔を向ける。

「そう言えば……、偶に姉ちゃん、ジュネスのバイトの後にシュークリーム貰ってきてくれて……。

……ジュネスのは不味いって言いながら、二人で食べたりしてたんです」

そこまで言う和小西くんは、続きを言い辛そうに一瞬だけ視線を逸らしたが、少し目を閉じてから、再び話し始めた。

「……姉ちゃん、ジュネスのバイト、辛かったみたい。

でも、きつとウチの店の為になるって、言ってた事あって……。

……フラフラしてるクセに、変な所で長女ぶるんだ、あの人。

それが何時も、ムカつく……」

……。

彼方の世界で、小西先輩が作り出した場所に行った時に、不可抗力で聞いてしまった声を思い出した。

……小西先輩が辛かったのは、きつと確かだろう。

家の為になるから、とやっていたバイトを、父親に否定されて……。

……辛かっただろう、とは思う。

もう今となっては、確かめる事もどうする事も出来ない事ではある

が……。

小西先輩の事に思いを馳せていると、小西くんが、少し躊躇いながらも小さく頭を下げてきた。

「あ、あの……。」

明日、鳴上さんの都合が良ければ……。

……ジュネス行くの付き合つて貰つても、良いですか？

ちゃんと、見ておきたいんです……。

姉ちゃんが、働いてる場所を……」

明日は、幸い特には何の予定も入つてない。

小西くんの頼みを拒否する理由など、何も無い。

だから勿論、了承した。

「勿論良いよ」

そう言つて頷くと、小西くんは再度頭を下げてくる。

その後は、少し雑談をしてから、昼休みが終わる前には各自の教室に戻った。



放課後は、バスケット部で一条と共に汗を流し、その後長瀬も交えて商店街の愛屋で腹ごしらえをした。

ここ最近の迷いが晴れたからなのか、一条は生き生きと部活に励んでいて、それを長瀬と二人で喜んだ。

この調子なら、きつともう一条は大丈夫だろう。

他愛も無い話をして時間を過ごし、一条たちと愛屋を出た所で別れから、店仕舞いする間際の丸久豆腐店へと顔を出す。

まだ久慈川さんは回復していないのか、店番をしていたのはお婆ちゃんの方だった。

……それだけ、負荷が大きかったのだ。

今はゆつくりと休んでいて欲しい。

その後夕飯を食べてから、中島くんの家で家庭教師のバイトをして、その日は眠った。



〔2011/07/06〕

放課後、昨日の約束通り小西くんにつき合ってジュネスと一緒に見て回った。

小西くんは、特に食品売場の酒類コーナーが気になったのか、とても熱心に見ていた様だ。

一通り店内を回った今は、自分にとってはもう馴染みの場所と化したフードコートで休憩している。

フードコートは今日もそこそこの人で賑わっているが、こちらに気を向けてくる人間は居ない。

「下の食品売り場……凄いですね。

酒の種類、あんなにあるし、安売りとかしてるし……。

あれじゃウチ、勝てないっすよ」

紙コップに入ったジュースを一口飲んで一息吐いた小西くんは、沁々とそう言った。

そして、少し俯き気味に複雑な顔になる。

「……けど、最近はウチもちよつと景気が良いんです。

姉ちゃんの件で、可哀想がって買ってくれてる人がいるから……。

皮肉なもんすね……」

まるで自嘲するかの様に、小西くんの口の端が僅かに上がるが、直ぐに物憂げな表情になった。

……小西先輩の事を思うと、喜ぶ事は確かに出来ないが。

「買ってくれるのなら、商売に利用してしまえば良い。

これを機に、顧客にしてみましたり、とか」

そういう事情でも、金を落としてくれるだけ商売上は有り難い客だ。

それもまた一つの商機と割り切るしか無いのかもしれない。

……今の小西君には、酷な事なのだろうけども。

小西くんは黙ったまま僅かに身体を揺らす。

「……そっすね。」

何も買ってかないで言うだけ言ってくる人よりは、買ってくれるだけ良いんですけど」

そう言つて小西くんは、こちらから目を逸らした。

その目線の先にはテーブルしか無いが、それを見ている訳では無いのだろう。

僅かに揺れる視線は、何処を捉える訳でも無い。

「けどウチ……もうダメですね。」

家庭崩壊してるんで。

ウチの親、姉ちゃんの事全く話さなくなつたんです。

元から居なかつたみたいにな死に振る舞つて……。

……で、二人して夜中に泣いている……。

……俺、何が出来るんでしょうね……。」

昏い目でそう呟いた小西くんは、それつきり考え込んでいるかの様に黙ってしまった。

……難しい悩みにどう答えるべきかと言葉を探していると、見知つた顔がフードコートにフラリとやって来たのが目に留まる。

……花村だ。

バイトの合間に休憩にでも来たのか、ジュネスのエプロンを付けたままである。

花村はこちらに気づき、やや小走りに近付いてきた。

「あれ、鳴上？」

それに、小西先輩の……。」

「えっと、弟の尚紀です。」

……ジュネス、初めて来ました。

……別に、ウチの酒屋がどうかかって訳じゃないし、敵対意識があ

る訳じゃないんですけど……。

親とか、商店街の人とかが煩かったりして……、面倒で」

溜め息混じりの小西くんの言葉に、花村は僅かに苦い顔を浮かべながら頷く。

「俺も似た様なモンだよ」

「……そっすか。」

……。

……なんか、すごいすよね、広くて……。

見ているだけで、満足出来る様な……。

何か、一つの国みたいだ」

ポツリと呟かれた小西くんのその感想に、花村は目を僅かに見開き、そして酷く懐かしむ様な……微かに痛みを交えた様な目で小西くんを見た。

「……それ、お前の姉ちゃんも、言ってたよ」

小西くんは、その言葉に何も答えずに黙って俯く。

「やっぱ顔、似てるよな。」

顎と、鼻と、目の辺り」

そう花村が言うなり、小西くんは僅かに顔を上げて花村を見るが、直ぐ様顔を逸らして何かを噛み締めているかの様な声音で答えた。

「……止めて下さい。」

……もう、姉ちゃんは居ないんで」

そんな小西くんに、花村はポツリと声をかける。

「……寂しい、よな」

寂しい、と。

哀しい、と……花村がそう感じている事が直ぐに分かる表情だった。

花村の言葉に、小西くんはグツと言葉に詰まった後、噛み付く様に声を荒げる。

「止めて下さいー」

あんたに何が分かるんだよっ!？」

そんな小西くんを悲哀を隠し切れない目で見た花村は、一つ息を整

えて、小西くんに自分の思いを伝えた。

「……自慢の弟だって、そう言ってたよ。」

……俺は、お前の姉ちゃんの事……。

好きだったよ」

「……『過去形』、なんすね」

直ぐ様そこに気が付いた小西くんは、顔を上げて花村を睨む様に見詰める。

小西くんの言葉を否定する事はせずに、花村は小西くんを静かに見返した。

「俺は……、自分に出来る事を今やってる。」

俺の為に、……そして、お前の姉ちゃんの為に……、出来る事を。

……何時までも泣いてたら、姉ちゃん、困っちゃうぜ?」

その言葉に、グツと詰まった小西くんは、痛みを必死に堪える様な顔になり、そして絞り出したかの様な声で、花村に反論した。

「……………」

……泣いてなんか、ないです」

そんな小西くんの様子を少し悲しそうな目で見ていた花村は、一度目を閉じて僅かに頭を振り、そして小西くんを元氣付け様としているかの様に少し明るい声で話題を変える。

「よし、腹減ってないか?」

ビフテキ奢るぜ?」

鳴上は、要るなら自腹でお願いします」

「そうか、分かった」

花村なりの励まし方だろう。

小西くんは花村の申し出にかなり戸惑っていたが、やがて小さくコクツと頷いた。

その事に、花村は嬉しそうに少しだけ口の端を緩める。

こちらが自分の分の代金を渡すと、花村は直ぐ様屋台の方へと駆け足で向かって行った。

「……お節介ですよね、花村さん。」

や、そもそも、鳴上さんもか……」

そんな花村の後ろ姿を見て、小西くんはポツリと独り言の様に呟く。

「ま、関わってしまった以上、放っておけないからね」

「……そんなに『可哀想』なんすか、俺？」

「……いや、違いますね。」

きつと、二人とも……そんなんで優しくしてくれてる訳じゃなくて……。

「……すみません」

こちらの言葉に僅かに自嘲する様に目を逸らした小西くんだが、こちらが何かを言う前に、頭を振って直ぐ様素直に頭を下げた。

気にしてない、と首を横に振ると、小西くんは様々な感情を緬い交ぜにした目で、ペコツとこちらに頭を下げてくる。

「姉ちゃんの働いていた場所、見れて良かったです。」

きつと、一人じゃ来れなかった……。

……来ようとも思わなかった……。

でも、……来れたから、少しだけ、何か進めた様な気がします。

ありがとうございます」

そうこうする内に、花村が人数分のビーフステーキを運んでテーブルに帰って来た。

フードコートのものだからなのか、正直な所中々固い肉だ。

花村から味の感想を訊かれて、「固いし……正直マズイです」と小西君は正直に答える。

「ははっ、そうか。」

そりゃ、マトモって事だ。安心したよ」

花村は何処か嬉しそうにそう答え、その後少しの間小西くんとは愛無い話をし、そして陽が傾き始めた辺りでその場で別れた。



小西くんと別れた後、そのままジュネスで夕飯の買い出しをしていると……。

……生鮮食品のコーナーで、あの倉橋さんと出会った。料理を教えると以前約束したものの、久慈川さんの件などもあって今の所それは実現していない。

倉橋さんは豚の細切れ肉のパックを片手に、何やら深い溜め息を吐いている。

「今晚は、倉橋さん」

「あら、悠希ちゃん。」

ふふ、こちらこそ今晚は。

今日も夕飯の買い物をしているのね」

先に軽く会釈をしながらそう声をかけると、倉橋さんはこちらの買い物籠を見ながらそう返してきた。

それに頷くと、倉橋さんはフウと溜め息を吐き、こちらに相談事を持ち掛けてきた。

「前に悠希ちゃんに頼んでいたお料理の事なんだけど……悠希ちゃんの都合が良ければ今週末辺りにでも教えて貰えないかしら？」

そう言われて、今週の予定を脳裏に思い浮かべる。

「今週なら……9日は大丈夫です。」

……もしかして、何かあったんですか？」

そう訊ねると、少し気落ちした顔で倉橋さんは頷いた。

「お料理を出したら、義母に『要らない』って言われちゃったの……。」

キャベツとほぐしササミの麦ご飯で、結構自信があっただけど。

……何がダメだったのかしら……。」

味が足りないかもって思っ、ちゃんとお砂糖も入れたのに……。」

……は？ 砂糖……？」

砂糖と言ったのか、この人は。

……何故それに砂糖を入れようと思ったのだろう……。」

「あー……。」

多分、お砂糖を入れたのがマズかったんじゃないでしょうか……。」
そう言うと、倉橋さんはキョトンとした様に首を傾げる。

「そうなのかしら？」

私、炊き込みご飯とかにお砂糖つて必要なんだとずっと思ってたんだけど」

うーん……。

これは中々の難敵だ。

一先ず、炊飯器を使えば作れる簡単な炊き込みご飯の作り方からでも始めた方が良くないのかもしれない。

「ふふ、じゃあ9日の事、お願いね」

そう言つて、倉橋さんは手にしていた細切れ肉のパックを買い物籠に入れて、その場を立ち去っていった。



〔2011／07／07〕

昼休み。

とても珍しい事に、小西くんが態々二年生の教室が並ぶ二階にまでやって来て、何かの決意をした様な面持ちでこちらに声をかけてきた。

「あの、鳴上さん。

放課後……ちよつと、一緒に来て貰いたい所があるんですけど、良いですか？」

勿論了承し、放課後になり帰り支度を済ませてから、下駄箱の所で待ち合わせをしていた小西くんの先導で、ある場所に向かった。

小西くんに連れてこられたその場所は……。

……小西先輩の遺体が発見された電柱のある、あの十字路だった。あの事件が起きてから、この場所にはほぼ絶える事無く花束が置かれている。

今日置かれているのは、輪菊と小菊がメインの花束だ。

「……………」、ですよね。

……姉ちゃん、見付かったの……。

……………」

数ヶ月前には小西先輩の遺体が吊り下げられていた電柱を、ただただ黙って見上げていた小西くんは、そう言いながら視線を下げてこちらに向き直った。

自分とて直接見た訳ではないから確たる事は言えないが、そうらしい、と小西くんに小さく頷く。

すると、小西くんは一度俯き、そしてギュツと拳を握った。

そして僅かに震える声で、自分の中から言葉を手探りで探しているかの様に、己の思いを語る。

「……………」、ずつと通れませんでした。

……姉ちゃんの事思い出すのも、どんな風に……吊るされていたんだろうとか、……思うのも、恐くて……。

でも、やつと、現実を受け入れられる気がするんです……」

……………」

小西くんは、先輩の事を考えてしまうのが、辛かったのだろう……。

……商店街との確執以上に……そこでバイトしていた先輩の事を思い起こしてしまうから、……だからジュネスに行く事も出来なかったのかも知れない。

だが、小西くんは自らの意志で一步踏み出して……先輩が働いていた場所に行き、そして……《先輩を知っている人村》と出会った。

だからこそ、また一步進もうとしたのかも知れない。

小西くんは顔を上げ、そしてまるで泣きそうな顔をして……そして涙声の様に感情で声を震わせる。

「……………」よく言うじゃないですか、テレビとかドラマとかで……。

悲しくて何日も泣き続けたとか、思い出が蘇って何も手に付かないとか……。

……でも俺は、そんな事全然無かった。

……何時もと同じでした……。

だから……、自分は冷たい人間なんだって、……そう思っていました

……。

ドラマの主人公たちみたいに泣けなかったから、姉ちゃんの事、好きじゃなかったんだって……、そう思いました……」

小西くんの言葉に、僅かに目を閉じて首を横に振った。

物語の人間たちの様に表現出来なかったからと言って、小西くんが先輩の死を哀しんで無い等とは、到底考えられない事だった。

例え誰がそれを否定したのだとしても。

小西くんと共に過ごした時間の中で自分は確かに、小西くんが抱えている、表面上の言葉や態度には表れない哀しみを感じていたのだから。

「……悲しみ方なんて、人各々だよ。

小西くんの悲しみ方は、不器用なのかもしれないけれども」

想いに、絶対等とは無い。

「AだからB、CでないならDでは無い」などとハッキリとは、言えないモノだ。

小西くんは、確かに涙を溢したりしていた訳では無かったのかも知れない。

「……」

先輩の事を、過去として語る事が出来なかったり……。

そして、先輩を想起させる場所には行けなかったり、と。

……確かに小西くんは、先輩の……自分の姉の死を、悼んでいたのだ。

そう言うのと、少し気恥ずかしそうに小西くんは笑って頷いた。

「……はい、ホント……そうですよ……」。

鳴上さんと話して……やっつと、ちよつとずつ、分かってきたんです」

そして、ギョツと自分を抱える様に腕を掴んで小西くんは俯く。

「俺、姉ちゃんの事、考えない様にしてたんすね……」。

姉ちゃんの事考えて辛くなる位なら、自分を冷たい人間だと思おう方が、簡単だったんすね……」。

「そうやって逃げて……逃げて逃げて、姉ちゃんの事、全然考えてあ

げなかった」

溢れ出す感情に次第に声を震わせながら、小西くんは泣く様に、ずっと己の内に沈めていた思いを吐き出した。

「……きつと、もつと生きてたかったですよね」

……感情に身を震わせる小西くんは、そつと頷く。

……ああ、きつと……。

……きつと、……小西先輩は、もつと生きていたかどうか……。

……直接会ってそう訊ねた訳では無いが、確信を持って何度も頷く。

「ああ、そうだね……。

きつと、生きていたかったよ……」

花村や小西くんのように、「生きてて欲しかったのだ」と、そう思いを溢す人が居るのだ。

きつと、きつと……。

死にたくなんて、無かつただろう……。

小西くんは声を上げて、大粒の涙を目に浮かべた。

「姉ちゃん……可哀想です……。

もつと、生きてて欲しかった……。

生きてて、欲しかったです……」

唇を噛み締めて泣く小西くんを、そつと抱き締める様にして、その頭を優しく撫でる。

……自分は、小西先輩を助ける事が出来なかつた事を。

「どうする事も出来なかつた事だ」と諦めて……そして何処か無意識の内にそれ以上は考えない様にしていた。

【犯人】を追う事に、新たにターゲットにされた被害者を助ける事に、意識が向いていた。

……それは確かだ。

……実際の所は、あの時点で自分達が小西先輩を助けられたとは、あまり思えない。

何かの歯車がズレていて、もし、あの世界に放り込まれた直後の先輩と出会っていたのだとしても。

あの段階では非戦闘員だった花村と里中さんを抱えた状態で、まだ不慣れなペルソナの力で、小西先輩のシャドウと戦っていたのかどうかは、自分達に都合よく考えても五分五分……、実際の勝算はかなり低かっただろう。

死体が一人から四人分が増えるだけの結果に終わっていたのかもしれない。

全ては既に終わってしまった事で、今更何を考えた所で、不毛な「たられば話」にしかならないが。

それでも。

……被害者の人を頭の片隅に追いやって、助けられなかった事に言い訳を連ねて誤魔化し続ける様な……。

こんな非情な自分であつても。

今ここで、漸く自分自身に、涙を流す事を許してあげられた小西くん。

慰めの言葉をかける程度なら、赦されるのではないだろうか。

「思う存分、泣けば良い」

ポンポンと、菜々子にしてあげる時の様に、震える小西くんの背中を撫でた。

ポロリポロリと溢れていた雫は、やがて滂沱と降り頻る涙の雨となつて小西くんの頬を濡らす。

まるで、今まで心の奥底へと沈めていた哀しみが、堰を切つて流れ出したかの様に……。

「俺、初めて泣いてる……。

は、はは……う、うううっ……」

しゃくり上げて涙を溢し続ける小西くんは、暫しの間、しがみつく様にしてこちらの胸を借りていた。

そして、溢れ出る涙が少し止まり始めた頃合いで、ふと我に返つた様に小西くんは慌ててこちらから離れる。

涙で赤く潤んだ目で、小西くんは軽く頭を下げた。

「あの、えっと……何かすみません。

……でも、ありがとうございました。

……俺、やつと……。

……やつと、素直に、悲しいって、思った……。
やつと……、ちゃんと、泣いてあげられた……」

……一歩、また新たに進めたからだろうか。

小西くんの表情からは、ずっとあつた鬱屈した何かが、拭い取られたかの如く消え去っている。

ふと見上げた夕空は、空を厚く覆っていた雲が途切れ、綺麗な夕日がそこから顔を覗かせていた。

その夕陽に、小西くんは眩しそうに目を細める。

小西くんは、もう一度電柱を見上げ、何かを想うかの様に少しの間目を閉じた。

「鳴上さん、今日はありがとうございました。

俺、家族と、ちゃんと話してみます。

姉ちゃんの事とか……色々」

また新たに踏み出す決意を固めた顔の小西くんに別れを告げ、その日は家に帰った。



今日は七夕だ。

しかし、生憎今日は昼夜を通して曇っている為、外に出て夜空を見上げて、ベガとアルタイルどころか天の川すらもよく見えない。

「空、くもっててみえないね。

おりひめさまとひこぼしさまは会えたのかな……」

縁側から一緒に空を見上げている菜々子が、少し心配そうな顔でそう呟く。

そんな菜々子の純粋な優しさを眩しく思いながら、恐らくはベガとアルタイルがあるであろう辺りを指で指した。

「きつと会えてるよ。」

……今夜の夜空が曇ってるのはね、一年に一晩だけの再会を、織姫様と彦星様が二人だけでゆっくりと過ごしたいからなんだって」

そして菜々子の頭を優しく撫でながら、昔、自分が母さんに言われたのと同じ様に返す。

すると、菜々子は安心した様に笑った。

「そうなんだー！ 良かったあ……！」

あのね、お姉ちゃん。

たなばたの日は、たんぎくにねがいごとを書いたらかなうんだって、知ってた？」

目を輝かせてそう訊ねてくる菜々子に、知ってるよ、と頷く。

数日前に、学校の敷地内の片隅にある竹藪から、ちゃんと許可を取って持ってきた笹には、菜々子や叔父さんと一緒に書いた短冊が既に沢山下げられていた。

何を書いたのか、菜々子は書いてる最中は頑なに隠していたが。

『せかいへーわ』や『かないあんぜん』と言った短冊たちに隠される様に、『お父さんがケガしませんように』や『お姉ちゃんができてうれしいです』と言った短冊が下げられているのを、既に叔父さんと二人で発見していた。

なお、自分は菜々子の短冊の横に『菜々子ともっと一緒に過ごせませう様に』と吊るしてある。

暫く曇った夜空を二人で見上げていたが、家庭教師のバイトに行かなくてはならない時間が迫ってきたので、菜々子に戸締まりする様に言ってから家を出て行った。



数学を中心に教えていると、中島くんは解法で使われていた『メネラウスの定理』を指差して訊ねてきた。

「……この公式、今まで丸暗記してただけなんですけど、どうしてこれをここで使うんですか？」

その問題は、一見図形の問題では無い様に見えるが、実は『メネラウスの定理』を用いると驚く程簡単に答えを導ける、というものである。

その問題において定理を使う発想の仕方を解説すると、中島くんは酷く感心した様に何度も頷いた。

「公式一つ取っても、考える事って一杯あるんですね。」

編み出した昔の人、天才です。

……僕も、天才に生まれれば良かったかな……」

そう言っつて、何事かに思い悩むかの如く暗い顔をし、中島くんは僅かに顔を俯かせる。

そんな彼の言葉に、小さく首を横に振って答えた。

「……そうやって公式を見つけ出した人達だって、皆が皆天才だった訳じゃないよ。」

それに、公式とか……新しい発見をした訳じゃなくても、凄い事をした人だっている。

……努力で、誰にも負けない位の凄い事を成し遂げた人だっているんだよ」

どんな分野にだつて才ある人間と言うのは存在する。

……その分野に進んだ時、自分よりも才ある人間を羨む事はよくある事なのだろう。

だけれども。中島くんはまだ広く学んでいる最中だ。

そこで、数学史に名を残す偉人たちと自分を比べて落ち込む必要など、何処にも無いのではないだろうか。

それに。名を残しているのは何も天才たちだけでは無い。

天才で無い事を、今思い悩む必要などは無いだろう。

「……天才って、努力でなれるものなんですか？」

……努力は結構、してると思うけど。

……足りないのかな……」

努力の多寡の問題でも無いのだけれども……。

……いや、中島くんのこの悩みの根幹は、……きつとそう言う才能云々の話では無いのだろう。

……学校での事と言い、お母さんからの期待と言い……。何かと悩み事が多いと言うのも、大変である。

「……すみません、今日は疲れたんで、残りの勉強は次回でお願いできますか？」

中島くんの顔色は悪い。

中島くんが自分から勉強を中断する様に頼んでくるのは、初めての事である。

……勿論了承して、解いていた問題集を閉じた。

「……先生、何か話、して下さい」

バイト終了の時間まではまだ少しあるので、それまでは雑談に興じる事にする。

中島くんに頼まれて、自分の話をする事にした。

それを聞いていて楽しいのかどうかは不明だが、中島くんは色々に興味深そうに聞いている。

「へー……、意外。」

って言うか、凄く、意外です」

バイト終了の時間間際になると、思い悩んで固くなっていた表情にも、僅かながらも微笑みが浮かんでいた。

ふと壁に掛かっている時計を見上げた中島くんは、「あっ」と声を上げる。

「あ、すみません、こんな時間まで。」

今日は……ありがとうございます。

久々に、リラックス出来た気がします。

また、色々と話して下さい。

知りたいです、先生の事」

中島くんの表情が少し和らいでいる事に安心し、その日はそこでバイトを終了した。



【2011／07／08】

放課後、天城さんに誘われて辰姫神社へとお参りに行った。

取り敢えずお賽銭を入れようと財布を取り出すと、ふと頭上から視線を感じて僅かに目線を上げると、屋根の上からあの狐が伏せた状態でこちらを見ている。

何かを期待するかの様に、ふさふさの尻尾が右に左にゆっくりと揺れていた。

大方、お賽銭を入れて貰うのを楽しみにしているのだろう。

それに少し苦笑しながら、僅かに奮発してお賽銭を賽銭箱に投入する。

浅く頭を下げてから二礼し、二度柏手を打つ。

そしてもう一度一礼して、再び浅く頭を下げる。

ふと再び視線を上にとやると、狐は嬉しそうに尻尾を振りながら、神社の奥へと去って行った。

参拝が終わった所で、境内の木陰に移動して、近くの自販機で買った飲み物で喉を潤わせながら雑談に興じる事にする。

何かを話したそうにソワソワしている天城さんに、何があったのかと水を向けてみると。

「あつ、あのね、葛西さんがあの後鳴上さんの事を色んな人に話しちゃって……。」

そしたら、そんなに仲の良い友達が出来たんだったら、一度連れておいでって、皆言ってる……。」

あ、迷惑……かな？」

と、少しモジモジとしながら天城さんは話してくれた。

迷惑か？　と言う部分に首を横に振る。

「いや、一度は旅館に行ってみたかったんだ。

中々機会に恵まれなくて、今の所は行けてないけど。」

天城さんが良いのなら、喜んで」

そう答えると、そっか、と嬉しそうに安堵しつつ天城さんは笑った。そして再び他愛も無い雑談をしていると……。

「おや、雪ちゃんー」

神社の前を通り掛かった初老の男性が、天城さんの姿を目に止めて境内へとやって来た。

天城さんの知り合い、なのだろう。

「あ、助役さん」

天城さんはそう声を上げて、綺麗な動作で軽く一礼する。

どうやらこの初老の男性は、町内会の助役さんであるらしい。

助役さんは、少し心配そうな顔をして、天城さんに訊ねる。

「旅館の方がバタバタしとったが、大丈夫かい？」

「バタバタ……？」

……あっ！ テレビの旅番組の取材、今日だった！」

助役さんの言葉に首を傾げたが、心当たりがあつた様で、あつと慌てた様に天城さんは顔を上げた。

「おや、テレビの取材だったのか。」

そりゃあ良いね！

稲羽を盛り立てる様、頑張つとくれよ」

そうホツとした様に言つて、手を振りながら助役さんはその場を去って行った。

助役さんを見送つて、天城さんは少し申し訳なさそうな顔をする。

「あの、ごめんね。」

私も行かなきゃいけないんだつた」

「取材、か」

テレビと聞いて、以前出会つたあの不愉快な撮影スタッフ達が直ぐ様頭に浮かんだのだが、……取材を許可したと言う事は別の番組での取材なのだろう。

「あ、うん。旅番組なんだつて。」

真面目な作りみたいだし、私やお母さんは映さないみたいだから、OKしたんだ。

でも、掃除とかの手伝いはしなきゃいけないから、今日はもう帰るね。

「それじゃ、また……」

「そう言っただけで帰ろうとしたその時。」

先週この神社で出会った、仲居さんの一人である葛西さんが、息を切らせて境内に駆け込んできた。

「あ、居た、雪ちゃん!!」

「……何やらただならぬ様子だ……」

天城さんも驚いた様に、何があつたのか訊ねた。

「葛西さん? ど、どうしたの?」

一度息を整えてから、葛西さんは一気に用件を話す。

「今テレビの取材が来てるんだけど、雪ちゃん、帰ってきちゃダメよ!

旅番組だなんて、嘘だったのよ!!」

前に来てたあのワイドショーの人たちだったの!」

想定外の事態に、天城さんは目を見開いた。

あの不愉快な撮影スタッフ達が……」

しかし、それは所謂詐称に該当しかねない行為なのでは無いだろうか。

その辺りを問い詰めて、番組のスポンサーやあの撮影スタッフ達よりも上の立場の人間に抗議すれば、追い返せそうな気はする。

「あの人たち、雪ちゃん目当てみたいなの!」

「いい? 雪ちゃんはここに居てね。」

あの人達を追い返すまで、絶対に旅館に帰ってきちゃダメだから!」

「え……、う、うん、でも……」

葛西さんの必死そうな声に、天城さんは頷きながらも戸惑った様な声を上げるが……」

そこに、招かれざる闖入者が現れた。

「やーっと見つけた」

そう下卑た声を上げてやって来たのは、以前見掛けた、あの不愉快な撮影スタッフ三人組だった。

迷わず、葛西さんと二人で天城さんを背後に庇う。

そして、スタッフ達からは見えない位置で携帯を操作した。

「おっと、なーに、君たち？」

君たちに用は無いよ。

僕たちが用があるのは、君たちの後ろ。

ねえ、こんな所に隠れてなくて良いじゃない。

呪われた旅館の次期高校生女将……さん」

トンでもない言葉に、天城さんは目を見開いて訊ね返す。

「の、呪われた……旅館？」

撮影スタッフは、「だってそうじゃない？」とニヤニヤと見ているだけで不快にさせる笑みを浮かべた。

「例の事件、勿論知ってるよお。」

死んだ山野真由美が泊まってたって。

あれから、町の観光客も減って、おたくらも大変なんですよ？

だから、僕たちがいい企画考えてきたワケ!!

【あの呪われた旅館は今！

女子高生女将のほずかし奮闘記！】。

……どう？

これ、お客さん、来ちやうでしょ？」

撮影スタッフ達はそう言って、生理的に不快になる目で背後にいる天城さんを見る。

勿論、そんな下劣で不愉快な番組、大金を積まれて頼まれたって首を縦に振る筈は無い。

「い、意味が分かんないです……」

首を横に振って拒否する天城さんの言葉を、こちらに躍り寄る形で無視しながら、撮影スタッフ達は色欲を顕にした言葉で振じ伏せ様とする。

「雪子ちゃんには大役をお願いしたいなあ。

入浴シーンとか、撮らせてよ！

現役女子高生女将の熱いサービス！

うーん、これ数字取れると思うなあ！」

「それ、サイコーっすよー！」

スタッフ達は内輪だけで下卑た笑みを浮かべた。
下種以外の何者でも無い。

マスゴミと言う言葉すらも、こんな奴等には過ぎた言葉だ。

葛西さんは、汚物を見る様な目を撮影スタッフに向けた。

「あんたたち、いい加減に……」

「とにかく、お引き取り下さい。」

取材はお断りします」

葛西さんの言葉を遮った天城さんは、確りとした声で再び撮影の拒否をする。

だが、その言葉に苛立ったかの様に撮影スタッフは声を上げた。

「お断りいつ?!」

「つたく、これだからガキは……。」

テレビの力つてのが、分からないのかな？

ま、こんな田舎の高校生じゃ無理もないけど。

僕らが盛り立ててやろうって言ってやってんの。

天城屋旅館、お客減ったままでいいの？

次期女将さんだってなら、賢明な判断が出来ると思うけどなあ」

そもそも賢明な判断能力があるのなら、そんな番組は断固拒否するだろう。

天城さんは至って当然の判断を下したまでだ。

既に拒否されているのにも関わらず、何時までもしがみつこうとするその様は、見苦しいとしか表現が出来ない。

「……関係無いです」

天城さんがそう答えると、撮影スタッフは少し首を傾げたが、直ぐ様気持ち悪い笑みを浮かべる。

「ふうん？」

まあ、こんな田舎の貧乏臭い旅館の女将なんかより、もつと良い仕事紹介出来るよお？

“元女子高生の元女将”って、色々使えそうだしさあ……。
ウヒヒ、そそるねえ。

話だけでも聞いてみない？」

最低にも程があるその発言に、最早我慢の限界だとばかりに葛西さんは声を上げた。

「ちよつと、雪ちゃんに何て事……！」

「いいの、葛西さん。」

言うだけ言って、満足すれば帰るでしょ」

葛西さんを静かに制した天城さんの言葉に、撮影スタッフは馬鹿にした様な顔をして、暴言をぶつけてくる。

「はっ、何だよソレ。」

大体さ、アンタん所の旅館。

老舗つたつたって、古いだけだよねえ。

今時流行らないしき、さつさと潰した方が良いんじゃない？

板前の料理も見ただけさあ、チマチマしてて地味だしさ。

客入れたいなら、同じ事しても無駄だつての。

そう言うのが分かってねーからダメなんですよ、おたくんどこ。

仲居だつて金握らせなきや、ロクなサービスしないんですよ？

……つと、あ、良い事思い付いた。

仲居を全員「嬢」にしてさあ、1日みっちりサービスして貰うつてのはどう？

フトン敷いて、そのまま入ってきちやう、みたいな！」

そう言って下卑た笑みを浮かべた男達が、天城さんの全身を舐める様に見た。

頭の中身が腐つてるとしか思えない。

何をどう育てれば、こんな品性を欠いた人間が出来上がるのだろうか。

「……とにかくさ、テレビで紹介しようって言ってやってるんだからさ。」

ちよつとは、頭使って考えてみなよ。

……ねえ？」

葛西さんは我慢ならないと言いたげに俯いて怒りに震えている。剰りの怒りに、最早声すら出ないのだろう。

「……ざっけんじゃないわよ」

そんな中で。

ボソツと背後から、怒りに溢れた声が聞こえる。

思わず振り返ると、怒髪天を突いたと表現したくなる程に、怒りをその目に湛えて天城さんが撮影スタッフを睨み付けていた。

「侮辱するのもいい加減にして！」

私達の事、何も知らないアンタ達何かに……！！

誰がそんな旅館なんか……！！

貴方方の局の取材は、今後一切……、断固拒否します！」

最早何をしてもその決定は覆さないだろう。

そう、天城さんは確固たる意思を顕にした。

だが、それで引き下がる様な判断力はこの撮影スタッフ達には存在しなかったらしい。

「……生意気なガキだなあ！」

そつちがそうなら、アンタの暴言、報道しちゃうけどお？

サービス業としてはあるまじき……」

最早十分だろう。

これ以上、耳が腐りそうな聞くに耐えない発言を垂れ流しさせる必要性はあるまい。

「……暴言は、どちらの方ですか」

そう判断して、撮影スタッフ達の言葉を遮った。

「あつ……？」

「……これ、何か分かります？」

横槍を入れられて睨み付けてくる撮影スタッフ達に、そう言いながら、後ろ手に隠し持っていた携帯を取り出した。

撮影スタッフは、何の事か分からないと言う顔をしている。

その愚かしさを若干憐れみながら、携帯を操作して、先程からずっと録音録画していたモノを流した。

画像の方は若干荒いが、音声はバツチリと録れている。

この下種どもがやって来た時、咄嗟にだが念の為に携帯で撮影していたのだ。

マスゴミが「情報」で脅しをかけてくると言うのなら、逆にこちらも情報でやり返すまで。

撮影スタッフ達は、見る見る顔を青褪めさせる。それに淡々と追い討ちをかけた。

「知ってますか？ 今時は、テレビに頼らなくても、ネットの動画とかでこう言うの……簡単に流せるんですよ？」

この動画を見た方々は、どう思われるのでしょうか？

年端もいかない女子高生相手に、公序良俗を乱す様な発言をする貴方たちを見た方々は……？

然るべき場所に流せば……大炎上は避けられないのでは無いですかね？」

ネットには、所謂「正義感に溢れた」方々もいらっしやる。

顔もバツチリ映っているし、何より何処の局の人間なのかも把握している。

大型掲示板等に流せば、直ぐ様彼等の個人情報も特定され、あつとつという間に丸裸にされるだろう。

そうなれば大炎上は必至だ。

今日日、テレビ以上のスピードでネット上での情報は広がっていくのだ。

一度着いてしまえば、その火を消す事は不可能に近い事である。

撮影スタッフ達は旗色が悪い事を漸く理解して、憎々しげにこちらを睨みつつも退散していった。

彼等の姿形が何処にも見えなくなった事を確認し、息を吐きつつ携帯を戻す。

万が一の為に、録画は保存しておいた。

撮影スタッフが去り、葛西さんと天城さんは顔を見合わせていたが、……ふふつ、と葛西さんが吹き出したのを切っ掛けに二人で笑い合っている。

「有り難うね、アイツら追い返してくれて。

そうだ、旅館に連絡しないとね。

それじゃあね！」

手を振って葛西さんもその場を立ち去っていく。

それを見送った天城さんは再びこちらを見て、改めて礼を言ってきた。

「鳴上さん、何か色々と有り難う。」

……アイツらに言い返した時、何か、凄くスッキリした。

……皆の事悪く言われて、カッとなっちゃって……」

そう言っつて、天城さんは少しの間目を瞑る。

そして、ふと溜め息を一つ吐いた。

「……潰れちゃえば良いのにつて、そう思っつた事もあるけど。」

……それでもやっぱり、あそこは私の家……。

皆が居てくれて、私が居られる場所……。

潰すなんて、やっぱり出来ないよ……。」

大切なモノを想う表情で天城さんは旅館の事を話し、そして心からの思いを呟く。

……天城さんにとって旅館が大切な場所であるのには最初から気付いていた。

が、ここから出ていきたいというのも、天城さんにとっては確かな望みであったのだ。

だが今回の件で、もう一度その思いを見直してみる事にしたのだろう。

天城さんは物思いに沈む様な顔をして、神社から立ち去って行った。



夜、病院清掃のバイトに赴き、清掃をこなしていると、疲れ切ったと言うよりは、最早憔悴していると表現した方が良い様な顔をした神内さんが、何時ものソファに座っていた。

どうしたのかと戸惑いながらも声を掛けると、何処か遠くを見てい

るかの様に視点が合ってなかった神内さんの目に、漸く光が戻る。

「……あ、ああ……」

……鳴上さんか……」

ゆるゆるとこちらを見上げた神内さんは、そうとだけ口にした。

そのまま立ち去る事などは出来ず、神内さんの横に腰掛ける。

「あの、えっと……」

……何か、あったんですか？」

専門的な何かで起きた事ならば、自分にはどうしようも無いし、患者のプライバシー等に関わる事ならば、神内さんも話す事は出来ないだろう。

だが、思わずそう声を掛けずにはいられなかったのだ。

神内さんは、何かを言おうとしてぎこちなく表情筋を動かそうとしたが、しかし何も言わず溜め息を溢す。

そして、逡巡するかの様に視線を彷徨わせ、浅く何度か息を吐いてから、まるで溺れているかの様に辛そうに表情を歪ませた。

「まあ、ね……」

今日の急患で、交通事故の被害者が運ばれてきたんだ。

四人……家族だったんだけど……」

……」

処置は、もう終わったから……」

……僕に出来る事は、もう無いんだ……」

こちらが何かを言う前に、神内さんはソファから立ち上がる。

そして、こちらに背を向けたまま、「……ごめんね、もう行かなくちゃいけないんだ」とだけ残し、そのまま逃げる様に、神内さんはその場を去っていった。



午前中だけの授業が終わるなり、直ぐ様異屋へと向かった。

しかし今日の目的は異くんから手芸を教わる事では無く、前々から約束していた様に、異くんと今度の期末試験に向けた試験勉強をする為だ。

テストまで後10日。

その僅かな期間で、赤点回避・補習回避という大望の為に、異くんの限界に挑戦して貰う必要がある。

こちらにも、全力を以て教える所存だ。

先ずはと言う事で、八十神高校の一年生の授業の進捗を知る為に、異くんにノートを見せて貰う。

……………。

ノートである筈のそれは、真冬の新雪の如く見事な純白に輝いている。

そもそも、開いた形跡がほぼ無い。

……………。

何処まで捲つても何も無いそのノートをそつと閉じた。

教科書を見せて貰うが、…………開かれた形跡がほぼ無い上に、書き込み等は無い。

どの教科も同じである。

……………。

…………取り敢えず、教科書も脇に置いておく事にした。

……………。

…………さて、どうしようか。

割りと困った事に、何処まで教えれば、何処から教えれば良いのかが分からない。

仕方無しに、返却された前回の中間試験の回答を見せて貰う事にした。

赤い×印が乱舞するその回答を見ながら、今回の期末の範囲がどの辺りであるのか、そして異くんの理解の度合いを予測する。

……………。

ほぼ暗記科目の社会科学系の教科は、天城さん辺りから去年のノートを借りるなりして対策を立てるとして。

何よりも危険な理数系の科目をまず対策しなくてはならない。

一部の分野に関して言えば、中学生辺りの範囲からの復習が必要そうである。

……先は長そうだ。

一先ずは、数学から始めよう。

数学の範囲は、「組み合わせ」の分野と「確率」の分野、それと「二次方程式」か。

「よし、取り敢えずは『二次方程式』から始めよう。

手加減は一切しないからな。

巽くんも、頑張つてついてきてくれ」

二次方程式は公式さえ覚えれば、後は慣れだ。

只管に問題を解いていくしか無い。

若干冷や汗を浮かべながらも巽くんは確と頷いた。

その心意気や善し、とフルスロットルアクセルベタ踏みで勉強会を開始する。

只管に問題を作つては、巽くんに解いて貰い、直ぐ様それを採点・間違いを指摘し、再び類似の問題を解かせて……、と繰り返した。

陽が傾き始める頃には、巽くんの目が虚ろになり、焦点が何処か遠くに結ばれている。

流星に心が痛くなる状態だ。

だがそれ程の代償を払った価値はある。

只管解き続けた成果か、初めの頃よりは理解力が増し、解くスピードにも若干の向上が見られ、基礎中の基礎の様に簡単な問題ならほぼ確実に解ける様になっていた。

キャパの限界に挑戦した巽くんは、今にも死にそうな顔をしている。

……自分でやつといて何なのだが、この調子で大丈夫なのだろうか？

「あー巽くん？ その、大丈夫か……？」

「う……うっす」

ヨロヨロとした動きで頷く巽くんの中には、生気が無い……。

幾ら何でも、最初っから飛ばし過ぎたのでは……。

次からは、適宜スピードを落とす事も検討しておこう。

「……それにしても、意外だな」

「……？」

こちらの言葉に、何の事かとはばかりに巽くんは首を傾げた。
「いや、赤点回避と言う目的があるとは言え、音を上げずにここまで着いてきたのは凄い事だ。

だから、意外だな、と」

実際、途中でリタイヤする可能性も考慮していた。

巽くんは根性のある良い漢だが、不慣れで苦手な勉強の類いに対してもここまで根性を見せられるとは思っていなかったのだ。

そう言うと、巽くんは頬を掻きながら少しそっぽを向いた。

「あ……」。

ま、赤取って補習になんざなつたら、お袋を心配させつから……。
散々迷惑かけてんだし、一寸は安心させてやりてーんすよ」

その言葉に少し目が丸くなったが、同時に思わず口の端が緩んだ。
巽くんなりの、親孝行のつもりなのだ。

うん、やはり良い事だ。

「それに、先輩がワザワザ一生懸命やってくれてんすから、そこでオレが弱音を吐いちや男が廃るっすからね」

そう言いながら、巽くんは「またお願いします」と頭を下げる。

それに勿論と頷いて、その日は巽屋を後にした。



前々からの約束通り、倉橋さんに料理を教える事になり、今は倉橋さんのお家にお邪魔している。

旦那さんの帰りはまだらしいので、それまでにさっさと手早くやってしまおう。

今日教えるのは、炊飯器一つで簡単に出来るツナを使った醤油と生姜と出汁ベースの炊き込みご飯だ。

下手に下味を付ける必要がある料理にすると、倉橋さんがまたトンでも無い味を付けるかも知れないので、苦肉の策である。

用意してある材料を、炊飯器にそれを一つずつ放り込んでゆく。

各々の材料やその量にどういった意味があるのかも適宜説明しつつやっていくと、倉橋さんはとても熱心にそれをメモしていた。

炊飯器のスイッチを入れ、炊き上がる迄の時間に更に料理を教える。

春雨を使った所謂中華サラダと言うヤツだ。

これなら、アレンジジャーな倉橋さんでも、多分メイビーきつと大丈夫……だろう、うん。

途中で、酢漬けになりそうなレベルでお酢を入れようとした倉橋さんを阻止したり、砂糖を追加しようとするのを阻止しつつも、何とか料理は完成し、後は炊き込みご飯が炊き上がるのを待つだけとなる。

炊いている最中の炊飯器からは、醤油と出汁の良い香りが既に漂ってきていた。

これならば、問題ない仕上がりになっているだろう。

「ありがとうね、悠希ちゃん」

教わった事を一通りメモしたメモ帳を胸に抱えながら、倉橋さんは心底嬉しそうに微笑みながらそうお礼を言ってきた。

教えるのは大した手間でも無いが、そう喜んで貰えて何よりである。

「こんなに美味しそうに出来たの、初めてだわ。

これならきつと、お義母さんも食べてくれるわよね……」

そろそろこちらも夕飯の支度をしなくてはならない時間になってきたので、倉橋さんに一言断ってから倉橋さんの家を後にした。



【2011／07／10】



【2011／07／10】

夜間に付近を覆っていた霧も晴れた早朝……。

朝食の支度をしていると、叔父さんが飛び起きて慌ただしく支度を
するなり飛び出していつてしまった。

遠くからはパトカーのモノと思わしきサイレンの音も聞こえてく
る。

何か、事件でも起きたのだろう。

……昨晩の《マヨナカテレビ》には何も映ってはいなかった……。

だから、「犯人」とは関わりの無い事件なのだろうけれども……。

しかし、そんな考えは直後に掛かってきた電話で打ち消された。

里中さんから掛かってきたその電話は、気が動転した声で「商店街
の外れで死体が発見された」のだと伝えてくる。

久慈川さんは助けた筈なのに、と取り乱す里中さんは、『とにかく、
ジュネスで待つてるから直ぐに来て』と、電話を切ってしまった。

……死体が発見された、か。

……一連の「事件」なのか、或いは何らかの事故又は殺人か。

……【犯人】と関係しているのかは分からないが、一先ずジュネス
に行かなくてはならない。

起き出してきた菜々子に外出する事を伝えてから、直ぐ様家を飛び
出し、一刻も早く向かおうと、原付を走らせた。



ジュネスの何時ものフードコートに着くと、既に里中さんに天城さん、それに異くんが集まっていた。

が、距離的には一番乗りであろう筈の花村の姿は見えない。

里中さんが説明するに、どうやら花村は現場を確認しに行った様だ。

「多分もうそろそろ帰ってくる」と里中さんが言うのとほぼ同時に、息を切らせた花村が到着したばかりのエレベーターから飛び出してきた。

もしかしなくても、現場からずっと走ってきたのだろう。

「……やっぱ、殺人だ。」

死体、アパートの、屋上の手摺りに、逆さに、ぶら下がってたって……」

花村はテーブルに駆け寄るなり、息も切れ切れにそう報告する。

「そんな……」

「しかも、殺されたのは……」

項垂れて気落ちする天城さんに目をやりながら、花村は乱れた呼吸を整えてから、一気に言う。

「『モロキン』だ」

途端に、里中さんと異くんがガタツと音を立てて椅子から立ち上がった。

「モ、モロキン……!?!」

「モロキンって、あのモロキンか!?!」

先輩らの担任の……」

動揺を顕にする二人と同じく、こちらも動揺を隠し切れない。

「諸岡先生が……?」

確かに諸岡先生だと、実際に見た人間が現場に居たらしい。

……まさか、諸岡先生が……。

……胸を支配したのは、哀惜と言うには少し違う様な……だが、哀しみを孕んだ何処か虚無的な感情だった。

ハッキリ言って、その現場を直接的に目にした訳では無い為、実感

などは沸き様も無い。

が、花村がそんな事に虚偽を述べる必要性など存在しない為、それは事実なのだろうとは理解している。

自分にとっては、ただの担任というだけで、まだ出会ってほんの数ヶ月だし、特に深く交流した覚えも無い。

好きな教師……では無かったが別に嫌いと言う訳ではなく、諸岡先生への感情は極めてフラットなものだったと思う。

まあ、周りのクラスメイトたちが悪し様に吐く悪態程には、諸岡先生が悪い教師とは思えなかったのは確かだが。

しかし、それだけである。
それでも。

昨日帰り際に見掛けた諸岡先生の姿が、自分が最後に覚えている先生の姿なのかと思うと……やはり哀しかった。

……だが、諸岡先生に「犯人」からのターゲットになる要素などあっただろうか。

勿論、ここに来て「犯人」が趣向を替えた可能性もあるのだが……。
「何か色々と分かってきた様な気がしてたけど……」

全部、偶然だったのかな……。
《マヨナカテレビ》の事とかも……」

天城さんはそう言って意気消沈して項垂れる。
里中さんも似た様な表情だ。

「くそっ！　ここに来て振り出しかよー！
花村はそう苛立ちも頭に、机を叩いた。

「やっば、ムリなのかな……」

警察にも捕まえられない「犯人」を私たちでつてのは……」
そう弱音を吐いた里中さんの意見に、花村と天城さんも同調しかける。

……が。

「いや……まだだ。

諦めるにはまだ早い」

こちらの発言は場に一石を投じた。

花村が弾かれた様に顔を上げる。

「今迄の事件の時と状況が似ているからといって、確定するにはまだ情報が足りない。」

彼方の世界が犯行に使われたのかすらも、現段階では分からない。それなのに、もう諦めるのか？」

アパートの屋上の手摺に逆さ吊りにされていた、というのは確かに今迄の遺体発見時と似た様な状況だ。

だが、アパートの屋上は、どうやって吊り下げたのかすら不明なアンテナやら電柱やらとは違い、まだやろうと思えばやれなくも無い。

もし彼方の世界を犯行に使用していないのなら、そこから先は警察の領分だ。

……そしてその場合、今回の件の犯人が【犯人】と同一人物であるのかは、やや疑問が発生する。

そもそも、この稲羽で殺人事件が起こったからといってそれが【犯人】の仕業であるとは限らない。

全く別の人間が、【犯人】の犯行に見せ掛ける為に、態と遺体をそう吊り下げたという可能性も十分に有り得る。

勿論これが【犯人】の仕業で、今までの仮定が全て間違っていただけだったという可能性だってあるだろう。

どちらにせよ、まだ情報が足りない段階で決め付けるのは早計だ。「あっ……そっか。」

そうだよな……。まだ何も分かってねーのに……、勝手に諦めちゃうトコだった……。

ありがとう、鳴上。

お陰で何か目が醒めた」先程までの弱気は何処かへと消え去った力強い目で、花村は頷いた。

「そっすよ、先輩。」

泣きゴト言ってる場合じゃねえ……。

俺らなりのやり方で、前進むしかねえんだ。

ここまで身体張って来たんすから、今更こんなトコで引き下がってられねーっすよ！」

巽くんも力強くそう言い切って頷く。

それに、花村は「完二のクセに生意気だ」と少し笑いながら悪態を吐いた。

何時もの調子に戻ってきた所で、クマに会いに彼方の世界に行ってみないか、という話になる。

暫くは修行に励みたいとの事だったが、久慈川さんの一件からそれなりに時間が過ぎていくし、一先ず様子を見るのも良いだろう。

彼方の世界に異常がなかったかどうかとも訊ねなければならぬのだから、丁度良い。

そうと決まれば、と早速家電売り場に向かう事となった。



家電売り場に着くと、何やら店員たちが困った様な顔をして話合っていた。

そもそも店員がここに居る事自体が珍しい事だ。

……何かあったのだろうか？

花村が訊ねてみた所、どうやら売り場に奇妙なキグルミが居座っているらしい。

何かのキャンペーンだとは店員たちは聞いてなかったらしいのだが……。

どうやら、その奇妙なキグルミは「熊田」と名乗ったらしい。

……。

……着ぐるみに、「熊田」……か。

熊田……クマダ……クマだ……。

……まさか、な……。

店員たちは、花村にそう報告するなり、自分達の持ち場へと帰って

いってしまおう。

花村も困惑した様な顔をこちらに向けてきた。

こちらにも、思わず曖昧な顔になってしまおう。

そんな何とも言えない空気は、辺りをキョロキョロと見渡していた里中さんが唐突に上げた声に掻き消された。

「うわっ、いつ、居たーっ!!」

ハッと思わずその場の全員がそちらを見やり、そして全員が絶句して叫ぶ。

「クマーツ?!?!」

そこに居たのは、マッサージチェアを堪能して恍惚の表情を浮かべている、あの見慣れた……だがこちらでその姿を見掛けるとは想像もしていなかった、クマだった。

以前別れた時の身窄らしい姿とは打って変わって、見慣れたフサフサの毛に覆われた着ぐるみの姿である。

慌てて駆け寄ると、クマは何の事も無いかの様に「待ってたクマよー」と何時もの様に声を掛けてきた。

「ちよっ、何でお前がここに居るんだよ?!」

「えっ、クマさん……出ちやって大丈夫なの?」

「つかテメエ、出れるんかよっ!!」

啞然とした表情でクマを問い詰める花村と天城さんと巽くん、クマは何て事も無い表情で答える。

「そりゃ出口があるんだから出れるクマよ。

今までは、〃出る〃って発想が無かっただけクマ。

でも、皆と居る内にこっちの事に興味が湧いてきて……。

試してみたら、あっさりこっちに來れたクマ」

そして、マッサージチェアが丁度良い所に來たのか、「あーそこそこ」と寛いだ声をクマは上げる。

〃出口〃があるから、か……。

まあそう言われればそうなのかもしれない。

……特に今の所はクマに異常などは起きてはいなさそうだが……。でも、こつちに来てみてもよく考えてみれば行くトコ無いし、戻るのは勿体無かったからココで待ってたクマよ。

あ、さつき名前を訊かれたから「クマだ」って答えといたクマ！」そう楽し気に報告してくるクマに、思わず皆で苦笑いを浮かべてしまった。

「あー……それで『熊田』、ね」

呆れた様に笑う里中さんに、花村が一つ咳払いをして場の雰囲気を整える。

「あのね、クマさん。

一つ訊きたいんだけど、クマさんは何時からここに？

向こう側に居る間に、誰か来なかった？」

天城さんにそう訊ねられ、クマは少し記憶を辿るかの様に僅かに左斜め上に目をやった。

「んー……コツチの霧が晴れる迄は向こうに居たクマよ。

でも、その間は誰も来なかったクマ」

……誰も来なかった、か。

つまり今回の諸岡先生の件では、彼方の世界が犯行に使われてはいない、という事が……？

……………。

「それ、ホントか？」

本当に誰も来なかったのか？

まさかとは思うが、鼻が詰まってたなんてオチじゃねーだろうな」訝しむ様にそう念を押して訊ねてくる花村に、クマは噛み付き気味に返す。

「むー、ヨースケのクセにやけにしつこいクマね。

無かったつちゅーとるでしよっ!!

相変わらずクマはロンリーボーイだったクマ！

だからコツチに来たクマよ！

まー、ヨースケが信じないって言うなら仕方ないですけどー。前からクマ探索能力、落ち目ですしー」

終には拗ねてしまったかの様に、クマはそっぽを向いてしまう。
そんなクマに、軽く首を横に振ってみせた。

「いや、私はクマを信じるよ」

あの世界の住人であるクマが違うと言い張っているのに、あの世界が犯行に使われたとさえ続けるのはナンセンスだ。

確かにクマの力は最近弱くなり始めてはいたが、それでも誰かがあの世界に居るのか居ないのか位はハッキリとは無くとも把握していた。

そんなクマが胸を張って違うと答えているのだ。

それを信じなくてどうしろと言うのだろう。

「おお……、センセイは優しさに満ちてるクマねく。

ヨースケとは大違いクマ」

途端にコロツと機嫌を直したクマがそう喜びも顕にした笑顔で答えると、花村は後頭部をガシガシと掻きながらクマに謝った。

「あー、疑って悪かったな、クマ。

ま、確かに……昨晚のテレビには何にも映って無かったしな……。《マヨナカテレビ》の時間の直ぐ後にコッチで霧が出たんだし、あの世界が犯行に使われたんだったら、あの時間帯に何も映らなかつたのも不自然か……」

花村の言葉に、天城さんと里中さんが同意する様に頷く。

そんな中、クマは空気を読まずに、「何処かに行きたい」と言い出し始めた。

「何処かって、……何処に？」

どうやら彼方に帰る気は無さそうなクマにそう訊ねてみると、何やらゴソゴソとしてクマが何かを渡してくる。

「んーりせちゃんのトコー！

これ渡さなきゃだし！」

渡されたのは、恐らくは久慈川さん用のモノであろう眼鏡だった。成る程、確かにこれは久慈川さんに渡しに行く必要がある。

前に丸久さんに訊ねた感じでは、そろそろもう復帰出来る頃合いだろう。

今日辺りにでも訪ねに行きたいものだ。

「りせちゃんのバックアップ能力があるので、クマはバックアップから卒業してこれからはセンセイ達と一緒に最前線でバリバリ活躍するクマになるクマよ！」

今迄のクマと同じと甘く見て貰っちゃ困るクマ！

これからは！

戦って良し、守って良し、笑顔も良しの三拍子揃った「クマスペック2」、参上クマ！

今ここに新たななるクマ伝説の幕開けクマよ!!」

そう決意も新たに気炎を上げて宣言するクマに、何故か「伝説」の部分に感銘を受けた天城さんが拍手を送る。

そんなクマの人目を憚らないハイテンションっぷりと目立つ容姿に、親子連れ等が何かの見世物かとはばかりに集まってきた。

店内の他の客の視線もどんと集まってくる。

「ゲツ、ちよつとクマ、お前人目を惹きすぎなんだよ！」

あーもう、兎に角一旦場所移さねーと！」

花村は頭を抱えつつそう言って、マツサージチェアに未練を残すクマを引き摺って、何時ものフードコートへと移動した。



暑い日射しが照り付けるフードコートでも着ぐるみ姿のクマは注目を集めていたが、まああのまま家電売り場に留まるよりはずっとマシだろう。

取り敢えず、と皆で状況を整理し直す。

念の為にもう一度クマに訊ねてみたが、やはり久慈川さんの救出後からこちらで発生した霧が晴れる迄の間に、自発的か否かは問わずに彼方の世界にやって来た人間は居なかったのは確かなようだ。

「つつー事は、モロキンの件はこつちの世界で行われた犯行って事に

なるんだろーけど……」

ウーンと唸る花村に同調するかの様に、リボンシトロンで喉を潤しつつ里中さんも首を捻る。

「なーんでモロキンだけはテレビに入れなかったんだろ……。」

モロキンだけは「特別」って事？

でも、何で……」

「分かんない、けど……。」

やっぱり、「怨み」、とかなのかな……」

天城さんも悩みつつ、己の考えを口にした。

「怨み」、か……。」

こちらの世界での犯行、という事は、被害者を直接的に殺傷する必要性がある。

これは中々難しい話だ。

勿論、何かの弾みだとか、カツとなつてだとか……ある種意識せずに人を殺してしまうと言う事はある。

それでも、人間が別の人間を殺傷する、と言うのは大抵はかなりの心理的抵抗がある筈だ。

それを乗り越えるのには、それこそ怨みだとかの強い感情が必要になる。

中にはサイコパス等と呼ばれる様な人間や、精神的に異常な状態にある人間も居るには居るが……。」

どうであるにせよ、今重要なのは、今回の諸岡先生の一件での犯人と、今迄の件の「犯人」は、同じと言い切れない部分があると言う事だ。

「でも、何だつて急にこっちの世界で殺す事にしたんだ？

足が付かない様に、あっちの世界を使つてたんじゃねーのか……？

しかも、今迄は「殺す」つっー目的でも無かつたぽかつたのに……」

頭を抱えて悩む花村を横目に見つつ、天城さんが迷いながらもポツポツと意見を述べ始める。

「分かんないけど……。」

でも、もしかして……「実験」、だったんじゃないかな……」

「実験」と言う言葉に、クマを除いた全員が顔を上げて天城さんを注視した。

「『実験』……スか？」

今一つよく分かっていない巽くんが首を傾げる。

「うん……」

【犯人】が、もし事故で山野アナをあつちに放り込んじゃったんだとして……、そして【犯人】があつちの世界に放り込んで放置してたら死んじゃうって事を知らなかったら……。

山野アナの遺体が見付かって初めてその可能性に思い至ったんじゃないかな。

それで、それを確かめる為に、小西先輩を入れて、私達も入れた。

何時か、本気で殺したい人間を殺す時の為の手段に使えるか、確かめる為に」

「そんなの……」

天城さん自身、自らが至った考えに若干顔を青褪めさせつつそう説明し、それを聞いた里中さんは絶句した。

「……今まで『マヨナカテレビ』に映った人がターゲットにされたのは……」

花村は苦虫を噛み潰した様な顔をする。

「……それこそ、実験対象は『誰でも良かった』から……なのかも知れないな……」

単純に、『マヨナカテレビ』で意識に留まったから、丁度良いかと、思ったのかもしれない」

だから、ターゲットが生還しても、何のアクションも取らなかった……。

【犯人】にとっては、ターゲットが生還した所で、単にモルモットが生きていた程度の感慨しか無いから。

態々モルモットを殺す必要性を感じて無かったから、放置した……のかもしれない。

その可能性は、完全には否定出来ないだろう。

花村もその考えに至ったのか、ギリツと歯を砕かんばかりに噛み締める。

「でも……私以降は皆、ターゲットが助かってるから……。」

それで、確実に殺す為に、諸岡先生はこっちで直接手を下したのかも……。」

……【犯人】の真のターゲットは諸岡先生で、それ以外はただの実験過程でのモルモット、か。

……もしそうなら、【犯人】の思考回路は確実に狂ってる。考えるだけでも、ゾツとする話だ……。

そんな中、ガンツと音を立てて花村がテーブルに拳を叩き付けて立ち上がった。

固く握り締め過ぎたその掌には、確実に爪が食い込んでいるだろう。

そして、己の内に渦巻く憤りを抑え様ともせず、花村は吼えた。

「何なんだよ……。」

何なんだよ、それは……！

先輩は、ただのモルモットとして殺されたってのかよ！

そんなの……。そんなのって……！」

その先はもう言葉にならなかつたのだろう。

剰りの激情に、目の端に僅かに涙を浮かべた花村は、荒く息をして、力無く椅子に座り直した。

……。

今迄の犯行がただの実験であつたと言う説は、どう考えてもあやふやな今迄の犯行での【犯人】の目的に対してかなりの説得力がある。

十分に可能性として考慮すべき事柄だ。

しかし、やはりそう考えたとしても【犯人】の行動原理は理解し切れない範疇にある。

何故態々、人間を拐ってまでモルモットとして使ったのだろう。

それこそ、犬猫等から始めてみても良かったんじゃないだろうか……。

この稲羽では猫が見付からないだけでも十分にニュースになるの

だから、犬猫の変死体だって十二分にニュースとして賑わうだろう。死ぬかどうかという成果を確かめたいだけならそれこそ動物でも良いだろうに……。

それをせずに、態々人間を拐うというリスクを侵す必要性は何処にあるのか……。

……「変死体」……？

何かが僅かに引つ掛かった。

もう一度よく考えてみる。

そもそも山野アナと小西先輩の遺体の発見状況がああなったのは、【犯人】の意図した所では無い。

彼方の世界を犯行に使用した事による副産物的な結果でしか無いからだ。

が、今回の件はこちらの世界で行われた。

ならば、諸岡先生の遺体が吊るされていたのは、犯人の行為によるものであり、それを意図したからである。

そこが、そこそが問題だ。

そもそも【犯人】には死体を変死体にする必要性など存在しない。

例えば、今回の諸岡先生の遺体が、極普通の状況（まあ道端に倒れてたりとか）だったら、山野アナや小西先輩の件と同一犯の仕業とは考えないだろう。

万が一逮捕された場合に、一人殺しているのと三人殺しているのではその罪の重さは全然違う。

つまり、【犯人】には今までの犯行と今回の犯行を態々結び付ける必要性など無いのだ。

愉快犯的な、世間を騒がせたり注目させたいという目的なのならば話は別であるが。

しかし、今回の諸岡先生の件が「怨恨」に依るモノであるならば、愉快犯とは言えないだろう。

そして、今まで狡猾な面を見せていた【犯人】が、今更そんな事をする様には考えられない。

ならば、何故か。

それは、今回の件の犯人が、自分の犯行を、「犯人」の仕業だと擦り付ける為なのではないのか？

或いは、所謂「模倣犯」の様なモノなのかもしれないが。

そして、今回の件の犯人が「犯人」で無いからこそ、彼方の世界を犯行に使用しなかった。

何故ならば、そもそもその存在を知らなかったから。

その可能性も、十分に考慮すべきなのではないだろうか。

纏めた考えを皆に話すと、皆は納得した様なそうで無い様な……若干煮え切らない表情を浮かべた。

「その場合だと、「犯人」の他に、今回の件の犯人が別に存在するって事だよな……」

「模倣犯……か。有り得るの……かな……？」

花村と里中さんはウーンと唸る。

……まあ、殺人犯が「犯人」と模倣犯の二人居ると考えるよりは、「犯人」一人と考えた方が精神の衛生上は良いのかも知れないが。

「まあ、全てはまだ推論の域を出ない。

まだ情報が足りないから、どうであるにせよ結論付けるには早過ぎる。

……それに、だ。

今回の件には彼方の世界が関わっていないのだけは確かなのだから、それは警察の領分なんじゃないだろうか」

クマと約束したからと言うのは勿論あるのだが、元々は彼方の世界を使った犯行は現在の警察の手に負えるモノでは無いからこそ独自に「犯人」を追っていたのだ。

今回の件が「犯人」に依るモノであるにせよ、模倣犯に依るモノであるにせよ。

こちらの世界での犯行なのだから、それを解決するのは警察の仕事である。

警察が解決すべき……或いは可能な事柄にまで首を突っ込んで行く程、自分達は自惚れてもいない。

「あーそっか……」

「それもそう、だよな……」

「何処か残念そうに花村は頷く。」

「……まあ、その気持ちは分からないでも無い。」

「今回の件が【犯人】の仕業で、それで警察に逮捕されるのなら一連の事件はそれで解決し、以降の犯行は起きない。」

「まあ、自分達の手で【犯人】に辿り着けないのは多少納得はいかないが、それでもそれは歓迎すべき事柄だ。」

「そして、今回の件がただの模倣犯である場合……、【犯人】は他に存在するし、彼方の世界を使った犯行が今後も続くかもしれない。」

「それならば、私達がそれを追えば良い。」

「そうだろう?」

「そう訊ねると、今度は皆が納得した様に頷いた。」

「そして、現段階で私達に出来る事は、 “情報を集める事” 。

「だから、今は久慈川さんに会いに行こう」

「眼鏡を渡す用件もある事だし、丁度良い。」

「うん、そうだね。」

「りせちゃんの話から、新しく何か分かるかもしれないし。」

「んじや早速、商店街に行っちゃおう?」

「里中さんがそう提案し、皆が立ち上がろうとしたその時。」

「はあくそれにしてもココ暑いクマねー。」

「もうクマ限界……。」

「……うん、取ろ」

「今迄議論に参加していなかったクマがそう言うなりゴソゴソと頭に手をかけ始めた。」

「オイオイ、取るって……、まさか、頭をか!？」

「ちよつ、止めろよ!？」

「子供が見てんだろ!」

「中身もねーのに動いてる着ぐるみなんて、確実にチビツ子達のトラウマになんだろ!」

「氣い遣えよ、こら!」

「慌ててクマの頭を押さえ込んだ花村は、辺りを見渡して僅かに呻

き、そう言い聞かせる様にクマの耳元で話す。

炎天下とは言え、休日かつ晴天のフードコートはそれなりの人で賑わい、子供たちも沢山居る。

さつきまでの議論に夢中になっていた為に気付かなかったが、愛嬌のあるクマはそんなチビツ子達の注目の的であったのだ。

押さえ込まれて不満な顔をしたクマに、天城さんが少し冷や汗を浮かべながら、「毛が元通りになって良かったね」、とクマの気を逸らせ様とする。

確かに、あのペラペラでボロボロの状態からこうも見事に復活出来たのは、驚嘆に値する事である。

「元通りじゃないクマよ。」

クマはスーパークマに進化したクマ！

センセイと千枝ちゃんや雪ちゃんを逆ナンせねばと励んだ結果、中身あるクマになったクマ！

クマはチツチツと指を振って、そうドヤ顔を披露した。

「あーはいはい、偉いねー、クマくん」

「もう、逆ナンネタ何時まで引っ張るのよ」

里中さんはジョークとでも思ったのか苦笑いでクマの発言を流し、天城さんは何時までも弄られる逆ナンネタに落ち込んだ。

「あーもう限界！」

これ以上はクマの中身が溶けちゃうクマ！

エイヤ、と自分の頭部にのし掛かっている花村を押し退けて、クマは素早く自分の頭を外してしまった。

「！！」
「………?!?!」

その場の全員が、啞然としてクマを見る。

クマの着ぐるみの中から出てきたのは、金髪碧眼の極めて見目の良い、超が付く程の美少年だった。

「……フウ、良い風！」

まあそりゃ、暑苦しい着ぐるみの中よりは例え炎天下の屋外であつ

ても涼しいだろうな……、と非現実的な状況に逃避しかけた思考の片隅で思った。

美少年は、処理落ちして固まってしまった花村の分のリボンシトロに手を伸ばし、一気に叩る。

「ぶは〜っ！うーん、生き返るってカンジ？」

キラキラと輝かんばかりの笑顔を美少年は浮かべた。

「あー……………えーっ……………」

クマ、なんだよな……………??？」

フリーズしたままの花村たちを置いて、思わず目の前の美少年にそう訊ねる。

声は確かにクマのモノであるのだが、何をどう頑張っても目の前の美少年とクマがⅡでは結び付かない。

目の前で着ぐるみから出てきたというのにも関わらず、目の錯覚だったんじゃないかと、思わず目を擦ってから凝視するが、目の前に居るのは確かに美少年で、更に言えばクマの着ぐるみを纏っている。

客観的に言えば、この美少年がクマの着ぐるみを着ていたのは間違い無いが、ではクマは何処に行ったと言うのか……………。

目の前に居るのがクマ……………？

いやいや、そんな冗談は、流石に信じられないと言うか……………。

前にクマの着ぐるみの中を見てしまった時は、紛れも無く“中の人など居ない”状態だったのに。

「ん、そうクマよ。」

あ、ところでセンセイ。

何か着るモノとか持ってない？

クマ……………生まれたままの姿だから……………」

コクンと頷いた美少年……………いや、クマはキラキラと光を放つ様な笑顔でそんな事を宣ってきた。

……………ん？

今、生まれたままの姿って言わなかったか……………？

確かに、着ぐるみから覗く肩の辺りには、衣類と思わしき物が何も

存在しない。

つまり、全裸……？

「ちよつ、ここで全裸とか洒落になんねーぞー！」

やつと再起動した花村がそう慌てて立ち上がった。

仲間が猥褻物陳列罪で引つ張られて行くのは流石に見たくない。

「えつと、ええつと、と、ともかく着るモノだよね?!?!」

里中さんも慌てて立ち上がる。

「ジュネスで適当に見繕うしか無いな……」

この中では一番家が近いだろう花村に自宅から何か衣類を調達して貰うのも一つの手かもしれないが、今は一刻を争う。

仕方無い、特捜隊用のお財布から用立てよう……。

「取り敢えず、私はクマの服を見繕っておくから、花村たちは先に商店街に行つて待つてくれ。」

四六商店辺りで時間を潰して貰つていても構わない」

「あつ、鳴上さん、私も手伝うよー！」

里中さんがそう手を上げ、天城さんも手伝いを申し出てくれた。

一から服を見繕うのは手間なので正直助かる。

一先ず、一旦はここで花村たちとは解散して、クマを下の服売り場へと引き摺って行く事になった。



「ムホーツ！ これはアレクマか！」

女の子が身に付けていると言うブラ……「静かに、クマー！」

途中で通りがかつた女性モノの衣服売り場（下着類）に、大興奮したクマが叫びそうになった所で咄嗟にその口を塞いでそれを阻止する。

更には、クマが掴んでいる自らの着ぐるみ（最後の防壁）から手を離そうとしたので、それも慌てて掴んで、クマが下半身を曝すのを阻

止した。

クマの鼻は塞いでいないから息は出来ている。

何やら不満そうにクマは塞がれた口でフガフガと何事かを言いかけたが。

「良いか、クマ。」

一先ず一通りの服を手に入れて身に付ける迄は、騒いで注目されるのはダメだし、ましてやこの着ぐるみから手を離してもダメだ。

それが出来ないなら、家電売り場のテレビに叩き返すしか無いが、それはクマだって嫌だろう？

初めて見るモノにワクワクする気持ちは分からない訳じゃないが、今は兎に角自分を抑えてくれ。

出来るよな？」

ジツと目に入れて念を押すと、クマは少し冷や汗をかきながらもコクコクと頷いた。

後ろで里中さんと天城さんが、頭を抱えて溜め息を溢している。兎にも角にも。

こちらの世界の何もかもが初めてなクマは、見るもの全てに興味を示し、隙あらば奇行に走りかける。

要は赤ちゃんや小さな子供と同じようなモノだ。

これが普通の小さな子供なら、周りの人たちも「あらあら、元気な子ね」程度の反応かも知れないが、クマの見た目は中学生位のヨーロッパ系の超美少年だ。

しかも、着ぐるみの中は全裸。

もしここで注目を集めれば、クマが様々な意味で死んでしまう。

だから今は兎に角、多少の奇行を取っても差し障りの無い状態にしなければならぬのに、クマはその辺りが分かってないらしく、一瞬足りともクマから意識を逸らす訳にはいかない。

……正直に言って、かなり疲れる。

言い聞かせた後は、二三度小規模な騒ぎを起こしかけたもののそれなりに素直にクマは連行され、やつとの事で男性用の服売り場まで辿り着いた。

一先ず、大雑把に目測したサイズの下着を里中さんに、シャツとパンツを天城さんに買いに行つて貰い、自分はクマを試着室へと放り込んで、勝手に出ていかない様に見張る。

程無くして戻つてきた二人が買つてきた服は、まあ安くは無かったが、背に腹は代えられない。

諦めてバイトに励むしかないだろう……。

兎も角もそれを試着室中に居るクマへと渡して、待っていると……。

「むー……着方が全然解らんクマ。

センセー、これどう着るクマー？」

等と言う声がかして、試着室を出てこようとしたクマが、少なくとも上半身に何も身に付けて居ないのを見てしまい、咄嗟に試着室へと押し戻した。

「わわわ、センセイ、酷いクマよー」

クマは抗議の声を上げるが、こちらはそれどころでは無い。

「着方は教えるから……！」

だから、何も着ないままそこから出ちゃダメだって言っただろう」
不満そうな声を上げるクマに、顔だけ試着室から出して貰つて、何とか服の着方をレクチャーする。

多少の不具合はあったものの、最終的には修正に成功し、試着室からやっとの事が出てきたクマは……。

キラキラした空気がとても似合う、何処に出しても恥ずかしくない美少年だった。

華を添える程度に施されたフリルと大きく開いた襟元がクマの美少年度を上げ、何故か胸元に付いていた赤い薔薇を模した小物はまるで童話の王子様が本からそのまま抜け出してきたかの様である。

一言で言えば、とても似合っている。

しかし惜しむらくは、この稲羽という田舎町では浮きに浮いてしまうという点だろうか。

まあ、そもそも。

クマの見た目ではどんな格好でも浮いてしまっていただろうが。

ならば似合う服を素直に着せるのが一番である。

……服一式の値段は、遠い目になってしまいそうな値段だったが。

……うん、まあ……仕方無い。

必要経費なんだと、割り切るしかないだろう。

脱いだ着ぐるみ……クマ曰く、「クマ皮」をどうするのかには少し頭を悩ませたが、花村に電話で相談して、ジュネスのバックヤードを使わせて貰う事で解決した。

花村には色々と無理を通して貰っていて、何だか申し訳無い。

まあ、今度ジュネスの手伝いを頼まれた時にでも、日頃の恩返しをしておこう。

見るモノ全てに興味津々で、直ぐ様突撃しようとするクマを押し留めながら、何とか引き摺る様にしてジュネスから脱出して、花村たちが待つ商店街を一路目指した。



クマを引き摺って四六商店まで行くと、花村と巽くんは懐かしのホームランバーアイスを齧りながら待っていた。

よっ、とこちらに右手を上げて挨拶した花村は、そのまま引き摺られてやって来たクマの姿を見てあんぐりと口を開ける。

「ク……クマか、お前？」

信じられないと言いたげに、そう花村がクマに訊ねると。

「イツエース、ザッツライト！」

「イカガデスカ？」

日本語に不慣れな外国人が使う片言の日本語の様な不思議なイントネーションでそう言いながら、キラツと謎のポーズングを行った。

「はいはい、似合ってるよ」

やれやれと軽く溜め息を吐きつつもこちらがクマの格好を褒めると、アイスの棒を手にしたままの巽くんが驚いた様な顔をする。

「なんつーか、……スゲー見違えたっスね」

「あたしらもビックリしたけどさー」

間違いないクマくんだから。

性格もまんまだし……」

クマの奇行を思い返しているのか、遠い目をしつつ里中さんはそう言った。

見るもの全てに興味津々なクマをここまで連れてくるのに、まあ色々あったのだ……。

「大変だったんスね……」

里中さんが言葉にしなかった部分を察した巽くんも、そつと遠い目になる。

「およ？　ヨースケとカンジが手に持つてるのって何ー？」

話題の渦中にあるクマはと言うと、花村と巽くんが手にしているアイスの棒が気になった様だ。

「これか？　ホームランバーだよ」

そう巽くんは答えるが、それは正確には「ホームランバーアイス」の棒だと思うが……。

ホームランバーと言われても良く分からなかった様で、クマはキョトンと首を傾げる。

「ほーむらんばー？」

「あー……アイスだよアイス」

巽くんのそれは説明になっていない。

しかし、アイス等の氷菓の類を恐らくは見た事も食べた事も無いであろうクマに、アイスとは何ぞやと口で説明して理解して貰うのは至難の技だろう。

すると、やれやれと首を振りながら花村が徐ろに財布を取り出して、千円札を二枚取り出して巽くんに押し付ける。

「あー、これで好きだけアイス買って、クマと二人で分ける。

俺たちは今から豆腐屋行ってくるから、その間クマの面倒見ててやってくれ」

急にお金を渡されて巽くんは少し戸惑っていたが、了解したのか一

つ頷いて、クマを誘って四六商店の中へと入っていった。

「面倒見が良いんだな」

ワイワイとアイスを選んでいる二人を微笑ましく見ながらそう言う
うと、花村はワシワシと頭を掻きつつ答える。

「ま、リニューアルしたクマきちの歓迎代わりだよ。」

つか、アイツの服の金、どっから出たんだ？

あれ結構値が張ったんじゃない？……」

「特捜隊の活動資金から出したよ。」

……まあ、一週間分のバイト代は吹っ飛んでいったけど……」

服の値段を思い返し、思わず遠い目になった。

特捜隊の活動資金が一部こちらのバイト代でも補填されている事
を知っている花村は、何も言わずにそつとこちらに手を合わせてく
る。

まあ何はさておき、巽くんがクマの面倒を見てくれている内に、所
用を済ませておこう。

◇◇◇◇◇

丸久豆腐は四六商店のすぐ横にある。

店に入ろうとすると、丁度中から人が出てきた。

「おや……やはり貴方が来ましたか、鳴上さん」

帽子を軽く押さえてからそうこちらに話し掛けてきたのは……白
鐘くんだ。

軽く会釈をし、挨拶を返す。

「こんにちは、白鐘くん」

久慈川さんの情報を集めていた時に偶然出会って以来なので、凡そ
二週間程振りだろうか。

……やはり、と言うからには、こちらが久慈川さんに会いに行くの
は白鐘くんも予想していた様だ。

「今度は、久慈川りせを懐柔するおつもりですか？」
……成る程。

失踪した人間がこちらに協力する様になるのを、こちらが懐柔しているからだ、白鐘くんは考えているらしい。

こちらにそんなつもりは一切無く、その部分を白鐘くんは勘違いしているが。

「単に後輩のお見舞いに来ただけだよ。

懐柔って言葉の意味には程遠いとは思うけど」

そう答えても、白鐘くんは探る様な目をこちらに向ける。

「……まあ、そう言う事にしておきましょう。

ああ、そう言えば、貴方以外の方にはまだ名乗っていませんでしたね。

僕は白鐘直斗。

例の殺人事件について調べています」

……もしかなくても、前に叔父さんが言っていた《特別捜査協力員》とは、白鐘くんの事なのだろう。

……………?

すると、巽くんの事件が起きる前から動いていた事から、白鐘くんはここに派遣される前から、事件の事を調べていたのだろうか。

「成る程。

もしかしくなくても、白鐘くんが《特別捜査協力員》なのか」

「ああ、鳴上さんの叔父は堂島刑事でしたね。

ええ、そうですよ。

僕がその《特別捜査協力員》です」

一つ頷き、そして、一つ意見を聞かせて欲しい、と白鐘くんはこちらに話題を振ってくる。

「今朝方発見された被害者の諸岡金四郎さん……。

……皆さんの通う学校の先生ですよね？」

「そうだね。

あと補足するなら、ここに居る四人の担任でもあった」

一つ頷きそう答えると、白鐘くんはほんの僅かに表情を曇らせた。

「……そうでしたか。」

……第二の被害者である小西早紀さんと同じ学校の人間……。専らそればかりが騒がれています。そこは重要な所じゃない。もつと重要な点だが、彼の一件では決定的に異なっているんですよ……」

そう何かを確信している事を滲ませる声音で、白鐘くんは続ける。「この人……テレビで報道された人じゃないんです。」

そして、失踪した形跡も存在しない。

さて……どういう事なのでしょうね？」

白鐘くんの言葉に、自分以外の三人は驚いた様に目を見開いた。

……成る程。

白鐘くんが切れ者だと言うのは、確かに真実である様だ。

この歳にして《特別捜査協力員》として警察から頼りにされるだけのモノはある。

表立っては一連の「事件」と関連付けられてはいない天城さんたち以下の失踪事件を含めた【事件】と、明らかに今回の一件で異なっている部分に気が付いたらしい。

「さあ？ 私からは確たる事は何も言えないからね。」

でも一つ言える事があるとすれば……。

……白鐘くんは、既に「その可能性」を考え着いているんじゃないのかな」

既に、白鐘くんにはある種の確信があるのだろう。

……今回の一件は、一連の【事件】の【犯人】によるものではなく、「模倣犯」による事件なのだと。

勿論自分も今回の件が「模倣犯」によるモノである可能性を考えている。

だが、自分の手元にある情報だけでは、まだそれを確定は出来ない。しかし、何せ白鐘くんは警察と協力関係にあるのだ。

こちらが知り得ない情報の中には、テレビ報道云々以外にも、もつと明らかに異なる部分があったのだろう。

そこを伏せてこちらに訊ねてくるという事は……。

……こちらを、【犯人】或いはそれに繋がる人間として疑っているのかもしれない。

まあ確かに、自分達の動きは、ある程度事件を調べている人間からすれば怪しいので仕方無い事ではあろうけれども。

「……成る程、そうですね。」

貴方も、そう考えているんですね……。

……僕は事件を一刻も早く解決したいだけです。

皆さんの事、注目していますよ。

それじゃ、いづれまた」

そう言い残し、白鐘くんは悠々と丸久豆腐店を去って行った。

「なんなんだ、あいつ……」

「なんか、何でもお見通し！って感じだったね。」

テレビの事も気付いてたみたいだし」

花村と里中さんは何処と無くぐったりとしながらそう言った。

まあ、その気持ちは分からないでも無いが。

「警察の方にもああやって事件の真相に近い所に迫ってる人が居るのは良い事だ」

今こちらにその疑いの目が向けられているのは良い事では無いが、何れ【犯人】に辿り着けそうになった時に警察も動いてくれるのだとしたら、それに越した事など無い。

「……あ、来てくれたんだ。いらっしやい」

ふとそう声を掛けてきたのは、白鐘くんが去って行った方向とは逆方向からやって来た久慈川さんだった。

今日は店番を担当している訳では無いのか、私服である。

大方、さつきまでは散歩に出掛けていたのだろう。

見た所、体調はかなり良さそうである。

「こんにちは、久慈川さん。」

体調の方は、もう大丈夫なのかな？」

そう訊ねると、久慈川さんは確りと頷いた。

「うん、すっかり元気になったよ。」

先輩は前に何度かお見舞いに来てたよね？ ありがとう」

豆腐を購入する序でに、久慈川さんの様子を訊ねていただけだ。お見舞いとカウントしていいのかは、若干微妙な所である。

「いや、久慈川さんが回復したのなら、それが何よりだ」

花村たちも、良かった、と安堵の息を吐いた。

「あ……そうだ、今、時間大丈夫かな？」

あの時の事、話さなきゃって思ってたんだ。

でも、場所移した方が良いよね……」

巽くとクマも入れると、総勢6名にもなる。

それだけの人数が店先に集まっているのは商売の邪魔になってしまおうし、それに流石にあの世界の事をこんな往来のど真ん中でペラペラと話すのはどうかとも思う。

「この近くなら……辰姫神社はどうだろうか？」

虫取小僧たちがやって来る事はままあるが、基本的にこの時間帯にはあそこに人はほぼ来ない。

あまり人に聞かれても困る話をするには、そこそこ適しているだろう。

「うん、あそこなら大丈夫だと思う」

久慈川さんが頷いた所で、辰姫神社へと移動した。



四六商店でまだアイスを選んでいる巽くとクマに一声掛けてから、辰姫神社の境内で久慈川さんに覚えている限りの事を聞いた。

……久慈川さんが言うに、巽くんが最後に久慈川さんを見掛けてから少しして、店番を丸久さんへと交代して家の方へと戻っていたらしい。

が、その後の記憶は極めて曖昧で、気が付いた時には既に彼方側だったのだとか。

何か店に出入りしている業者が訪ねて来なかったか尋ねてみたが、

その辺りの記憶は無いらしい。

……やはり、直接的な手掛かりになりそうな情報は無し……か。

「あ、そう言えば、さつき白鐘って妙なヤツが店に来てたみたいなんだけど……」

花村が思い出した様な顔をして訊ねると、久慈川さんは軽く頷いた。

「ああ……彼、家に何度も来てるの。」

事件の事、色々訊きに来てて。

……でも、〃あつちの世界〃の事は話してない。

言ってもムダだって、思ったし。

先輩たちの事も色々訊かれたけど……適当に言っただけで済ませておいた。

〃ジュネスの屋上で気を失ってた所を助けてもらった……とかね」

確かに、真実を言った所で信じてはくれないだろうし、見え透いた嘘を言っただけで済ませるだけだろう。

彼方の説明が出来ない以上は、久慈川さんと自分たちとの関係性を適切に説明するのは極めて困難な話である。

それならば、適当にはぐらかしておく方が余程良い。

「そうか。」

……うん、誤魔化しといってくれてありがとう、久慈川さん」

「りせ、で良いよ」

久慈川さん……いや、りせにそう言われ、了解の意を表して頷いた。

そして、ここに来てやつと、まだちゃんと自己紹介をしていなかった事にも気が付く。

「そうだ、まだちゃんと自己紹介してなかったね。」

私は鳴上悠希。

八十神高校の二年生だ」

花村達も簡素ながらも自己紹介をしていき、この場にはいない巽くんとクマ以外が一通り名前を教えた所で、りせが何故か何かを言おうと言いだした。

「……ん？ どしたん？」

里中さんがそう訊ねると、りせは意を決した様な表情となり、突如
明るい笑みを浮かべた。

「助けてくれて……ありがとね！」

嬉しかった！」

「りせちー」としてのキャラ付けそのものの様な笑顔や口調に、
ファンである花村が感極まったかの様に顔を片手で覆う。

「やば、カワイイ……」

あー、今やつとホンモンって実感した。

確かに「りせちー」だ……」

……まあ、花村が幸せそうで何よりである。

うん、良かったな、花村。

「その……最近の私、疲れてて少し暗かったから、嫌かなと思って
……」

喋り方……変かな？

あ、でも、世間的には今の感じの方が、私の”普通”なのかな……
少し困惑しつつりせはそう訊ねてくる。

……《どれが》”本当の”自分か分からない《と》言うのがりせの悩み
でありそれがりせの『シャドウ』へと繋がっていた。

ペルソナを手に入れていたという事は、その悩みにある程度の答え
を出せたのだらうとは思うのだが、何せ気を失っていた自分にはその
辺りの経緯の記憶は無い。

……まあ何にせよ、答えを出したからといってまだ全てが解決した
訳では無い為、こうやって戸惑う事もあるのだらう。

「私は、りせの好きな様にすれば良いと思うよ。

どんな顔でも、りせはりせだ。

それだけは変わらない。

何も変などでは無いと、私は思う」

人は、その場その時々で異なる顔を見せる。

でもだからと言って、それらの顔が嘘だの演技だのと言う訳でも無
い。

それらは一側面に過ぎないが、それでもその人である事には変わらないだろう。

その人の中で悩む分には兎も角、他人が変だの何だのと口を出す様な事でも無い。

里中さんと天城さんも、こちらの意見に同意する様に頷いた。

「そっか……」

うん、ありがとう。

良かった……、最初に知り合ったのが先輩達で……。

……私、あの世界でみんなを助けられるんでしょ？

あの”力”で」

少し迷ったが、りせの言葉に頷いた。

りせのあのアナライズの力があれば、大いに助けになるのは間違いないが無い。

だがしかし……。

やはりあの世界は危険が伴うのだ。

もう既にクマの『シヤドウ』との戦いで力になって貰ったとは言っても、これ以上巻き込んで良いものなのかは少し迷う。

が、りせはこちらの迷いを見透かした様に言葉を続けた。

「なら、私が仲間になった方がいいでしょ？

みんなが私を助けてくれたんだから、今度は私がみんなの力になりたいの」

……りせのその目に宿る決意の光は強い。

……なら、これ以上迷うのは野暮と言うものだろう。

「そうか……ありがとう、りせ。

これから、よろしく」

右手を差し出して、りせと握手を交わす。

それと、と。

クマから預かっていたりせの分の眼鏡を手渡した。

「それ、なんつーのか、仲間の証みたいになってるモノでさ。

あっちの霧も、これがあつたら見通せるんだ」

花村がそう眼鏡について説明し、それに納得した様にりせは頷く。

「そうなんだ。」

そう言えば、みんなあつちで眼鏡かけてたね。

ふふ、ありがとう。

これで私も仲間、だよな」

受け取った眼鏡を大切そうに胸に抱き、りせはそう嬉しそうに柔らかな笑みを浮かべた。

「りせちー」の様に弾ける様な笑顔でも無く、初めて出会った時の様に翳りのある表情でも無い……。

しかし、紛れも無くそれは「りせ」の表情であった。

「私、明日から、八十神高校に通うの。」

先輩たちと同じ学校。

でも私、まだ友達いないから、仲良くしてね」

りせの言葉に、皆思い思いによりしくと返す。

そんな中、何やら色々入ったビニール袋を提げて、巽くんが境内へとやって来た。

「うーす、調子どうスか？」

「一通り終わった感じかな。」

それで、そのビニール袋はどうしたんだ？」

巽くんの手に掲げられていたビニール袋を指差して訊ねると、巽くんは「これっスか？」とそれを持ち上げながらこちらに歩いてくる。

「先輩らもアイス食べるんじゃないかねーかなって、適当に色々買ったんスよ」

ほら、と巽くんが開けてみせたビニール袋の中には、確かに様々なアイスが詰まっていた。

ここに居る全員に行き渡らせてもまだ余る位にはあるだろう。

「ホームランバー」に「ガリガリ君」、おや……「シロクマアイス」や「ガツンとミカン」まで入っている様だ。

この暑苦しい夏の盛り、真つ昼間では、幾ら木陰が多くて直射日光からは守られてるとは言えども、屋外である以上は神社の境内だって充分暑い。

そこによく冷えたアイスとは気が利いている。

まあ、そのアイスの金の出所は元を辿れば花村なのだけでも。遠慮無く巽くんからビニール袋を受け取り、皆が皆思い思いに好きなアイスを持つていった。

巽くんは「ホームランバー」、天城さんは「シロクマアイス」、里中さんと花村は「ガリガリ君」で、りせは「ガツンとミカン」を選ぶ。

もう一本あったので、こちらも「ガツンとミカン」を選んだ。袋にはまだ「ホームランバー」が二本程残っている。

「そう言えば、クマはどうしたんだ？」

巽くんと一緒にアイスを食べていたのではなかったのだろうか？

そう訊ねると、巽くんは頭を掻きながら答えてくれる。

「あー、クマの野郎ならさつき食ってたアイスで当りが出たんで、もう一本を貰つてるところス。

もうそろそろ来るんじゃないっすかね」

巽くんがそう言うのとほぼ同時に、ブンブンと両手を振りながらクマも境内へとやって来た。

その手には「ホームランバー」が握られている。

「センセー！ ヨースケ！

さつき、アタリ」つてのが出て、これもう一本貰えた！」

ピョンピョンと跳ねる様にして喜びを全身で表現しつつそう報告してくるクマに、微笑んで良かったなと頷いた。

「どうやらクマは「ホームランバー」をいたく気に入ったらしく、巽くんが言うにもうこれで5本目にもなるらしい。

お腹を壊すぞ、あんまり食べ過ぎると。

アイスを囓りながら皆で話をするが、「事件」については今朝の諸岡先生の件の分を含めた上で、これといった情報が無く、それらについてはまた明日にでも改めてと言う事になった。

すると話題は半ば自然と学校の話になる。

夏休みまであと一月を既に切つていると言う事で、話題はやはり今度の期末テストのものが中心となった。

「あー……っかし、こんな時期に転入つてのも、りせも大変だよな

……。

今はモロキンの事件の事もあるし、テストも近いし……。

つか、テストやるんかな」

アイスを囙りつつそう嘆息する花村に、里中さんも溜め息を溢しつつ首を振った。

「テストだけはやるんじゃない？」

憂鬱、と言う言葉をそのまま表情にしたかの様な二人に、りせが軽く笑う。

「あんな怪物を相手にして死にそうになりながら戦ったりもしてるのに、テストが大変つての……。

ふふ、何か可笑しいね」

まあ確かに。

生き死にの懸かった戦いをこなす傍らでテストに悲鳴を上げると言うのは、言葉にすれば少し可笑しくはあるが。

「まあ、言われれば確かにそうなのかも知れないが。

それでも、私達が生きている日常の中での『大変な事』と、彼方の世界での非日常での『大変な事』は重なる事無く両立するからな。

何も変では無いさ」

『日常』と『非日常』……。

それら二つは連続しながらも、今の所はお互いを侵食する事無く自分達の生活に深く関わっている。

学校や家などで過ごす『日常』も、【事件】解決を目指してシャドウと戦う『非日常』も。

そのどちらもが、決して蔑ろにされるべきでは無い。

「ふーん、そんなものかな？」

りせはそう言ってほぼ棒だけになったアイスを囙った。

「テストか……。先輩、マジ頼みます」

二本目の『ホームランバー』を開けながら、巽くんはこちらにそう言っって頭を下げてくる。

赤点回避の為の勉強会の事だろう。

だから、任せろ、と握った右手の親指を立てた。

「えっ、突然どうしたんだ、完二？」

勉強会の事を知らない花村達は不思議そうに首を傾げているので、軽く説明する。

「まあ、テストに備えて私が勉強を教える事になってな。

ほら、赤点になったら補習になるから」

すると、突然りせが羨ましそうな声を上げて巽くんを見た。

「えー良いなー！」

私も悠希先輩に勉強教えて欲しい！

何か、先輩頭良さそうだし、教え方とか上手そうだもん」

頭が良さそうとか教え方が上手そうとか言われても、自分ではあまり分からないものだが……。

それよりも、勉強会を羨ましがるといふ事は、りせも成績の面で何かしらの不安を抱えているのだろうか？

「りせも何か不安な科目とかがあるのか？」

何かあるなら、巽くんの勉強会序でに教えるのもアリかもしれない。

「えーっと、一番危なさそうなのはやっぱり英語かなー……。

数学とかも、あんま得意じゃ無いし……。」

若干視線を逸らしつつ、りせはそう言い淀む。

まあ、りせの成績の程は知らないが……。

「もし赤点とかの不安があるんだったら、何なら一緒に勉強するか？
巽くんも、ほぼ全教科浚わないといけない感じだからな。

モノの序でだ。

どうせなら補習を回避して、皆で楽しく夏休みを過ごした方が良い
だろうし」

どうせ全教科を教える必要があるのなら、一人教えるも二人教える
も、手間としてはそうは変わらない。

「え、良いの？ やったー！」

悠希先輩ありがとう！」

喜びを弾ける様な笑顔で表現し、りせはこちらの腕を掴んで抱き寄せてきた。

勉強を教える程度でこれ程喜んで貰えて重畳である。

「クマにはよく分かんないけど、ヨースケたちも大変ね」

計6本目の「ホームランバー」を嚙りながらそうクマは溢す。

学校に通ってないクマは、テスト等とは無縁であるから、その大変さには実感が沸かないのだろう。

「てか、クマくんどうすんの？」

流石にこのままってのはマズイし……」

こちらの世界にやって来たクマには、住む家も生きていく為の金銭も無いし、戸籍等も持たない。

彼方に帰れば別にどうと言う事も無い話なのかもしれないが、クマの意志を確認した所、今の所は彼方に帰るつもりは無いようだ。

ならば、クマが生活してゆく場所が必要になる。

自分が一人暮らしたら快く迎え入れていただろうし、或いは実家に居るのならば両親相手に交渉する事も考えた。

が、今の自分は堂島家に居候中の身である。

流石に、居候が更に居候を拾ってくるのは幾らなんでも無い。

他の皆も各々難しそうな顔をしている……。

……が、花村が仕方無いとばかりに溜め息を溢した。

「仕方無いし、俺が連れて帰るよ。」

ま、一応考えがあるしな」

花村の考えとやらが何かは分からないが、その申し出は有り難い。

花村に確りと礼を言って頭を下げた。



食器を片付けてからテレビを点けていると、今朝の事件についてのニュースが報道されていた。

前の二件との間にはそこそこの期間が空いていた上での事件だったからか、ニュースとしての話題性は抜群であった様だ。

ニュース番組以外のワイドショー等でも取り上げられる程のモノである。

……被害者として顔写真を映し出されたのは……、やはり諸岡先生だった。

名前も、「諸岡金四郎」と表示されている。

……。

分かってはいたのだが、やはり諸岡先生は亡くなったのだ。

……実感としてはまだ乏しいが、軽く目を瞑って諸岡先生に黙禱を捧げる。

「どうしたの？ ……お姉ちゃんの、しってるひと？」

一緒にテレビを見ていた菜々子が、心配そうにこちらを見上げてきた。

それに、「そうだよ」と頷く。

「……死んじゃったの？」

悲しそうな顔でそう訊ねてくる菜々子に、「そうだね……」と答える。

……諸岡先生は死んだ。

より正確には、何者かの手に抛って殺されたのだ。

犯人が誰なのかは、今の自分には分からない。

……例え自分達が犯人を見つけ出して捕まえた所で、諸岡先生が死んだ事実は変わらない。

それが……少しやりきれなかった。

「……お父さん、きようはかえれないね……」

寂しそうに、そして何処か不安気に菜々子は呟く。

……今頃叔父さんは事件の捜査に追われているのだろう。

昼間に会った白鐘くんも、捜査を手伝っているのだろうか……？

それは分からないが、警察が犯人を捕まえる為に努力しているのは間違いないだろう。

菜々子を安心させる様に励ました後、気を紛らわせる為に、折り紙を持ち出して舟を折った。

「ほら、菜々子。

「ここを持って、ちよつとの間目を瞑ってて」

「? わかった」

折った舟の帆先を菜々子に持たせ、目を瞑って貰う。

その間にそつと折って、再び目を開けて貰った。

「! えっ、何で?!」

帆先を持っていた筈なのに、いつの間にか舳先を持っていた事に菜々子は驚く。

所謂だまし舟と言う折り方だ。

折り紙としては簡単な部類だが、菜々子位の年頃の子供への受けはかなり良い。

実際、菜々子にも大層受けている様だ。

「すごい、すごい!」

もっかい! もっかいやって!!」

菜々子にせがまれるまま、何度もやってみせる。

その後種明かしをし、だまし舟の折り方やその他の折り紙の折り方を教えている内に、菜々子の不安そうな様子は何処かへと消え去っていた。



.....
.....
.....
.....

.....目を開けると、蒼色が目に飛び込んできた。

ここは.....ベルベツトルームか.....。

何時もの様に、イゴールさんが出迎えてくれる。

「ようこそ、ベルベツトルームへ.....。

久方振り、と申し上げるべきですか?」

以前ベルベツトルームを訪れたのはりせの『シャドウ』と戦ってい

た時だったから、あれから凡そ二週間は経っている。

……久方振り、と言つて良いのかは割りと微妙なラインであろう。それにしても、自分は寝ていた筈なので、今回は夢の中で呼ばれたのだろうか？

そう首を傾げていると、イゴールさんは左様と頷いた。

「今宵は夢の中にてお呼び立てしたのです。」

現実の貴女は眠りに就いていらつしやる……」

イゴールさんは顎の下に置いてある手を組み直して、僅かに首を傾げてこちらを見てきた。

「さて、如何でございましょう……。」

貴女が追う『謎』の解決に、徐々に近付いておられますかな……？」

……。

それは、……どうなのだろう。

今回の事件が「犯人」のモノであるか、或いは模倣犯のモノであるか……。

それすらも正確には分からない現段階では、まだ何とも言えない。が、何も手応えが無いのかと問われると、それは違う。

故に、『まだ分からない』と言うのが、今の所の自分の答えだ。

「……確かに、貴女の行く道にかかる霧は深いですから……」

こちらの答えにそうイゴールさんが頷くと、その横に座るマーガレットさんがその膝上にある本を軽く撫でながらこちらを見てきた。

「季節は移ろい……それでも尚お客様は、未だ未来を閉ざされる事無く旅路を歩んでいらつしやる……。」

道は、何れ開けて行く事でしょう」

マーガレットさんの言葉にイゴールさんは頷く。

「……貴女の節目となる旅路も、やがては佳境へと差し掛かります……。」

しかしそれ故に、予想だにせぬ事が、数多くその先に待ち構えておりましたよう。

貴女にとって良き事も、そうでは無い事も……。

面白くなって参りますな……フフ」

そうイゴールさんが言うなり、視界がボヤけ始める。

「では、再びお目にかかります時まで。

……ごきげんよう」

その言葉を最後に、意識が完全に途絶えた。

……

……

……

……



【2011／07／11】



【2011／07／11】

朝、通学路で出会った花村は、あまり眠れなかったのか、その目の下に薄くクマを作っていた。

実感があまり沸かなかったとは言え、担任として見知っていた諸岡先生が殺された事は、花村にとって酷くショックな事であった様だ。

……或いは、事件を防げなかったという自責の念からだろうか。

どちらにせよ、思い悩み過ぎて花村が倒れてしまつては元も子も無い。

こう言つては何だが……、気にし過ぎないと言うのも一つの手ではある。

取り敢えず、目元のクマには蒸しタオルでも当てておく様にと花村にアドバイスを送った。



教室内は、やはり事件の事……そして後任の担任になる教師についての推論等で持ちきりであった。

殆どの生徒が、好いては無かつたとは言えども身近な存在であった諸岡先生の死を、何処か非現実的なモノの様に感じている様だ。

まあ、無理も無い……か。

自分とて、ちゃんと実感しているのかと問われても、確と頷く事は出来ない。

始業を知らせるチャイムが鳴ると同時に、教室の前扉から入ってき

たのは……生物学教師の柏木先生であった。

……諸岡先生では、無い。

「おっはよお。」

今日から貴方たちの担任になった、柏木典子でえす」

後任の担任としては予想外の人物に、教室内に騒めきが走った。

「知ってると思うけど、諸岡先生が亡くなられたので……。」

私が代わりに、あなた達のお相手をする事になった訳え、うふふ……」

不自然極まり無い程に科を作りながらそう柏木先生は言う。

媚びた様な甘ったるい声や、ドン引きする位に胸元の開いた服など、ツツコミたい所は多々あるが……。

それ以上に、……やはり諸岡先生は亡くなったのだ、とまるでストンと胸に何かが落ちたかの様に実感してしまった。

「はあい、じゃあ、まず。」

諸岡センセに黙祷を捧げます。

「はあい、じゃあ目を閉じてえ……。」

柏木先生に言われるままに目を閉じて黙祷する。

……。

……嫌いな教師では無かったし、決して人間的に受け入れられない様な人では無かった。

殺される様な理由があったかどうかは知らないが、……殺されなくてはならない理由等は無かっただろう。

だから唯々……、諸岡先生への哀悼の思いが胸に渦巻く。

「はい、もう良いわよお」

柏木先生の声を合図に目を開けると……。

……何故か柏木先生は教卓の上に腰掛けていた。

ギョツとする生徒達に構う事無く、柏木先生は至つてマイペースに、こんな状況下ではあるが期末試験は何時もの様に執り行くと告げる。

こんな状況だからこそ、何時も通りに……との事らしい。

まあその理屈は分からないでは無いが、基本的にテストを喜ぶ学生

は居ない。

その段階で生徒の不満を表すかの様な囁き声が教室内のあちらこちらから噴出していたのだが、柏木先生はそれらの声には全く動じず、何故か本日転入してきたばかりのりせの事を言及し始める。

どうやら柏木先生は、りせへ何かしらの対抗意識を燃やしているらしい。

最早ドン引きのレベルである。

教室内の雰囲気も、(うわあ……)と言う生徒達の何とも言えない心の声が漏れ出ているかの様なものになった。

ホームルームが終わり柏木先生が教室を出ていくと、途端に教室内在が騒めく。

話題の大半は、"りせちー"についてであるが。

中にはりせの『シャドウ』が映っていた《マヨナカテレビ》についての話や、或いは故諸岡先生が隠れ"りせちー"ファンであった事について噂しているものもあった。

……………。

あの《マヨナカテレビ》の話題が出ると、特に男子生徒の食い付きが良く、その辺りからも《マヨナカテレビ》の噂が広がっているのを実感した。

そんなザワザワとした教室内も、先生が入ってくると徐々に静かな状態に戻る。

そして何時も通りに授業が始まった。



放課後、皆で今回の事件について話合う為に何時ものフードコートで待ち合わせをした。

直射日光を避ける為、簡易ながらも屋根がある場所のテーブルを陣取る。

各自で飲み物を購入し、一先ずは渴いた咽を潤した。

さて何から話そうかと思つた時、ふとクマの事が意識に上る。

「そう言えば花村。」

昨日、あの後クマはどうなつたんだ？」

花村に任せつきりにしてしまつたが、流石に気にかかる事柄だ。

そう訊ねると、何とかなつた、と花村は説明してくれた。

「あー、アイツか。」

ま、簡単に言や、ジュネスのマスコットとして住み込みで働く事になつた。

着ぐるみのマスコットってのは子供受けは良いんでジュネスでも採用を検討してたんだが、中々良いのが無くつてな。

ま、そこを見込んで親に交渉してみたら、割りとあつさりOKが出たよ」

どうやら今は、店内の催事場付近で風船配りをしているそうだ。

クマは人懐っこく愛嬌も抜群だし、既に膨らませてある風船を配る程度なら問題なくこなせる様である。

何にせよ、クマにこちらの世界での居場所があつて何よりだ。

「あー……発想を逆転させて、寧ろ着せたんスね」

上手い考えだとばかりに異くんは頷いた。

風船配りが終了し次第、クマはこちらに合流するそうなので、事件について本格的に話合うのはそれ以降でも構わないだろう。

それまでの時間潰しに、と皆で雑談を始める。

しかしまあ……雑談と言っても、こんな時期に話題に上るのは来週の期末試験かその先にある夏休みの事が主になるが……。

「あーあ……来週には期末かあ……。」

うわあ……久々の赤、来なきや良いけど」

早速サイダーを一口飲んでから、だれる様に里中さんはテーブルに突っ伏す。

「里中が赤取るの、割りとある事じゃん」

何を今更、とばかりな態度で軽くからかう花村の言葉に、里中さんは跳ね起きる様にして噛み付いた。

「花村に見せた事無いつしよ！」

大体そう言う花村はどーなんよ！」

「俺はまー……ここ一週間は試験勉強ボチボチやってたよ。

昨日は流石に無理だったけどさ」

里中さんの返した言葉に更にそう花村は返す。

ここ一週間程……という事は、前に一条達と四人で遊びに行った日位からか。

赤点回避、と言う目的の為に花村は鋭意努力している様だ。

同じ穴の貉かと思っていた花村が、まさか既に試験勉強を始めていたとは思っていなかった里中さんは、一瞬鼻白んだ様な顔になった。

そんな里中さんをフォローしようとしてか、天城さんが口を開く。

「でも、千枝って赤点以外の科目はいつも平均以上はあるよね」

フォローになつてるのかは微妙な言葉に、里中さんは軽く呻いて再び机に突っ伏した。

……まあ赤点の科目が在っても、総合点が赤点になるよりはまだ良いと思うが……。

「補習の心配しなきゃなんねーよりは、良いじゃないっすか」

巽くんが思った事を素直にそう言うと、里中さんは「そうだけどさー……」と力無く呻いた。

すると、そんな様子を見ていたりせが、ふと楽しそうな笑い声を溢す。

何か面白い事でもあったのか、と訊ねると、フルフルとりせは緩く首を振った。

「私ね……新しい学校でも、どうせ当分は友達とかは出来ないって思ってたから……。

だから、こういう感じの時間を皆と過ごせるのが、何か嬉しくて……」

友達が出来た事を喜びに、天城さんは「そうだね」と頷く。

「切欠が事件なんかじゃなきゃ、もつとよかったんだらうけど……」

それは確かにそうであろう。

友達になれた事は純粹に嬉しい良い事だとは思うのだが、その切

欠が死人も出ている事件だ、と言うのは少し複雑な気持ちになる。

「てか、事件って言えばさ……モロキン……ホントに殺されちゃったんだよね……」

ふと里中さんは呟いた。

それは昨日の段階で分かっていた事ではあったのだが……、実感を伴うには時間が必要だったのだ。

里中さんの言葉に、諸岡先生との面識が無いりせ以外は頷いた。そして暫しの沈黙の後、……ポツリポツリと花村が話し始める。

「……モロキンの奴……小西先輩とか山野アナとか……、被害者の人の事を、『死んで当然』とかって言ってた事何度もあつてさ。

正直、ムカつくとか以前に許せねーって、思ってたけど……。

それでもさ、やっぱ……こんな殺され方、有り得ねーっつーか……。……あんま上手くは言えねーけど、……可哀想、だよな……」

諸岡先生を嫌っている生徒は多かった。

……今時少々珍しい位に厳しい教師ではあったから、恨みを懐いている人も……中には居ただろう。

それでも、……やはりあの様に殺されて良い理由等は何処にも無かった筈だ。

可哀想、と表現した花村の言葉を否定する者はこの場には居ない。

「モロキンの為にもさ、あたしらに出来る事やるしか無いよね。」

犯人、絶対に見付け出さなきゃ！」

「もうその必要はありません」

そう言った里中さんの言葉に水を差すかのように、静かな声が背後から投げ掛けられた。

その声の聞こえた方向に顔を向けた巽くんが、驚いた様に固まってしまう。

「オ、オメエ……」

振り返ったそこに居たのは……。

「……白鐘くん？」

予想外の人物が急に現れて、思わずそう名前を呼んでしまった。

他の皆も、白鐘くんの意図を図りかねた様な顔をしている。

しかし、そんなこちらの戸惑いを一顧だにせず、白鐘くんはテーブルに近付いて来た。

「必要無いって……どう言う事だよ」

花村が椅子から立ち上がる様に、白鐘くんの発言の真意を尋ね様とする。

すると白鐘くんは、淡々とそれに答えた。

「言葉通りの意味ですよ。」

今回の件で、容疑者が固まったからです。

ここからは警察に任せるべきですから……」

……容疑者が、固まった？

……こちらの世界で起きた殺人事件だから、足がついたと言う事なのか……？

「容疑者って……誰なの？」

天城さんがそう訊ねると、白鐘くんは帽子の鍔を持って深く被り直しつつ答える。

「僕も名前までは教えて貰えませんでした。」

容疑者は「高校生」なのでね。

ああ、貴方達の学校とは違う学校の生徒の様でしたが……」

……高校生なら、少年法の適用範囲内だ。

その個人情報の扱いも、より嚴重にはなるだろう。が、問題はそんな所では無い。

「……「高校生」……？」

……その容疑者は、確かに高校生なのか？」

念を押す様に訊ねると、首肯を以て白鐘くんは答えてくれた。

「ええ、その様です。」

メディア等にはまだ伏せられています……。

今回の容疑者手配には、余程の確信があるみたいですね……。

今までの事件と、問題の少年との関連が、周囲の証言ではつきりとしているそうです。

逮捕は時間の問題かもしれません。

……無事解決となれば、またここも元通りの鄙びた田舎町に戻るでしょう」

……容疑者は高校生、か。
成る程、一つ確かな事が分かった。

今回の事件の容疑者は、【犯人】では無い。

天城さん以降の件の状況証拠と証言から、【犯人】はその犯行時に車を用いている事が既に分かっている。

しかし、高校生ではどう頑張っても車の運転は出来ない。

稲羽は、流石に無免許運転を許容する様な場所では無いからだ。

そんな事をしていたら、この何かと人の目がある稲羽では目立って仕方が無いだろう。

つまり、今回の事件の容疑者は、自分達が追っている【犯人】では無い。

模倣犯か何かは知らないが……少なくとも直接の繋がりは無いらう。

……だが、ふと「今までの事件」と白鐘くんが口にしていた事に気が付き、微かに首を傾げた。

「今までの事件って……」

警察は今回の件の犯人が、山野アナと小西先輩の件の犯人でもあるって考えてるって事に……？」

「ええ、遺体の発見状況に明らかな類似性が見られますから。」

容疑者の高校生は、己れの犯行を匂わす様な発言をしていたと、周囲に確認が取れているそうなので」

そうは言いながらも、白鐘くん自身の目が何かに苛立つ様に僅かに曇る。

『納得がいかない』。

白鐘くんの表情が表すのは、その感情だろうか……。

表情を読み取られ無い様にする為か、微かに視線を伏せて白鐘くんは続ける。

「しかし……」

諸岡さんの件は、……前の二件とは違い死因がハッキリとしている

んです」

死因、と呟いた花村の言葉に、白鐘くんは頷いた。

「後頭部への打撲。

それによる脳挫傷……。

それが諸岡さんの死因です。

司法解剖の方でも確認が取れています。

凶器として使われたモノについても、警察はほぼ同定している様です」

……死因すらも未だに不明だと言う山野アナと小西先輩とは、明らかに違う。

……そこに疑問を感じている人も、警察にはきつと居るだろう。

今日の前に居る白鐘くんも、恐らくはそうだ。

こちらの世界で起きた犯罪に対してなら警察は、単なる学生の集まりでしかない自分達よりも遥に有能である。

だがしかし……、事件を早期解決させようと焦っているのか将又何か別の理由があるのかは知らないが、警察は無関係である前二件の犯行に関しても、容疑者の高校生の仕業にしてしまうつもりである様だ。

………。

容疑者が無事に捕まる事は、悪い事等では無い。

名も知れぬその高校生が、少なくとも諸岡先生を殺したのは確かなのだろうから。

しかし、犯してもいない犯罪の罪までもを背負わされるのは、……それは間違っているだろう。

それに、もしその容疑者の高校生が逮捕され、そして一連の事件の犯人へと仕立て上げられたとしたら……。

……【犯人】は、完全に息を潜めてしまうかも知れない。

折角のスケープゴートが勝手に生まれたのだったら、……ある程度以上の判断能力を持つのなら、これ幸いとばかりに罪を全て擦り付けてしまうだろう。

だがそれでは【犯人】を止められたとは到底言えない。

何時【犯人】の気が変わって犯行を再び行うかも分からないからだ。
……今の所、殆ど証拠など無いのだ。

犯行を完全に止められてしまえば、自分達にそれ以上【犯人】を追う事は極めて不可能に近くなってしまふ……。

矛盾している様ではあるが、【犯人】からの動きが無くては、自分達はどのしようも無いのである。

「教えてくれて有り難いけどよ、何でまたお前はこんな所に来たんだ？」

警察の「特別捜査協力員」ってヤツなんだろ？

こんな所で油売ってて良いのかよ」

白鐘くんが伝えてくれた情報を整理しているのか、花村は少し複雑な表情を見せながらそう問いかけた。

そもその話、こちらから尋ねたとは言え、伏せられている筈の情報を洩らす事は、本来は宜しくは無い筈である。

それなのに白鐘くんは態々話してくれた。

……一体、何の意図があると言うのだろうか。

「……皆さんの「遊び」も、間もなく終わりになるかもしれない……。

それだけは、伝えておいた方が良いかと思つたので」

帽子の鏢の影で表情を隠す様にしながら、白鐘くんはそう答えた。

……こちらには「遊び」のつもりは、無い。

全てを擲つ覚悟でやってる、とは到底言えはしないが、それでも被害者の命が懸かっているのだ。

「遊び」で挑む様なモノでは無い。

だが、それを白鐘くんに説明は出来ないし、彼方の世界を知らない人間が自分達の行動を見たならば、良くて「探偵ごっこ」……悪ければただの奇行にしか見えないだろう。

「遊び」と表現した白鐘くんは、別に間違つてはいないのだ。

その程度の客観的な認識は持ち合わせている。

だから、それ以上は特には思わなかった。

それに、これで終わりだと言われた所で……。

元々、【犯人】がこれ以上犯行を重ねないと確信出来る何かがあれば

それで良いと自分は思っていたのだから、「逮捕」と言う形で幕が引かれるならそれはそれで良いのだ。

尤も、「犯人」と容疑者が別の存在である以上は、まだ終わった訳では全く無いのではあるが。

「終わるって言うなら、終わった方が良いからね。

……本当にこれで終わるなら、だけど。

でも、態々伝えに来てくれて有難う」

そう軽く頭を下げて礼を言うと、白鐘くんは面食らった様な顔をし、慌てた様に帽子の鍰を持つ。

こちらから礼を言われるのは想定外だったのだろう。

「……関わった事自体は否定しないのですね」

「否定したって無駄だからね。

それに白鐘くんは、それを知ったからといって、私達をどうこうするつもりは無いのだろうし」

そう返すと、事実その通りだったらしい白鐘くんは、それ以上追及して来ようとはしなかった。

これで話は終わりだとばかりに、白鐘くんは踵を返してその場を立ち去ろうとする。

だがしかし、この場には白鐘くんの言葉に納得出来なかった人が居た。

「……「遊び」？」

……遊びは、そっちの方じゃないの？」

静かな声に確かな怒りを滲ませながら、りせはそう白鐘くんに憤りを含んだ視線を向ける。

その言葉に、白鐘くんは足を止めて振り返って、ここに来て初めてりせに視線を向けた。

「探偵だか何だか知らないけど、あなたは、ただ謎を解いているだけじゃない。

あなたの方こそ、私達の何を知ってるの？」

……そっちの方が、全然「遊び」よ」

……りせは実際にクマの『シャドウ』との戦いを経験している。

だからこそ、〃遊び〃なんて言葉では到底片付けられない危険がある事は重々承知しているのだろう。

……それを、〃遊び〃と切って捨てられた事に憤りを感じるのも、まあ無理は無い話だ。

花村も、一応口は閉じているが、それでも思う所がある様な顔をしている。

……花村は、想い慕っていた小西先輩が殺された事を切欠として【犯人】を追い始めている。

……だからこそ、動機や思い入れはこの中の誰よりも強い。今は耐えているが、白鐘くんの言葉には強い憤りを感じた事だろう。

里中さんも天城さんも異くんも……皆、言葉にこそしていないが、それでも怒りの様な感情を白鐘くんに向けていた。

白鐘くんはそんな皆の様子に、僅かに俯く。

「……遊び……か。」

確かに、……そうかもしれないね」

僅かに自嘲するかの様にそう口にする白鐘くんは、花村はお返しとばかりに皮肉る様な口調で言葉を投げ掛けた。

「ふーんそっか、容疑者固まったのに、なくんでこんなトコぶらぶらしてんだと思つたら……。」

容疑者分かったから、警察をお払い箱にされたのか？

んで、寂しくなつて来てみたとか？」

それに対しては白鐘くんは首を横に振る。

「探偵は元々逮捕には関わりませんよ。」

それに、個々の事件に対する特別な感情と言うものも有りませんが、だが、「ただ……。」と、白鐘くんは明らかに寂しさと、そして辛さや

遣りきれなさをその目に映して、視線を床に落とした。

「……必要な時にしか興味を持たれないというのは……。」

……確かに、寂しい事ですね。

もう、慣れましたけど……。」

初めて白鐘くんが見せたそんな表情に、言葉をぶつけた当人である

花村も戸惑った様な顔を見せる。

「……花村、流石にそんな言い方は無い。

苛立ったからって、何を言っても良い訳では無いだろう」

白鐘くんだって、自分達と同じく人間だ。

心無い言葉に傷付く事もあるだろう。

幾ら「遊び」扱いされて苛立っていたからといって、言つて良い事と悪い事はある。

……白鐘くんも、少なくとも「遊び」で捜査はしてなかつただろう。

警察という、大人の社会の中に学生という子供が飛び込んでいるのだ。

実力を認められる迄にも多くの苦労があつただろうし、叔父さん達の態度を見ていると現場ではどちらかと言うと煙たがられている様であつたので、今でも苦労はしているのだろう。

嫌な事、辛い事、哀しい事。……そういった事も自分達では想像が付かない範囲で経験しているのかも知れない。

それらを経験した上で尚、白鐘くんはそこに居るのだ。

それは並大抵の覚悟や努力では成し得ない事である。

それを、「遊び」だと貶し返したり、笑つて揶揄したり、剩え「お払い箱」だなんて、冗談だとしても言つて良い事では無い筈だ。

花村も流石に言葉が過ぎたと感じたのか、素直に白鐘くんに謝る。

花村は元々、他人にかなり気を遣う質の人間だ。

触れるべきで無い所に触れ、更にそこを自分の言葉で傷付けたとなれば、相手が例え自分を苛立たせた相手であつたとしても、罪悪感を感じたのであろう。

「気にはいませんから、謝つて貰わなくても大丈夫です。

でも、有難うございます。

……謎が多い事件でしたが、意外とあつけない幕切れでしたね……。

じゃあ、僕はもう行きます」

そう言つて白鐘くんはこちらに軽く頭を下げて、フードコートから

去っていった。



白鐘くんが立ち去ってから程無くして、着ぐるみを脱いだ状態のクマが、キラキラした笑顔を振り撒きながらフードコートにやって来た。

「ヨースケ！ クマ、風船配りちゃんと出来た！」

「偉いでしょ！」

褒めて褒めてーっ！と、まるで小さな子供の様に目を輝かせるクマに、ハイハイと苦笑しながらも花村はクマをちゃんと褒める。

まるで、少し幼い弟を可愛がっている兄の様なクマと花村の様子に思わず微笑ましくなった。

「さて、とクマも来た事だし……。

じゃあ、事件について話合おうか。

幸い、白鐘くんのお陰で色々と情報も集まったしな」

そう口火を切って、現在の時点で得られている情報や、それについての考えを共有してゆく事にする。

「改めて確認するけど、私達がクマさんがこっちに来るまでは誰もテレビに入っていないんだよね？」

そう天城さんが念を押してクマに訊ねると、クマはハッキリと首を縦に振った。

「うん。」

何か鼻が鈍くなって来てるけど、流石にそれ位は間違えないし」

それは既に昨日聞いているが、あくまでも再確認の作業として必要なのである。

情報の伝達に齟齬が発生するのは極力抑えなくてはならないのだ。

「モロキンの件に関して言えば、犯行は全部こっちの世界で行われたって事になるよな」

花村の言葉に、里中さんが頷いて付け足す。

「死因も撲殺……だったって、白鐘くん言ってたもんね」

それらの情報を元にして、今回の件には彼方の世界は関与していない、と結論を下す事が出来るだろう。

「ああ。」

前の二人は死因すら未だ不明である点を考えても、諸岡先生の件に關しては彼方の世界は何の関係も無いのだろうか。

問題は、今回の件の犯人……高校生だという「容疑者」が、今まで私達が追ってきたいた【犯人】なのかという事になるが……」

「模倣犯……だろうな」

こちらの後を継いだ花村の言葉に、里中さんと天城さんも頷いた。異くんはあまり良く分かってない感じの顔をしていて、りせとクマは「？」マークを浮かべた様な顔をしている。

まだ話し合いに参加したばかりであり今まで情報の無い二人と、考えるのはこちらに丸投げしがちな異くん、解りやすい様に説明をした。

「今までの事件では、【犯人】は車……それもある程度は大きなモノを使って犯行に及んでいる可能性が極めて高いんだ。

しかし今回の件の「容疑者」は高校生……。

自動車の運転免許なんて、間違いなく持ってない。

稲羽じゃ誰が何歳でとかはほぼ筒抜けで、無免許で運転なんかしてたら一発で噂になるから、この「容疑者」が車を使っていたと言う可能性は極めて低い。

だから、この「容疑者」は【犯人】じゃないんだ。

つまり、一連の事件の模倣犯だって事になる」

そう説明すると、成る程、と納得した様な顔をして三人は頷いた。

「てこたあ、【犯人】がまた何か動くのを待って事になるんスか？」

そう訊ねてきた異くん、一つ頷く。

「そうだな。」

警察も指名手配をしているらしいし、余程の何かが起きない限りは無事に警察が「容疑者」を捕まえるだろう。

今回の模倣犯の件に関して私達が出来る事は無いだろうしな。

私達は、「犯人」が動いた時に、それを阻止する事を目標にすれば良い」

「ま、要は今まで通りってこった」

花村がそう締めて、その日はそこで解散する事となった。



夜、様々な虫が蠢く虫籠を携えて、商店街にある四六商店……否、夜にだけ現れる『スナツク紫路宮』へと足を運ぶ。

マダムの愛するペット、リユウグウノツカイのアキヒコくんに餌となる虫を定期的に届ける約束をしているからだ。

少し怪しげな雰囲気を漂わせる店のドアを開けると……。

カウンターにいるマダムと、水槽の中のアキヒコと、そして客であろう中年男性たちの他に、エプロンを付けてカウンター奥でせつせと働く高山が居た。

「高山……？」

思いがけない遭遇に、そう思わず声を掛けると。

高山は皿を洗う手を止めずに顔を上げた。

「ん？ 鳴上か……、驚いたな。」

「この店に何か用事でも？」

「ああ、アキヒコの餌を届けにな」

そしてそこで当初の目的を思い出して、虫籠をマダムに預けた。

翌日以降に取りに行けば、空にした虫籠を返して貰えるという寸法だ。

大した手間でも無いのだから、別に礼などは不要なのだが、マダムは礼として四六商店での商品を詰め合わせたモノや、時折マダムには不要だがこちらには有用なモノをくれたりもする。

マダムは早速虫籠から虫を出してアキヒコに与えていた。

壁一面に設置された巨大な水槽の中を元気良く泳ぐアキヒコは、最初に見た時よりも遙に大きくなっている。

この調子で大きくなっていったら、何時かこの水槽も小さくなってしまふのでは？と少し心配にもなるが……。

まあ何はともあれ、これで今夜の用事は終わりだ。

マダムと少し世間話をしてからその場を後にしようとする、どうやら高山もバイトを上げる時間だったらしく、ほぼ同時に店を出た。

高山とこちらの帰り道の方向は少し被っている、別れ道までは何と無く二人で話ながら歩く。

どうやら、夜は愛屋か紫路宮の二ヶ所でバイトをしているらしい。

「……鳴上の担任って、モロキンだったじゃん」

唐突に高山の口から諸岡先生の名前が出てきて少し驚いたが、何も言わずに頷いた。

「……モロキンってさ、やれ不純異性交友だの、風紀の乱れだのって口煩いし、実際に停学とか退学とかそういう事もやるヤツだったし……、一々言葉が豪速球な先生だったけどさ……。

春からこつち来たばっかの鳴上は知らなかったかもしんねーけど、モロキンって、進路指導も受け持ってたんだよな。

他にも進路指導担当してる先生は居るんだけど、モロキンはそんなでも一番熱心に進路指導してたんだ」

それは初耳であった。

まだ二年生の夏で、本格的な進路指導とはまだ無縁であった為、諸岡先生が進路指導をしていたのは知らなかったのだ。

諸岡先生は相談に来た生徒の話はとも真摯に聞き、情報を念入りに集めた上で、アドバイスをを行っていたのだと、高山は語る。

実際、その指導を受けて進路を決めた生徒も多かったらしい。

「俺さ、……自分で言うのも何だけど、バイト漬けだろ。

ま、学業成績の方はとやかく言われる程のモンじゃ無いから、先生たちにもあんまバイトに関しては何は言われねーんだけど……。

でもさ、この前モロキンに進路指導してやるから来いって言われてさ、……面倒くさって思いながらも受けたんだ、モロキンの進路指導」

そう語る高山は、ふと夜空を見上げて、何かを思い出す様な顔をした。

「俺、進学じゃなくって、就職を希望してんだ。」

この辺りの大学って、態々入る価値を俺は感じねーし、行ってみたら大学に行こうとしたら、下宿が必須になる……。

学費と下宿代に余計な金使う位ならさ、さっさと就職して稼いだ方が良かった……、そう思ってた」

思っていた、と高山は過去形でそう語る。

「でき、モロキンにそう話したんだ。」

……そしたらモロキンのヤツ、奨学金とか学費の負担減らせる制度とか、果ては格安の下宿先とかの資料とか持ってきてさ……。

『お前が選べる選択肢は多く存在するのに、端から諦めて、急いで結論を出すんじゃない』ってさ……。

そんな事アドバイスしてきたんだ。

進学するってのは、……正直あんま選択肢には無いんだけど……。それでもさ、……何つーのか……、……こんなに一生懸命に、俺の

進路を考えてくれてるんだなって、そう思ってた……。」

ポツポツと語る高山の表情は、俯いている為に周囲が暗い事も相俟って分からない。

だけどきつと……。

諸岡先生の死を、悼んでいるのだろうとは思った。

「モロキン……殺されたんだよな……。」

今の二年でモロキンの進路指導受けたの……。

……俺が最初で最後、なんだよな……。」

そう語った高山は、暫し黙った後に顔を上げてこちらを見た。

「何か、ゴメンな、鳴上。」

急にこんな話をしちまって……。

……。

……でもさ、……何でかは俺にも分かんねーけど……。

……鳴上には、知って欲しかったんだ、モロキンの事」

高山の言葉に、一つ頷く。

「そうか……。」

……私も、……諸岡先生の事を知れて、良かったよ。

有難う、高山」

丁度別れ道に差し掛かっていたので、「じゃあな」と手を振って、高山はそのまま去っていった。





【2011/07/12】

今日も異くんに勉強を教える事になっている。

……のだが、花村たつての頼みで、花村と異くんと三人での勉強会になった。

どうやら、数学で分からない部分があったらしい。

二年生のテスト範囲に入っているのは、「数列」と「微分・積分」だ。

花村曰く、どうにも「微分・積分」が苦手な様で、自力での勉強に限界が訪れたらしい。

そんな訳で、異くんに生物と化学を教える傍らで花村と数学の勉強をする事になったのである。

「それで、どの辺りを教えて欲しいんだ？」

異くんにテスト範囲を纏めたノートを渡しつつ、そう花村に訊ねた。

「微分・積分」と一口に言っても、範囲はそこそこある。

苦手苦手と花村は言うが、異くん程壊滅的に苦手な訳でも無いのだろう。多分。

分からない部分だけをピンポイントで教えた方が早い。

「あー、ここん所なだけど……」

花村が提示したのは、積分を応用で解く問題だった。

……………成る程。

花村のノートを見せて貰った感じだと、基礎はちゃんと分かっている様である。

だが、それを応用する……のは苦手なのだろう。

しかしこれならば、解き方やヒントをある程度提示しておけば、そこそこ得点出来る様になる感じである。

「その問題は、まずこの部分をkと置いて、それからkの中身を計算すれば良いんだ」

「あー、えーつと、こんな感じか?」

式をノートに書きこみながら訊ねてきた花村に頷いた。

花村は暫く考え込むかの様にシャーペンをクルクルと回していたが、ふと閃いた様で、一気にペンを走らせる。

解けなかった問題に答えを出せた達成感からか、やや満足気な顔をしている花村の解答は、見事に正解していた。

何度かそんな風にヒントを出しつつ花村の勉強を見ていると、横でまとめノートを必死に見ていた巽くんが、突如限界を迎えた機械か何かの様にオーバーヒートしてダウンしてしまう。

プスプスと立ち上る煙を思わず幻視してしまう程の有り様だ。

「巽くん、大丈夫か……?」

流石に心配になって訊ねてみると、「う……ウス」と生気の無い返事が返ってくる。

中々に重症だ。

一気に情報を詰め込もうとして容量オーバーになってしまったのだろうか。

……丁度花村の方の勉強も一区切り付いたのだし、今日はここまでで勉強会を切り上げる事にしよう。

若干虚ろな目になっている巽くと、それを少し心配そうに見ている花村に別れを告げて、一旦家へと帰った。



この時期、テストに追われているのは何も高校生だけでは無い。

夏休み前と言う時期は、大体全国的に中高生や大学生もテストに追

われているのである。

中島くんもまたテストに追われる学生の一人だ。

期末テストが近付いてきたからか、中島くんの表情は堅い。

中島くんの期末テストは明後日なのだそうだ。

今晚は中島くんの要望に答えてテスト範囲を一通り浚う事にした。

中島くんの質問も、出題されそうな範囲に絞られている。

休憩時間も、中島くんの表情は強張ったままだ。

その表情は暗く、視線は下へと向けられている。

「……期末テスト、もう直ぐです。

今回、範囲が広がって……。

……あ、まあ、今回もトップですけど。

……負けないし……絶対」

そう口にはしながらも、俯く中島くんは不安を隠し切れていなかった。

見ていて不安になる位に、キュツと膝の上で握られた手は微かに震えている。

そして突然、ふと顔を上げて中島くんはこちらに訊ねてきた。

「……ね、先生。

成績良くて、スポーツも出来て、話が面白くて、顔も良い……。

そんなヤツ、見た事ある？」

何故そんな事を唐突に訊ねてきたのか、その意図は分からないが。

中島くんに問われ、記憶を探る。

「あるよ。男子でも女子でもね」

例えば、こつちに来てからの友人だと一条がそれに当てはまるだろう。

一条は、成績はかなり良い方だと思うし、スポーツは勿論良く出来るし、一緒に話していて飽きないし、顔については人によって好みがあるから一概には何とも言えないが所謂イケメンと称しても問題ない顔だとも自分は思う。

稲羽に来る前の友人にも、それに該当しそうな人は大勢いる。

そう答えると、何故か中島くんの表情は翳りを見せた。

そして、中島くんの視線が膝の上の己の手に向かっている。

「……………そうなんだ。」

……………最近、夢を見るんです。

電車の先頭車両に乗ってる夢で……………。

……………行き先が真つ暗で分からないのに、電車のスピードはどんどん上がっていく。

ドアが開かないから、降りる事も出来ない。

なのに、後ろの車両から誰かが来るんだ……………。

車両を繋ぐドアが開く音と、段々近付いてくる足音がして……………。

近付いてくるのが誰なのか分からないけど、……………凄く恐くて……………。

……………その夢を見る度に、一両ずつ、近付いてくるんだ……………。」

……………それは……………。

心理学の所謂夢診断とされる分野にはあまり造詣が深くないので
確かな事は言えないが……………。

確か「電車」には全体的に目標とか人生の先行きと言う意味があるらしい。

行き先不明の電車、とは、自分の目標等も先行き不明な状況、とも考えられる。

そして、「何かに追いかけられ、逃げようとしても逃げられない」と言うのは、何かしらの固定観念に囚われていてそれに苦しめられている状態だと解釈される事もあるらしい。

……………。

「中島くん、きつと疲れているんだよ」

気休めの様なそんな言葉しか、かけてあげる事が出来なかった。

そんな言葉に、暗い顔で中島くんは頷く。

「うん……………」

眠る時位、休みたいんだ。

解放されたいのに……………」

解放されたい……………、か……………。

つまりそれは……………。

「……………一番じゃない僕は……………」

中島くんは思い詰めた様な顔をして、自分の手を見詰めている。一番では無いのなら……、か。

……「一番」と言う言葉で思い浮かぶのは、中島くんのお母さんだ。

「……悩み事があるのなら、私に話してみない？」

思わず、そう声を掛けた。

中島くんが思い悩んでいるのは確実だ。

そして、その悩みの内容や理由に心当たりが無い訳では無い。

中島くんがこれ以上思い詰めて自分を追い詰める前に、何とかしてあげたかった。

差し当たっては、悩みを話して貰う事から始めるべきだと、そう考えたのだが……。

「……悩み事なんて、無いよ」

中島くんはそつと首を横に振った。

……とてもそうは見えないと言うのに……。

……相談するつもりは無いらしい。

何故、と言う顔をしていたからだろうか、中島くんはポツリと付け加えた。

「……先生に嫌われたら、嫌だから」

「……どんな悩み事でも、私は中島くんを嫌ったりなんてしないよ」

そもそも、まだ何の相談もされて無いのに、嫌われると思われているのは流石に心外だ。

しかし中島くんはダメとばかりに小さく首を振った。

そして、ぎこちないながらも必死に笑おうとする。

だが結局は上手くいかず、中島くんは話題を変えた。

「あの、……テレビで見たんだけど、一昨日殺された人って、八高の教師だったって」

……その「容疑者」が高校生だとは、白鐘くんがまだメディアには伏せられていると言っていた通りに、何処のメディアでも報道はしていなかったが。

三件目の殺人事件に、何処のメディアも騒いでいる。

ついこの前までは、前二件の事件の話題がテレビに出る事はほぼ無かったと言うのに……。

そして、被害者である諸岡先生の事も、広くメディアが報じているのであった。

「……うん。」

私のクラスの、担任の先生だったんだ」

そう領くと、中島くんは少し「しまった」と言いた気な顔になる。が、この話題を続ける事にした様だ。

「……そう、なんだ。」

あの……どんな人、だったんですか……。

いや、あの……殺されたから気になったとかじゃ無いんですけど……」

メディアでも多少は報じられてはいるが、その何れもが諸岡先生の極めて一側面だけを報じていた。

まあ、テレビ報道なんて、大体はそんなものではあるのだけれど……。

「……悪い先生では、決して無かったよ。」

まあ、厳しい部分は確かにあったし、口煩いタイプの先生だったから、生徒には不評だったけど……。

……でも、生徒の事を顧みない先生じゃ無かったし、……仕事にはとても真面目な人だった」

昨晚の高山の姿が脳裏に浮かんだ。

ああやって、その死を悼んでくれる人も居るのだ。

諸岡先生が、決してただの嫌われものでは無かった事を、中島くんにも伝えたかった。

「……あの、先生は……悲しかったですか……？」

メディアのインタビュールなんかの無神経なモノではなく、ただただ……こちらの気持ちを問うてきた中島くんに、確と頷く。

「……哀しかったよ……。」

……私は知らなかったんだけどね、諸岡先生は進路指導の先生もやってたみたいなんだ。

……結局、私は諸岡先生から進路指導される事は無かったんだけど……。

……受けてみたかったな……」

もうそれは叶わないのだが……。

……。

「そうなんだ……」と呟いた中島くんは、暫くの間沈黙した。

そして、もうそろそろ家庭教師の時間が終わるといふ頃になって、漸く口を開く。

「テスト終わって夏休みになったら、……夏期講習で沖奈まで行かないといけなくなったから……。

「夏休み中は、家庭教師、頼めないですね……。

……夏休み明け、またお願いします」

中島くんは心細そうな顔をして、そう頭を下げてきた。

「分かった。じゃあ、夏休み明けに、また。」

……夏バテとか、体調には気を付けてね」

「……はい。」

……今日は、久し振りにゆっくり寝られる気がします。

……それじゃ」

その日はそこで中島くんの家を後にした。



【2011／07／13】

今日も今日とて巽くんとの勉強会なのだが、今日はりせとも一緒だ。

りせは、転校直後である（しかも直前まで勉強どころの状況ではなかった）為、かなり厳しいモノがあるらしい。

だがその辺りの事情を学校側は斟酌はしてくれなさそうなので、自

力で赤点を回避するしかないのである。

まあそういうった事情もあり、先日の約束もあつたので、巽屋に三人で集まつての勉強会だ。

今日教える科目は英語である。

「あーもう、全然分かんない」

暫くは頑張つて問題を解いていたものの、限界が訪れたのか、りせはそう音を上げながらノートと問題集を投げ出した。

どうやらりせは基礎的な文法辺りからあまり分かつていないらしい。

中学生レベルの部分もかなりボロボロである。

ある程度形になつている文の空欄を埋めていくタイプの穴埋め問題や、バラバラになつた語句を並び替える問題等が苦手である様だ。

単語の方も不安であるらしいが、それはもう覚えて貰うしか無い。

尚、巽くんはそれに輪をかけて英語が苦手な様だ。

ドングリの背比べと表現したくなる程の差でしか無いが。

二人には頻出する英単語を優先的に(自力で)詰め込んで貰いつつ、簡単な例題を出しまくる事で文法のパターンを覚えて貰う戦法で教えている。

りせは一度解説すると理解したかのように頷き実際その直後は完璧に解けるのだが、暫く別の問題を解いて貰つてから再び類似問題を解いて貰うと、さつき頷いていたのは何だったのかと首を傾げたくなるレベルで再び解けなくなつてるのである。

巽くんは解説するとキャパ一杯一杯な表情で頑張つて頷いてくれるのだが、多分あまり分かつてはいないのだろう。

……何も満点を取れと言われてる訳では無く、赤点さえ回避出来れば良いのである。

最低限度の事さえちゃんと答えられるのなら、そうそう赤点にはならない……筈だ。

当座の目標としては、その最低限度のラインまで二人を押し上げる事である。

「何処が分からなかつたんだ？」

りせが放り出した問題集を手にとって訊ねると、りせは「ここ」と指差す。

どうもある一文の訳し方で躓いてしまった様だ。

ノートを見てみると、一応頑張ろうとした跡は見てとれた。

しかしこの部分は所謂成句と呼ばれる、特定の単語の連なりによって特定の意味を成すものである。

そこが正確に訳せていない為、分からなくなってしまったのだらう。

「この“break a leg”って言うのは“good luck”と同じで、“幸運を祈る”とか“頑張れ”って意味になるんだ」
そう解説をすると、りせは納得がいかないとでも言いた気な様子で首を捻った。

「何で一々違う言い回しするんだろ……」。

全部“good luck”にしちやえば良いのに。

てか、何で“break a leg”でそんな意味になるの？

普通に訳したら“足を折れ”、じゃん」

確かに。

この手の言い回しとやらは、そう訳す理由が分からない時も多い。そういうものなのだとか割り切って覚えるのも一つの手ではある。

が、取り敢えずは解説してみよう。

「この言い回しの由来には様々な説があるんだ。

舞台演劇とかでは“good luck”って言葉は逆に悪い事を招くって迷信があるから逆に悪い意味の言葉にしたとか、カーテンコールの舞台挨拶の時に片足を折って礼をする事から何度もカーテンコール出来る位流行りますようにって意味だとか、或いはヘブライ語の響きから取ってきたとか、ね」

“break a leg”は言い回しの由来がよく分からない成句である。

一応世にある通説を幾つか挙げてみたが、りせはムムムツと眉間に僅かに皺を寄せた。

「んーよく分かんないな」

益々困惑してしまったのかもしれない。

その気持ちは分かるが。

僅かに苦笑しつつもりせに頷いた。

「まあ、確かに。」

ああ後、"break legs"にしちゃうと、"足を折れ"って意味にしかなくなっちゃうからそこは注意しないといけな
んだ」

「ええー、めんどくさい！」

単数形か複数形かの違いしか無いじゃん！」

時に間違えてしまいかねない部分を先に注意すると、りせはぶうた
れるかの様に単語に文句を言う。

非英語圏の人間からすれば実際そんなに大した違いは無いのだし、
口語なんて割りと適当な言い回しでも意味が通じたりする事も多い
のではあるが、どうもこういう部分に関しては厳しい様だ。

「諺とかみたくないものだから、特定の単語の組み合わせじゃないと意味
が違ってきちゃうからだろうな。」

この件に関しては素直に覚えるしか無いと思う」

そう言うと、「はい、頑張りまーす」と素直にりせは返事をする。

そしてふと黙ったままの巽くんに目をやると、巽くんは問題を前に
フリーズしていた。

手元のノートを覗き込むと、僅かに震える鉛筆によって、意味を成
さないグチャグチャの線がノートの片隅に踊っている。

今巽くんが解いているのは、基礎的な単語の和訳と発音の部分だ。

あれか、頑張り過ぎて熱暴走して処理落ちしたのか。

……割りと前途は多難だな、と僅かに心中で溜め息を溢す。

勉強会はまだまだ終わりそうになかった。



日が暮れ始めた辺りで勉強会はお開きになり、家へと帰る。そして夕飯を用意してから病院清掃のバイトへと向かい、何時もの仕事をこなした。

………
………何時ものソファーに神内さんの姿は見えない。

単純に夜勤では無いだけの事なのかもしれないし、忙しくて手が離せないだけなのかも知れないが……。

………気にはなるが、自分にか出来る事でも無いのではないかな……。

そう悩みつつもバイトを上がり、制服から着替えて帰ろうとしていると、休憩室の近くで看護師さん二人が立ち話している所に出会った。

邪魔するのも悪いので、そのまま立ち去ろうとしたのだが。

ふと耳に飛び込んできた言葉に思わず足を止めた。

「この前救急に運ばれてきた家族、覚えてる？」

救急……。

その言葉で頭に浮かぶのは神内さんだった。

………別に救急に人が運ばれてくるのは何時もの事だろうし、その家族を神内さんが治療したとも限らない。

関係無い話なのかもしれない。

だけど……。

微かに引つ掛かる部分、その場から足を動かさなかった。

「家族……、ああ、交通事故で一家四人が運ばれてきた時のね。」

それがどうかしたの？」

交通事故……。

そう言えば最近、ローカルのニュース番組で稲羽近郊で交通事故が起きたと報道していたな、と微かに思い出した。

悲しい事に、交通事故自体は珍しいものでも何でも無い。

余程の重大事故であるか当事者か関係者でも無い限りは、交通事故のニュースなんてその大半は直ぐに脳裏から消えていってしまう。

特に、つい先日諸岡先生の件があったばかりなのだ。

その事故の印象が自分の中では極めて薄くなっていたので、思い出すのに時間がかかった割りには大した事は思い出せなかった。

看護師さん達の話は、まだまだ続く。

「脳外の方からの話じゃ、母親と長男の意識が回復したそうよ」

そう聞くと、聞き手に回っていた看護師はほっとした様に僅かに安堵の表情を見せた。

「あら、それは良かったわ。

酷い事故だったものね……。

やっぱり、処置に当たっていた神内先生のお陰かしら」

「神内先生」と言う言葉に、人知れず僅かに肩が跳ねる。

……やはり、神内さんの様子がおかしかった事に関係があるのでは無いか……？

立ち聞きなど良い趣味とは言えないが、それでもその場から動けなかった。

「きつとそうね。

あんなにバイタルが悪化していた患者をあそこまで持ち直させられたのは、神内先生のお陰だと思うわ。

……でも、次男の子の容態は思わしく無いみたい……」

その子の話題になった途端、二人とも表情に翳りを見せる。

「……頭を強く打って、脳挫傷になっていたものね……」

「脳外の先生達も手を尽くしているそうなのだけど……、脳内血腫の範囲が広いらしくて……」

「まだ5歳の子なのに……。

ご家族も辛いでしょうね……」

……神内さんの様子がおかしかったのは、その子の事があったからなのだろうか……。

……関係あるのかも知れないし、無いのかも知れない。

それは自分には分かり様の無い事ではある。

だが……。

その後少しして看護師さんたちも立ち去っていったので、自分もその場を後にした。



【2011/07/14】

今日の勉強会は、巽屋にて自分と巽くんと二人である。連日の勉強会の成果なのか、巽くんの学力は若干の向上を見せ始めていた。

期末試験までは後5日。

この調子でいけば、脱赤点も夢では無い筈だ。

まだ油断は出来ないが、ここまでの道程を思うと中々に感慨深い。無限に続く砂漠の片隅に、若芽が芽吹きつつあるのを見付けたかのような気分である。

勿論、全ては巽くんの努力の成果ではあるが。

今日の科目は数学だ。

殆どの科目で焼け野原の様な状態ではあるが、その中で比較をするならば理数系……数学の成績が一番暗澹たる有り様であった。(比較が一番マシなのは現代文である)

故に、数学には特に力を入れて教えている。

今日教えるのは「組合せ」及び「確率」の範囲である。

所謂数学Aとされる範囲だ。

「組合せ」をちゃんと理解していなくては、「確率」の範囲を正しく理解する事は出来ない。

なので只管に「組合せ」の基礎問題を解きつつ、「確率」の基礎問題も解いていた。

今は一時間程勉強したので、今は暫し休憩を取っている。人間の集中力とはそんなに長い間持続するものではない。

脇目もふらずにただ闇雲に詰め込むよりは、時折休憩を挟む方が効率としては良いのである。

まあ、休憩が主体となつてしまつては意味が無いのだが。

異夫人が淹れてくれた緑茶を飲みつつ、差し入れてくれているおはぎを頂く。

店売りのモノではなく、恐らくは夫人の手作りなのだろう。

優しい甘さが、程好い温度の緑茶によく合った。

異夫人は、勉強熱心ではなかつた異くんが連日の様に勉強会を開いてまで勉強している事に感銘を受けたらしく、最近では異屋にお邪魔する度に歓待してくれている。

是非ともここは異くんの希望通りに脱赤点を達成して、夫人を安心させてあげたいものだ。

「そっすよ、モロキンの件の犯人……どうなつたんスカね」

おはぎを食べつつ、異くんがポツリと呟く。

事件が起きて今日で四日目。

メディアが取り上げている情報が殆ど更新されていない所を見るに、まだ逮捕はされていないのだろう。

「さあ……。まだ捕まつてはいなさそうだけど」

叔父さんが情報を漏らす訳など無いのだし、実際この件に関してはメディアで報道されている以上の事は自分は知らない。

……が、しかし。

既に指名手配されているにしては、逮捕が遅い気はする。

何かトラブルでもあつたのだろうか？と思いつつも、少なくとも現段階で自分達に出来る事は無いので、この件に関しては静観するしか無いだろう。

「そっすよね。」

……オレ、モロキンの事は大っ嫌いだったんスよ。

やれ不良だなんだつて、ワザワザ中学ン時の事まで持ち出して絡んできやがつてたんで」

そう言いながら、でも、と異くんは続けた。

「それでも、殺されて良いワケなんざねーし、殺したヤツがのうのうとのさばつてんのも許せねーっす」

異くんの言葉に、そうだな、と頷いた。

犯人であるらしい高校生にどの様な罰が科されるのかは分からないし、それは司法の領域の話だ。

自分たちがどうこう出来るものでも無い。

だけれども。やはり思うところはあるのだ。

「模倣犯」が出る前に、「犯人」を捕まえられていたら、と。

もしそう出来ていたとしても、それで諸岡先生が殺されずに済んでいたのかは分からないが。

……そんな事を考えてしまう。

その後は夕暮れ時まで勉強会に励んでから異屋を後にした。



本日の釣果を神社にいる不思議な女性に渡した帰りがけに、バイトを終えたのであろう高山が愛屋から出てきた所に出会した。

帰り道が途中までは同じなので、何と無くお互いに他愛ない話をする。

……高山が諸岡先生の事に関して何かしら自分の中で決着を着けたのかどうかは分からないが、少なくともあの日みたいに苦しさを何処かで堪えている様な感じでは無い。

「流石に成績が下がると、バイト止めるとかって周りから言われかねないからなあ。

今の成績を維持出来る様には多少は勉強してるさ。

あーあ、とつとと夏休みに入ってくるとありがたいんだけどな」
面倒だな、とでも言いた気な顔で高山は溜め息を吐く。

試験が迫ってきていても高山はバイトを減らしたりはしていないらしい。

勿論、幼い兄弟の面倒を見なくてはならないのは変わらない。

そこにきて勉強にもある程度は力を入れているのだと言う。

バイトに家事に勉強に、と最早休まる暇が無さそうである。

「夏休みもバイトを入れるのか？」

「そりゃー1日全部使ってバイト出来る絶好の機会だからな。

可能な限り入れて、出来る限り稼ぐつもりだ」

まあそうなのだろうなとは思っていたが……。

「そうか。」

バイト三昧なのは構わないが、身体を壊さない様には気を付けた方が良いぞ」

「へえ意外だな、心配してくれてるのか？」

少しばかり意地の悪そうな顔で訊いてくる高山に、勿論と頷いた。

「友人の健康を気にするのは、何もおかしな事では無いだろう？」

高山は日々、バイトに家事にと身体を酷使している様だからな。

過労か何かで倒れはしないかと、心配している」

何より、万が一にも高山が倒れたりしたら、高山の家族が心配するだろう。

女手一つで一家を養っているという母親も、幼い悟くんと志保ちゃんも。

彼らに心労をかける事は、高山にとっては本意ではない筈だ。

なので、そんな事態にならないで欲しいとは心底思っている。

「そ、そっか……」

何故か高山はどぎまぎとした様に視線を彷徨わせた。

……？

何か自分はおかしな事でも言ったのだろうか……？

自分の発言を思い返してみても、特に変な部分は思い当たらない。

はあ、と溜め息を吐いて片手で顔を覆った高山は、何かを振り払うかの様に僅かに首を横に振る。

「あー、うん。心配してくれて、ありがとな。」

何つーのか、ストレートに心配されてちよつと面食らったわ。

ま、心配されなくても身体は資本だからな、精々大事に使うさ」

丁度分かれ道に差し掛かった所で、高山とはお互い手を振って別れた。



【2011/07/15】

「この所はずっと勉強会だったので、今日は少し気分転換をしたくなつた。」

尚、巽くんはと言うと、社会科目の暗記に取り掛かって貰っている。社会科は純然たる暗記科目なので、勉強会を開かずともこちらで自作してあるまとめノートで自習して貰った方が早い。

そんなこんなで気分転換代わりにやってきたのは学童保育のバイトだ。

子供たちのパワフルさに少々振り回されつつも、その有り余る元気を分けて貰っているかの様にこちらも楽しくなってくる。

わいわいと駆け回る子供たちの中には、俊くんの姿もあった。

以前学童保育の先生が言っていた様に、遊びの時間は俊くんも元気を一杯なのである。

が、しかし。

学童保育の終わり間際……各々の保護者達が自分の子供を迎えに来る頃合いになると、俊くんは俯いてベンチに腰掛けてしまう。

宇白さんが迎えに来るのが嫌なのだろうか……？

どうしたものかと俊くんを見守っていると、「あの……」と背後から声を掛けられた。

振り返ったそこに立っていたのは、宇白夫人である。

何か用でもあるのだろうか？

「どうか致しましたか？」

そう訊ねてみると、宇白夫人は少し躊躇いがちに口を開く。

「俊くんは、その……皆さんと仲良く出来ているのでしょうか……？」

そう問われ、今まで見てきた俊くんの様子を思い出す。

少なくとも、学童保育に来ている子供たちとは良好な関係性ではある様だ。

そこそこ以上に仲の良い友達もいる様である。
少なくとも仲間外れにされていたり等はしてなさそうだ。

「ええ。学童保育に来ている他のお子さん達と一緒に、元気一杯に仲良く遊んでいらっしやいますよ」

そう答えると、宇白夫人は「良かった……」と安堵した様に息を吐く。

ふと気になる事があり、少し不躰な質問かとは思いつつも訊ねてみる事にした。

「あの、俊くんとはお家で学童保育の話をしたりはしないんですか？」
そう訊ねると、宇白夫人の表情は微かに曇る。

「……ええ。」

俊くんは、学童保育の事に限らず、普段の学校生活とかも殆ど話してくれないんです。

……だから、お友達とかがちゃんといえるのか、仲間外れにされていないかが心配で……。

学童保育で、少しでも他のお子さん達と触れ合う機会を増やしてあげたかったです」

ちゃんとお友達がいるようで良かった……、と宇白夫人は本当に嬉しそうに、柔らかな微笑みを浮かべた。

………

宇白夫人と俊くんの仲は良好とは言えなさそうだが、宇白夫人は俊くんの事をちゃんと思いやっている様ではある。

それでは何故、あそこまで俊くんは宇白夫人に対して壁を作っているのだろうか。

「俊くんは……事故があつてから長い事塞ぎこんでいて……。」

私たちが引き取った時に、お引越しもしなくてはならなくなつたから、それまでのお友達とも疎遠になつてしまつて……。

………
「………」

「そうですね……」

「先生たちが俊くんをちゃんと見て下さっている様で安心出来ますしね。」

何時も有難うございます」

ペコリと頭を下げる宇白夫人に、こちらこそ、と頭を下げる。

その後、宇白夫人は黙りこくる俊くと一緒に、学童保育を後にしたのだった。



学童保育のバイト帰りに、毎度の事ながらジュネスに立ち寄って夕飯の買い出しを行う。

さて、今日は何を作ろうか……と思いつながら食材を見ていると。

……青果コーナーにて茄子を片手に何やら悩んでいる倉橋さんを見付けてしまった。

こちらが倉橋さんを認識するのとはほぼ同時に、倉橋さんと目が合ってしまう。

そして案の定倉橋さんはこちらにやって来た。

「あら悠希ちゃん、今日も買い出しかしら」

そうだと頷くと、倉橋さんはふと表情を僅かに翳らせる。

「あのね、料理教室の件、また頼めるかしら？」

「えっと、構いませんけど。」

あの、何かあったんですか？」

そう訊ねると、倉橋さんはフウと溜め息を吐いて話し始めた。

「ええ。義母がね、また料理を食べてくれなくて……。」

トウモロコシとパプリカのサラダだったのだけれど……。」

トウモロコシもパプリカも、新鮮なものをそのまま出したのに

……。」

ドレッシングも、サラダ油をかけたのよ。

サラダって付く位なのだから、サラダ用の油だもの。」

……でも、それを出したら、『要らない』って言われてしまつて……」
……。

トウモロコシ、生で出したのか……。

しかも、サラダ油をそのままぶっかけたのか……。

倉橋さんには悪いが、それを食べたいとは自分も思えない。

確かにドレッシングにはサラダ油が入っているが、だからと言って
サラダ油そのものがドレッシングになる訳ではない。

更に、トウモロコシを加熱もせずに生でとか、辛過ぎる……。

「成程……。事情は分かりました。

それでは明日辺りにでもどうでしょうか」

幸い明日の夜ならば予定は無い。

そう提案すると、倉橋さんは嬉しそうに頷く。

「それじゃあ明日、よろしくね」

買い物籠に手にしていた茄子を放り込んで、倉橋さんはその場を立ち去って行つた……。



【2011／07／16】

放課後は巽くんとりせとの二人での勉強会なのだが、場所は巽屋ではなく丸久豆腐店の奥を使わせて貰っている。

今日勉強するのは化学だ。

巽くんは元より、りせも化学は苦手であるらしい。

なお巽くんとは違い、りせは暗記するのは得意であるそうだ。

ドラマ等に出演する時の台本も、特に苦もなく暗記出来たのだとか。

それならば暗記する部分の多い社会科や生物などはノートを渡しておけば問題なく自習でカバー出来るのだろう。

化学は酸・塩基平衡や反応速度計算など、計算を必要とする部分も多くある。

まあ、暗記した方が速い部分もあるにはあるが。

暗記した方が速い部分はこちらで作成しておいた一問一答形式のまとめノートと問題集で学習して貰う事にして、主に計算が必要とされている部分を一緒に見ている。

「フェノールフタレインの変色域の計算とか、意味分かんない！」

うーつと唸っていたりせが問題集を投げ出す様にして突っ伏した。

どうやら10gの計算で詰まってしまった様だ。

りせを励ましつつ、投げ出したその問題を一緒に解き始める。

「まあまあ、落ち着いて。」

難しいのは分かるけど、諦めるにはまだ早いぞ。

取り敢えず一緒に計算してみようか。

先ずは問題文にある通りに、フェノールフタレインの酸の電離定数

(K_a)は 3.2×10^{-10} 乗 (mol/L)だ。

で、変色域のpHは $\text{p}K_a + 1 \cong \text{pH} \cong \text{p}K_a - 1$ になる。

$\text{p}K_a$ を計算すると、 $-\log 3.2 \times 10^{-10}$ の -10 乗になって、

それは $-\log 2$ の5乗 $\times 10$ の -11 乗になるのは分かるかな？」

必死に計算したりせは、何とか領いた。

「で、問題文に $-\log 2 = 0.3$ とするとあるだろ？」

だからそれを入れて計算したら、 $0.3 \times 5 + 11$ となるからp

K_a は 9.5 って出る。

つまりフェノールフタレインの変色域は、 $10.5 \cong \text{pH} \cong 8.5$

になるんだ」

まあそれはあくまでも計算上の数値であって、実際の変色域は大体

$8.2 \sim 10.0$ らしいが。

「分かった様な分からなかった様な……」

あーあ、フェノールフタレインの変色域なんて計算して何の意味があるんだろ」

はあ……と溜め息を吐きながらそうボヤくりせに、まあ確かに、と領いた。

「専門分野にでも進まなければ、こういう計算をする事は無いだろうけど。」

それでも、知識は力だからな。

知らないよりは、知っている方が良い。

それに知識があれば、もつと詳しく知りたいと思う原動力にも繋がる。

そうだな……例えばだが、何故フェノールフタレインの色が変化するかりせには分かるか？」

分からない、と首を横に振ったりせにその原理を説明していく。

まあそんなに難しい話ではない。

人間が色を感じるのは、それ自体が色を出しているか、或いはその物体が連続した波長である白色光を反射しているからだ。

物体が白色光を全て吸収するのならばそれは黒に、逆に全て反射するのならば白色に見える。

で、一部だけが吸収された場合は、反射された残りの光で感じる色……補色になるのである。

赤色が吸収されるなら、その物体は赤の補色である緑色に見えるという訳だ。

で、物体が光を吸収する（＝補色を見せる）には、吸収した光エネルギーで電子を基底状態から上の軌道へと励起させる必要があるのだが、飽和炭化水素などではその励起させるに必要なエネルギーを、エネルギーとしては少ない可視光の範囲で補うには難しい。

しかしフェノールフタレインの様に二重結合を連続して多く持つ様な化合物だとπ電子系に多くの軌道ができる為に、励起した状態の一番下と基底状態の一番上のエネルギー準位の差はかなり小さくなっている。

その為、可視光の小さなエネルギーでも励起状態に出来るので、可視光が吸収されて、人間にはその補色である色が見えるのだ。

フェノールフタレインはベンゼン環を3持っているんだが、これは電離した状態……つまりアルカリ性の状態だと、3つのベンゼン環が同一平面上に並ぶ。

同一平面上に並んでいると、 π 電子系が連続する為に可視光を吸収してフェノールフタレインは赤色に見える。

しかし酸性の状態だとベンゼン環が同一平面上に無い為可視光を吸収する事が出来ない。

その為に酸性になると無色になった様に見えるという寸法である。

「問題文で問われている様な事で無くても、そうなる原理を学ぶのは楽しいだろ？」

『何故そうなるのか』、って興味を持たせる為にこういう事を勉強するんじゃないかな」

興味を持たなければ苦痛なのは否定仕切れない。

しかし、興味を持って調べようと思えば、中学高校の範囲の大概の答えはちゃんと見付かる。

学びたい様に学べる環境と言うのは有り難いものだ。

「はあ……私も先輩みたいに勉強出来たら、こんなのも楽しいって思えるのかなあ……」

憂鬱そうな顔をするりせに、「さてね」と返した。

もしりせが勉強が得意であったとしても、それを楽しんで学ぶのかどうかは流石に自分には分かり様も無い事だ。

人には得意不得意があるし、本人や周りに不利益にならない程度なら別にたかが勉強が苦手であつてもそれはそれで構わないだろうとは思う。

今回こうやって勉強会に付き合ってるのは、成績を向上させたいと異くんやりせ自身が望んだからであるのだし。

確かに異くんとりせは勉強が苦手なのかもしれないが、異くんには誰にも負けない程の手芸の腕や腕つぶしの強さもある、りせには他人を観察し分析する力があるしアイドルとして培ってきた演技力や人の耳目を集める手段にも長けている。

偶々学校で評価されない分野を得意としていただけに過ぎないだろう。

まあ、今は補習を回避する為にも、勉強するしか無いのではあるが。別の計算問題に詰まって頭を抱えている異くんを救おうとするも、

そのほほ白いノートにこちらが頭を抱えるのであった。



勉強会を無事に終わらせて、昨日の約束通りに倉橋さんの家を訪れた。

今日教えるのはコーンクリームコロッケだ。

ついでに冷しやぶサラダの作り方も教えるつもりである。

なお、今回教えるのは揚げなくてもいいクリームコロッケの作り方だ。

揚げ物を倉橋さんに教えると、どうにも揚げ過ぎて炭の様な物体にするか或いは火傷や火事を起こしそうな未来しか見えないからである。

倉橋さんには、耐熱容器にパン粉とサラダ油を入れて混ぜ合わせ、電子レンジで1分事に混ぜ合わせつつ600Wで数分加熱して貰う。

その間にこちらはコーンクリームを作るべく、フライパンで玉ねぎなどの材料を炒め始めた。

牛乳にトウモロコシを加えて塩胡椒を振って加熱したクリームに更に溶き卵を加えて余熱で混ぜ合わせていく。

後はコーンクリームの粗熱を取って固まるまで冷やすだけとなった所で、冷しやぶサラダとドレッシングの準備を始める。

と言っても、野菜を切つて豚肉を湯通ししてドレッシングを作るだけなので極めて簡単な行程なのだが。

が、そこで油断してはならない。

そんな簡単な行程で摩訶不思議なアレンジを施すからこそ飯マズが飯マズたる所以であるのだから。

やたら砂糖を追加しようとしていたり醤油をぶち撒ける勢いで入れようとしたりする倉橋さんにレフェリーストップをかけつつ、どうにかこうにかしてやつとの事で冷しやぶサラダも完成した。

サラダが完成すると、丁度コーンクリームも冷えて固まりつつあったので、倉橋さんに準備して貰っていたパン粉をクリームの塊にまぶしていく。

そして、グリル皿に載せてオーブンで加熱すれば出来上がりである。

一部こちらが手伝ったが、概ね倉橋さんが作った品々だ。

味見をした所、特に問題は無さそうである。

「うん、これならきつとお義母さんも食べてくれるわね！」

悠希ちゃん、本当にありがとう」

会心の出来であった為か、一口味見した倉橋さんは本当に嬉しそうに微笑む。

……料理に妙なアレンジをしなければ、料理の基本は一応出来るのだから、普通に美味しいものが作れるのだらうとは思うのだが……。取り敢えず料理も作り終えた事だし、その日はそこで倉橋さんの家を後にした。



【2011/07/17】

今日は一条と長瀬と、フードコートで勉強会だ。

試験目前なので二人とも気合いが入ってる。

カンカンと照り付ける日差しに照らされている屋上は熱い。

購入した飲み物の氷もジワジワと溶けだしてしまっていた。

「はー……、一通りやってはいるんだけど、やっぱり数学がちよつと不安だな。」

鳴上はどうよ」

夏の暑さと勉強への疲れにややダレた声で一条が訊ねてくる。

数学、か……。

「特に問題は無さそうだ」

少なくとも、試験範囲で分からなかったり解けない部分は無い。応用問題も、余程捻りまくった問題でもなければあまり迷う事なく解答出来るであろう。

「うわ、良いなソレ。」

俺も一回は言ってみてーわ。

流石中間トップ、言う事が違うなー。

てか、教えて下さい、マジで」

そんなに数学が苦手なのだろうか……。

正直、成績の心配をするべきなのは一条ではなく……。

「まあ良いじゃねーか、暗記はいつも出来が良いんだから多少数学が出来てなくても。」

つーかそれより、俺の方に教えてくれよ。

英語に物理、化学に数学だろ……。」

指を折って科目を数える長瀬に、一条と二人で溜め息を溢した。

試験は明後日なのだが……。

そんなに不安な科目があつて大丈夫なのか……？

……まあ、何だかんだと言つて長瀬は補習に引つ掛かった事は無い（ギリギリセーフらしいが）そうなので、本当に手が付けられない程に出来ない訳では無いのだろうか。

そんなこんなでまったりと勉強会をしていると、背後から誰かが近付いてきてる気配を感じたので思わず振り返る。

すると、そこには。

「あつれ、鳴上さん。」

今勉強してる感じ？」

里中さんと天城さんがいた。

二人とも、手には参考書とノートを抱えている。

どうやら勉強しにきた様で、恐らくは日差しを避ける為に屋根のあるテーブルの空きを探しているのだろう。

「里中さんに天城さんも、奇遇だな。」

もしかして二人とも勉強会をしに？」

「うん、まあね。」

家でやってたら、ついついだらけちやうかもだから。

あ、もし良かったら一緒に勉強しても良い？

屋根あるトコ空いてなくってさ」

そう里中さんが頼んでくる。

……テーブルは二人が新たに座った所で問題無い位には広いし、自分に異存はないのだが、一条と長瀬は良いのだろうか。

「私は構わないが、一条と長瀬は大丈夫か？」

そう二人に訊ねてみると。

「俺も構わんぞ」

「さ、さささささ里中さんと!？」

ほ、ホントに!？」

い、良いよ、勿論!!」

長瀬は普通に頷いたのだが、何故か一条は里中さんを見て盛大にキョドリながらまるで赤べこの様に首を何度も縦に振る。

「あ、えっと、何かゴメンね、千枝が急に……」

天城さんはペコリと頭を下げて言うが、一条は今度は勢いよく首を横に振る。

……首、痛めてはいないだろうか……。

「そんなの全然気にしなくて良いよ!ホント!」

……この態度。

もしかしなくとも、一条は里中さんの事が……?」

……だとしたら、分かり易過ぎるが。

しかし何故か里中さんは一条の態度を見て僅かに頬を膨らませて呟いた。

「もう……みんな雪子にはデレデレしちゃって……」

いや待て里中さん。

一条の態度の何処を見れば、天城さんにデレデレしているという結論に至るんだ……?」

何処をどう見ても、一条は天城さんには目もくれず里中さんを見ているのだが……。

あ、ああ……、これは、あれか。

あまりに長い事、男子が天城さんの事ばかり見ていたから、そういう視線が自分に向けられているという可能性を端っから排除してしまつてるとかそんなオチか……？

……だとすれば、一条があまりにも哀れである。

友人の恋路は可能な限りは応援してあげたいものではあるが、これは色々と前途多難なのかもしれない。

里中さんが妙に拗れているのがその要因ではあるが。

思わぬ形で友人の恋心を知り、かつその相手がある種の恋愛朴念人である事も知つてしまい、思わず心中で溜め息を溢してしまった。

その後、五人で勉強会を行ったのだが、里中さんに話を振られる度に舞い上がって挙動不審になる一条の態度を何故か里中さんが盛大に曲解する、という哀れな想いの一方通行は、とても涙なしには語れないものなのであった……。

一条、強く生きろよ……。



【2011/07/18】

今日はテスト直前ではあるのだが、息抜きにと学童のバイトへとやって来た。

まあ日頃からある程度は勉強してあるので、試験直前に焦って詰め込む必要性があまり無いからではあるが。

恐らく巽くんやりせたちは、今頃最後の追い込みとして必死で暗記科目を詰めているのだろう。

そんな彼らを思うと何だか少し気が引けるが、まあ精神的にリラックスした状態で試験は受けたのである、うん。

誰に向けてのものでは無いが何と無く言い訳をしつつ、子供たちの

相手をする。

今はネオフェザーマンごっこの真つ最中だ。

こういう時の大人の役割の例に漏れず、自分が拜命したのは悪の怪人役である。

まあ、精々良いやられ役を演じてみせようではないか。

「ぐっ、ぐああああっ!!」

こ、これで終わったと思うなよ、ネオフェザーマンたちよ!

この世に悪がある限り、我々は幾度でも甦るのだからな……!」

子供たちが扮するネオフェザーマンたちと死闘(サンドバッグにされるとも言える)を繰り広げ、如何にもありそうな悪役の散り際の台詞を放ちながら、力尽きて倒れた演技をする。

すると、子供たちは倒したばかりの怪人の周りをキャツキャと嬉しそうに走り回り、お互いの健闘を讃えあっていた。

役者としては大根もい所素人演技だったのだろうが、喜んで貰えて何よりである。

そろそろ子供たちのお迎えが来る時間が近付いているのも丁度良かった。

ワラワラと散っていく子供たちを微笑ましく眺めつつ、身体を起こして服に着いた砂埃を払って落としていると、俊くんが近付いてくる。

先程のフェザーマンごっこでは、俊くんはフェザーファルコンを務めていた筈だ。

何故か俊くんは顔をキラキラと輝かせながら、興奮冷めやらぬといった風に捲し立ててくる。

「先生、さっきのすごく良かったよ!

初代『不死鳥戦隊フェザーマン』の怪人ライガンそっくりだった!」
自分はその怪人を知らないし適当にやっただけなのだが、どうやら俊くんのお気に召した様である。

「そうか、それは良かった。」

俊くんは、フェザーマンについて詳しいんだね」

普通、今放送されている分ならば兎も角、随分と昔の特撮の一怪人の名前など、直ぐには出てこないだろう。

そんなキャラの名前がスルツと出てきた辺りからも、俊くんが初代ファンである事が伺える。

「うん、お父さんがね、『不死鳥戦隊フェザーマン』が好きで、一緒によく見てたから。」

何回も見たから、出てきた怪人もほとんど覚えちゃったんだ」
成程、お父さんの影響であつたらしい。

俊くんのお父さん位の世代は『不死鳥戦隊フェザーマン』はストライクゾーンであつた年齢層とはズレているだろうが、所謂特撮オタクであつたのかもしれない。

『不死鳥戦隊フェザーマン』について饒舌に語り出す俊くんに相槌を打ちつつ、それを微笑ましく見守る。

好きなものについて語る俊くんの顔は、フェザーマンごっこをしている最中のものよりも輝いていた。

だが。

保護者たちが段々子供たちを迎えにくると、次第にその表情が翳っていく。

「俊くん、ごめんなさいね。」

お迎え、遅くなっちゃって……」

少し急ぎ足でやって来た宇白さんがそう声を掛けた時には、俯いて黙ってしまっていた。

「先生と何かお話していたの？」

宇白さんが訊ねても、俊くんは「別に……」とだけ答えるだけだ。

宇白さんはそんな俊くんに少し困った様な顔をしたが。

「……そう、じゃあ今日は帰りましょうか」

と、一度こちらにペコリと頭を下げてから、俊くんの手を引いて帰っていったのだった。



チャイムが鳴ると同時に、試験監督をしていた先生から終了の合図が出され、答案用紙が回収されていく。

先生方はこれから採点で大変かも知れないが、少なくとも生徒にとってはここ5日間続いた期末試験も、これで終わりだ。

今回も、特に問題は無いだろう。

……問題があるとすれば、巽くんの成績だろうか……？

まあしかしそれも、明後日の試験結果発表になるまでは分からない事である。

ならば一先ず今は、試験から解放された事を素直に喜ぼう。

答案用紙の束を抱えた先生が教室を出ると同時に、途端に周囲が騒がしくなった。

花村は眠気を堪えるかの様に大きな欠伸をする。

どうやら昨晩は最後の詰め込みをしていた様で、あまり寝ていなかったのだろう。

テストからの解放感も相俟って、今眠気が一気に押し寄せて来ているに違いない。

隣では里中さんが天城さんと先程のテストの答え合わせをしているが、どうやらかなり間違えていた様で、「うう……」っと唸って頭を抱えてしまっていた。

「あーあ、御愁傷様。」

ま、補習に引つ掛からなきゃ大丈夫だろ」

頭を抱えた里中さんに、花村はそう声をかける。

すると、里中さんは僅かに顔を上げて花村を睨み付けた。

「うー、そう言う花村の方はどうなのよ」

「俺はまあまあかな。」

テスト勉強を早めに始めた分、何時もよりは解けてたと思うぜ」

そう言っつて自信あり気な花村の言葉に、里中さんは「花村に負けた

……」と机に突つ伏す。

そんな中、教室の後ろ扉がガラつと音を立てて開いた。疲れきった顔をしてやって来たのは……巽くんとりせだ。

「う、うーっス……」

「先輩たちもテストお疲れ様ー……」

心なしかヨロヨロとした足取りでやって来る二人を労う。

「二人ともお疲れ様。」

テスト、どうだった？」

そう訊ねると、巽くんは何かをやり遂げた様な顔をする。

「何時もに比べりゃ物凄く出来たと思うっス。」

数学とかもちよつとは分かる問題もありましたんで。

先輩のお陰っス」

補習を回避出来たのかは知らないが、何はともあれ巽くんが全力で

テストに挑んだのは間違いないだろう。

全ては結果待ちだ。

「なあ、テストも終わった事だしさ、打ち上げがてらジュネスにでも行こうぜ」

今日はこの後の予定も特には無い事だし、折角の午前放課なのだ。皆諸手を上げて花村の提案に賛成した。



夏の日差しが照り付けるフードコートは暑い。

屋外なのだから仕方無いのではあるが。

せめて直射日光から逃れようと、屋根のある場所に陣取った。

各々飲み物で喉を潤わせつつ、テストの出来や夏休みの予定、それに「事件」の事について話し合う。

事件については、りせの件以降に「犯人」の動きは無く、諸岡先生の件で何か動いた様な形跡は無いので、既にある情報を整理し直す程

度しかする事は無いのだが。

そんな風に時間を過ごしていると、不意に見知った人物がフラフラとした足取りでフードコートに入ってきたのが目に入った。

……足立さんだ。

「つたく、容疑者上がったのはいいけど、何処行つたんだか……。」

こっちはもう、クタクタだつての……。」

容赦なく照り付ける日差しに汗を滴らせながら、足立さんはそんな事をボヤいている。

……容疑者。

それは、諸岡先生の件の『模倣犯』であるという高校生の事だろうか。

……容疑者として固まって既に手配されている筈なのに、こうやって足立さんが捜し回っているという事は、その行方が分からなくなっているという事なのか……?」

視線が集まっている事に気付いたのか、足立さんは一瞬ビクツと身体を震わせて此方に視線を向けた。

「あ、あれ……? 君たちもしかして聞いてた?」

アハハと笑って足立さんは誤魔化そうとするも、こちらが無言で見詰めていると、一つ咳払いをして真面目な顔を取り繕う。

「容疑者はもう固まって既に手配もされてるからね。」

捕まるのは時間の問題だよ。

無差別に人を拐って殺人、なんて、絶対に許されないからさ!

僕たちも全力を挙げてるからね。

悠希ちゃんたちは安心して大丈夫さ!」

そんな事を言う足立さんに、心中で僅かに溜め息を溢した。

「……それは構いませんが、人前で捜査状況を洩らすのはどうかと思いますよ。」

叔父さんに知られたら、拳骨一つでは済まないのでは……。」

そう言うと、足立さんは「あつ」と顔色を僅かに青褪めさせる。

「あ、あはは。も、もう行かないと!」

悠希ちゃん、この事は堂島さんにはナイショでね！」

バタバタとフードコートを慌てて去っていく足立さんに、花村たちは呆れた様な視線を向けていた。

足立さんを見て安心出来るのかは些か言葉を濁さざるを得ないが、何はともあれ警察が動いているのは確かである様だし、「模倣犯」の件に関して自分たちに出来る事は無い。

諸岡先生の事件を起こした直後に足が付く様な詰め甘い人物が警察の捜査から逃げ切れるとは早々思えないので、この件に関しては解決するのは事実時間の問題なのだろう。

「さーて、クマのヤツもそろそろバイト上がるだろうし、暇潰しがてらにからかいに行こうかな」

そう言いつつ席を立って背伸びをする花村に続いて、里中さんや巽くん、それに天城さんも席を立つ。

どうやら三人もクマの所に遊びに行くつもりらしい。

まあ暇なのは確かだし、炎天下のフードコートよりはクーラーの効いた店内の方が遥かに過ごし易いのは間違いないだろう。

席を立って花村たちの後に続こうとした所を、同じく席を立っていたりせに呼び止められた。

「あのね、悠希先輩。」

私、先輩たちに会えて……本当に良かったと思ってる。

私、新しい学校でこんなに早くに友達ができるなんて思ってもみなかった。

「りせちー」なんだって目で見られて遠巻きにされて、……ずっとそんな風に過ごすんだらうなって思ってたから。

だから、一緒に勉強したり遊んだり、……こうやって笑いあって時間を過ごせる人たちに出会えて、先輩に出会えて……本当に良かった。

あの時私を助けてくれたのが先輩たちで、本当に良かった」

本当にありがとう、とりせは心の底からの笑顔を浮かべる。

礼を言われる様な事でも無い。

でも、りせの気持ちは嬉しかった。

出会えて良かったと思っっているのはお互い様なのだから。

「私も、りせに出会えて良かった。」

あの時助ける事が出来て、本当に良かった。

「こちらこそ、ありがとう」

そう答えると、ふふつと嬉しそうにりせは笑った。

「先輩にそう言って貰えると嬉しいな。」

あのね先輩、これからはもっと色々と遊んだりしたいなって思っているの。

でもね、ほら、私色んな人に知られてて……一人じゃちよつと不安で……」

「私で良ければ、何時でも付き合うよ」

もう直ぐ夏休みである。

色々と遊びに行くには丁度良いだろう。

アイドルとして活動していた時には出来なかった事も色々あるのだろうし、遊ぶのなら一人よりも複数の方が楽しいだろう。

「良いの？ やったー！」

嬉しそうにピヨンと跳ねてりせは喜びを顕にする。

「そんなに喜んで貰えて、私も嬉しいよ。」

明日は日曜日だし、りせの都合がつく様ならば明日早速一緒に遊びに行くか？」

「うんー！」

嬉しそうに頷いたりせと連絡先を交換して、クマに会いにフードコートを後にした。



【2011／07／24】

りせとの約束を果す為、りせの店番が終わる頃合いを見計らって家

を出ようとしたところ、菜々子がりせに会いたいと言い出した。

……前に菜々子と交わした、りせと一緒に会いに行くという約束は、りせの事件やその後のゴタゴタもあつて結局未だ果たされていまいままである。

どうしたものかと一瞬悩んだが、取り敢えずりせに連絡して、菜々子も連れて行っていいかどうかを尋ねた。

直ぐ様りせから歓迎する旨のメールが返ってきたので、菜々子にそれを伝えて一緒に行くかと訊ねると、一も二も無く即座に首をブンブンと縦に振る。

そして、りせちゃんに会うのだから、と、菜々子は取って置きのお宝の服を着て、何時も髪を結んでいるリボンを少し大人っぽいものに変えて、精一杯のおめかしをした。

本当にりせに会えるのが嬉しくて仕方が無いらしい。

まあ、テレビの中の憧れの人に直接会えるともなれば、その気持ちは分からないでもないのだけれど。

そんな風にソワソワする菜々子の身支度を手伝い、手土産代わりに作っていた桃とベリーのフルーツ大福をケースに詰めてから家を出た。



「先輩、いらっしやい。」

菜々子ちゃんは初めましてだね」

丸久豆腐店を訪れると、丁度店番が終わった所だったらしく、割烹着を脱いだばかりのりせが出迎えてくれた。

初めて直接会うりせに、菜々子は緊張や嬉しさ等が相俟った感情からあわわつと頬を赤らめ。

「は、はじめまして、堂島菜々子です」

やや上擦った声でペコりと頭を下げた挨拶をした。

そんな初々しく愛らしいフアンの姿に、りせも綻ぶ様な笑みを浮かべる。

アイドル云々を抜きにして、会っただけでこんなに愛らしい反応をしてくれれば嬉しいのだろう、きっと。

りせは菜々子が精一杯のおめかしをしている事にも気付いた様で、さらりと菜々子の格好も褒めた。

褒められた菜々子は、益々頬を赤らめて照れるが、嬉しくて仕方が無いといった表情を浮かべている。

「あつそうだ、はいこれ。」

手土産と言うか、お菓子だけど、良かったらどうぞ」

忘れる前に手土産代わりのお菓子をりせに渡した。

店売りのものなんかと違って入れ物はちやちなものだから、手作りである事は直ぐに分かったのだろう。

「えっ、これ……もしかして先輩の手作り!？」

驚いた様な顔で、りせは手の中の菓子とこちらとを交互に見ている。

「まあね。店売りのものじゃなくて悪いけど。」

味は悪くは無いと思うよ」

そう言うのと、りせはブンブンと首を横に振った。

「ううん、先輩の手作りの方が、ずつと嬉しい!」

私、その……こう言うの、懂れてたんだ」

懂れ? と首を傾げていると、りせは少し自嘲する様に説明する。

「うん、私……あんまり友達が居なくなってるね。」

まあ、学校に中々顔出せてなかったから、しょうがないんだけど。だから、こうやって友達がお菓子を手作りして遊びに来てくれるの

とか、凄く……良いなって思ってたの」

それが叶って嬉しいのだと、りせは花が綻ぶ様な笑みを浮かべた。

……喜んで貰えるなら、それが何よりである。

暫しの沈黙がその場に落ちたが、不意に菜々子が顔を上げた。

りせの話の内容全てを理解した訳では無いのだろうが、菜々子はりせに何かを伝えようと言葉を探すかの様な仕草をして、「あのね!」と

りせに声を掛ける。

「お姉ちゃんが作るおかし、とつてもおいしいんだよ！」

りせちゃんもきつと、おいしくつてしあわせなきもちになれるよ！」

そんな唐突な菜々子の言葉にりせは目をパチパチと瞬かせたが、ふつと柔らかな笑みを浮かべた。

「そうなんだ。」

食べるのが凄く楽しみになったよ。

ありがとうね、菜々子ちゃん。

あ、そうだ。

折角だから、家にながって皆で一緒に食べようよ」

ほら上がって上がって、と促され、菜々子と二人で家にお邪魔する。

冷えた麦茶と共に、皿に盛られたフルーツ大福が出された。

二人が手を付けたのを見てから自分も手を伸ばす。

味見はちゃんとしてあるので、個々人の嗜好により好みは多少別れるかもしれないが、問題は無い味の筈である。

一口食べたりせは驚いた様に目を丸くした。

「美味しい……」

そう呟く様に言うと、残りをあつと言う間に食べ終える。

そして、幸せそうにその目元を綻ばせた。

菜々子もニコニコと笑顔を浮かべながら食べている。

「先輩、本当にお菓子作り上手なんだ。」

先輩の気持ちに沢山籠った優しい美味しさで……。

なんか凄く幸せな気分になれちゃった」

新しい大福に手を伸ばしつつ、「ねー」と、菜々子と顔を合わせてりせはそんな事を言う。

そう喜んで貰えて、こちらも嬉しい。

ケーキか何かにしようかとも迷っていたのだが、どうやらりせは実は洋菓子よりも大福などの和菓子のほうが好きであるらしく、その点を踏まえてもフルーツ大福という選択は良かったのだろう。

その後三人で他愛もないガールズトークをしながら時間を過ごし、

日が傾き始める頃には菜々子とりせはすっかり仲良しになっていた。少し名残惜しそうにお互いに手を振って別れる菜々子とりせを微笑ましく見詰めつつ、その日は家へと帰ったのであった。



〔2011/07/25〕

朝方から降り続いていた雨は昼休み前には上がり、今日一日の残りは曇りが続くらしいが、明日は夜中まで降り続くらしいと天気予報は述べていた。

……恐らくは《マヨナカテレビ》が映る条件は整うのだろう。

『模倣犯』の件で「犯人」がどう動くのかは分からないが、一先ずは今まで通りに《マヨナカテレビ》をチェックするしか無い。

何か新に分かれれば良いのだが……。

昼休みに皆で昼食を取っていると、「犯人」の事で少し憂鬱になっていた気分を吹き飛ばす程に喜ばしき事が起きた。

先日の期末試験の結果が早速貼り出されたのだが、巽くんが脱赤点・補習回避を達成していたのだ。

赤点スレスレだろうと脱赤点は脱赤点。

巽くんの努力が見事に実を結んだのである。

実に喜ばしい事だ。

実際、貼り出された試験結果を見た巽くんは感極まったかの様に瞳を僅かに潤ませて、同じく赤点と補習を回避出来たりせと共にお互いの健闘を讃えあっていた。

二人とも口々に、勉強会を開き続けてきた事に対する感謝をこちらに述べてきたのは少し面映ゆくはあったが。

花村は中間よりも成績を向上させていた事にガッツポーズを決め、

中間とあまり変化が無かった天城さんと里中さんは、花村に越されて少々落ち込んでいた里中さんを天城さんが赤点は一つも無いんだからと慰めている。

一条は相変わらず上から数えた方が遥かに早い所にその名を連ね、長瀬はと言うと芳しくは無かったものの部活動に支障を来す程のモノでも無い様である。

概ね期末試験の結果は悪くは無いのであった。

さて結果も発表されて試験から完全に解放された喜びからか、花村が早速夏休みの計画を練り始めている。

原付もある事だし、一緒に海にでも遊びに行こうかという話になると、巽くん以外の三人がそれに食い付いてきた。

三人とも免許は持っていないが、各々年齢的には原付免許修得の資格はあるし、原付を使用出来る環境であったのが背を押したのか、(巽くん以外が)原付免許を取って皆で海に行く事になった。

年齢的にまだ免許を取れない巽くんは少し寂しそうだが、まああの体力があれば自転車でも十分原付と並んで走行出来るだろう。

……と、なると問題は年齢以前の問題で免許など取れないだろうクマなのだが、花村が「いつその事車輪でも付けて牽引すれば良い」と口にした所、天城さんのツボにハマってしまったらしく笑い袋を弾けさせてしまう。

まあ牽引云々は冗談として、昼休みが終わるギリギリまでそんな感じに楽しく先の計画を立てていたのであった。



放課後。

話したい事があるのだと、小西くんに連れてこられたのは、鮫川の河川敷だった。

川辺に着いても何も言わないまま小西くんは手近な所に落ちてい

た小石を拾い、それを川面に投擲する。

石は二度三度と水面を切ったが、直ぐに沈んでいってしまった。

「はは……。」

姉ちゃんは水切り上手かったんすけどね、俺は下手くそで……。

いっつも勝負しては、俺ボロ負けしてました」

川底に沈んでいった小石を眺めつつ、小西くんはポツリとそう語る。

そして小石を掴んでいた掌に数秒目を落とし、再び視線を上げて小西くんは川面を見詰めた。

「家から近いし、小さい頃はしょっちゅうここで姉ちゃんと遊んでたんです。」

昔……ここで姉ちゃんと遊んでた時……。

姉ちゃん、身軽だから、向こう岸まで石伝いにヒョイヒョイって渡ってっちゃって……。

俺、恐くてこっちから見てて……。

そしたら姉ちゃん、手振って、そのまま向こう岸の林の方へ消えちゃって……。

俺、不安になって、スッゲー泣いて姉ちゃん呼んで……。

そしたら、こつそり橋渡つてきてて後ろから、『わっ!!』って驚かされて、俺、チビって……。

……ははっ。

何か最近、この事ばっか思い出すんです」

そう少しだけ明るい口調で話ながらも、哀しみを湛えた目で小西くんは川の対岸を見詰める。

……いや、小西くんが本当に見ているのは、目の前の対岸ではなく目には見えぬ彼岸だろうか。

「……きつと、今と同じだから。」

……線が引かれたんすよね。

居なくなつた姉ちゃんと、残つた自分と。

姉ちゃんは向こう岸で、俺はこっち……。

……でも、あの時とは違う……。

……俺が幾ら泣いても、どんだけ呼んだって。

……もう姉ちゃんは戻って来ない……」

目を閉じて小西くんは頭を振る。

「ずっと考えない様にしてた……。

けど、やつと……向き合える気がします。

鳴上さんの、おかげです」

その言葉には思わず首を横に振った。

自分はただ小西くんの傍に居て……そして少し話をしただけだ。

自分は大した事をしてない。

向き合う事を決めてそれを実行したのは、小西くん自身である。

「私は何もしていないよ。」

全て、小西くんが自分で決めて行動していった結果だ」

すると小西くんは静かに首を横に振って、そして僅かに表情を和らげる。

「いえ……こうやって、連れ出してくれました。

俺に話し掛けて、話聞いてくれて……。

俺……俺なんかに、意味が無いと思ってた。

でも、俺の為にこうやって時間をくれる人がいるって事が……。

凄く、嬉しかった……。

だから、こんな事も出来ました」

そう言って小西くんが手渡してくれたのは、ジュネスでのレシート

だった。

シユークリームを、四つ買ったという内容レシート。

小西くんと過ごした時間があるからこそ、その意味が、このレシー

トの重みが、自分にも理解出来る。

これは……小西くんが一步踏み出した、その証だ。

「俺にとっては、ただのレシートじゃないです。

ただの買物じゃ、ないんです。

だからこそ、……それを鳴上さんに渡したかった。

ずっと傍に居てくれた、あなたに」

そう言つて、小西くんはこちらを真つ直ぐ見詰めてきた。
その思いを受け止め、一つ頷く。

自分が踏み出したその証を、預けてくれた。

そんな確かな信頼の形を、決して無くさぬ様に大切にしよう。

それを見届けた小西くんは、屈託無く晴れやかに笑つて告げる。

「俺ね、家、ちゃんと手伝おうと思うんです。

勿論学校はちゃんと行くから、放課後と休日だけだけど……。

……姉ちゃんが死んだつて事、俺ら家族、全然受け止められてない

んです。

だから、何て言うのか……。

「絆」を深めないとなつて……。

それが、俺に出来る最初の一步かなつて。

……鳴上さん、いつか……いえ今度、ウチの酒屋に遊びに来て下さ

いね。

ジュネスなんか目じやないつて位、繁盛する予定なんで」

また新たに自ら踏み出して行こうとする小西くんの意志に、そして

その笑顔に。

……きつと、もう小西くんは大丈夫だと、そう感じた。

「ああ。必ず、遊びに行くよ。

その時は、よろしく頼む」

その日は、きつと遠くは無い筈だ。



『虚構の勇者』

【2011／07／26―2011／07／27】



【2011／07／26】

一学期最後の授業が終わり、明日からは夏休みだ。

折角の午前放課なのだが、今日は生憎と終日雨天であるらしい。

帰り仕度を終えて廊下に出ると、ひどく思い悩む様な顔をした小沢さんとすれ違う。

呼び止める間もなく小沢さんは階段を駆け降りていったのだった。



流石に干渉が過ぎるのではないかと思いつつも、病院を訪れる。

小沢さんがあんな顔をして悩む事があるとすれば、それは恐らくはこの病院に関わる事だろう。

病室が並ぶ廊下を歩いていると、ベンチに座って俯き気味に何かを迷っているかの様な顔をしていた。

近寄ると、あっ……と声を上げて小沢さんは顔を上げる。

「鳴上、さん……。」

……。

……今ね、おと……あの人の病室、行ってきたところ……、なんだ……」

小沢さんは、“おとうさん”と言おうとして、何処か悩まし気に眉を寄せてから、“あの人”と言い直した。

……そう言えば、小沢さんのお母さんはどうなったのだろうか。

過労で倒れたのだと言うのは聞いているが……。

「お母さんの具合は、大丈夫？」

「あ、うん……。」

大した事は無かったみたいで、もう退院してるよ……」

少し表情を緩めて小沢さんはお母さんの事を話すが、直ぐにまた悩まし気に眉を寄せる。

「……ついで、だから……。」

お母さんの薬、貰うついでに……、ちょっと立ち寄っただけ……」
独り言の様にボソボソと小沢さんは、誰にかは分からないがまるで
言い訳の様な言葉を述べる。

そして、「なのに」と、小沢さんは複雑な感情を無理矢理押し込めた
様に表情を僅かに歪めた。

「そしたら、嬉しそうに笑ってさ……。」

……今にも死にそうな顔してるクセに、無理矢理身体を起こして
……。

『テレビ見るか？』『マンガを読みたければ買っておいで』『アイスも一
緒に買ったらどうだ？ほら、お金ならこれを……』

……。

……バカみたい……。

はしやいで咳き込んで……。

……お医者さんにも迷惑かけて……。

……ほんと、バカ、みたい……。」

バカみたい、と何度も何度も小沢さんは呟く。

けれどそこには、以前の様な強い憎しみや憤りは感じられなかつ
た。

ただただ感情を持って余しているかの様に、途方に暮れた子供の様な
顔をしていた。

「あんなヤツ、父親なんかじゃない……、絶対に違う……って、思っ
たのに……。」

その後の言葉は続かない。

廊下に暫しの沈黙が落ちた。

時計の秒針が何周か回る程の時間の後。

「もう、やだ……」

小沢さんの口から溢れたのは、そんな言葉だった。

そしてそれが切っ掛けであったかの様に、感情の奔流の様な声を上げる。

「私ばかり……私ばかり、私ばかり!!」

廊下に響いたその大声を看護師さんに咎められて初めて、小沢さんは我に返った。

そして、少し決まりが悪そうな顔をしてこちらに謝ってくる。

「……ごめん、カッとなっちゃって……」

……鳴上さんに当たっても、どうしようも無いのにね……。

……でも、どうして私ばかり、……こんな目に遭うんだろ……」

……何故なのかなんて、分からないが。

それでも確かにこれだけは言えるだろう。

「小沢さんの所為じゃ、ないよ。」

……私にも、どうしてかなんて分からないけど、それだけは確かだ
と思う」

「何故」なんて、所詮は当事者ですらない自分には分かり様も無い話だ。

巡り合わせや運とでも呼ぶしかないモノが悪かったのかもしれないし、将又何か別の所に原因があったのかもしれない。

ただ少なくとも。

その責任が小沢さんだけにある、という事は無いのだろう。

……それは小沢さんにとって、何の慰めにもならない事なのかも知れないが。

そう答えると、小沢さんは「そっか……」とだけ呟く。

そしてまた沈黙に沈みそうになったが、不意に小沢さんは立ち上がった。

「……ごめん、もう行かなきゃ。」

……今日は、ありがとう……」

自分は小沢さんに何も出来ていないが。

小沢さんはそう言って、まるで病院から逃げようとしているかの様

な足取りで、その場を去って行ったのだった。



午前0時まで後数分……。

窓の外では雨がシトシトと降り続けている。

……《マヨナカテレビ》が映る条件は整ったが……。

果たして何かが映るのだろうか。

そんな事を考えながら暗い画面を眺めていると、時計の針が重なった直後、不意にノイズの様な音と共にテレビの画面に砂嵐が映し出される。

しかしその砂嵐は直ぐ様収まり、画面には確かな像が結ばれ、何処か古いテレビゲームの様な作り物めいた安物感がある城壁を背にし、

“何者か”の上半身が映し出された。

先ず初めに思った事は、“誰だ？”という疑念だ。

そして次に、“何故”という困惑。

鮮明に映像が映し出されていると言う事は、この“何者か”は既に彼方の世界に居ると言う事になる。

この“何者か”は、少なくともテレビの報道で顔が出てきた存在ではない。

そして、前回の《マヨナカテレビ》から……正確にはこちらで最後に霧が出てからは、今夜の《マヨナカテレビ》以外に《マヨナカテレビ》が映った事は無い筈だ。

今までのパターンから言うと、先ず初めに不鮮明な映像が映され、その後で（詳しい因果関係は不明だが）その映像の人物があの世界に放り込まれて、その結果鮮明にシャドウが映し出される映像が流れていた。

しかし、今回は既に彼方に居る。

……これが意味するところは、一体……。

思考に沈みそうになりながらも、《マヨナカテレビ》から情報を得ようと、「何者か」を観察する。

恐らくは同年代の男。

陰鬱な雰囲気を全身から滲ませていて、俯きがちなその目は暗く澀んでいる様にも見える。

格好は部屋着の様なラフな私服だろうか。

左頬の泣き黒子が特徴的である。

……何故だろう。

こんな男など自分の知り合いにはいないが、何時か何処かで見掛けた事がある様な感じが僅かにする。

自分の記憶を引っくり返して、この男の姿を探していると。

俯きがちであった顔をゆっくりと上げ、男はボソボソと消え入りそうで聞き取り辛い……しかし不快感と共に耳の奥に残りそうな声で話し始める。

『みんな、僕の事見てるつもりなんだろう？』

みんな、僕の事知ってるつもりなんだろう？

……それなら、捕まえてごらんよ』

そして男はうっすらと口の端を僅かに吊り上げて薄気味悪い笑みを浮かべ、耳障りな雑音と共に映像は途絶えた。

……何だ、今のは。

ああやって鮮明に映っていたという事は、あの「男」は何者かのシャドウなのだろう。

シャドウとは抑圧されてきた自分自身。

その主張は、誇張され捻れ曲がってはいるが、本人の本音の一部ではある。

だがその主張が、「捕まえてみる」……？

……一体、どういう事なのか……。

先程の映像について考えていると、携帯が着信を知らせる。

……花村からだ。

電話に出てみると、花村は酷く狼狽していた。

見覚えなど何も無い「何者か」が既にあちらに居たのだから、然も

ありなんである。

一先ず花村を落ち着かせようとする、電話口の向こうでクマが騒いでいるのが聞こえた。

『……つと、あー。』

分かった分かった、うるせーな！

悪イ、クマに代わるわ！

花村が言った数瞬後。

『もしもーし、センセー！』

あなたのクマクマー！

初めて噂の《マヨナカテレビ》、見たクマよー！

テンションの高めなクマの声が聞こえてきた。

クマ曰く、やはりこの《マヨナカテレビ》は中にいる人物の抑圧した感情にあの世界が共鳴して起きている現象であるらしく、何者か“が恣意的に放映しているものではない、らしい。

まあそれはともかく、先程の見知らぬ男は既に彼方の世界に居るのは確かな様だ。

……まだ事の仔細は分からないが、幸い明日からは夏休みだ。

先ずは、明日皆で話し合う事にしよう。

そう全員に伝え、明日に備えて眠りに就いた。



【2011／07／27】

昨日の雨が拭い去られたかの様に、雲一つない青空が広がっている。

しかしそんな天候とは裏腹に、何時ものフードコートに集まった面々は、困惑によりその表情を曇らせていた。

昨晚の《マヨナカテレビ》を受けて急遽集合した訳なのだが、そも

その話、映った男について情報らしい情報が無いのである。

今年の春頃にまで遡って調べてみたニュースなどには彼の情報はなかったが、天城さんや里中さんにりせや花村も、あの男を何処かで見掛けた事がある気がすると言っている為、恐らくは稲羽かその近郊にいる人物なのだろうとは推測出来るが……。

情報が少な過ぎる為か、りせ・クマの共同で行ったサーチでも、何者か”が彼方にいる事位しか分からず、その足取りは全く掴めなかったらしい。

……昨晚の男の、恐らくはシャドウのものであったのだろうその言葉を思い返す。

『みんな、僕の事見てるつもりなんだろう？』

みんな、僕の事知ってるつもりなんだろう？

……それなら、捕まえてごらんよ』

……あのシャドウが言ったのは、たったそれだけだ。

……見てるつもり、知ってるつもり、とはどういう事なのだろう。

”みんな”、が指す対象は一体何なのか……。

そして何よりも。

”捕まえてごらんよ”、とシャドウは言った。

挑発の様にも聞こえるが。

……それはつまり、あの男が”捕まる”可能性がある何かしらを行なったという事なのではないだろうか。

……だがその場合、何故”捕まえてみる”等と挑発してきたのだろうか。

シャドウは抑圧された心だ。

それが”捕まえてみる”と主張するという事は、つまり……。

思索に沈みそうになったその時。

それを中断したのは、花村の声だった。

「なあ、あのさ……。

俺……昨日の晩のあの《マヨナカテレビ》に映ってたヤツって……。もしかして、モロキン殺した”模倣犯”じゃねーのかなって思うんだけど……。」

確証は今の所無い為か、何処か言葉にするのを迷う様に花村は述べる。

……恐らくは、稲羽の高校生で。

顔に全く見覚えが無い事から、恐らくは八十神高校以外の学生で。

そして。

……「捕まる」可能性がある何かを行った。

とくれば、ここ最近の出来事から「模倣犯」の事を導き出すのは難しくはない。

彼が「模倣犯」と考えれば、指名手配された筈なのに足取りが見付からず、未だ逮捕に至っていない事にも納得がゆく。

……何時からかは分からないが彼方の世界に居たのなら、こちらの世界で幾ら捜そうとも見付かる訳が無いのだから。

だが。

「昨日の人が、「模倣犯」ってのは有り得るだろうけど。

でも……。

じゃあ何で、あの世界に「模倣犯」が居るんだろ……。

「模倣犯」は【犯人】じゃない筈なのに。

ううん、万が一【犯人】なのだとしても、あの世界が危険な場所だったのは分かってる筈なのに……。

【犯人】の犯行、なのかな……」

天城さんは何処か迷う様に言う。

そう。

彼が「模倣犯」であるのなら、『何故彼があの世界に居るのか』という疑問が当然の如く沸き起こる。

昨晚の彼を見るに、現在分かっている【犯人】の条件には一切当てはまっていない事は明らかだ。

だから彼が【犯人】で、彼方の世界に干渉する能力を持ち、それを利用しているという可能性は極めて低いだろう。

そして。

彼が「模倣犯」であろうと無かろうと、今回の件が【犯人】の犯行に依るものなのかは些か懐疑的にならざるをえない。

今回の件は、天城さん以降続いた三件の事件とは明らかに趣が違
う。

《マヨナカテレビ》が映った段階で既にあの世界に居た事。
それに……。

確かに諸岡先生の事件は町中の噂になっていた。

だから、個人を特定してはいなかったとは言っても、その「犯人」
に稲羽の人々の注目が集まっていたのは確かだろう。

そう言う意味では、「模倣犯」は「犯人」のターゲットになり得る
のかもしれない。

しかし、「模倣犯」は高校生である事も相俟って未だその名前を含
めた個人情報は一切が、メディアの類いには全く公開されていない。

……彼を「犯人」だと知る事が出来るのは、極めて一部の人間に限
られている。

そう、例えば……—

……いや、無意味に不安を煽る様な憶測は止めておこう。

今考えるべきは、彼の情報を如何に集めて、そして彼方の世界で探
し出すか、である。

「模倣犯」だろうとなんだろうとこのままでは彼は死ぬ。

そうなれば、真相は闇に消えてしまうのかもしれない。

「取り敢えず、今は彼の情報を集めよう」

「ま、そうするしかないだろうな。」

でも、何処の誰かも分からないヤツを探し出すのは骨だぜ。

何か良い案あるか？」

花村は頬を掻きながら訊ねる。

「案と言える程のモノでも無いが……。」

……昨晩の男の事、私も里中さんも天城さんも、そしてりせも、何
処かで見覚えがあるんだ。

なら、彼の活動圏内とこちらの活動圏内は被っている筈……」

似顔絵でも描いて風漬し聞き込みを試みたらどうか、と提案しよ
うとした時だった。

あつ、と里中さんが顔を上げて「思い出した！」と席を立ち上がる。

天城さんはその様子に、どうかしたのかと首を傾げていたが。そんな天城さんに詰め寄る様な勢いで、里中さんは興奮した様子に言う。

「ほら雪子！ アイツだよ、アイツ！」

春の初めの頃、校門前でいきなり雪子に告ってきた他校の男子！

何か見覚えがあると思つてたら、そういう事か！」

春の初め……と言われ、そう言えば初めて八十神高校に転入した日の帰りに、そんな出来事もあったな……と思ひ出した。

確かに、既に臃気になりつつある記憶の中でも印象に残っていた彼の陰鬱な雰囲気と泣き黒子と濁った様な目は、昨晚の《マヨナカテレビ》の彼と重なる部分がある。

彼の制服は確か……稲羽高校、だったか。

「稲高だったら中学の時のクラスメイトでそっち行つた子結構居たから、そっちの線から当たってみるね」

「ああ。最近姿を見せなくなった生徒がいなかどうか、調べて欲しい」

地元であるだけに他校の生徒ともそれなりの繋がりのある里中さんと天城さんにそう頼み、残りは取り敢えず稲羽高校生の筈の彼が何処に諸岡先生と接点があつたのかを調べてみる事にする。

……諸岡先生はずっと八十神高校に勤めていた筈だ。

それで何故、他校の生徒である筈の彼が、殺害する程の動機に繋がる様な関係性になるのだろうか。

……まだ何も分からない。

だからこそ、調べるしかないのだ。

一先ず、《マヨナカテレビ》の彼の似顔絵を巽くんにつけて貰い、それを各自持つて情報収集を開始する事となった。

(一応自分も描いてみたのだが、とても似顔絵としては使えない出来であり、お蔵入りさせる事とした)



情報収集と言っても、先ずそもそもの話、その当てが自分にはあまり無い。

地元民である里中さんと天城さんと巽くんはその伝があるし、花村は地元民では無いもののジュネスのバイト繋がりで稲羽の他校にも伝がある。

りせ曰く、件の男は以前豆腐屋の付近を彷徨っていた事もあったらしいので、りせは商店街の辺りを当たってくれるらしい。

さてどうしたものか、と悩みつつ鮫川沿いの土手を歩いていると、何事かを考えている様な様子の白鐘くんが、休憩所を兼ねたベンチに座っている事に気が付いた。

……彼ならば何か情報を掴んでいるのではないだろうか。そんな下心を抱きつつ、白鐘くんに声をかける。

「こんにちは、白鐘くん。」

「こんな所で何を？」

声をかけると、「あっ」と少し驚いた様に白鐘くんは顔を上げて素早く席を立つ。

「鳴上さん……。」

……少し、情報の整理を行っていたんです」

情報の整理、か。

……そう言えば白鐘くんは、容疑者が固まった事で警察の《特別捜査協力員》から外されていたのではなかったのだろうか。

こちらの考えた事はお見通しだったのか、白鐘くんは僅かに視線を伏せて言葉を続ける。

「今は……僕が独自に調査しているんです。」

……警察の方では、現在行方不明の容疑者を、一連の事件の容疑者と目して捜査が進められています。

恐らく、容疑者が逮捕され次第立件されるでしょう……。」

一度犯人として確定されてしまえば、それが覆されるのは容易には起こりえない。

となれば、「模倣犯」が逮捕されると、その段階で警察は彼を「真犯人」として、そこで捜査は打ち切られてしまうのかもしれない。

……完全に打ち切られなかったとしても、今みたいに本腰を入れて捜査される事はなくなるのだろうか。

そうなれば、「犯人」まで警察が辿り着く可能性は極めて低くなる。……そしてそれに反抗するかの様に、独自に調査を続ける白鐘くんは……。

「……諸岡先生の事件の犯人と、山野アナと小西先輩の事件の犯人は、違う」

その言葉に白鐘くんは弾かれた様に顔を上げ、その発言の真意を探ろうとするかのような目で此方の目を覗きこんでくる。

その目を真っ直ぐ見詰め返して、白鐘くんを確認する。

「警察とは別に独自に調査を続けてるって事は。」

白鐘くんは、そう思ってるって事なんじゃないのか？」

そう訊ねると、白鐘くんは暫し押し黙った後、微かに頷いた。

そして、何かを逡巡する様な素振りを僅かに見せ、しかし小さく頭を振って自分の意見を述べていく。

「ええ、そうです。」

……今回の件と、先の二件では、明らかに違う部分がある。

僕は……その部分にこそ、一連の事件の「真相」が隠されているのではないかと、考えています」

しかし、警察はその部分には拘っていないのだろうか。

……僅かな時間ながら白鐘くんと接してはいるだろうか彼の性格的に、恐らくはその意見を警察に述べてはいるだろうとは思う。

しかし、その意見は受け入れて貰えなかった、或いは切り捨てられたか、といった所だろうか。

故に、独自で調査を進めているのだろうか。

ふと、白鐘くんが何かを決めた様な顔付きでこちらを見上げてくる。

そして。

「……僕は最初、貴方を疑っていました」

そう、口にした。

……最初、と言う事は今は違うのだろうか？

半ば予想していた事だけに動揺はなく、その言葉の真意を計る為無言で続きを促す。

「春に起きた二件の殺人には、ある共通点がありました。

被害者が直前にテレビ報道に映り稲羽で注目を集めていた事、そして遺体が発見される直前行方不明になっていた事。

しかし、今回の諸岡さんの件にはそれらは当てはまりませんでした。

ですが、その共通点に当てはまる出来事は起こっていたんです。

貴方の周囲にいる、表向きには「事件とは関わりが無い、一時的な失踪」と言う事になっている、詳細が未だ不明な事件の被害者たち。

彼らは、失踪直前にテレビの報道により、稲羽での注目を集めていました。

そして。

彼らの失踪事件が起きる前に、貴方は彼らと接触していた。

事件が始まったタイミングも、貴方が町に来た直後だった。

疑う為の要因は、充分過ぎる程でした。

例え犯人その人ではなくとも、共犯者やそれに類する関係だと、僕は考えていました」

そこまで一息に言い切つて、白鐘くんはこちらを見上げてきた。

「でも、そんな事を面と向かって私に言ってるって事は、今はそう思っていないって事と捉えても良いのかな」

その言葉に白鐘くんは僅かに頷いた。

「最初は、何らかの要因によって死を免れた失踪事件の被害者を貴方が懐柔して引き込んで、犯行の口止めしているのかと考えていました。

ですが、恐らくは違う。

寧ろその逆で、被害者達が死を免れた要因……。

それこそが、貴方なんじゃないですか？」

答えを迫るかの様なその瞳を、確りと見詰め返した。

白鐘くんの優秀さに、思わず称賛の拍手を贈りたくなる。

“彼方の世界”という、極めて重要なフアクターの存在を知らずして、白鐘くんはその答えに辿り着いたのだ。

白鐘くんの並々ならぬ洞察力と分析力、それと発想力の成せる賜物なのだろうか。

「成程。それで、白鐘くんはそれを私に尋ねて、何を知りたいんだ？」
卑怯な行為だとは思うが、白鐘くんの質問には答えず、逆に質問で返した。

白鐘くんは確かに事件の実態に近い部分まで推理する事によって迫っている。

しかしそれは、彼が調査して得た情報や警察が集めていた情報や証拠から導き出した推理である。

ここで、白鐘くんは毛程も想定していないであろう “彼方の世界” や “シャドウ” に “ペルソナ” という半ばオカルトの様な存在を明らかにした所で、彼がそれを信じるとは思えない。

煙に巻こうとしているのかと怒らせるのが関の山だろう。

此方の世界では何の証拠も白鐘くんに呈示出来ないし、彼方の世界に実際に連れていくのはそれはそれで危険な行為である。

ならば、その情報は黙っている方が余程良いだろう。

少なくとも、白鐘くんは心の余裕が無い内は。

今の白鐘くんには、恐らく余裕が無いのだろう。

余裕が無いからこそ、今こんな場所で、こちらに真っ正面からそんな事を尋ねているのだろうか。

白鐘くんは僅かながらも落胆した様な感情をその瞳に浮かべる。

こちらが態とはぐらかしているのは、白鐘くんにも分かったのだろう。

しかし一つ息を吐いて白鐘くんは尋ねてくる。

「僕が知りたい事は、この事件の “真実” 。

それだけです。

……鳴上さん、貴方は……この事件について僕や警察よりももつと

深い部分……「真実」に近い部分を知っているんじゃないですか？」
嘘や誤魔化しは許さない、という気迫が伝わってくるかのような、強い意志が籠った瞳がこちらを覗きこむ。

その意思を無下にする事は、自分には出来そうには無い。

伝えられる範囲で、彼の思いに応えたいと思う。

……「ペルソナ」や「シャドウ」といった部分を抜きにして、白鐘
くんに伝えられる部分を探した。

そして。

「……車。」

少なくとも天城さんの件以降は、犯人は誘拐の時に車を使っている
可能性が高い。

それも、そこそこ以上に大きい車だろう。

そして誘拐する時は、被害者が在宅している時に玄関から真つ正面
に来る」

恐らくはまだ白鐘くんが掴んでいないだろう情報。

この情報を彼がどう捉えるのかは分からないが。

それでも何かの一助にはなるだろう。

それだけか？ と言いた気な白鐘くんに僅かに肩を竦めて返す。

「私だって、事件については分からない事の方が多い。

偶々、白鐘くんが知らない部分を僅かに知っているだけだ。

逆に、私たちが知らない部分を白鐘くんが知っている事だつてある
だろうな」

そう返すと、白鐘くんは何かを考え込むかの様に視線を僅かに伏せ
て沈黙し、暫しの後に「そうですか」と呟いた。

新たな情報を頭の中で精査しているのだろう。

そしてそこでふと、自分にとつての本題を思い出した。

昨晚の《マヨナカテレビ》の男についての情報を集めなくては。

白鐘くんが教えてくれるかは分からないが、まあダメ元である。

「さて、交換条件って程のモノでもないけど、私からも一つ、白鐘くん
に訊ねてみていいか？」

白鐘くんは少し考えていたが、やがて「構いません」と頷いてくれ

た。

さて、どう訊ねようか。

異くんが描いてくれた似顔絵を見せても、白鐘くんがその彼に見覚えがなければ意味は無い。

ここはやはり警察と繋がりがあるという点から……。

「今警察が追っている容疑者……。」

その人物について、何か知っている事があれば教えて欲しい」

「模倣犯」の事について訊ねてみる。

これならば、白鐘くんなら何か知ってる可能性は大いにあるだろう。

白鐘くんは怪訝そうな顔付きをするが、答えてくれる気はあるらしい。

「今回の件の容疑者、ですか。」

前にも言った様に、容疑者は「高校生」ですから僕も詳しい所までは教えて貰っていません。

……情報になるのかは分かりませんが、一つ。

被害者は現在別の高校に在学していますが、以前通っていたのは八十神高校であった様です」

「以前はって事は……退学したか何かしたって事か？」

そう聞き返すと、白鐘くんはそうであるらしい、と頷いてくれる。

「書類の上では、停学処分からの自主退学……と言う事になっていたそうです。」

現在の高校へは、復学と言う形で入学した様ですね」

……ふむ。

「模倣犯」は八十神高校に在学している時、……それこそ停学処分になった辺りで諸岡先生と何かしら揉めたのだろうか。

今まで謎だった諸岡先生と「模倣犯」との繋がりは段々見えてきた。

これは一度皆で共有した方が良い情報だろう。

「……成る程。」

情報提供してくれてありがとう、白鐘くん」

感謝の意を込めて頭を軽く下げると、白鐘くんは何処か狼狽えた様な顔をして、そして慌てて帽子の鰐を下げた。

「い、いえ。こちらも有益な情報を手に入れた訳ですから。」

ただの情報料代わりですから、気にしないで下さい」

そうは言うが、白鐘くんにとっては大した事ないのだとしても、“模倣犯”の情報がこちらにとってとても有益な情報である事なのは確かである。

白鐘くんに感謝の意を示すのは、何も不思議な事でも無いだろうに。

さて、早速花村たちに連絡を入れるか、と白鐘くんに別れを告げてその場を離れようとしたが、ふとある事に思い至って足を止める。

「雨が降り続く夜の零時、この辺りでは不思議な現象が起こる。」

《マヨナカテレビ》って言うんだが、白鐘くんは知っているか？」

振り返って見詰めた白鐘くんは、何を突然言い出してるんだ？と困惑気味に曖昧な表情を浮かべていた。

《マヨナカテレビ》の事を伝えた所で、白鐘くんがそれを信じる可能性は低い。

そもそもただの都市伝説だと、調べる事もしないのかもしれない。

絶対に調べて欲しい、とまでは言わない。

それでも。

「白鐘くんにもしその気があるのなら、《マヨナカテレビ》について調べてみると良い。」

きつと、白鐘くんにとって知りたい事の一部がそこにある筈だ」

白鐘くんがどう反応しているのかは、もう彼に背を向けてしまったので分からない。

じゃあ、と手を振ってその場を後にしたのだった。



白鐘くんから得た情報を皆で共有してから数時間後。

皆が新たに集めてくれた情報を統合して整理してゆく。

その結果、『マヨナカテレビ』に映った男は『久保美津雄』だという事が分かった。

里中さんや天城さんの通っていた中学出身では無かった様だが、二人は伝を辿る事で彼と同じ中学校に通っていた生徒を探し当ててくれたのだ。

昨晚の『マヨナカテレビ』を見ていたその生徒は、既に『やらかした犯人』という事で彼の卒業アルバムの写真を友人間で回し見していた所だったらしく、二人が頼んでみた所快く（正確には面白がって）その写真を見せてくれたらしい。

結果、見事に昨晚の彼であったという訳だ。

『久保美津雄』は現在の所稲羽高校に通う三年生だが、以前は八十神高校の生徒だった。

が、素行不良と校内で暴力沙汰を起こしかけた事、その他諸々の問題行動を起こした結果、一年生の終わり頃には実質退学勧告であった停学処分を食らい、そして稲羽高校へと復学という形で入学していたのだそうだ。

これは白鐘くんから得た『容疑者』の情報と一致する。

で、その処分を主導していたのが諸岡先生であったとの事らしい。

これは、当時の状況をよく知る八十神高校の三年生から、ジュネスでのアルバイトとしての伝を使って花村が聞き出してくれた。

尚、この処分に関しては当時の八十神高校生からは拍手喝采と迄はいかずとも、諸手を上げて賛成されていた様だ。

稲羽高校へ復学したのは良いものの、その思い込みが激しく自己中心的で他者への攻撃性が極めて高い点や、虚言癖や暴言癖に人付き合いが悪く協調性に欠けている点などから、『久保美津雄』とクラスメイトとの折り合いは極めて悪く、実質不登校の様な状態で半ば引きこもりでもあったらしい。

故に、彼の姿を見掛けなくなっただのは何時からだっただのかはクラスメイト達にも分からなかった様だ。

そして、どうやらほんの僅かな期間だが『久保美津雄』は商店街の『惣菜大学』でアルバイトとして働いていたらしい。

だが、接客態度が悪く、何度注意しても業務を覚えられずミスをし、そして直ぐに音を立てて辞めてしまったのだとか。

それらの情報から判断するに、『久保美津雄』が“模倣犯”であるのはほぼ間違いないのだろう。

この位情報があれば探し出せそうだと、とりせは言っていたが、明日は早速彼方の世界で『久保美津雄』を捜索する事になった。

しかしやはり腑に落ちないのは、“何故『久保美津雄』が彼方の世界にいるのか”と言う事だ。

『久保美津雄』自身が“力”を持ち、偶然か故意にかは分からないが何らかの要因により彼方の世界に迷い込んだ可能性はあるだろう。

それについては彼を捕まえてから検証すれば良い。

しかしそうでは無い場合、『久保美津雄』は“何者か”の手に依って彼方の世界に放り込まれた、という事になる。

その“何者か”の目的は、一体何なのだろう。

その意図が、掴めない。

“何者か”が【犯人】であるにしろ無いにしろ、少なくとも（理解出来るか否かは別として）何かしらの目的があつての行動の筈だ。

今迄の【犯人】の犯行のパターンからは、今回の『久保美津雄』の件は外れている。

例え今回の件が【犯人】に依るモノであつたとしても、そこに籠められた意図は何かしら特別な意味があるのではないだろうか……。

そして何よりも。

何故『久保美津雄』なのかと言う点だ。

『久保美津雄』が彼方の世界に放り込まれるに至ったのは、彼が“模倣犯”である事と関係がある可能性は高い。だが。

『久保美津雄』を諸岡先生の事件の犯人であると関連付けられるのは、細かな行動を把握出来る程極めて彼に近しい人間か、或いは事件を捜査している警察位なものであろう。

『久保美津雄』は高校生であり、その個人情報には慎重な取り扱いがなさ

れている。

諸岡先生の事件は連日テレビを賑わしているとは言えども、『久保美津雄』自身は全くの無名である。

今の所その情報はメディアの類いには一切流れていないし、彼と何らかの関係性でも無い限りはそもそも顔と名前すらも知らないであろう。

昨晚の《マヨナカテレビ》以降、極めて小規模ながらも彼と関係がある人物の間では噂になってきている様だが、それは彼が放り込まれた原因とは関係が無い。

……つまり、『久保美津雄』を彼方の世界に放り込んだ人物は。

彼の周囲の人間であるか、或いは……警察関係者である可能性が高い。

……。

“何者か”の正体の推理は一旦ここで止めておこう。

これ以上は邪推にしかない。

それよりも、その意図を考える方が先決だ。

“何者か”（仮定として【犯人】）の意図を探る為、自分を【犯人】と仮定して問答形式で今現在分かっている情報を整理する事にした。

『お前は誰だ?』

…… “私”は【犯人】だ。

『お前はどんな奴だ?』

“私”は“力”を持っている。

『“力”とは、どんなモノだ?』

人をテレビの中に入れられる“力”だ。

『人をテレビに入れると、どうなる?』

テレビの中に入れられた人は、死ぬ事もある。

『それを知っているとと言う事は、誰か殺したのか?』

“私”はその“力”を使って五人をテレビに入れ、そして最初に入れた二人は死んだ。後の三人は助かった。

『その五人をテレビに入れた目的は?』

(不明)

『その五人を選んだ基準は何だ?』

《マヨナカテレビ》に映っていたからだ。

『死ななかつた被害者を殺そうとは思わなかつたのか?』

(不明)

『どうやってテレビの中に入れた?』

車で人を入れる大きさのテレビを運んだ。

そして玄関からターゲットの家を訪ね、応対したターゲットを無力化した上で車の中のテレビに放り込んだ。

『どうして被害者たちはお前を警戒しなかつた?』

(不明)

『何故二人は死に、三人は助かつた?』

分からない。(状況から判断した)

『テレビの中に何かがあるのか、確かめてないのか?』

していない。(クマの発言から判断した)

『つまり、何故二人が死んで、何故三人は助かつたのか、テレビの中で何があつたのか、知らないのか?』

知らない。

.....

考えてみても、『久保美津雄』をテレビに入れる動機は分からない。彼の様な体の良いエスケープゴートを、態々死の危険性がある場所に送り込む意味は、果たしてあるのだろうか。

暫く考えてみたが、結局何も掴めなかつた。

情報が断片的過ぎて、全体像を掴めないのだ。

……詳しく考えるのは、『久保美津雄』の件を解決してからでも遅くはない。

夜が深まってきた辺りで、明日に備えて眠る事にした。



【2011/07/28】



【2011/07/28】

集めた情報を元に割り出した『久保美津雄』の居場所は、異様な雰囲気漂わせていた。

「『ボイドクエスト』……?」

まるで、一昔処か家庭用ゲーム機の黎明期のRPGゲームの様な、ドット絵を思わせる立方体の集合によって形作られた世界。

それが、『久保美津雄』の生み出した迷宮、『ボイドクエスト』であった。

中空には、【GAME START】とその下に【CONTINUE】というゲームのスタート画面の様な文字が浮かび、ゲームカーソルの様な三角形の矢印は【GAME START】へと合わせられている。ボイド、か。

voidとは、空虚だとかそんな意味なのだが……。

「何これ、ゲーム感覚って事?」

ホント、ふざけてる!」

里中さんはそう憤るが、果たして久保美津雄が世界をゲーム感覚で捉えているからこの場所がこうであるのかは分からない。

この世界に現れる『迷宮』は、その当人の『心』に依って形を成している。

何らかの願望がそこにあるが故に、ゲームを模したかの様な『迷宮』になっっているのかもしれない。

……先ず気になるのは、ゲームを模しているにしろ、この『ボイドクエスト』がモチーフにしていると思われるゲームが古過ぎるのだ。

このドットの粗さを見るに、通称ファミコンと呼ばれるファミリ-

コンピュータでのゲームか、良くてスーパーファミコンの初期辺りのゲームが元になっているのだろう。

久保美津雄の年齢を考えると、それこそ小学生になる前辺りに触ったかどうか、だ。

彼がレトロゲーマーであった可能性もあるが、どちらにせよ今時の高校生が好んで遊ぶゲームとしては古いのは確かだろう。

テレビゲームの黎明期の様な時代のゲームを模しているのは、何故なのか。

……彼の幼児性を表しているのか、それとも彼の何らかの願望を反映しているのだろうか。

彼を全くと言って良い程知らぬ自分には、類推しようにも元手となる情報すらない。

何はともあれ、この「迷宮」の奥にいたのであろう久保美津雄の所まで辿り着く他無いのである。

「目指せエンディング、って所だな」

ゲーム好きな部分が騒いだのか少し高めなテンションでそう言った花村に、同意する様に頷いた。

ゲーム自体は自分も好きである為、このドット調の城は何処か懐かしさすら感じる。

見た目的には、『魔王の城』と言った所だろうか。

ワクワクしている気持ちが自分にも多少はある事に内心苦笑しつつ、「迷宮」の中へと足を踏み入れたのであった。



「ボイドクエスト」の内部へ入ると、その途端眼前にまるでゲームでステータスや台詞等を表示させる為のウィンドウの様なモノが出現する。

何が起きるのかと警戒していると、【ぼうけんをはじめる】・【ぼうけ

んをやめる」と言ったゲームのスタート画面の様な文字がウィンドウに表示された。

そしてゲームカーソルの様な三角形が出現し、一度「ぼうけんをやめる」を選択しそうになるが、結局は「ぼうけんをはじめ」を選択する。

そして四文字分の名前入力欄が現れ、そこには自動的に『ミツオ』と入力される。

……『ああああ』では無いのか。

そして名前が入力され終わると同時に、ウィンドウは消滅した。

『何、今の！ ゲーム開始って事!？』

あーもう、ムカツク！

先輩、あんなヤツとつとと捕まえちやおう!』

りせは憤った様な声を上げる。

まるで馬鹿にしているかの様に感じたのだろう。

気持ちは分からないでも無いが。

まあそもそもこんな「迷宮」なのだし、あんな演出になるのも、久保美津雄にとつて何かしらの意味があるのかも知れない。

例えば、ゲームの主人公の様に世界を救ったり出来る様な勇者になりたかった、とか、そう言う願望の表れなのかもしれない。

万が一そうであるならば、彼の行為を考えると皮肉でしかないのだが。

りせのサーチによると、この「迷宮」は10の階層から構成されていて、最上階（＝最深部）から久保美津雄の反応があるらしい。

『魔王の城』を模したかの様な城の最上階で待ち構えている辺り、久保美津雄は勇者ではなく魔王である気がするが……。

りせのナビに従って微妙に狭い通路を進んで行くと、前方の分岐点に道を塞ぐ形でシャドウが待ち構えているのが見えた。

数は合計8体。

——右手には。

何かが書かれた紙の様なモノで自らの周囲を覆っているシャドウが1体。

岩塊の様なシャドウが1体。

地面から生えた剣を握った腕の様なシャドウ（本体は仮面が付いてる剣の方だろう）が2体。

——左手には。

円盤の様な板に逆さに縛り付けられたシャドウが1体。

蛇の様なシャドウが1体。

三段に積み重なった頭部がまるで塔の様になってるシャドウが2体。

『右の方には物理以外効かなさそうなヤツが居るよ！』

左の方は、弱点と耐性がバラバラだけど、物理耐性を持つてるのは居ないよ！』

りせはどの攻撃が通用するのか、見ただけで何と無く察知出来るらしい。

しかし一度に相手する敵の数が多過ぎると、何れが何れなのかは分からないのだそうだ。

取り敢えずは、物理攻撃に耐性を持つ敵が居るかどうかを最優先に判断して貰う様になっている。

敵の名前等の情報を解析していくりせのナビを受けて、隣に行く花村と目配せをしてお互い走り出した。

此方は右に、花村は左へと。

一番動きが速い二人で敵陣に突っ込み攪乱し、敵の連携を取り辛くさせる。

敵の対応が混乱している最中に巽くんや里中さんと言ったパワーファイターが一気に場を崩し、魔法攻撃を主体とする天城さんとクマは後詰めを担う。

それがこの場の最適解だ。

一気に敵の真ん中まで突っ込んで、取り敢えず一番奥にいたので目に付いた、『青のシジル』を周囲の紙ごと、一気に敵を鞘から引き抜いた軍刀で居合い切りの要領で深く切り裂く。

悲鳴を上げて周囲の紙ごと地に崩れ落ちたシャドウの首を刎ねると、シャドウは断末魔の叫びを上げて塵へと還った。

僅かな合間に一体を屠った事により、残りシャドウ達の敵意が此方に集中する。

二体の『正義の剣』が敵を討ち滅ぼさんとその手の剣を振り翳してきたが、それは場に乱入して来た巽くんとタケミカツチによって、本体である剣ごと体を砕かれた。

巽くんの振り回した鉄板は『正義の剣』をまるで粘土細工の如く叩き潰し、タケミカツチの拳はシャドウを跡形も無い程に砕く。

一体だけ残った『依存のバザルド』が集中砲火を喰らって塵に還ったのは、その直後の事であった。

その後も時折道を塞ぐシャドウ達の相手をしつつ階を跨ぐと、再び眼前にメッセージウインドウが表示された。

『わあっはっはっはっ！』

『くさった ミカンの ぶんざいで

ワシに はむかうとは いい どきようだ！』

……腐ったミカン？

それに、ワシという一人称……。

これはまさか、諸岡先生を表しているのだろうか？

『きさまの ような にんげんの クズは

えいえんの くるしみを あじわうが いい！』

『くらえっ！』

【せいさいのいちげきー！】

バシユツという効果音が何処からともなく聞こえ、同時に【せいさいのいちげき】と言う文字が赤く光る。

【ミツオは いしきを うしなつた……】

赤く表示されたそれは、まるでゲームオーバーを意味しているかの様な演出である。

……これは八十神高校を退学した時の事を表現しているのだろうか。

……心が反映されるこの“迷宮”でその時の事が再現(?)される辺り、八十神高校を退学した事は久保美津雄にとって心の中でのかなりウエイトを占めている事柄なのだろう。

それにまるで諸岡先生に苦しめられたかのような表現……。
実際にどうだったのかは置いといて、久保美津雄は退学したのは諸岡先生の所為だ、と捉えていたのだろう。
それ故に殺害に至ったのだろうか……。
道を塞ぐシャドウたちを排除しながら、そのまま一気にそのフロアを駆け抜けたのだった。

◇◇◇◇◇

『おはよう

ゆうべは よく ねむってた みたいね

パトカーの おとが あんなに すごかったのに

きづかないで ねてるんだから』

階段を登ると、再びメッセージウインドウが現れる。

よく分からないが、誰かの台詞であるらしい。

内容から察するに、母親とかだろうか。

先程の退学の時の事を考えると、これも久保美津雄が捉えていた“現実”の何処かを現しているのだろう。

『きつと おおきな じけんね……あれは

アーケードのCAFÉで コーヒー かってきて

おかねは たてかえて おいてね』

事件……それはやはり山野アナや小西先輩の事件だろうか。

もしかしたら、諸岡先生の事件の事かもしれないが。

『きいた？

おんなのこが ころされたんだって

ぶつそうに なったわね

あんしんして であるけないわ……

きをつけてね

あまり おそくならない ようにね』

そこでメツセージウィンドウは消えた。

……女の子が殺されて、か。

と言う事は、先程のは山野アナの事件か小西先輩の事件の時の事を表現しているのだろう。

……しかし奇妙なのは、先程から一切『久保美津雄』の感情が伝わって来なかった事である。

まるでそんな人物などそこには居ないかの様な、第三者が見ている様なそれは、何処か薄ら寒いモノを感じてしまう。

この“迷宮”はある意味『久保美津雄』の心その物である筈なのに、肝心の『久保美津雄』が何処にも居ないのだ。

『あれ……？ この先行き止まりになってるよ』

困惑した様なりせの音が響く。

確かに、十字路の様な通路の先は三方向とも壁で囲まれていて、パツと見た所進路が見当たらない。

この“迷宮”はゲームを模しているのだ。

何かしらの条件を満たさないと先に進めない仕掛け、とかはありそうである。

しかし、先の二フロアに関しては見落としたであろうモノは無さそうなのだが……。

一先ず、りせにこのフロアがこのエリアだけなのか確かめて貰う。

『えっと……この階層自体は結構広いみたい』

ふむ……。

取り敢えず何か仕掛けが無いか、調べるしかないか。

ゲームではよくある様な危険なトラップを警戒しつつ、取り敢えず十字路の右手奥の壁際、そこにあるドット調のマーライオンの様なオブジェとそこから流れ落ちる水によって作られた泉を調べ様と、オブジェに手を触れた瞬間。

一瞬の浮遊感の後に、先程とは全く別の場所に居た。

振り返ってもそこには壁しか無く、花村達の姿は見えない。

『先輩！ 大丈夫!?』

りせの焦った様な声に、大丈夫だと返した。

困惑はあるものの、外傷の類いは無い。

どうやら何かしらの仕掛けが作動し、分断されてしまった様だ。

背後の壁に手を当てても、何の変化も無い。

一方通行なのだろう。

辺りを見回してみると、どうやらこの場所も先程の十字路の様な構造であるらしい。

違うのは、階段であった場所はただの壁であると言う事だろうか。

追い掛けてきた花村達と合流し、そのまま先に進む。

どうやら通路奥にあるマールライオン風のオブジェの内の幾つかが所謂ワープ装置の役割を果たしている様だ。

最初のワープは面食らってしまったが、法則を理解すればどうと言う事も無い。

強いて言えばワープ先でシャドウの強襲を受ける事を警戒しないといけないのが少々疲れる程度だろうか。

幾度かのワープを繰り返して行くと、十字路とは違う通路に移した。

通路の先にはこれ見よがしに扉がある。

『あの扉の向こうにはシャドウがいるよ！ 気を付けて！』

半ば予測していたその情報に、一つ溜め息を吐いて剣を握る手に力を籠める。

そして、皆の準備が整っている事を確認してから、一気に扉を開け放って部屋の中へと雪崩れ込んだ。

部屋の中で待ち構えていたのは。

既に幾度か戦った、緑の服に身を包んだデフォルメされたキューピット……《恋愛》の『盲愛のクピド』が二体に、黒く光るカンテラを掴んだ白亜の鴉……《隠者》の『アメンティレイヴン』が四体に、ボロ布が垂れ下がった冠の中に浮かぶ書物……《女教皇》の『偽りの聖典』が二体。

それと初見のシャドウである、中空に浮かぶ台座に座した修道女……《女教皇》の『導きのマリア』が二体だった。

取り敢えず数が多い『アメンティレイヴン』を自分が相手する事に

し、「残りは任せた」と合図を送ると、了解と言う返事の代わりに、花村はクルクルツと手にした短刀を手の中で取り回す。

『アメンティレイヴン』は電撃が弱点だ。

一気に片を付けるべく、高火力の電撃魔法を得意とする《皇帝》アルカナの『トート』へと切り換える。

「来い、トート！」

書物を抱えた狒狒の様な姿をしたトートは、元々の魔力の高さに加えて電撃属性の攻撃を強化する能力を備えている。

更に、万が一電撃を反射されても無効化する事が可能だ。

トートが持っている本を掲げると、《マハジオンガ》が白い閃光の奔流となって『アメンティレイヴン』達を呑み込み、跡形もなく消し去った。

更に、偶々雷撃が蹂躪した範囲に居た一体の『導きのマリア』の姿をも溶かす。

『あ、『導きのマリア』の弱点は電撃みたいだね！

先輩ナイス！』

「っしやあー！ ならもう一体は俺が片付けるっス！」

りせの解析を聞いた異くんがそう叫び、電撃を纏ったタケミカヅチの拳が、一気呵成に残った『導きのマリア』に叩き付けられ、『導きのマリア』は何も出来ないまま消滅した。

厄介な《マカラカーン》を使われる前に、と天城さんとクマと里中さんの三人に袋叩きにされた『偽りの聖典』は弱点属性を続け様に突かれて消滅し、『盲愛のクピド』達は放った《ポイズンアロー》ごとジライヤの《マハガルーラ》に吹き飛ばされて行く。

シャドウを殲滅し終えて部屋の奥にあった扉を開けると、そこには上の階へと続く階段があったのだった。



階段を登ると、フロアの構造自体は先程の階の様な変則的なモノではなく、一階・二階と似た様な感じであつたが、辺りの雰囲気は少々変化していた。

茶色系統を主としたブロックで壁などが構成されていた先程迄の階層とは違い、薄暗い緑色系統で周囲が構成されている。

そしてやはり、階段を登るとほぼ同時に眼前にメッセージウインドウが出現した。

【じよしアナが あらわれた！】

まるでモンスターが出現したかの様なその演出に、ゲーム画面そのままの様な【たたかう】・【にげる】と言つた行動を選択するコマンドが表示され、直ぐ様【たたかう】が選択される。

【ミツオの こうげき！】

バシユツと言う音の演出がなされ、一瞬メッセージウインドウが揺れた。

そして気の抜ける様な電子音と共に【じよしアナを たおした】と文字が点滅する。

そしてファンファーレが鳴り響いた。

【ミツオは レベルアップした！】

たのしさが 4 アップした！

むなしさが 1 アップした！】

ゲームによくあるレベルアップ時の演出が終わつたかと思うと、メッセージウインドウは唐突に消える。

辺りには静寂だけが残つた。

『今の……どう言う事？』

久保美津雄は、【犯人】じゃないんじゃ……』

まるで自らが山野アナを殺害したのだとでも言いた気なその演出に、皆が戸惑っている。

確かに今の字面だけを見れば、久保美津雄が山野アナの殺害犯に見えるだろう。

しかし。

「まだ確かな事は言えないが……、ヤツが【犯人】だとは思えない。

さっきの……何か変だとは感じなかったか？」

「変？ クマにはゼーんぜん分かんなかったクマ！」

何故かクマは胸を張ってそんな事を宣った。

そんなクマの様子に、少し肩の力が抜ける。

「いや、な……。」

私の気の所為かもしれないが、そもそも「攻撃」と言うのがおかしいんだ」

何故なら、「犯人」は被害者に直接手を下した訳では無い。

テレビに落とすただけである。

その行為を「攻撃」と表現したのかもしれないが……。

しかし何故、山野アナを殺害したかの様な表現をしたのだろう。

その意義も理由も、皆目見当がつかない。

全く読めない『久保美津雄』の「心」こそが、ある意味、この「迷宮」で一番恐ろしいモノなのではないだろうか……。



行く手を阻むシャドウ達を退けて新たな階層に到達すると、再びメッセージウィンドウが現れた。

先程と同じく、「したいはっけんしゃ」が現れたのだと演出する。

そして全く同様に「たたかう」が選択され、「したいはっけんしゃ」が倒されたと言う演出の後に、レベルアップで「かなしき」と「むなしき」のステータス上昇を伝えてメッセージウィンドウは消滅した。

先程も気になったのだが、上がったと表示されたステータスが「虚しさ」なのである。

しかも、先程は1だった上昇率が今回は8も上がるなどと、かなりアップしているのだ。

そして、さっきは「楽しさ」だったのが今回は「悲しさ」になっている。

何故虚しさなのか……。

……そして、もう一つ気になっているのが、『じよしアナ』も『したいはっけんしゃ』も、個人を指している訳では無い表現だと言う事だ。それは『誰でも良かった』という意識の表れなのかもしれない。だけど、別の解釈をする事も出来るのではないだろうか。

そう、例えば。

そもそも久保美津雄は彼女らの顔や名前すら知らず、ただ『女子アナ』・『死体発見者』と言う伝聞情報しか知らない……直接会った事など無いからだ、とか。

その場合、先程の訳の分からない内容は、単に久保美津雄の『妄想』であると言う事になる。

『妄想』の中で、『顔も知らない会った事も無い人間を殺す、か……』。

……良い趣味とは言えないが、まあ考えるだけなら個々人の自由ではあるし、そこをとやかく言う必要は無い。

もしあれらが彼の『妄想』であったのなら、『虚しい』だの何だのとあつた理由もある程度の推測が出来る。

集めた断片的な情報からでも、久保美津雄の対人関係が壊滅的な状態である事は容易に伺う事が出来た。

その原因の多くは彼自身に由来しているのであろうが、原因が何処にあるにせよ、久保美津雄が鬱屈した感情を懐き易い状況であつたのは確かだろう。

そんな中久保美津雄は、最初は憂さ晴らしか何かで、『妄想』の中で他者を痛め付けていたのではないだろうか。

憂さ晴らしなのだから、例え『妄想』の内容がそんなものであつても、最初の内はスッキリしたり楽しく感じるのも理解出来ない訳では無い。

しかし、所詮は『妄想』。

何れ程『妄想』に逃避した所で、久保美津雄の現実が変わる訳では無い。

だから、『虚しさ』を覚えたのでは無いだろうか。

……まあこれは所詮、断片的な情報を無理矢理繋ぎ合わせた憶測に

た。

……よく考えてみるまでもなく、久保美津雄は少なくとも諸岡先生を殺害している。

そんな久保美津雄の精神状態が、異常な状態にある可能性は高いのだろう。

あの否定は、何に対する否定だったのか……。

それは久保美津雄では無い自分には分かり様も無い事柄である。

気を取り直して道を進んでいくと、不意にりせのナビがシャドウの接近を告げた。

こちらに近付いてきたシャドウは八体。

岩塊に仮面を貼り付けた様な『苦悩のバザルド』が三体。

ペアのダンサーの様でありながらその頭は一つしか無い『ライフダンサー』が二体。

十何匹ものピンク色の蝶で体を構成された『浮気のパピヨン』が三
体。

どれも《恋愛》アルカナに属するシャドウだ。

バザルドには物理攻撃が通り辛いのが少々厄介であるが、然程脅威とはならないシャドウたちである。

「ペルクマーっ！」

今回先手を取ったのはクマだ。

クマは『浮気のパピヨン』達をピンポイントに狙って極寒の空間を作り出した。

身体を構成する蝶が冷気によって力尽きたかの様に地に落ちたパピオン達は、軽く武器で攻撃するだけで簡単に消えていく。

『ライフダンサー』が放った烈風は《隠者》の『クラマテング』に全て吸収され、花村達の元へは届かない。

それ所か、カウンタアアタックとして放たれたコノハナサクヤの『マハラギオン』で、『ライフダンサー』達は消し炭にされる。

残った『苦悩のバザルド』達は、タケミカツチが《マハジオンガ》で弱点を突く事でダウンを取った所を、『モト』の《マハムドオン》で一気に片を付けたのだった。

全滅させた所で一息吐こうとしたその時。
りせが焦った様に新手の出現を伝えてくる。

『大変！ 新手が合流しようとしてる』

その警告の直後、複数のシャドウに背後から強襲された。

頭から桃色の花を咲かせた嬰兒の様な《女帝》の『貪欲のバンビーノ』と、黄金に輝く甲虫の様な《皇帝》の『剛殺蟲』、そして、青い制服に身を包んだ太った警官の様な《法王》の『偏執のファズ』に周囲を取り囲まれる。

内訳としては、バンビーノが二体、剛殺蟲が二体、ファズが二体だ。剛殺蟲は弱点である閻属性と耐性は無い物理攻撃しか通らないのが厄介である。

《チャージ》で既に力を溜めていた『剛殺蟲』がその鋭く立派な角で繰り出してきた《剛殺斬》を、慌てずモトから切り換えた《戦車》の『キンキ』が去なしつつ受け止めた。

物理を完全に無効化するキンキは、難なく『剛殺蟲』の角を鷲掴み、そしてそれをハンマー投げの要領で振り回して、もう一体の『剛殺蟲』へと叩き付ける。

硬質なモノがぶつかり合う音が響き、その衝撃からか『剛殺蟲』たちはぐったりと倒れ、そこを花村と里中さんに攻撃されて、『剛殺蟲』は溶ける様に消滅した。

『偏執のファズ』は異くんに、『貪欲のバンビーノ』はクマと天城さんによって倒された事により、通路は再び静寂に支配される。

怪我をしたり疲労が見え始めている様子は無いので、小部屋で一時休憩を取った後、再び探索を開始したのであった。



『おはよう』

ゆうべは よく

おんなのこが ころされたんだって』

『アーケードのおとが あんなに すごかったのに
パトカーのCAFÉで コーヒー かってきて』

『おかねは あんしんして たてかえて

きづかないで であるけないわ…』

『きいた？ おはよう

ぶっそうに おそくならない ようにね』

『あんしんして きをつけてね』

新たな階に到達するなりメッセージウィンドウが出現した。

だが、最早文字の大きさすらも不整で意味を全く成していない滅茶苦茶な内容のメッセージが、壊れかけのラジオが垂れ流す様な雑音と共に、凄まじい速さで点滅しながら次々に表示されてゆく。

そして、ブツツという急にテレビの電源を落としたかの様な音と共にメッセージウィンドウは消滅した。

「もしかして、ここにいるクボミツオの不安定な心が反映されてるクマか……?」

「支離滅裂ってか……、イツちやった感じ?」

狂気を滲ませたメッセージを、うげっと引いた顔でクマと里中さんはそう評する。

それに同意する様に皆が頷いた。

何にせよマトモな状態で無いのは確かだろう。

そんな状態の者が何を仕掛けてくるか分からない。

一層気を引き締めて探索を開始した。

緑色基調だった先程までの階層とは違い、この階層は、地下を思わせる様な暗い青色を基調としている。

足元を照らすのは、作り物めいた松明の様な光源だけだ。

フロアを探索していくと、如何にも何か有りそうな感じの、作り物めいた安っぽさの中でも辛うじて重厚さを感じさせる扉に行き当たった。

『何だろう……、シャドウが中に居るみたいだけど、結構強そうな感じがする』

「中にはそのシャドウだけなのか？」

りせに訊ねると、りせは中を探るのに集中しているのか、暫し沈黙した。

『えっと、ちよつと待って……』

……ううん、中に何かの反応があるよ。

シャドウはそれを守っているみたい』

態々シャドウに守らせてる位だ。

きつとこの先で何かしら役に立つものなのだろう。

ゲーム的に言えば、キーアイテムを守る番人代わりの中ボス、と言った所なのだろうか。

「成る程な……」。

何を守っているのかは分からないが、手に入れておくに越した事は無さそうだ」

皆はどう思う？と訊ねてみた所、全員がそのアイテムを手に入れる事に賛成した。

そうと決まれば話は早い。

準備を整えてから、一気に扉を開け放った。

中で待ち構えていたのは、戦隊モノの特撮によくありそうな感じの人型ロボットの様な大型のシャドウだ。

子供の玩具売り場に売られてそうな外観のそれには、肩の部分が右は『正』左は『義』とペイントされている。

そのロボットの身の丈程もある巨大な剣を片手に、こちらを威圧する様に見下ろしていた。

『ソイツは《正義》アルカナの『逃避の兵』！

光とか闇の属性は効果が無いみたい！』

ある程度以上に強力なシャドウは光や闇属性の即死魔法を無効化する事が多いので、それは想定内である。

『逃避の兵』は侵入者を排除すべく動き出し、その左手を突き出してきて周囲に霧状の何かをバラ撒いた。

『今のは《淀んだ空気》だよ！

即死魔法にかかり易いし状態異常にされ易くなってるから、気を付

けて!』

如何にも物理攻撃でゴリ押ししてきそうな外見なのに、状態異常攻撃を絡めてくる辺り、中々一筋縄ではいかない相手なのだろう。

『逃避の兵』は手にした剣を軽く振るって力を溜めた。

《チャージ》を使った……と言う事は、物理攻撃が主体である可能性は高い。

ペルソナを《魔術師》の『ランダ』へと切り換える。

「ランダ、《ボディーバリアー》!」

召喚するだけで敵からのヘイトを集めるランダだが、範囲攻撃を使われる事を警戒して、《ボディーバリアー》——他者のダメージの肩代わりをするスキルを行使させる。

その直後。

『逃避の兵』は手にした剣を大きく振るって、此方に斬りかかってきた。

剣が薙いだ軌道にそって、周囲が切り裂かれていく。

しかし、此方を切り刻む筈だったその攻撃は、金属同士を叩き付けたかの様な甲高い音と共に、全て『逃避の兵』自身へと跳ね返った。

ランダは、物理攻撃を全て相手へと跳ね返す。

『逃避の兵』の攻撃——《マインドスライス》が此方への状態異常付与の効果も秘めていようと、そもそも当たらないのならば意味はない。

跳ね返されたダメージは、ランダが肩代わりしていた皆への分も合わさってかなりのモノになった事だろう。

だがしかし、『逃避の兵』は踏鞴を踏むかの様な仕草をしただけで、あまりダメージとして響いている様には見えなかった。

『物理攻撃には耐性があるみたい!』

他の属性で攻撃して!』

りせが素早く分析をした結果に、思わず舌打ちをしそうになった。

物理が効き辛いと言うのも中々厄介である。

耐性が無いのなら、全部ランダで跳ね返してやればその内自滅するかと思ったのだが……。

「よし、これならぞーだ！」

ダンツと勢いよく踏み込んだトモエが、手にした諸刃の薙刀に氷を纏わせて切り込む。

『逃避の兵』の左腕を半分程損壊させたその一撃によって、『逃避の兵』の左腕全体が氷に包まれた。

『氷結は効くみたい！』

物理攻撃の分威力は落ちちやうけど、それならまだダメージは通り易いよ！

千枝先輩、ナイス！』

この手の物理攻撃に耐性がある敵には分が悪い里中さんと異くんだが、属性が付与された物理攻撃を仕掛ければ、ダメージの減衰は緩和出来る様である。

それならば、と異くんも《震電碎》で『逃避の兵』の左腕を完全に破壊した。

反撃の様に『逃避の兵』が仕掛けてきた《利剣乱舞》は再びランダによって跳ね返され、その衝撃で『逃避の兵』は横倒しに倒れる。

「鳴上、チャンスだぜ！」

花村に頷き返し、一気に畳み掛けるべくランダから《永劫》の『ケツアルカトル』へと切り換えた。

ジライヤとケツアルカトルが放った《ガルダイン》はお互いを呑み込んで更に強大な竜巻と化して、『逃避の兵』を空高く巻き上げてその身体を破壊する。

「クマさん、私たちもやるよ！」

「了解クマー！」

コノハナサクヤの《アギダイン》が竜巻に弄ばれている『逃避の兵』の身体の一部が溶け始める程の温度で熱し、直後にキントキドウジの《ブフダイン》がそれを一気に冷却した。

竜巻が消え去り、床に叩き付けられる様に落下した『逃避の兵』は、その衝撃で身体のおちこちに罅を走らせる。

関節の調子が狂ったのか、金属が激しく擦り合わされる様な音を響かせるその動きはぎこちない。

手にした剣を鞭の様にしならせて《クレイジーチェーン》を仕掛けてくるが、その動きに精彩は無く、難なく全員が回避する。

「燃やし尽くせ、スザク！」

止めに《節制》の『スザク』が放った《核熱発破》によって全身を砕かれた『逃避の兵』は、悲鳴と共に塵と化して消えたのだった。

『逃避の兵』を倒すと、壁の一部が動いて如何にも宝箱が姿を現す。

注意しつつそれを開けると、中には拳程の大きさのガラス玉の様な真つ黒な何かが入っていた。

軽く叩いたりしてみても、特には何も起きない。

それに僅かに拍子抜けしつつも、この先で必要になるのかもしれない、とそれを無くさない様に大切に仕舞った。



『わあっはっはっはっ！』

くさった ミカンの ぶんざいで

ワシに はむかうとは いい ときようだ！』

新たな階に辿り着くと、まるで二層目と同じ様な台詞が流れ、【諸岡が あらわれた！】と表示される。

今まで、古い時代のゲームの様に片仮名と平仮名でしか表現されてこなかったのに、諸岡先生の名前だけは漢字でハッキリと表示された。

そして。

【どうする？】と出てきた選択肢が、先程までの【たたかう】・【にげる】ではなく、今回は【ころす】・【にげる】であった。

【たたかう】を即決していた【じよしアナ】と【したいはっけんしゃ】の時とは違い、カーソルは何度も何度も……まるで久保美津雄の迷いを示す様に【ころす】と【にげる】を忙しなく行き来し……。

——終には【ころす】を選択した。

【ミツオの こうげき！】

何かを鈍器で全力で殴った様な音と共にメッセージウインドウが大きく揺れ、画面が真っ赤に染まる。

【諸岡を 殺した】

おどろおどろしさすら感じる真っ赤な画面の中に、真っ黒に染まった文字が表示された。

【ミツオは レベルアップした！】

レベルアップで流れる音も、音割れしているかの様だ。

【ちゅうもくドが 16 アップシタ！】

わダイせいガ 17 あっぷシタ！

かっこヨさが 3 アップシタ！】

ステータスアップを知らせる文字は、フォントが不整で大きさもバラバラである。

メッセージウインドウが消えると同時に不快な音は止み、辺りは静けさに包まれた。

「注目度とか、話題性とか、意味分かんない！

人を殺しといて、格好よさとか、ふざけてる!!」

許せないと憤る里中さんに同調する様に花村達も頷く。

……久保美津雄の真意が何処にあり、その行動の理由が何であったのかは分からないが。

少なくとも彼が諸岡先生を殺害したのは揺るぎ無い事実なのだろう。

……。

何れにせよ、久保美津雄迄の居場所まではそう遠くは無い筈だ。

先を急いでいると、またもやシャドウが行く手を阻む。

まるで縫いぐるみの様な『お守りレキシ』が四体。

特撮に出てきそうなファイターの様な『獣神のギガス』が四体。

真紅の車体を持つ戦車の様な『真紅の砲座』が四体。

物理攻撃が効き辛い『真紅の砲座』と、物理攻撃や即死攻撃以外はダメージが通り辛い上に《テトラカーン》や《マカラカーン》を使ってくる『お守りレキシ』が同時にこうも大量に出現されるのは中々

厄介だ。

早速『お守りレキシシー』は『獣神のギガス』に《マカラカーン》を使用する。

これで《マハブフーラ》などで『獣神のギガス』の弱点である氷結属性を一気に突いて殲滅する方法は取れなくなった。

「来い、デカラビア！」

《愚者》の『デカラビア』を召喚し、《磨耗の魔法陣》でシャドウ全体の麻痺を狙う。

取り逃しは出たが、『獣神のギガス』は四体とも、『真紅の砲座』と『お守りレキシシー』も半分は麻痺状態になった。

そして素早くデカラビアを《恋愛》の『ラファエル』に切り換え、《空間殺法》で一気に纏めて薙ぎ払う。

『ラファエル』は状態異常の敵に対してはより致命傷を与え易くなる特徴がある。

故にまだ倒し切れはしなかったが『獣神のギガス』達はもう虫の息であり、麻痺していた『真紅の砲座』は中破した様な状態になった。

「いっくよー、トモエー！」

掛け声と共にトモエと駆け出した里中さんは『獣神のギガス』の一体に飛び膝蹴りを決め、トモエは一気に二体を切り裂く。

残った『獣神のギガス』を花村とジライヤが背後からの一撃で仕留め、『お守りレキシシー』を《マハブフーラ》と《マハラギオン》が呑み込んで消滅させた。

残ったのは『真紅の砲座』が四体だけだ。

しかも、二体は中破状態である。

『真紅の砲座』が苦し紛れに撃ってきた《アギダイン》は《正義》の『ソロネ』に吸収され、砲撃の隙を一気に突かれて全員に袋叩きにされた『真紅の砲座』たちもまた、消滅したのであった。



『おお ゆうしゃ ミツオ

みごとであった！』

『そなたの』

『そそソSoそなたのNoの……』

『のnoののnoののnoのnoオおののオのおのおのおの
Noおオオのおのおおのおおのおおオおぬおぬnuぬのおおぬお
ヌオオヌヌぬオオオ』

『ぬ??ぬ??ぬ??おメめオぬコおるめぬめるおめお?お?お?メめお
?おめ?こ?お?る?ろ?こお??め??おこ?ろ?おおすRoroco
スおすおお』

再び出現したメツセージウィンドウは、始めからノイズが走っているかの様に画面が滅茶苦茶な状態であった。

同時に辺りに響き渡る黒板を爪で引っ掻く様な不快な音を数十倍酷くした様な雑音に、耐えきれず思わず耳を塞ぐ。

横目で見やると、花村たちも顔を顰めながら耳を押さえていた。

意味を成す成さない所の問題では無い程文字化けしているかの様なメツセージは、既に『久保美津雄』が正常な精神状態では無い事がありありと伝えてくる。

最後にはメツセージウィンドウはバグが生じたのか、砕け散る様に消滅した。

『……先輩、近いよ』

久保美津雄が居るのは一つ上の階だとりせは告げる。

泥の様に湧き出てくるシャドウを蹴散らしつつフロアを一気に走破して辿り着いた階段の前には、手首がそのまま身体になったかの様な姿をした真っ黒なシャドウが待ち構えていた。

『ソイツは『キリングハンド』！』

アルカナは『魔術師』だよ！

光属性とか闇属性は効かないみたい！』

りせがそう分析するのとはほぼ同時に、『キリングハンド』は指を鳴ら

す様な仕草をする。

すると、泥が染み出てくるかのように新手のシャドウが現れた。

こちらは『キリングハンド』とは色違いの白い手のシャドウだ。

「来い！ カーリー！」

《剛毅》の『カーリー』を呼び出し、《空間殺法》で一気に二体纏めて切り刻む。

物理攻撃の威力を強化する『カーリー』の特性も相俟って、『キリングハンド』は小指と薬指にあたる部分を半ばから切断されて転倒した。

しかし、物理攻撃に耐性があつたらしい白い手のシャドウ——『ゴッドハンド』が指を鳴らすと、たちまち『キリングハンド』の傷は再生される。

『回復魔法を持つてるみたい！』

ソイツを何とかしないと、厄介だよ！』

『キリングハンド』が再び指を鳴らして『ゴッドハンド』をもう一体呼び出す。

まさか無限に呼ぶ気なのだろうか。

それは厄介だ。

兎も角、絶え間無く攻撃を仕掛けて回復魔法を使わせたりや新手を召喚させない様にしなくてはならない。

物理耐性の無い『キリングハンド』を里中さんと異くんが、残りは『ゴッドハンド』を暗黙の内に引き受けた。

「啞え、バフォメット！」

《道化師》の『バフォメット』を呼び出し、《デビルスマイル》で相手の動きを制限させる事を試みる。

バフォメットの怖気立つ様な声の無い嘲笑は、『キリングハンド』には効かなかつた様だが『ゴッドハンド』には効果を示し、『ゴッドハンド』は怯えた様に身を縮こまらせた。

ここで《亡者の嘆き》で追撃して仕留めれば直ぐに片が付くが、『キリングハンド』が残っている以上は再び召喚されるだけなので、倒すのなら三体合わせてほぼ同時に倒さねばならない。

《デスバウンド》で攻撃しようとした『キリングハンド』は、浮かび上がった瞬間をトモエとタケミカツチの双方に叩き落とされ床に倒れ伏す。

この期を逃さず《女帝》の『スカデイ』へと切り換えた。

「花村、クマー！」

同時に仕掛ける！ 合わせてくれ！」

《コンセントレイト》で魔法の威力を高め、クマと花村に合図を送ってからそれを《ブフダイ》として解き放つ。

キントキドウジの放った《マハブフーラ》とジライヤの放った《マハガルーラ》も合わさった暴風雪は、一気に『ゴッドハンド』を含む三体ともを呑み込んだ。

弱点を突かれた『ゴッドハンド』は成す術も無く消滅し、『キリングハンド』は凍り付いて動かない。

そこを袋叩きにされた『キリングハンド』は、『ゴッドハンド』を新たに召喚する隙も無く塵へと溶けていったのであった。



階段を登るとメッセージウインドウではなく、見上げる程に大きな扉が出迎えた。

『この先に居るよ。気を付けて！』

りせのナビに頷いて、扉を開けようと手をかけるが。

……？ 開かない。

と言うか、扉に触れる前に何か硬い壁にでも触れている様な感じだ。

何かに“封印”されている感じ、とでも言えば良いのだろうか。

如何にもゲームチックな……と思いつつ、もしやと思って先程手に入れたあの謎のガラス玉を取り出す。

すると、黒いガラス玉から、黒い靄のような何かが滲み出てきて、それが扉を浸食した。

靄が完全に抜けきってガラス玉が透明になるのとはほぼ同時に、浸食が限界に達した扉は独りでに開く。

扉の向こうに広がっていたのは古代ローマにあったコロセウムによく似た……より正確にはゲームにありがちな闘技場を模したかのような空間であった。

その中央辺りでは、『久保美津雄』が何事かを喚き散らす久保美津雄と対峙していた。

……？ 何やら様子が少しおかしい。

早速取り押さえようとして駆け出そうとする巽くんを抑え、少し久保美津雄の様子を観察する。

「どいつもこいつも、気に食わないんだよ……。」

だからやってやったんだ、このオレが！

どうだ、何とか言えよ!!」

耳障りな声で喚き散らす久保美津雄に向き合っているのは、虚ろな瞳が金色に染まった……『シャドウ』だ。

『久保美津雄』は地団駄踏むかの様に激しく身振り手振りを交えて喚く久保美津雄を、剩りにも空虚な瞳で何も言わずに見詰めていた。

冷めているとか、そんな次元ではない。

何もかもがどうでもよく、自分自身の言葉を塵と同価値程度にしか感じていない事を、その空虚な瞳は物語っていた。

「たった一人じゃ誰も俺を見ようとしなない。

だから三人目をやってやったんだ！

オレが、アイツを殺してやったんだっ!!」

こちらが見ている事にも気付かぬ程に激昂した久保美津雄は、そう主張するが。

『久保美津雄』はそんな自身に何の興味も無いのか、身動き一つせず、ただ虚ろな瞳で虚空を見詰めている。

三人を殺した、と主張しているがそれはただの妄想でしかない。

実際に殺した、……殺してしまったのは諸岡先生だけだ。

……久保美津雄の言葉は虚飾と妄想だらけである。
だから、なのだろうか。

彼の『シャドウ』が何の反応も返さないのは。

「な、なんで黙ってんだよ……」

まるで壁にでも話し掛け続けているかの様に無反応な様子に、喚き
続けていた久保美津雄も気味が悪そうにぼやく。

『何も……感じないから……』

漸く久保美津雄の言葉に反応した『久保美津雄』の答えは、それだ
けだった。

蚊の鳴く音すら相対的に騒音に聞こえる程に、生気も抑揚も無く消
え入りそうなその声は、聞いているだけのこちらの背筋を何故かゾク
リと震わせる。

そしてまた、『久保美津雄』は貝の様に口を閉ざした。

『久保美津雄』の言葉に過剰に反応して逆上した久保美津雄は、最早聞
き取るのが困難な程に罵声を撒き散らし始める。

「な、何コレ？……どつちがシャドウ？」

まるで久保美津雄自身の方が『シャドウ』の様に見えてくるその様
子に、里中さんは困惑した様に声を上げた。

しかし、『シャドウ』とは本人が抑圧している側面であると同時に、
目を反らしたい己でもある。

虚勢を張り続け自ら望んで虚構に溺れている久保美津雄が目を反
らしたかったのは、『現実』の……虚構を剥ぎ取られた自分自身なの
だろう。

そう考えれば、久保美津雄の『シャドウ』がこれである事には何の
不思議も無い。

自らの目を覆う虚飾を剥ぎ取った久保美津雄の姿が、この『シャド
ウ』なのだろうから。

『僕には……何も無い……。何も、出来ない……』

僕は、無だ……』

生気を欠片も感じ取れない程に今にも消えそうな声で、ボソボソと
『久保美津雄』は久保美津雄に語る。

『そして……。君は、僕だ……。』

初めて、『久保美津雄』は久保美津雄をその瞳に映す。

しかしその瞳は何の感情も映さず、虚ろなままだ。

『久保美津雄』の言葉に、久保美津雄は目に見えて狼狽え、それを誤魔化そうとしているかの様に吠える。

「何だよ……。何だよ、それッ！」

オレは……。オレは無なんかじゃ……。」

「駄目、このままじゃ……。」

『シャドウ』を否定しようとした久保美津雄の行動に、天城さんが思わず声を上げると、それに反応したのかここにきてやっと久保美津雄はこちらの存在を認めた。

「な、何なんだお前ら!？」

どうやってここへ……。くっそ、誰なんだよ!

こんなところで何やってんだよ!？」

訳も分ならず混乱する久保美津雄に、巽くんが怒声を上げる。

「るせえ! テメエを追って来たに決まってるだろが!」

「久保美津雄。」

「あなたが諸岡先生を殺害した犯人で、間違いないか?」

一応念の為にそう尋ねると、混乱していた久保美津雄は、何故か嬉しそうにやや引き攣った様な笑みを浮かべて壊れた様に笑い声を上げた。

「は、はは、あはははははは!!」

そうだよ、そうに決まってるだろ!

オレがああクソ野郎をやったんだよ!!

アイツだけじゃないぜ!

前の二人も殺してやった!

そうだ、俺は無なんかじゃない!」

そうだ、そうだ、とまるで自分に暗示をかける様に呟き、久保美津雄は虚飾を誇る。

だがその瞳は何処か虚ろであり、目の前に居る筈のこちらを映してはいない。

「お前らもだ……。」

こんな所まで追いかけて来やがって！

お前らも殺してやる！」

こちらに指を突き付けそう吠えるが、よく見ると僅かにその指先は揺れている。

そして、久保美津雄は再び沈黙に沈んだ『久保美津雄』へと向き直つて唾を吐きかけた。

「ニセモノが何言おうが知るかよ！

ははは、そうだ、お前なんか関係ない！

俺の前から消え失せろツ！」

『久保美津雄』は黙つたままその否定の言葉を聞いている。

俯きがちな虚ろな瞳には、自身を否定する己の姿すら映つてはいない。

反応が無い『久保美津雄』から目を背ける様に久保美津雄は再びこちらに視線を向け、狂った様に吠え猛つた。

「みんな殺してやる！」

まとめて殺してやる！

オレは出来る……。」

オレは、出来るんだからな！」

そんな宣言をする久保美津雄に、漸く『久保美津雄』は顔を上げて久保美津雄をその瞳に映す。

『認めないんだね、僕を……。』

ボソつと呟かれた直後、久保美津雄は突如脱力したかの様にその場に尻餅をついた。

「うっ……。なんだ、これ……。」

うわあああつ!!」

『シャドウ』の暴走が始まり、『久保美津雄』が黒い泥に覆われて一気に膨張する。

その衝撃に久保美津雄は弾きとばされ、壁際まで転がって気絶し

た。

胸郭はちゃんと動いているので生きてはいるのだろう。

今はそんな事よりも、目の前の『シャドウ』の方が優先だ。

『僕は……影……』

泥から出てきたのは、まるで頭が極度に肥大化した嬰兒の様な姿の『シャドウ』であった。

宙に浮かぶ『シャドウ』の頭の周りには、文字化けした文字の様な何かが浮かんでいる。

『おいでよ。』

……空っぽを、終わりにしてあげる』

ボソボソとそう言った直後、『シャドウ』は金切り声の様な叫び声を上げた。

途端にその姿をブロックの様な塊が覆い隠していく。

——邪魔な奴は殺す。

——目障りな奴は殺す。

——気に食わない奴は殺す

——みんな見てくれ！

ブロックが組合わさって形作られたのは、まるで粗いドットの絵をブロックで表現したかの様なゲームの勇者を模した人形であった。

右手にブロックで出来た剣を持ち、それを高らかに翳して宣言する。

——ボクが“みちびかれしゆうしや”ミツオだ!!





フワフワと何処か夢を見ている感じだった。

薄い意識の片隅で、何と無く身体が動いているのを感じる。

何でだろう。

そう疑問には思ったが、思考が端から溶けていく様に、考えは纏まらなかつた。

薄膜に包まれたかのように薄ぼんやりとした世界の中で。

不意に、ドサツと。

重い何かが倒れる様な音がして、それを契機に緩やかに意識が浮上する。

……刀を握る手は何故か生温く、そして何かに濡れていた。

濃厚で何処か生々しい鉄臭さに噎せ返りそうになる。

起きた直後の夢現の様な状態で一步踏み出した。

すると、生温い液体に濡れている足が何かに当たる。

……何だろう？

ぼんやりとしたまま、ふと視線を下ろした其処には。

……花村が血溜まりの中に倒れ臥していた。

それを認識した瞬間。

頭を鈍器で殴られたかのような衝撃を感じ、一気に夢から醒める。

——これは、何だ？

何だこれは。

どうして花村が。

倒れてる？どうして？

花村が。

花村、どうして。

血。

血が。

……血？

混乱したまま己の掌に目を落とした。

そして、息を呑み、思わず固く握り締めていた刀を取り落とす。

手は、べつとりと血に塗れていて。

そして、高い音を立てて地面に落ちた刀は。

血と。

僅かな肉片と。

それらをテカテカと光らせる何か——恐らくは脂肪。

それらが、刀身を汚していた。

意味が分からない。

いや、状況証拠なら沢山ある。

血溜まりに倒れる花村。

怪我は何処にも無いのに、全身が血塗れの自分。

全身を何か……鋭利な刃物で斬り刻まれた花村。

何かを……シャドウ以外の「何か」を斬った跡が色濃く残る、自分

の刀。

そして。

つい先程意識が浮かび上がるまで、何をしていたのかを覚えていな

い自分自身。

ここまで状況証拠が揃っていれば、容易に一つの答えに辿り着け

る。

それでも。

意味が分からなかった。

……正確には、理解したくはなかった。

血溜まりに倒れる花村の横に膝を付く。

ドロリとした血が指先に付着するが、そんな事は構わずに倒れたま

ま全く動かない花村のまだ温かい首筋……頸動脈の位置に手を当て

た。

……本来なら脈拍を感じる筈なのに。

全く感じ取る事が出来なかった。

頸動脈を触知出来る最低の血圧は、60 mmHg。

今の花村には、その血圧すら無い。

俯せに倒れている花村を、ゆっくりと仰向けにした。

目を閉じた花村の顔は、血に塗れていて。

その血を拭った下に見えた肌は、血の気を失ったかの様な色で。

そして。

胸を大きく切り裂いた傷口からは。

押し折られたかの様な胸骨と肋軟骨が見えて。

……傷口から血を溢れさせる塊が……心室の辺りを切り裂かれた

心臓が、見えた。

「は……な……むら……」

話し方を忘れたかの様に、上手く名前を呼べない。

声をかけても花村は。

目を開ける事も無く、身動きする事も無く。

「なあ……花村……起きてくれよ。」

……頼むから。

お願いだから……」

軽く揺すつても、何の反応も返さない。

「いや……だ。」

嘘だろ。

なあ、こんなの、嘘……だよな。

お願いだから、返事をしてくれ……陽介……」

名前で呼んでも。

花村は――

――生き返ったりは、しなかった。

目の前の「現実」に。

言葉にならない悲鳴を上げた。

頭はずっと混乱しっぱなしだ。

どうして、何で、何が、一体。

そんな言葉がグルグルと出口も無いのに頭を支配する。

何で花村が死んだ。

何で花村が殺された。

殺された？

誰に？

誰？

……それは。

目の前の出来事から逃避する為に辺りを見回す。

そして、その行動を直ぐ様後悔した。

倒れていたのは、花村だけじゃ無かった。

里中さんも天城さんも巽くんもクマもりせも。

皆みんな。

血溜まりの中に臥せている。

天城さんに寄り添う様に倒れる里中さんの左足は、下腿三頭筋を半ばで抉ったかの様に切り裂かれ、無理矢理叩き折られた様な跡がある腓骨が見えていた。

里中さんに向かって手を伸ばす様に倒れている天城さんのその右腕は、肘関節の辺りで両断されていた。

何度も何度もそこに何かを叩きつけたかの様に、その断面はぐちゃぐちゃで、潰れた上腕動静脈とズタズタにされた上腕の筋肉がぐつきりと見える。

巽くんには他の皆よりも刀傷が目視で数え切れない程圧倒的に多く、幾度も執拗に切り刻まれた痕があった。

比較的刀傷が少なく外傷もほぼ無いりせの首は、頸動脈が通っている辺りを深く切り裂かれていて。

そこから垂れる様に溢れる血は、もうりせの心臓が動いていない事を示していた。

ほぼ全身をバラバラにされる様にズタズタにされたクマの身体からは血は出ていない。

それでも、りせを守ろうとしていたのか、クマの身体はりせの血の海の中に沈んでいた。

誰も身動き一つしなかった。

圧倒的な静寂の中。

噎せ返る程に濃厚な血の臭いが支配する中。
動くのは、自分ただ独りであった。

「さと……な……か、さん……」

呂律が上手く回らない。

舌が凍り付いているかの様だ。

呼んでも、里中さんは動かない。

誰も動かない。

「……ちえ……」

名前で呼んでも、ピクリとも動かない。

「あまぎ、……さん」

動かない。

「ゆき……」

動かない。

「たつみ……くん」

動かない。

「かんじ」

動かない。

「りせ」

動かない。

「クマ」

動かない。

誰も動かない。

縋る様に声を上げても、誰も、だれも……。

……それは、そうだ。

だって、だって……。

——皆、もう死んでいるのだから。

死んだ者を生き返らせる事は、出来ない。

例えペルソナの力を以てしても、不可能だ。

こんなの、……こんな「現実」。

夢だと、思えたらどんなに良かっただろう。だけど。

手を赤く染め上げる血の感触も、その臭いも。それが『夢』なのでは無いと訴えてくる。

己の五感の全てが、これを『現実』だと訴えていた。

「……こんなの、質の悪い冗談、だよな……」

目の前の全てに耐えきれず、態と明るい声を出す。だがそれは虚しく静寂へと呑み込まれていくだけ。

「なあ、皆……起きてくれよ……」

こんなドツキリとか、趣味が悪過ぎるぞ……。

お願いだから、……嘘だと言ってくれ……」

分かっている。

本当は、本当は、分かっている。

理解したくはなかったけれど。

一体何が起こったのか。

自分が一体何をしてしまったのか。

……分かって、しまった。

花村を、里中さんを、天城さんを、巽くんを、りせを、クマを。

……殺したのは、弄ぶかの様に切り刻んで痛め付けて殺したのは。

——自分だ

——遠い何処かで、何かが割れる様な音が微かに聞こえた様な気がした。



右足に走る激痛で、一気に覚醒した。

気が付くと何故か自分は地面に倒れている。

ここは？ 一体何が？

混乱しつつも咄嗟に自分の手に目をやると。

染み付いた様にべっとり付着していた血は何処にも無い。

まるで幻であったかの様に、何の痕跡も無かった。

「夢」……だったのか……？

いやしかし、あれ程に生々しい感触が……、まだ温かい血が服を濡らしていく感触すらも、「夢」であったと言うのだろうか……？

訳も分からないまま、取り敢えず身体を起こそうとする。

しかし、その途端に右脚に走った耐え難い激痛に再び倒れ込んでしまった。

痛み……？

何故、右足が痛むのだろう。

右足を動かさない様にして、そこに視線を向けると。

凄まじい力で叩き折られたかの様に傷口辺りが変形し、折れた脛骨の骨幹部が皮膚や筋肉を突き破って見えていた。

太めの血管を損傷したのか、吹き出てこそはいないが、傷口から溢れる様に血が滴り落ちている。

一体何故、この様な怪我をしているのか。

前後の記憶が抜け落ちているかの様にハッキリとしない。

ペルソナを召喚しようにも、痛みが酷く集中するのが困難だ。

「おい、鳴上！ しっかりしろ!!」

聞き慣れた声に、痛みを必死に堪えて顔を上げると。

花村が焦った様に駆け寄って来ていた。

「待ってる鳴上。今治してやるからなー」

そう言っ、花村はジライヤを召喚しようとする。

その直後。

ドスツと。

何かが勢いよく突き刺さる様な音が聞こえ、花村は『何が起きたのか分からない』とでも言いたげな表情を浮かべて、血を吐きながら前のめりに此方に倒れてきた。

「おい、花村！ 大丈夫か!?

おい、しつかりしろ!

はなむっ——!!」

こちらに押し掛かってきた花村が身動き一つしない事に困惑と焦りを覚えながら、こちらの顔面に降り注いだ血を拭いっつ花村を揺さぶり起こそうとしたその時。

——花村の背に深々と突き刺さった、巨大な氷の弾丸を目にしてしまふ。

茫然としながら視線を花村が立っていたその背後に向けると。

そこには、久保美津雄の『シャドウ』が、凶悪な笑みを浮かべながら、ブロックの塊の上に浮かんでいた。

——アイツが、花村を……!」

瞬間的に激しい怒りが沸き起こる。

赦せない。

アイツが、あの『シャドウ』が。

花村を、花村を……!」

既に息が無い花村を、そつと横に寝かせて、そつと手で瞼を下ろした。

目を閉じた花村は、まるで眠っているだけにしか見えない。

そして、傍に落ちていた軍刀を支えに立ち上がるようにする。

右足に激痛が走り、思考が飛びそうになるが、そんなモノに構ってなどはいられない。

足の痛みなんかよりも、胸の辺りの痛みの方が遥かに強い。

「久保、美津雄……!!」

既にブロックの勇者の鎧に隠れた『シャドウ』は、耳障りな音を立てながら蠢いている。

楽には、死なせない。

その下らない鎧を、粉々に打ち砕いて。

四肢を潰して、切り刻んで、殺してやる……！

そう気炎を吐いたは良いが、右足が潰されている為、一歩歩こうとしては身体を支えきれず地に倒れた。

立てないのならば、這ってでも食らい付いてやる……！

そう思つて顔を上げると。

『シャドウ』はブロックで出来た手に、里中さんを握っていた。

里中さんは息はある様だが、気を失っているのか、ぐったりとしたまま動かない。

「その手を、離せ……！」

このクソ野郎……！！」

ペルソナを召喚しようとするも。

その度に痛みに邪魔をされてカードを具現化出来ない。

何も出来ない自分に怒りを覚えるが、それでもせめてもの抵抗として全力で声を張り上げた。

だが、そんな言葉を『シャドウ』が斟酌する事などあろう筈もなく。グシャ、と。

水気を含む果物を潰した様な音と共に、『シャドウ』は握っていた里中さんを潰す。

そして、興味が失せたかの様に、里中さんだったモノを地に落とし、それを踏み潰した。

その後も。

自分には何も出来なかった。

天城さんが、『シャドウ』のそのふざけた剣で叩き潰されるのを、ただ見ている事しか出来なかった。

巽くんが、玩具の様な巨大な爆弾に吹き飛ばされるのを、ただ見ている事しか出来なかった。

りせが、生きたまま火に包まれるのを、ただ見ている事しか出来なかった。

クマが、巨大な雷に撃たれ、消し炭の様に真っ黒に炭化するのを、ただ見ている事しか出来なかった。

自分には、それらをただ見ている事しか出来なかった。
網膜に焼き付いてしまった光景に、吐き気などよりも唯々怒りと絶望を覚える。

何も守れない自分を、何も守れなかった自分を、何も出来ずただ地に伏せている自分を。

殺してやりたい程に、憎悪した。

最後に、『シャドウ』は動けないこちらへと足を振り上げて。

蟻でも潰すかの様な気軽さで、頭へ向けて、その巨大なブロックの塊を叩き付けた。



左肩に走る激痛で目が覚めた。

一体何が？

自分は死んだのではないのか？

頭を踏み潰されたのでは？

混乱しつつ右手を動かして頭を触るが、少なくとも頭部に異常は無いらしい。

ふと辺りを見回すと。

花村達が、何事も無かったかのように『シャドウ』と対峙していた。

「花村ー」

どう言う事だ？ 何が起きた？

まさか、先程のアレは夢だったのか？

いや、夢と言うには、あの痛みは本物であった。

なら、一体これはどう言う事なのか。

一体何が起こっている？

分からない。

何も分からない、が。

花村が、皆が、生きている。

ただそれだけで、何もかもがどうしても良くなる程の喜びを覚える。そうだ、花村たちは生きている。

死んでなんか、いない。

なら、今度こそ。

必ず守ってみせる。

そう思いを新たにして立ち上がろうとすると、左肩と背中に激痛が走り、思わず悲鳴を噛み殺した。

一体何が、と左肩を見ると。

肩関節の辺りから左腕を切り落とそうとしたかの様に、半ば千切れかかった左腕が力無く揺れている。

背中にまで走った傷口は、酷い火傷の様に灼ける様な痛みを訴えてきていた。

「こんな、事で……!!」

たかがこんな傷と思いはするが、傷口から溢れる血の量が多く、段々と視界がボヤけて満足に動けない。

そして。

再び目の前で殺戮が繰り返され、見ているしか出来なかった自分は最後に殺されたのだった。



何度も何度も、痛みで覚醒した。

両足を切断されていた事もあった。

巨大なブロックに下半身を潰されていた事もあった。

四肢の骨を砕かれていた事もあった。

身体を磔の様に串刺しにされていた事もあった。

手を瓦礫に押し潰されていた事もあった。
背骨を半ば両断されていた事もあった。
腕が腕ぎ取られていた事もあった。

何度繰り返そうとも、自分は満足に動く事が出来ない状態であった。
た。

そして。

何度も何度も花村達は目の前で殺された。

叩き潰された事もあった。

首を刎ね飛ばされた事もあった。

上半身と下半身を離断された事もあった。

叩き落とされた事もあった。

生きたまま燃やされた事もあった。

串刺しにされた事もあった。

雷に撃たれ黒焦げにされた事もあった。

氷付けにされて、それを砕かれた事もあった。

握り潰された事もあった。

吹き飛ばされた事もあった。

轢き殺された事もあった。

踏み潰された事もあった。

誰がどの様に死ぬのかは、繰り返す度に変わっていったが。

——何度繰り返そうとも、自分は何も出来ず、花村達が殺されるのをただ見ている事しか出来なかったのは、変わらなかった。

もう何度、花村達が殺されるのを見たのだろう。

何も出来ず、ただ叫ぶ事しか、その最期を目に焼き付ける事しか出来なかったのだろう。

100回?500回?1000回?10000回?

最早回数など数えてはいなかった。

何故繰り返させているのか、その理由を考えるのはどうの昔に止めてしまった。

最早その様な事は些末事にしか過ぎなかった。

あるのはただ、花村達をどうにか死なせまいと足掻き続けるだけの

意志のみ。

だが、何をしようとも。

花村達を助ける事は出来ず、目の前で繰り返される死をただ見詰める事しか出来なかった。

そしてまた、目の前で殺戮が繰り返され、最後に残つたろくな抵抗の出来ない自分を、『シャドウ』が摘まみ上げる。

そして、子供が無邪気に虫を潰すかの様に握り潰され、意識は消失した。

——何処か遠くで、何かを打ち付ける様な音が聞こえた様な気がした。



「……………み！」

「……………かみ！」

「……………なるかみ！」

誰かの声が聞こえる。

誰だろう。

ぼんやりとした意識の中で、夢に揺蕩う様な心地でその声を聞いていた。

「おい、鳴上！」

耳元で聞こえた声に、漸く意識がハッキリと覚醒する。

パチパチと瞬きを繰り返しながら辺りを見回すと、そこは見慣れたジュネスのフードコートであった。

強い日射しに照り付けられた屋上の熱気は軽く汗ばむ程で、ガヤガ

ヤとした軽い喧騒の中に遠くで蝉が合唱しているのが聴こえてくる。目の前には、身を乗り出した花村が何処か心配そうな表情を浮かべていて、そして周りでは皆が心配そうにこちらを見ていた。

これは、一体……。

鈍麻した頭で思考しても、何故今の状況にあるのか思い出す事が出来ない。

そしてふと、一つの答えに行き当たる。

ああそうか。

これは、「夢」、か……。

きつと繰り返し続けられる殺戮に壊れた自分が、逃避する為に見ている都合の良い「妄想」……。

いつそ「夢」であるとする気付けない程に壊れていけば、きつと何の疑問も無く花村達との日常の夢に身を浸す事も出来たのだろうか……。

中途半端に残っていた理性が疎ましく思えてしまう。

「おーい？ もしもーしー！」

反応を伺うかの様に、こちらの目の前でヒラヒラと花村は手を振ってくる。

それに、微笑み返そうとはしたのだが、表情筋は笑顔の作り方など忘れてしまったかの様で、きつとぎこちないものになってしまった。

それを見てか、花村は益々心配する様な顔をする。

「おい、本当に大丈夫かよ、鳴上。」

折角夏休みどうすんのか話し合ってたのに、一人だけブーツとしてさ。

何かあったのか？」

どうやら、夏休みに遊ぶ為の計画を立てていた所だった様だ。

「……いや、何でも無いさ。」

何も、起きてなどいない」

ここは逃避する為に見ている「夢」なのだろうから、『日常』を脅かす何かなど、ここで起きている筈など無いのだ。

目覚める術は無く、そして目覚めた所で待ち受けている「現実」が

あれなのだとすれば、今暫しの時をここで揺蕩う事も、そう悪くは無
いだろう。

それは心を犯す毒だとは理解しながらも、その甘さを求めずにはい
られなかった。

砂漠を彷徨い続けた餓え渇く旅人が、一滴の水を求めずにはいられ
ないかの様に。

「いやいや鳴上さん明らかブーツとしてたし、何か今も調子悪そう
じゃん」

ねえ雪子、と横に座る天城さんに同意を求める様に里中さんは言
い、天城さんはそれに頷く。

「先輩、夏風邪ひいちゃった感じっすか？」

巽くんが心配そうにそう言う。

「えーっ！ ちよつと先輩、体調悪いなら無理しちやダメだよ！」

「センセー！ 死んじやイヤクマー！」

りせとクマが大袈裟な位に反応し、クマは勢いのままにヒシツと抱
き付いてきた。

抱き締められた感触は現実であるかの様で、ふと、ここはもしかし
て本当は『夢』じゃないんじゃない、と言う淡い期待が浮かぶ。

「いやいや流石に死ぬとかは大袈裟過ぎんだろ、クマ。」

つか、そんなに抱き付いたら暑苦しいだろ」

苦笑いしつつ、全力で抱き付いてくるクマを引き剥がしてくれた花
村は、心配そうな顔で、こちらの額に手を当ててきた。

そこから伝わる温もりに、どうしようも無い程のもどかしさと、そ
して満ち足りるかの様な幸せを感じてしまう。

「んー、熱とかは無い感じなんだけどな……って、鳴上!？」

どうしたんだよ！」

「えっ……っ？」

慌てた様な声を上げる花村に思わず首を傾げると。

ツツと何かが頬を伝って溢れ落ちた。

何だろう？とそれを拭ったが、それは後から後から雨垂れのように溢
れ落ちていく。

慌てた様な表情を浮かべる花村が、薄く水の膜を張った様に段々とボヤけていった。

「あれ……？」

目をゴシゴシと手の甲で擦っても視界はぼんやりとしたまま、手の甲を濡らす雫は止まる事を知らない。

「あれ……どうして……」

訳が分からない。

別に、肉体的な苦痛を感じている訳でも無く、大きな感情の揺れを感じている訳でも無いと言うのに。

……何故か、自分は涙を溢していた。

拭っても拭っても、涙は止まらない。

ハラハラと静かに溢れ落ちてゆく。

自分でもどうすれば良いのか分からず、困惑していると。

「センセイ、大丈夫クマか？」

悪い夢も見ちゃったカンジ？」

ポフポフと、心配したクマが優しく背中を擦ってくる。

悪い夢………。

……あれが、**「夢」**であったのなら、どんなに良かっただろうか。

……いや、**「夢」**だったのだろうか……？

感じていた痛みも、絶望も、憎悪も、耳に残る皆の絶叫や命が潰されていく音も、目に焼き付けられた命が壊されていく瞬間も、鼻の奥に染み付いた人が焼ける臭いも、手を濡らす生暖かい血の感触も……。

全部全部、**「夢」**であったのだろうか……？

分からない。

「夢」だと思っていたこの幸せで満ち足りた時間が、**「現実」**……？

何が**「夢」**で何が**「現実」**なのか、分からなくなってくる。

皆をこの手で殺してしまったあの絶望が、**「現実」**？それとも**「夢」**？

狂った様に繰り返されていたあの惨劇が、*「現実」*?それとも*「夢」*?

この狂おしい程に愛しい時間が、*「現実」*?
何がどうなっているのか、最早何も分からない。

「そーゆー時は、パーツと騒いで忘れちゃうのが一番クマ!」
ニコツと笑うクマにどう返せば良いのか分からず、言葉を探している。

「よく分かんねーけど、元気だせよ鳴上」

な?と花村が頭を優しい手付きでポンポンと撫でてきた。

普段はこちらの方が花村よりも背が高いが、今はこちらは座った状態で花村は立っている状態なので、必然的に花村を見上げる形になる。

「パーツと……か。」

あ、そーだ!

ならさ、皆で料理勝負とかどうよ!

それも今からすぐに!」

クマの言葉に何かを考え込む様に黙っていた里中さんが、名案を思い付いたとばかりに勢いよく立ち上がった。

「あ、良いねそれ、私も賛成。」

今日は旅館の手伝いも無いし、都合も大丈夫だよ」

「私も賛成!」

結構自信あるからね、私負けないよ!」

楽しそうに天城さんとりせが頷く傍らで、巽くんが少し顔を青褪めさせている。

以前のカレーの惨劇を思い出しているのだろうか……。

「りよ、料理勝負っスか? と、突然っスね」

「突然って言うか、アイツを逮捕した時に、記念に打ち上げをしようって言うって、結局その日はドタバタしてて無理だったからまた今度って事になったじゃん」

「バカンジだからもう忘れたの?」と呆れた様にりせが言う。

「いや、それでもさ……料理勝負ってのは、なあ?」

こう……俺らのトラウマ的なモノに突き刺さるって言いますか……」

花村も顔を蒼くして里中さん達を翻意させようとするが。

「おおー、皆の料理、クマも食べたいクマー！」

むふふー、センセイにーチエちゃんにーユキちゃんにーりせちゃんの料理！

楽しみでヨダレが出ちやいそうクマー」

テンションを高めたクマが賛成側に行き、賛成派4人に反対派2人となり、反対派に勝ち目は無くなる。

「嘘だろおい……。」

つか里中達はあのカレーの記憶を何処に置き去りにしてっただよ。

つか何で料理勝負になるんだよ」

最早止められない事を悟ったのか、花村が自決を求められたかの様な表情で尋ねると。

「あー、まあ、ほらね？」

あの時から私も成長したし？

雪子も料理練習してるから、上手くなってるし？

あの時のリベンジ、みたいなの？」

若干目を泳がせつつ里中さんがそう答え、天城さんはウンウンと頷いた。

リベンジ……嫌な予感しかしないが……。

「……鳴上、お前だけが最後の希望だ。

俺達が生きて帰れるかは鳴上にかかっているんで、マジでお願いします」

そう頼み込んできた花村にやや戸惑いしつつも頷いた。

と、言うよりも。

「花村と巽くんは作らないのか？」

クマはこちらに来て日が浅いので、寧ろ作らせない方が良いのは分かるが。

花村の料理の腕は知らないが、巽くんならかなり料理も出来るので

はないだろうか。

「あー、俺？俺はパス。」

炊飯器動かす程度しかやってねーし、流石にそれで自信満々に料理すんのは俺には無理」

巽くんは？と尋ねると、巽くんは少し迷っていたが結局は作る事にした様だ。

「そうと決まれば早速買い出ししないとね！」

買い物行こ！と立ち上がる里中さんに、ふと気になった事を訊ねた。

「しかし、料理勝負と言っても何処でやるつもりだ？」

「あー……えーつと……。」

……考えて無かった……。

ウチはこの人数で料理出来る様なスペース無いしな……」

「今の時間から忙しくなるだろうし、厨房を借りるのは難しいと思う」
どうしようか、と考える里中さん達に。

あ！と何事かを思い付いたかのように手が上がった。

「そうだ、悠希先輩って毎日ご飯作ってるんだよね？」

だったら菜々子ちゃんも一緒に、夕飯代わりにパーツとやろうよ
！」

「と、なると……。」

場所は堂島さん家？」

「あー、確かに台所広かったよな」

花村達が頷いている。

……大丈夫なのだろうか？

取り敢えず、家を使っても良いのか叔父さんに確認を取らなくては……。

確認した所、使っても大丈夫な様だった。

と言うよりも、叔父さんは事件の後処理で忙しく今夜は遅くなりそうなので、菜々子と遊んでくれるなら寧ろ有り難いとの事だ。

「よーし、決まり！」

なら菜々子ちゃんの好きなモノ作ろうよ！

「じゃあ行こ行こ！」
皆に背を押され、買い物売り場へと向かう。
涙は、いつの間にか止まっていた。



「ふう、食った食った」

お茶で喉を潤しながら、花村はそう満足そうに言った。

その横ではすっかり意気投合した菜々子とクマが、楽しそうに話をしている。

里中さんと天城さんは、お互い失敗した部分の反省会をやっている。

りせと巽くんは仲良く言い合っている。

料理勝負は中々の結果だった。

里中さんと天城さんは、カレーの時から成長していたが、それでもまだ足りない部分が多く。

りせは自信満々であったのだが巽くんのモノと比べると些か物足りなさを感じてしまう出来で、それが気に食わなかったのか、りせは巽くんに食ってかかっている。

作った料理は概ね皆に好評で、本当に楽しい時間だった。

本当に、幸せな時間だ。

この時が何時までも続いて欲しいと、叶う事の無い想いを懐いてしまう程に。

もしこれが『夢』だとするのならば一生醒めないでほしい、なんて……願ってしまう程に。

「なあ、鳴上」

花村に声をかけられ、どうかしたのかと首を傾げる。

「元気出たみたいで安心したよ」

そう優しく微笑まれて、どうしてこんな急に料理勝負などしたのか、理解した。

里中さん達がとても乗り気だったのも、花村や巽くんがそれに強くは反対しなかったのも。

元気が無かったこちらを、励ます為であったのだ……。

それを理解してしまい、思わず泣きたくなってしまふ。

涙は溢れはしなかったが。

「そうか……。

心配してくれて、こうやって励ましてくれて。

すまない。

……そして、ありがとう」

万感の想いを込めて、そう花村に微笑んだ瞬間。

——ブレーカーが落ちたかのように、視界が闇に閉ざされ、意識も黒く塗り潰されていく。

——遠い何処かで、何かを必死に叩く様な音が——



ドスツと手に伝わる感触で、意識が一気に浮かび上がった。

急に視覚が認識される事で一気に溢れ返った情報量に、クラリと目眩を感じそうになる。

一度目を瞑って首を振って目眩を取り払おうとすると、ふと鼻腔に染み付く様な鮮烈な鉄臭さ——血の臭いに気付き、ハツと目を開けて己の正面へと顔を向けると。

「……はな、む……ら……？」

全身をズタズタに斬られ、胸の辺りを血で紅く染め上げた花村が、そこに居た。

弾かれた様に周りを見渡すと、そこには血の海に沈む、皆だつたモノが、物言う事無く転がっている。

何だこれは。何なんだ、これは。

さつきまで、家で、一緒に、皆と、楽しくて穏やかな時間を過ごしていた筈なのに。

訳が分からない。

視界が、グラグラと揺れているかの様な錯覚を感じる。

何で、何で、何で、何で、何で、何が、何を、何で、どうして、何で、一体、何が――

最早自分が何をしているのか、何をしていたのか、何処にいるのか、今が何時なのか、何でこんな状況なのか、何一つとして分からない。

半ば錯乱した様な状態で、ふと、己の手に視線を落とすと。

固く握った刀は、束まで血に染まり。

そして――

――その刀身は、花村の胸を貫いていた。

短く悲鳴を上げて、慌てて刀を花村から引き抜いてそれを投げ棄てる。

高い音を立てて地に落ちた刀は、刀身を濡らす血で線を引く様に遠くへと滑っていった。

刀が引き抜かれた瞬間花村は僅かに呻き、そして倒れそうになりそれを咄嗟に支える。

とてもか細く虫の息ではあったが花村はまだ息をしていた。

まだ、生きている。

混乱と恐慌状態に襲われながらも、その事実が僅かに理性的な判断を可能とさせた。

取り敢えず、この体勢では花村に負荷がかかり過ぎるので、そつと花村を地に寝かせる。

次は、そうだ、治さないと。

ペルソナの……ペルソナの力なら、きつと……！

一目見ただけで致命傷である事は分かっていた。

今の花村の状態が、単にまだ死んでいないと言うだけである事も、それでも、そんな「現実」を受け入れられる訳など、無かった。

「今、治すから……！」

直ぐに痛いのは、終わるから……、だから……」

花村の胸に手を当てて、ペルソナを呼ぼうと意識を集中させた。

《女教皇》の『キクリヒメ』を呼び出す。

そして《サマリカーム》を使うが、花村の傷は全く塞がらない。

——ペルソナの力が、及ぶ範囲では、無い。

その事を理解して、絶望に突き落とされ、気が狂いそうになる。

だが、それを認める訳にはいかなかった。

何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も——

《サマリカーム》を、《ディアラハン》を。

狂った様にかげ続けた。

魔法を使い過ぎて、頭が割れる様に痛む。

目が霞み、指先に力が入らなくなっていく。

召喚状態を維持出来ず、キクリヒメの姿が消える。

それでも、と。

目を閉じてもう一度呼び出そうと集中しようとする。

その時。

花村の胸に当てていた手に、そつと何かが乗せられた。

その感触に集中が途切れ、目を開けてしまう。

すると、

「——っ！……どうして……！」

花村は、そつとこちらの手に己の手を重ね、そして……死が迫つてると言うのに、何故か柔らかな表情を浮かべて、そして……そして……。

微かに首を横に、振っていた。

『もう良い』と、その穏やかな目は、言外にそう伝えてきて……。

「止めろ、やめてくれ、花村……」

そんな目をするな……、生きる事に、しがみついてくれ……。だから——……」

死にたくないと訴えてくれるなら、何れ程良かっただろう。

恨み事をぶつけてくるのなら、何れ程救われただろうか。

「花村を傷付けたのは、お前をそんな状態になるまで斬り刻んだのは、私なんだから……?!」

……なんで、何でそれで、そんな顔をする、何で……」

その先はもう言葉にはならなかった。

嗚咽ですらない音が、自分の口から漏れる。

花村の目に僅かにでも憎しみがあれば、怒りがあれば、……いつそ絶望に染まっていけば。

その方がどんなに良かっただろうか。

こんな穏やかな目で見詰められては、何を言えば良いのか、何をしてやれば良いのか、分からなくなる。

「すまない、花村……」

ごめん、……ごめんなさい……。

私が、……私の、……私が、全部……」

謝ったって、何の意味があるのか。

謝ったら、花村の傷が治るのか？

こんなの、自分の罪悪感を僅かにでも軽くしようとする自己弁護と、何が違うんだ。

そう思い、恥知らずな言葉を垂れ流す自分の喉をかつ捌いてしまいたくなる衝動にかられるが。

壊れたレコードの様に謝り続ける事を止める事は出来なかった。

俯いて唯々謝る事しか出来ない自分の頬に、そつと柔らかく触れるモノがあった。

死を目の前しても穏やかな目をした花村が、僅かに目を細めて、頬をそつと触れる様に撫でていた。

そして、その唇が僅かに動く。

何一つとして見逃すまい、と必死に読み取ったその唇の動きは……。

——『ぶ』『じ』『で』『よ』『か』『っ』『た』
——『あ』『り』『が』『と』『う』

そして、微笑む様な表情で、そっと目を閉じた。
衝撃に麻痺した様に、身体は動かない。
息の仕方も、忘れてしまったかの様だ。

凍り付いた様に動かし辛い舌を動かして、漸く言葉を紡ぐ。

「どうして……………」

……………どうしてだ、花村……………!

……………んで、なんで……………何で!

何で、そんな……………!

花村の身体を遠慮無く揺する。

起きてくれ、目を開けてくれ、頼むから……………!

あんな言葉を遺言にするなよ……………!

恨んでくれよ、罵ってくれよ、憎悪してくれよ……………!

自分を殺した相手が、目の前に居るんだぞ。

なあ、復讐しろよ。

その感情が花村をこちらへと繋ぎ止めると言うのなら、喜んでそれを受け入れるから。

だから……………!

「死ぬな……………! 死なないでくれ……………!」

生きてくれ、もっと生きる事にしがみついてくれ……………!

やりたい事いっぱいあるだろ?

まだ【犯人】に辿り着けてすらいないだろ?

なあ、夏休み、一緒に遊びに行くって、約束したじゃないか。
海に行くんだって、前言ってたよな。

皆で原付の免許取って……………いや、巽さんとクマは無理だけど。

そう言えばクマはどうするんだろ、まさか車輪を付けて牽引するの
か?

なあ、八月中頃には夏祭りがあるんだってさ。

普段はあまり人が無い辰姫神社の境内も、夜店が立ち並んで賑やかに
なるんだって。

花村が稲羽に来たのは去年の秋だったらしいし、稲羽でのお祭りにはまだ行った事無いよな？

初めてのお祭りなんだ、凄く楽しみだよな。

クマとかきつとはしやぎ回って夜店で買いまくるんじゃないだろうか。

食べさせ過ぎない様に注意しとかないと。

夏の終わりには花火大会もあるんだって、叔父さんが言ってたんだ。

ほら、花火つて言えば夏の風物詩だよな。

でもきつと、打ち上げ花火だけだとちよつと寂しいから、手持ち花火を買い込んで、後で皆で鮫川辺りで花火をしよう。

そうだ、夏休みと言えば、花村は夏休みの宿題をちゃんとやってるか？

自分は出された日から始めたからもう終わりかけだけど、まさかとは思うが最終日まで溜めて一気にやろうとかしてないよな？

巽くん辺りは怪しい気がするから、ちよくちよく宿題をちゃんと消化してるか、勉強会も開こうか。

夏休みが明けて少ししたら修学旅行だよな。

そう言えば旅行先まだ知らないんだけど、花村は知ってるか？

まあ一応学校行事だし、そんなに変な場所じゃないとは思っただけだな。

なあ、秋も冬も来年の春もその先も。

まだまだ色んな事が待っているんだぞ。

それを、知らないまま、こんな場所で死ぬなよ。

死ぬなよ、死ぬな、死なないで……くれ……。

……頼むよ。

何処ぞの神様とやらに祈れば花村が助かるのなら、今直ぐにでもその神の敬虔な信徒になってやる。

自分の命を捧げれば花村が死なずに済むのなら、直ぐ様この首をかつ斬って捧げる。

だから、だから、だから、だから――

「何れ程の時間が過ぎたのだろう。」

何時間も経った気がするし、ともすれば何日も経ったのかもしれないし、ほんの数分だったのかもしれないし、もしかしたらたった数十秒だったのかもしれない。

花村は、もう息をしていなかった。

もう、その心臓は動く事を止めていた。

手を握っても、その手が握り返される事は無かった。

——花村は、死んだ

——みんな、死んだ

——花村は、殺された

——みんな、殺された

誰に？

それは——



一体何度、花村を、里中さんを、天城さんを、巽くんを、りせを、クマをこの手で殺したのだろうか。

自分を殺した憎い筈の相手を、誰一人として責めはしなかった。

それどころか、下手人の心配をしてくる始末だ。

目覚めるのは、何時も取り返しがつかない状態になってからで。

とつくに自分は気が狂った状態で、これはただの幻覚じゃないのかと疑った。

でも、自分が知覚出来る全てが、それを「現実」だと訴えてくる。

「夢」ならばこれで醒めるんじゃないかと、自分で己の首を切り裂いた事もあった。

頸動脈を切り裂いた事で血が勢い良く吹き出ていき薄れていく意識の中、感じる痛みは本物であった。

そして、再び気が付くと、誰かをこの手に掛けた直後か、将又皆が惨殺されるのをただ見ているしか出来ないか、だった。

自分の腹をかつ捌いた事もあった。

ペルソナに自身を切り刻ませた事もあった。

自分を生きながら燃やした事もあった。

雷に身を撃たれた事もあった。

氷付けにした事もあった。

全てを滅ぼす万能の光で、死体すら遺さぬ様に焼いた事もあった。

それでもやはり、死んだ筈なのに必ず何処かで目覚める。

次第に、何も感じられなくなってきた。

感情が鈍麻し、思考は擦りきれ、目の前で命が喪われる事に、自分を殺す事に、何の感慨も抱けなくなっていた。

だが、全てを放棄しそうになると、決まってあの幸せな時間の中のフードコートで目が醒める。

何時しか、あの時間が繰り返される様になっていった。

同じ一日を繰り返し繰り返し繰り返し繰り返し繰り返し繰り返し

だが、次第にそれにすら何も感じられなくなっていた。

己に向けられる優しさに、労りに、想いに。

無感動になり、何も感じられない。

それがおかしい状態だとは分かるのに、思考と感情がどんどんと解離していく。

何百回目かも分からない会話を繰り返す。

何千回目かも覚えていない花村の最期を看取る。

そしてまた、意識は中断される様に落ちた。

——ととてもとても遠い場所から、何かを呼んでいる声が——



泡が弾けた様な音で、意識は浮上した。

……………ここは……………？

最早目の前の出来事をただ見ているだけの機械の様になっていた頭に、久方振りに戸惑いが浮かんだ。

そこは、あの夏の日射しが照り付けるフードコートでも、皆が惨殺される現場でも、皆を殺害した現場でも無い。

何時もの通学路に、八十神高校の制服を着た状態で立っていた。

何処も血に染まっておらず、そして怪我などは何処にも無い五体満足の状態で。

……………これ、は？

……………何故……………？

マトモな思考力はどうに失われ、目的も何も無いままに、通学路を行く生徒の波に押される様に、高校へ向かって歩き出す。

教室に入っても、誰もこちらに意識を向ける事は無い。

……………？

……………何故か、自分の席が無かった。

本来は自分の席である場所には花村が座っていて、花村の席があった筈の場所に机は無い。

花村はこちらに顔を向ける事無く、里中さんと談笑していた。

「は、な……………むら……………？」

声を出したのは、何時ぶりだろうか。

しかし声を掛けても花村は反応せず、里中さんも反応しない。

「花村？」

再度呼んだが、やはり反応は無し。

その時、天城さんが教室に入ってきて、それに気付いた里中さんが大きく手を振る。

それに小さく手を振って返した天城さんは、こちらの目の前を何の反応も無く素通りして、里中さんの前の座席に座り、後ろを向いて話の輪に加わった。

「里中さん、天城さん」

二人を呼ぶが、一切の反応は無し。

これは……………。

ふと黒板を見ると、もう9月1日になっていた。

「花村はちゃんと宿題やった？」

「ま、何とかな。」

つか、里中の方こそどうなんだよ。

夏の間結構遊びに行っただけど、宿題やってるフシが全く無かったじゃん」

花村がそう言うのと、里中さんは「ウゲツ」と呻いた。

「千枝、いつも面倒な宿題は後回しにするから、最終日は徹夜しても終わらないんだよね。」

今年はやんとやるって言った気がするけど、無理だったんだ」

天城さんに止めをさされ、里中さんは机に突っ伏す。

「ま、終わってなくて大変な目に遭うのは里中の自業自得だな。」

てか夏休みって言えばさ、海水浴楽しかったよな！

夏祭りも結構盛り上がったし」

そうだったねー、と花村の言葉に里中さんと天城さんは頷いた。

その時だった。

「ちーっす」

「あ、お邪魔しまーす」

教室に異くんとりせも入ってくる。

そしてやはり、自分の目の前を素通りしていった。

「おー、いらっしやい二人とも。どしたん？」

里中さん達は二人を歓迎し、二人も話の輪に加わった。

「どうって訳じゃないっすけど、夏休み明けの初日っすからね。」

「こうやって顔出しに来た感じっす」

「私は先輩たちの顔を見に来た感じかな」

ワイワイとはしゃぐ輪から外れ、その様子を見守る。

異くんとりせも、名前を呼んでも反応を返さなかった。

目の前で手を振ってみたり、軽く肩を叩いてみたりするも、何の反応も返ってこない。

周りのクラスメイト達にも同様の事を試してみるが、誰一人として何らかの反応を返す者は居なかった。

廊下に出て、すれ違う生徒や教師に同じ事を試してみても結果は同じ。

一条に、長瀬に、高山に、小沢さんに、小西くんも、こちらに全く気付きもしなかった。

誰も彼もが、其処には誰も存在していないかの様に通り過ぎて行く。

どうやら、自分は今の所誰にも認識して貰えて無い様だ。

透明人間になった様な気持ちだが、接触しても何の反応も返ってこないの、どちらかと言えば幽霊になった様だと表現するのが正しいのかもしれない。

無意識に上履きを履いてしまったが、どうやらこれは別の誰かのモノであった様だ。

偶々サイズに違和感が無かったので気付けなかったが。

名も知らぬ誰かに悪い事をしてしまったな……。

学校でやる事が無いしそもそも席も学籍も無いのだろう。

上履きを無断借用してしまった誰かに心の中で謝りつつ靴を履き替えて校外へと出る。

授業を抜け出すなんてまるで不良生徒だな、と思いつつもそもそもこの学校の生徒では無いのだろう。

鈍麻した思考と感情のまま、町のあちらこちらを宛も無く彷徨う。

神社に行っても、狐は気付かなかった。

ベルベツトルームに繋がる扉は、何処にも存在してはいなかった。

病院に顔を出しても、神内先生も他のスタッフ達も、誰一人として気付かなかった。

警察署の方へ行っても、叔父さんも足立さんも、何の反応も返さなかつた。

学童保育の時間に高台に行っても、俊くんも学童の子たちも他の先生たちも、気付かなかった。

家の近くまで帰ると、買い物に出掛けようとしている倉橋さんとすれ違ったが、倉橋さんは足を止める事も振り返る事も無かつた。

家の鍵は何故か持っていたので、それを使って家の中へと入る。居間では菜々子がテレビを見ていた。

声を掛けても、やはり反応は無い。

テレビとの間に立ってみても、視線はこちらの身体を透過してテレビへと向いている。

菜々子も、自分には気付かなかった。

食器棚を見ると、マグカップは手前に置いてある二つと奥にある一つの三つしか存在していない。

若草色のマグカップは、何処を探しても影も形も無かつた。

二階に上がり、自分の部屋に入る。

そこは、自分の部屋であったが、同時に自分の部屋では無かつた。自分がやって来る前の、恐らくは物置として使われていた時の状態になっている。

一応掃除は偶にはしているのだろうが、置かれた雑多なモノには、長らく動かしていない事を表すかの様に埃が積もっていた。

自分の存在の痕跡が一切存在しない部屋を見回す。

ああ、そうか。

自分は、どうやら存在しない者であるらしい。

その事を認識しても、最早何とも思えなかつた。

ふと、そう言えば今は9月になっていたのだったか、と思い至る。自分が居なくても。

皆は変わらない日常を過ごしていた。

何事も無く、平穏で、愛しい、そんな日常を。

花村たちが、皆が、久保美津雄の『シャドウ』に惨殺される事も無く。

自分に殺される事も無く。

楽しそうに毎日を、過ごしている。

ああ、それは何て……………。

——何て、幸せな事であろうか

そう心の底から思い。

久しく浮かべていなかった笑みが、自然と溢れ落ちた。

意識がゆつくりと泥の中に沈むかの様に薄れていく。

その事に満ち足りた様な幸せを感じ、微笑みながら目を閉じた。

——何処かで、 “誰か” が誰かを——



深い深い水底に沈んでいつているかの様だった。

引きずり込まれていく様な感覚に、恐怖は感じずただ身を委ねる。

「——うき」

だれかが、だれかをよんでいる。

「悠希」

ゆうき？

だれだ、それは……………。

「悠希、朝よ？」

あんまり寝ると、遅刻しても知らないわよ？」

ゆうき、悠希……………。

そうか、それは……………。

そつと身体を揺すられ、意識が次第に浮上していく。

眩しさに思わず目を細めつつ目覚めると。

「あら、やつと起きた？」

悠希がこんな時間まで寝ているなんて、珍しいわね」

母さんが覗きこむ様に立っていた。

ぼんやりとした頭で周りを見渡すと、そこは自分の部屋で、今自分が居るのが自室のベットのうたと分かる。

のそのそと布団から這い出て立ち上がると、「今日の朝ごはんは私を作ったからね、早く顔を洗って食べなさい」と母さんは声を掛けて部屋を出ていった。

言われた通りに、部屋を出て洗面台で顔を洗う。

漸くハツキリと目が醒めた。

鏡の中から見詰め返してきた自分は、目に生気が欠片も無く、まるで屍が動いているかの様だ。

その事には何の疑問も抱かず、台所に行って席に座る。

用意されていたのは、ホカホカと湯気を立てるご飯と、茄子を使った味噌汁、確りと焼かれた鮭の切り身、だし巻き玉子と切り干し大根だった。

手を合わせてからそれを食べる。

ああ、何でだろう。

味を感じている筈なのに、美味しい筈なのに。

受容した筈の感覚が全く処理されず、まるで砂を噛んでいるかの様だった。

ある程度身支度を終えた父さんもやって来て、同じく食べ始める。父さんは、ふと視線をこちらに向けて首を傾げてきた。

「悠希がこんな時間まで寝ていたなんて、珍しい事もあったものだな。どうした？」

昨晚は珍しく夜更かしでもしたのか？

それとも、あまり眠れなかったのか？」

そう問われ、昨晚の自分の行動を思い出そうとする。

しかし、まるで破損したデータを無理矢理読み込もうとしているかの様に、何も思い出せない所か頭がズキリと痛み、思わず頭に手を当てて呻いた。

「ちよつと、大丈夫？」

もしかして風邪かしら。

あんまり酷い様なら、無理せずに学校は休みなさいね？

連絡した方が良いなら、私がやっておくから」

母さんはそう言ってくれるが、そんな事より、自分が何かを忘れている状態である事に気が付いて、それを必死に思い出そうと集中する。

何か、とても、大事な事だった筈だ。

何だ……？何を、忘れている？

父さんも母さんも、困惑した様に見合わせていた。

その時、テレビの番組がコマーシャルを映す。

『エヴリデイ・ヤングライフ！ ジュ・ネ・ス！』

耳に何処か馴染んだその言葉を認識した瞬間。

記憶が一気に溢れ出す。

稲羽。

叔父さん、菜々子。

事件、山野アナ、小西先輩。

花村。

ペルソナ、シャドウ。

クマ。

ベルベツトルーム、イゴールさん、マーガレットさん、マリー。

霧、《マヨナカテレビ》、【犯人】。

里中さん、天城さん、巽くん、りせ。

一条、長瀬、高山、小沢さん、小西くん。

神内先生、倉橋さん、中島くん、俊くん、狐。

“模倣犯”、久保美津雄、“ボイドクエスト”。

圧倒的なそれらの情報量に、頭が痺れる。

それと同時に、この異常な状況に気付いてしまった。

「父さん、母さん……。」

海外に転勤になったんじや、ないの……?」

恐る恐るそう問い掛ける。

そう、海外に居る二人がここに居る筈が、無い。

そして、自分が此処に……自分の実家に、居る筈が無い。

その事に気付いてしまった今、目の前でこちらを心配してくる二人が、得体の知れない「何か」にしか感じられなかった。

「海外転勤……?」

そんなの話すら来てないわよ?」

ねえ、と「母さん」は「父さん」に確認する。

「ああ」と「父さん」は頷き、海外転勤を否定する。

「二人とも海外に行くから、私は稲羽に行ったんじやないの……?」

ここに来て「両親」は盛大に困惑する様な表情を浮かべて、お互いに顔を見合わせた。

「『イナバ』……?」

えっと、……何なのかしら、それ。

地名?それとも、他の何か?」

稲羽出身である筈なのに、「稲羽」と言う単語すら知らないとしても言いた気な「母さん」のその態度に、肌が粟立つ様な恐怖を覚える。

「稲羽の、堂島の叔父さんの家に行く事になったんだよね?」

遼太郎叔父さん家だよ?」

叔母さんが一昨年事故で亡くなって、今は菜々子と二人暮らしの――」

知らない筈など、無いだろう?」

自分の弟なのだから。

だが、「母さん」は益々混迷を深めた様な顔で。

理解出来ない様なモノを見る様な目で。

「遼太郎叔父さん……?」

そんな人、居ないわ」

——目の前の景色が一瞬にしてグニヤリと歪んだのを最後に、意識は断ち切られた。



終わりなど存在しない無間地獄の中を、何れ程彷徨っているのか、もう覚えていない。

何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も繰り返した。だがもうそれらに、何も感じない、感じられない。

皆をこの手で殺した自分。

何も出来ず、皆を守れなかった自分。

他愛無いが何よりも愛しい終わらない一日を、延々と繰り返し続ける自分。

幽霊の様に、その場に居るのに其処には居ない自分。

稲羽で過ごした時間全てが「夢」であった自分。

何が「夢」で、何が「現実」なのか。

最早自分には判別出来なかった。

そもそも人間は五感や痛覚などの知覚で世界を認識している。

……その知覚で、「夢」と「現実」の違いを区別出来ないのならば。

それは、全て己にとっては「現実」なのだ。

胡蝶の夢とはよく言うが、それに近い状態であるのだろうか。

花村達を自ら惨殺してしまった自分が「現実」で、それから逃避する為に見ている「夢」が今の自分なのかもしれない。

『シャドウ』に皆を殺されるのをただ見ているしか出来なかった自分が死の直前の瞬間に見ている『夢』が、今の自分なのかもしれない。そもそも『シャドウ』も『ペルソナ』も全て『夢』で、稲羽へとやって来て花村達と出会った事も『夢』でしかなかった自分が、『現実』から逃避する為に更に見ている『夢』が自分なのかもしれない。何もかもがあやふやになり、全てが虚ろへと溶けていきそうになる。

泥濘の中へと沈みそうになる意識は、最早途切れ途切れで、目の前で起こる出来事を認識出来ていない。

今が何時で、ここが何処で、自分が何をしているのか………分からない。

自分自身すら、次第に知覚出来なくなっていく。

——何も、見えない

——何も、聞こえない

——何も、匂わない

——何も、触れられない

——何も、痛みがない

——何も、感じない

——何も、考えられない

死んだ様に何処かに居る自分は、何も感じず何も為さず、ただ屍の如くそこに佇んでいた。

いや、佇んでいるのだろうか。

倒れていたのかもしれないし、深い水底へと沈んでいるのかもしれない。

もうどうであっても全て同じで、全てがどうでも良い事だった。



ふと喉元に圧迫感を感じる。

それを知覚出来た事に僅かに驚き。
そもそも驚くという心の動きが残っていた事自体に驚いた。

——ナニモ ナイ

——スベテ ハ 無~~ダ~~

——オマエ ハ ナニモ デキナイ

——オマエ ハ ナニモ マモレナイ

——オマエ ハ ヒトリ ~~ダ~~

——オマエ ハ ムリヨク ~~ダ~~

——オマエ ニハ ナニモ ナイ

——ボクト オナジ ~~ダ~~

——ナニモ ナイ ノハ コワイ ~~ダ~~ロ

——ナニモ ナイ ノハ クルシイ ~~ダ~~ロ

——ボクガ オワラセテ アゲルヨ

喉を潰そうとする様に、圧迫感が急に増した。

息が、苦しい。

苦しいと感じる事が、まだ出来たのかと、薄れていく意識の片隅で
思う。

——……………!!

ふと、少し遠い場所から何かが聞こえた。

——……………み!

……………?誰かを呼んでいるのか?

——……………み!!

誰を呼んでいるのだろう。

——……………るかみ!

誰が呼んでいるのだろう。

——…なるかみ！

誰なんだろう、分からない。

——…ゆう！

でもこの声は、自分にとって大切な誰かだった。

——…ゆうき！

…自分を、呼んでいるのか？

——目を醒ませ、悠希！！





『そのブロックの中に本体が居るよ！』

先ずはソイツをそこから引っ張り出さないと、ダメージを与えられないみたい！』

りせが、ブロックで形作られた“ゆうしや”を模した鎧——『導かれし勇者ミツオ』を壊さないと、『シャドウ』本体へはダメージを与えられない事を告げる。

「了解！ 行つくよー！」

それに領いて一気に駆け出したトモエと千枝が、腹の部分を狙って同時に飛び蹴りを繰り出した。

2・3個のブロックがそれにより溢れ落ちたが、直ぐ様自動的に元の位置に修復されてしまう。

一気にブロックを崩さなければ、直ぐに再生してしまうのだ。

千枝に反撃するかの様に『導かれし勇者ミツオ』の頭上に「▽たたかう」と表示され、『導かれし勇者ミツオ』は何処かカクカクとした動きで手にした剣をクマへと勢いよく振り下ろす。

「させるか！ 来い、ギリメカラ！」

悠希は《月》アルカナの『ギリメカラ』を呼び出し、振り下ろされる剣の下へと身を投げ出させた。

すると、甲高い音を立てて剣は弾き返されその衝撃にブロックを幾つか崩壊させながら『導かれし勇者ミツオ』は仰向けに倒れる。

ギリメカラはランダと同じく、物理攻撃を反射させるからだ。

「先輩流石っス！」

その期を逃すかとはかりに、《チャージ》で力を溜めていたタケミカツチの《ミリオンシュート》が一気にブロックを崩壊させ、中に居た『シャドウ』を露出させた。

剥き出しになった『シャドウ』に、ギリメカラから《星》アルカナ

の『ガネーシヤ』に切り換えた悠希が《スタードロップ》を撃ち込ませ、ダメージを与えると同時に『シャドウ』の防御力を低下させる。そこを一斉攻撃で叩くと、かなりのダメージを稼げた様で、『シャドウ』の滞空高度が下がった。

悠希たちは続け様に攻撃しようとするが。

そうはさせまいと『シャドウ』は《マハガルーラ》で闘技場全体に烈風を吹き荒れさせる。

凄まじい風に砂埃が舞い上がり視界を閉ざす中、咄嗟に悠希はタケミカツチと完二をガネーシヤの巨体で庇い、陽介は千枝と雪子とクマをジライヤを盾にして守らせた。

吹き荒れる風が収まったと同時に、悠希たちが目を開けた其処には。

ブロックが組み直された『導かれし勇者ミツオ』が復活していた。どうやら『導かれし勇者ミツオ』は何度でも復活させる事が出来るらしい。

ブロック単体を破壊しても、暫くすると再生されてしまうのであまり手としては意味が無い様だ。

一人が大技を決めてブロックを一気に崩して、露出した本体を残り全員で集中砲火するのが最適解だろうか。

「先ずは私がもう一度ヤツの殻を崩す！」

皆は『シャドウ』が露出したら、一気に叩いてくれ！」

悠希はそう指示を出して、《法王》の『ケルベロス』を召喚した。

しかし、ケルベロスが攻撃を仕掛ける前に『導かれし勇者ミツオ』が動く。

「◇ギガダイン」と頭上に表示されると同時に『導かれし勇者ミツオ』が剣を頭上に掲げると。

雷の豪雨の様な荒々しいエネルギーの塊が辺りを焼き払う。

全員がダメージに膝をついた所から、先程の雷は万能属性の攻撃であつた様だ。

「お願い、コノハナサクヤー！」

素早く立ち直った雪子が《メデイラマ》で皆を回復させ、その隙を

狙って『導かれし勇者ミツオ』が雪子にブロックの剣を叩き付け様としたのをトモエとタケミカツチが受け止めて押し返す。

僅かに『導かれし勇者ミツオ』が踏鞴を踏んだ瞬間を狙い、ケルベロスはその強靱な鋭爪がブロックの塊を一気に削り取って『導かれし勇者ミツオ』の中から『シャドウ』を露出させ、『マハラギダイ』で周囲に纏わり付くブロックを一気に吹き飛ばした。

『どうして……必死になって戦うの……？』

諦めれば、楽になれるんだよ？』

自らの鎧を剥ぎ取られた『シャドウ』は、陰鬱な声でそう囁きかけてくる。

それに淡々と悠希は答えた。

「諦めたら決して手には入らないモノが欲しいからだ。

それに、諦めて得た安樂は、己の心から自ら目を反らした結果に過ぎない……！」

刀に炎を纏わせて悠希はケルベロスと共に『シャドウ』に斬りかかり、赤子の様に縮こまらせていたその左手を切り裂く。

それに火が着いた様な叫び声を上げ、手を滅茶苦茶に振り回して『シャドウ』は自らを傷付けるモノを振り払おうとするが。

その時には一撃を与えた悠希とケルベロスは素早くその場を離脱していた。

『シャドウ』は忌々し気に悠希を睨む。

「今だ！ 叩き込め!!」

イザナギが『マハタルカジヤ』で援護するのと同時に悠希が合図を出し、皆一斉に攻撃を叩き込んだ。

『シャドウ』は吹き飛ばされ地を転がるが、それでもまだまだ倒れる様な気配は無い。

嬰兒の様な無力そうな見目とは裏腹に、存外打たれ強い様だ。

『シャドウ』は苛ついた様な叫び声を上げ、『蒼の壁』で己に電撃耐性を付けると同時に周囲を『マハジオンガ』で焼き払った。

「っ……！ 花村、クマ！ 無事か!？」

悠希と完二はイザナギとタケミカツチに電撃耐性があるが故に軽

傷。

千枝と雪子は防御が間に合ったので比較的軽傷だ。

「間髪なし！」

陽介は紙一重の所で回避に成功し、ジライヤで咄嗟にクマを抱えて避難していた。

キントキドウジに電撃が直撃した衝撃でクマは目を回しているが、一応は無事である。

悠希達が体勢を立て直そうとする隙に、『シャドウ』は再び『導かれし勇者ミツオ』を構築してその中に隠れた。

そして、『バクダン』と表示させながら、ブロックで出来た巨大な爆弾の様な物体を悠希に向かって投擲する。

「イザナギっ！」

一瞬の判断でそれを危険なモノと判断した悠希は、敢えて叩き斬らずにイザナギの剣の腹の部分で『導かれし勇者ミツオ』の方へと爆弾を打ち返した。

直後、派手に爆炎の様なエフェクトのブロックを撒き散らしながら、爆弾は四散する。

『今の攻撃も万能属性だよ！』

アレに当たると衰弱もしちゃうから、絶対に避けて！』

攻撃の正体を直ぐ様子分析し、それを皆に伝えた。

それに頷く暇すら与えず、『導かれし勇者ミツオ』はブロックで出来た剣を悠希目掛けて振り下ろしてくる。

横に跳んで悠希はそれを回避するが、『導かれし勇者ミツオ』はカクカクとした見た目と動きにそぐわない程素早い動きで矢継ぎ早に剣を振り回しながら執拗に悠希を狙ってくる。

その行動に悠希は一度軽く舌打ちをし、『導かれし勇者ミツオ』が剣を上段に構えてから一気に叩き潰そうと振り下ろした瞬間に、イザナギを割り込ませて罅迫り合いを引き起こさせた。

そして、イザナギの身体を踏み台にして、悠希はブロックで出来た剣に乗り、そのままそれを足場として一気に『導かれし勇者ミツオ』の身体を駆け上って、イザナギの力により紫電を纏う刀で頭周りのブ

ロックを一気に崩す。

そして、素早く『導かれし勇者ミツオ』の身体を蹴ってその場から離れ、力を溜めていた陽介とクマに合図をした。

「よっしゃ、行くぜクマー！」

「行くクマよー、そりゃー！」

タイミングを合わせて放たれた魔法は、荒れ狂う猛吹雪となつて一気に『導かれし勇者ミツオ』のブロックを引き剥がしていく。

露出した『シャドウ』は、風に身を刻まれ末端が凍り付いていた。

「行くぞ、クー・フリーン！」

白銀の鎧に身を包んだケルト神話の大英雄、《塔》の『クー・フリーン』がその槍に風を纏わせ、《チャージ》によつて高まつた力で『シャドウ』に一撃を与える。

『シャドウ』の傷口には風が絡み付く様に残留し、千枝達が悠希に続いて攻撃する度に、激しさを増しながら『シャドウ』の身を破壊していく。

だが、まだ『シャドウ』は倒れない。

金切り声を上げ、《テカジャ》で悠希達に掛かっていた《マハタルカジャ》の効果打ち消し、直後に《白の壁》を使う。

「不味い！ 天城さん、防御して!!」

そして悠希が叫んだ直後、『シャドウ』は《マハブフロー》で場内に吹雪を吹き荒れさせた。

「……っ！」

警告が間に合ったので雪子はガードを固めた上にトモエに庇われていたので無事であり、悠希もクー・フリーンを消してガードを固めたので何とか軽傷であった。

『アイツ、自分に耐性を付けてからその属性の全体魔法を使つてる！

皆、弱点を突かれぬ様に注意して！』

《蒼の壁》・《白の壁》と言つた対象に属性への耐性を一時的に付与する魔法の効果は、そう長くは持たない。

現に、既に先に使つていた《蒼の壁》の効果は消えている。

だが、厄介な行動パターンであるのは確かだ。

再び『導かれし勇者ミツオ』を再構築させていた『シャドウ』は、相変わらず何故か悠希に狙いを定めていた。

クー・フリーンから、弱点の無い《太陽》の『タムリン』へと切り換えた悠希はその攻撃を避けたり捌いたりしつつかつ何か凌いでいる。

『僕はね……僕がここに居る証拠が欲しいんだ……』

君を殺せば、僕が……ここに居る証明になる。

君らを殺せば、僕は僕でいられる……。

だから……君らを殺さなきゃ！』

何処か壊れた様にそんな身勝手な事を生気の無い声で喚く『シャドウ』に、攻撃を避けつづける悠希は僅かに眉間に皺を寄せた。

そして。

「私を殺した所で、お前の存在証明になど成り得はしない。

それは、そうお前が思い込んでいるだけに過ぎない。

他者を害する事でしか確立出来ない自分など、只のまやかしだ」

淡々とそう述べる。

その言葉に『導かれし勇者ミツオ』は一瞬動きが止まった。

「っ！ 今だ、斬り刻め！ タムリン！」

その一瞬を突いて、タムリンの放った《刹那五月雨撃》の斬撃が『導かれし勇者ミツオ』を幾重にも斬り刻む。

ブロックの大半を削り飛ばしたその一撃に、『導かれし勇者ミツオ』は地に倒れた。

「燃やしなさい！ コノハナサクヤ!!」

そこを雪子が《アギダイン》で追撃し、残りのブロックを一気に溶かして再び『シャドウ』を露出させる。

そこに《チャージ》で力を溜めていたタムリンが飛び込み雷を纏ったその槍を一閃させ、『シャドウ』の左腕を完全に斬り落とした。

反撃の様に放たれた電撃はタムリンの耐性に依って完全に無効化され、寧ろその隙を突かれて放たれたタムリンの一撃により『シャドウ』はダウンする。

「よし、チャンス到来！」

行つくよー、完二くん！」

「うっす！」

《チャージ》により力を溜めていたトモエとタケミカツチの《凍殺刃》と《震電碎》が炸裂し、《連鎖の雷刃》による電撃ダメージに内部を侵食された『シャドウ』の身体は大きく跳ね上がった。

ジライヤの《ガルダイン》とキントキドウジの《ブフダイン》が動けない『シャドウ』を蹂躪し、止めとばかりに放たれたコノハナサクヤの《アギダイン》が『シャドウ』を大きく吹き飛ばす。

壁に叩き付けられた『シャドウ』は何処かぐったりとしているが、それでもまだ消滅する気配は無い。

《赤の壁》を使った後に《マハラギオン》で周囲を焼き払うが、再び『導かれし勇者ミツオ』を構築しようとするも、今までは瞬時に構築されていたそのスピードは、目に見えて遅くなっていた。

そこに、タムリンの耐性故にほぼ無傷の悠希が駆け出し、7割程しか再生しきれていない『導かれし勇者ミツオ』の身体の復活を阻止しようとして、ブロックの隙間から『シャドウ』を攻撃しようとするが、ブロックの隙間から見えた『シャドウ』が。

——ニヤリと、嗤った

その途端。

何故か悠希は急に脱力した様にふらつきタムリンは消滅する。

それをブロックの隙間から素早く手を伸ばした『シャドウ』が驚掴みにして、『導かれし勇者ミツオ』を形作るブロックの内部へと悠希を引き摺りこんだ。

「鳴上!!」

陽介が急いでジライヤで救出しようとするも、直前に完全に再生されたブロックに隙間を埋められ、後一步の所で届かなかった。

ジライヤの拳を打ち付けるが、『導かれし勇者ミツオ』はビクともしない。

悠希を内部に取り込んだまま、『導かれし勇者ミツオ』は完全なる再生を果たしてしまった。



復活した『導かれし勇者ミツオ』は、己に纏わり付くジライヤを剣を振り回して振り払った。

そして、『◇ギガダイン』で周囲を一掃しようとする。

それをギリギリの所で回避した陽介達は、『導かれし勇者ミツオ』の内部に取り込まれてしまった悠希を呼んだ。

「くそっ、鳴上ー！」

「鳴上さん！」

『先輩!!』

「センセー!!」

しかし、『導かれし勇者ミツオ』は何の変化も見せない。

再度『◇ギガダイン』が放たれる。

周囲を蹂躪するその雷撃は、何故かロクに狙いが定められていなかった。

それを回避した陽介達は、一旦『導かれし勇者ミツオ』から距離を取る。

何故か『導かれし勇者ミツオ』は攻撃する事も距離を詰めようとする事もせずにその場に留まっているが、それを斟酌している余裕は今の陽介達には無かった。

寧ろ好機とばかりに、作戦を立て直す為の話し合いを素早く行う。

『ダメ、悠希先輩に繋がらない！』

アイツの中から先輩の反応はあるけど、でも……何かおかしい！

早く助け出さないと！

凄く嫌な予感がする……!』

「嫌な予感って何だよ!？」

焦燥感を顕にしたりせに、完二が思わず余裕が無い声で聞き返した。

『分かんない。分かんない、けど……。』

アイツが内側に引き摺りこんだ先輩を放っておく事なんて、ある訳

無い……!』

それはこの場の全員に共通の認識である。
態々捕らえてその内に引き摺り込みましたのだ。

それで、悠希が『シヤドウ』に何もされ無いなどは到底考えられない事であった。

『シヤドウ』に捕まる直前の鳴上さん、何か様子がおかしかったよね……。

あれは一体……」

捕まる直前のふらついた様な悠希の姿を思い返し、雪子はそう口にする。

「よくは分かんねーけど、あの時に『シヤドウ』に何かされたのは確かだろうな。

助け出すにはやっぱあのブロックを崩さないといけねーんだろうけど……」

陽介はチラリと『導かれし勇者ミツオ』を見やった。

ブロックで作られたその巨体は、一見しただけではどの辺りに悠希と『シヤドウ』が居るのかは見当が付きそうにも無い。

「中に鳴上さんが居るんだから、無茶な攻撃は出来ないね……」

鳴上さんを取るとか、ホントあの『シヤドウ』腹が立つ!」
しかし現実的に悠希が半ば人質の様な状態になっているのは確かだ。

下手に強力な攻撃を加えては、中にいる悠希に害が及ぶ可能性が高い。

しかしチマチマとした攻撃では『導かれし勇者ミツオ』のブロックを引き剥がすには至らないし、多少のブロックを崩した程度では直ぐ様元通りに修復されてしまう。

「早くセンセイをお助けせねば!」

リセちゃん、センセイの場所は分かるかクマ?」

『ちよつと待って。

……ちよつと時間は必要だけど、多分……ううん絶対に、見付けてみせるから』

りせはクマの要望に強く頷く。

そして力の流れを見て『シャドウ』や悠希の詳細な位置を把握する為に、『導かれし勇者ミツオ』の攻撃を誘発して欲しいと皆に頼んだ。

一撃一撃が強力な『導かれし勇者ミツオ』の攻撃を態と誘導させるなど、危険極まりない行為である。

だが。

それに否を唱える者も、躊躇いを見せる者も。

この場には誰一人として居なかった。

◆◆◆◆◆

「こつちだ木偶の坊!!」

威勢よく完二が『導かれし勇者ミツオ』を挑発する。

すると、動きが見られなかった『導かれし勇者ミツオ』は何処かぎこちなく動き出した。

単調な動きで剣を叩き下ろすが、そんな攻撃では《マハスクカジヤ》で敏捷性を高めていた完二を捉える事は出来ない。

剣の連撃を完二は難なく回避する。

「隙アリ！ とりやーっ!!」

完二に注意を向けている『導かれし勇者ミツオ』に、千枝とトモエが背後からライダーキックをかました。

『導かれし勇者ミツオ』は僅かにたじろぎ、幾つかのブロックがそれにより剥がれ落ちたが、それはそう間を置く事無く再生され始める。

ブンツと横薙ぎに振り払ってきた剣を、千枝は身を屈める事で回避した。

「ほれほーれ、こつちクマよー!!」

今度はクマがピョンピョンと跳び跳ねながら『導かれし勇者ミツオ』を挑発する。

するとクマに狙いを定めた『導かれし勇者ミツオ』はカクカクと踏

み出そうとしたが。

その足元をキントキドウジに凍結され、見事にスリップして背中から転倒した。

幾つかのブロックが倒れた衝撃で吹き飛んでゆき、ジワジワと再生され始める。

「どうだりせ！ 場所は掴めたか!？」

『待って……もう少して……!!』

後ちよつとだけ時間を稼いで!』

その時、起き上がった『導かれし勇者ミツオ』が辺りを一掃しようと「◇ギガダイン」を放った。

ゲーム染みたエフェクトの雷だが、そのエネルギー量は凄まじい。皆何とか防御して凌いだが、無傷では済まなかった。

だが、それ程のエネルギーを放ったのだ。

りせの目には、『導かれし勇者ミツオ』の内部でのエネルギーの流れがくつきりと見えていた。

『……見付けた!!』

先輩は、アイツの首の辺りの空間に囚われてる!

『シャドウ』の反応もその近くにあるよ!!』

悠希を発見しりせが喜びを滲ませた声を上げる。

それに素早く陽介が質問を投げ掛けた。

「鳴上に通信は繋がるかつ!？」

『……っ！ ダメ！』

よく分からないけど、何かに邪魔されてるみたい!

先輩の反応はあるのに、応答しない!』

りせの分析によると、悠希はどうやら動きも拘束されているらしい。

そうであれば悠希自らが脱出するのは困難である。

直接『導かれし勇者ミツオ』のブロックを剥いで、悠希を助け出さねばならない。

一番危険な救出役を買って出たのは陽介であった。

「アイツの攻撃はあたしらが何とかするから、花村は鳴上さんを助け

る事に専念して！」

「絶対に、邪魔なんかさせないから！」

「先輩、漢なら一発で決めてやれ！」

「ヨースケのサポートはクマ達に任せんしゃい！」

『花村先輩、頑張つて！』

皆が陽介の背を押す。

信頼する仲間たちの言葉に。

「おう、任せとけ!!」

陽介は力強く頷いて、『導かれし勇者ミツオ』へと向かって駆け出した。

何かをしようとしている事を察してか、『導かれし勇者ミツオ』は陽介に向かってブロックの爆弾を投擲してくる。

陽介は己に迫るそれを認識しながらも、回避の為に足を止める事は無い。

破裂寸前となった爆弾は、爆発する前に凍結され、吹き上がった業火に爆発する事無く消滅する。

陽介目掛けて振り下ろされた剣は、タケミカツチとトモエが受け止めた。

何度も何度も振り下ろされるそれを、その度にタケミカツチとトモエが二人掛で食い止める。

そして、千枝達の援護を得てやっとの事で『導かれし勇者ミツオ』の懐に潜り込んだ陽介は、ジライヤに投げ上げられて一気に肩の部分へと到達した。

肩の上に立った陽介は、りせから示された悠希が囚われている首の辺りのブロックを、細心の注意を払いながらジライヤの拳に風を纏わせて剥ぎ取らせて行く。

数個のブロックを剥ぎ取ってやっと思えてきた『導かれし勇者ミツオ』の隙間からは。

まさに探し求めていた悠希の姿が見えた。

「無事か!? 鳴上！」

姿が見えた瞬間、陽介は形振り構わず大声で悠希を呼ぶ。

だが。

「聞こえていない筈など無い程の音量だったと言うのに、悠希はピクリとも動かない。」

『導かれし勇者ミツオ』の内に広がる虚ろな闇の中を佇む様に揺蕩っているだけであった。

「おい、鳴上!!」

焦りを覚えた陽介は、さつきよりも大声を上げて呼んだ。

それでも、悠希は僅か程も動く事は無く。

その瞳は何も映してはいない。

「返事をしてくれ、鳴上!」

何処か懇願する様に、陽介は悠希を呼ぶ。

それでも、悠希は何の反応もしなかった。

何時もなら、その意志の強さを表す様な光を宿しているその瞳には。

今はただただ濁った様な闇しか映っていない。

何処までも深く虚ろな闇の中に、悠希の姿は今にも沈んでいきそうであった。

一刻も早く、悠希をあゝの闇の中から引き揚げなければならぬ。

さもないと――

何処か本能的にその事を理解した陽介は、隙間から精一杯手を差し入れて悠希へと手を伸ばす。

しかしその手は悠希に届く事は無く、悠希の方からも手を伸ばさなくては到底届かないだろう程の距離までしか手を伸ばせなかった。

「早くこの手を掴め! 鳴上!!」

だが、悠希は陽介の手に見向きもしない。

そもそも、悠希は何も認識してはいない様であった。

その様子に、陽介は焦りと恐怖を覚える。

その時、虚ろに揺蕩う悠希の首を突然巨大な赤子の手が掴んだ。

『シャドウ』が己に残された右手で、悠希を絞め殺そうとしているのだ。

「くそっ、その手を鳴上から離せ!!」

両者の距離が近すぎて、陽介は迂闊に攻撃が出来ない。

武器を投げつけ様とするも、それを察知した『シャドウ』は悠希を盾にする様に、悠希の影に隠れた。

「鳴上、目を覚ませー！」

再度、届いてくれと祈りを込めて陽介は名前を呼んだ。

だが、悠希はやはり全く反応しない。

首を絞められていると言うのに、まるで精巧に作られた人形であるかの様に何の反応も返さない悠希に、陽介の心中は焦燥感に掻き乱される。

「……っ！ 悠希……！」

それは、もう賭けの様なものであった。

成す術を失い、最早自棄になった結果の様なものであった。

事実、名前を呼ぶその声は掠れて、決して大きなものでは無かった。だが。

——ピクリと、悠希の指先が微かに動く。

——そして、僅かに息苦しそうに喘いだ。

「……悠希！」

何故悠希が反応を返したのか、陽介に分かる筈は無かった。

だが、初めて反応を返してきたその言葉を、縋る様に再度叫ぶ。

——すると、僅かに意志の光がその瞳に灯った。

それを見た陽介は。

全力で身を乗り出して手を限界まで伸ばし、ありったけの思いを託して全身全霊で叫んだ。

「目を醒ませ、悠希!!」





——目を醒ませ、悠希!!

深い水底に沈む意識にまではつきりと届いた、魂を震わせる様な、ありつたけの感情が込められた全身全霊の叫びに。

自己と外界を隔てていた見えない壁は撃ち破られた。

途端に、強烈な喉元の絞扼感と息苦しさを感じる。

苦しさに霞みかける視界の中では。

陰鬱な狂気をその顔に貼り付けた隻腕の『シャドウ』が、残された片手で首を掴んで潰そうとしてきていた。

五体満足の状態ではあるが、これでは身動きの取り様が無い。

もがいて逃れようとするも赤子の様なその手の力は異常な程強く、抵抗すれば抵抗する程、喉元の圧迫感は増大していく。

その時。

右手に握られた軍刀の存在に気が付いた。

無我夢中でそれを『シャドウ』の腹部へと突き刺すと。

『シャドウ』は金切り声を上げてその場をのたうち回り、此方の喉を絞めていた手を投げ出す様にして離れた。

混乱から醒めぬままそれでも状況を把握しようとは辺りを見回すと、其処は『シャドウ』と己しか存在しない虚ろな闇の中で、花村達の姿は何処にも見当たらない。

今は何時だ、ここは何処だ、花村達は何処へ。

疑問は後から後から沸き上がってくる。

一体何がどうなっているんだ？

困惑が深まったその時。

「早くこの手を掴め、悠希!!」

上方から必死に此方を呼ぶ花村の声が聴こえてくる。

反射的に上を見上げると。

其処だけ闇が晴れている場所から花村が身を乗り出して、此方に手を精一杯伸ばしていた。

状況はまだ呑み込み切れぬが。

地獄に垂らされた糸に縋り付く様に、差し伸べられているその手に向かつてこちらでも精一杯手を伸ばした。

指先が僅かに触れ合うと、花村はそれを手繰り寄せる様にして手首を掴み、一気呵成に此方を引き揚げて抱き抱えてくれる。

途端に眩しくなる視界に思わず瞼を閉じた。

閉ざされた視界の中、風を切る感触を肌で感じる。

目を開けると、自分は花村に手首を掴まれたままジライヤに花村諸共抱えられている状態であった。

ふと振り返ると、『シャドウ』が纏うブロックの勇者がのたうち回る様に暴れている。

それから距離を取った場所に降り立ったジライヤは、そつとこちらを壊れ物を扱うかの様に優しく下ろしてくれた。

これは何だ。

これはどんな状況だ……？

一体、何が起きている？

手を見ても、誰の血にも塗れてはいない。

刀はこの手には握られておらず、『シャドウ』に突き刺してそれつきりだ。

まだ今の所は、誰も殺した形跡は無い。

周りを見回すと、未だ手首を掴んだままの花村だけではなく、里中さんが、天城さんが、巽くんが、りせが、クマが。

何事も無かったかの様に掠り傷程度の状態で立っていた。

何だ、これは。

自分はまた、逃避する為に、自分に都合の良い“夢”を見ているのか……？

……自分の弱さに、殆嫌気が差してくる。

「現実」から目を反らして虚構に逃避するなど、唾棄すべき行為以外の何物でも無いと言うのに。

今度は、何だ……？

花村が都合よく助けてくれたと言う「夢」なのか？

擦り切れた思考では、最早何も真面に考えられない。

その時。

「おい、悠希、しっかりしろ!!」

大丈夫か!？」

こちらの手を掴んだままだった花村が、焦った様に顔を覗き込んで来る。

心から此方を気遣う様なその顔に、磨耗しきった何かは僅かに動きそうになる。

……。

……「悠希」？

狂った無間地獄の中で、花村が此方を『悠希』と呼んだ事は未だ一度たりともなく、出会ってから今まで一度も無い事だ。

ここは、先程までの地獄の中とは、「違う」のではないだろうか。

明確な根拠など何処にも無いのに、そんな益体も無い身勝手な希望が頭を擡げてくる。

「はな……むら……」

花村の名を呼んだ。

その行為に、意味は、無い。

「夢」なのかどうかなど、問うた所で正しい答えが返って来る筈も無く。

言わねばならぬ何かも、皆目見当も付かなかったのだから。

だが、自分の声は、何処か縋る様な響きを秘めていた。

「おい、本当に大丈夫か、悠希？」

やっぱアイツに捕まっていた時に何かされてたんじゃ……!」

名前を呼んだ途端に、慌てる様子を周りを見回して、花村は皆を呼ぶ。

すると途端に皆は急いで此方に駆け寄って来た。

皆に揉みくちやにされるが、状況の整理に忙しくそれ所では無い。
アイツ……？

捕まっていた……？

アイツとは、この状況から判断するに久保美津雄の『シャドウ』の事なのであろう。

だが、捕まっていた、とは……？

そもそも、あの無間地獄で目覚める前。

自分は、一体何をしていたんだ……？

体感時間としては遥かに昔の事であるが、必死に記憶を漁って思い出そうと努める。

確か、『シャドウ』と戦っていた。

それで、アイツがああ Brock の鎧を纏うのを阻止しようと、『シャドウ』を攻撃しようとして……？

……其処から先の記憶は、途切れている。

気が付いたら、この手は皆の血に塗れていたのだ。

……今の状況から類推するに。

自分は『シャドウ』を攻撃しようとして、逆にアイツに囚われてしまった。

そして、何らかの攻撃を……負傷が無い所を見るに精神攻撃の類いを受けていた……、と言う事なのであろうか。

あの無間地獄はただの精神攻撃であり、今居るここは『現実』……なのか？

……今の自分には、ここが『現実』なのか『夢』であるのか、その区別を付ける事が出来ない。

ここが『現実』であれば、と。

『現実』であって欲しいとは、心の底から思っている。

しかし、それは自分の願望でしか無く。

それを根拠にしてここを『現実』と断じる事は出来ない。

掴まれている手首から感じる温もりも、滴り落ちる程に手を濡らしていた血の温かさも、どちらも同じく『現実』である様にしか感じられなかった。

二つを正しく識別する事が……出来ない。

故に、此処が自分の逃避願望が見せている、都合良く事実が捏造された「夢」である事を、否定しきれないのだ。

「私……は……」

……どうすれば、良いのだろう。

「夢」と「現実」の境が、最早自分には分からない。

……それでも。

ここが「夢」だろうと「現実」だろうと。

花村達を、守りたいのは変わらない。

ならば。

……今やるべき事は、一つである。

一度目を閉じて、意識を集中させた。

大丈夫、自分は戦える。

皆を『シャドウ』に殺させたりなんかは、させない。

自らに絡み付く「悪夢」を夢で終らせる為にも。

「来い、リリース！」

暴れまわる『シャドウ』に止めを刺す為に、《悪魔》の『リリース』を召喚する。

何の問題もなく現れたリリースは、妖艶さを滲ませる仕草で『シャドウ』を指差し、そこにピンポイントに豪雷を降り注がせる。

その攻撃に既に傷付いていたブロックの鎧は一気に崩され、本体である赤子の姿の『シャドウ』が引き摺り出された。

その腹部には、あの時に突き刺した刀が束の辺りまで深々と突き刺さっている。

その刀を通して雷に体内が感電したらしく、『シャドウ』はビクンビクンと身体を痙攣させていた。

「ヤツフサ、《チャージ》！」

攻撃の手を休めず、直ぐ様リリースから《刑死者》の『ヤツフサ』へと切り換える。

そして一瞬動きを止めて力を溜めたヤツフサは、次の瞬間『シャド

ウ』へと疾駆し、その喉元へと食らい付いた。

即座に振り払われた為『シャドウ』の喉笛を噛み千切る事は叶わなかったが、『連鎖の炎刃』の効果により、身を苛み続ける炎が『シャドウ』の喉元を焼く。

『今だよ！ 一気に決めちゃえっ!!』

りせに促された皆が、『シャドウ』へと攻撃を集中させる。

すると豪々と燃え盛る焰に包まれた『シャドウ』が、絶叫しながら狙いも定めずに無茶苦茶に魔法を放ち始めた。

本来なら自らを鎧う筈のブロックは最早意味のある形を成さず、コントロールを喪ったかの様に滅茶苦茶に飛び回っている。

——アアアアアアアアボボボボボボククククククククニニニニニニハハハハナナナナナナナニニニニニニイイイイイイモモモモモモモナナナイイイイイイイイツツツ!!

壊れた様に雑音を撒き散らす『シャドウ』の攻撃を。

ジライヤが風で、トモエとタケミカヅチがその肉体で、コノハナサクヤが炎で、キントキドウジが氷で以てそれを相殺してくれた。

皆の目が、「止めは任せた」と雄弁に語っている。

それに確りと頷いて、ヤツフサからペルソナを切り換え、吼えた。

「決めろ、イザナギ!!」

一気に『シャドウ』の懐に飛び込んだイザナギは、燃え盛る炎ごとその手の刃で『シャドウ』の首を一刀両断し、返す刀で残った身体も切り裂く。

身体を完全に破壊された『シャドウ』は、黒い霧を吹き出しながら暴走する前の姿へと戻ったのだった。



『シャドウ』の暴走が収まって程無くして、小さく呻き声を上げながら、気絶していた久保美津雄は目を覚ました。

「気が付いたか？」

「まったく、手間かけさせやがって」

花村は身を起こそうとする久保美津雄を見下ろしながら、何処か刺のある声音でそう声を掛ける。

「なんだ……これ……」

「お前ら……、お、お前ら……一体、何なんだよ!？」

「俺に何する気だよ!？」

今の状況を全く呑み込めていない久保美津雄は、錯乱したかの様に酷く上擦った声で喚き散らした。

酷く怯えて花村や此方を見上げる久保美津雄の姿は、呆れなどの感情は通り越して憐れにすら感じる程だ。

そんな久保美津雄の様子を、『シャドウ』は何も言わずに虚ろな瞳で見詰めていた。

「お前を彼方に連れ戻す為に来た」

簡潔に目的を伝えると、それが理解出来なかったのか、久保美津雄は茫然と「連れ、戻す……?」と鸚鵡返しに訊ねてくる。

それに花村が一つ溜め息を吐いて説明した。

「警察がお前を追ってるんだよ。」

モロキン殺しの犯人……それに、その前の二件の犯人としても、な「俺が……殺した、犯人……」

何も呑み込めていない様な顔で茫然としつつ久保美津雄は呟く。

諸岡先生の件は久保美津雄の仕業であろうが、前の二件は彼の犯行では無い筈だ。

しかし、久保美津雄は否定する素振りは見せない。

「お前が、諸岡先生を殺した犯人で間違いないか？」

あれ程盛大に『シャドウ』を暴走させた後だ。

つまりあの『シャドウ』は久保美津雄から完全に切り離されて、あの様子を見るに自ら消滅したのだろう。

……久保美津雄は、虚構に溺れ沈む事を、選んだと言う事なのかもしれない。

「何故、殺したんだ？」

そう尋ねると、久保美津雄は待つてましたとばかりに引き攣った様に口の端を吊り上げる。

「何故って？」

町の様子を見てみるよ！

どいつもこいつも事件事件事件！

町中が大騒ぎだ……。

俺がつ、やってやった事だなっ！

そうさ、全部俺がやったんだ！

自分だけでやってみせたんだっ！

目立ちたかった、自分を見て欲しかった。

……久保美津雄の動機は、そんな所か。

「でも、何で……」

天城さんが理解出来ないと言いた気に溢す。

すると、それを耳聴く聞き付けた久保美津雄は壊れた様に笑って答えた。

「はは、お前、雪子じゃん。」

今更俺と話したいとか、有り得ねえよ。

何でって？

そんなの、誰でも良かったんだよツツ！

どいつもこいつもっ！ ムカつくヤツばっかだ！

……久保美津雄があらゆる人間に不満を抱えていたのは確かかも知れないが、諸岡先生を殺した件についてはそんなフワフワしたモノでは無い理由があったんじゃないのだろうか。

……尤も、久保美津雄は既に正気とは言えない状態であり、その目は「現実」を見てはいない。

最早此方の言葉が彼に正しく届く可能性はほぼ無いのだろう。

久保美津雄は次第に笑う気力すら尽きたのか、黙りこんでしまった。

「……何はともあれ、早い所彼方に戻らなくてはな……」

……

……

……

▲▼▲▼▲▼

随分と長い事聞いていなかった気がする店内BGMに溢れる家電売り場へと、久保美津雄を伴って帰還した。

周囲の状況を理解出来ないのか久保美津雄は再び困惑していたが、テレビを目にするとあからさまに怯えて言葉にすらならない支離滅裂な音を溢す。

……その様子を見るに、久保美津雄は何者かにテレビへと落とされたのだろう、それも意識がハッキリとある状態で。

念の為に久保美津雄単独でテレビの画面に触れさせてみたが、テレビには何の変化も無かった。

その際の反応やこれまでの状況から、久保美津雄に彼方の世界へ行く為の“力”が元々存在していなかったのは、ほぼ間違いない。

「お前は、目が覚める前は何処に居たんだ？」

そう訊ねてみて返ってきたのは支離滅裂な言葉で何を言いたいのかは殆ど分からなかったのだが、ただ一つ確かな事として、久保美津雄は何処かに行く為に家を出ていたらしい。

何処に向かっていたのかは分からないが、少なくとも久保美津雄がテレビに落とされた直前に家には居なかったのは確かな様だ。

……【犯人】の手口と異なるその部分が引掛かるが……。

しかし、久保美津雄に詳しく訊ね様としても、返ってくるのは「自

分がやってやったんだ」と言う戯言ばかり。

……残念だが、これ以上は久保美津雄に訊ねた所で時間の無駄であろう。

その後は、ジユネスのバックヤードの空き部屋まで連れて行った上で警察に通報した。

『ジユネスの従業員用通路を彷徨っていた不審者で、何やら様子がおかしく、話を聞いてみると人を殺したと主張しているので通報した』
と言う設定である。

警察が到着する迄に久保美津雄が逃げない様に、巽くんと花村と自分で見張る。

俯いてブツブツと意味を成さない言葉を呟き続ける久保美津雄の様子を観察していると、突然に顔を上げてニイツと気味の悪い笑みを浮かべた。

「お前、そうだ、思い出した。

お前、あの日、俺と雪子の仲を邪魔したウザいヤツだ。

今まで忘れてたけど、あーあ……お前も殺しとけば、良かったな……」

そうとだけ言って、久保美津雄はまた俯いて虚ろにブツブツと呟き始める。

だが、花村が勢い良く椅子を蹴る様にして立ち上がった音に驚いて、ビク付いた様に肩を跳ねさせた。

「お前っ……!」

激しい怒りで今にも久保美津雄に殴り掛かりそうな花村の様子にも驚いたが、それを此方が止めようとする前に巽くんが花村を止めた事により驚く。

「花村先輩、こんな野郎にアンタが殴る様な価値なんか無えっスよ」

そう言うてから、巽くんは久保美津雄につかつかと歩み寄って、その胸座を取って無理矢理立たせた。

「く、くく……」

お、俺を殺そうっての?」

巽くんの射殺す様な視線から目を反らしつつ、久保美津雄は虚勢を

張る。

だが。

「殺すだ？ クソが、思い上がんじやねえよ！

てめえにはそんな価値すらねえ！

人を殺して粹がつてるつもりかは知らねーが、てめえは人として取り返しがつかねえ事をしたんだよ！

キツチリ償って落とし前付けやがれ!!

くたばっていいのは、てめえのした事がどんだけ重い事か……骨身で分かった後だ!!!」

そう啖呵を切ってから巽くんが胸座から手を離すと、久保美津雄はずるずると崩れ落ち、俯いたまま静かに震えている。

それは、警察が到着し、署に連行されるまで続いたのであった。

◇◇◇◇◇

久保美津雄を無事警察に引き渡した後簡単な事情聴取を受ける事になったのだが、それは花村と巽くんが引き受けてくれたので、自分は里中さん達と一緒に二人が帰ってくるのをフードコートで待った。

少し日が傾き始めた時間帯だからか、或いは茹だる様な暑さの所為かは分からないが、何時もよりもフードコートの人影は心なしか少ない。

軽い喧騒に紛れて、何処か遠くで蝉が煩く合唱しているのが聴こえてくる。

軽く汗ばむ様な熱気に、頭が少し茫とした。

ああ……この光景は、まるで……。

「鳴上?」

その時。

いつの間にか帰ってきていた花村が、心配そうな声音で背後から軽くこちらの肩を叩いてくる。

それに、振り返ろうとしたその時。

——視界に鮮血が飛び散った、……様な気がした。

思わず思考が一瞬停まり、直ぐ様幻影を打ち払う為に目をきつく瞑って頭を振った。

あれは「夢」だ、『シャドウ』の精神攻撃に依って見せられていた「悪夢」に過ぎない。

あれらは「現実」ではないし、実際に起きた事ではない。

自分は、ただそれを「現実」と誤認して錯覚しているだけだ……！
必死に自分に言い聞かせるが、早鐘の様に打ち鳴らされた様な動悸は中々治まらない。

そうだ、あれは「夢」だ。

冷静になれ、よく思い返せ。

あれは全て時間軸が狂っていた。

前後の時間や状況に一切の整合性が取れていなかったではないか……！

何度も何度も同じ時を繰り返したり、何度も何度も殺したり殺されたり……。

そんな事は有り得ない。

それは現実的には起こり得ない事だ！

此方に戻って冷静になった頭では、ちゃんと理屈を理解はしていた。

今自分が居る此処こそが、「現実」なのだ。

しかし、知覚的には「現実」との識別が不可能な終わらない「悪夢」は、確実に己を蝕んでいた。

ふとした瞬間に、唐突に「夢」と「現実」の境が曖昧になってしまふ。

「夢」の中の一場面が、ランダムに再生されていく。

ふと見詰めた手が血に塗れていると錯覚したり、目の前の花村達が血塗れになっていると錯覚したり、ふとした瞬間に手に刀で肉を切り裂く生々しい感触が蘇ったりと……。

明らかに、異常な状況であった。

自分の認識が異常を来しているのは、自覚しているのに。それをどうすれば良いのかは分からない。

「おい、鳴上？」

「どうかしたのか？」

花村が、心配そうに見詰めてきた。

心配してくれているのは、分かっている。

「大丈夫」「何も無い」と返すべきだとも、分かっている。

それなのに。

その表情が、あの穏やかに狂わせていく「悪夢」の中の花村の表情と完全に重なった。

途端に、今感じている「現実」が色褪せる様にして消え、あの「悪夢」の中に居る様な感覚を覚える。

違う、違う、違う……！

それは「現実」ではない、有りもしなかった事だ。

それに囚われてはいけない……！

理性はそう声を荒げるも、まるで蟻地獄の中をもがきながら滑り落ちていくかの様に、「悪夢」の残滓から逃れられない。

「はな、むら……」

凍り付きそうな舌を動かして、辛うじて花村の名前を呼んだ。

いや、呼んだつもりになったと言う方が正しい。

最早、自分がちゃんと「現実」で話しているのかすら、あやふやになっっているからだ。

「……ゆうぎ、と……」

悠希と、呼んでくれないか……。

すまない、頼む……」

自分の頭の中でどれ程考えても無駄であるのなら、最早自分以外の誰かに、あの「悪夢」の中とは明確に違う部分を作るしかなかった。

それに縋りでもしないと、今のこの状態では狂っていく一方だ。

花村は急な頼みに少し戸惑った様な顔をしたが、直ぐに頷いてくれた。

「あ、ああ……」

その、本当に大丈夫なのか、悠希？」

花村に名を呼ばれた途端に、意識は「現実」へと固定される。

「悪夢」の残滓は、既に跡形も無く何処かへ消えていた。

だから、心配そうにする花村を安心させる為に、ゆっくりと頷く。

「……ああ、もう、大丈夫だ。」

急に変な頼み事をして、すまなかった」

「あ……いや……別に名前と呼ぶのは構わねーけど……。」

……やっぱり、あの時に何かあったのか？」

少し訊ね辛そうに、花村が尋ねてくる。

『シヤドウ』の攻撃から助け出してくれたのは、花村だ。

その時に、何かを見たのかもしれない。

……だが、自分が見せられていたモノを伝えても、花村を困惑させるだけだろう。

だから、詳しくは語らない事にした。

「……大した事は、無いさ。」

少し……悪い夢を見せられていただけだから」

事実としては夢を見せられていただけなのだから、嘘を述べてはいない。

主観的には、少しどころの「悪夢」では無かったのだが。

花村はそれ以上は無理に踏み込もうとはせず、だが気遣わし気に此方を見詰めてきた。

それに対して、少々ぎこちなくはあったが、何とか笑みを取り繕って返す。

花村は何故か複雑そうな表情を浮かべて一瞬口を開きかけるが、結局は何も言わずに席についたのだった。

◆◆◆◆◆

皆が揃った所で、今回の件についての情報の整理を始める。

久保美津雄は、「力」とは無縁なただの「模倣犯」であろう事。

久保美津雄が彼方の世界に落とされた現場が何処かは不明である

が、少なくとも彼の自宅では無かった事。

そこから今回の件に関しては、「犯人」の手口とは異なる部分が見受けられる事。

何故テレビに取り上げられたりした訳でもなく、『マヨナカテレビ』に映った訳でも無い久保美津雄が、「被害者」になったのか。

更には、「犯人」はどうかやって久保美津雄の情報を入手して彼を特定したのか。

そう言った部分を整理したり、情報の共有化を図る。

尚、今回久保美津雄をテレビに落とした人物や、その人に近い人物が警察関係者である可能性がある、と言う事は伏せておいた。

憶測に過ぎぬ事で、皆に要らぬ心配をさせてはいけなからだ。

「……アイツ、結局最後まで『全部自分がやったんだ』って主張し続けてたよね……」

議論に一段落付いた所で、ポツリと里中さんがそう溢した。

その言葉に、皆が複雑そうな顔をする。

「『目立ちたいから』って理由でそんな事してるんだろうけど……でも、そんなのって……」

久保美津雄が諸岡先生を殺害したのは、間違いなく事実なのだろう。

彼はその行為を裁かれるべきであるし、それは彼の一生に渡り消えない事実として残る。

だが、やってもいない殺人までも自らの犯行だと声高に叫び続けるその理由は、自分には到底共感し得ないモノであった。

目立ちたい、自らを見て欲しい。

そんな願望から自ら何の益も無い虚構に溺れる久保美津雄は、恐らく既に正常な状態では無いのだろう。

「アイツの事は、後はもう警察に任せるしかないだろうな……」
溜め息交じりに花村がそう溢す。

久保美津雄は事実として、山野アナと小西先輩の死には何の関係も無い。

ちゃんと捜査が行われていれば、それはただの虚言に過ぎない以上

は確たる証拠は出ないだろうし立件出来ない筈だ。

議論も終わりそろそろ夕刻が近付いてきたので、もう解散しようかとしたその時。

「急にりせが立ち上がったって、〃打ち上げ〃をしようと言いだした。

何故突然にそんな事を？」と首を傾げていると。

「【事件】はまだ終わってないけど、私達が頑張ったから〃模倣犯〃が捕まったじゃない？」

一つの区切りって事で、パーツとやろうよ！」

その提案に、クマと里中さんが途端に乗り気になったのかはしやぎ始めた。

「はいはいーいー」

クマはねー、ユキちゃんのお家行きたーい！

宴会、お座敷、温泉、浴衣！

皆でドンチャン騒ぎするクマーー！」

手を高く挙げてそうアピールするクマに、天城さんは少し困った様な顔をする。

「楽しそうだけど、今はシーズン中で空いてるお部屋が無いからちよつと無理かな……」

そう言われると、余程期待していたのか、一気にクマは萎れてしまう。

そんなクマに、「また今度ね」と天城さんは約束して、その頭を優しく擦った。

そんなクマを優しく見守っていた花村は、ふと何か妙案を思い付いたかの様に此方を見る。

「打ち上げ、か……」

なら、悠希の家とかどうだ？

あ、いや……何の打ち上げか堂島さんに訊かれるとやり辛いか……」

途中でその事に思い至り、「良い考えだと思ったんだけどな……」と、花村は頭を掻いた。

確かに、叔父さんに理由を尋ねられると誤魔化すのが心苦しくなる

が、今日に関してはその心配は不要である。

久保美津雄が逮捕された事により、その処理に追われていて、今日は署の方に泊まり込みになると先程連絡が来たばかりだ。

「いや、今日は署の方に泊まり込みになるから叔父さんは家に帰ってこないし、一応確認は取るけど、理由はそんなに詳しくは訊かれないと思うぞ。」

家でやる以上は菜々子も一緒になるが、それで良いのなら私は構わない」

皆に確認を取った所、菜々子の存在は寧ろ歓迎された。

パーツと楽しむ事が主目的なのだから、人数は多い方が楽しい、との事だ。

「で、場所が決まったのは良いんすけど、打ち上げって何する気なんすか？」

巽くんがそう訊ねてくる。

確かに巽くんの言う通り、まだ場所を決めただけだ。

具体的に何をするのかは未定である。

「何しよっかなー。」

皆でワイワイやれるのが良いよね……。

もうそろそろ日も暮れるし、何が良いんだろ」

里中さんが頭を捻る様にして考えている横で、天城さんがポンツと手を打って提案してきた。

「あっ、そうだ。」

もう少ししたらお夕飯時だし、皆で料理するってのはどう？」

途端に、花村と巽くんの身体が硬直した様に固まり、顔が何やら引き攣り気味になる。

きつと、何かと嫌な方向性に衝撃的だったカレーを思い出しているのだろう。

が、あの悲劇を知らぬクマとりせは、天城さんの提案に途端に乗り気になる。

「おお、ユキちゃんナイスアイデア！」

クマ、今日沢山動いたからもうお腹ペッコクマよ！」

「今日は色々あつて疲れたもんね。

私も賛成!

つてか、悠希先輩が料理上手なのは知ってるけど、雪子先輩と千枝先輩も料理得意なの?」

純粹に疑問に感じたりせが、そう天城さんと里中さんに訊ねると。

二人はお互い顔を見合せ、少し考える様に首を捻ってから。

二人同時に「まあまあ?」と答えた。

途端に花村と異くんの顔色が一気に悪くなる。

「いやいやいやいや、天城さんに里中さん?」

お二人とも、あの『物体X』の記憶を何処にお忘れに?

つか、二人も作るつもりかよ!」

花村のツツコミに、あの惨劇がチラリと脳裡を掠めたのか、里中さんと天城さんは慌てた様にしどろもどろになりつつも弁明を始めた。

「えっ? あー、まあ、あの時は、ね、うん。

あれからちよつとは上達したんだよ? 多分。

それにほら、この人数分の料理を鳴上さん一人に作って貰うのはね?

ね、雪子!」

「う、うん!

鳴上さん一人を頼りつきりにするのも良くないし。

私は、旅館の皆に料理を見て貰ってるから、ちよつとは出来る様になつたんだよ? 多分」

いや、別に自分はこの人数分を作つたつて構わないのだが……。

それより、多分を語尾の様に使用するのは止めてくれ。

が、まあ……。

あの『物体X』に関しては、二人ともちゃんと反省はしていたので、アレを越える様なシロモノは作らないのではないだろうか?

……自分がそう思いたいだけでも言えるが。

「ふーん、そっか……。

あ、私はね、料理は得意なんだよ?」

私も一緒に作りたいな」

良いよね?と訊ねてくるりせに、一つ頷いた。

どうせなら皆で作る方が楽しいだろう。

りせの言葉を聞いたクマが何かを思い付いた様で、再び元気よく手を挙げる。

「はいはい!」

クマ、良い事思い付きましたー!

料理対決でモツキユモキユ! みたいなあー!

純粹により楽しくする為の提案だったのだろうか……。

「料理対決」と言う響きは、否応無くあの『物体X』の悲劇を思い起こさせる。

そして……、あの永遠に繰り返された『悪夢』の中の一日を。

「た、対決……。」

い、良いよ、受けて立とうじゃん!

あの『悪夢』の欠片に意識が囚われそうになっていると。

対決と言う言葉に、里中さんは何処か冷や汗をかきつつも賛成した。

「へえ、対決かあ……。」

うん、良いね!

ふふつ、千枝先輩や雪子先輩との対決なら、多分私が勝っちゃうんじゃないかな?」

挑発する様なりせの言葉に、途端に直前まで何処か迷っていた天城さんも乗り気になる。

「一撃で仕留めるから」

据わった目で、天城さんはそんな宣言をしていた。

……仕留めてどうする気だ。

三人……と言うよりも、りせが天城さんと里中さんの二人とお互いに煽り合う中で。

「悠希先輩も作るよね?」

と、不意にりせが話題を振ってきた。

『悪夢』を振り払う事に意識を取られていた為、その急な振りに僅かに戸惑ったが、それを表に出さぬ様にして頷く。

すると、りせはそれに満足気に笑って、一つ提案してきた。

「料理対決って事は、同じメニユーで揃えた方が分かりやすいよね。」

折角だし、菜々子ちゃんの好きな料理にするってのはどうかな？」

……成る程、それは良い考えだ。

早速菜々子に電話して訊ねてみた所、暫し考えた後に「オムライス食べたい！」と何処かワクワクした声で答えてくれた。

オムライスか。

極めるのは中々難しいが、そこそこ美味しく作るだけならば割りとは簡単である。

それなら、天城さんや里中さんでも何とかなるのかもしれない。

早速メニユーを伝えると、花村と異くんを除いた面子は乗り気になり、早速意気揚々と食品売り場へと出掛ける。

……同じオムライスと言うメニユーを作るのに、てんでバラバラな方向に散っていく事に、一抹の不安を感じるが……。

……まあ、きっと変わり種のオムライスにするつもりなのだろう、多分。

「そう言や、悠希は何を作るつもりなんだ？」

側に居た花村がそう訊ねてきたので、基本的なオムライスにする予定だと答えた。

デミグラスソースを使ったオムライスや、バターライスと醤油を使った和風オムライスに、お好み焼き風オムライス等も候補に入れたのだが。

きつと菜々子が食べたいのは、……叔母さんが作ってあげていた様な、*“普通”*のオムライスなのだろうから。

勿論、トマトソースは一から作るし、他にも工夫はするつもりだが、それでもスタンダードなオムライスに近いモノに仕上げるつもりである。

各自必要なモノを買い揃えてから、菜々子が待つ家へと皆で向かった。



家で出迎えてくれた菜々子は、想像していた以上に賑やかな人数に驚いていたが。

それでも初めて会った巽くんやクマとも直ぐ様馴染み、今は巽くんがクマと菜々子の二人に何やら複雑な折り紙の折り方を実演していた。

巽くんが一つ折り紙を完成させる度に二人は歓声を上げ、それに巽くんは満更でも無い様な何処か照れた様な表情を浮かべる。

元々、巽くんは性格自体は面倒見が良い方だ。

子供受けの良いスキルも多く持っているし、案外小さな子供に何かを教えたりするには向いているのかもしれない。

まあ、ちよつと強面なのが子供のには玉に瑕なのであるが。

そんな三人を見守りつつ、オムライスの準備を進める。

コンロの方ではりせがライスを玉子で包んで一足早く完成させようとしていて、その横では火力を間違えた天城さんがあたふたとしている。

更にその横では、里中さんが何故か肉を切っていた。

三人でワイワイ騒ぎながら作っていく様子を、微笑ましく見詰める。

だが、不意に。

視界がグニヤリと歪んだ様な気がした。

咄嗟に目を閉じて軽く頭を振ってから再び目を開けた其処には――

「おい、悠希――」

強く肩を揺すられて、焦点はいつの間にか目の前に居た花村に結ばれる。

あれ、何で、花村が？

……そうだ、今は、打ち上げの為にオムライスを作っていて……。

……打ち上げ……？

——それは、何回目かの打ち上げの事だ？

いや、違う。それは。

繰り返していたのは、あの『悪夢』の中での話だ。

今居る此処は、『現実』だ。

……どうやらまた、『悪夢』と『現実』の境を見失ってしまったらしい。

周りを見回した所、花村以外は誰も反応しては居ないので、それはほんの一瞬の事だったのだろうけれども。

焦った様に此方の肩に手を置く花村の手を、「もう大丈夫だから」と、下ろす。

そして、花村を安心させる様に少しだけ笑って「有難う」と礼を言った。

……それなのに、何故か花村はもどかしく苦しそうな顔をする。

そして、花村が何か言おうとしたその時。

「はい、かーんせいっ！」

ほら花村先輩退いて退いて！」

完成させたオムライスを皿に盛り付けたりせが、花村と此方の間に割って入る様にして通っていく。

そして、何かトラブルでもあったのか里中さんが慌てていた。

そちらに一瞬気を取られ、そして再び花村の方へと視線を向けるが。

花村は言葉にする切っ掛けを喪ったかの様な顔をして、黙ってしまっただ。

……何はともあれ、コンロが空いたのだから自分のオムライスも完成させなくては……。



程無くして、卓袱台の上には四つの大皿が並べられた。

どのオムライスも、目に見えるのはソースと中身を包む卵の部分だけだ。

各人が中に何を仕込んだのかは、パツと見では分からない。

その皿以外にも、サラダとコーンポタージュも用意しているが、今のメインはオムライスだ。

全員で手を合わせて「いただきます」と唱和したが、直ぐにはオムライスに手を付けなかった。

前回のカレーの時の経験を活かし、里中さん達の分は先ずは誰かが毒味役を引き受けてから、菜々子にも食べて貰う様にする為だ。

菜々子には万が一にもあの『物体X』の様なシロモノを口にさせる訳にはいかない、と里中さん達を説き伏せた所、一応は納得してくれらしい。

因みに、花村がりせの分を、巽くんが天城さんの分を、クマが里中さんの分を先ずは試食する。

「それじゃあ、私のは花村先輩が先ずは食べてみて！」

凄く自信作だから！ 絶対に美味しいよ！」

自信満々なりせにそう薦められた花村は、特に警戒する事無く、寧ろ嬉しそうにスプーンでりせのオムライスを一口分掬った。

トマトベースのソースなのか……妙に赤いソースがオムライスに全面的にかかっているオムライスだ。

……何だか近くに居ると目が痛くなってくるオムライスなのだが……。

まあ、花村はりせのファンなのだし、その辺りを考えるとこの状況は花村にとって中々感慨深いものなのだろう。

そして、一口にそれを頬張ると。

——その瞬間、花村の表情が完全に固まった。

「どう？ 美味しいでしょー！」

花村の表情に一切気付いていないのか、りせは期待に満ちた顔で、花村の「美味しい」と言う言葉を待つ。

だが、花村は恐らくはそれに気を配る処では無いのだろう。

必死に激痛を堪える様な顔をしながら、花村は何とか口を開く。

「いつ……これは……」

菜々子、ちゃんには……やれないな……」

……どうやらかなりの劇物であつたらしい。

花村は表情は平静を装っているが、その目からは生気が抜け落ちていく。

だが、その事に気付いていないりせは、褒められたと勘違いして嬉しそうに歓声を上げた。

「やった、もう、花村先輩！」

美味しくて独り占め宣言!？」

それに曖昧な答えを返す花村を横目に、天城さんが自分のホワイトソースがかかったオムライスを巽くんに勧めていた。

あのカレーの件で警戒心が高まっている巽くんは、冷や汗をかきつつ恐る恐る一口掬って、ままよばかりに一気に口に含む。

この世の終わりの様な顔をして食べていた巽くんだが、次第に首を傾げ始め、何故か二口目を掬った。

それを食べて、更に三口目。

美味いとも不味いとも言わずに、ただオムライスを口にする巽くん。

「えっ、何か言ってくれないと困るんだけど……」

と、天城さんが溢すと。

巽くんは首を捻りながら自分の中から適切な単語を探し、一拍置いてから答える。

「何っーのか……」

…… “不毛な味” つスカね……」

「不毛!？」

“不毛”なんて味の表現に使わないでしょ!？」

美味しいのか不味いのかだけが知りたいんだけど!」

喰ってかかってきた天城さんに、巽くんはどう言えば良いのか悩みつつも答えた。

「いや、本当に何の味もしないんスよ。」

お麩をそのまま嚙ってるってのが一番近いっつーのか……」。

美味しい不味いの前に味が全くしないんで、分からねーっつか……。まあ、美味しくはないんすけど。

色々入ってる感じはあるのに、全く何の味もしないなんて、ある意味で才能っスね」

そんな異くんからの評価に天城さんは、「繊細な味が分からないだけ！」と主張するが、異くんの味覚は至って正常なので、恐らくは本当に味を感じられないオムライスなのだろう。

……寧ろ作り方を知りたい位だ。

不味いとすらも言って貰えず落ち込む天城さんを励まそうとしてか、菜々子は天城さんのオムライスを迷う事無く口にした。

そして少し考えてから。

「……おいしいよっ」

と天城さんに言うと、その優しさに打ち震えるかの様に天城さんの目が潤んだ。

そんな様子を横目で見ていた里中さんは、少し緊張しつつも何処か自信あり気にスタンダードな自分のオムライスをクマに勧める。

クマは何も気負わずに食べ始め、そのままパクパクと食べていく。

少なくとも、口に含む事が出来る類いのモノではあるらしい。

「ど、……どうかな？」

期待を込めつつ里中さんがクマにそう訊ねると。

「うん、不味い！」

それはそれは良い笑顔でクマはそれをぶった切った。

そして、そのオムライスを花村にも勧めてくる。

「いやお前……自分で『不味い』だったモンを人に勧めんなよ……」

そうぼやきつつも一口そのオムライスを食べた花村は、納得した様に頷いた。

「あー……成る程な。」

確かに、普通に不味い。

でも、まあ……あの時よりは進歩してるし良いんじゃないかね？」

どう言う事なのだろうかと自分も一口食べてみる。

……確かに、不味くはあった。

間違いなくこれは不味いし、好んで食べたいとは思わない。ただ、あのカレーの惨劇を思えばこれは普通であった。

調味料の量を間違えた、とか。

焼き加減を間違えた、とか。

そう言う普通の失敗を積み重ねた先にある不味さである。

あの異次元の味のカレーから見れば、雲泥の差であった。

「ふ、……普通に不味いって……」

何気に一番キツいかも……」

落ち込む里中さんを励まそうと、また菜々子は里中さんのオムライスを食べる。

そして、ゆっくりと頷き、少し震える声で「おいしいよ」と笑った。

それに感極まったかの様に、里中さんの目も潤む。

その横では、天城さんが里中さんの分のオムライスを食べ、どうやらその味が笑いのツボに入ったらしく、「普通に不味い」と楽しそうに爆笑していた。

そこに悪意は全く無いのだが、自分の料理を貶されるのは良い気分にはならない。

だから里中さんは不機嫌そうに、りせのオムライスを指差して、「りせちゃんのも食べてみなよ！ 絶対にあたしのヤツの方が美味しいよ！」と言うと、天城さんは一度真顔になって、りせのオムライスを一口食べた。

が、次の瞬間には軽く呻いてから天城さんは倒れてしまう。

「天城さん!?!」

慌てて天城さんの状態を見てみるが、どうやら激し過ぎる刺激に耐えきれず、一時的に気を失っているだけの様だ。

オムライス作りの前に、天城さんはりせに「一撃で仕留める」と宣言していたが、仕留められたのはどうやら天城さんの方であった。

「一撃かよ……」

異くんが戦く様にりせのオムライスを見詰め、クマも遠慮する様にオムライスから目を逸らしている。

……一体、どんな味がするんだ？

警戒しつつ一口分を掬って食べたのだが。

直後、口腔と唇の激しい痛みと灼熱感を知覚する。

何だこれは！

突然口腔内に吹き荒れた暴力の嵐に依って若干涙目になりそうで、それをギリギリで堪えた。

それと同時に、この灼熱感と痛みの正体に大まかなながらも検討を付ける。

これは、恐らく辛味……。

しかも、カプサイシン受容体で受容されるカプサイシンの類いだ。唐辛子の辛さである。

しかし、これ程の辛味を出すとは……一体何を使ったのだか、と思つて台所をチラリと見やると。

そこには開封された『デスソース』が転がっていた。

『デスソース』は一般の人でも手が届く調味料の中では断トツにスコヴィル値が高い、激辛党御用達の代物だ。

罰ゲームに使われる位のモノである。

堂島家にはそんなモノ置いていなかったもので、あれを買ったのは今日の日事……ジュネスに売っていたと言う事だ。

何故ジュネスがそんな劇物を置いていたのかは分からないが。

その所為でこんな、味の大殺界が誕生してしまったのかもしれない。

「こっ……子どもには分からない味なんだもん！

大人の味なんだもん！

先輩たちが、お子様なんだもん……。

私、私……」

口腔内の痛み思わず無言になってしまうと、りせは泣き出しそうな顔になり、顔を手で覆ってしまう。

すると、止める間もなく菜々子がりせのオムライスを一口食べてしまった。

暫し無言になった菜々子は、一口水を飲んでからりせに笑いかける。

「からいけど、おいしいよ」

少し汗をかきながら健気にもそんな事を言う菜々子を、りせは我慢出来ないとばかりに抱き締めた。

「……ねー、そうだよね！」

菜々子ちゃんが一番オトナ！」

その顔には、涙の跡など何処にも無い。

どうやら先程の涙は嘘泣きであった様だ。

「じゃあ、最後は真打ちの先輩のヤツつスね！」

巽くんは待つてましたとばかりに声を上げた。

真打ちになるのかは分からないが……。

自分が作ったのは、パツと見た所は普通のオムライスに見える。

ソースはトマトから作った特製のモノで、卵はスフレオムレツの様に作ったのでフワフワ、中はバター醤油で炒めたライスとなっている。

一口掬って食べた菜々子は、途端に目を輝かせた。

「すっごい、おいしい！」

こんなオムライス、はじめて食べた！

お姉ちゃん、すごい！

すごい！ おいしい！」

幸せそうにオムライスを口にする菜々子を見ると、自然と皆笑顔になる。

そして、オムライス対決はそこで幕を閉じたのだった。



途中で余っていたモノで炒飯などを作ったりしつつ、そろそろ皆は帰らないといけない様な時間になった頃には、皆の腹も膨れていた。「そう言えば、8月の中頃には神社でお祭りがあるんだろ？ 商店街がやっつてるヤツ。」

あれさ、皆で行かないか？」

帰り支度を始めようか、という時に唐突に花村がそう提案してくる。

「あ、賛成」

「夏祭りつちゅー事は、浴衣クマね！」

むほーっ、楽しみー!!」

直ぐにりせとクマが賛同の声を上げ、それに続く様に皆も頷いた。

「おまつり……」

ポツンとそう何処か寂し気に呟いた菜々子の頭をそつと撫でて、「一緒に行かない？」と誘うと、途端に目をキラキラとさせて何度も何度も頷く。

「夏祭りも良いけど、夏の終わりの方には花火大会もやってるんだよ」里中さんのその言葉に、「じゃあそれも皆で行こう」から始まり、「そう言えば海は何時行く？」やら、「夏と言えば胆試しだよね」だとか、そんな遊びの計画が次々と立てられていく。

その事に言葉では言い表せない程の幸せを感じながら、皆の帰り際まで共に計画を話し合った。

この中ではここから家が一番遠い天城さんと、その天城さんを送る為に里中さんが先ず家を後にした。

続いて商店街に家がある異くんとりせが帰り、今は花村とクマが残っている。

……………?

何故かクマは少し寂しそうな顔をしていた。

「クマ？ 何かあったのか？」

そう訊ねると、クマは曖昧な顔で頷く。

「『ウチアゲ』をしていた時に気付いたんだけど、……もし【犯人】を捕まえて本当に事件が終わったら、クマ、あっちに帰らないといけないんだなって」

そう寂しそうな顔をするクマに、「どうして？」と訊ねた。

すると、クマは益々寂しそうな顔になり少し俯く。

「だって、それがセンセイとした『約束』だから……。」

だから、全部終わったなら、クマはここに居ちやいけない」

……そんな事は全く無いのだが、クマにとっては『約束』とはそう
思い悩む程に大切なモノであるのだ。

「そんな事は無いさ。」

確かに、私はクマと「犯人」を何とかして事件を終わらせると約束
した。

だけど、私とした約束はそれだけじゃないだろ？」

そう言つてやると、クマはよく分からなかったのか首を傾げる。

そして、話の流れはよく分かつてはいないのだろうがずっと側で聞
いていた菜々子が、そこで動いた。

「クマさん、どこかにいつちやうの？」

「約束が果たされたら、クマは帰らなくちやいけないんだ……。」

それはまだ先の事だけどね、とクマが言う。

菜々子は少し考える様に黙り、そして言った。

「それなら、そのやくそくがなくなつちやうまえに、菜々子がクマさん
とやくそくしたら、クマさんはどこにもいかなくてもいいの？」

菜々子の質問にどう答えていいのか分からなかったのか、クマは視
線をさ迷わせてから此方を見てくる。

そんなクマを安心させる様に、ポンポンと軽く頭を撫でた。

「約束を守るのは良い事だ。」

しかし、クマが私とした約束は、まだあるだろ？」

クマが「答え」を探すのを手伝うつて言う、大切な『約束』が。

新しい『約束』を積み重ねていけば、何の問題も無いだろ？」

勿論、クマが帰りたくなつたのなら帰れば良い。

しかし、此処に居たいと思うのなら、好きなだけ此処に居ても良
いのだ。

『約束』と言う名目が必要ならば、一つの『約束』が果たされる前
にまた新たな『約束』を交わしていけば良いだけの話である。

「クマは……。」

まだ何処か悩んでいるクマに、菜々子が話し掛ける。

「じゃあクマさん。

菜々子と“やくそく”しよ！

いっしょにあそぶやくそく。

これだったら、クマさんかえらなくてもいいんだよね？」

満面のその笑みに、クマは少しぎこちなく頷いた。

そして、事の成り行きを見守っていた花村が、クマの背後に立って

唐突にグシャグシャとその髪を掻き混ぜる。

少し混乱するクマに、花村は何処か呆れた様に言っただった。

「つたく、お前今ウチの従業員だろ！」

マスコットが勝手に職務放棄すんなよ！

ま、それにだな。

そんな事考えて勝手に居なくなれるのは、寂しいだろ」

やれやれ、とでも言いた気な溜め息を溢して苦笑する花村に。

「よ、ヨースケえ……」

感極まったかの様にクマがしがみつく。

……何はともあれ、クマの悩みは一先ず解決した様である。

それから少ししてから花村とクマを見送って。

その日は、何時もよりは浅い眠りに就いたのだった。

